

宮沢賢治研究

文語詩集の成立―鉛筆・赤インク（写稿）による過程

〔I〕

【本論篇】序 章 《文語詩稿》生成

複写（盆地に白く霧よどみ）自筆稿下書稿一・二・三・四、定稿

1 節 《文語詩稿》研究の現状 1

2 節 「川しろじろとまじはりて」を読む 3  
2 頁

第1章 初期稿の形成

1 節 《文語詩稿》の発生と、その形成 2  
1

2 節 『文語詩篇ノート』による針路 2  
3

3 節 定型強化の過程 3  
4

4 節 《文語詩稿》の途絶へ 4  
7  
5  
3  
頁

第2章 再編稿の展開

1 節 《文語詩稿》の再編へ 3  
1

2 節 再編稿の熟成 2  
2

3 節 草稿の手入れ階層と〈写稿〉の位置づけと 4  
5

4 節 〈写稿〉の成立 6  
7  
8  
8  
頁

第3章 定稿化の実態

1 節 〈写稿〉本文の想定と定稿本文との異同 4  
1

2 節 題名のゆくえと詩の場 2  
8

3 節 詩の場の変容と詩想の変質 4  
8

4 節 定稿化と詩想の定立と 1  
4  
3  
3  
頁



〔II〕

第4章

原詩集の輪郭

- 1節〈定稿・百編〉の成立
- 2節〈集〉の構造・生活詩篇の位置
- 3節〈集〉の性格・風土性と時代性
- 4節〈集〉の針路・社会詩篇の存在
- 5節〈集〉の基盤・信仰詩篇の存在

終章

原詩集の発展

- 1節 保守される〈定稿・百編〉
- 2節 空白の連指定の意味
  - 定稿〔たそがれ思量感くして〕 試論
- 3節『文語詩稿』への転機
  - ブルーブラックインク〈写稿〉による定稿の形成
- 4節 本研究の到達と今後の課題

【資料篇】

vii	写稿定稿本文対照一覧3〔青インク〈写稿〉〕	1	4
vi	写稿定稿本文対照一覧2〔ブルーブラックインク〈写稿〉〕	1	8
v	文語詩稿定稿群像一覧	1	1
iv	定稿起稿後手入れ一覧	1	5
iii	定稿起稿時手入れ一覧	1	8
ii	写稿定稿本文対照一覧1〔鉛筆・赤インク〈写稿〉〕	1	5
i	自筆原稿（複写）一覧	1	0
-----			
		6	3

1	1
2	6
4	1
5	4
7	4
9	6

序章 《文語詩稿》生成

はじめに

1 節として、『文語詩稿』研究の現状が、『校本宮澤賢治全集』・『新校本宮澤賢治全集』の達成によって、本文生成論の方法に立つ研究が模索されつつある現状について、略述する。

2 節では、詩稿「川しろじろとまじはりて」をとりあげ、生成論的読解を具体的に試みる。

(金地く)

(P)

座席

そこは

前田はせはくめ清く  
池井澤と花入る馬ひきりて  
ひとびととあはれむことなる

東は仙々 ちち舟の  
洞は夕陽キ、山峯は西に流るまでけは  
南十をたこのなるるに  
花入るの若も春は鳴ん

五つの空もてる  
家直がぬし花室の  
やどり市つけし西の木のやと

かしこは  
かしこは  
かしこは

かしこは  
かしこは  
かしこは

らんぼの  
とびまて

あかや、赤きうあぬらの  
あかや、あれと  
あかや、あれと  
あかや、あれと

あかや、あれと  
あかや、あれと  
あかや、あれと

あかや、あれと  
あかや、あれと  
あかや、あれと

(III)

下1.2

花巻市



凶  
分  
地

二  
三  
四

←  
空  
の  
子  
の  
学  
校  
の  
中  
に

子  
の  
学  
校  
の  
中  
に  
ま  
じ  
しく  
学  
習  
を  
し  
て  
い  
る

め  
ぐ  
り  
の  
山  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

青  
色

目  
録  
の  
外  
に  
あ  
ら  
わ  
ない

花  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

↑  
花  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

木  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

花  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

花  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

ま  
ま  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

ま  
ま  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

ま  
ま  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

ま  
ま  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

ま  
ま  
の  
ま  
ま  
に  
ま  
ま

111

の  
下

花 卷 市



① 盆地に白く露霧よどみ、めぐれる山のうらま月を、

鵜田の水は列くして、花はいまだにをなまらぬ。

② 窓(五)つたふる まなひが 雪子校に、  
さびしく雪子 2 雪らをわかまてば、

甘露を杖入る馬ひきて、ひとびと本山を積み出づる。

1節 《文語詩稿》研究の現状

はじめに

宮沢賢治の文学的営為は、『校本宮澤賢治全集』（筑摩書房一九七三〜七七、以下本研究では『校本全集』あるいは『旧校本全集』と略示する）・『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房一九九五〜二〇〇九、以下本研究では『新校本全集』と略示する）が、詩歌・童話などの草稿群に加えて手帳やノート、メモなどもまた網羅的に集め、それらの本文のひとつひとつを、いわゆる静態的・動態的に分類し、その変移あるいは遷移の、それぞれの段階における具体相（推敲現場）の展開実態を独創的な手法で記述して、その多層的な世界を明示した。宮沢賢治の本文に対する、いわばひとつの生成批評版が提出されたということである。

その作業に深くかわつた入沢康夫は、

賢治の推敲は、一部の語句の修辭上の手直しももちろんあるにしても、それよりも、作品のはじめからおわりまで通して、一度に手が加えられるということが、ある時間をへだてては起こっているという場合の方が普通であるという、大きな特徴をもっている。作品がいくつもの層にはがして考えられるということとは、つまりその結果なのである。／＼そして、それら一つ一つの層は、どれもそれなりの完成を示しているのであって、この点でも、終極の完成をめざして、長い時間をかけて、作品のあちらを直したり、こちらをとのえたり、といった、普通に考えられる推敲とは歴然と異なっているのだ。

（四次元世界の修羅<sup>(2)</sup>）

と、その本文生成の過程が無類であることを断言する。それは、宮沢賢治の文学研究というものが、生成論という方法の確立も含めた新たな出発地点に立ち、模索がはじまったということであろう。

たとえば、童話「銀河鉄道の夜」は、『校本全集』によってその本文生成に大きく四段階あるのが明らかになった。さらにその後、入沢康夫は『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』（宮沢賢治記念館一九九七）を監修して、その生成過程を自筆原稿の写真版によって視覚的に推敲現場を再現し、四段階の本文形のもつそれぞれの特色を簡明に提示している。『校本全集』あるいは『新校本全集』の校異とともに併せ用いれば、臨場感をもってこの童話構想の過程に迫ることも可能になったのである。

また、口語詩（「心象スケッチ」と詩人は名のつた）については、その『春と修羅第二集』を対象に、木村東吉は、詩稿それぞれの本文生成の過程を再検討し、それを踏まえて詩集の形成をやはり四段階にとらえた。そして、その動態について、詩集を構成する詩群単位に着目し、その枠組みを推定したうえで、群内で発生した詩稿の出入りを段階ごとに説明している。つまり、そこには、各段階における詩集構造が提示されている。その〈集〉の成立過程を踏まえて、詩集構想の過程に迫ることも可能になったのである。

けれども、童話も口語詩も、個々の本文生成の意味や意図をどうとらえてゆくかにまだとどまっておらず、童話では、その生成過程の全体を見とおした作品研究へ、口語詩では、個々の詩稿における生成過程を見とおした〈集〉の研究へ、なかなかたどりつけないようであ

る。宮沢賢治学会イーハトーブセンターも、『校本全集』・『新校本全集』段階の成果を踏みこえてゆく生成論的研究の進展をはかるために、二〇一〇(平成二二)年三月、プロジェクトチーム「草稿生成論研究会」(仮称)をようやく立ちあげたところである。

そのなかで、文語詩制作という詩人の営みの実態もまた、その素材から草稿へ、そして定稿に至る本文の生成過程―本研究ではこれを一括して『文語詩稿』と呼称する―のほぼ全貌が『校本全集』・『新校本全集』によって明らかにされたが、その本文のありようと、それに対する研究もまたほとんど同じ状況にある。

入沢康夫とともに全集作業に没頭した天沢退二郎が、

賢治詩稿は基本的に、下書稿(一)、(二)、……(n)と推移し、その各稿が第一、二……第(n)形態へと推移するのだが、その下書稿(n)の第(n)形態は、これら推敲途中の過渡的形態であると同時に、それはその時点で、それなりの独立した作品として、前後とは別宇宙として屹立しているものでもあるからである。

と、その経験則を述べて、『文語詩稿』の生成過程の解明が研究基盤にあることを喚起している。

加えて、『文語詩稿』に向かつて、『春と修羅第二集』や『春と修羅第三集』、『口語詩稿』また『歌稿』や『冬のスケッチ』などから、文語詩への転生があったことが指摘され、また手帳やノートにも、『文語詩稿』に流入する素材や題材、先駆稿が多数あることも判明してきている。これらのことは、『文語詩稿』の裾野がずいぶん広く、その源泉を、宮沢賢治のそれまでの営みすべてが対象とされたうえで、求められている、ということを示唆させていよう。

そのような『文語詩稿』とは、その晩年に集中的に制作されて、実は詩人によって唯一「詩」と認められ「定稿」と呼ばれた(ただし、表現の未足や不足が表明されており、詩人の生あるかぎり本文生成の運動は継続する。次節8項参照)ものだった。具体例をひとつ掲げる。定稿は、句読点をともない詩句をより構成的に配置した本文として、ほとんど出現する。

(扉の後に掲げた自筆稿複写も参照されたい。)

①盆地に白く霧よどみ、

めぐれる山のうら青を、

稲田の水は冽くして、

花はいまだにをさまらぬ。

②窓五つなる学校に、

さびしく学童らをわがまては、

藻を装へる馬ひきて、

ひとびと木炭を積み出づる。

無題の詩稿である(開始形は起稿時の書きながらの手入れを踏まえた。詩稿本文の前に「・」とあるのは詩稿題名が与えられていないことを示している。その場合、定稿(あるいは最終本文)の冒頭詩句を「」で括り、題名に代える。なお、本稿を含む本研究における



宮沢賢治の本文は、原則として『新校本全集』によるが、宮沢賢治記念館所蔵の自筆原稿を用いた場合その都度注記する。

「稲田の水は冽くして、花はいまだにをさまらぬ」といひ、「窓五つなる学校に、さびしく学童らをわがまてば」とあるから、稲がもう結実してよい時期なのにそれが来ないのであり、学校ももう始まっているのに児童がひとりも来ないというのである。それは、凶作の襲来を暗示している。児童たちは、飢饉に備えた家事に勤しんでおり、田圃を横目に人々は、現金収入をもたらす木炭売りのほうに急ぐのである。これは、凶作・飢饉が兆している寒村をとらえた田圃詩篇であり、社会詩篇だといえよう。

こうした《文語詩稿》が発生した経緯については、『文語詩篇ノート』という存在が、おおよそのところを示している。入沢康夫の解説を借りれば、

中身を開いてみると、これが何と、自分の生涯的印象的な出来事を、中学に入學した一九〇九年（数え年十四歳）からはじめて、各年に二ページ分ずつを当てて、次々とメモ風に記したもので、一九三〇年（昭和五年、三十五歳）までに及んでいる。（中略）これらのメモは、「文語詩篇」という標題から見ても、また、内容を成す個々の項目と現存文語詩稿との比較・対照の結果から言っても、明らかに晩年の文語詩制作に当たっての心覚えとして書かれたものである。

『宮沢賢治全集4』解説  
ということになる。なお、『文語詩篇ノート』は三〇（昭和五）年秋までに鉛筆やブルーブラックインクによる一次本文が成立し、《文語詩稿》の始発にもなつて、赤インクによる追加の二次本文が三一（昭和六）年段階まで増補されたと推定する。

すると、《文語詩稿》の始発が自伝詩篇であったならば、右の「盆地に白く霧よどみ」定稿の「われ」とは、宮沢賢治であるのか？  
だが、彼は農学校教師は一時務めたけれども、児童を教える小学校の経験はないはずだが……。要するに定稿に至る過程で、その詩の場には変容があつたとみるべきであろう。《文語詩稿》のゆくえには、天沢論の指摘どおり、変容・変質の過程があるのである。

1

〔盆地に白く霧よどみ〕の生成過程に少し踏みこんでみよう（開始形は起稿時の書きながらの手入れを踏まえた）。

ことこの発端は、農学校教師時代の教え子が遠野の僻村に小学校訓導として赴くことを疾中の床で知った、二九（昭和四）年の記憶にあるとみられる。『文語詩篇ノート』には、追加の赤インク記事で（三一年と推定する）、

四月、ナガ眼空シク果ツベキ眼力、高橋武治二送ル

とメモされている。

そのことが一枚の無野の詩稿用紙に次のように展開してゆくのである。

下書稿一 開始形 無野用紙

そこは盆地のへりにして  
稲田はせばく水清く  
藻を装へる馬ひきて  
ひとびと木炭をととのふる

東は仙人六角牛  
洞に水湧き雲湧きて  
南なだらの高原に  
黄金の草こそ春は鳴れ

そこに五つの窓もてる  
宿直かねし教室の  
やどり木つけし栗の木の  
うちめぐらして建てるあり

とは云へなれがそのひとみ  
かしこに朽ちんすがたかは  
いざかしこにてさびしさを  
青ぞらにこそ織りて来よ

★右肩に〈了〉印

下書稿二 開始形 稿一ウラ

そこは盆地のへりにして  
稲田はせばく水清く  
馬は黒藻をよそほへり

やどり木吊げし栗の下  
丘に五つの窓もてる  
宿直をかねし後者あり

髪やゝ赤きうなゐらの  
かしこになれをかこみつゝ  
白たんぼゝの毛を吹かん

とは云へなれがそのひとみ  
そこに朽ちなんすがたかは  
そらは晴れたりなれを祝ぐ

下書稿三 開始形 稿一余白

一学期

窓五つなる学校を  
五とせなせと裁かれつ

盆地に白く霧よどみ  
めぐれる山のうら青し

稲田に水は冽くして  
その花はいまだをさまらね

藻を装へる馬ひきて  
ひとびと木炭を積み出づる

稿三 手入れ形 稿三本文上

一学期

盆地に白く霧よどみ  
めぐれる山のうら青を  
稲田の水は冽くして  
花はいまだにをさまらね

窓五つなる学校に

さびしく学重りをわがまてば  
藻を装へる馬ひきて  
ひとびと木炭を積み出づる

★詩稿用紙中央に〈写〉印

自分史の一コマとして、高橋(のち沢里) 武治を「なれ」と呼びかけた送別詩篇として、この詩稿は出発していたのである。それが、草稿の最終段階では、児童を待ちわびる「わ(れ)」に人称・視点を変転して、凶作と飢饉をまえにして、木炭売りに向かう人々の姿を凝視することになる。ここにはもう、始発稿にあった激励の態度はみえない。詩の場は明らかに変容している。詩想に変質が

あるのだ。そこには「なれ」／「わ(れ)」が立ち向かうことになった農村の現実というものがあって、それが結果しているようにみえる。<sup>2)</sup>  
このような変容／変質の過程をその草稿段階に多くの詩稿がかかえながら、151編が定稿化され、『文語詩稿五十篇』・『文語詩稿一  
百篇』と命名された、ふたつの詩集の成立に結実してゆく。

このような本文生成の過程を、未定稿に置かれたものも含めると、252編に及ぶ《文語詩稿》は開示したのである。

これを受けて、『文語詩稿』研究は、宮沢賢治における「文語詩」の特質として生成の方向性を認識するところから踏みこんでいった。  
「文語詩」を収めた『校本全集』第五巻の刊行に際して、その月報に、大岡信が「私的な体験のモチーフから発しながら、しかも私的な感情の定着には目もくれない」と、非抒情性に向かうその過程を指摘すると、その校異を担当した小沢俊郎が、「定稿との間には昭和六年の病氣再発という大事件がある。定稿への方向を決定的ならしめた一因には、その死病への認識があると考えたい」としつつ、「私的な体験を非私的に表現した《文語詩》の中に、読者は賢治のいない賢治の生涯を読みとることができる。／作者からいえば、他を描くことが同時に自分を描くことであつた」と説いて、「文語詩」(《文語詩稿》)理解の方向を指し示した。

それに対して、天沢退二郎は、こうした《文語詩稿》本文の変容そのものを、

賢治の文語詩の生成過程——短縮とみえ凝縮とみえたその作業のひそかな本意は、こうしてかくすこと、地下に地下構造を、地下礼拝堂をつくることであつたのではないか。だからこそその地下構造物は、定型韻律をいよいよ整えた<sup>3)</sup>死後の歌<sup>4)</sup>として、時間を超え空間を超えた語りの支配するものとなつてゆかねばならなかつたのではないか。

と問いかけ、ひとつの構造体ととらえうる可能性を示唆する。

また栗原教は、「非私的」過程の意味をさらに問いつめて、それを方法として、

生身の賢治は、状況の一番の深層に位置するものに身を重ねることによつて、(中略)高められた位置としての「作者」を析出することは、自分であり、彼であり、誰でもあるごとく、対象に重なりあつたものとして遍在する己れを見出しうるようになる営みと相応することであつた。

とみ、視点・人称の特質に加えて、「実際の特定の土地を超えた、しかも、現実的な個別具体性の感じられる普遍の場所をそこに現出させる」「虚構化」の方法にも言及して、「どこまでも現実的な実在感の深さの獲得を目ざしたと考えられる」とする。<sup>5)</sup>

《文語詩稿》が構築する詩の場を構造的にとらえることを教え、その過程が普遍的な現実性の獲得にあつたという枠組みの設定を促している。ここには、本文生成の分析に有効な方法の提案がある。

そこでは、多種に及ぶ詩稿用紙の整理、付与された符号の認定がすすめられた結果、その使用時期や付与段階がおおよそ解明され、詩稿生成の時間的分節をも可能にするてだてがもたらされている。つまり、定稿による詩集の形成過程にも迫りうる環境もまた整備されたのである。

詩稿用紙については、『新校本全集』第十六巻「草稿通観篇」の指摘に、杉浦静の考察ならびに私見も加えて、その推定するところを示すと、次のようである。

丸善特二用紙

二四（大正一三）年前後から三〇年頃まで。

丸善と略示することがある

赤野用紙

二五（大正一四）年頃から三〇年頃まで。

無野用紙

二九（昭和四）年頃から三一年前後までか。

黄野26行用紙

書簡用例なし、三〇年前後か。

26系と略示する。

// 24行用紙

三〇年頃か。

24系と略示する。

// 22行用紙

三一年前後から三三（昭和八）年。

22系と略示する。

定稿用紙

三三年六月頃から。弟清六に新たな原稿紙の製作を依頼。

定稿用紙と指示する。

詩人による符号については、本文の手入れ指示にかかわるものをぞくと、次のふたつが生成段階の節目に与えられたものとみられる。

「了」字丸囲み

詩稿用紙に起稿した最初段階に与えられるもの。筆具は数種に及び、筆具による付与段階の想定はまだされていないが、一部について島田が試みている。

〈了〉と示しその本文形を「了稿」と呼ぶ。

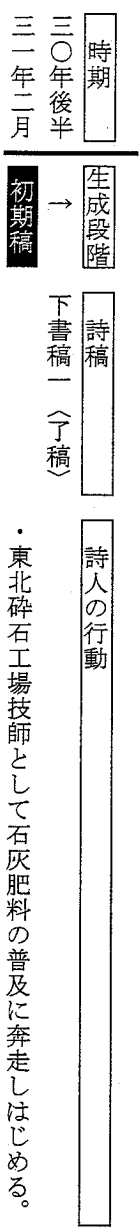
「写」字丸囲み

草稿の最終段階、定稿形の前段階に位置づけられるもの。私見により、鉛筆・赤インク→ブルーブラックインク→青インクという筆具による付与段階を想定する。

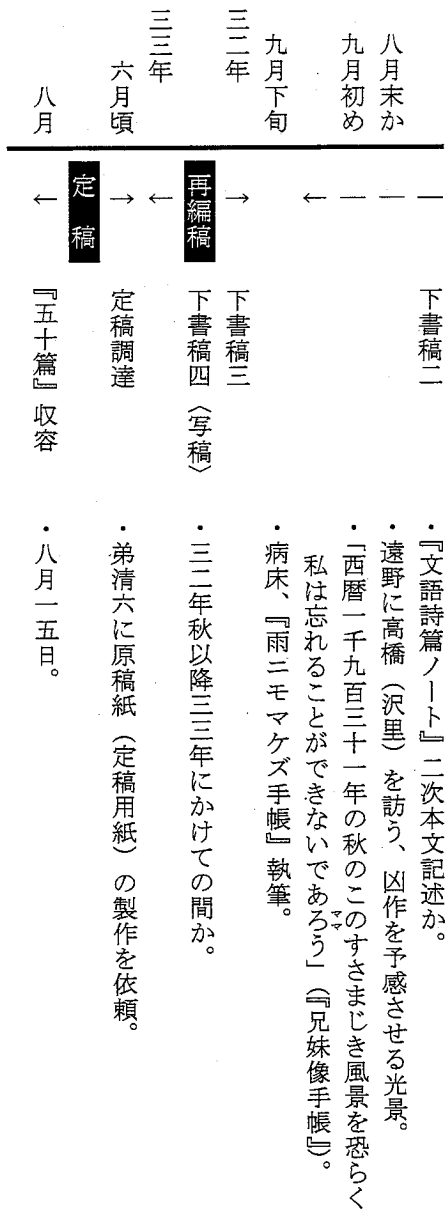
〈写〉と示しその本文形を「写稿」と呼ぶ。

こうしたてがかりをもとに、詩人の生活行動の記録も踏まえて、たとえば、先の「盆地に白く霧よどみ」の生成過程について、私見によつて時間的分節を試みてみると、左のようである。

〈了〉印の付与が草稿の最初を特定し、また〈写〉印の付与がその最終を教えるとともに、草稿の用紙と定稿用紙の使用開始時期から、生成の時間的段階が推定されてくる。そのことによつて、本文生成の背後にあるさまざまな詩人の情況も、併せみうる。すると、草稿本文の生成過程において、大きな節目となるのが、二八（昭和三）年以後の病が再発、その病苦との肉体的・精神的な闘いを信仰上の道場とした記録、——『雨ニモマケズ手帳』を生んだ三一年の秋から冬の期間であつたようにみえる。



・東北砕石工場技師として石灰肥料の普及に奔走しはじめる。



本研究では、三〇年から三一年にかけておこなわれた、(了稿)の形成とその手入れ段階を初期稿とみ、病床にありながら三二(昭和七)年以降、初期稿への大幅な手直しに向かい、(写稿)の成立に至った段階を再編稿とそれぞれ呼称することとする。したがって、定稿用紙を手にしたと見られる三三年六月以後は定稿段階ということになる。

3

こうして、本文の過程を表現的にも時間的にも段階的にとらえうる態勢がととのえられると、個々の詩稿の性格に迫ろうとする注釈的作業がすすめられる状況がまず現われてきた。

ひとつに、宮沢賢治研究会(東京)によって、一時的ながら精力的に果たされる。語注と鑑賞を合わせた注釈が、多数の論者によって『文語詩稿』の未定稿も含めた97編に対しておこなわれ、『宮沢賢治文語詩の森』としてまとめられたのである。かぎられた紙数による定稿本文を軸にした詩稿研究であり、生成論的読解を必ずしも徹底させたものではないが、『校本全集』の成果を活用しつつ読みを深めて、難解詩句に対する新見や、本文変化の背景にある伝記的事実の掘り起こしなど、読解のさらなる進展に資する基盤を築いたものである。

いまひとつに、信時哲郎による「宮澤賢治『文語詩稿五十篇』評釈」がある。新資料を博搜し語注を充実させて、草稿段階も踏まえながら柔軟な評釈を展開し、『五十篇』の全詩稿をひとりで読みきつている。ただ、やはり定稿本文の読み解きに軸を置いているので、そ

の詩稿の性格に迫ろうとするその評釈に、本文生成の観点を取り入れることは必ずしも徹底されていない。

だが、これらの到達が《文語詩稿》における詩稿研究を一步も二歩も押しすすめた、ということは十二分に評価されてよい。これらの成果を礎にして、詩稿理解を深めた宮沢賢治研究者は少なくないはずである。

島田もまたそのひとりであり、本文生成の階梯が「いくつかの層にはがして考えられる（中略）そして、それら一つ一つの層は、どれもこれもそれなりの完成を示している」（入沢論）といい、あるいは「それなりの独立した作品として、前後とは別宇宙として屹立している」（天沢論）という示唆から、草稿段階のそれを、ひとつひとつの詩の地層として見立てて、《文語詩稿》個々の作品内部の多層世界が意味するところを追究する試みをすすめてつある。

それにしても、徐々にはあるがすすんでいる個々の詩稿の性格解明に対して、次なる課題、生成する詩稿群がたどってゆく《集》の性格に真つ向から挑んだ研究はまだ現われていない。そういうなかで、信時論が、『五十篇』の全詩稿を見とおしてゆく過程で、詩稿配列に詩人の「連作」的意図を見出そうとした点、詩集論にも一步踏みこんだ示唆的なものであり、ひとつの迫り方を提案しているといえる。ただし、それに先立って探るべきことに、詩稿群の生成過程に併走していったであろう、《集》の成立過程を解明することがある。

その点については、栗原敦や杉浦静の研究を踏まえて、草稿群の形成実態を整理し定稿への道程をたどろうとした島田の『宮沢賢治研究 文語詩稿・叙説』がある。先にも記したように、《文語詩稿》の草稿には大きく初期稿と再編稿という二分しうる段階があり、さらに再編の集約として、鉛筆・赤インクによるおよそ100編の《写稿》をウル定稿（定稿化が予約された最終草稿）とした一群の詩集構想があつたのではないか、という提案をするに至る。ふたつの定稿集の前に、ひとつの原詩集を想定しようとしたのである。

本研究の目的は、その想定を論証することにある。そのために、以下の4点についてその実態を明らかにし、意味づけてゆきたい。

- 1 鉛筆・赤インクによる《写稿》の形成過程
- 2 鉛筆・赤インクによる《写稿》本文の設定
- 3 鉛筆・赤インク《写稿》と定稿の本文異同
- 4 鉛筆・赤インク《写稿》による定稿集の相

いずれも、詩稿個々における本文生成の過程を、用紙や筆具、符号の有無にも注目しながら、自筆稿（複写）にもあたりながら、可能なかぎり精密にたどりつつ、詩稿群の移動を総体的に把握する作業を基本に置くこととした。

そのうえで、個々の詩稿に現われてくる本文の変移による詩の場の変容については、本文内部の論理だけでは処理しきれない課題も多い。詩の場を詩層構造としてとらえることによつて、詩層の集積がはかれる意味を、詩人の伝記的側面あるいは時代の動きなども補助線として考察をすすめてゆく。次節にも論ずるが、詩人が《文語詩稿》の過程でたどりついたのは、詩想の定立ということであった。詩の場を支える詩想の変質は、詩人自身の生の熟成がもたらすものであるうからである。

そして、それらの詩稿群が《集》としてまず成立しえた時点を、「文語詩集」（原詩集）ととらえ、その概要を論ずることとする。

本研究は、『文語詩稿』の着地点である『文語詩稿五十篇』・『文語詩稿一百篇』という、ふたつの詩集の構造やその構想ついて迫るために、見きわめておくべき過程を追究するものである。いずれそれら詩集論の展開にすすんでも、その先には「宮沢賢治」という人間論への挑戦がたちはだかっている。その意味でも、これはほんとうに遙か手前の基礎作業のひとつにすぎないが、けっして欠かすことのないものだ、という自覚に立っている。

(注)

- 1 松澤和宏『生成論の探究』(名古屋大学出版会二〇〇三)、71頁参照。ヨーロッパの草稿生成論を詳細に紹介し、日本近代文学のいくつかの作品にも適用して生成批評を論じた快著であるが、『校本全集』・『新校本全集』の本文整理は、編纂委員たちによる独創的な仕事としてすでに果たされていたのである。
- 2 『宮沢賢治 プリオシン海岸からの報告』筑摩書房一九九一所収。
- 3 『宮沢賢治《春と修羅第二集》—その動態の解明—』溪水社二〇〇〇。
- 4 『《宮沢賢治》のさらなる彼方を求めて』筑摩書房二〇〇九所収。これに先行して、『Versions』としての賢治作品・序説』『《宮沢賢治》注』(筑摩書房一九九七)で、『校本全集』・『新校本全集』に示した草稿の類別へ「Version」の概念をもちこむことを提唱して「賢治テキスト生成論」にも、新しい視角をもたらす「可能性を示唆したが、「序説」段階にとどまっている。
- 5 ちくま文庫一九八六。
- 6 島田『宮沢賢治研究 文語詩稿・叙説』(朝文社二〇〇五)、附章1節「文語詩稿ノート本文の研究／成立過程篇」・2節「文語詩稿ノート本文の研究／本文形成篇」参照。
- 7 本研究第4章3節においても言及する。なお、島田「文語詩稿〔盆地に白く霧よどみ〕の生成」(『国語教育論叢』16号二〇〇七・三)も参照されたい。
- 8 一九七四・六。
- 9 「『疾中』と《文語詩》」(『新修宮沢賢治全集』別巻(筑摩書房一九八〇)に初出、『宮沢賢治論集3文語詩研究・地理研究』有精堂一九八七所収)。
- 10 「賢治詩のゆくえ—「文語詩稿」覚書—」(『国文学』一九八四・一、『《宮沢賢治》鑑』筑摩書房一九八六所収)。
- 11 「『文語詩稿』試論」(『実践国文学』35号一九八九・三)に初出、『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房一九九二所収)。
- 12 「《春と修羅第三集》の生成」・「《春と修羅》の行方」(『宮沢賢治 明滅する春と修羅』蒼丘書林一九九三所収)。
- 13 島田『文語詩稿・叙説』第1章初期論・第2章再編論・第3章《写稿》論参照。
- 14 第一集(柏プラーノ一九九九)・第二集(同二〇〇〇)・第三集(同二〇〇一)

15 『山手国文論攷』20号(一九九九・三)にその一を発表、以後神戸山手女子短大・大学や甲南女子大賀の雑誌に毎年継続論考を発表して、『甲南女子大学研究紀要文学・文化編』44号(二〇〇八・三)のその十で完結した。

16 島田「貴きアラヴの種馬を追う／文語詩稿「悍馬」(一)の詩層」(『賢治研究』98号二〇〇六・二)、注6の小論など意識的に試みているが、それ以前にも、そうした実体が詩人のいう「殊に凝集化」(詩法メモ8)の手法によるとみて、「月の鉛の雲さびに」の解析をおおして、草稿段階の詩想の積み重ねを「凝集化」の構造図として提案したことがある(「官沢賢治／「月の鉛の雲さびに」／「殊に凝集化」への過程―)、『国語教育論叢』8号一九九八・七)。

17 朝文社二〇〇五。



2 節 「川しろじろとまじはりて」を読む

1

宮沢賢治の推敲態度については、入沢康夫が、1節のはじめに引いた論考のなかで実はこうもいつていた。

賢治は《作品》を《時間》の軸にそって解き放ったのである。これは明らかに、既成の作品観——時間に対して垂直に立つ一つの完結体としての作品本文、それを目指してなされる鑲骨の制作と推敲という作品観——を大きく変えることであるが、この変革にもとづくまったく新しい作品観を、賢治は大正十年から十二年ごろの間にわがものにし、以後、一生をかけて、それを追求して行ったらしいのである。

「まったく新しい作品観」による実践内容というのが先に引いた指摘であったわけだが、「大正十年から十二年ごろの間にわがものにし」という氏の推測には、そうした詩人に特異な「推敲」の発生にかかわる事情が示唆されているように思える。それは、農学校の教師となつて農村を視座に置く生き方に合つた期間であり、妹トシ子との永訣に直面してその信仰に強い揺らぎをもたらされた期間である。それが結果的に、農村の改革と信仰の再生とを軌道とする「宮沢賢治」の後半生を導いてゆく。

つまり、推敲してはそれなりの到達を果たすということを知りかえす、その文学的営為の醸成は、「宮沢賢治」における新たな道程への始発点が立ち現れた頃にまさしく重なつて、はじまることになるだろう。すると、「宮沢賢治」の後半生が、実際にはけつして平坦な途を歩んだわけではなかつたことに思い至ると、生の展開の節目節目で、その反照として作品改稿のくりかえしがあつたのではないかと、いつた見当も自ずと立ちあがつてくる。ならば、詩人が「終極の完成」というものをめざさなかつたことも、「宮沢賢治」が志すに至つた農村の改革も信仰の再生もついに未達のままに業病とともに閉じられた、という事態に起因しているように思える。「終極の完成」をめざさなかつたのではない、めざしきることができなかつたのである。

詩人は「宮沢賢治」の生の最終段階を迎えるなかで、《文語詩稿》という磁場を建設しつつ、「宮沢賢治」という全体をも引き寄せうる地点にたどりついていた。《文語詩稿》ひとつひとつの作品の、その生成に立ち合おうとするとき、そのような情況も背後にみえておくことは、この動く本文テクニストに対する基礎的作業として、不可欠にちがいない。

以下、《文語詩稿》の生成現場とは、どのようなものであつたのか、試みに具体例をひとつ掲げて、その実態に迫ってみよう。

2

まず、宮沢賢治における詩業の軌跡を示せば、次のようにもたどれよう（棒線は題材を得た時期、点線は推定時期、細線は文語体。た

だし、いずれも推敲は晩年にまでみられる。

一九一一(明治四四)年 歌稿

一四(大正三)年

二一(大正一〇)年

二二(大正一一)年

二三(大正一二)年

二四(大正一三)年

二五(大正一四)年

二六(大正一五)年

二七(昭和二)年

二八(昭和三)年

二九(昭和四)年

三〇(昭和五)年

--- 冬のスケッチ

春と修羅(第一集)

春と修羅第二集

春と修羅第三集

疾中

----- 詩稿補遺(二集・三集稿の発展、番号・日付を喪う)

----- 口語詩稿(三集に重なる題材と推定、番号・日付をもたない)

これに文語詩の制作が最晩年の仕事として加わる(詩人の死は三三(昭和八)年九月である)。というのは、「文語詩篇」と題したノートがあつて、それは、中学時代から三〇年までの「印象的な出来事を」「文語詩制作に当たつての心覚えとして書かれたもの」(入沢康夫)だったからである。

それを踏まえると、自分史を題材とした文語詩の制作が二八(昭和三)年以来の闘病に小康が訪れた三〇年には始まっていたと推定される。その枠組みが自伝性を帯びたものであれば、右に示したそれまでの詩業のなかから、素材や題材としてとりこんでしまうことも当然であり、結果として残された《文語詩稿》をみると、そのとおりなのだった(ただし『春と修羅(第一集)』と『疾中』からはほとんどない)。

けれども、その制作過程が、『文語詩篇ノート』の針路に忠実に沿うものだったわけでもない。《文語詩稿》がたどりついていったところは、自分史の構築という枠組みではもうとらえられぬ地点であつたろうことが、『校本全集』・『新校本全集』の校異によって再現される本文生成の過程からは読みとれそうなのである。概略はこうだ。

三〇年から三一(昭和六)年にかけて形成された草稿群―初期稿と呼称する―は、確かに自伝性に富むもので、それらの詩の場の多くが(私)の出来事に収斂し、「私」あるいはその視点に立った人物が登場して、「宮沢賢治」という自分史の境域をほとんど出ない。それがノートの指示を越えて、三一年の出来事までもとりあげはじめるわけだが、その秋、病の再発によって中絶する。

だが、病床のまま、三二(昭和七)年には、初期稿の取捨も踏まえた制作が再開されるのである。以後に展開した草稿群―再編稿と呼

称する―では、小沢俊郎が指摘したとおり詩の場から「私」を消失させてゆくなか、「宮沢賢治」という境界を超えて、岩手の人々とともにその風土とこの時代を見つめようとする傾向が現われてくる。

そこから詩人は、鉛筆と赤インクによる〈写〉という符号をもって―〈写稿〉と呼称する―、およそ100編の草稿撰出をおこなうようになり、それを土台に三三年の夏に定稿化に入る。しかしその過程で、さらに〈写稿〉の追加による定稿と眼前の草稿群から補充した定稿とを加えながら、ふたつの定稿集、『文語詩稿五十篇』・『文語詩稿一百篇』を一気にととのえてしまうのである。

ここで注意しておきたいのは、『文語詩稿』が第一の疾中からの再起を期して発生し、その変貌が病の再発の果てにとげられていることである。もうひとつの年譜も掲げておこう。

二一年 稗貫農学校（のち花巻農学校）教諭となる。

二二年 妹トシ（とし子）死去。

二三年 演劇による教育（二四年）。

二四年 学校演劇の禁止通達。

二五年 口語稿を主に、雑誌発表をみるようになる（死を迎える三三年まで断続的に）。

二六年 岩手国民高等学校講師、花巻農学校辞職へ。

羅須地人協会を起し、農村青年と交流するとともに稲作を指導。

二七年 活動を肥料設計や造園に移行。

二八年 夏、発症。協会活動の途絶。

二九年 第一の疾中。

三〇年 小康、文語詩制作が盛んになる。

三一年 東北砕石工場技師として石灰肥料の普及に奔走。

秋、再発症、技師活動頓挫、文語詩中絶。

第二の疾中で『雨ニモマケズ手帳』。

三二年 病床で文語詩制作を再開。

文語詩5編を雑誌発表、以後文語詩の発表はなし。

三三年 六月定稿用紙を求める。九月二一日死去。

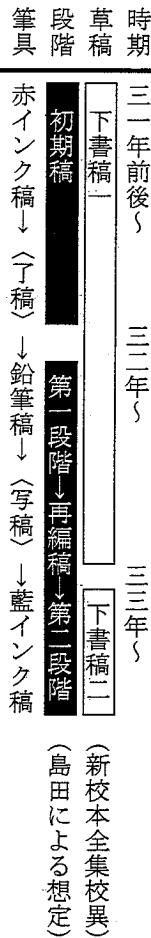
学校教育の限界から、農村現場での改革を志して社会的実践に入ったが、病疾によって二度阻まれている。農村文化の育成と農業指導をめざした羅須地人協会活動と、農業技師として土壌改良の実現を志した東北砕石工場の技師活動である。一度めの挫折のち自分史精査の『文語詩稿』は開始され、二度めの挫折を経てどうやらその針路を変更して、「私的体験を非私的に表現した〈文語詩〉」（小沢俊郎）

の途をたどって定稿に至り、ふたつの詩集に結実するのである。

3

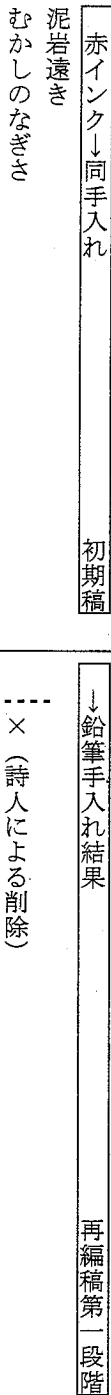
《文語詩稿》のなかでは、自伝的題材であるその興味深さからか、これまでに比較的多く論評の対象にとりあげられてきたものに、「川しろじろとまじはりて」という詩稿がある。ただ、草稿から定稿に至る詩の場に現われた、かすかな変容について、ほとんど読み解かれることがないものであった。

これは、詩稿用紙にいきなり赤インクで起稿するという特異稿<sup>3)</sup>で、草稿段階からついに無題のままである。三一年前後の使用開始が推定される22系用紙に開始、同じインクで手を入れたのち、用紙右肩へやはり赤インクで「了」の符号を記したとみられる(初期稿)。そのうえでそれに鉛筆による手入れが加わって削除や枠囲みをも施し、その段階で鉛筆の「写」の符号を本文に与えたと想定する(再編稿第一段階)。さらにブルーブラックインク手入れが「写」の符号に重なっており、しかも手入れ全体が「紙を斜めにして書き込まれたもの」(『新校本全集』第七巻校異)で、本文も大幅に表現や構成を変えたほぼ定稿に直結するものになっており、『新校本全集』はこれを下書稿二とするが、本稿では再編稿における第二段階手入れと位置づけ定稿清書前段階のものとみておきたい。これらの手入れはすべて同一用紙上でおこなわれたもので、その過程を整理すると(ブルーブラックインクを藍インクとした)、



ということになるだろう。

まず、その下書稿一の赤インクによる起稿と手入れの段階―すなわち初期稿の本文と、その後の鉛筆手入れによってたどりついたとみる(写稿)想定段階―すなわち再編稿の前半に位置する本文とを対置して掲げる(読点は原稿のまま)。



いま水増せる川岸に、  
風うち吹きて、  
ちらばる蘆や、  
波わが影をうち濯ふ

蛇紋の峯は、  
かしこに黒く、  
孤高はかなくほこれども、  
川しろじると、  
峡より入りて、  
二「つ」の↓・「水」は「まじはらず、↓ならびながれたり」

風蒼茫と、  
草緑を吹き、  
あてなく投ぐるわが眼路「に↓や、」  
きみ「の来べ↓・」「待つこと」の↓来る「こと」の  
「むなし（きを↓と）知りて↓よもなきを知り」  
なほ「わが瞳の↓・」「うち惑ふ」「↓瞳かな」

尖れるくるみ、  
巨獣のあの「と↓痕」、  
磐うちわたるわが影を、  
「岩↓・」「濁りの水の  
かすかに濯ふ  
たしかにこゝは修羅の渚

風うち吹きて、  
ちらばる蘆や、  
波わが影をうち濯ふ

-----  
×（詩人による削除）

川しろじると、  
峡より入りて、  
うたかたしげきこのほとり  
二水はならびながれたり

風蒼茫と、  
草緑を吹き、  
あてなく投ぐるわが眼路や、  
きみ来ること  
よもなきを知り  
なほうち惑ふこゝろかな

尖れるくるみ、  
巨獣のあの痕、  
磐うちわたるわが影を、  
濁りの水の  
かすかに濯ふ  
たしかにこゝは修羅の渚

1  
枠囲み

2  
枠囲み

3  
枠囲みなし

4  
枠囲み

5  
枠囲み

最後にある「たしかにこゝは修羅のなぎさ」というその詩句は、かつて唄った、憂悶と苛立ちとを秘めた「おれのかげ」が佇む、

Tertiary the younger Tertiary the younger / Tertiary the younger Mud-stone

あをじろ日破れ あをじろ日破れ / あをじろ日破れに おれのかげ

Tertiary the younger Tertiary the younger / Tertiary the younger Mud-stone

なみはあをなみ 支流はそそぎ / たしかにこゝは修羅のなぎさ

という歌曲(「イギリス海岸の歌」)にもさかのぼってゆく。どうやら舞台は、農学校教師時代以来、宮沢賢治が親しんできた北上川イギリス海岸とみられる。そうした歌曲時代も踏まえて、ここには憂愁の「わが影」を見つめる「われ」が、再編段階に至っても存在しつづけている。それは、実は定稿にも継承されるものである。しかも、この人物は、

赤インク手入れ形 初期段階

鉛筆手入れ形 再編第一段階

きみ来ることのよもなきを知り ↓ きみ来ることのよもなきを知り

なほうち感ふ腫かな

↓ なほうち感ふころかな

とあって、「きみ」に対する煩悶に感うて「修羅」を認識している(「われ」)なのである。

その意味では、詩の場から(私)を消失させてゆくとした《文語詩稿》の傾向にそぐわぬ、これは例外的な過程をたどるものともみえるであろう。

けれども、「私的体験を非私的に表現した」詩人の針路からまったく外れたものであるかという点、そうでもない。ここには、詩の場の変容への契機も現われている。鉛筆をもって手を入れはじめた再編の段階で詩人がたちどまった、[3]連にも位置づけられる詩句部分である。この[3]連相当は、鉛筆による手入れが削除と枠囲みによって本文整理をはたしてゆくなかで、×(||削除)も囲み(||採用)も与えられぬまま放置されている。

それは、この連に対する採否の躊躇である。なにをためらうのか。「3」連を支配するこの「きみ」とは、そもそも「われ」にとつてどういう関係に立つ人物であるのか。

それについてはもっとも早く、恩田逸夫が、この下書稿一では「うつろな視線を放ち、譬の上を歩いたりたらずんだりしている賢治で」、「蒼茫として風に吹かるる諦念の修羅である」とみて、「病を得、しかも宿願の「協会」運動は失敗と認めざるをえない」という試練のあったことを念頭に置いたうえで、『春と修羅第二集』の頃からは「恋愛」という語の内容も拡大して使用している」としつつ、『春と修羅第三集』に至ると「恋愛」という語は、彼が、心から求めるものの比喩として用いられている」と指摘して、

「きみ」を、彼が求めてやまぬ万人共栄の理想的世界であり、いま、実現の可能性は万が一にも求められぬ状態であるのに、なおこの希求を捨て切れぬことの苦慮が、修羅の要因であるとも考えられる。と指摘した。「きみ」のもとに集っているのは農民たちである。

これに対して、小沢俊郎は、下書稿一について「恋の妄執が自己を「修羅」と意識させる原因」とし、二三年頃とみる「イギリス海岸の歌」の修羅性も同質のものとして、二二年の妹トシへの挽歌「松の針」(『春と修羅』)に、

おまへがあんなにねつに燃され

あせやいたみでもだえてゐるとき

わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり

ほかのひとのことをかながへながらぶらぶら森をあるいてみた

として現れていた、「ほかのひと」との「不発の恋」を推定する。つまり、片恋に終わった女性がいるとみるのである。

その点では、入沢康夫が、散文「イギリス海岸」の「ふと私は川の向ふ岸を見ました。せいの高い二本のでんしんばしらが、互によりかかるやうにして一本の腕木でつらねてありました」という叙景を、「銀河鉄道の夜」のキャンネルラ失踪(死)の直前の叙述「ほんやりそつちを見てみましたら、向ふの河岸に二本の電信ばしらが、丁度両方から腕を組んだやうに赤い腕木をつらねて立ってゐました」に重ねてその不吉な原型とみ、「イギリス海岸の歌」の修羅性にもつうじる暗示的な事態として読みとる。そのうえで、「イギリス海岸の歌」から「川しろじるとまじはりて」に至る成立の過程に、「妹とし子の死がはさまる」ことを指摘して、

あの「泥岩遠き……」の中に書きこまれた「きみ」に当る人物として、他のいかなる女性よりも、とし子を考えるほうが、私には自然に思えます。

というのである。

いずれも、この本文に「宮沢賢治」の影を踏もうとしている。自分史を構築する自伝詩篇として企まれた文語詩であるからには、その

本文生成の過程に、「宮沢賢治」の行動・記録を重ね合わせることで、その詩句の意味するところをまず精確に捕捉しようとするのも、自然なみちゆきである。本文と記録との整合を確認しつつ、その意味を読みとろうとするのは、文学研究の初期——作家と作品を有機体としてとらえようとするときには、基本作業といえるだろう。つまり、散文「イギリス海岸」の地点に立つならば、「きみ」とは妹トシ子なのであり、それにやや後れる歌曲「イギリス海岸の歌」の地点に立てば、「きみ」は片恋に終わってしまったあの女性なのである。そしていま、羅須地人協会の挫折と闘病の地点に立つと、「きみ」という理想世界のおもかげが現われてもくる。

それは、修羅の渚を病を負ってさまよう「われ」に、「私」という半生の精査を託した《文語詩稿》初期稿に、当然の現象として詩人自身が求めていたことだともいえる。たとえば、《文語詩稿》の作業が軌道にのる三〇年に、教え子たちと交信を重ねることがあり、その書簡のひとつに、

こんどはけれども半人前しかない百姓でもありませんから、思ひ切って新しい方面へ活路を拓きたいと思ひます。期して待つて下さい。(中略) 私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になつてしまつたこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあつたのです。

(書簡260 四月沢里武治宛)

などと、新たな活動への意欲とともに、その過去を直視し自省を深めている姿がみえていた。文語詩による自分史の精査とは、挫折をのり超えて新たな仕事を成し遂げようという、再起に具える作業だったのである。だが、その作業のただなか、三一年二月から東北砕石工場農業技師として石灰肥料販売に東奔西走する。根底に、盛岡高農で学んだ酸性土壌という岩手農業の課題を、まさに克服しようとしていたのである。だが九月には再び病に倒れ、またも挫折、しかも病のほうは死病として襲つてきた。

この赤インク形の「3」連相当が、三二年以後とみる再編段階でまず放置されてしまつたのは、その「きみ」に、「われ」の志にかかわり背かれた人々(農民たち)の姿がさらにも重ねられてしまつた、その揺曳からではなかつたろうか。三一年の二月から五月にかけて使用したと推定される『王冠印手帳』には、「あゝいつの日か弱なる／わが身恥なく生くるを得んや」(44頁)、「病めるがゆゑにうらざりしと／さこそはひとも唱へしか」(45頁)などと、病ゆえにままならぬ事態が活動のさなかにあつたと推測される記事も書きつけられていた。そうした苦衷も踏まえてみれば、再編稿に入つた鉛筆手入れにおける、

なほうち感ふ腫かな(赤インク) ↓ なほうち感ふこゝろかな(鉛筆)

という詩語の変換に(傍点は島田)、「われ」の「こゝろ」をじかに見つめなおさなければならなくなつた、詩人の動揺の深さが暗示されていく、とする深読みも許されようか。「わが身」の「恥」そして「うらざり」——(私)の所業に対する痛切な悔悟が、なおもよみがえつてくることがある。「3」連の保留には、そうした(私)を突き放しきれない詩人の情況が、不意にもよみがえつてきていたのではな



いか。ただその段階においても、定稿候補稿として（写）の符号を与えた点に、詩人の誠実さをみるべきであろう。自らの恥部もみつめて題材にしようとするところに、《文語詩稿》の再編にかける意志を顕わにしているからである。そこには、死病の再発のために、志の実践をついに喪つてしまうという決定的な事態に対して、いま間を置こうとしている詩人がいる。言い換えれば、（私）という場から「われ」の離脱を果たそうとする、いわば助走としてこの鉛筆手入れ形はある。

「きみ」の削除を躊躇した詩人は、ここから再編の最終手入れに向かうことになる。

定稿の清書前、三三年に入ってからかと思定するが、定稿候補稿として（写稿）に指定した先の鉛筆手入れ形に、ブルーブラックインクでもって大幅な推敲を加えてゆく。『新校本全集』第七巻校異にしたがってインクによる最終形態を上段に、鉛筆手入れ形を下段に置いて示すと、次のとおりである（「↓」は推敲過程を示す。以下同）。

↑ 藍インク手入れ形

川しろじろとまじはりて  
うたかたしげきのほとり  
病きつかれわが行けば  
そらのひかり「のたげはし」  
↓ぞ身を責むる

↑ 鉛筆手入れ形

風うち吹きて、  
ちらばる蘆や、  
波わが影をうち濯ふ  
川しろじろと、  
峡より入りて、  
うたかたしげきのほとり  
二水はならびながれたり  
風蒼茫と、  
草緑を吹き、  
あてなく投ぐるわが眼路や、  
きみ来ることの

[1]

[2]

[3]

蒼茫として夏の風  
草のみどりをひるがへし  
ちらばる蘆のひら吹きて  
あやしき文字を織りなしぬ

生きんに生きず死になんに  
得こそ死なれぬわが影を  
うら濁る水はてしなく  
さゝやき「ながら洗ふなり  
↓しげく洗ふなり」

よもなきを知り  
なほうち惑ふこころかな

4

尖れるくるみ、  
巨獣のあの痕、

響うちわたるわが影を、

濁りの水の

かすかに濯ふ

たしかにこゝは修羅の渚

5

この最終形態は、ほぼ定稿形に直結する（異同は2か所、傍線部分で↓定稿形）。

鉛筆手入れ形からみれば、改編の手入れをほどこして、あの「きみ」を消失させている。もちろんそれを抛りだしたのでも、忘却したのではない。累々たる「きみ」の群れを、詩の場を構築する詩層に内蔵して、そのうえを踏みしめながら、「病きつかれわが行けば」というのである。それは、トシとの永訣、恋人との別れ、農学校教師の限界、協会活動の途絶、そして技師活動の頓挫などといった出来事、それぞれの意味を咀嚼した結果、たどりついた地平だといえるのではないか。咀嚼するとは、個人的な感傷を他との関係性という枠組みのなかに投げこむということである。

そうした枠組みの設定に、三一年秋から、これまでの自らの信仰を厳しく問い直すという作業を、死病の床で集中的に課していたことを見過ごしてはならない（その間の記録が『雨ニモマケズ手帳』を成した）。その過程で浮かびあがってきたのは、

厳に日課を定め法を先とし

父母を次とし

近縁を三とし

社余農村を最後の目標として

只猛進せよ

(444~462頁)

という、法華経信仰を核にして、社会に向かってさらにその視座を開いてゆく覚悟を、その死に体になお求めようとすることだった。「最後の目標として」とは、挫折しつづけてきたあの志の再建になお向かいたい、という意思表示である。そこでは、トシや恋人にかかわる

問題も一応の決着を果たしたであろうし、協会や技師の活動もその始末をあらためて検証しなおされたはずである。つまり、信仰の問い直しは、「宮沢賢治」の生をも厳しく見つめなおすということなのだ。

そうした問い直し、見なおしを経つつ、文語詩制作が再開し、再編されてゆく。その第二段階に現われた、この新たな詩の場では「はかなき」ものとして「わが影」は見いだされている。「生きんに生きず死になんに／得こそ死なれぬ」という、不安定のきわまった情況のなかに「われ」が突き放されているからである。すでにもう、「わが影を、濁りの水のかすかに濯ふ」といった、傍点の表現にみられる濁りからの救済の余地をのこすかのような赤インク形の「われ」でもなく、「わが身恥なく生くるを得んや」という生への執着のほうを露わにした『王冠印手帳』の「われ」でもない。農村改革の実践に挫折した、いわば成れの果てのすがたであって、詩人宮沢賢治の生の深まりとともに、詩の場を支える詩想にもまた深まりが現われ、それが、本文生成にかかわっているのである。

ブルーブラックインクの手入れは、鉛筆手入れ形が保留していた3連の「きみ」を消去したかたちで新3連の立ちあげをおこなうが、その推敲現場では実は次のように、もうひとつの「きみ」がいったんは登場し、そして消失していった（棒線と×印を用いて）。

蒼茫として夏の風
草のみどりをひるがへし
うら濁る水はてしなく
きみがすくよの影濯ふ
さゝやきながら洗ふなり

~~うら濁る影を落ちて~~

~~あゝきみの影すくよかに~~

この「きみの影」とはなにか。それが、「うら濁る」ものに対して「すくよか」なるものとしてある点にこだわると、この詩の場に至ってやはりはじめて見いだされた「そらのひかり」しかあるまい。いまの「われ」を「けはしく射抜くほどの「きみ」とは、地上のすべてに威光をそそぐ天上という存在である。「わが影」を含めてこの地上をくまなく照らした存在に対して、「きみ」と呼びかけさせた。詩人の視座はこの段階で地上の視点をはるかに超えようとしている。恩田逸夫の指摘した「きみ」とは「求めてやまぬ万人共栄の理想的世界」のことだというのは、このブルーブラックインク手入れ形の段階にこそ適合する。

したがって、この「きみ」は詩語としては消失するけれども、「そらのひかり」としてありつつづけて、詩層に内蔵された「きみ」の群れを見つめつつづけているのである。

同時にまた消失したものである。「修羅の渚」だ。ブルーブラックインクの手入れ現場では、前述した「うら濁る磐に落ちて／あゝきみの影すくよかに」の直後に、右のような手入れがあった。いったんは詩語の継承をはかろうとして、削除したかたちである。ここが「川しろじろ」とした、「修羅の渚」であることにかわりはない。けれども、「修羅の渚」という場所の名を詩層に埋めることによって、詩の場では、天上の光が映しだす「わが影」の、「卑しき鬼」の姿が焦点化され、強調されることになる。

その視線がこうして、「修羅の渚」から「鬼」へ移行した意味については、先の恩田論・小沢論・入沢論ともに言及がない。あるいは「修羅」＝「鬼」というおおづかみな理解をしているのかもしれない。確かに、インド神話に端を発する「修羅」（阿修羅）は、仏教においても、八部集の一としてその守護の役を担う位置に据えられながらも、たとえば、宮沢賢治も所属した国柱会の山川智応が著した『和訳法華経』の脚注によると、

不端正とも非天とも訳す、嫉妬詭曲なる故に果報は天に次げど天に攝せず、帝釈の戦敵たり。

といい、「詭曲」は「詭曲」、意志を曲げて媚びへつらう意の仏教語、その鬼神性が顕わなのである。

しかし、「修羅の渚」に現われた「卑しき鬼」すなわち「卑しい（われ）」のありように、「帝釈の戦敵たり」などといった勇ましいかまへはない。むしろ、ほとんど敗残者のごとき様相であろう。とすれば、ここは、仏教が説く十界にいう「餓鬼」あるいは六道（六趣とも）にいう「餓鬼」、そうした位相にあるものの状況をいつているのではないのか。

6

詩人自身が抱いていた「餓鬼」にかかわる認識を、詩句のうえに登場させたものがいくつもある。

『春と修羅第二集』の一七九番稿の下書稿五手入れのなかで、「普賢菩薩が華嚴で説く／もろもろの仏界のかたち」として、

それはあるひはその「仏界↓刹那」の「仏の↓覚者の」意志により住し

あるひは衆生の業により、

あるひは因縁により住すると

そののどれか↓「見えるだらうか↓星雲で」

こゝからやはり見えるだらうか

しかもしたゞ天や「修羅↓餓鬼」  
これらの国土をもとめるならば  
そんなに遠いことでない

という。ここには、餓鬼界が天界と対比されながら、それがいつでも身近に存しているものとして考えられており、その推敲には修羅と並立してみる態度が現われている。これは赤野用紙上に現われたもので、三〇年以後の手入れと推定される。

また、22系用紙上に展開した車中で「おれ」が仏教的世界観を「青い眼のむすめ」に語る口語詩稿の最後には、

聖者たちから直感され

古い十界の図式まで

科学はいまだに行きつかず

はつきり否定もできないうちに

たうたうおれも死ぬのかな

いま「わたくし（は↓が）↓死ねば」

いやしい鬼にうまれるだけだ

「あかるいひるま」

とあって、まさしく「いやしい鬼」に、「わたくし」が転生することを予感している。その用紙から三一年頃の感懐と推定されるが、そうであれば、宮沢賢治が東北砕石工場技師として土壌改良に苦闘している頃なのである。そして、まさにその頃、『王冠印手帳』（三一年二月から五月にかけて使用されていたと推定される）には、餓鬼にもつながりうる「鬼」が「われ」に重ねられていた。

光と泥にうちまみれ

わづかに食めるひとびとを

ひとひ機械のとどろきに

石うち砕くもろびとの

手なるわづかの食みものを

けづりて老いてさらばへる

軀にこそは与へしは

われはひとりの鬼なれや

(95頁)

松川の東北砕石工場における、石灰岩を粉碎し肥料に調合している作業現場であろうか。状況がつかみにくいのが、工夫のひとりが手にしていた「わづかの食みもの」を老婦にも分け合ったという。それを眼にした「われは」「ひとりの鬼なれや」と自責の念をもらすのである。農村改革の基盤にもなりうる土壌改良のために、石灰肥料をとにかく普及させることが必要であり、その販売に奔走する農業技師宮沢賢治は、一方で工場経営という商売にもかかわって、その一端を担わなければならなかった。それは、工場に生きる人々の生活も支えるということだ。手帳には次のような書きこみもあった。

山なみ越えたるかしこの下に

なほかもモートルとどろにめぐり

はがねのもろ齒の石嚙むひゞき

ひとびとましろき石粉にまみれ

シヤベルを吠をうちもるらんを

あゝげに恥なく生きんはいつぞ

妻なく家なくたゞなるむくる

生くべくなほかつこの世はけはし

(81〜83頁)

卑しくも身をへりくだし

ひとひつかれしとて

夜汽車のなかにまどろめば

せなまた怪しく熱くして

病ふたゝび来しやと思ひ

(85・86頁)

工場の人々の生活をも思い、「営利卑賤の徒にまじり」(未定稿「せなうち痛み息熱く」22系、この草稿も『王冠印手帳』の記述に端を發している)、商売にさえ立ち向かうがはかばかしくもなく、かつての熱病の不安に襲われるばかりである。その信仰が指し示した志と、現実の活動との乖離のなかで、宮沢賢治は精神的にも肉体的にも必至で耐えつづけていたとみえる。それが、工場の営業拡大のために製品見本を携えて訪れた東京で、熱病が再発し、死病の床につくことになるのである。工場に働く人々の生活も守ることもできず、農村改革の実践も潰えて、「われはひとりの鬼なれや」という自己凝視は、以後の詩人の内部に根づくのである。

さらに、劇構想というなかに、そのイメージを明かしているメモがある(時期は不明だが、上質洋紙に黒インクで書きつけたもの)。<sup>(10)</sup>そこには、

### 第一幕 第×生 餓鬼界

長髪、瘦身、爪、這ひて食物を探す。咆吼、争ふ、互に裂く。

菩薩これを誨ふ。食をゆずらしむ。

第二幕 第<sup>1</sup><sub>x</sub>生 人界

第一場 富む、

第二場 施さず 菩薩来り三度誨ふ 聴かず。四度目わづかに聴けども諾はず

第三幕 第<sup>2</sup><sub>x</sub>生 人界

第一場 貧しく病む。近代的小ブルジョア

第二場 未来派風の演出、

第四幕 第<sup>3</sup><sub>x</sub>生

(創作メモ41「古説三世因果物譚」)

とあって、転生の果てに、髪を乱し瘦せさらばえ、「食欲」に這いまわり泣きさげびながら、互いに争つてはその身を傷つけあうもの姿がまずとらえられている。そうした餓鬼界から、なおさらに転生に転生を重ねていま、この人界に「貧しく病む」者がある。「近代的小ブルジョア」ともあるから、「貧しく」とは精神的貧相をいうのであろう。この人物に、詩人は死病の床にある業深き、「宮沢賢治」を重ねているふしがある。とすれば、劇構想の餓鬼界から転生する人物と、この「卑しき鬼」とが呼応している可能性もあるう。

7

要するに、「卑しき鬼」||「餓鬼」とみると、「修羅の落」を彷徨する「わが影」||「鬼」の姿は、「詔曲」の修羅の様相に「食欲」な餓鬼の様相が複合している。ついに技師活動にも挫折した「宮沢賢治」の陥つていたところを、詩人はそう規定する。そのような内実をはらんでいる「わが修羅の影を凝視しつつ重い歩を運ぶ宿業の人の、生きも死にもならぬ妄執の姿」(小沢俊郎)なのである。だからこそ、定稿に至ってわずかに2か所の本文異同をみた、そのひとつが、

病きつかれわが行けば、そらのひかりぞ身を責むる。

というものであり(傍点は島田)、「ただけはし」と見えていた「そらのひかり」が、「われ」を撃つものへと変わって、まさしく身体の烈しい痛みとして、受苦されているではないか。それを、近藤晴彦は「遙かな天空から降る光の不動性と喘ぐ心の対置は生涯幾度も繰返された」として、『春と修羅』時代の、

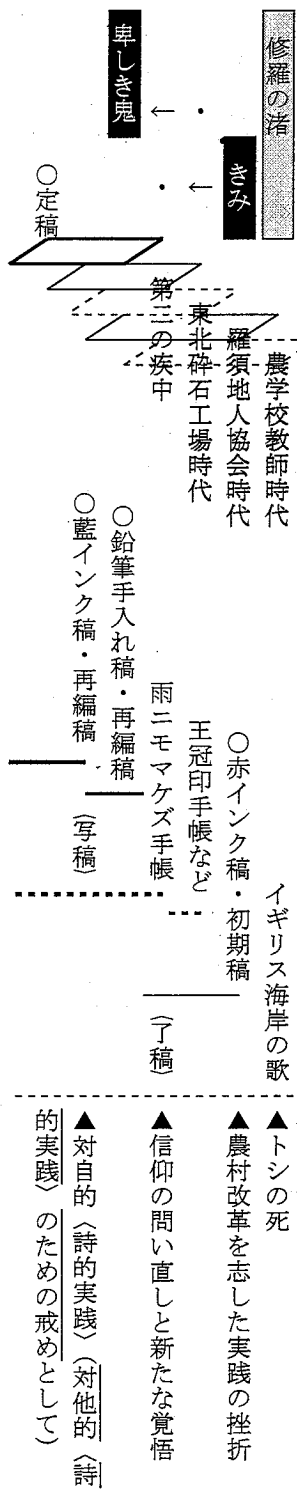
いかりのながさまた青さ  
 四月の気層のひかりの底を  
 睡し はぎしりゆききする  
 おれはひとりの修羅なのだ

(「春と修羅」)

と対比し、「しかしいま、その対置の迫力は衰え、たとえ病状がきつくあろうとも、「お前の姿は何というさまだ」と永遠の「そらのひかり」が「身を責」めるのである。もちろんこれは賢治自身の自己面責でもあろう」と指摘する。けれども「こは、「賢治自身の自己面責」といったような〈私〉の視座にただとどまるものでない。先の恩田論では「落魄の感が漂う」と感じ、入沢論では「この悲しみ、この苦しみは何なのか」と問う、この詩の場に現われている深い暗みは、〈私〉の視座を超えて、いま法華経の十界論を軸にとった〈非私〉の視座に立って、「官沢賢治」が陥ったところ、「詔曲」と「食欲」にとらわれた成れの果てをきびしく見つめているところからきているのである。

そもそも《文語詩稿》の再編に、信仰を徹底的に問い直す過程をおして得た、あの「社会農村を最後の目標として」「只猛進せよ」という覚悟を契機にして、それを踏まえてあらためて《詩的实践》として向かっていった、ということは充分に考えられてよい。それがいま、岩手の人々を見つめるさまざまな題材が同時並行に定稿化されては、着々と蓄積されつつある(それを対他的《詩的实践》の営為とみる)。そのようなときだからこそ、詩人は、その原点に立たせるところをなおさら凝視し、「妄執の姿」として客体化したうえで自らにさし戻し、そして突きつけている、ということではなからうか。この《詩的实践》の土台を、そうしたかたちで踏みしめているのである。その意味で、この詩稿は、対自的《詩的实践》とみられる。ここには、「官沢賢治」の生の軌跡が寄り添っている。そして、それが本文の生成に深くかわっているようなのだ。

【生成の構造図】





そのありようを概念的に示すと右のようである。

この詩稿の生成をこのようにみる立場からいえば、たとえば中村稔が、この詩稿（定稿）に対してその鑑賞で示した「詩想はまことに寂しく悲しい」という評語も、『文語詩稿』における「詩想」のとらえ方としては、表層にとどまるものと言わなければならない。その寂しみ、悲しみ、苦しみさえも受容したうえに、詩人はそれを確立していったのではなからうか。

その後半句を、ブルーブラックインク手入れがああ「きみ」を詩僧に埋めたかわりに、まったく新たに浮上させてきた詩句につないで、定稿に至った③連は、

蒼茫として夏の風、

草のみどりをひるがへし、

ちらばる蘆のひら吹きて、

あやしき文字を織りなしぬ。

という、まさに「あやしき」光景である。先の近藤論が「転句としての現況描写は、（略）一種鬼気迫るものを現出させてくる」として「あやしき文字」も、 $\parallel$ 意味不明の $\parallel$ 字に似た草の陰影ではなく、死を連想させる不吉な文字に思われてくる」と述べている。確かに「転句」としての位置を踏まえ、時間軸の転換とみると、死の予覚をそこに重ね合わせるのも納得できる。だが、空間軸（視野）の転換とみれば、「卑しき鬼」を点景とした全景の把握がおこなわれているもの、と考えられる。そこは全体「あやしき」場所なのだ。鈴木健司の「この「あやし」さは、詩の全体を支配している」という指摘も、そのことを言いあてようとしたものであろう。つまり、「修羅の落」を暗示する措辞であるとともに、この「われ」もまたその一要因なのである。

「死」に向かう時間、あるいは「修羅」にとらわれた空間のなかに、餓鬼たる「われ」が置かれているということを押さえたうえで、定稿に至って現われたもう1か所の異同を含む、④連が現われる。

生きんに生きず死になんに、 得こそ死なれぬわが影を、  
うら濁る水はてしなく、 さしやきしげく洗ふなり。

これを、中村論は「生きも死にもできぬそういうのつびきならない境涯に彼は追いこまれており、わが影をうら濁る水に洗うことしか知らないのである」と読む。けれども、「彼」は「追いこまれ」たのではない。他者のせいではなく、「詭曲」と「食欲」の業に自ら陥ってしまった、少なくともそれまでの自分を打擲し、病の苦悩を「道場」として受け容れ、信仰再生への誓いと志の再確認を得るに至った『雨ニモマケズ手帳』詩人は、そうとらえているはずである。

また、「うら濁る水に洗う」としか知らない」という、どこかよそよそにかまえた情況にもとれよう言いまわしが、腑に落ちない。こ

こは、「のつびきならない境涯」を背負うその影（存在）に、「うら濁る水」が絶えず、波音を立てながら寄せては引き引いては寄せる、というのであろう。「洗ふなり」とあるが、この人物を襲っている情況あるいはその心の反映ともいえようその水が、依然として「うら濁る」ものであるかぎり、けつして浄化されることがない。つまりそれが、いま置かれてくる不断の状態だ、といっているのではないか。詩人はまさに、「のつびきならない」、実にきびしい認識に立ってこの定稿を提出するに至ったのである。

そのような「われ」を、詩人がただ「悲傷」（近藤論）として詠嘆しているはずもない。志にも躓いた、こびへつらい、むさぼる妄執の姿をいま、「格好の道場」（『雨ニモマケズ手帳』）として不断に凝視しつづけようとする。だからこそ、その「悲傷」が痛切な深刻なもの（近藤論）として響いてくるのであろう。

この詩の場を支える詩想の、「まことに寂しく悲しい」その核にあるのは、いまはもうそこには一歩も退けぬという誠めなのである。こうした詩想の定立は、さまざまな題材を——したがってさまざまな詩想を具現するに至る《文語詩稿》定稿群の、礎石（大きな枠組み）にもなりうるのであり、この詩稿の定稿化はそこにあるようにみえる。《文語詩稿》というこの《詩的実践》をもう破綻も挫折もさせないために張られた、いわばその防火線としてあるのである。

「川しろじろとまじはりて」の生成過程に、詩人宮沢賢治の半生そのものが背景としてあるとみて、その読みとりを試みてきた。ここに、その生の深まりが詩想を深め、その詩想が本文をうながしてゆく、というひとつの側面がみえてきたのではなからうか。

《文語詩稿》における詩想の位置づけにかかわっては、詩人自身が、定稿用紙をとりまとめたそれぞれに、集名を標記した和紙表紙を与えて、そこに、次のような文言を記していた。

文語詩稿 五十篇<sup>ごじゅう</sup>

本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれど

も現在は現在の推敲を以て定稿とす。

昭和八年八月十五日

宮沢賢治

文語詩「篇↓稿」一百篇、昭和八年八月廿二日、

本稿想は定まりて表現未だ定らず。

唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。

そこでは、いずれも「想」は「定り／定まり」としながら、「表現」のほうは、『五十篇』は「現在は現在の推敲を以て定稿」と位置づけた詩稿の集成であり、『「一百篇」』のほうは「唯推敲の現状を以てその時々々の定稿」にみなした詩稿の集成である、というのである。そうした「定稿」に至る詩稿の背後には、推敲の現場を担った多くの草稿がひかえているが、草稿のままついに定稿に至ることがないもの

も少なからずあった。草稿群の収容に黒クロス表紙が用いられた段階があり、そのひとつに『春と修羅第三集』の草稿収容から転用されたものがあり、その表紙の見返しには、

文語詩稿／本稿想未だ熟せず 表現／本より定まらざるもの／発表を要せず (黒クロス表紙C)

という書きこみがあつて、定稿に至らなかつた詩稿の本文情況が明示されているのである。この文言は、定稿を収容した和紙表紙の記述に呼応したものと読めよう。定稿集の成立時期に近接しているとみてよい。

こうした詩人の言い分をいささか加工して整理してみると、

・ 想は定立するも 表現が未足 …… 現在の定稿  
・ 想は定立したが 表現が未定 …… 時々の定稿  
・ 想が未熟なうえ 表現も不定 …… 発表不要稿  
という、本文の到達に大きく三段階あつたことがみえてくる。

「現在」の定稿とは、それぞれの詩稿がいたどついた「表現」にまだ不足もあるが、ほぼ定稿として認めうるもの、という段階であり、「時々」の定稿とは、「表現」の推敲がまだ途上でしかも詩稿によつてその程度に差もあるものの、それぞれの現状をおおむね定稿とみなしうるもの、という段階であろうとひとまずは読める。そのような較差を認識しつつ、それでもそれを「定稿」と位置づけ、あるいはみなしたのは、それぞれの詩稿における「想」の定立ということが重視されたのであり、そのことに詩人が相当な自信を持つに至つたからだといえる。

その「想」とは、やはり詩の場を支える詩想の謂と理解してよいだろう。本文は、詩想とそれに基づく表現とによつて成り立っているのである。それに対して、「発表を要せず」とした段階は、その「想」が「未だ熟せず」、したがつて、「表現」は「本より定まらざるもの」(傍点は島田)、と理解できよう。「想」が不十分なことから「表現」は論外だ、という。詩人にとつて、「想」の熟成が「表現」に先行しているのである。詩集をとりまとめるに至つた時点の詩人の方法意識としては、詩想の熟成から定立という骨格作りがまずあつて、その肉づけとして表現の定着が追う、というみちすがはつきりと自覚されている。それは、入沢康夫が指摘した「新しい作品観を」「一生をかけて」「追求して行つた」、最終地点であつたのではないか(詩集成立の一月後に詩人はその生を閉じた)。

もちろん、実際の生成過程において、詩想↓表現という一方通行のなかだけで醸されるわけはなく、表現↓詩想という事態とも交通しながら、本文の成立は実質果たされてゆくにちがいない。ただ、信仰の再生を期した詩人が、農村改革の志をあらためて自覚し、その(詩的実践)として《文語詩稿》の再編に向かつて、定稿集の編集までを終えたいま、詩想の成熟と定立のほうに心がけた、ということをお吐露しているのである。そのうえ、「想」は「定り／定まり」で、と宣言しているからには、詩人にとつてたどりついたその詩想に、曖昧

などころはないのであろう。詩想の原点には、詩人の体験がある。そして体験には、「宮沢賢治」という生き方が寄り添っている。その生き方の背後には、近代化と軍国化をすすめてきた時代もまた厳に存在している。そのような原点から、生長・深展してきた詩想の実体というものが、本文構築の基底にある、というのである。

とすれば、その本文生成の過程に「宮沢賢治」の生が絡んでいる、というのは、「川しるじるとまじはりて」の場合にかざられることでない。実際に、その草稿から定稿へ向かって、ほとんどの作品が大なり小なり、その本文に変動を示している。そうした個々の詩稿の動態の意味に迫るために、ひとつの手法として、詩人自身が固執した「想」の成熟のほうに軸足を置いて、「宮沢賢治」の生を交叉させながら詩想の熟成過程をつかまえてゆくこと（＝詩の場を支える詩想史を踏まえること）も、不可欠な基礎作業であるにちがいない。

それは、本研究においても、その表現の動的過程を本文の内部論理から合理的にとらえてゆくこと（＝本文を支える表現史を踏まえること）とともに、追究の基本的な態度として意識的にとりいれられることになる。

おわりに

本研究の構成は、以下のとおりである。

1章で初期稿の形成過程をたどり、2章で再編稿の展開を概説するとともに、鉛筆・赤インクによる〈写稿〉の成立過程について考察する。その〈写稿〉本文を想定し定稿本文との対照で得られた異同実態の分析をもとに、〈写稿〉と定稿とに比較的大きな差異がみられた詩稿の生成過程を考察して、詩想の深化があったことを3章で明らかにする。

4章では、鉛筆・赤インクの〈写稿〉によった〈定稿・百編〉を原詩集とみて、詩集としての構造・性格・針路・基盤を明らかにし、その具体的な実体を示す。けれども、この〈定稿・百編〉が詩集として安定した内実をもちながらも、ふたつの詩集へと発展してゆくこととなる、その転機がもうひとつの〈写稿〉群の出現と定稿化によるものであることを、終章として提案し、ふたつの詩集への過程については、今後の研究課題とする。

なお、右の本論のほかにも、資料として、自筆稿の複写、本文対照や手入れ実態などの一覧を付している。

(注)

- 1 『宮沢賢治全集4』解説、ちくま文庫一九八六。
- 2 「疾中」と〈文語詩〉（『宮沢賢治論集3文語詩研究・地理研究』所収、有精堂一九八七）。
- 3 『新校本全集』第七巻校異によると、『文語詩稿』252編中8編のみで、他は「いたつきてゆめみなやみし」・「そのとき酒代つゝくると」・「歯科医院」・「化物工場」・「電気工夫」・「涅槃堂」・「Romanzero開墾」である。「涅槃堂」以外は〈了稿〉に位置づけられ、

インク開始による初期稿である。つまり、初期稿としても三二年前後から起稿したと考えられるものである。

4 同じ舞台で農学校生徒たちとの交歓を描いた散文「イギリス海岸」があり、原稿末尾に「一九二三・八・九」とあるものの、その年月日は北海道から樺太へ旅立っていた最中で、成立時ではない。二二年から二四年の間に成立したと考えられるが、歌曲も近接した作物とみられている。

5 「宮沢賢治と川・橋・らんかん」(『宮沢賢治論2詩研究』所収、東京書籍一九八二)。

6 「アルビヨンの夢と修羅の渚」(注2の同書所収)。

7 「銀河鉄道の夜」の発想について(『宮沢賢治プリオシン海岸からの報告』所収、筑摩書房一九九一)。

8 盛岡高等農林学校在学時に、師事していた土壌学の関豊太郎が酸性土壌の改良に石灰が有効であり、その肥料化と普及とを提唱した(『岩手日報』一七(大正六)年一月二一・二三日付)。

9 三一年五月中旬から下旬にかけて発熱病臥する日々があった(『新校本全集』第十六卷年譜篇)。下書稿一赤インク形は、このときの体験による可能性もある。つまり「きみ」とは石灰肥料の導入を約した農民ということになる。

10 すでに小沢俊郎が「定稿との間には昭和六年の病氣再発という大事件がある。定稿への方向を決定的ならしめた一因には、その死病への認識があると考えたい」と指摘していることは1節に示した。

11 新潮社一九二二発行。引用は二八年刊の文庫版による。

12 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏の十界に別つ(『和訳法華経』脚注、読点は島田)。

13 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道也(『和訳法華経』脚注、読点は島田)。

14 思索メモ1のなかに「一、十界を否し得ざること、／＼と書きかけてすべて削除したあと、

一、異空間の实在 天と餓鬼、分子—原子—電子—真空—異次元—異構成—幻想及夢と实在、

としたものがある。七四番稿の下書稿二ウラに記されており、オモテの詩稿は三〇年からの展開と推定される(木村東吉『宮沢賢治《春と修羅第二集》研究—その動態の解明—』総論編第二章、溪水社二〇〇〇)。

15 東北砕石工場と宮沢賢治の緊密な関係は、伊藤良治『宮沢賢治と東北砕石工場の人々』(国文社二〇〇五)に明らかにされている。工場主鈴木東蔵もまた農村改革の志を青年期に育んでいた人物だった。二九年に宮沢賢治(三三歳)を病床に尋ねたとき、鈴木はまだ二八歳である。

15 用紙は上質洋紙(『新校本全集』第十三卷下校異)、同じものか未確認だが、書簡に使用された「上質洋紙」があり、三〇年六・九月に2例、三二年九月に6例みえる(『新校本全集』第十六卷下「書簡通観」)。

16 注2に同じ。

17 「死の視点Ⅲ」(『宮沢賢治への接近』河出書房新社二〇〇二)。

18 『日本の詩歌 18 宮沢賢治』（中公文庫新訂版一九七九、7版一九九四）。

19 「川しろじろとまじはりて」における語注『宮沢賢治文語詩の森第二集』柏プラノ二〇〇〇）。

20 たとえば「生さんに生きず死になん／得こそ死なれぬ」も、『雨ニモマケズ手帳』を経ていよう。その47・48頁に「生老病死」観に関するメモがあり、記述に錯綜もあるが「生」については「生——抜キ得ズ」と断定し、死については、

いては、「死——軽メ得ズ」というのである。志のままに生き抜くことのかなわぬこと、かといつて、軽々しく「死」に向かうこともできぬ。そこには、農学校・羅須地人協会・東北砕石工場それぞれに試みた実践の挫折があり、二度にわたる死と間近に向きあっている闘病がある。それらひとつひとつをなぞりながら、詩人は生をみつめ死をみつめたということであろう。このような階段を得て、「生さんに生きず死になん／得こそ死なれぬわが影を」の詩句があつたとみるのである。

こうして病疾をまさに森厳苛烈な「道場」として受容した詩人宮沢賢治の態度に比べると、先行した闘病の記録ともいえよう『疾中』詩篇における「道場」観には一種のなまぬるさがただよう。

こゝこそ春の道場で／菩薩は億の身をも棄て／諸仏はこゝに涅槃し住し給ふ故／こんやもうこゝで誰にも見られず／ひとり死んでもいゝのだと／いくたびさうも考をきめ／自分で自分に教へながら／またなまぬるく／あたらしい血が沸くたび／なほほのじろくわたくしはおびえる

（「夜 一九二九、四、二八、二）

嘘はもちろんない。ここには、いままさに死を畏れ生に執着している率直なひとがいる。

21 『五十篇』の和紙表紙は現存しない。三四（昭和九）年から刊行された文圃堂版『宮沢賢治全集』第二巻に写しとられたものを掲げる。

第1章 初期稿の形成

はじめに

本章は、一九三〇（昭和五）年前後からと推定されている、宮沢賢治最晩年の営為、『文語詩稿』の制作について、（了）印が付与された草稿を初期稿と認定し、その用紙の分別と題材の分類によって整理し、その動態を明らかにする。

1節においては、『文語詩稿』の発生のあらましを、詩人の伝記的な事実にもとづきながら推理しつつ、初期稿の実態を整理してその形成過程を明らかにする。そのうえで、詩稿の題材を分析することによって、初期段階が文語詩による「自伝」の構築に向かおうとしていたことを確認して、その意図には、自らの「過去」を再現し精査することにあつたという仮説を提案する。

2節では、『文語詩稿』の制作針路を指し示すことになった『文語詩稿ノート』の記述と、それに対応する初期稿を具体的に指摘して、『文語詩稿ノート』の存在意義の再確認をおこなう。

3節では、初期稿「後」段階の本文形成が文語定型の強化に向かつていることを、草稿の具体的な分析をおして例示し、それが自らの「過去」を徹に相対化する作業であつたと推論する。さらに、「後」段階に現われてくる詩稿が「自伝」構築の偏差をおぎない、中学時代から羅須地人協会時代までをいわばまんべんなく対象化して、自分史精査の徹底をはかるうとしていたことを指摘する。

4節では、三〇年までとする『文語詩稿ノート』の指定を逸脱する、三一（昭和六）年段階の題材が草稿に加わってきた事実から、詩人が過去から現在にも眼を向けざるを得ない情況のなかに立ってきたことを明らかにするとともに、二八（昭和三）年来の悪疾が重症化することによって『文語詩稿』の制作が途絶する時点を、伝記的事実をもって指摘する。

なお、本章は、島田『宮沢賢治研究 文語詩稿・叙説』（朝文社二〇〇五）第1章をもとにしている。



1節 《文語詩稿》の発生と、その形成

1

一九二九（昭和四）年、病床にあった宮沢賢治の書簡で、気にかかるところを引く。

近日漸くに病勢怠り多少の仕事も致し：

今夏以来ほど快癒いたし床中ながらこれ小仕事もいたしまして：

（書簡248 九月齊藤貞一宛）

（書簡252 一二月宛先は不明）

病床にありながら、ここにみえる「仕事」、あるいは「小仕事」とはなにか。それを、「文語詩の創作を行いはじめたと推定」したのが、堀尾青史の旧『校本宮澤賢治全集』第十四巻年譜（筑摩書房一九七七）だった。これは『新校本全集』第十六巻下年譜にも継承されているけれども、二九年の「仕事」が「文語詩の創作」だ、という明白なてがかりは、実はない。それでも、もう少し書簡を読みますと、「仕事」の実態とその周辺が、少し、かいま見えてくるように思える。

三〇（昭和五）年に入ってから書簡をみよう。いずれも農学校時代の教え子に書いたものだ。

私もう癒りまして起きて居ります

（書簡254 一月菊池信一宛）

三月からは外へも出られると思ひます。

（同右 下書二）

すっかり療つて仕事してゐます。

（書簡255 二月沢里武治宛）

とあった。さらに、やはり二月のものに推定する堀籠文之進宛の次の書簡256には、

それでも昨今はお蔭様で日中は大部分机に向つて居れるやうになり、またぞろ肥料の設計や石灰のことなどこそそはじめて居ります。

と記すに至るが、ここまで読むと、この頃の仕事はまだ「机」の上の段階で、どうもそのひとつは、肥料にかかわることのようだ、と分かる。前年以來、東北砕石工場の鈴木東蔵に助言をつづけていた。「俺はいまも農業にかかわっているのだ」という意識から、かつての同僚に向かつて出たことばであつたらうか。この時期の病勢から推定すれば、農民の要請に応えた羅須地人協会時代のような精力的な肥

料相談／設計をしていたとは、考えにくい。それは、まだ不可能なことだったろう。せいぜい「机に向」かうしかなかった状態から、やっとぬけ出たのが、三月になってからのようなのだ。

半日づつ起きて今度こそはとわざと風に吹かれて見たり：

(書簡257 森佐一宛)

私も起きてゐます。そしてまたこり性もなく苗床を人をたのんで替えて貰ったり：

(書簡259 菊池宛)

この2通にみえる「起きて」は、一月頃の、病床に身を起すという「起きる」とは異なっていて、もう立ちあがって(机上をも離れて)動き出している、というのだ。その回復ぶりは、四月に入ると、

一日起きてゐて、またぞろ苗床をいぢり出したりしてゐますから、：

(書簡260 沢里宛)

というところまで来ていた。「仕事」に、園芸という屋外作業までも復活してきたのである。三〇年使用と推定(新校本全集第十三巻上校異)される『銀行日誌手帳』の日録欄に四月から六月にかけては、日々の作業が連続とつづられて、順調な回復のようにみえる。そして七月には、

今はすっかり平常になり小園芸店番などあちこちできることをやって居り：

(書簡270 菊池宛)

とあって、複雑な対人関係も入ってくる店番が、さらに「仕事」として加わってきたのである。

しかし、これほど回復してきた段階になっても、「仕事」のなかに、文芸にかかわることが出てこない。もちろん、だからといって、小康を得た詩人が、まったく創作にかかわらなかつたはずもない、と思う。なぜなら、宮沢賢治の手もとには二五(大正一四)年以來の、詩稿専用が発案した赤野用紙があつて、それを用いた『春と修羅第二集』の形成と編集が依然継続されていた。そのうえに新たな詩稿用紙が、さらに作られ加えられた事実があるからである。書簡への流用をみると、『新校本全集』第十六巻上書簡通観、三〇年夏以降にはすでに、原紙(無野)とともに手作りの黄野用紙があつた。つまり、三〇年には、その黄野用紙がもう『春と修羅第三集』など口語詩の草稿のために用いられていた、とみえるからである。

2

文語詩の制作についても、新たな詩稿用紙は用いられた。

その草稿群を、開始稿の用紙別に定稿に至るまでの形成過程を検討し、定稿に至る、あるいは未定稿に置かれた過程を、パターン化して

整理させてみると、図表①のような実態がとらえられる。なお、□で囲ったのは、その用紙上に「了」の印（○で囲んでいる）が付与されている場合、「…」はその用紙段階で展開が止まり未定稿となった場合、既使用用紙の場合を示す（《文語詩稿》では、既使用でない赤野用紙に起稿したもので、定稿に至ったものがない）。

図表①

展開0	▽原稿用紙・鉛筆開始・了なし稿	
丸善	↓無野	↓既24 ↓定稿
丸善	↓扇面	↓既22 ↓定稿
		ポランの広場 種山ヶ原

丸善は丸善特製二用紙。扇面は昭和五年八月花巻農学校卒業生に与えられた。

展開1	▽赤野・鉛筆開始・了稿	
赤野	↓無野	火の島

・三原三部手帳が発発である。

展開2	▽26系・鉛筆開始・了稿	
26系	↓22系	↓定稿
26系	↓雨ニモ	↓定稿
26系	↓22系	↓定稿
26系	↓22系	↓定稿
26系	↓既22	↓定稿
26系	↓	↓定稿
26系	↓	↓定稿
		腐植土のぬかるみよりの照り返し 悍馬 心相 月の鉛の 四時 訓導

・雨ニモは雨ニモマケズ手帳。  
26系用紙開始稿には、「冬のスケッチ」によるものが多く、散佚した「冬のスケッチ」によるものもあると思える。

展開3	▽無野・鉛筆開始・了稿	
無野	↓22系	↓定稿
無野	↓22系	↓定稿
無野	↓既24	↓定稿
無野	↓	↓定稿
無野	↓	↓定稿
無野	↓22系	↓定稿
		岩手公園 祭日 塔中秘事 車中 県道 八戸

無野用紙開始稿には、装景手記・東京・文語詩篇などのノート類、歌稿〔B〕などに素材・題材を求められている場合が相当数ある。

展開4 ▽24系・鉛筆開始・(了稿)

24系

↓既26 ↓洋紙B ↓碎箋?

22系 ↓定稿

24系

24系

↓22系

老農

雪とひのきの坂上に

雪峽 ほか

洋紙Bは詩稿用紙と紙質が異なる。碎箋は東北碎石工場花巻出張所用箋。洋紙B ↓碎箋の位置づけは仮定。

展開5 ▽無罫・インク開始・(了稿)

無罫

無罫

↓22系 ↓定稿

氷雨 ほか  
樹園 ほか

展開6 ▽22系・インク開始・(了稿)

22系

↓22系

佐罫 ↓定稿

22系

22系

↓22系 ↓定稿

既使用 ↓定稿

22系

打身の床をいできたり

黄昏 ほか  
硫黄 ほか  
早春 ほか  
秘境 ほか

佐罫は佐藤益三商店製赤罫和半紙。既使用には赤罫と22系の詩稿用紙の場合がある。

こうした整理の結果現われてくるのが、どうやら五つの階層である。その外部的な特徴をまとめてみると、

I プレ稿段階

丸善などの用紙上に鉛筆起稿。符号なし。

II 初期稿(前)段階

26系・無罫・24系用紙上に鉛筆で起稿。多くの稿に(了)印。

III 初期稿(後)段階

無罫・22系用紙上にインクで起稿。多くの稿に(了)印。

IV 再編稿段階

22系・既使用紙上に展開。なかに鉛筆や赤・藍・青インクの(写)印あり。

V 定稿(集)

定稿用紙に藍インクで清書。

という具合だ(以下、場合によってブルーブラックインクを藍、藍インクと表示する)。つまり、五段階の過程を経て成立してゆくのが、《文語詩稿》ということになる。ここでは、その前半、三段階についてその時期を推定しておきたい。

第I段階。詩稿専用の赤野用紙、または既製の原稿用紙である丸善特製二に鉛筆で起稿したが、〈了〉印は与えられなかった。《文語詩稿》における〈了〉印付与段階以前、いわばプレ稿段階、とでもいえようか。このうち、新たな詩稿専用となる無野用紙に継承／展開して、〈了〉印が与えられる、というパターンである。赤野用紙による「火の島」は、その素稿段階(『三原三部手帳』)からいえば、二八(昭和三)年以降の起稿である。丸善特製二用紙の「ポランの広場」は、用紙が書簡の反故でもあり、書簡使用例の多い二九年に起稿した可能性がある。要するに、第一段階に相当するのは二九年以前との推定が可能ないように思える。まさに書簡248に記された「仕事」に相当するものだ。

第II・IIIの段階。三〇年前後から、無野・黄野26系・黄野24系という、赤野用紙に次ぐ、いわば第二世代の詩稿用紙上に、文語詩の起稿が本格的におこなわれる段階であって、開始した用紙の段階で〈了〉印が与えられる、という実態がある。それに対して、IV段階以後にはその開始稿に〈了〉印が与えられることはない(一篇だけ、「ポランの広場」最終草稿に横線を伴う大きい〈了〉印が与えられているが、これは〈写〉の意味と考えられる。新校本全集校第七巻異参照)。したがって、その展開実態も併せみると、無野と黄野の詩稿用紙への起稿から〈了〉印付与に至るものが、初期稿といつてよい。

ただし、〈了稿〉以後の、同一用紙上の展開稿については、初期稿段階での改稿か次段階のものか、特定は困難で、同一紙上II同一段階で必ずしもない。また、〈了稿〉以後、初期稿段階のなかで別種用紙にまで展開したものは少ない。

なお、口語稿にほぼ専用されていた24系用紙が、八月の書簡に転用されるという状況を見ると、24系用紙の文語詩流用はその頃からか、と思う。もちろん24系用紙の口語稿への使用開始はもっと早いとみるべきで、その点では26系用紙が、ほぼ文語詩に、しかも『「冬のスケッチ」』の《文語詩稿》化に専用されているところから、その使用は24系の口語稿の開始時期に並んでいたのではないかと、少なくとも、24系用紙の文語詩流用よりも相当早い時期におこなわれたはずである。

図表②

時期	形成段階	詩稿用紙・符号
二九年	プレ稿	赤野・丸善など〈了〉印なし
三〇年前後	初期稿〔前〕	26系・無野・24系
三〇年前後	初期稿〔後〕	〔前・後〕〈了〉印あり
三一年前後	初期稿〔後〕	無野・22系

黄野詩稿用紙の原紙である無野用紙は、『(冬のスケッチ)』以外の素材を《文語詩稿》化してゆく傾向があり、三〇年からの形成とみる『文語詩篇ノート』の題材とのかかわりも深いから、26系用紙にほぼ並行して用いられていたか、と考えられて不思議でない。とすれば、26系・無野用紙を用いた(了稿)群の形成は、三〇年の夏よりも早く、あるいは春にはもう始まっていたか、と推定されるのである。

ところで、図表②に示してみたが、(了)印付与という事態を共有していながら、この初期稿段階をあえてふたつに分けて考えられるとした、それは、起稿に用いられた筆具が、鉛筆による開始の場合(無野・26系・24系)とインクによる開始の場合(無野・22系)とに、はっきり分別されるからだ。つまり、この段階の詩人の書記する意識のなかでは、起稿する筆具によって、その前後が分けられている、とみえるのである。その分別がどのようなことからきたのかは、起稿以後の手入れにも多種の筆具を用いてゆくその複雑な実態と併せて考えるべき課題だが、本稿ではその複雑な現状を整理する余裕がなく、保留しておきたい。

ただ、その時期的区分については、「後」段の開始時期というのが22系用紙の使用開始時期にほかならないから、書簡流用の事実からみて三一(昭和六)年前後からか、と推定する。

3

さて、もう少し「仕事」の内実を迫る。

1項に掲げた書簡群の記述を、あらためてまとめてみたのが図表③であるが、こうしてみると、三〇年二月、「すっかり療って仕事して」(書簡255)いる、ということばが気にかかってくるのである。

二月の「日中は大部分机に向って居れる」(書簡256)状況ともなれば、詩人がすでに、この頃にはなにほどかの創作活動をおこなっていた、と推理しようとするのは自然なことと思える。そうした推理をふまえてみると、その前年、二九年の後半あたりから、創作のための前哨戦があった、ということはあつていい。「文語詩の創作をはいはじめた」という堀尾青史の推定も、そういうことであつたか、と思う。ただ「文語詩の創作」というのが、どのあたりを言いついていいるのが、気にかかるところだろう。そういう意味で、「小仕事」

図表③

年・月	病 態	生 活	仕 事
二九・九	病勢怠る		多少の仕事
・一二	ほと、快癒	床中	小仕事

・ 一	もう癒る	起きる	・ 仕事
・ 二	すつかり癒る	・ 机に向う	肥料設計
・ 三	・ 起きる	・ 一日起きる	風にあたる
・ 七	すつかり平常	・	苗床いじり
			小園芸店番

と宮沢賢治が示した二九年の認識は、まさにそのもの、だったのではないか。本格的でない、ちよつとした準備、心づもり、という作業である。では、その「小仕事」——いわば準備的段階を経て、やがて詩人がさぐりあてようとしたものはなにか、ということになる。それを示唆しているのが次の、沢里武治に宛てた八月の書簡272のようだ。

今はすつかり常態に復し、今年中だけ豊沢町で店を手伝ったりいまままで書いたものを整理したりしてゐるつもりです。

この「いまままで書いたものを整理」するなかに、たとえば心象スケッチ——口語稿の草稿整理があつたのは、まずまちがいない。『春と修羅第二集』は、再編に向けた膨大な作業が『文語詩稿』のプレ稿段階にもおこなわれはじめていた。この八月頃に「いまままで書いたものを整理」しているとすると、その『第二集』稿に加えて、赤罫用紙↓24系用紙と展開してゆく『春と修羅第三集』の編集も加わつていったであらう。

図表④

作品・時代	学生時代	教師時代	協会時代
書いたもの	歌稿〔B〕	〔冬のスケッチ〕	三原三部・装景手記（手帳）

そうした口語稿の「仕事」が考えられる以外にも、図表④のようなものが、詩人の机上に「整理」の対象としてあつた。実際に、それらにも「整理」の手が入ってゆく。『冬のスケッチ』と『歌稿〔B〕』に対しては、鉛筆による本文手入れ。その始発を、プレ稿段階にみるべきかどうか。また、手帳から発展した『三原三部ノート』・『装景手記ノート』の形成があり、歌稿あるいは散逸した手帳やノート

から東京体験を集積する『東京ノート』の作業がある。これらは、たぶん三〇年には成立している（『新校本全集』第十三巻下校異）。これらノート群への手入れ作業を、三〇年の段階にみるべきか、どうか。

その調査に向かう余裕が私にはまだないのだが、『冬のスケッチ』と『歌稿（B）』の鉛筆手入れは多く文語詩化であり、ノート群の本文も成立後には赤インクなどでやはり文語詩化の手入れがあつて、いずれにも、初期稿「前」段階の（了稿）として重なってくるものが存在している。編集のさなかにある『春と修羅』の第二集・第三集に関連する《文語詩稿》も、この時期いくつか出てきている。少なくともこうした作業が、二九年末から三〇年にかけて継続的にこなわれていった「整理」の、一端であつたらう。

そう考えると、二九年末に「床中ながらこれ小仕事もいたし」といったなかに、創作——《文語詩稿》にかかわることがあつたと推定するのはやはり自然なことだ、と思う。たとえば、「いままで書いたもの」を素材（原料、材料）または題材にして、初期稿「前」段階に成立した（了稿）は、図表⑤のとおりだ。

図表⑤

	題材源／用紙	
	無 野	26系 24系
歌稿（B）	3	2
冬のスケッチ	・	15
第二・第三集	2	1
手帳ノート群	4	・

▲無野に歌稿（A）の1篇含む。24系に老農は含まず。

▲24系に推敲段階の題材化をした雪峽を含む。

▲無野に詩ノートの1篇含む。

これを見ると、「いままで書いたものを整理」する作業のうち、《文語詩稿》化は、素材への手入れを果たしながら、詩稿用紙上に少しずつすすんでいった。それは、素材群自体が過去の記録を集成しているものだったから、おのずと、学生時代以来の自分史を形成することにつながってゆくのである。なお、ここで『冬のスケッチ』の《文語詩稿》化だけが異様に突出していることに、気づいておきたい。

4

この《文語詩稿》初期段階を通じて、重要な役割を担うことになるのが、『文語詩篇ノート』である。これもまた、「いままで書いたものを整理」する、その仕方のひとつ、とみることがができる。

これには、表紙に「文語詩篇」と書きつけてあり、内容は「1909」年から「1930」年に至る、それぞれの年のいくつかの出来事を記し、たぶんそれを素材／題材とする文語詩の制作を見とおすものとしてあつた。と同時に、必然的にそこには構築すべき自分史の見



取り図も立ちあがってゆく、というものだった。さきの八月書簡にびたりと響きあう「八月病氣全快」を最終記事に置くもので、たぶん三〇年に入ってから形成され、秋にはいったん成立、そのち冬頃から増補を加えながら三一年夏に至るまで、詩人はこれによって《文語詩稿》初期稿制作の〈針路〉をとりつづけてきた、とみられる。

ただし、自分史構築を試みよう、というその原型は、すでに『御大典記念手帳』のなかにあった。「明治四十三年」から「大正二年」に至る中学時代、そこから「昭和四年」へとどぶ、ほとんど空白だが年代記への意図だった。この手帳は「昭和四年の記入と推定する方が妥当であるかもしれない」（『新校本全集』第十三巻上校異）とするもので、すでに二九年には半生を再現しようとする意識が官沢賢治に芽生えていた、ということになる。

そのような、過去を見つめよう、という作業は、実際には官沢賢治の内部においてすでにもうはじまっていたことが、書簡群の文面に現れている（以下、書簡における傍線は、島田）。たとえば、三〇年二月に、

殆んどあすこ（羅須地人協会 島田注）でははじめからおしまひまで病氣（こころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした。どうかあれらの中から捨てるべきははっきり捨て再三お考になつてとるべきはとつて……（書簡258 伊藤忠一宛）

とあったし、また、前出の書簡259には、「私は今まで少し行き過ぎてゐたと思ひます」ともあった。さらに、前出、四月の書簡260で次のようにも記していたのだ。

私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になつてしまつたこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。

これらは、ちょうど『御大典記念手帳』が記述をとばした、辞職した農学校や挫折した羅須地人協会の時代を、反省しているのである。辞職や挫折という結末に至る時代をふりかえるという、そのつらい踏み込みに、注目しておきたい。そうした内省的な作業のひとつが、初期の文語詩制作の意図だった可能性もあるからだ。ただここで明らかなのは、自らの半生を素材／題材とした、いわば自分史を構築するかのような文学的企画を、「文語詩篇」と詩人が命名し、ノートに記したことだ。

ところが詩人には、それに重なつて、

文語「スケッチ↓詩篇原形」（未定稿）／自明治四十三年／至昭和五年

との認識があった。この推敲メモの意味として、詩の完成度の視点から、文語詩篇とはまだ命名できない、文語スケッチ、それをもとにした文語詩篇の原形、というべき段階のものがある、そうした受け取り方がまずある。けれども抹消された、文語スケッチ、という呼

称は、完成度からでなく、文語詩篇の命名以前、すでに存在し展開していた文語形態の作品を指名したものと、というふうにも読める。

そうであれば、初期稿「前」段階に、『冬のスケッチ』の《文語詩稿》化が、26系用紙上に集中していた現象も、「スケッチ」という同じ認識からいえば、やや合点もゆく。それは、素材源の別によって用紙が異なるということでもある。つまり、大きくふたつのながれが、初期稿「前」段階の、当初の制作現場にはあった、ということを示す。

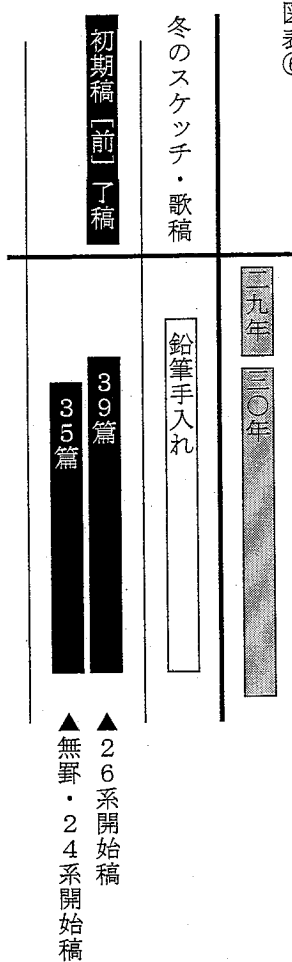
ひとつは、『冬のスケッチ』を主たる素材源とする26系用紙稿群（後述する）で、いまひとつは、『歌稿（B）』を主に、『三原三部手帳』『装景手記ノート』『東京ノート』あるいは『春と修羅第三集』『詩ノート』などからも題材や素材を得た無野用紙稿群であった。それが三〇年秋までの『文語詩篇ノート』成立に至る間、わずかだが、24系用紙上で『冬のスケッチ』『歌稿（B）』それぞれを素材として「了稿」が成立した。ここに、ふたつの源流が落ち合ったかたちだ（注4参照）。

こうした過程に並行して、『文語詩篇ノート』は形成され、一応の成立をみたのである。とすれば、『文語詩稿』初期稿の形成と、このノートの形成・成立の間に、相互交流があったろうことも、推理してよい。たとえば、すでに具体的な表現を与えられつつあった草稿のほうから題材を得て、ノートの一項として採用され、空白の年次にその鍵語を書き加えた場合もあったはずである（注10の島田論を参照されたい）。

5

こうした初期稿「前」の、草稿のながれを概念的に示してみたものが、図表⑥である（各事項について、その過程の、開始と最終の時期はおおよそその位置どりに）。ここで、『冬のスケッチ』や『歌稿（B）』とともに、題材源として、『文語詩篇ノート』も立項したのは、このノートの本質的な性格が、自分史を見とおすかたちでとりあげるべき事件（題材）を時系列に示した、文語詩制作の企画書としての役割を担うことにある、とみるからだ。

図表⑥



では、この段階で、どのように《文語詩稿》化が果たされたのか。この時期に成立した作品を、可能なかぎり、宮沢賢治の自分史のなかに具体的に位置づけてみる。

まず、その半生については、図表⑦のように、5区分に設定する。この区分は、中学・盛岡高等農林専門学校に学んだいわば受動の時代、高農研究生から出京に及んだ猶予<sup>キョリヨ</sup>とも呼称すべき時代、農学校教師や羅須地人協会を経ながら、農業技師として生きようとしはじめたいわば自立に向かう時代、と、大きく3区分にもできる。

図表⑦

事項/時代	中 学	高 農	猶 予	教 師	技 師
生活の拠点	盛岡中学校	浪人・盛岡高農	研究生・	花巻農学校	羅須地人協会以後
時 期・始	09・4	14・4	18・4	21・12	26・4
・ 終	14・4	18・4	21・11	26・12	30・4
	3	3	1	3	8

なお、猶予<sup>キョリヨ</sup>の時代とは分かりにくいのが、短い期間ながら、進路/生き方にかかわる悩みを深くして、濃厚な内的時間が流れていた、とみえる。地質調査で農山村の現実に出会い、農蚕講習所で教師体験も得た。法華経信仰を激しい行動で示したこともある。父との対立も絶え間ない期間だった。

図表⑧

	中学・高農	猶予	教師・技師
無 野	4	4	7
2 6 系	1	1	1
2 4 系	1	1	1
割合	21	6	8

次に、初期稿「前」の、詩の場の時代推定については、宮沢賢治の伝記的な事実を傍らに、素材段階から（了稿）前後の本文を勘案し

ておこなつてみた。

このなかには、『文語詩篇ノート』の題材を確かに踏まえて、詩篇用紙に起稿したものととして、10篇程度を推定できる。ただ、『冬  
のスケッチ』（散佚した紙葉からの26系用紙への《文語詩稿》化が相当数あった、と私は考えている）を素材とした26系用紙鉛筆開  
始稿は、それと分かる題材である、という場合にのみ時代配分に採ることとした。

したがって、時代不明の作品が30篇を超え、この分析は傾向をつかむ程度だ、という自覚はしておきたい。具体的な作品については  
注に示したので、各時代の作品数を用紙別に、図表⑧として掲げておく。作品の時代配分の割合は、3区分の、大づかみで示すことにし  
た。

ここには、（いままで）の自分を追想する作業に入ってから、『文語詩篇ノート』という作業の企画表が成立するまでの間、学校や地域  
という社会に立ち向かつていった教師・技師時代が圧倒的だ。三〇年の宮沢賢治は、健康の回復に向かつており、再び社会に立ち向かう  
ことを考えていたわけだろうから、追想の対象が、社会に対峙した時代のものに傾くのも、ある意味当然のことであつたらう。ひとつに  
は机上のリハビリテーション、とでもいうべき社会復帰に向かう精神的な準備運動という意気込みも、そこにはあつたと思える。

6

このように、『文語詩篇ノート』は、初期稿「前」段階にあつて、（いままで）の素材から文語詩を制作する過程から出てきたもので、  
まずノートがあつた、のではない。これは、種々の「いままで書いたもの」に対して手を入れていた傍ら、それを集約するかのよう  
に編年体の自分史メモというかたちで、記憶をととのえてゆく。それが、疾中の影響下にまだある時期だから、このノートは「文語詩篇」  
によって懐旧の自伝を成すのか、と思いがちだ。だが、それはたぶん違ふ。結果的に詩篇による自伝をかたちづくるとしても、決してそ  
れは疾中の懐古癖から出たものでない、とみえるのである。

というのは、三〇年四月、前出、沢里宛書簡260にはこうも書かれてあつたではないか。

こんどはけれども半人前しかない百姓でもありませんから、思ひ切つて新らしい方面へ活路を拓きたいと思ひます。期して待つて下  
さす。

宮沢賢治の過去——農学校からの途中退場、羅須地人協会の中絶というものをふまえると、これはほとんど、決意の宣言、のようにみ  
える。「活路」というのも、「こんどはけれども半人前しかない百姓でもありませんから」、甘えることができるが、一人前として、けし  
て挫折することは許されないもの、という、まさに起死回生の決意から来た、と読むことができるはずだ。だが、こうしたことは、あ

る日突然口をつく、とは思えない。これは、羅須地人協会活動の途絶をふまえて、小康を得るとともにふたたび熟成させてきた志、というべきものではないのか。そうした再生／再起に向かおうという過程にある者が、愛惜にしろ美化にしろ、懐古の自伝に向かうはずもない、と思える。

では、「いままで書いたものを整理」して、自分史を構築するとは、どういうことなのか。そのとき、かつて『春と修羅（第一集）』を出版したのを弁明して、二五（大正一四）年に詩人が記した次のようなことばを、思い起こす。

或る心理学的な仕事の仕度、いろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。

（書簡200 二月森佐一宛）

あとで勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました。

（書簡214a 一二月岩波茂雄宛）

心象スケッチという作業は、仕事や勉強の「仕度」だった、と繰り返しいのである。農学校教師というのは、宮沢賢治にとって、まだ仕事や勉強でなかった、ということだ。それならば、もし〈ほんとうの仕事や勉強〉を前にしたとき、これらの「仕度」はどう生かされてくるのか。「仕度」を生かすためには、どう段取りをつけてゆくのか。たとえば、羅須地人協会に入ったとき、心象スケッチ集である『春と修羅第二集』の再構成に手をつけはじめたこと、なにか関連があるのだろうか。

そのようにこだわって考えていると、ひとつの仮説が私のなかに現れてくる。「新しい方面」すなわち「仕事」に向かうための〈仕度〉として、「いままで書いたものを整理」しよう、というのではないのか。「いままで書いたものを整理」するとは、これまでの自分ありようを精査して、それについて内省を深めることだった、とみえる、というものだ。それはたとえば、

あれらの中から、捨てるべきははっきり捨て、再三考<sup>て</sup>てとるべきはとる。

（書簡256）

といった仕方、自分の内部をととのえてゆくことではなかったか。自らの過去のありようを精査し、内省／自省することによって、挫折を許さぬ盤石なありようをととのえて、〈ほんとうの仕事〉、すなわち「新しい方面」に立ち向かおう、というのである。

そのとき、精査し、内省／自省する方法／手段として選ばれたのが、文語という詩形式であった、と思う。なぜ文語詩なのか、とは、たいへん難しい課題なのだが、ことばを他のことばに変換する過程は、もともと反省的な態度をうながすものだ。日常不断に用いる口語あるいはその地域語によって醸成された思想を、しだいに用いられる場も限定され、非日常的なものになりつつあった文語体に定着させるには、それなりの抵抗が生ずる。詩人がその抵抗を利用して、論料としての口語稿や短歌、短唱などから選り出された、過去の場を、文

語化と定型化によって再現する過程で対象化し、自らの過去の精査をより客観的におこなうその過程で、内省／自省を深めようとした、ということではなかったのか。

ところで、文語詩篇ノートの最終記述が、

1930／八月 病気全快

と、実際のノート作成の（現在<sup>いま</sup>）を指定しているのは、「新しい方面」にこれからいつでも踏み出せるように、という思いがあったからだとみえる。「病気全快」というのも、まさに心身ともに「全快／全開」であることを精査の結果として宣言し、この〈仕度〉を閉じようとする予定表であった、とも考えられてくる。実際、先の沢里宛書簡には、

もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考へます。

（書簡260）

ともあって、なんとしてでも「新しい進路」を獲得するのだ、という焦りにも似た思いが、行間にはにじんでいるようにみえる。だから、三〇年の秋頃から、工夫した肥料の販売をとおして農村の土壤改良をすすめることができる、東北砕石工場の仕事に従事しようかという気持ちを表明し（書簡273）、徐々に固めてゆく（書簡274、277）。

農学校や羅須地人協会と異なって、この仕事は宮沢賢治にとって決定的に「新しい」のは、東北砕石工場技師という専門的な職業人として、ひとりの自立した社会人として、石灰岩抹を用いた肥料設計によって土壤改良を表現し、岩手／東北の農業改革を着実にすすめる、ことにある。そして、土壤改良の進行は肥料が売れることもまた意味している。つまり、社会的にも経済的にも自立を果たしうる、ということにおそらくあった。

しかしこの時期は、断片的だった整理作業に、『文語詩篇ノート』が成立して、その構想を針路に、（いままで）を精査してゆこうとする、周到な〈仕度〉の環境が整いはじめたばかりだった。三〇年冬から三一年夏にかけて、文語詩篇ノートには、その一次本文に対して赤インクとブルーブラックインクによる題材の増補——二次本文の形成がおこなわれてゆく。その段階で、ノートは自分史構築にあたって、その題材の時代配分を均衡化してもいる（このことは、後の節で詳しく述べる）。あるいは、『冬のスケッチ』や『歌稿（B）』にも、その鉛筆手入れ段階だけでなく、新たな赤インク手入れ段階を三一年には加えていた。その〈仕度〉は、こうした題材や素材を詩稿用紙に起稿、文語定型という作業過程のなかで、自分史の精査を果たしながら、宮沢賢治という存在の内省をますます可能にしている。

（注）

- 1 テクストは、原則として新校本宮澤賢治全集によるが、それに異なる私見はその都度示す。なお、校異の「下書稿(一)など、括弧をつけた逐次稿表記について、括弧の表示は省いた。以下、同。
- 2 木村東吉『宮澤賢治《春と修羅第二集》研究―その動態の解明―』(溪水社二〇〇〇)で、氏は、赤野用紙で「一九二六年には一次清書稿の少なくとも一部が成立していた」、そして赤野用紙二次清書稿をふまえた作品として、一九三〇年一月発行の「文芸プランニング」第三号に掲載された次のものを指摘する。

発表形態

作品番号と題

空明と傷痕	二	空明と傷痕
遠足許可	三二九	〔野馬が〕
住居	三七八	住居

なお、このとき、『春と修羅第二集』の作品「二〇六八〔エレキや鳥が〕」も発表されており、『詩ノート』からの発展形とみられ、三〇年には『第三集』の整理もまたおこなわれていたことが推定できる。

『春と修羅第二集』の整理については、少なくとも「いままで書いたものを整理」する点では同様だが、『第二集』の整理・再編にすでに着手していたとみられる二八(昭和三年九月の書簡に、「八月に病んだので実家に帰ったが、島田注)また根子へ戻って今度は主に書く方へかゝります」(沢里武治宛書簡243)といひ、また二月の書簡には、「甚分外乍ら新なる時代の芸術の方向の探索に全力を挙げ居り」(高橋慶吾宛書簡245)ともあり、(仕度)にしたスケッチを文芸上の(仕事)として昇華しようとする自覚のなかに、『第二集』の存在はあったかともみられ、『文語詩稿』の初期における整理とは差異がある、とみるべきか。

### 3 宮沢賢治の用意になる専用の詩稿用紙は、次のとおり。

用紙	書式	もつとも早い書簡使用時期
赤野	28行赤野	二五・一一 書簡214a
無野	野なし白地	三〇・八・九? 書簡287a
26系	26行黄野	書簡流用なし
24系	24行黄野	三〇・八 書簡272
22系	22行黄野	三〇のうち? 書簡288

無野用紙は、書簡287aが高知尾智耀に宛てたものとすれば、三〇年八月下旬から九月の初めまでの間にも書かれた可能性がある。これは野紙の原紙であるから、黄野26系・黄野24系用紙に先駆けたり、あるいは、ともに現れたとして、不思議でない。

なお、以後、黄野用紙はその行数による系列として示す。

26系・24系の用紙については、その使用開始の先後は不明である（黄野は両面野・片面野があるので、系と表記）。だが、26系が『冬のスケッチ』の文語詩化に専用され、24系が第三集に専用されているところから、この2種の野紙の作製と使用は、時期的にさほど離れていない、と推定する。ただ、三〇年前後に第三集に専用されたと思われる24系が書簡や文語詩に転用されるのは、少し後れる、と考えられる。すると、書簡272が八月下旬であるから、26系も夏よりも前に、もう使用されていた可能性はある。詩稿用紙の流れについては、すでに杉浦静に指摘がある（『春と修羅』の行方）、『宮沢賢治 明滅する春と修羅』所収、蒼丘書林一九九三。22系用紙は、三〇年のいつ頃か、書簡288の推定は弱い。だが、三一年一月の書簡292があるので三〇年の冬には、詩稿に用いられた可能性はある。

4 用紙の位置づけについては、『新校本全集』第七巻校異ならびに第十六巻上草稿通観篇を参考として、一部私見によったところもある。（了）印は、26系/無野/24系↓22系、という詩稿用紙の流れにしたがい、開始用紙の本文右肩に与えられると、原則として、以降の本文展開に対してはみられない。開始用紙稿にふたつの（了）印をもつ、という例外は、『祭日（一）』『県道』（無野）・『郡属伊原忠右エ門』（26系）・『老農』（24系）の4篇。三〇年から三二年にかけて付与されたもので、『文語詩稿』では初期稿段階にあたる。詩稿用紙への開始稿・手入れ過程で与えられる場合がほとんどであるとみられるが、『水雨虹すれば』（小さきメリヤス塩の魚）「歳は世紀に會つて見ぬ」（無野）・「卑屈の友らをいきどほろしく」（26系）・「宗谷（一）」（22系）などは、用紙のオモテ稿に次いでウラに展開した稿へ与えられている。この符号は「ある段階の詩形を完了した意味であろう」（『新校本全集』第七巻校異）という。手入れをしたその筆具で与えられた場合が多い。けれども、本文形成にかかわらない筆具で与えられる場合もあり、付与の現場が分かりにくい。ただ、初期稿「前」では、同一素材源あるいは同一用紙による草稿グループ・同一筆具による一括手入れ段階、という条件を想定すると、説明が一部可能ではある。試みに、24系用紙・鉛筆開始稿群を、同一用紙による草稿グループとみて、（了）印付与の現場を推理しよう。次の表が手入れ実態を整理してみたものである。手入れは、4種の筆具がそれぞれ草稿群に一括手入れを試みた、4段階とみる。なお、「丘」の赤インクの最終手入れは、この稿だけの追加手入れとみる。白ぬきが（了）印付与の段階。

題名/手入れ	素材/題材	鉛筆1	赤イ	藍イ	鉛筆2	赤イ
恋	（冬のスケッチ二〇・二二）	鉛筆 ↓	赤イ ↓	藍イ ↓	鉛筆 ↓	赤イ ↓
雪峽		鉛筆 ↓	赤イ ↓	藍イ ↓	鉛筆 ↓	赤イ ↓
機会		鉛筆 ↓	赤イ ↓	藍イ ↓	鉛筆 ↓	赤イ ↓
雪とひのきの		鉛筆 ↓	赤イ ↓	藍イ ↓	鉛筆 ↓	赤イ ↓



われらひとし 歌稿B10、明四四く・文語詩篇ノート1912 鉛筆 ↓ 赤イ ↓ 鉛筆 ↓ 赤イ ↓

老農 冬のスケッチ四九 鉛筆 ↓ 鉛筆 ↓ 鉛筆 ↓

病中幻想 春と修羅第三集一〇七六 鉛筆 ↓ 赤イ ↓ 鉛筆 ↓

丘 歌稿B179、大三く・文語詩篇ノート1914 鉛筆 ↓ 赤イ ↓ 鉛筆 ↓

○は、その筆具での一括手入れの段階にあつて、読み直しのみで本文手入れを受けなかったものであり、**●**は読み直した結果手を入れることなく、(了)印のみを与えたものとみるのである。たとえば「老農」の場合、開始筆具の鉛筆で詩句2行の追加などの手入れをしたのち、赤インク手入れ段階を通過し、ブルーブラックインク手入れ段階で本文右肩に(了)印のみ付与、その後、「太い鉛筆」での手入れ段階で題名をつけるなど大幅手入れをして題の上に(了)印を付与した、というふうである。ちなみに、一括手入れ「鉛筆2」段階の鉛筆の様態について、新校本全集第七巻校異は次のようにいう。

恋 「濃い」鉛筆

機会 「別の濃い」鉛筆

雪とひの 「鉛筆」とのみ。

われらひ 「太い」鉛筆

老農 「太い」鉛筆

病中幻想 「別の」鉛筆

丘 「太い」鉛筆

「雪とひのきの坂上に」の原稿コピーでは大きくやや太いか、と見える。「病中幻想」も原稿コピーをみると、鉛筆1に対して鉛筆2は「濃い」ものである。なお、展開7における既使用は、詩稿用紙の全種に及ぶ。それぞれの作品例を掲げておく。

赤野 上流、ほか

無野 雪うづまきて日は温き、ほか

26系 白金環の天末を、ほか

24系 秘事念仏の大師匠(一)、ほか

22系 来賓、ほか

5 起稿した用紙の段階で(了)印が付与されない、また歌詞稿である、という二点で共通するのが、26系用紙に鉛筆で開始された(弓のごとく)である。この作品は『「冬のスケッチ」』から来ている。すると、26系用紙による『「冬のスケッチ」』の文語詩化は、このプレ稿段階にも始められたのかもしれない。それは、『「冬のスケッチ」』の鉛筆による本文手入れが二九年に始まった、という可能性も示す。なお、赤野用紙を用いた了なしの歌詞稿に「しのため春の鳩の火を」「大菩薩峠の歌」がある。これ

もブレ稿段階に『三原三部手帳』『同ノート』から展開したものだっだろう。

用紙	五	六	七	八	九	〇
----	---	---	---	---	---	---

丸善	4	1	2	6	2	7	9
赤野	2	1	4	2	1		

7 (了稿)(写印を共有しない場合)には、遺稿整理時番号No.1番(あるいは1番)が押されているから、これは初期草稿だとみられる。そこに着目すると、No.1番稿を複数もつ作品は次の4篇。

題名	稿↓No.1番稿
----	----------

岩手公園	無野↓22系(断片)
老農	24系↓既26↓洋紙B
沃度ノニホヒフルヒ来ス	22系↓22系
水植松にまじらふは	22系↓22系(断片)

8 初期稿「前」「後」の起稿条件を有しながら、(了)印を与えられなかったものが、次のとおり。

なお、遺稿整理時番号は、用紙左上隅に朱のスタンプで押されたゴム印番号をいう。文圃堂版全集の編集時とみられる整理番号で、遺稿はいくつもの山に分かれていて、その山ごとに同じ番号を付したものである。若い番号ほど初期稿という実態がみえる。

題	用紙	筆具	遺稿(継続稿)
---	----	----	---------

公子	無野	鉛筆	4番(なし)
紀念写真	無野	鉛筆	No.1番(4番)
弓のごとく	26系	鉛筆	無番(なし)
涅槃堂	無野	インク	無番(5番)

表示は開始稿の段階。「遺稿」は遺稿整理時番号で、「無番」は番号が付与されていないもの。(継続稿)は、開始稿用紙から別の用紙上に展開する詩稿で、(なし)は開始用紙上でのみ詩稿が展開したもの。

9 「前」段階の、春と修羅からの文語詩化とみられるのは、次のとおり。

春と修羅	用紙↓	文語詩稿
------	-----	------

一八一 一番稿 無 野 ↓ 早池峯山巔  
 三二二 一番稿 26系 ↓ 水部の線  
 一〇三三 一番稿 無 野 ↓ 遊園地耕作  
 一〇四五 一番稿 無 野 ↓ 田園迷信  
 一〇五一 一番稿 無 野 ↓ 電気工夫 黒塚洋子の指摘 『文語詩の森第二集』 柏書房二〇〇〇)

10 『文語詩篇ノート』の、本文形成に着手した時期が三〇年春頃で、成立は八月後半から九月の間か、と推定する。増補の二次本文がそののち、ややおいて、冬頃から三一年夏頃まで、三次本文の消し線は三二年以降か、とおおまかに推定する。島田「文語詩篇ノートの研究／成立過程篇」・「文語詩篇ノートの研究／本文形成篇」(『文語詩稿叙説』 附章に所収、朝文社二〇〇五)を参照されたい。

11 黒クロス表紙Bの赤インクによるメモ。この種の表紙は数種あるが、木村論はその使用開始時期を三〇年秋以降と推定している(注2に掲げた同書)。赤インクメモは、三二年頃か。

12 無野用紙鉛筆開始稿を次に一覧しておく。

題名	素材／題材として関連するもの	開始	了印筆具	遺稿
祭日(一)	・(文語詩篇ノート1910)	鉛筆	鉛題下青了	No. 1
瘠せて青める	文語詩篇ノート1910	鉛筆	鉛	2
講后	・(文語詩篇ノート1911)	鉛筆	赤	2
巡業隊	歌稿(B) 14、明四四	鉛筆	藍	No. 1
血のいろに	歌稿(B) 89、96、大三、文語詩篇ノート1914	鉛筆	赤	No. 4
岩手公園	歌稿(B) 652、655、656a、六七	鉛筆	鉛	No. 1
早池峯山巔	文語詩篇ノート1918・(春と修羅第二集二八一、1924)	鉛筆	鉛	No. 4
霧降る萱の	文語詩篇ノート1918	鉛筆	赤	No. 1
ながれたり	歌稿(A) 680、689、六七	鉛筆	藍	No. 1
農学校歌	稗貫農学校一覧表・(文語詩篇ノート1921)	鉛筆	鉛	No. 1
エレキに魚を	・(童話鳥をとるやなぎ、大一一)	鉛筆	藍	4
ポランの広場	・(文語詩篇ノート1924)	鉛筆	藍	1

燈を紅き町の  
 靄雲砲手  
 小さきメリヤ  
 車中 (二)  
 八戸  
 われらが書に  
 幻想  
 歳は世紀に會  
 田園迷信  
 塔中秘事  
 県道  
 火の島  
 春章作中判  
 山躑躅  
 われ聴衆に

▼無野詩稿用紙鉛筆開始ながら、(丁)印が付与されていない草稿

13 初期稿「前」段階に展開した詩篇の場面を時代別に配分し一覽する。もちろんこれは決定稿でなく試案である。個々の作品論が深まるなかで、訂正は大いにありうる。『(冬のスケッチ)』は、農学校の職員室を題材にしているところから、回想も含めて二二(大正一一)、二三(大正二二)年頃の記録と推定するが、佐藤勝治に「ある一冬の記録」説、『冬のスケッチ研究増訂版』、十字屋書店一九八四)もあり、それに立てば『(冬のスケッチ)』の《文語詩稿》は基本的に教師時代に入れてもよいか。だが、明らかになてがかりや内容(場面)がみえない場合、時代に組み入れなかつた。詩篇は最初に付された題名、括弧内に最終題名で示した。題名のないものは「・」。なお、注8の了なし稿3篇は保留した。

文語詩篇ノート1924	鉛筆	藍	No. 4
・(春と修羅第二集四〇一、1925?)	鉛筆	藍	No. 1
・(春と修羅第二集五〇八、1925?)	鉛筆	青	No. 4
・(岩手日日新聞)	鉛筆	藍	No. 4
文語詩篇ノート1926	鉛筆	赤	No. 1
・?	鉛筆	藍	No. 1
文語詩篇ノート1927	鉛筆	鉛	No. 1
春と修羅第三集一〇三三、1927	鉛筆	藍	No. 1
春と修羅第三集一〇四五、1927	鉛筆	藍	No. 1
・?	鉛筆	鉛	・
・?	鉛筆	赤	・
三原三部手帳、1928・文語詩篇ノート1928	鉛筆	鉛	No. 1
1928 (東京ノート)	鉛筆	藍	No. 1
装景手記ノート、1930	鉛筆	鉛	No. 1
・(東京ノート、1930)	鉛筆	赤	No. 1
歌稿 (B) 379、大五	鉛筆	了なし	No. 1
歌稿 (B) 116・117、大三	鉛筆	了なし	No. 1

時代	26系用紙	無野用紙	24系用紙
青田の中の商店(祭日(二))			

技師	教師	猶予	高農	中学
	春↓亡友(病技師(一)) 事務室(会計課) 職員室(職員室) おもかげと北上川(水部の線) 「・」(コバルト山地) 「・」(りんごのみきのはいのひ) 「・」(四時) 「・」(鐘うてば白木のひのき) 「・」(洪積の台のはてなる) 「・」(洪積の台のはてなる) 幻想(老いては冬の孔雀守る)		・?標本採集者(遠く琥珀のい)	
海光(八戸) 幻想(幻想) 遊園地工作(歳は世紀に會つて) 田園迷信(田園迷信) 火の島(火の島)	稗貫農学校精神歌(農学校歌) 「・」(エレキに魚をとるのみか) イーハトヴ農民劇団(ポランの広場) 電話(燈を紅き町の家より) 防電射手(電雲砲手) 「・」(車中(二)) 「・」(小きメリヤス塩の魚)	「・」(岩手公園) 「・」(早池峯山巔) 「・」(霧降る萱の細みちに) 「・」(ながれたり)	月緒しコビの砂(血のいろに)	青柳教諭を送る(瘠せて青) 講后(講后) 巡業隊(巡業隊)
嚙語(病中幻想)	施肥↓肖像(老農)		丘上恋望(丘)	「・」(われらひとしく丘にたち)

14 この仮説に立つと、『「冬のスケッチ」』を集中的に文語詩化する情況も、説明できるのではないか。『「冬のスケッチ」』の世界は、農学校教師に就いた時期を主たる題材にしている。それは、否応なく他者と交錯しそれにかかわる苦樂や妹トシの死に立ち会う、という激動のさなかにあつた、ということだ。だからこそ、新たな仕事の達成のために、その「仕度」として、もっとも苦惱し、いわば（自立）に向かつて歩み出した時期の自分を精査することは、これからの再出発とする宮沢に、必然であつたらう。その意味で、『「冬のスケッチ」』時代の26系用紙による文語詩化は特別な作業だつた、といえるのかもしれない。特別な、とは、トシの死によつて決定的に揺れた自らの精神史を集中的に見つめなおそうとした、という意味である。

15 『「冬のスケッチ」』の手入れ時期に関しては、島田「「冬のスケッチ」本文手入れ時期に関する覚書」『論攷宮沢賢治』創刊号一九九八・三）において考察している。

2節 『文語詩篇ノート』による針路

1

1節において、『文語詩稿』初期稿の「前」段階にかかわりはじめるとこのノートの発生について概略言及したが、これが『文語詩稿』初期稿全般に及ぼした影響について見とおし、このノートが重要な存在であったことをあらためて自覚しておきたい。

このノートの記述と、素材／題材上関係があるとみられる詩篇を試みに指摘し、ノートが初期稿に与えた影響の一端として、一覧のうちに掲げよう。その際、次のような符号で、その関係性の程度を示した。

- ノートの具体的な記事と関連する詩句がかなり認められる詩篇
- △ ノートの具体的な記事に相応している詩の場が認められる詩篇

右はノート記事が具体的な内容をもっている場合で、ノート記事に対する詩篇は、詩稿用紙上への開始形との関連性をみた。さらに、影響稿ではないかと想定したものを、「？」を付して提案した。それは、

- ・ 具体的なノート記事にほぼ相当するとみられる詩句が本文中に、一部でも存在している詩篇
- ・ 記事に具体性を欠くが、ノートが指示するその年月に相当する素材をもとに展開した詩篇

などである。いずれにしても仮説として試みた。今後、初期稿作品ひとつひとつの理解が、さらに深まってくると、この試みは訂正される余地が大いにある。

なお、『文語詩篇ノート』本文は、本書附章1・2節により提案したものを引用した。推定符号のあとは、定稿題名と(丁)印付与に至つたとみる下書稿の位置(原則として『新校本全集』第七巻校異による)を枠囲みの漢数字で示した。?稿には、さらにその想定のがかりとした素材／題材の所在を括弧内に示したが、ここでは、「B」を『歌稿「B」』、「東」を『東京ノート』、漢数字を『春と修羅』の第二・三集詩番号とした。

年	本文	初期稿「前」	初期稿「後」
1909 / 明四二年			
1910 / 明四三年			
鉛スケート			△氷上□ (B22明四四・一)
赤1棹			○岩手山巔□
2鉛岩手山山県頼威橋爪関			

<p>赤1 梓」岩手山麓の野炬火の余燼ノ黒き夜や野路行く人のたいまつ余燼を赤く散らす風かな</p> <p>赤1 梓」〔岩手山噴火口内にて橋爪の寂しき顔 藍2 ↓・〕</p>	<p>○瘠せて青めるなが頬は□</p> <p>? 祭日 (一) □ □ □ □</p>
<p>3 鉛 九月祭 first em.</p> <p>赤1 梓」</p> <p>4 鉛 二十三二十四日岩手越</p> <p>赤1 梓」 雨火山「弾 ↓・」 「塊 ↓・」 灰層ノ小岩井農場楠シヨン青柳先生ノパンを食みくる</p> <p>5 鉛 中津川洪水</p>	<p>△ 講后 □</p> <p>? 麻打 □</p>
<p>【1911 / 明四四年】</p> <p>7 鉛 八月島地大等</p> <p>【1912 / 明四五年】</p> <p>8 鉛 四月 中学四年</p> <p>9 鉛 五月 仙台修学旅行</p> <p>赤1 梓」 伯母ヲ訪フ松原濤ノ音曇リ日ノ磯ノ香</p> <p>赤1 梓」 伯母ト磯ヲ歩ム岩ハ洪積夕刻風落チタル海藻</p> <p>1 1 鉛 八月</p>	<p>○われらひとしく丘にたち (B10)</p> <p>明四四・一 (一)</p> <p>? 乾かぬ赤きチョークもて (B3)</p> <p>2 明四四・一 (一)</p> <p>? 製炭小屋 (B34 明四四・一)</p>
<p>【1913 / 大 二年】</p> <p>1 2 鉛 九月 桐下ニテ霧ノ朝</p> <p>赤1 梓」 村井高橋佐光</p>	<p>○盛岡中学校 □</p>
<p>【1914 / 大 三年】</p> <p>1 3 鉛 四月 卒業ヤムノ入院</p> <p>赤1 梓」 赭キ月山羊葉桜ノ「鸚鵡ノゴトク</p>	<p>○血のいろにゆがめる月は □</p>



14 鉛退院

藍2 ↓・

15 赤1 杵「いざや起てまことの恋に

16 藍1 盛岡へ再び出ル

【1915 / 大 四年】

17 鉛1 一月 教浄寺

赤1 杵「鐘うち鳴らす朝の祈り教浄寺の老僧 / おはりに法師声ひくく / 光明偏照十方世界つひに nannon を / こそ祈りけり次には鳴らす銅の鏡脉

18 鉛1 四月 高農一年

19 鉛 実習

【1916 / 大 五年】

20 鉛 一月

赤1 杵「報恩寺◎寒行に出でんとして / 銀のふすま◎晝の一燈◎警策 / ◎接心居士  
赤1 杵「品行悪しといふとも / なほこの僧のまなざしを見よ

21 鉛 十月

22 鉛 十一月

【1917 / 大 六年】

23 鉛 四月 高農三年 / 鉛 五月

【1918 / 大 七年】

? 公子 □ (B 116、117 大三・四) ? 丘 □ (B 179 大三・四)

? 恋 □

? 百合を掘る □ (B 144 ~ 146 大三・四)

? 夕陽は青めりかの山裾に ? □

○ 僧の妻面膨れたる □

? 遠く琥珀のいろなして □ (題名に標本採集者)

? 樹園 □ (B 238 大四・四)

△ 涅槃堂 □

? 記念写真 □ (B 379 大五・一〇)

? 霜枯れのトマト □ (B 401 ~ 404 大五・一〇)

? 沃土ノニホヒフルヒ来ス □ (B 466 大六・四)

25 鉛四月 藍1 地質調査

26 鉛五月

27 赤1 粹 「志戸平（関↓・）（給仕↓・）（をみ

↓・）泣く／老博士階段

藍2 ↓・」

28 鉛六月

赤1 粹 「権現堂山下なれば我を撲るといふか

藍2 ↓・」

? 岩手公園 □ (B 6 5 2 ~ 6 5 5 大 七・五)

○ 早池峯山 題 □

△ 霧降る 萱の細みちに □

△ 硫黄 □ (B 6 4 2、6 4 3 大六・七)

2

一八年まできて、次のように一九年の自分史記述が、空白状態に置かれている。それは、あるいは詩人自身による意図的な削除であったのかもしれない。

【1919 / 大 八年】 廃棄されたらしい頁の痕跡 (新校本全集第十三卷下校異)

破りとられたこの年は、私に区分した宮沢賢治の猶予時代、そのなかでたぶんもつとも下降していた時分であったと思う。それは、次の書簡の一節に明らかだ。

私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。

(書簡143、四月成瀬金太郎宛)

境忠一は、この年の生活ぶりや歌稿などのいくつかの作品を示して、「失意の時代であった」といったが、夏に集中する保阪嘉内に宛てたずいぶん激しい内容の書簡群をみても(書簡152a・153・154)、自らの身の振り方に懊悩し、どん底であがいているありようが浮かびあがる。それに、この年の初めには前年末からのトシ看護のことがあり、時期は不明ながら農蚕講習所の講師として教壇にも立つなどしており、そこに精査の対象とすべき「過去の出来事」がまったくなかったとは思えない。むしろその逆を思うのだが、「廃棄」の背景をを追うてがかりもいまはない。

以後の頁について、試みの一覧をつづけよう。

【1920 / 大 九年】

【1921 / 大 一〇年】

29 藍1 一月出京

30 藍1 四月

31 赤1 樺「国柱会外の面桜咲けるに／この建物の  
中ひえびえとして／山川智応氏のどをいたはり  
／行き来してある

32 鉛「六月

赤1 樺「↓・」

33 藍1 十二月花巻農学校ニ出勤

【1922 / 大 一一年】

34 藍1 二月

35 藍1 四月桜羽場藤井組入学

【1923 / 大 一二年】

38 藍1 四月新校舎ニウツル

職員室

△農学校歌

コバルト山地 (コバルト山地一九二二・二)

四時 (詩句に清原佐藤↓高橋二人、同期生の名)

くもにつらなるでこぼこがらす

(東一九二二・一〇八)

隼人 (B8015804大一〇

・四)

隅田川 (B810811大一〇

・四)

○国柱会

棕栢の葉やゝに瘞癰し

叔母枕頭

かくまでに

聖なる窓

われはダルケを名乗れるものと  
(以上東一九二二・一〇八)

39 藍1 八月樺太行

【1924 / 大二年】

41 赤1 三月 赤1 樺「何故シカク機嫌悪キカ(白藤

ヨ)

42 藍1 四月 (川村加藤ノ組入学)

43 藍1 種山行

44 藍1 八月 田園劇

45 赤1 樺「放蕩書記ノ黒沢尻ヨリノ電話ノ黒エリ  
ノ女ナレニココロシクジリテ

【1925 / 大二年】

46 藍1 一月 九戸郡行ノ安家

47 赤1 樺「寒キ宿ノ娘豚ト帳簿ニテノ濁ミ声ニテ  
罵レル

藍2 外ノ面灯落チントスノナガ行末思ヘバ心ハ  
暗シ

藍2 樺「暁早ク家族ヲ整ヘテ海辺ヲ急ギ来シ家  
長ノ白キモンパンノモロモロノ大戸ノ中ニ於テ  
「大姉↓・」姉妹ノ思ヲナセト

48 藍1 八月

【1926 / 大二年】

49 藍1 一月 国民高等学校

赤1 樺「偽善的ナル主事知事ノ前デハハダシト

? 宗谷(二) □  
? 宗谷(二) □

△氷雨虹すれば □

? 月のほのほをかたむけて □ (六九、

一九二四・四)

? こらはみな手を引き交へて □ (詩  
題外山所見、外山沢か)

? 種山ヶ原 扇  
? ポランの広場 □  
○ 燈を紅き町の家より □

? 敗れし少年の歌へる □ (三三八、

一九二五・一)

○ 鉛のいろの冬海の □

? 水と濃きなだれの風や □ (三七五、  
一九二五・八)

△氷柱かゞやく窓のべに? □

ナル

5 1 藍 1 根子

5 3 藍 1 八月 藍 1 九戸海岸

赤 1 粹 「鮫駅海光ノ中ニテノ物思ヘル女↓」

【1927 / 昭 二年】

5 5 赤 1 粹 「四月宮沢北海道行紫紅色ノ暗ク大ナル火ノ鉄工場（ルツボ）係リノ幻想↓」 / 再

調ノコト

5 7 赤 1 粹のみ

【1928 / 昭 三年】

5 9 赤 1 海鳴り 赤 1 粹 「六月大島海鳴り

【1929 / 昭 四年】

6 0 藍 1 一月肺炎

赤 1 粹 「淋シク死シテ淋シク生レン

6 1 赤 1 粹 「四月ナガ眼空シク果ツベキ眼力ノ高橋

武治ニ送ル

? 田園迷信 □ (詩句に九百二十六年の桃の花よりやゝ過ぎて)

○八戸 □

○幻想 □

? 歳は世紀に會つて見ぬ □ (詩句に一千九百二十七年における夏)

? 葵花 □ (一〇八六、一九二七・八)

○火の島 □

? いたつきてゆめみなやみし □ (詩句に胸をいたつき)

○盆地に白く霧よどみ □

《文語詩稿》とのかかわりを、文語詩篇ノート本文中の62か所について想定し、ここには初期稿に関する50か所を提案し、該当するとみた詩篇60篇を掲げた。

ただし、初期稿「前」に推定した「記念写真」、初期稿「後」に推定した「涅槃堂」は、いずれも「了」印が付与されていないが、無野用紙に起稿したもので、初期稿に仮定した。また「種山ヶ原」は、「了稿」をその過程にもたないが、「昭和五年八月二十日：花巻農学校同級会で：揮毫したと伝えられる」『新校本全集』第七巻校異』扇面稿があり、これを初期稿「前」に置いている(図表⑨で「既使用」とした)。それから「後」に想定した「夕陽は青めりかの山裾に」・「氷柱からやく窓のべに」は、いずれも草稿が失われている(図表⑩で「草稿なし」とした)。

初期稿における『文語詩篇ノート』の關係稿・影響稿のありようを「前」・「後」段階別、詩稿用紙別に整理してみたものが図表⑨である。これを見ると、「前」段階で、『文語詩篇ノート』による針路に導かれ、その主流として併走していたのは、無野用紙鉛筆開始稿群でなかったか、と思える。「後」段階では、22系用紙インク開始稿群がその針路を圧倒的に受け容れて展開した、という構図である。

図表⑨

段階/用紙		26系	無野	24系	22系	既使用	了なし	草稿なし	計
[前]		4	16	3	7	(1)	1	·	25
[後]		·	4	·	2	1	1	(2)	35

既使用紙稿や了なし稿なども含めて詩稿用紙別にみた初期稿制作の実態が図表⑩であるが、これとあわせみれば、『文語詩篇ノート』の構想を基盤としたながれが、

無野用紙稿群↓22系用紙稿群

であつて、多く『「冬のスケッチ」』を素材/題材とした26系用紙稿群は、『文語詩篇ノート』構想とは別のところで存立していた、という実態がやはり想定される。

図表⑩

段階/用紙		26系	無野	24系	22系	既使用	了なし	草稿なし	計
[前]		39	27	8	·	(1)	3	·	78
[後]		·	8	·	4	4	1	(2)	58

▲既使用紙稿に「種山ヶ原」を掲げた。

もちろん關係稿・影響稿は、推定あるいは想定をもとにしたものであるから、仮定の域にとどまるのだが、そのありように、図表⑩に示した最大限の初期稿展開の実態をつきあわせてみると、22篇の關係稿(○・△稿、「前」・「後」段階それぞれ11篇を推定)にかぎっても、初期稿展開稿の16・3割をしめており、さらに影響稿(？稿)も含めてみると、

[前] 段階 32・1割  
[後] 段階 60・3割

という結果が現われる。『文語詩篇ノート』による針路が、「前」段階ではおよそ三分の一の詩篇に具現し、「後」段階に至っては、その三分の二、「前」段階のおよそ倍近く、詩篇として具体化しているのだ。仮説ながらも、『文語詩稿』初期稿の制作が、「前」↓「後」の段階で、『文語詩篇ノート』による針路をしいに重く受けとめてゆくかたちでおこなわれた、その可能性が考えられるのである。つまり、ノートとの関係の有無にかかわらず、『文語詩稿』初期稿そのものが、その背後に『文語詩篇ノート』という存在を負って展開していることを、やはり見過ごすことのできない事態として認識させられるのである。

(注)

1 『評伝宮澤賢治』(桜楓社一九六八)の99頁。

2 『文語詩篇ノート』の記述に対応が考えられる再編稿段階に開始した詩篇については、次のとおり、推定・想定する。表示は、本文でおこなったことに同じ。

年	本文	初期	再編稿
1909/明四二年			
1910/明四三年			
1911/明四四年			？柳沢野 <sup>三</sup> (B1明四四・一)
6 鉛岩手山ニ独り登山ス			
赤1 梓「夕暮かくこう鳥空線風すゞらん」			
柏林			
1912/明四五年			
10 赤1 梓「中尊寺偽ヲ云フ僧義経像青キ鐘			○中尊寺 <sup>二</sup> <sup>三</sup> (B8、9明四四・一)
1913/大二年			
1914/大三年			
1915/大四年			
1916/大五年			
20 鉛一月			△たそがれ思量惑くして <sup>二</sup>
赤1 梓「報恩寺◎寒行に出でんとして／銀 のふすま◎暁の一燈◎警策／◎接心居士、 赤1 梓「品行悪しといふとも／なほこの僧			

のまなざしを見よ

【1917 / 大 六年】

24 鉛八月

赤1 椀「瓜喰みくる子 / 母はすゝきの穂を

あつめたり / 日居城野鳥松林

【1918 / 大 七年】

【1920 / 大 九年】

【1921 / 大 一〇年】

29 藍1 一月出京

32 鉛六月

【1922 / 大 一一年】

36 赤1 椀「十二月仙台ニ行ク車中やどり木 /

M - iss Gifford みかん、

【1923 / 大 一二年】

37 赤1 椀「一月一ノ関より平泉へ夜行く

40 赤1 三月 赤1 椀「過渡期ノ風習

【1924 / 大 一三年】

【1925 / 大 一四年】

【1926 / 大 一五年】

50 赤1 椀「ノバラアケビツルウメモドキノ藪

雪内務部長 / シリンダー

52 赤1 椀「四月林中苔

【1927 / 昭 二年】

54 赤1 椀「一月嬰兒遺棄

56 藍1 六月霧ノ中ニテ夜ヲ越エシ / andsen ju

- ne

赤1 椀

○母□

? 砲兵観測隊□ (東一九二二・一〇八)  
? こはドロミット洞窟の□ (同)

△けむりは時に丘丘の□

? 中尊寺二二□ (冬のスケッチ六葉)  
? ひとびと酸き胡瓜を噛み□ (村の賦役)

△式場□

? みちべの苔にまどろめば□ (詩句に苔・森)

○月光の鉛のなかに□

○あかつき眠るみどり□



62 赤1 粹1 父撰 落選		○選挙 <input type="checkbox"/>
58 藍1 粹1 一月 ◎林光左弟子ヲ叱ル		○来々軒 <input type="checkbox"/>
1928 昭 三年		

初期稿における〈仕度〉の頂上ともいうべきは、「後」段階である<sup>①</sup>。その〈了稿〉生成の現場では、どのような自分史精査を果たしているのか、その実態のひとつをみてゆこう。「ほのあかり秋のあぎとは」の場合である。

これは、『歌稿〔B〕』の一九（大正八）年秋に位置する736番歌と737番歌をまず鉛筆枠で括り、その右肩にブルーブラックインクで「詩体に直す」とした、そこから始まるものである。それに737・738番a歌とb歌もふまえて、三〇年春前後とみる鉛筆による文語詩化メモが下書稿一として位置づけられている。同じ鉛筆の手入れも含めて、次の上段にその本文を掲げよう。

森も暮れ地平も暮れて

〔・↓シグナルに赤き灯はつき〕

ほのじろき秋のあぎとは

〔かなし↓はかな〕くも四方をめぐりき

やつれたるなれを「見んとて↓とはんと」

そがなかを「わが↓・」急ぎ「きて↓て来しに」

かなしみのさはふかかりし

あゝなれ「は↓の」「かなしく↓つめたく」わらふ

（下書稿一・『歌稿〔B〕』）

うちけぶる稲穂の面や

森も暮れ地平も暮れて

巨いなる秋のあぎとは

ほのじろく野をめぐりにき

ながおもひやぶれしをきき

いそがしくおとなひくれば

ながいへに黄なる灯はつき

水の音いともしづけし

杉むらはまくろによどみ

はゞたける鳥のけはひを

かなしみのさはふかかりし

あゝなれのつめたくわらふ

社殿にはゆふべののりと

ながちくのぬきやさよげん

ながちくのぬきやさよげん

社殿にはゆふべののりと

ながちくのぬきやさよげん

【第一連】

【第二連】

・1行と2行の間に詩句「なが」が残るが、消し忘れとみる。

【第三連】

【第四連】

ながはくは事なきさまに  
しらたまのもちひをなせる

(下書稿二・無野用紙)

下書稿一をほぼ受け容れて、《文語詩稿》化が、三〇年冬以降に、無野用紙上にブルーブラックインクで開始された、とみる。それが、下段に掲げた下書稿二である。

これに赤インク↓鉛筆で手を入れて、鉛筆で用紙右肩へ〈了〉印が与えられる。歌稿〔B〕のこの歌に、赤インクでメモ「転」(文語詩に転換／転記の意であろう)が記されたのは、たぶん《文語詩稿》に〈了〉印を与えた頃である。「後」段階の、この〈了稿〉もやはり、具体的な詩句の大幅な追加によって、《詳細化》を徹底し、物語化といつてよいほど詩の場を成立させる。そのうえでもうひとつ、詳細な詩の場を、時間と場所の推移を軸に連を構成するという〈定型化〉の補整・補強にも向かっている。記憶の精査とは、記憶の〈詳細化〉をもとにそれを整理し分析することによって、果たされてゆく。だから、その整理・分析という過程が、〈定型化〉の補整を必然的に要求した、とみられるのである。

具体的にみると、第三連の「転換」が少し弱いかもしれないが、起承転結を意識したかにみえる詩句の推敲や連構成によって、物語性をはらんだ定型詩が実現されている。この〈定型化〉の補整・補強がもたらしたのは、音数律や連といった詩の骨格の整備だけでなく、詩の血肉をかたちづくる表現にも工夫を凝らすことだった。

2

そのあたりをみよう。

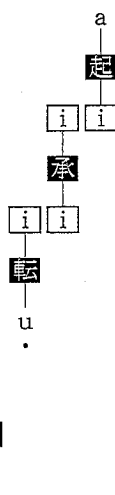
その頂からほの白い残照もやがて消え、黒々とした闇の壁としてたちはだかる「巨なる秋のあぎと」、閉じこめられているようなその圧迫感・閉塞感のなかで(起連)、「おもひやぶれし」者が、「いへに黄なる灯はつき／水の音もしづ」かな情況に逼塞しているところに「なれ」の孤立感・寂寥感が暗示される(承連)。ここには、圧倒的な存在に対して、身をひそめるように耐える者の存在が対比的に描かれている。この対比的表現は、承連と転連にも用いられている。「いへに黄なる灯はつき／水の音もしづけし」(承連)に対して、「すぎむらはまくるによどみ／はゞたける鳥のけはひを」(転連)がそうであり、静寂の場に、激んだ闇が乱れた羽音とともにたちあがる。そこに、「つめたくわらふ」「なれ」がたたずんでいる、というのだ。ここで「なれ」がクローズアップされて、その憂愁のかぎりなきが明らかにする。

その冷たい笑いに対して、「かなしみのさはふかかりし」という訪問者の直截な感慨は、かえって余分なこと、とも思える。だが、そ

れが「なれ」の、実は自分自身への哀しい冷笑であったとすれば、圧力に抗しきれなかったやりきれなき、が覆っていただけでない。その「かなしみ」の核にあるのは、その「おもひ」を今もなお心中に、果たすべき信念として抱きつづけている、ということなのではないか。「なれ」は身はひそめてはいるが、うちひしがれているのでない。そう友の表情を読みとったゆえの、訪問者のつぶやきだったようにみえるのだ。もし、この理解が成り立つのであれば、第三連による「転換」はみごとに果たされている。

そしてここまで読んでくると、のちに教師という立場を降り、農業技師にも挫折した「いそがしくおとなひ」来た者、宮沢賢治自身の経験をも、「なれ」に重ねることに気づく。詩人宮沢賢治もまた、農民教育・農村改革の志という「おもひ」に「やぶれし」者として、「なれ」のありようを見つめながら、自省に向かおうとする場をととのえている。

ところで、起・承・転へと一気にたたみかける展開は、音韻の連続性にも支えられていよう。各連に配置した反復される語は、連の内部をリズムカルに構成し、起連終行の末語「き(き)」と承連初行の末語「き(き)」という脚韻の呼応、また承連終行の末語「しづけし」の脚韻(き)と転連初行の末語「よどみ」の脚韻(み)の呼応、さらには、各連の初行と終行の脚韻をとってみると、



となっており、第一連を a 音で始発したあと、あたかも連と連を i 音でつないで、ひとつの流れをつくっている。そのうえで、第三連を u 音で終止、これは転連ゆえ破格の表現か。そして第四連は、起・承・転をまとめたその始発 a 音・終止 u 音とで成っており、音韻上連として自己完結を果たして、孤立の感が強い。これは、偶然のことでないだろう。実は、そのような脚韻の工夫が、起・承・転という流れと、結との間に深い屈折を与えているのである。

この段階(下書稿二)の結連のありようについては、小沢俊郎が、次のように指摘していた。<sup>3)</sup>

友の家の周辺と友の父母についての詩句が加わったことである。友の悲しみの深さと比べて、何事もなかったかのように平常のまま静かである。その静かさは友の悲しみの深さをさらに強く感じさせる。

この父母の平常心は、しかし当然なのだ。我が子の「おもひ」の正しさを信じ、「やぶれし」ことの無念さ、悔しさをおそらく共有しているからである。「ぬき」や「しらたま」をささげ／つくることも、親の祈りがこめられている、とみえる。詩を読み終えたとき、結連の醸す祈りの詩想が、この詩の場そのものを静かに包みこんで、静寂のままに終息してゆくようだ。この「社司」と「はは」の姿にも、詩人宮沢賢治と両親の関係が重ねられている可能性がある。長男にもかかわらず志のために家業を棄てた宮沢賢治に対して、その両親が示した恩愛の深さを見つめようとしているのではなからうか。

ここでは、詩の場の空間と時間を具体的に描く(詳細化)が徹底して、それに、4行／4連の構成に緊密な対応をはかる表現をとるな

った、実に整然たる（定型化）も確立していったのだった。要するに、三〇年頃の初期稿「前」段階で、内容的に（詳細化）が徹底されてゆき、三一年頃の「後」段階では、起承転結による詩想展開、対比・呼応、暗示などの手法によって、音数律や連構成をととのえるのみでない（定型化）による詩の表現の追求を果たすための、詩の方法の開発（たとえば初期稿段階のち再編の段階に、「殊に凝集化」「文語詩双四聯」などの詩法メモが記されることになる）にやがてつながってゆくものが、自分史を精査する（仕度）のなかで醸成されていった、と考えられる、その例であろう。

この「後」段階における、（詳細化）に（定型化）の補強を加えた二重の作業過程がうかがえる精査の過程で、「なれ」に対する「（われ）」の存在もまた明白に意識化され、詩人は「なれ」に重ねて「われ」＝宮沢賢治のありようを模索するという、内省／自省を深めていった、といえるのだ。

3

こうして、《文語詩稿》初期稿における自分史精査の実態について、検討をして気づかされるのは、（定型化）への志向がしだいに強くなっている傾向である。

それは、その針路を文語詩篇ノートによった初期稿の途絶ののち、再編稿段階に入ってなお継続する。それどころか、さらなる定型の確立と、それにもなう表現の推敲とを、徹底化してゆく方向に進んでさえゆくのである。たとえば三二年の秋以降には、「文語詩双四聯」という独創的な文語定型形式の考察とその実現に向かおうとするほどだ。つまり、初期稿の段階が深まるほどに、文語定型化ということが、詩人の意識のなかで、精査のための「装置」以上の意味をしいに重くしていたのではないか。その意味とは、詩人がこの（仕度）に対して標榜して言った「文語詩篇」の制作——《文語詩稿》化という作業における、詩篇Ⅱ詩の成立にかかわることだったろう。

かつて『農民芸術概論綱要』で、「農民芸術」を定義したとき、

語まことの表現あれば散文をなし、節奏あれば詩歌となる

（農民芸術の分野）

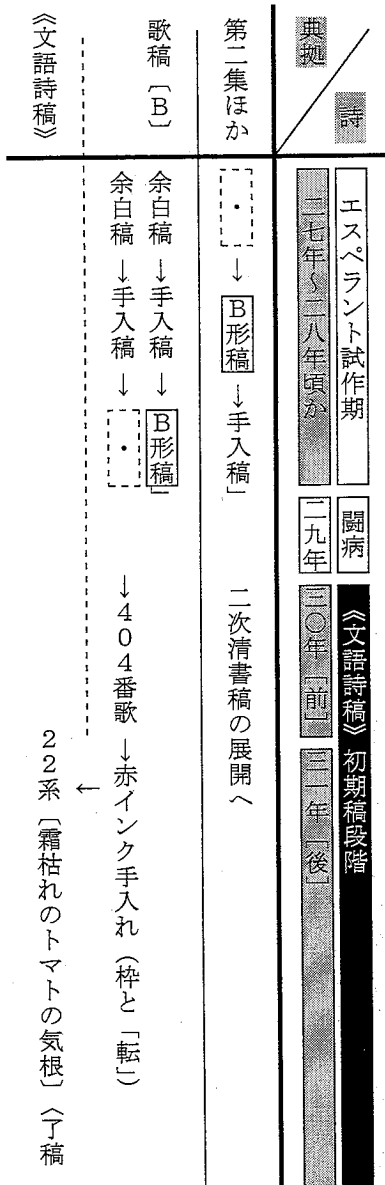
としたが、いま向かっているところが文語による詩篇であるかぎり、詩歌に向かつて、その「節奏」の成立へ詩人が動き始めている、とみえるのである。この初期稿段階のち、再編稿における（定型化）の徹底の先には、あるいは「農民芸術」としての詩歌の成立が予覚されていたのかもしれない。けれども、「節奏」の成立には、その表現を支える「語」が存在し、それを産みだす言語が前提となつていよう。近現代の言語芸術が獲得しようとしていたのが、口語という日常的言語世界からの言語表現であった。とするならば、そこで課題となつたのが、どうも東北／岩手の日常言語、いわゆる方言の問題である。

『農民芸術概論綱要』の思想に重なる、羅須地人協会活動のさなか、二六（大正一五）年の書簡に、

そのうちフィンランド公使が日本語で講演しました。それが尽く物質文明を排して新しい農民の文化を建てるといふ風の話で耳の痛くないのは私一人、…早速出掛けて行って農村の問題特に方言を如何にするかの問題など尋ね… (書簡221 一二月父宛)

というのである。宮沢賢治は「農民の文化を建てる」際の、「農村の問題」として「特にも方言を如何にするか」ということを、真正面に掲げたのである。ラムステット公使との対話は、結果的にエスペラントの優秀性にたどりつき、詩人宮沢賢治は、実際、エスペラント詩を試みるなどしており、日本の農村文化に世界語さえ導入することを考えたようである。それは、たとえば、二七(昭和二)年一月に配布されたとみられる羅須地人協会の「講義案内」にも、「三月中 エスペラント 地人芸術概論」とあるところから、推量することができる。しかもそれは「地人芸術」(農民芸術)と並立しているのだ。方言が農民文化の妨げになる。というのも、ひとつにはこの方言の、たぶん音声上の不明瞭さ——ひいては意味の不明瞭さにつながる——が、その地方のなかでさえ農村間の閉鎖性を生みかねないという、そのことではなかったろうか。

エスペラントは、「一六か条の簡単な文法規則と、九〇〇余りの単語から成る」(新宮澤賢治語彙辞典)という。そうした言語構造の明確さ以上に、詩人が惹かれたのは、発音の簡明さ——明瞭な音声——であったらしく、やはり二七年の使用と推定される「手帳断片」に、「国語及エスペラント／音声学」ともあって、日本語とエスペラントの音声上の特性——その音韻上の差異——に、詩人が関心を寄せていた、とみられるのである。その音楽性を重視しているのだ。



要するに詩人は、世界に共通しうる明瞭な音声言語、エスペラントの導入によって、農村間の言語的閉鎖性をのり超えた「農民芸術」(地人芸術)のありようを求め、試みようとしていた。詩人によるエスペラント詩稿は、『春と修羅第二集』などの口語稿からの翻訳が

3篇、『歌稿〔B〕』からの翻訳が5篇、残されている。そのうち、B形用紙に至るものがそれぞれ3篇ある（『新校本全集』第六巻校異）。エスペラントとの出会いとその学習、B形用紙の使用時期などから、詩作は、二七年から二八年の間であったと推定されようか。残った詩稿がわずか8篇で、それ以上に試みがあったかどうか、不明だが、エスペラントによる「節奏ある詩歌」の成立について、詩人が結果的には断念せざるをえなかった、ということであつたらう。簡明とはいへ、短時日で使いこなせるほど国際言語は簡便ではなかつたし、まして、詩歌——文学の構築となれば、言語の熟練／熟達ということが基盤になるからだ。

そのようなエスペラント体験を経て、詩人は文語による詩の制作に着手する。日本人が共有していた文語定型の、エスペラント体験のながれからいえば、特にその音楽性に、「節奏ある詩歌」が成立する可能性を見いだそうとしたのではなかつたか。

右に示しているのが、詩人のエスペラント詩稿の展開実態だが、すべてそれは鉛筆でおこなわれている。したがって、『歌稿〔B〕』の用紙上における鉛筆手入れの時期との分別が必要だが、エスペラントを書き入れた鉛筆の文字はすべて小さく、ほぼ同一時期とみられるもの。それに対して、歌稿本文に対する鉛筆手入れの文字は比較的に大きく、書きこまれたエスペラントの上に重なっている場合もあり、基本的には、

エスペラント鉛筆書きこみ↓歌稿鉛筆手入れ

という階層であつたらう。エスペラント訳も、歌稿鉛筆手入れ前の本文を対象としている印象が強い（旧『校本全集』の第六巻校異や、『新宮澤賢治語彙辞典』におけるエスペラント詩稿の解説も参照した）。

そのなかで、エスペラントによる翻訳を歌稿余白上で試作しながら、B形用紙に展開しなかつた404番歌が、その後、『文語詩稿』の初期稿「後」段階に、「霜枯れのトマトの気根」の一部に組みこまれてゆく、ということがある。もちろん、エスペラントから文語定型へ直接移行した、というのではない。けれども、「節奏ある詩歌」——詩の音楽性の成立、という視点からは、深いところではつながっているようにみえる。

文語定型の、その（定型化）の徹底に向かうのも、詩人の内部で、韻律を整え正してゆくことで、農村あるいは「農民芸術」の閉鎖性をのり超えようとする、その自覚が、エスペラント詩の詩作を必要としたように、『文語詩稿』において、具体的に現われている、と思われてならない。

4

三〇年から三一年にかけて『文語詩稿』初期稿は、「前」段階から「後」段階へと展開をみせており、（仕度）もなお継続中である。その実態は、精査のいわば「企画表」である『文語詩篇ノート』が、詩人によって、どのように自分史の構成をととのえていったか、をみても、つかむことができるだろう。

たとえば、三〇年秋頃までと推定するノートの一次本文、その記事の時代配分を調べてみると、右の図表⑩のような状態だった。どちらかといえば受け身、〈受動〉の時代といえよう。学生期が、60%近くをしめ圧倒しているのである。

図表⑩

一次本文		中学	高農	猶予	教師	技師
記事数		32	11	4	19	7
割合		43.8%	15.1%	5.5%	26.0%	9.6%
		58.9%				
		5.5%				

それが、三一年夏頃に至ると推定するノートの二次本文による増補の段階、そこで補充され追加された記事の時代配分をみると、図表⑪のとおり、進路や信仰に悩んだ猶予の時代や、教師や技師として社会に立ち向かう〈自立〉の時代が、〈受動〉の時代を上回るほどに増えている。その結果、ノート自体は、時代に均衡を与える記事配分となつて、いわば偏りのない自分史を構築しているのだ。まんべんなく過去の出来事とそれに対応した自らのありようを精査することができる、そのようなバランスのとれた「企画表」をつくりあげようとしていた、とみえる。

けれども宮沢賢治は、三一年一月、「東北砕石工場技手又は技師の辞令」（書簡297）を鈴木東蔵に求め、春以降、羅須地人協会の活動をはるかに超えるスケールで、農村改革の志を秘めた〈仕事〉をついに開始し、岩手はもとより東北各地を疾走するのである。〈仕事〉

図表⑪

二次		中学	高農	猶予	教師	技師
記事数		41	20	9	36	27
割合		30.8%	15.0%	6.8%	27.1%	20.3%
		45.9%				
		47.4%				
		6.8%				

のための〈仕度〉である自分史精査を果たしきらぬうちに、技師という社会人として実働に向かつてしまったのも、石灰肥料が必ず土壌を改め、それが農村を改革する原動力にもなる、という信念を早く実行に移そう、という想いに衝かれていたからにちがいない。疾中後の小康を得た宮沢賢治には、1節にみたように、焦りにも似た新しい〈仕事〉への使命感／義務感が襲って来ていたように思える。〈仕事〉に向かつてその堰を切ったのは、『文語詩篇ノート』のいったんの成立——自分史精査に一定の見とおしをつけたことが、あるいは



ひとつの契機になっていたかもしれない。

図表⑬

了稿時代	[前]一括				[後]無野				[前・後]計
	中学	高農	猶予	教師	技師	22系	22系	22系	
21計	5	3	4	18	8	30計	5	7	20計
11	1	1	9	9	5	28計	1	3	54計
68計	6	8	2	2	2	42計	2	2	

初期稿「後」段階において、そのような事態が、ほとんど重なっているのである。つまり、「仕度」と「仕事」とが併走する、というかたちになっていたのだ。精力的につづけている「仕度」の成果をいまだ得ていないにもかかわらず、前倒しのような格好で、「仕事」すなわち「活路」を拓こうとした。そのことは、「仕度」のありようにも影響を与えているのではないか。それを確かめるには、実際の文語詩篇制作の実態が、「前」段階に対して「後」段階では、どのようなものになっていったか、をみるとよい。それぞれの詩の題材をもとに、やはり宮沢の半生を物さしとして分析してみよう。手法は、「前」段階の場合と同じである。具体的な作品は注に示すこととして、その実態は、左の図表⑬のとおりである。なお割合については、時代を3区分としたものを掲げた。

時代に均衡をはかろうとした『文語詩篇ノート』の題材増補の実態からいえば、増補のおこなわれた「後」段階における《文語詩稿》化が、3区分の時代にはほぼ均等な実績をみせているようにみえる。だが、その内実は、猶予の時代が異様に突出しているのだ。その時代が重要な意味をもって、このとき詩人のなかに浮上していた、ということであろう。

ただし、これが、「後」段階の出来事であることにやはり注意する必要がある。しかも詩の題材として東京体験を集中的に採用していることだ。それは、宮沢賢治がその進路について悩み、父との確執も深くなったときだった。つまり、どう生きてゆくのか、その課題の始発に、詩人は再び立ち戻っているようにみえる。理想に立ち向かった東北碎石工場技師としての「仕事」に行き詰まるといふ事態に、襲われていたのである。

(注)

1 無罫用紙インク開始稿として展開した詩篇を一覧する。

題名(定稿)	素材/題材	開始	了印筆具	遺稿
樹園	歌稿〔B〕 238、大四	藍イ	藍	No. 2
ほのあかり秋の夜をま青き藪む	歌稿〔B〕 736・737、大八 ・(書簡171、1920)	藍イ	鉛	No. 1 4
隅田川	歌稿〔B〕 810・811、大二〇 ・(菅原隆太郎日記、1923)	藍イ	赤	No. 1 1 4
雪の宿	農学校教務室	藍イ	赤	No. 4
氷雨虹すれば	詩ノート一〇五一、1927	赤イ	赤	No. 4 5
電気工夫	文語詩篇ノート1929	藍イ	藍	No. 4
盆地に白く霧よ	▼無罫詩稿用紙でインク開始ながら、「了」印が付与されていない草稿	赤イ	了なし	・
涅槃堂	・?↓雨ニモマケズ手帳			
22系用紙インク	開始稿として展開した詩篇を一覧する。			
題名(定稿)	素材/題材	開始	了印筆具	遺稿
岩手山巔	文語詩篇ノート1910	藍イ	鉛	No. 4
氷上	歌稿〔B〕 22、明四四	藍イ	藍	No. 1 4
乾かぬ赤きチヨ	歌稿〔B〕 32・32・33a、明四四	藍イ	赤	No. 4
製炭小屋	歌稿〔B〕 34、明四四	藍イ	鉛	No. 2
盛岡中学校	文語詩篇ノート1913	藍イ	藍	No. 1
百合を掘る	歌稿〔B〕 144・145、大三	藍イ	藍	No. 1
麻打	歌稿〔B〕 153・154・205、大三	藍イ	藍	No. 1
釜石よりの帰り	歌稿〔B〕 186、大三	青イ	鉛	No. 2 4
黄昏	歌稿〔B〕 197・197・198a、大三	藍イ	鉛	No. 1 1
僧の妻面膨れた	文語詩篇ノート1915	藍イ	藍	No. 1



川しろじろとま ・(童話イギリス海岸、大一一)

商人ら病みてい 王冠印手帳、1931

小祠 王冠印手帳、1931

せなうち痛み息 王冠印手帳、1931

ひとひははかな 王冠印手帳、1931

雲ふかく山裳を 孔雀印手帳、1931

▼また、既使用紙上に展開した次の(了稿)も「後」段階とみられる。

早春 冬のスケッチ一・二・三 既赤罫 藍イ 藍

こんにやく 冬のスケッチ二四・一 既赤罫 藍イ 藍

化物丁場 冬のスケッチ一〇・五、一一・一(広告文流用) 既22 赤イ 藍

Romanzero 開墾 冬のスケッチ一・1・2 (書簡293流用) 既22 赤イ 藍

2 『冬のスケッチ』の場合、鉛筆手入れが三〇年夏以前から、赤インク手入れが三一年前後におこなわれたか、と推定をしたが

(「冬のスケッチ」本文手入れ時期に関する覚書、「論攷宮沢賢治」創刊号一九九八)、同じく鉛筆→赤インクという、原則的な

手入れがある『歌稿〔B〕』にもほぼあてはまるのではないかと考えられ、『歌稿〔B〕』の赤インク手入れも、鉛筆手入れよりの

ち、三一年前後からのもの、とみる。

3 「秋のあざと」考(『宮沢賢治論集3』所収、有精堂一九八七)。

4 宮本正男「エスペラント詩人宮沢賢治」(『宮沢賢治研究II』所収、筑摩書房一九八一)が、「エスペラントに改作を試みたのは、

一九二六年末の旭光社でのエスペラント学習時代から半年ぐらい後であると想像する。そしてまもなく中止してしまったことと思

う」という推定をしていた。なお、氏はさらにつづけて、エスペラントのリズムや脚韻による「音響効果」に言及して、宮沢が、

所蔵していたエスペラント訳のカトリック賛歌集と世界歌曲集を用いて、「自作との比較研究に使ったことであろう」という。

5 1節注10に示した島田「文語詩篇ノート研究」による。

6 初期稿「後」段階に展開した詩篇の場面を時代別に配分し一覧する。表示の仕方は1節の注13にならう。

時代 無罫用紙

22系用紙

中学

火口丘Ⅱ頂 (岩手山巔)  
「・」(氷上)  
「・」(乾かぬ赤きチヨークもて)

教師	猶予	高農	
<p>雪の宿 (雪の宿) 僚友 (氷雨虹すれば)</p>	<p>訪問 (ほのあかり秋のあぎとは) 土性調査慰勞宴 (夜をま青き蘭むしろは) 隅田川 (隅田川)</p>	<p>樹園 (樹園)</p>	
<p>北見 (宗谷 (一一)) 宗谷 (宗谷 (一二)) 秘境 (秘境) セレナーデ (月のほのほをかたむけて) 「・」 (昆沙門の堂は古びて) 峽流の母 (こらはみな手を引き交へて)</p>	<p>「・」 (硫黄) 「・」 (くもにつらなるでこぼこがらす) 隼人 (隼人) 国柱会 (国柱会) 「・」 (棕栢の葉やゝに痙攣し) 叔母枕頭 (叔母枕頭) 「・」 (かくままでに) 「・」 (聖なる窓) 「・」 (われはダルケを名乗れるものと)</p>	<p>百合を掘る (百合を掘る) 「・」 (麻打) 「・」 (釜石よりの帰り) 銅壺屋 II 工匠 (黄昏) 「・」 (僧の妻面膨れたる) 地点 (沃土ノニホヒフルヒ来ス) 「・」 (霜枯れのトマトの気根)</p>	<p>谷 (製炭小屋) 桐下倶楽部 (盛岡中学校)</p>

<p>技師</p> <p>退耕（電気工夫） 「・」（盆地に白く霧よどみ）</p>	<p>「・」（敗れし少年の歌へる） 早池峯中腹（水と濃きなだれの風や） 「・」（鉛のいろの冬海の）</p> <p>ダリア展（萎花） 僧園幻想（僧園） 歯科医院（歯科医院） 鼓者（いたつきてゆめみなやみし） 「・」（川しろじろとまじはりて）</p>
--	---

三一年の手帳に素材を得た（了稿）5篇は、『文語詩篇ノート』の時期指定を超えるので、除いた。また、了なし稿1篇、『冬のスケッチ』を素材／題材とした既使用紙上の（了稿）を保留した。

4節 《文語詩稿》の途絶へ

現在、東北砕石工場技師として、実際に苦悩しているその日々を、詩人宮沢賢治は、いつものように手帳に記録しつづけていた。それらの手帳を読むと、羅須地人協会時代同様、あるいはそれよりも過酷な事態が宮沢賢治の心身を襲ってきている、というのが分かるからだ。《文語詩稿》初期稿「後」段階で、協会時代に題材をとることに消極的になったのは、協会時代の自分史を精査する、そのことによる内省ではもう追いつかぬ、ということだったろうか。

手帳には、土壌改良を志す農業技師という理想をかけた（仕事）、そこには工場で働いている人々の生活もかかっているものであり、簡単に退くことが許されぬなかでおこなわれていた苦闘が、ここでも「それぞれの心もちをそのとほり」（書簡214a）、スケッチされている。携行した手帳は、遺されているものだけでも数冊に及ぶ。そこには営業記録とともに、三一年の、そのときどきの現在が詳細に書きつけられているのである。それがしかも、図表⑭のとおり、ほぼ文語体なのである（『新校本全集』第六巻校異、私に口語・文語の分別を加えた。手帳の使用時期は『新校本全集』第十三巻上校異）。

図表⑭

事項／手帳	王冠印手帳	GER手帳	孔雀印手帳	兄妹像手帳
使用時期	二月～五月	三月～七月	五月～七月	七月～九月
詩篇数	12	5	7	32
口語／文語	0／12	0／5	0／7	4／28

なかにはやや遠い過去の回想もあるが、それは多くない。三一年のときどきの現在、もしくはせいぜい数年越しといった内容がほとんどのようにみえる。詩人は、『文語詩篇ノート』をひとつの針路、あるいは企画表としながらも、自分史精査の文語詩篇制作の実際は、少しずつ針路や企画をそれつつ、もう一方で、苦闘している現在のありようを、手帳に文語体で克明に書きとめていた、ということなのだ。

そのうえで、その手帳詩篇から、初期稿「後」段階で（了稿）として、数篇だが、ついに成立する。それはつまり、「1930」年までと指定した《文語詩篇ノート》構想を超えてしまった、ということだ。『文語詩篇ノート』を超越する、とは、結果的に「いままで書いてきたものを整理」してきた《仕度》を、踏みこじってしまうことにほかならぬ。言い換えれば、詩人の、「文語詩篇」＝《文語詩稿》制作の位置づけが揺れていたのである。

それが、《仕度》と並行していた東北砕石工場技師という「活路」のゆくえにかかわって、出てきた事態であるのは、まちがいない。

炭酸石灰肥料による土壌改良がなかなか農村に受け容れられない、という技師兼セールスマンとしての困難／苦悩からくる「活路」自体の危うさがあった。また、たとえば手帳詩篇に、

ひとひつかれしとて

夜汽車のなかにまどろめば

せなまた怪しく熱くして

病ふたゝび来しやと思ひ：

(王冠印手帳)

よき児らかなとこととへば

いらえず恐れ泣きいでぬ

はやくも死相われにありやと

さびしく遠き雲を見ぬ

(GERIEF手帳)

とあつたように、その兆しがよびおこす病再発への深い懼れがその身から去ることなく、「活路」を支えよう心身にも、危うさがあった。やがて、『兄妹像手帳』(7頁)に、

西暦一千九百三十一年の秋の／このすさまじき風景を／恐らく私は忘れることができないであろう

とのことだが、鉛筆で書きつけられることになる。これは、凶作の光景を眼前にして、「活路」がついに潰えたことを自覚した、技師宮沢賢治の敗北宣言ではなかったか。この敗北は、そのまま詩人に、『文語詩篇ノート』による〈仕度〉の無効をも、自覚させたらう。そのうえに、懼れていたとおりの病がきたのだ。翌年の書簡下書きにそのときの様子を記しているが、そこには、

実は昨秋社運挽回の為に建築材料見本を具して関西地方へ旅行の途東京にて急に発熱致し： (書簡413 三〇四月宛不明)

とあって、肝腎の土壌改良を企図した石灰肥料だけでは、東北砕石工場は立ちゆかないところまできていたのか、東京行で「社運挽回の為に建築材料見本を具し」ていた、というのだ。東北／岩手における技師活動の閉塞感を打開するためにも、東京でおこなう石灰岩抹を活用した広汎な製品による宣伝戦略が求められていたわけで、いわば背水の陣を布くしかないところに、追いつめられていたとみてよい。さらに、やはり『兄妹像手帳』(154頁)に、今度はブルーブラックインクで書きつける。



廿八日迄ニ熱退ケバ／病ヲ報ズルナク帰郷

退カザレバ費ヲ得テ

(1) 一月間養病

(2) 費ヲ得ズバ走セテ帰郷／次生ノ計画ヲナス。

——熱が退けば家には黙ってしよう。だが、退かないとしたら、費用の都合がつかなら東京に残って病を養い、つかなければすぐに帰郷すること、そして「次生ノ計画」をおこなうこと、というのである。それは、同じときの出さずじまつた遺書に、

「恩はきつと次の生又その次の生で報じたいとそれのみを念願いたします。」

(書簡393 両親宛)

とあったように、手帳の文言も、死を自覚しその覚悟をした、と同意であって、今生ではもう「計画」を遂行することは不可能だ、という断念のことばなのだ。今生における「計画」だった東北砕石工場技師活動、そこに託した「仕事」は、もう果たせなくなってしまった現在、文語詩篇による自分史精査で内省／自省を果たそうとした「仕度」もまた、詩人宮沢賢治とともに、瀕死のときを迎えている。「次生ノ計画」も後退せざるをえなかった。

次の頁には、同じくブルーブラックインクながら、

一、法華経のおんために

二、父母の恩を報ぜん

三、自らの快樂の故に他をさまたげず

とひっそりと記されてあった。病床に横たわったまま書かれたこれらは、たぶん「次生ノ計画」を立てる、その基本方針のつもりであつたらう。その状況からすれば、ここにはもう、それまでの羅須地人協会や東北砕石工場における「技師」として社会に働きかけてゆくこととした、農村改革の志、というようなものはない。

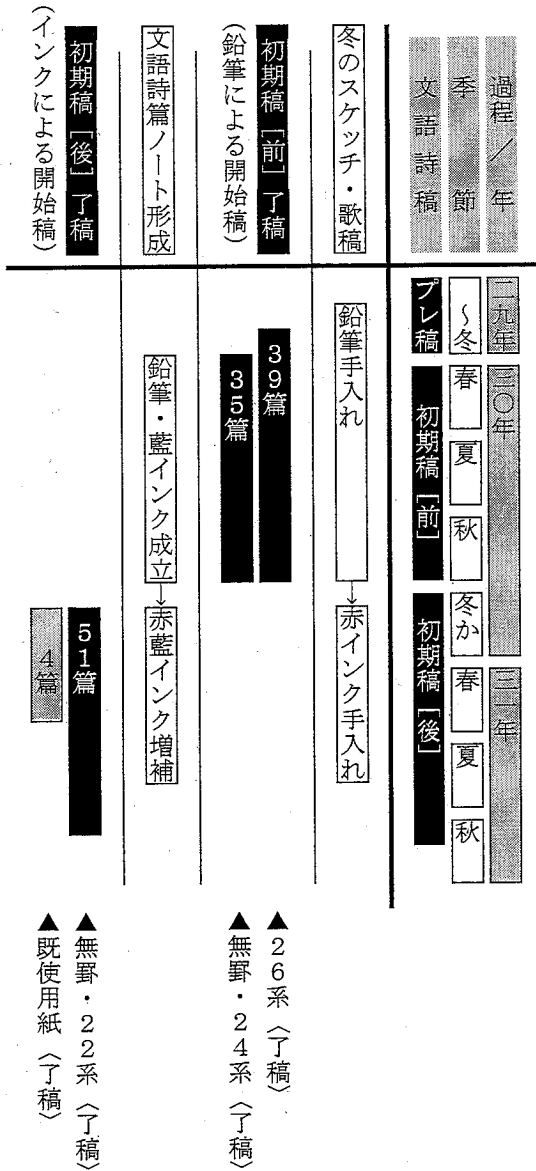
あるのは、信仰と報恩(恩愛)という囲みのなかに閉じこもろうとする意思のようであり、「自らの快樂の故に他をさまたげず」とあるのも、自己犠牲／利他の精神による積極的な修行ではけしてなく、むしろ自己放棄による他者への遠慮のように読める。信仰のなかに自己喪失してゆく、いうならば「閉ざされた」次生の重点規制ともいうべき、たいへん弱気な枠組みなのではあるまいか。そこには、《文語詩稿》初期稿の過程で果たされる自分史精査がいよいよ熟し、それに応じた内省／自省をますます深めて、農業指導の実践者として、農民・農村の生活を改革するのに充分な自己変革を遂げてゆくこと、その「仕度」を果たせぬまま、未完・未整理のまま、抛擲してしまふしかないという、詩人の悲痛な事態が横たわっている。

要するに、農村改革に向かう志を、再度の発病——死病に至る自覚——によって決定的に阻まれるとともに、自分史を精査するという内省の作業を秘めて展開した《文語詩稿》初期稿段階もまた、三一年秋、途絶したのである。

この段階の詩人の詩的作業は、『春と修羅第二集』の二次清書稿編集、『春と修羅第三集』の展開、番号・日付喪失詩篇や口語詩稿の形成、などが並行していた。そのうえに、『文語詩稿』初期稿も、「前」「後」およそ170篇あまりが、〈了稿〉として成立してゆくという実態がある。これは、量的にも全口語稿にほぼ匹敵するほどの作業であった。また、この初期稿段階では、口語稿との題材の重複がほとんど見えない、ということがあり、それも、双方にそれぞれ担うべき内実が与えられていた、ということを想わせる。

漫然と《文語詩稿》が制作されていたわけではなく、ここでは、「スケッチ」作業とは異なる段階での言語的作業によって、自分史精査という過程を求められていた、ということである。

最後に、この初期論のまとめとして、初期稿の形成過程を、概念図として掲げておく。なお、初期稿それぞれの始発とその下限とは、私の仮説によるおおよその位置どりである。



(注)

1 この志は関豊太郎博士に学んだことに由来する。たとえば、宮沢賢治が高農三年の一七（大正六）年一月、県の工業原料調査会にかかわって博士が「石灰岩末」利用について発言している。その談話の要点は、

石灰岩末を耕地に応用したる例は未だ見聞せざる所で、優良なる石灰肥料として応用するの望あるのみならず、製造者の経営如何によりては廉価を以て農家に石灰肥料を供給し病土を改良して健康地となし耕地の拡張延ては農事の振興の一助とならん

（岩手日報大正六年一月一二日付）

というもので、関は、酸性土壌の改良に石灰岩末を用いることが、効能的にも経済的にも、東北／岩手の農村事情には最適だ、との見解を述べて、以後それは博士の信念にさえなっていた。宮沢賢治が東北砕石工場の事業に参画することに対して、関は、盛岡に居られた際、頻りに勧誘された石灰岩末を作製し売り出さうと思ふが、さうして良からうかとの問合せに接した。私は私の宿望が遂げられることになるので、これほど嬉しいことはないから、遠慮なく着々実行されよと返事して置いた。

（「宮沢賢治氏に対する追想」、『宮沢賢治研究』十字屋書店一九三九所収）

という。また関は、一一（明治四〇）年にヤマセ現象を科学的に説明し海水温と作況の相関を指摘する海温説を発表して冷害研究の発展の契機をつくり、また宮沢在学時にも氣象を講義している（『新校本全集』第十六卷下）など、東北農業の進化になくてはならぬ学者だった、といえる。海温説にかかわる宮沢の反応として、『方眼野手帳』に「本年モ俗伝ノ如ク海温低ク不順ナル七月下旬ト八月トヲ迎フベキヤ否ヤ」とあるのが考えられる。なお、亀井茂「宮澤賢治と盛岡高等農林学校断片（一）——玉利校長と関豊太郎教授の冷害研究をめぐって」（『早池峯』12〜14号一九八五〜八七）、「グスコープドリの伝記」の背景初期冷害氣象研究の流れと盛岡高等農林学校」（『宮沢賢治』8号一九八八）などを参照。

- 2 宮沢賢治が東北砕石工場の工員に言及しているのは『王冠印手帳』であるが、佐藤通雅『宮沢賢治東北砕石工場技師論』（洋々社二〇〇〇）において氏はその記述を分析して「工員たちまで視野に入れた」宮沢賢治のありようを指摘している。宮沢賢治に対する親しみを工員たちのがわから実証しているものに、伊藤良治『宮澤賢治と東北砕石工場の人々』（国文社二〇〇五）がある。
- 3 手帳からの「了稿」は、次の5篇。その詩想には、「いま」の自分のありようを否定的にみるものが多い。「新しい方面へ活路を拓く」状況にもうない自分を、詩人はちつとみつめているのである。

手帳

〈文語詩稿〉題名

用紙

了印

王冠印	せなうち痛み息熱く	22系	あり
王冠印	商人らやみていぶせきわれをあざみ	22系	あり

王冠印 小祠

22系 あり

王冠印 ひとひはかなくことばをくだし

22系 あり

孔雀印 雲ふかく山裳をひけば

22系 あり

4 たとえば、口語詩稿〔職員室にこつちが一足はいるやいなや〕の下書稿二の余白に、次のメモがある（第三の部立頁数は省略）。

第二、自然

第三、心象スケッチ

田園／社会／病氣／信仰／生活

第四、文語、

この用紙は22系用紙で、口語本文に文語詩化手入れがあるが、それに（了）印は与えられず、その手入れをもとにした《文語詩稿》草稿が、三二年以降の段階に、別用紙に展開している。また、この用紙には遺稿整理時番号No.1番が押されており、三一年頃起稿の可能性がきわめて高く、このメモも同年のものとして推定する。このメモからは、

（第一）春と修羅第一集 大正十一・十二年

第二 春と修羅第二集 大正十三・十四年

第三 春と修羅第三集 昭和 元 三年

第四 文語 (昭和 四 六年)

という、心象スケッチ集の時系列の集成企図をくみとることも可能であり、そのなかに、「文語」による作業が位置づけられる、という読みもできる。ここでは、「文語」は、どうやら期間をかぎって、疾中以後現在に至る間の、記録を分担する作業へと位置づけられようとしている。つまり、限定された自分史であって、半生をとおして内省化をはかろうとした《文語詩稿ノート》構想とは別物がここに企図されているとしたら、詩人の《文語詩稿》構想に揺れが生じていた、ということになる。また、「文語」という表現も、すでに「文語詩篇」を命名していたなかでのものだから、「文語（詩篇）」とする意でなく、「文語（体）」による記録集の意とみることが可能だ。なお木村論は、「第四、文語」が、「春と修羅第四集」「文語スケッチ」の意味に読める」、その可能性を指摘している（1節の注2に掲げた同書）。

5 手帳本文をもう少し詳しくみると、「次生ノ計画ヲナス。」は、「(2)項の中で(a)帰郷して、(b)なすべき「行法」、という認識（序列または位置づけ）で当初は示されていた。だが、その「行法」を、順序立てるa、b(aは「費」の右肩に、bは「行法」の上に、あとから補入)とともに抹消したのである。

退カザレバ費ヲ得テ

(1) 一月間「静↓養」病  
 (2) 費ヲ得ズ「シテ↓・」バ  
 走セテ帰郷  
 〓 衍注  
 次生ノ計画ヲナス。

退カザレバ  
 (1) 費ヲ得テ一月間養病  
 (2) 費ヲ得ズバ走セテ帰郷  
 次生ノ計画ヲナス。

このとき、「次生ノ計画ヲナス」は、「(2) 項のもと支配から解放されたのではないか。それを整理したのが、下の点線枠内の文面である。そこに現れた行間の意味が、「(熱) 退カザレバ…」を受け取ったうえの「次生ノ計画ヲナス」ではないか、と、この推敲の意図を読みとったのである。

6 詩稿用紙別の、「了稿」形成の実態は、左表のとおりである。ここには、1節の注8に示した初期稿の条件をほぼ有しながらも「了」印をもたないもの、「前」3篇・「後」1篇を表示する。

	初期稿					了なし
[前] (了稿)	2	7	3	9	8	3
[後] (了稿)					8	1
					4	
					3	
					4	
						1
						▲無野1
						▲無野2・26系1

第2章 再編輯の展開

## はじめに

本章は、『文語詩稿』初期稿段階が途絶したのち、一九三二（昭和七）年以降に展開する再編段階の動態を、鉛筆と赤インクによる〈写稿〉の成立を焦点に、論述する。

1節は、再編に向かう契機を闘病記録である『雨ニモマケズ手帳』のなかの一節に見いだしたとともに、再編稿として展開する草稿群を、了・発展稿・新規・起稿・文語化・稿という観点を立てて整理し、その過程を明らかにする。

2節では、詩法メモに見いだされる「文語」の位置づけ、口語稿の発表行動の実態、草稿整理に用いられた黒クロス表紙の記述などをもとに、熟成という視点から再編稿の展開過程を推論する。

3節では、鉛筆・赤インクの〈写稿〉の形成について、その手入れ過程に類型を見いだすとともに、手入れ筆具の別による階層を想定して、そこに〈写〉印の付与段階を見いだせることを指摘する。そのうえで、〈写〉印付与の実状を整理して、定稿に至る〈写稿〉の位置づけについて仮説を提案する。

4節では、『女性岩手』誌に発表された『文語詩稿』に着目し、その発表稿と、〈写稿〉の手入れ過程とを分析することで、その先後関係を推論して、発表時期に対して〈写稿〉の成立時期がいつ頃であったかを提案する。

『雨ニモマケズ手帳』は、闘病記録のひとつである。その始発には、

昭和六年九月廿日／再び東京ニテ発熱

〔『雨ニモマケズ手帳』2頁〕

と、濃い鉛筆で記されている。

一九三一（昭和六）年秋、かつて羅須地人協会の活動を挫折させたあの高熱が、またも宮沢賢治を襲う。羅須地人協会時代の志を引き受け、さらに具体的実践的に展開しようとする（仕事）として立ち向かった、東北碎石工場技師としての活動が、これによって挫折する。この東京出張には「壁砂見本をも」携えていた。<sup>(1)</sup>もともと農村改革を射程において、酸性土壌の改良に効く肥料（石灰岩末）の設計・指導・販売にいわば起死回生をかけた（仕事）は、肝腎の農村になかなか浸透せず、工場存続／経営のためにその実利／営利を優先させなければならぬ状況にあって、志はむしろ逼塞させられつつあった。そこに追い打ちをかけられた、というのが実際であったと思える。このときの宮沢賢治の絶望は、どれほどであったろう。

それが、同じ頁に、

十一月十六日／就全癒

と書き付けているのである。これは赤鉛筆による後日の記入で、「九月廿日」の発病からおよそ2か月後の日付であるから、この日が闘病記録のいちおうの終着を示しているであろう。けれども、わずか2か月ほどで「就全癒」というのは怪しい。倒れたとき、家族に宛てて遺書まで用意したほどの事態であるから、文字どおり全快したはずもない。<sup>(2)</sup>だから「就」というのはたぶん、向かう、というほどの意味で、今生にはかろうじてとどまった、というのであろう。

この間の経緯はどうであったのか。

まずみておきたいのが、東京で倒れた数日後の、『兄妹像手帳』154頁の記述である。この手帳は、時期的に『雨ニモマケズ手帳』に先行して直結するもの（新校本全集第十三巻上校異）とみられている。そこには、



廿八日迄ニ熱退ケバ／病ヲ報ズルナク帰郷  
退カザレバ費ヲ得テ

(1) 一月間養病

(2) 費ヲ得ズバ走セテ帰郷／も術ヲ／次生ノ計画ヲナス。

(ブルーブラックインク)

とあつて、「廿八日迄ニ熱退ケバ／病ヲ報ズルナク帰郷」という、大事なく回復して家人に知られずに帰郷したい、という一縷の望みを抱きながらも、「退カザレバ」どうするのか、その点については、対応策を分析的に整理している。「滞在費が工面できなければ、このまま東京で静かに養生しよう。」「しかし工面できなければ、即刻帰郷して、「次生」の計画を立てよう。」ということだった。「次生」とは、次にとるべき新たな生き方とも理解できるし、死後そして生まれかわったなら、というふうにも読める。次の頁に、どうやらその「次生ノ計画」にかかわることなのであろう、3項目の箇条書きが記されている。

一、法華経のおんために

二、父母の恩を報ぜん

三、自らの快樂の故に他をさまたげず

(ブルーブラックインク)

これは、先に「も術ヲ」と抹消された部分の具体化とみられるが、このとき遺書として認めたものに「ご恩はきつと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします」(書簡393、九月二日付両親宛)という一節もあった。「ご恩はきつと次の生又その次の生でご報じ」するしかないというのは、今生への悔悟をこめつつ、来世以降に頼みをつないでいるもので、154頁の記述のうえに重なる認識である。併せ読むと、『兄妹像手帳』の「次生ノ計画」とは、「生まれかわる」という信仰上の確信のうえに立てる、死後を見据えた方針、にほかならない。そこにあるのは、信仰の絶対、報恩の実行、快樂の放棄(欲望のみならず志もまた含まれていたとすれば、それは自己放棄に等しい、とみることができるといふ、いわば「閉ざされた生」のありようなのだ。

そうした(2) 費ヲ得ズバ走セテ帰郷／も術ヲ／次生ノ計画ヲナス 方向に、宮沢賢治はすすむことになる。本人からの電話連絡で大事を知った父によって、「廿八日」には花巻に帰り着く。

「昭和六年十月上旬から年末か翌年初めまでに使用されたものであろう」(『新校本全集』第十三巻上校異)という『雨ニモマケズ手帳』には、先に示した「就全癒」とのことばを書きつけうるまでの、「行法」による回生の過程が記録されているはずなのである。実際、『雨ニモマケズ手帳』の「10. 29」の日付をもつ頁には、「疾すでに治するに近し／警むらくは再び貴重の健康を得ん日」と書きはじめ、『兄妹像手帳』の第三点にあった自己放棄の箇条を、「自欺的なる行動に寸毫も委するなく」といふ、積極的な修行・戒心のことばに

昇格させて、導入文のなかに配置変えしたのち、『兄妹像手帳』の第一・二点を踏まえつつ、次のような新たな宣言を記すのである。

敵に

日課を定め

法を先とし

父母を次とし

近縁を三とし

社余農村を

最後の目標として

只猛進せよ

(41〜46頁)

これは、『兄妹像手帳』のメモに、ほぼ照応している。けれども、決定的に異なっている。その「閉ざされた生」にとどまろうとしていたところから、「開いてゆく生」へ向かおうとする、大転換、変質がある。それは、第三点に「近縁」という共同体への視点を加えて、そのうえで第四点に、「社余農村を／最後の目標として」掲げているところであり、さらには「只猛進せよ」と自らに檄さえ発している点にうかがえよう。「社余農村を最後の目標」と記したとき、宮沢賢治の内部に起きていたのは、かつて羅須地人協会の主導者としてまた東北砕石工場の技師として、立ち向かい敗北しつづけてきた、農村改革という〈仕事〉についての残命を燃焼させよう、という志の復活だったのである。

けれども、宮沢賢治の病状は、「やはり横臥のままで鉛筆書きのお札を申し上げる次第です」(書簡404a二月一七日付杉山芳松宛)というのが、一〇月になっても「一町ぐらゐは歩き、一時間ぐらゐづつは座るやうになつた所を見れば、この十月十一月さへ、ぶり返さなければ生きているのでせうと思はれます」(書簡431一〇月五日付森佐一宛)という程度の回復にすぎなかった。「一町」は100メートルほどの距離である。これでは、「只猛進せよ」といっても、いったい何ができるといえるのか。身を呈しておこなう実践は、もう不可能なのだ。それでももし「社余農村」の改革につながるうとすれば、病床でも可能な肥料設計という支援があったらう。それは、死の直前まで実行をしている。

そしていまひとつ、可能なこととして考えられるのは、農村という現場にはじめて立ち向かおうとした羅須地人協会時代の『農民芸術概論綱要』に、

農民芸術とは宇宙感情の 地人 個性と通ずる具体的なる表現である…

そは常に実生活を肯定しこれを一層深化し高くせんとする／そは人生と自然とを不断の芸術写真とし尽くることなき詩歌とし：

語まことの表現あれば散文をなし 節奏あれば詩歌となる

(一) 農民芸術の本質(二)  
(二) 農民芸術の分野(一)

などと記した、「農民芸術」の制作である。もちろん「農民芸術」は、本来農民による農民のための芸術であつたから、ついに農民にすることができなかった詩人は、その意味での「農民芸術」の担い手とはなりえない。けれども、農民のための芸術を創造することは可能はずだ。「節奏ある詩歌」が、文語定型でなければならぬはずもないが、少なくともそのなかに《文語詩稿》が位置づけられるものであつてみれば、「社余農村を目標」とする方向を突き進んで、いわば改革への《詩的実践》として成立するものであるのなら、それは、詩人官沢賢治にとつて、農村改革の核とした「農民芸術」にも遠く呼応する。

病床において《文語詩稿》を再開する契機となつたのは、おそらく『雨ニモマケズ手帳』の「社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ」という覚悟なのであり、それがまた、《文語詩稿》の再編に向かう針路となつた、と考えられるのである。

2

新たな《文語詩稿》への再開は、どの時点から立ちあがつたのか。

栗原敦は、『兄妹像手帳』に記されていた「文語文典／漢詩入門」のメモに注目して、「この時期に「文語詩」再入門、本格的、全面的な推敲しなおしの意思が固まりつつあつた」とする。そのうえで氏は、具体的に文法書や漢詩入門書を特定し、「賢治の病状などから推して、七年（昭和 島田注）春以降にこれらの書物などをふまえて、改めて「文語詩」再入門、または徹底した推敲による「文語詩」の全面的再構成へと進んでいった」と推定した。

この手帳は、三一年七月から九月にかけて使用したと推定されるものだが、『新校本全集』第十三巻上校異、初期論のなかでも指摘しておいたように、初期稿段階の《文語詩稿》構想に揺れが生じたふしが確かにある。私はその推定にしたがうものであり、栗原論にいう「全面的再構成」の意味をふまえて、「再編」という呼称をこの段階に与えたい。その開始時期についても、「七年春以降に」という指摘は妥当なものと思える。たとえば、三三二（昭和七）年五月一〇日付の書簡に、

ただ今やっと座って居れるやうになり五六ぺん休めば店あたりまでも歩けるやうになりました。童話、盛岡からまだ来ませんでお送りいたさず済みません。

（書簡414 佐々木喜善宛）

と記して、「座って居れる」「歩ける」ようになったこの五月頃、少しながら余裕さえ感じられるのだ。この時期、『文語詩稿』が「全面的再構成」にすでに向かっていた、と推定したい。

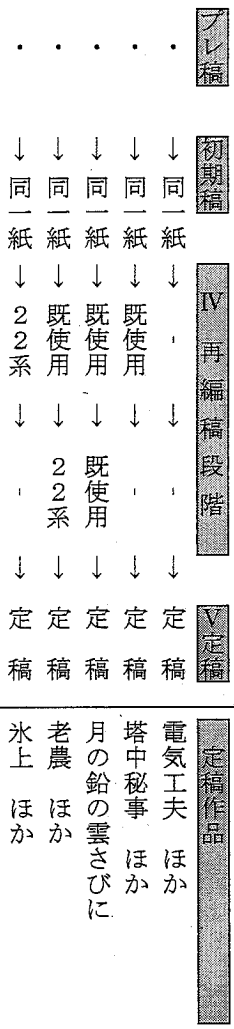
その再編の段階は、草稿群が、三つの大きなながれによって展開していったようにみえる。三つのながれとは、次のとおり、である。図表中、①の再編の段階における「同一紙」上の展開は、初期稿段階の形成を経て再編稿として展開してゆくもので、その手入れ過程の時期を分別するのは、困難である。②の「素材稿」については、『歌稿〔B〕』の文語詩化や手帳稿が該当するが、初期稿段階のものと

- ① 了・発展稿  
初期稿（了稿）を発展させた稿
- ② 新規・起稿  
新たに詩稿用紙に形成された稿
- ③ 文語化・稿  
口語詩の文語詩化による展開稿

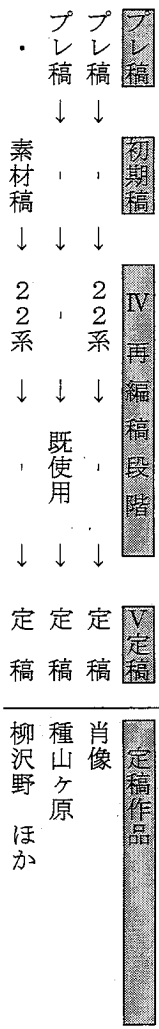
みてよい。

また③の再編の段階における「同一紙」上の文語化は、ほぼ再編稿段階のもの、とみられる。なお、展開パタンのなかに、未定稿にとどまったものは含めていない。ただし未定稿には、遺稿整理時番号の2番稿・4番稿・10番稿・無番稿があり、これらが再編稿として展開した可能性がある。

図表① 了・発展稿



図表② 新規・起稿



素材稿 ↓	既使用 ↓	↓	↓	定稿	賦役 ほか
素材稿 ↓	既使用 ↓	2 2系 ↓	↓	定稿	打身の床をいできたり
・	2 2系 ↓	2 2系 ↓	↓	定稿	社会主事佐伯正氏
・	既使用 ↓	2 2系 ↓	↓	定稿	初七日 ほか
・	2 2系 ↓	↓	↓	定稿	退職技手 ほか
・	既使用 ↓	↓	↓	定稿	林館開業 ほか

図表③ 文語化・稿

プレ稿	初期稿	IV 再編稿段階	V 定稿	定稿作品
↓	↓	↓	↓	けむりは時に丘丘の ほか
↓	↓	↓	↓	早俚 ほか
↓	↓	↓	↓	日本球根商會が ほか
↓	↓	↓	↓	五輪峠 ほか
↓	↓	↓	↓	保線工事
↓	↓	↓	↓	副業
↓	↓	↓	↓	天狗草けとばし了へば

初期稿段階の、

Iプレ稿 ↓ II「前」稿 ↓ III「後」稿

とつづいた進展からすると、ここは、その三つのながれを一括して、IV再編稿の段階、という設定ができればよい。ただし、定稿に採用されるもので、再編稿段階で〈写〉印を特に付与された草稿群がある。〈写〉印には、再編稿最終段階に与えられたとみられるものと、定稿段階にも重なって与えられたか、とみられるものがある。細かな分別も可能で、この符号は、原則として定稿に向かう最終草稿に対して付与されているから、次に概念化しているように、



この段階を、IV・Vウル定稿の形成段階、と位置づけてもよい。

▲鉛筆・赤、ブルーブラックインクによる〈写〉印。

▲青インクによる〈写〉印。

図表④

時期	形成段階	詩稿用紙など	区分
一九二九年	プレ稿	丸善製、赤野などの用紙を用いた文語詩	I
三〇年前後	初期稿【前】	無野・26系・24系用紙。「了」印付与	II
三一年前後	初期稿【後】	無野・22系用紙、既使用紙。「了」印付	III
三一年秋以降	(闘病)	雨ニモマケズ手帳	IV
三二年春頃	再編稿	22系用紙、既使用紙	IV・V
三三年春頃	(写稿)	鉛筆・赤インクによる「写」印付与稿	V
三三年夏頃	定稿	定稿用紙	

だが、定稿には〈写〉印が付与されない草稿からの採用も多数ある。だから、再編の段階と定稿の段階をつなぐ場のひとつとして位置づけて、〈写稿〉群については別に論ずることとする。とりあえず、初期稿から再編稿、そして定稿に至る過程を整理すると、図表④のように示すことができよう。

要するに、初期稿以後発生した三つの草稿群のながれを一括する「再編稿」という過程が展開したのである。ただ、それぞれのながれが再編稿のなかでどのように絡みあって展開したのかを、明確に指摘するのは不可能だが、三つのながれは、多少の時期的なずれを伴いながらも、渾然と再編稿を構成していった、という様相がとりあえずは見える。

3

さて、初期稿と再編稿の違いは、その始発稿に〈了〉印が有るのか、無いのか、ということではほぼ分別できるようである。

もちろん再編稿段階にも、初期稿(了稿)が発展してゆく場合が多くある。けれども、それらは〈了稿〉の後継なのであり、再編の段階にその〈了〉印を得たものではないし、〈了〉印を新たに与える、ということもない。たとえば、使用開始の時期が特定できる『雨ニモマケズ手帳』に記された、その手帳稿がかかわる『文語詩稿』の実態をみると、図表⑤のとおりである。

なお、図表中の数字は『新校本全集』第七巻校異が与えた草稿序列である。ロク・ム・ニニは26系・無野・22系の各用紙、既使用、**了**は〈了〉印付与稿、**写**は〈写〉印付与稿。

図表⑤

題名	素材稿	初期稿	手帳	再編稿	定稿
悍馬「一」	文語詩篇ノート	前 2 <sup>下</sup> 後 3 <sup>下</sup>	1	↓ 4	○
涅槃堂	文語詩篇ノート	(2) <sup>上</sup> ?	1	既2 <sub>≡</sub> ↓ 3 <sub>≡</sub> ?	○
たそがれ思	文語詩篇ノート		1	既2 <sub>≡</sub> ↓ 3 <sub>≡</sub>	○
中尊寺「一」	1冬のスケッチ		2	2 <sub>≡</sub> 写 3 <sub>≡</sub> 写	○
きみになら			1	3 <sub>≡</sub> 写	○
不軽菩薩			1	3 <sub>≡</sub> 写 5 <sub>≡</sub> 写	○

校異は、「悍馬」(「一」)の手帳稿(断片)を下書稿一とみるが、26系用紙に鉛筆で起稿し(了)印を付与されている下書稿二が、初期稿「前」段階に位置づけるべきものであることは、初期論にみてきたとおりで、(了)印付与ののちに『雨ニモマケズ手帳』がある。つまり、手帳稿は下書稿一(了稿)ののちに位置づけるべきもの、ということだ。

それに対して、「たそがれ思量感くして」(きみにならびて野にたてば)「不軽菩薩」については、手帳稿を始発にして詩稿用紙に展開したもので、だからこれらには(了)印が与えられていない。また、「中尊寺」(「一」)は、『冬のスケッチ』第六葉の本文を受けた手帳稿をふまえて詩稿用紙に展開、やはり(了)印は与えられない。それは、『雨ニモマケズ手帳』ののちに了なし稿がくる、という実態を示しているのではないか。つまり、『雨ニモマケズ手帳』の前に初期稿があり、『雨ニモマケズ手帳』の後に再編稿が位置している、ということになる。『雨ニモマケズ手帳』が、(了)印をもつ初期稿と(了)印をもたない再編稿との、境界に位置しているのである。

なお、「涅槃堂」は、無野用紙にインクで起稿するという初期稿「後」段階の形成条件にかなうにもかかわらず(了)印が与えられていない、という点で、再編の段階に開始した可能性も捨てきれないので、考察の対象としては保留しておくしかない。

こうして(了)印が与えられることのない、草稿もまた形成され、展開してゆくという過程が現われる。この再編の段階に展開した《文語詩稿》の数は、図表⑥のとおり、定稿に至ったものと未定稿に置かれたもの(遺稿の(山)ごとに、それぞれ与えられた上隅の遺稿整理時番号のうち、2番・4番・10番稿を、再編の段階に動いていたものと推定する。さらに、無番稿の(山)も含めておく)によるそれだけのながれ、それに初期稿と同条件を持ちながら(了)印が付与されなかった3篇、定稿に至るも下書稿の不明な4篇を含めると、実に200篇余に及ぶとみられるのである。精力的な、これはもう充分すぎる新たな(仕事)だといってよい。

図表⑥

再編稿  
展開数  
↓定稿  
↓未定稿

了・発展稿	9	5				
了なし稿	3					
新規・起稿	6	2				
文語化・稿	4	8				
定稿のみ	4					
	3	5	1	1	0	
	5	1	1	1	0	
	8	3	1	1	0	
						(37)

▲未定稿「らんじやくの」「Romanzelo 開墾」を含む

三二年以降、再編の段階を支えたこの三つのなを、草稿の占有率・定稿化率・定稿の占有率からみると、次のようなおおよその作業実態が現われる。

図表⑦

	再編稿	草稿占有率	定稿化率	定稿占有率	占有率増減
了・発展稿	4	4・8	6	3	△6・4
新規・起稿	2	2・9	8	3	4・5
文語化・稿	2	2・6	7	2	0・6
			2	3	
			2	3	
			3	3	
			8	8	
			2	2	

その定稿化率からいえば、再編稿のゆくえをリードしたのは、新規・起稿であり文語化・稿であった、とみられる。定稿に直結しうる素材／題材をできるだけ選りすぐりながら、この段階で《文語詩稿》化していったものといえるからである。たとえ、骨格や筋のよりに再編の枠組みを構築する役割だ。新規・起稿が骨格の形成を、文語化・稿が筋とそれを骨格に結びつける鍵として機能しているのではない。

それに再編作業のベースとして、その草稿量からいっても、了・発展稿があった。既に《文語詩稿》化してあった多彩な題材のなかから、そのつど選び取って、いわば、筋骨に肉づけをおこなう如く、再編稿による詩の世界の豊かな展開を実現する役割を担った、といえる。結果的に定稿の最多を占める了・発展稿だが、それを初期稿段階の濃い影とみるのではなく、その定稿化率の低さから選別・整理をはかる主体的な再編の段階を想定することも可能であるように思う。



《文語詩稿》再編輯を構成する三つのながれについて実態をみてきた。  
その概念的な形成過程が図表⑰である。

図表⑰

再編輯の過程	三二年	三三年	素材・題材
	春 夏 秋 冬	春 夏(定稿)	
了・発展稿	92+3篇		初期稿(了稿)+了なし稿
↓	61篇		
新規・起稿	62篇		冬のスケッチ、歌稿、東京ノート、三一年手帳群
↓	51篇		
文語化・稿	48篇		第二集稿、第三集/補遺稿、口語詩稿
↓	35篇		

それぞれの構成稿の始発を、少しずつずらしているのは、私の想定によるおおよその位置づけである。

了・発展稿では、三二年六月の書簡423にみられる「老農」の発展形(下書稿六)が、その最終草稿形(下書稿七)と、漢字一字の異同のみで本文が同一であるところから、春頃には(了稿)の選択と再編への手入れがおこなわれていたかとみる。新規・起稿は、既に指摘したとおり、三二年八月発行の『女性岩手』創刊号に2篇掲載されていることから、少なくとも夏頃にはもうおこなわれていたはずである。

文語化・稿については、三二年一月発行の『女性岩手』第4号に「保線工手」が載るところから、秋頃にはおこなわれていたか、とみられる。ただ、注6にその草稿の動きをまとめておおり、ほとんどが口語稿の余白を用いて開始しているが、その展開に未使用の22系用紙を用いることが意外に少なく、口語稿余白からいきなり定稿用紙に向かう場合が比較的多く見られる。そのあたりから、展開のピーク自体は、22系用紙に余裕もなくなつて、定稿用紙の使用時期に重なる段階にあつたか、という想定ができるのではなからうか。

(注)

1 書簡390、三一年九月一七日付鈴木東蔵宛。

今回の旅程充分の成績を得度壁砂見本をも本日四五種製作致居候

とあつて、肥料のみならず、すでに搗粉の製造販売も提案・実行していたが、さらにこうした建築材料までも営業品目に入れて、東北砕石工場の不振を挽回しようというのである。伊藤良治『宮澤賢治と東北砕石工場の人々』第三章六・七参照。

2 三十二年一月二十九日の書簡402（高橋久之丞宛）によると、

咽喉気管支の疾患にて少し強くもの言へば、数日の間病状逆行し尚茲一ヶ月は病室を離れ兼ね候間：という具合である。とても雨ニモマケズ手帳段階で「就全癒」などともない。

3 小倉豊文「余説1「雨ニモマケズ手帳」と他の手帳、並びに幻の「病中記」について」で、本稿に引用した『兄妹像手帳』の記述が『雨ニモマケズ手帳』と「内容的に相通するものがあるのではあるまいか」と既に指摘している（『雨ニモマケズ手帳』新考』所収、東京創元社一九七八）。

4 「文語詩稿」試論（『宮澤賢治 透明な軌道の上から』所収 新宿書房一九九二）。

5 初期論の注36参照。ただし、三一年の《文語詩稿》は初期稿「後」段階で、〈定型化〉を補整・補強するという傾向にあり、そのために正確な文語法や漢詩作法を参考にする必要を感じたから、「文語文典／漢詩入門」を求めようというメモを、『兄妹像手帳』に記した、とも考えられる。

6 以下、具体的に作品の形成を、『新校本全集』第七巻校異にしたがってみるが、形成過程に異見がある場合も、校異の指示する下書稿の逐次番号をアラビア数字で、その序列を示した。作品名は定稿題名、あるいは無題の場合は冒頭句で、その5字までを掲げる。

図表中の略号や符号について、数字は草稿序列番号、斜体数字は中断・断片など未完稿。既使用紙。序列番号の傍ら、1はイール印原稿紙、1は丸善特製二原稿紙、3は赤野用紙、2は無野用紙、3は26系用紙、2は24系用紙、1は22系用紙、1はSN原稿紙、5は定稿用紙、清は赤野和半紙など。ウは用紙裏、ヨは用紙余白、カは口語稿に重ね書き。鉛は鉛筆、赤は赤インク、藍はブルーブラックインク。1↓2は同一用紙で次の段階に継続展開の意。

①は春と修羅第二集、②は春と修羅第三集、詩は詩ノート、歌は歌稿B、冬は冬のスケッチで、鉛は鉛筆手入れ、赤は赤インク手入れ。装は装景手記ノート、東は東京ノート、王は王冠印手帳、孔は孔雀印手帳、GはGERIEF手帳、兄は兄妹像手帳、雨は雨ニモマケズ手帳。☆は定稿が存在しないので、定稿定型は想定。発は雑誌等への発表形、清は清書稿、扇は扇面稿、筆は毛筆墨の習字稿。詩人による符号に「了」印、鉛赤藍青は〈写〉印。白抜き数字は遺稿整理時番号、1はNo.1番の場合も含む、0は10番の略、●は無番稿、白抜きでない枠囲み数字はその作品にかかわらないものと推定。

詩形は、連形式とみるものを1連の行数を丸囲みした数字で連構成を示し、行形式とみるものを行数を枠囲みしたもので示した。【再編段階の了・発展稿（了稿からの発展）】

詩題	初期稿	再編稿	最終草稿	開始形	最終形	定稿
月の鉛の雲	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6 既 7 既 8 既	鉛 5	④	④	6
酸缸	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
病技師(一)	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
遠く琥珀の	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
うたがふを	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
四時	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
鐘うてば白	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
腐植土のぬ	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
二山の瓜を	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
悍馬(一)	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
猥れて嘲笑	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
廃坑	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
ひかりもの	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
羅沙売	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
崖下の床屋	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
心相	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
コバルト山	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
西のあをじ	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
老いては冬	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
セレナーデ	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
鷺はひかり	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
訓導	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
ゆがみつゝ	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
職員室	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④
水部の線	1冬 2 ↓ 3 ↓	4 ↓ 5 ↓ 6	鉛 4	④	④	④



黄昏	齒科医院	雪の宿	○麻打	岩手山巔	そのときに	川しろじろ	いたつきて	硫黄	菱花	毘沙門の堂	水と濃きな	僧の妻面膨	沃度ノニホ	氷雨虹すれ	盆地に白く	夜をま青き	ほのあかり	乾かぬ赤き	氷上	こらはみな	月のほのほ	機会	丘	恋	われらひと
----	------	-----	-----	------	-------	-------	-------	----	----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	----	-------	-------	----	---	---	-------

歌									詩	二	二	既						歌	歌	歌						
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2																2	2	2	2	2	2	2	2	2

3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	4	4	3	3	3	2	3	4	4	4	

3	3	4	3	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	5	3	4				
青	鉛	鉛	藍	青	藍	鉛	鉛	青	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	3	3			



水権松にま	・ 1≡				
電氣工夫	1≡ ↓				
○商人らやみ	詩 1≡ ↓			2≡	
樹園	1≡ ↓			1≡	
叔母枕頭	1≡ ↓			1≡	
釜石よりの	1東 2≡ ↓			ヨ	
宗谷(一)	1≡ ↓			鉛5	
僧園	1≡ ↓				
製炭小屋	1≡ ↓				
このみちの	歌赤 1≡ ↓				
ひとひはは	1≡ ↓				
せなうち痛	1≡ ↓				
敗れし少年	既1 2≡				
小祠	既1 2≡				
盛岡中学校	1≡ ↓				
☆早春	1冬赤既 <sup>アガ</sup> 2≡ ↓				
化物丁場	1冬鉛 既2≡			4青4	
こんにやく	1冬鉛 既2≡			鉛4	
Romanzelo	1冬鉛 既2≡			4鉛4	
涅槃堂	1雨				
記念写真	(1) <sup>△</sup> ↓				
公子	(2) <sup>△</sup> ↓				

○「車中」(二)、○「麻打」、○「小きメリヤス塩の魚」の形成過程については、それぞれ島田『文語詩稿叙説』附章の3・4・5節を参照されたい。

○「商人ら」は、詩句の連続性や符号の意図という観点からすると、

下書稿 用紙

題名

詩形・符号など

1 一 王冠印

④⑥ 121・122頁

・(二) 22系

②④④②

2 三 22系

③④②

3 二 22系

③④②

病起

と、『王冠印手帳』の後半1を受けて、

三の病起が形成され2、それをふまえて二の余白に3を展開して(写)印を与えて、定稿

【再編段階の新規一起稿】

形成の時期

二〇・三二年

再編稿

最終草稿

開始形

最終形

詩題

初期稿

再編稿

最終草稿

開始形

最終形

社会主事佐

肖像

中尊寺(一)

暁眠

柳沢野

あかつき眠

砲兵観測隊

軍事連鎖劇

病技師(二)

きみになら

かれ草の雪

吹雪かゞや

浮世絵

一才のアル

二月

・  
・  
・  
・

1冬

1冬

2青

②②②②②②②②

②②②②②②②②

1東

1雨

2青

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1歌鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1歌赤

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④

1冬鉛

1雨

2鉛

④④④④④④④④

④④④④④④④④







構成とみられ行構成とはみない。「種山ヶ原」「ポランの広場」は連番号・句読点が定稿にない。  
 22系用紙に起稿したものに「駅長」がある。これには「了」印が与えられていない。ただ、遺稿整理時番号は1番が打たれているので、初期稿段階の可能性もあり保留する。

駅長  
 (1?)

【再編段階の文語化・稿】補は第三集補遺。

庚申 萌黄いろな 五輪峠 牛 保線工事 早俣 流水 祭日(二)	訪問▽ 既1二〇五三ヨ↓34 既1七二七ヨ↓2 既1一〇四六ウ 既1七三九方 既1七三四方↓23 既1七四一ヨ↓2 既1一〇一四方 既1一〇四二ヨ 既1一〇四三方 既1一〇五六ウ	既1五〇六ヨ 既1四一五ヨ 既1一六ウ 既1一二六ヨ 1↓2 既1三二一方 既1三九ウヨ	三〇・三一年 三二・三三年	詩題 初期稿 再編稿 最終草稿 開始形 最終形 定稿	三〇・三一年 三二・三三年 三三年
天狗草けと 朝 悍馬(二) 水霜繁く霧 厩肥をにな 白金環の天 峡谷早春 短夜 村道 秘事念(二)	既1二〇五三ヨ↓34 既1七二七ヨ↓2 既1一〇四六ウ 既1七三九方 既1七三四方↓23 既1七四一ヨ↓2 既1一〇一四方 既1一〇四二ヨ 既1一〇四三方 既1一〇五六ウ	既1五〇六ヨ 既1四一五ヨ 既1一六ウ 既1一二六ヨ 1↓2 既1三二一方 既1三九ウヨ	三〇・三一年 三二・三三年	詩題 初期稿 再編稿 最終草稿 開始形 最終形 定稿	三〇・三一年 三二・三三年 三三年

上流	南風の頬に	深雨	巨豚	青びかる天	開墾地	たぐかたく	土をも掘ら	宅地	温く妊みて	残丘の雪の	副業	ひとびと酸	すゝきすが	雪うづまき	来賓	林の中の柴	日本球根商	さき立つ名	玉蜀黍を播	秘事念	暁	けむりは時	夜	馬行き人行
----	-------	----	----	-------	-----	-------	-------	----	-------	-------	----	-------	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	-----	---	-------	---	-------

・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

既1ヨ既2「一〇八〇」ヨ	既1「七二八」ヨ	既1「一〇三二」ヨ	既1「一〇七七」ヨ	既1「一〇五九」ヨ	既1「七三二」ヨ	既1「一〇〇八」ヨ	既1「一〇三七」ヨ	既1「一〇二五」補退耕ヨ	既1「一〇三九」補雲ウ	既1「七三五」補みんなカ	既1「事件」ヨ	既1「めづら」ヨ	既1「職員室」ヨ	既1「ヨ既2「法印の」ヨ	既1「病院の」ヨ	既1「四信五」ヨ	既1「軍馬補カ」ヨ	既1「憎むべ」ヨ	既1「鳴いてカ」ヨ	既1「カ」ヨ	既1「夜」ヨ	既1「湯本のカ」ヨ	既1「夜」ヨ	既1「湯本のカ」ヨ
--------------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	-----------	-----------	--------------	-------------	--------------	---------	----------	----------	--------------	----------	----------	-----------	----------	-----------	--------	--------	-----------	--------	-----------

2 藍5	2 青5	1 鉛5	1 青5	・	・	・	・	1 鉛4	1 鉛4	1 鉛4	2 鉛4	3 鉛4	3 赤4	2 鉛4	2 鉛4	2 鉛4	2 鉛4	2 藍4	2 藍4	4 鉛5	1 鉛5	4 鉛5	1 鉛5	4 鉛5
------	------	------	------	---	---	---	---	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④	④④④④
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

いざ渡せか	既1 爺さんヨ
曇りてとぎ	既1 こころヨ
月光の鉛の	既1 鉛いろウ↓2
館は台地の	既1 来訪ヨ↓2
あくたうか	既1 熊はしヨ

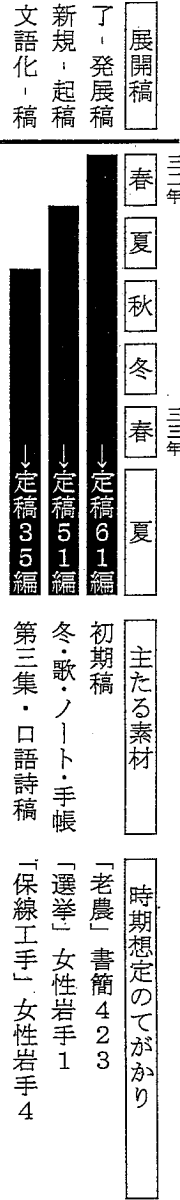
(補遺詩篇夜)

なお、「白金環の天末に」の草稿最終形には、④④が2組形成されて、のち定稿清書時と推定する定稿形に向けた手入れがある。「残丘の雪の上に」の草稿最終形④②④の②は消し忘れとも考えられる。

2節 再編稿の熟成

1

未定稿として置かれているものうち、再編段階にも展開したかとみられるものも含めれば、200編に近い数が展開したとも推定される、その再編のながれについては、次のようにも整理できる。



再編に立ちあがった詩人が、まず手がけたのは前年に途絶していた初期稿から、再編に足るものを取捨選択し発展させてゆくことであつたろう。それを仮に「了・発展稿」と呼称すると、130編あまりの〈了稿〉(了)の符号が与えられていないが、初期稿で多く用いられる無野用紙に起稿した「紀念写真」「公子」「涅槃堂」を含めておくから、了・発展稿として結果的に61編が定稿に向かった。そのうえに、初期稿ではとりあげられなかった素材を文語詩化した、仮称「新規・起稿」群の展開があり、さらには、口語稿を文語化した、仮称「文語化・稿」群も加えて、そこからは、それぞれ51編・35編が定稿に向かつてゆくことで、再編作業は果たされたといふことである。その過程で、詩稿の熟成はどのような階段を踏んでいったのか。たとえばここに、その逐次形のひとつを、書簡に引用された詩稿がある。

時期推定	逐次	用紙	題名	手入れ	備考
三〇年	下書稿三	24系	↓施肥↓肖像	鉛↓鉛	遺稿No.1番、鉛と藍の(了)付与
三一年か	下書稿四	既26	肖像	鉛	遺稿No.1番、既は既使用の紙
三二年か	下書稿五	三ウラ	肖像↓老農	鉛↓鉛	(遺稿No.1番)
三二年六月	下書稿六	用箋		鉛	書簡423、遺稿番号なし
三三年か	下書稿七	22系	老農	鉛↓鉛↓青↓藍	遺稿5番、鉛の(了)付与
三三年七月	定稿	定稿	老農	藍↓藍	

一九三二（昭和七）年六月に推定されている書簡形を下書稿六とした「老農」で、詩稿用紙に展開した段階から、新校本全集校異にしたがいつつ、その過程を整理してみると、右のようである。たどりついた定稿本文は、次のとおり。

老農

①火雲むらがり翔べば、 そのまなこはばみてうつろ。

②火雲あつまり去れば、 麦の束遠く散り映ふ。

〔了稿〕を含む下書稿三以後、2句／2連（草稿は2行／2連）という詩型は不変であった。詩の場の焦点といえよう「火雲」の語も不変である。「火雲」はひぐも（下書稿四には「ほぐも」のルビ）、夕焼け雲の意で用いられる例を日本国語大辞典（第二版）は引くが、「ひでりぐも」（筑摩書房第一次全集月報の語注）との解釈も提案されていたように、この詩の場を理解するには、「火雲」の意味をどうとるかにあろう。「むらがり翔べば／あつまり去れば」という早い動きを与えているところに注意すると、これは夕焼け雲でなく、乱れ飛ぶひでり雲とみたほうがよいのではないか。ここでは、その立場から読みすすめてゆくこととする。

〔了稿〕段階で「肖像」と命名され、下書稿四が継承、下書稿五で「肖像↓老農」と命名に変化が起きているので、この段階で再編に向かうものと想定する。すると、下書稿五において、〔了稿〕以後の「肖像」詩篇が最終地点に到達したうえで、そこから、「老農」詩篇へと詩想が変転した、ということである。その変転の向かうところに、しだいに見定められてくる再編の針路にしたがった、詩稿の熟成過程をうかがうことができるかもしれない。

まず、「肖像」詩篇と「老農」詩篇を重ねて示せば（棒線は島田）、

肖像

老農

火雲むらがり翔べば

そのまなこうつろに遠し

火雲むらがり翔べば

そのまなこはばみてうつろ

火雲むらがり去れば

そののんどしづにひきつる

(鉛開始形)

火雲むらがり偏れば

のんどこそしづにたゆたへ

(鉛手入れ形) 1

とあって、「肖像」という自らのものとも他者のものとも分かちがたい題名が、明らかな他者である「老農」に指定されるとともに、その人物の相貌には、その意思が顕わに浮かびあがっている。かつて出合った「野の師父」の面影が重ねられているようにも思える。<sup>4)</sup>

「肖像」の「まなこ」や「のんど」の奥には、「うつろ」で「ひきつる」、漠とした不安や畏れを潜ませて、「火雲」の下に立ち尽くしているようにみえる（火雲のもたらすものに、対処できぬ未熟さ）。けれども、「老農」（よく熟練した農夫）の「まなこ」や「のんど」には、「はばみ」「たゆた」という、気色が現われている。「老農」と命名されたとき、その頭上にある「火雲」はもうただの夕焼け雲でなく、気がかりなひでり雲としてとらえられてもよからう。すると、はばむとは「妨げ支フ」（『言海』、ちくま学芸文庫版）意であって、能動的な姿勢をみるが、たゆたふとは「思ヒテ決セズ、タメラフ」（言海）意で、優柔不断な態度にもみえる。そうした背反する情況に置かれるのは、相手が冷害や旱害をもたらす「天」であってみれば、ありうることだ。ただ、たゆたふのは、行為にまだならなくともそこに「思ヒ」のあることをけして見のがしてはなるまい。

つまり、ここに造形されたのは、襲いくるものを阻まねばならぬという、抵抗の思いをくぐもらせつつ、「火雲」の真下、立ちほだかっている者なのではないのか。「こそ、たゆたへ」という係り結びによる已然形止めの強度にも、そのような人物像が造形されているとみえる。初期稿段階における記憶の精査を踏まえつつ、この飢饉の風土を生き抜いてきた熟練の農夫のありように、詩人は自らの闘いの志を重ねているのであって、そこに、「社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ」とした残生の〈志〉の投影をみ、《文語詩稿》再編の兆しを認めるのである。

ところがこれを、書簡423への引用で、

そのまなこはばみてうつろ ↓ わがまなこはばみてうつろ

と（傍点、島田）、他者からわれへ置き換えて、「それにしてもどうしてもこのまなこではいけないと思ひながら、敗残の私にはもう物を云ふ資格もありません」と書き添えている。すると、引用した詩稿は我が事として引かれ、「敗残の私」の姿そのものであるのか。それは〈志〉の後退もしくは衰退としてあるのだろうか。だが、書簡中では、

けれども只今の県下の惨状が今年表や稲がとれる位の処でどうかなるとは思はれません。

という言辭を承けた「敗残の私」ということばだった。さらには、

からだが丈夫になつて親どもの云ふ通りも一度何でも働けるなら、下らない詩も世間への見栄も、何もかもみんな捨てゝもいと存じ居ります。

と、詩稿引用の直前あたりに断言もなされていた。それらは、熱い思いから衝いて出た表白であり、その文脈のなかで自白された、まさしく農業技師としても田畑に立つこともならない現状認識としての「敗残の私」なのだ。言い訳でなく、むしろ真正面から冷徹に見据えた自分の立場それ自体を自覚したものであつて、せめて、「はばみて」「たゆた」うている、抵抗の〈志〉をいまだ秘めた自画像としてこの詩稿を私信に引用した、と考えられてよい。

〈志〉と現状認識の間に揺れながら手が入られたこの下書稿六の存在は、再編の作業というものが、詩人の内部の動きにもなつて、たゆまずすめられていたことを示しているのであつて、むしろ到達でない。詩稿のさらなる熟成のために、詩人の内部の高まりに応じてなお手を入れつつづけている。詩稿用紙をあらためて、展開させた下書稿七では、次のようにも詩の場が変容するのである。

老農

火雲むらがり翔べば

そのまなこはばみてうつろ

(手入れなし)

火雲むらがり偏れば

「・↓その」のんど「こそ↓・」し

づにたゆた「へ↓あ」

(鉛開始↓手入れ) 2・3

火雲あつまり去れば  
麦束を遠くあぎたふ

(青手入れ形) 4

(手入れなし)

火雲あつまり去れば  
麦「束を↓の風↓の束」遠くあぎたふ

(藍手入れ形) 5

青インク手入れによつて、八月の収穫期におこなわれた「麦こなし」を想起させるとも、あるいは、

為に当地方の主作物、稲、あの青い槍の葉は



常年に比し既に四割も徒長を示し

そのあるものは疾く倒れてまた起たず

そのあるものは花なく白き空穂を被たり

またかの六条あるひは四角

芒うつくしき麦類は

畑地のなかに早くもこぼれ

或は穂のまゝ芽をいだし

そのとりいれはいそがしく

またたよりなく見えにけり

(一歳は世紀に會つて見ぬ) 下書稿二)

といった凶作のために追われた麦の収穫のさまともみえるような時と場が示されて、畑地を舞台とした詩の場が現われる。

「大正〱昭和戦前期をとおした岩手の農業の基本的な特徴」のひとつに、「北上川流域のごく狭い平野部をのぞけば、岩手は典型的な畑作地帯、というより山村地帯に近い性格をもっていた」ことが挙げられる。麦類はその主力であった。稲作以上に畑作が農家の生活を支えていたことを知れば、この詩の場が意味するところはけして軽くはない。青インク手入れによつて、第一連の凶作の兆しに抵抗の意思を示す老農像に対して、麦の収穫を急いでいる第二連が対置されて、農民の切なる思いをよそに、凶作になすすべもない農業の後れ—近代化に取り残された暗部としての農村の現状が、提示されてくる。

詩人は、このあたりでたぶん(写)の符号を与えている。再編段階とみる下書稿五の開始形を起点とすれば、詩稿用紙上では5段階の手入れを経てやつと定稿用紙に向かうに至った、ということだ。しかも定稿の開始形は、下書稿七「遠くあぎたふ」を「遠くたゞずむ」とさらに推敲を加えたものだった(定稿上では、なおさらに手が入れられて「遠く散り映ふ」に落ち着く)。初期稿である(了稿)が、再編段階において了、発展稿として採用され、詩稿の成熟を果たしてゆくためには、そのようなけしからやかではない行程が必要だったのである。

2

三一(昭和六)年秋以降、病に倒れた詩人は、農業技師としての再起も断たれ、《文語詩稿》初期稿の制作も途絶して、闘病のさなかにあったが、それでも、「社会↓・」農村を最後の目標として「只猛進せよ」(『雨ニモマケズ手帳』)という(志)を立て、それを土台として三二年の春頃に、《文語詩稿》の再編を立ちあげた、という見取り図を描いてみると、たとえば「老農」の再編にみえる、けして

平坦でない手入れ過程には、再編作業というものの内実が象徴的に現われている、とみてはならないだろうか。

殊に、六月に推定される書簡で、「それにしてもどうしてもこのまゝではいけないと思ひながら、敗残の私にはもう物を云ふ資格もありません」と認めたとき、詩人は、「老農」詩篇を、自画像の詩篇に置き換えるという、後退ではないとしても、停滞していることを露呈する。「物を云ふ資格もありません」とは、農村改革にかかわって直に発言する位置にはもう立つこともできない、という冷徹な自覚であったと私は先に考えたが、このことばは、もうひとつ、「それにしてもどうしてもこのまゝではいけないと思」う、その〈志〉を、ではどう「猛進」させてゆくのか、それがつかみきれしていない、という行間の意味があつて、だからこそ「老農」の引用で「わが」への置き換えという揺れが起きた、ともみられるのである。

第二、自然

第三、「田園」——100頁 200日

——社会、——15頁

心象 一病氣、——50頁

スケッチ 一信仰、——15

「生活」——20

第四、文語、

(詩法7)

再編を立ちあげたけれども、それをどこに向けて収斂させてゆくのか、〈志〉の〈詩的実践〉としての《文語詩稿》にとるべき針路が定まらない、そうした始発段階の未定状態がそこにはあつた、と想像される。この想像が必ずしも無稽なものでない、その裏付けとして、『新校本全集』が詩法の7に位置づけたメモが意味するところに迫ってみたい。

右に示した詩法メモ7は、三一年前後から用いられた22系用紙に起稿した、番号も日付も与えられていない口語詩稿〔職員室に、こちが一足はいるやいなや〕の余白に書きつけられている。

「第二」が『春と修羅第二集』を、「第三」が『春と修羅第三集』を暗示しているとみてよかるうが、「第四」の「文語」については、杉浦静は、このメモを「昭和六年前後」のものともたうえで、「文語のスケッチの性格をもつ」ものとして、たとえば「疾中」の文語の詩」のような存在を想定している。けれども、「第三」には、詩篇の分野立てにせよ頁数の設定にせよ、相当の具体性を帯びていて、それだけの詩稿がすでに動いている状況が前提としてあつた、とみうるところがある。たとえば、あの「200日」分のスケッチを指定できるほどに、蓄積されていた段階とみるべきであろう。つまり、『春と修羅第三集』がたぶん詩ノート稿をもとに、赤野用紙や24系用紙に起稿されはじめた「昭和六年前」ではなく、番号・日付を喪失した口語詩稿もが22系用紙に展開する「昭和六年後」にも想定すべ

きである、と思う。

すると、三〇（昭和五）年に、主として26系・無野用紙上で、「冬のスケッチ」や『文語詩篇ノート』から題材を得た「文語スケッチ」↓「文語詩篇原形」（黒クロス表紙Bの記述、後述）と呼称すべきものが起稿されはじめ、三一年にかけては、100編を超える詩稿を展開させていた『文語詩稿』初期稿が、詩人の眼前にはあるものであり、「第四」の「文語」に相当する実体は確かにあった、ということである。

ふたたびメモの記述に戻ってみると、口語詩稿の文語化（「来賓」）が、用紙オモテの余白に鉛筆でおこなわれており、その用紙ウラの余白に「天地を逆に」（新校本全集校異）して、このメモは書きこまれていた。わざわざ用紙を逆に置き換え、その余白をあらためていたのであり、口語詩稿の手直しのながれとは別に書きこんだようにもみえる。そこに、口語詩稿の形成途中の同時的メモではなく、少なくとも口語詩稿の到達をみたであろう三一年の半ば過ぎ、あるいは三二年に入ってから、ということさえも視野に入れることができ、るありようなのだ。ただし、三二年以降、了・発展稿や新規・起稿によって展開した『文語詩稿』の再編が、「第三」に相当する『春と修羅第三集』のスケッチ群から、大量の文語化・稿を受け容れる、という事実からは、三二年後半期の書きこみであるはずはない。

このように、メモの形成時期を位置づけられるとみたらうで、詩法メモ7の記述について、書かれていないことに注目しつつ、とらえ直して試してみると、次に掲げるようにも整理できる（図表中の（ ）は書かれていないが前提として詩人には認識されていたと推定するもの、〔 〕は書こうにも詩人にとって未定であったと推測するもの）。

順序	文体	主題	構成と規模
第一	(口語、心象スケッチ)	(自己)	『春と修羅』
第二	(口語、心象スケッチ)	自然	『春と修羅第二集』、赤野二次清書稿段階
第三	(口語) 心象スケッチ		「田園 100頁 「社会、 15頁 「病氣、 50頁 「信仰、 15 「生活 20
第四	文語、(心象?スケッチ)		

すでに「第一」「第二」は、「(心象スケッチ)」集として『春と修羅』を出版していたし、「第二」も、その詩稿が赤野用紙上で二次清書の段階にまでできており、相当熟成していたのである。だから、「第一」「第二」は省略されたし、「第二」も、集の構想主題「自然」を提示する

のみで事足りた。第二集の枠組みがこの段階で詩人に自明なことであったから、文体・構成と規模などについては省略した、といえる。それに対して、「第三」は、構成や規模といった具体的な枠組みを提示できるほどに詩稿が熟成しつつあった、ということであったろう。詩集構想の主題をまだ提示できないところに、熟成途上という状況もうかがえると思うからである。ただ、規模にかかわって、「200日」と記述したあたりに、詩人は集の主題についてその方向を暗示するようにみえる。「第二」が農学校教師時代の後半を題材にしていたので、「第三」における200日とは、羅須地人協会を創設して農民とともに農業改良・農村改革を實踐しようとした時代の、その日々を指しているだろう。ならば、「農村」にかかわるものが構想主題として提示される、という推理も可能である。

けれども、「第四、文語」の場合、その事態はかなり違っている、と読める。文体のみ提示して他の記述がないのは、省略でなく、初期稿以来の蓄積はあったものの、ほんとうに未定であった、ということではなかったか。

もし、詩法メモ7を三一年半ば過ぎのものとするれば、当初の『文語詩篇ノート』による自分史構想を超える、現在を題材とする文語メモが手帳に現われ、詩稿用紙上にも起稿され始めて、その針路を見失いつつあったわけだし、三二年に入ってからのもものとするれば、「第三」集構想を意欲的に描いているところから、その文語詩化など考えにもない時分、つまり、『文語詩稿』の再編がおこなわれ始めた頃なのであって、いったん途絶したものを再構築してゆく、その構想に具体性を求めることがまだ無理であった、という事態が、そこには想定される。要するに、『文語詩稿』再編の始発は、初期稿段階の蓄積をいかしつつ、取捨選択を経た（了稿）の新たな発展や再編にふさわしい新たな題材の発掘による新規稿の展開など、詩稿の熟成にこれから向かおうとする、いわば混沌として展開している状況であつただろう。

3

先に、詩法7のメモ時点で、「第二」集の詩稿が「相当熟成していた」し、「第三」集は、具体的な構成や規模を提示できる程度に「詩稿が熟成しつつあった」と指摘しておいた。

年		二五		二六		二七		二八		二九		三〇		三一		三二		三三	
発表行動	8																		
定稿到達	4																		
		6		2		0		0		5		1		1		0			

▼不採用・送稿準備を含めた。  
送稿時と発表時とに大きなズレがある場合、送稿年に  
教えた。

そうした状況がうかがえる証のひとつに、詩稿を雑誌発表するという、詩人の行動がある。ただし、発表のほとんどは「第二」に相当

するもので、「第三」に相当するのは二八（昭和三）年と三〇年の各一編、口語稿では『春と修羅第二集』を主体として詩稿の展開に意欲的に取り組んでいった実態が、そこにも現われているのだが、それにしても手帳やノート段階の草稿を、赤野の詩稿用紙を用いて起稿しはじめた、とみられる展開初期の時分から、作品発表を大胆におこなっていたことに注意したい。右に掲げたような実態だ。<sup>10</sup>

これを見ると、二九（昭和四）年以前の雑誌発表稿には、のちの定稿用紙に向かうことのない作品が少なからず含まれている。二九年以前と三〇年以後とは、詩稿の熟成と発表することとの認識について、詩人の内部では変容があったとみてよいであろう。

口語稿のいちいちについて具体的な本文形成の過程をたどる余裕が、本稿にはないので、二九年以前の、定稿に至ったものにおける発表形の位置づけを、その過程にみてもみよう（『新校本全集』校異の逐次による、「発」は発表形、「一↓二↓…」は下書稿の逐次、二などとするのは22系用紙上、「定」は定稿。以下の分析表も同上）。

時期	詩番号	定稿への過程	題名	雑誌
二五・七	一五六	発↓一↓二	鳥	貌・盛岡
	三一七	発↓一↓二	過労呪禁	〃
	一七	発↓一↓二	丘陵地	銅鑼・東京
・一〇	四〇九	発↓一↓二	冬（幻聴）	虚無思想研究・東京
・一二	三三一	発↓一↓二	孤独と風童	貌・盛岡
二六・一	三三一	発↓一↓二	秋と負債	銅鑼・東京
・一	三〇一	発↓一↓二	心象スケッチ昇髯銀盤	〃
	四〇八	発↓一↓二	春	貌・東京
・七	九〇	発↓一↓二	風と反感	銅鑼・東京
・八	九〇	発↓一↓二	「ジャズ」夏のはなしです	〃
二七・一	三六九	発↓一↓二	陸中国挿秧之図	無名作家・花巻
	三四五	一↓発↓二	銀河鉄道の一月	盛中校友会雑誌
・一二	四〇三	一↓発↓二		

二六（大正一五）年以前のものは、形成の始発にすべて発表形が位置づけられている。二七（昭和二）年以後は、下書稿一を引き受けるかたちで発表形が位置している。こうした実態に、もちろん詩人が表現者としての自覚をもって、その時点の詩稿の達成をよしとして発表に及んだらうことは認めるにしても、結果的にみると、発表形はその後にもさらなる熟成の途に向かうのである。特に、二五（大正一四）・二六年の発表稿の位置に、私は、詩稿の熟成などにこだわらぬ詩人のありようさえかいま見る。実は、そこには、ある意図があ

った。二五年の冬、岩手国民高等学校の開設準備で慌ただしくしていたとき、

夏には村に居ますからそれから夏には謄写版で次のスケッチを拵えますからそしてそれをあなたにも石川さんにも上げますからどうかしづらくゆるして置いてください。  
(書簡215 一二月二三日付)

と、信頼をおいた若い友、森佐一に告げている。その言い分に、「次のスケッチ」を「春と修羅」第二集とみて、「計画はかなり具体的に構想されていたことがわかるが、結局は実現をみなかった」(新校本全集第十五巻校異)という状況を推定しうるように、右の二五年夏から二六年の夏に至る発表行動の支えには、「謄写版で次のスケッチを拵えます」という企画がまずあったのである。同じ頃、詩人は岩波茂雄に宛てては、

わたくしはあとで勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました。その一部分をわたくしは柄にもなく昨年の春本にしたのです。…こんどは別紙のやうな謄写刷で自分で一冊こさえます。(書簡214a 一二月二〇日付)

と書き、謄写刷りの「鳥の遷移」(二七番稿、『新校本全集』校異で逐次の第一に置かれている)を同封して送っていたのだ。つまり、「心もちをそのとほり科学的に記載し」た段階のものにも、他者に開示する意義を詩人が感じていたわけであり、その発表行動には、詩稿の熟成ということに対する詩人の態度は、まだととのえられていない段階だったといえるのである。

そこから、「詩稿の熟成にこれから向かおうとする」段階に入るのは、二七年からとみられ、その段階はやはり混沌として展開していた状況であった、ととらえておいてよいのであろう。そこに、二八年から二九年にかけて「疾中」を余儀なくされたから、詩稿自体の熟成作業は停滞するほかなかったとしても、詩稿の熟成ということに対する詩人の態度は深まっていった、と思われる。その「疾中」から立ちあがって、5編を発表するに至った三〇年の実態はどうか(二は24系用紙)。

時期	詩番号	定稿への過程	題名	雑誌
三〇・一一	二	↓発↓二 ↓定	空明と傷痕	文芸プランニング・東京
	三二九	一↓二 ↓発↓三↓四↓定	遠足許可	〃
	一〇六八	一 ↓発 ↓二 <sup>2,4</sup> ↓定	森	〃
	三七八	一↓二↓三↓発 ↓定	住居	〃
(三二・四)	二五	一 ↓発↓二 ↓定	早春独白	岩手詩集・久慈、送稿は三〇・九

発表稿の位置づけは、二七年段階同様、下書稿一を引き受けるかたちで発表形が位置しているものと、発表形以前の下書稿に厚みがあるもの（三二九・三七八番稿）とが、混在する状況が現われている。濃淡はあるけれども、詩稿の熟成に向かいつつある詩人のありようがうかがえるところだ。三一年にまったく発表のないのは、前半には、再起をかけた東北砕石工場の農業技師としての奔走の日々があり、後半には、闘病の日々があった、そのことが外因であろうが、詩人の内部では、詩稿の熟成に対する考えがさらに深められていったとも思われる。殊に、後半の闘病期に、それは想定される。

かろうじて生にとどまった三二年以降、三三（昭和八）年六月までの発表稿の位置をみると、左のとおり、発表形は定稿の直前にある（二は東北砕石工場花巻出張所用箋）。

時期	詩番号	定稿への過程	題名	雑誌
三二・一	三〇五	一↓二	客を停める	詩人時代・東京
三二・二	三〇四	一↓二	半蔭地選定	新詩論・東京
三二・三	五〇八補	一↓二↓三	詩への愛憎	詩人時代・東京
三二・四	五一一	一↓二	移化する雲	日本詩壇・東京
三二・五	三二四	一↓二↓三	郊外	現代日本詩集・東京
三二・六	三三一	一↓二↓三	県道	〃
三二・七	三三六	一↓二	心憂 <sup>こころ</sup> 春谷眺臥	天才人・盛岡 送稿準備
三二・八	八六	一↓二	山火	日本詩壇・東京、送六月以前か

その六月に定稿用紙を発注したとみられるから、この段階の詩人には、詩稿の成熟ということも意識されはじめ、口語稿によるひとつの到達に向かっていたであろう。そうした実態が、ここに現われているといえそうである。七月以後に至っては、発表形は、「定稿との前後関係は必ずしも明確でない」（二五四番補遺稿）ほどに、あるいは「定稿の発展形」（一五八・三二三番稿）とみなしうるものもみえ、成熟の徹底をはかるために、定稿にさらに手を入れるという詩人の姿さえある。

七	一五四補	一↓二	萩嶺先生の散歩	詩人時代・東京	発表稿位置？
七	一五八	一二↓三↓四	花鳥図譜、七月	女性岩手・花巻	
一〇	三二三	草123↓一↓二	産業組合青年会	北方詩人・福島、生前送稿か	

投稿した童話原稿の取り下げを願う森佐一に宛てた書簡の下書きに、「新聞に名が出たりするとおやじが怒るので何とも困るのです」(書簡457 三三年二月二〇日付)とあったように、病床にある自分の立場を気かけながらの発表行動であったのに、依頼を受けざるを得ない人間関係もあつたにちがいないが、10編を超える発表意欲をみせ、定稿にさらなる手を入れたこの三三年が、詩人自ら、詩稿の成熟を果たそうとした段階であつたと推定されるのである。

4

こうして、口語稿の詩稿の熟成が、雑誌発表稿の存在から、ある程度たどりうると思われるが、実は、その発表という行為が、三〇年以降、詩稿の熟成ということと詩人の内部で深くむすびついてきていた、とみうるふしもある。三〇年後半から使用したか、と推定される、草稿の整理に用いられた黒クロス表紙A・B・C・D・E・Fの存在だ。そこに記された記述群について、《文語詩稿》の関連も含めて、要点を摘記して、後に掲げる(記は筆記具、ラベルは表紙に貼られたものに、書きこまれたもの、白抜きは転用)。

口語稿は、三〇〜三一年の鉛筆による書きこみ段階からすでに、「定稿」と「未定稿」に分別しうる程度の詩稿の熟成がはかられようとしていたとみられる。鉛筆による記述のない『春と修羅第二集』も先行して展開していたから、同様の状況であつたろう。

ここで見過ごせないのが、「定稿」・「未定稿」という分別に、「発表」という想念がはりついていることである。すでに、二五、二六年頃の詩人に、「謄写版で次のスケッチを拵え」「(差し、島田注)上げます」という発表意欲があつたことは、前節で指摘したが、そのときの詩人に、「定稿」・「未定稿」という詩稿の熟成にかかわる態度がととのえられていなかつたらうことも述べた。

それが、三〇年後半に、いきなり二分法によつて詩稿の熟成度合いを区別しようとしている。もちろん、ここにいる「定稿」の意味は、三三年段階の定稿用紙に至つた定稿に、まだ直結するものではない。そして、『春と修羅第二集』も『春と修羅第三集』も、同じ「定稿」・「未定稿」という区分を示してあるけれども、その内実は、質的に同一でなかつたはずだ。「発表」に与えられた詩人の注釈に、次のとおり差異がみられるからである(傍線は島田)。

定稿 D 何処ニ発表スルモ差支ナシ

C 発表差支ナシ

未定稿 F 廃棄

E 発表不可

『第二集』

『第二集』

『第一集』

『第二集』



絶妙かつ過激な、その言いまわしにそれは現われていよう。赤インクによるその書きこみ段階の黒クロス表紙（Cは記述①が生きている）では、『春と修羅第二集』には力強さがあり、『春と修羅第三集』は素っ気ない。そこに、詩稿の熟成における差異、『春と修羅第二集』の成熟ぶりと熟成の途上にある『春と修羅第三集』のありようがみえる。『春と修羅第二集』は二七（昭和二）年には詩稿用紙上に展開していたし、ほぼ同時期に『春と修羅第三集』も『詩ノート』稿が動いていたとみられるから、時間の堆積のなか、熟成が確実にはかられていたのは、詩稿用紙とノートとの格差をそのままに、三二〜三三年の口語稿がそのような相貌を示しているのも納得できるところだ。この赤インクによる書きこみがある黒クロス表紙は、『春と修羅第二集』でいえば、赤罫用紙による二次清書稿段階を踏まえて、さらなる熟成をはかる22系用紙による展開がみられる三二年のことではなかったか、と私は想定する。

時期	記	鉛	青	藍
三〇〜三一年	春と修羅第一集 (D) (F)	春と修羅第三集 C①定稿、発表差支ナシ E①未定稿、発表不可	文語詩篇（《文語詩稿》） (A) (B)	
三二〜三二年	赤 D①右ハ何処ニ発表スルモ差支ナシ ／定稿 <sub>ラベル</sub>	春と修羅第三集 C②未定稿、原形 ③定稿	A①文語詩篇、尚一考ヲ要スルモ場合ニヨリテ発表差支ナシ／定稿 <sub>ラベル</sub> B①文語「スケッチ」↓詩篇原形（未定稿）、右ハ選ビテ発表スベシ	
三二〜三三年	藍 D①のまま	春と修羅第三集 (Cは文語化で用済みか) E④この篇みな疲労時及病中の心こゝになき手記なり発表すべからず	A②文語詩篇双四聯、尚一考ヲ要スルモホボ発表差支ナシ (文語詩篇双四聯の定稿化でAは用済みか) B①のまま	
八月			A③第二集に加ふるもの未定稿なるも断片として発表差支なし	

そうした実績が、三三年の激しい発表行動を生んでゆくのである。  
たとえば、そのさなかの五月一日、やはり森佐一に宛てた書簡474には、

例の詩らしきもの心象スケッチ、あなたといっしょだったあの岩手山の下の朝を清書しました。どうか何べんもお読み下すってこんな調子に書いたあなたがこれでいゝかどうか ことに「幻」がいゝか佐一がいゝか 佐一の方が詩とはいゝやうですが事実を離れる所がありその辺適宜ご決定下さい。もし原稿別のがよければ葉書一つ下さい。すぐ送ります。

といやつた。「詩らしきもの」とは、「心象スケッチ春谷暁臥」である(三三六 春谷暁臥 一九二五、五、一一)。

森佐一の雑誌『天才人』が「続刊しなかつたため、発表されなかつた」(新校本全集第十五巻校異)が、定稿用紙に至つた。登場人物の呼称の可否を当の本人に訊く、というのは、それが詩稿に対する懸念であつたのは事実だが、採否について「適宜ご決定下さい」と言い放つているのは、今の形に不満ならばこれは掲載しなくてよい、という構えのようにみえ、「もし原稿別のがよければ葉書一つ下さい。すぐ送ります」と、替わりは(いくらでも)あるからすぐにも送る、というのだ。森佐一への信頼が底にあつてこそ素直にみせることができた、定稿用紙の発注を考えていたろう五月の詩人の、これは自信に満ちた姿であつた、と思える。つまり、『春と修羅第二集』の詩稿群が、そこまでは成熟していたのである。

それに対して、熟成途上の『春と修羅第三集』は、その赤インク書きの黒クロス表紙Cが「文語詩稿」の未熟稿の収容に転用されている。「第二」の詩稿群からは数編の定稿化が実現したものの、大量の文語化がはかられたからである。さらに、文語化されなかつた詩稿をたぶんすべて黒クロス表紙Eに合流させて、ブルーブラックインクで「この篇みな疲労時及病中の心こゝになき手記なり発表すべからず」と記して、詩人は封印する。『春と修羅第三集』は完全に解体されたのだ。

5

口語稿と、併走していた《文語詩稿》にも、黒クロス表紙が与えられている。

記述が書きこまれるのは、赤インクによる段階からで、それをやはり三二年のことと想定すると、そこには、口語稿の場合と同様、「定稿」と「未定稿」との指示があるから、そのように分別しうる程度に、《文語詩稿》もまた詩稿の熟成が詩人に意識されてきていた、ということになる。それならば、この書きこみはまだ混沌としていたろう再編当初のものとは考えにくい。

《文語詩稿》も、三二年に雑誌発表がおこなわれていた。花巻で発刊された『女性岩手』誌上で、八月の創刊号に「民間薬」・「選挙」が、十一月発行の第四号に「祭日」・「母」・「保線工手」が掲載されているのである。すると、発表にたる詩稿の熟成が、その時期あたり

に詩人によって認められた、ということだろう。そうすると、この黒クロス表紙への赤インクによる書きこみは、三二年の夏以降にも想定される。その段階で与えられた「定稿」「未定稿」という区分は、しかし口語稿の場合と同質であったわけではない。というのも、黒クロス表紙に書きこまれたもので、「発表」にかかわったものをみると、ひとつは、

A 文語詩篇

尚一考ヲ要スルモ場合ニヨリテ発表差支ナシ／定稿<sup>ラベル</sup>

というものだった。「尚一考ヲ要スルモ場合ニヨリテ」という言いまわしは、口語稿の、

D 何処ニ発表スルモ差支ナシ

『第二集』

C 発表差支ナシ

『第三集』

などの表現にくらべると、くどい、あるいはもってまわったところが、明らかにある。「定稿」に分別しうる詩稿の熟成を認めながらも、まだまだ手を入れなければならない、というあたりに、慎重に熟成をはかっている、そのような状況がうかがえよう。それは、未定稿を収めるいまひとつの黒クロス表紙書きこみからもみえてくることだ。そこには、

B 文語「スケッチ↓詩篇原形」（未定稿）

右ハ選ビテ発表スベシ

とあって、「未定稿」としながらも「選ビテ発表」してよいという。「定稿」が「場合ニヨリテ」発表しうるもの、「未定稿」もまた「選ビテ」発表しうるものというのだから、その選択がまだ緩やかな段階であったことをうかがわせ、未定稿に対して「廃棄」（F第一集・「発表不可」（E第三集）と強く言い切った口語稿の厳しさからは遠い。この段階の《文語詩稿》の熟成が、「未定稿」のものが「定稿」にも移りうる流動性を依然残している、その程度的狀況であったといえるのである。

例としてはわずかということになるが、発表稿の、詩稿形成の過程における位置づけをみると（これも新校本全集校異の逐次により、略符号も本稿4項に同じ）、

時期

題名

再編↓定稿への過程

雑誌

三二・八	民間菓 選挙	一 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 発 ↓ 定	女性岩手1・花巻
三二・一一	祭日 母 保練工手	三 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 四 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 五 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> 一 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 二 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 二 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 二 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> 一 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 二 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 三 <sup>2</sup> / <sub>2</sub> ↓ 発 ↓ 定	女性岩手4・花巻

とあって、たとえば、八月発表の、下書稿に先行する位置にある「民間菓」発表形の場合、詩稿用紙にはまだ起稿していなかったが（先行する下書稿が散逸した可能性も考えられる）、「定稿」（A）に収める予定のもので「場合ニヨリテ発表」したともいえるし、あるいは、「未定稿」（B）に収められるべき段階にあった詩想を、「選ビテ」：発表稿としてまず実現し「：発表」した可能性もある、というありようを示している。ただし、そのような発表形と下書稿との位置づけについては、新校本全集の精確な校異が、手入れ過程を逐次形ごとに閉じたかたちで記述していることに留意するべきで、下書稿の手入れが発表形を巻きこんで（跨いで）おこなわれている可能性もあり、再検討してみる必要がある（本章3節において、手入れ過程の読みとりについては試みたい）。

それにしても、こうした発表稿のおおよその位置づけからも、「民間菓」の例がある八月の実態は、発表以後にも22系用紙へ展開した可能性があると、口語稿の二六・二七年段階の傾向にも重ねられよう、という状況をみせている一方、22系用紙による複数の下書稿を承けた一月の実態は、口語稿の三二年から三三年六月以前までの傾向にほぼ重なる、ということを指摘できそうである。それは、数か月の期間で、口語稿における数年分の手入れ過程を、《文語詩稿》が詩稿によつては実現させていることをうかがわせ、詩稿の熟成は着々と進行していた、ということを示唆しているようにみえる。ただし、「民間菓」のように、発表形とほぼ同文で、しかも手入れがほとんどない下書稿をひとつしかもたぬ異例の熟成度を発揮した詩稿もある、という《文語詩稿》の再編作業がみせている多様性には、留意してゆかなければならない。

その背景のひとつには、読者の存在があつたようにみえる。創刊号に対しては、その第二号に読者「I子」の感想が寄せられた。

すつかり洗練され切つたこの二篇を口誦して見るとき、この田園詩の物語る世界が、空間に再現されるばかりでなく、其の発声さへもがはつきりとときと取れる感じがいたします。

と、表現世界の「洗練」といい、口誦による「発声」の明瞭さといい、その批評はたぶん、詩人にとつても我が意を得たものにならなく、事実、詩人は、第四号に送稿する際、世話役であつたらしい藤原嘉藤治に宛てて、

口語の方をとってゐましたが雑誌の批評を見て考へ直して定形のにしました。

(書簡434)

といつてゐるのだ。ただ、《文語詩稿》の雑誌発表は、以後なかつた。

しかし詩人は、ブルーブラックインクほかによる書きこみ段階に至つて、黒クロス表紙の赤インクによる記述に、

A 文語詩篇「・↓双四聯」

尚一考ヲ要スルモ「場合ニヨリテ↓ホボ」発表差支ナシ

と手を入れるのである。

先後は特定できないが、ブルーブラックインクによつて、「双四聯」の語を書きこんでいる。これは、詩人の創意によるとみられる文語詩定型の作法であり、草稿段階の表記法でいえば4行/2連の詩形が相当すると思われ、この追記には、《文語詩稿》という世界に、ひとつの詩形をいわば標準として持ちこんで、その熟成をいよいよながして、いまそれが相当数展開してきていた段階であることが示唆されているように思える。それが形成されはじめた時期については、少なくとも、雑誌発表稿では一月の3編すべてが4行/2連であるから、「双四聯」の展開が三二年の秋以降にはあつたことが分かるが、「双四聯」形式の詩稿が確かに蓄積されてゆくのは、それ以降のことと推定すべきであろうか。ただし、結果的にいえば、すべての詩稿がその形式にととのえられたわけでないことには、留意しておきたい。

そして詩人は、青インクで「場合ニヨリテ」を削除して「ホボ発表差支ナシ」として自信の深まりを示し、それぞれの詩稿の熟成がほぼはかられたことを自覚しているようである。けれども、「尚一考」ということばを、赤インクの「尚一考ヲ要スルモ」の傍らにわざわざ鉛筆で書き添えてもいる。それは、定稿を収めた和紙表紙に書きつけた、

- ・ 本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在は現在の推敲を以て定稿とす。(『文語詩稿五十篇』)
- ・ 本稿想は定まりて表現未だ定らず。唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。(『文語詩稿一百篇』)

という認識につながつてゆくものである。

詩稿の成熟を認めるのになお慎重であろうとする詩人のその態度は、たいへん印象的だ。

その慎重さと無縁に思えないのが、「ホボ発表差支ナシ」としながらも、先に一言したとおり、二度かぎりで雑誌への発表が絶えていることである。《文語詩稿》には、その詩稿の熟成が認められながら、口語稿の「定稿」のように「何処ニ発表スルモ差支ナシ」ということばどおりに行行したのと異なり、積極的な雑誌発表がないのは、「尚一考」すべき情況が、熟成の度合いということに関してだけでなく、別にもあつた、とみるべきなのではないか。

詩稿の熟成をはかることは、再編による《文語詩稿》の構想もまた醸成させていったらう。たとえば、詩稿の熟成ということが、あるいは無限定な読者のひかえる雑誌発表ということに、軽快にはつながりにくい、そのような詩想の実現に向かつていたからだ、といった可能性も考えられるのである。実際、再編から定稿に至る詩の場の変容過程で、東北農村の暗く重い現実も多く現われているのは見逃せない。

たとえば、初めて発表された「民間菓」や「選挙」は定稿以前の段階にあるが、すでに農作業の過酷・苛烈な現実をとらえ、血縁や地縁をひきずる一族支配による地域共同体の権力闘争の裏側を露わにしているのであり、それらは、告発にもつらなる《社会性》を濃くはらんだ詩想をひそめているようにもみえる。しかも、この風土にともに生きて、農業技師であり、一族の一員でもある「宮沢賢治」という署名がそこにはある。しかしそれが、けして矛盾や倒錯などなのでなく、

……ちがった考は許すならやっぱりにせものです。何としても闘はなければならぬといふと、それはおれの方だとあなたは笑ふかも知れませんが。さうでもないです。わたくしの今迄はたゞもう闘ふための仕度です。 (書簡433 三二年一〇月推定)

という、草野心平に宛てようとした告白をみると、詩人宮沢賢治の内部では、農業技師である実践を閉ざされてしまった者の、《志》を現わすかたちのひとつとして、《文語詩稿》再編が「にせもの」との闘いのためにあつた、と考えられるようにも思う。あるいは、さらに定稿段階には、信仰にかかわる懺悔や病、死、といった問題群を提出したのもまた収められてゆくのである。

そのような詩想どもの「発表」が、顔の見えない読者たちにもたらすであろう波紋を、詩人が考えなかつたはずもない。こんな本音を吐露したこともあつた。

何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいってゐるので、目立ったことがあるといつても反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあつて来てゐるのです。財ばつに属してさっぱり財でないくらゐたまらないことは今日ありません。

(書簡421、三二・六・二一付母木光苑)

これは、反感に対する愚痴ではない。置かれていたその事態を内省的に直視しているものが告白した、むしろ誠実な自己批判のことばとみてもよからう。

雑誌発表というかたちを採らなかつた、あるいは採りえなかつたのかもしいれない詩人は、しかし、《文語詩稿》においては、詩稿の成熟を別の手段によって確認してゆくとともに、再編段階に到達した《文語詩稿》の精選さえおこなつてゆく。たぶん「定稿」とした黒クロス表紙Aに収まる草稿群から、およそ100編を採りだして、鉛筆と赤インクによる《写》の符号を与えているのである。この《写》の符号が与えられた詩稿はすべて定稿用紙に至る。ウル定稿といえるものだ。そこには、100編を支える《構想》もまた構築されていた可能性がある。

詩稿としての成熟が認められ、《文語詩稿》再編によるウル定稿集を形成する《写稿》の成立は、黒クロス表紙へのブルーブラックインクほかによる書きこみ段階以後、黒クロス表紙Aが『春と修羅第二集』の未定稿を収めるものに転用された段階以前の間であつたろうと想定されるのである。その時期について、おおよその見当をつけるとすれば、三三年前後あたりから、というところではないだろうか。

(注)

1 島田『文語詩稿叙説』第2章再編論ならびに本研究第1章参照、詩人の死後、遺稿の《山》ごとく与えられた遺稿整理時右上番号のうち、「2」は、「No.1→2」と進展する場合がみえることから（雪とひのきの坂上に）、「県道」など）、再編段階にも展開した可能性が強い、「4」は、定稿に至つた《写稿》の《山》のひとつに与えられたもので、「4」の草稿は再編の最終段階まで動いていた可能性はある。これによつて未定稿の「2」・「4」番稿に、「3」・「10」番稿を参考までに加えて、了・発展稿と新規起稿のなかに位置づけるとともに、

文語化・稿で、《了》無しのまま未定稿に置かれているものを整理してみると、

【了・発展稿】		【新規起稿】		【文語化・稿】	
セレナーデ恋歌	2	二川こゝにて会したり	2	祭日二	一三九・No.1
鷺はひかりのそらに餓え	2	対酌	2	青びかる天弧のはてに	一〇七七・10
訓導	2	不軽菩薩	2	開墾地	一〇五九・3
ゆがみつゝ月は出で	2	モザイク成り	2	たゞかたくなのみをわぶる	七三一・4
春章作中判	2	なべてはしけくよそほひて	4	土をも掘らん汗もせん	一〇〇八・2
瘠せて青めるなが類は	2	スタンレー探検隊に対する	10	宅地	一〇三七・2
講后				饗宴	七三五補・10

樹園	2		馬行き人行き自転車行きて	湯本の・10
県道	2		いざ渡せかかしおいぼれめ	爺さん・
雪とひのきの坂上に	2	製炭小屋	曇りてどざし	こゝろ・10
雪峡	2	このみちの醸すがごとく	月光の鉛のなかに	鉛いろした月光・10
機会	2	ひとひははかなくことばをくだし	館は台地のはななれば	来訪・2
丘	2	せなうち痛み息熱く	あくたうかべる朝の水	熊はしきり・2
叔母枕頭	2	敗れし少年の歌へる		
釜石よりの帰り	2	職員室		
宗谷一	2	エレキに魚をとるのみか		
僧園	2	ながれたり		

No. 1・4

などの詩稿が再編段階で展開した可能性が高いことを指摘できよう。なお、「大菩薩峠の歌」・「島わにあらき潮騒を」・「火の島」・「しのめ春の鶉の火を」・「弓のごとく」はその経緯から例外とみて保留し、〈了〉無しで「無し」・「1」・「No.1」の番号があるものは初期稿でとどまつたものと想定する、また、定稿に至る文語草稿と同居する未定稿については、判断を保留する。図表中の「主たる素材」の冬は「冬のスケッチ」、歌は「歌稿」。

2 図表中の略符号、用紙で「24系」は24行野詩詩稿用紙、「26（系）」は26行野詩詩稿用紙、「用箋」は東北債砕石工場花巻出張所用箋、「22系」は22行野詩詩稿用紙、その使用時期については、杉浦静「春と修羅」の行方―晩年の詩稿整理」(『宮沢賢治明滅する春と修羅』所収、蒼丘書林一九九三)が、24系「昭和五年秋頃」・26系「昭和六年秋頃」・22系「昭和六年前後」と推定した。新規用紙のながれで、24系↓26系の例はほとんどみえないので、26系・24系↓22系というながれと、「昭和五〜六年」↓「昭和六年前後」という使用時期とを想定しておく。手入れで「鉛」は鉛筆、「青」は青インク、「藍」はブルーブラックインク。以下、この略符号を用いることがある。

3 〈了稿〉を含む下書稿三は、「冬のスケッチ」四九葉第一章(下書稿一)↓歌稿〔B〕216余白書きこみ稿(下書稿二)、短歌とはかかわらない)を承けて、詩稿用紙に起稿、その推敲現場は、

「↓施肥↓肖像」

火雲むらがり飛べば  
わが眼「↓いと」たよりなし

火雲むらがり飛べば  
「わが↓その」眼いとたよりなし



「・↓灼の石灰 光のこな  
葡萄の葉と蔓とにふらす」

火雲むらがり去れば  
わがのんどしづにひきつる

「灼の石灰 光のこな  
「葡萄↓まるめる」の葉と蔓とにふらす↓の幹に

火雲むらがり去れば  
「わが↓その」のんどしづにひきつる

その(々)や↓ぎつ↓(・)↓×( )

(鉛↓鉛①手入れ、右肩に藍(了))

(鉛②手入れ、題の上に鉛の(了)付与)

というもので、「冬のスケッチ」の一人称を承けたかたちで始発したが、最終手入れでその自称は消え、あたかも他者の肖像詩としてとのえなおされて「了稿」が成立したとみられる。そこには、かつての「われ」を客観的にみつめようとする詩人の意識もまた働いているとみられる。

4 大沢正喜「老農」(『宮沢賢治文語詩の森第三集』所収、柏書房二〇〇二)の鑑賞に言及がある。

5 「麦こなし」の指摘は大沢氏による(注6に同じ)。凶作の稲田の光景や麦畑における収穫作業の場については、先行した『詩ノート』の「二〇八六 ダリヤ品評会席上 一九二七、八、一六、」に、すでに記録スケッチがあった。

為に当地方での主作物稲、あの青い槍の穂は／平年に比し既に四割も徒長を来し／そのあるものは既にかなしく倒伏し／あるものは花なき白き空穂を得ました／またかの六角シエバリ、／芒うつくしい Horadim 大麦の類の穂は／畑地のなかで或は脱落或は穂のまゝ発芽を来し／そのとりいれはげにも心せはしくあはたゞしいかぎりでありました

6 「三 経済構造の激変 3 凶作と農村副業の展開」(『岩手県の百年』山川出版社一九九五)。

7 杉浦氏「春と修羅第三集」の生成(注2同書)。

8 杉浦氏は「第一集が対自的心象スケッチであるとするとするならば、(第二集)はイーハトーヴの(自然)に対したときの心象スケッチの集成として生成されようとした」と指摘(「春と修羅第二集」の構想)(注2同書)。

9 木村東吉「春と修羅第二集」の構想・試論(『宮沢賢治(春と修羅第二集)研究―その動態の解明―』所収、溪水社二〇〇〇)による。氏は、この段階で87編の展開を指摘している。

10 発表行動を示した口語稿で、定稿用紙に至らなかったものは、次のとおり。

時期	詩番号	題名	雑誌	形成過程
二五・九	二二	痘瘡(幻聴)	貌・盛岡	発↓一↓二二
九	一八四	ワルツ第C Z号列車		発↓一↓二二
九	三二三		命令 銅鑼・福島	発↓一

二六・一〇	四一・一	未来園からの影	発↓一
・一〇	五三	休息 銅鑼・東京	発↓一
二六・一	一九八	雲(幻聴) 貌・盛岡	発↓一
・二	五一五	心象スケッチ朝食 虚無思想研究・東京	発↓一↓二
・秋	一八四	ワルツ第C Z号列車 銅鑼・東京	発↓一↓二
二七・一二	四一九	奏鳴四一九 盛中校友会雑誌	一↓発↓二
二八・二	四〇一	氷質のジヨウ談 銅鑼・東京	一↓発↓二
・三	一〇八二	稲作挿話(未定稿) 聖燈・花巻	一↓発↓〇↓二
二九・一一	一〇八二	稲作挿話(未定稿) 新興芸術・花巻	一↓●↓発↓二

三三・二 一五二 林学生 新詩論・東京、不採用 一↓二 ↓三↓送稿か

1 1 注2の杉浦論文。

1 2 木村氏「春と修羅第二集」最終構想の輪郭(注9同書)を参照した。メモの記述を整理した本表は、筆具別に段階を区分した

木村論によりつつ、その使用期間については、私に推定し、おおよそのめやすとしてははを大きくとって示した。

1 3 同じ用紙を用いた『ヴィオロン・セロ科』(同名書の抜粋ノート)が、「筆写の時期もおそらく昭和三年以降でないことはほぼ確

実である」(『新校本全集』第一四巻校異)という。

1 4 草稿は「幻」だが、定稿では「佐一」に推敲された。

1 5 詩法3に指定されたメモに、

文語詩双四聯に関する「研究↓考察」

- 一、概説 文語定型詩、双四聯、沿革、今様、藤村、夜雨、白秋、
- 二、双四聯に於る起承転結
- 三、格律、単句構成法、
- 四、韻脚、

とある。定稿表記としては、たとえば、入沢康夫氏が「57・57/57・57/(二行アキ)/57・57/57・57」

などの型を示して「これを双四聯と呼んでいたようだ」と記すが、『新修宮沢賢治全集』第六巻後記(解説)、筑摩書房一九八〇、

現在、4句で連を構成する2連形が双四聯ではないか、というのが現在の大方の見方である。この定稿表記の草稿段階が、4行で

連を構成した2連形である。なお、定稿151編中、連指定が確認でき、連を句読点によって示された4句で構成する2連形の数は、『文語詩稿五十篇』で21編、『文語詩稿一百篇』で40編で、半数に満たない状況である。けれどももちろん、『文語詩稿』がたどりついた詩形として最多なのであり、結果的にこれが、「現在の」詩集における詩形式を主導していることは認められなければならない。

16 『女性岩手』の発刊趣意は、小原忠「『女性岩手』と賢治作品」(『賢治研究』8一九七一・八)によると、

巻頭言によれば、全女性の問題の探究であり、社会問題の探究であり、全生活の探究であり―足下の問題の探究であり、伝統と因襲の時代と社会を止揚し、健全な女性の道を歩み真の女性岩手の確立―その為には男性、経験者、権威者の所見もきき発展のモーメントにする―とある。

というもので、この雑誌の向かうところと、創刊号発表の2篇の詩想とは、符合するところがある(小原は、創刊号の「祝創刊」広告のなかに宮沢賢治の名があることも指摘している)。詩人はこの雑誌の読者層を理解していたと思われるが、第四号に発表した「祭日」・「母」・「保線工事」も、その詩の場の背後には飢饉けがちの風土があり、詩想には複雑なものがあると思え、その趣意に沿う「社会詩篇」につらなる作品の継続的な発表は、『女性岩手』誌の立場を際立たせてゆくだろうが、時代は言論・思想の抑圧・統制にひた向かっていったから、そこに詩人の配慮が働いていったということはありえよう。

3 節 草稿の手入れ階層と、〈写稿〉の位置づけと

1

詩人が、《文語詩稿》再編の段階で、鉛筆・赤インクによる〈写〉の符号をもって詩稿の精選に向かっていた、その〈写稿〉（「写の感じに近い」『新校本全集』第七巻校異）鉛筆による丸囲みした大きな「了」の字と横線が付与された「ポランの広場」も含めた）は、およそ100編にも及び、そのすべてが定稿用紙に向かったところから、ウル定稿にも位置づけられる草稿群である。その100編というまとまりのつきそうな数に、〈写稿〉が集結した背後には、精選をとおして構築された、再編作業をしめくくるウル定稿による文語詩集構想がひそんでいる可能性もある。

定稿ならびに定稿集に先立つ、原構想が存在する可能性やその内実などをいずれ問うためには、できうるかぎり精確な〈写稿〉の実体を明らかにしなければならぬだろう。ここでは、〈写稿〉の成立―草稿上の推敲過程から〈写稿〉本文をとりだしてゆくことが、最初の課題となる。けれども、詩人による複雑な推敲実態がその前に立ちはだかつて、〈写〉の符号がどの手入れ段階で与えられたか、ということを判定しにくくしており、〈写稿〉の実体に迫りきることを難しくしている現状が、実はある。

その複雑さをもたらしめているひとつに、〈写稿〉の生成現場で用いられている、推敲筆具の多様さがある。『校本官澤賢治全集』及び『新校本官澤賢治全集』の達成によって、1編1編の草稿上における筆具の使用順、いわば縦の推敲系列<sup>1)</sup>については、おおむね解きほぐされたが、推敲筆具の多様さと、ほぼ同時期に形成されてきた他の草稿上の推敲実態との関連は、問われないままである。

もし〈写〉の符号が、ある段階で、草稿群をある程度一括して撰定してゆく、そのような性質の符号であったとすれば、ひとつの筆具（種類）が「ある程度の草稿の群れ」に対して手入れをおこなう、という筆具ごとの手入れ段階、いわば横の推敲系列<sup>1)</sup>についても、考えてみる必要があるのではないか。似かよった状況は、初期稿段階にもみえていた。

詩稿用紙	起稿筆具	時期
無野・26系・24系	鉛筆	三〇年前後から
無野・22系	インク（主に藍）	三一年前後から

起稿に用いた筆具が、用紙によって、使い分けられているのである。詩稿用紙の開始時期の推定が杉浦静<sup>1)</sup>によって果たされているから、

それを踏まえると、三〇年前後から使用した無野・26系・24系の用紙上では鉛筆で起稿していたものの、三一年前後に新たに作った22系の用紙では、主としてブルーブラックインクによつて起稿しているという事象を指摘できる(無野用紙には両様あるが、22系用紙を作るまでのつなぎとして用いられたものとみる)。また、初期稿に与えられた(丁)の符号についても、「それを記した用具が詩稿のどの段階の用具とも異なる場合もあり」(『新校本全集』校異)、困惑するのだが、これも、詩人がある段階で、ある程度の草稿の群れに對して、一括して撰定したために起きた現象だ、とみることも可能なのである。

たとえば、24系を用いた(丁稿)を含む詩稿8編がある。

同一用紙による詩群とみて、筆具に関して、縦の推敲系列と横の推敲系列を整合してみると、次のような手入れ階層がみえてくる(筆具は略符号、白抜きは(丁)の符号付与段階、■はその段階で読み直した結果手を入れることなく(丁)の符号を与えたとみるもの、□はその段階で読み直しのみで手入れを受けなかったとみるもの、○は起稿筆具の書きながら手入れがある、鉛は起稿と同じ鉛筆による手入れ)。

詩稿	筆具の手入れ階層	後の鉛筆の校異による形状
丘	鉛 ↓ 赤 ↓ 藍 ↓ 鉛 ↓ 赤	「太い」
病中幻想	鉛 ↓ 赤 ↓ 藍 ↓ 鉛	「別の」、自筆原稿資料では前のものより濃い。
老農	鉛 ↓ 赤 ↓ 藍 ↓ 鉛	「太い」
雪峽	○ ↓ 赤 ↓ 鉛	なし
機會	○ ↓ 赤 ↓ 鉛	「別の濃い」
雪とひのきの	鉛 ↓ 赤 ↓ 藍 ↓ 鉛	自筆原稿資料では、前のものより大きくやや太いか。
われらひとし	鉛 ↓ 赤 ↓ 鉛	「太い」
恋	鉛 ↓ 赤 ↓ 鉛	「濃い」

鉛筆でそれぞれを起稿し、同じ鉛筆による手入れ段階を経て、赤インクによる第二段階の手入れののち、第三段階にブルーブラックインク手入れがきて、別の太く濃い鉛筆による第四段階の手入れがあった、その過程でそれぞれに、手を入れたり、確認のみで(丁)の符号が与えられたという推理である。なお、「老農」の場合、開始筆具の鉛筆で詩句2行の追加などの手入れをしたのち、赤インク手入れ段階を通し、ブルーブラックインク手入れ段階で本文右肩に(丁)、その後、太く濃い鉛筆での手入れ段階で題名をつけて題の上にも(丁)を与えている。こうした見方に立てば、再編段階の鉛筆・赤インクによる(写稿)にも、こうした手入れ階層を想定することによって、その成立段階を推定することができるかもしれない。

まず、〈写稿〉を含む草稿の、その起稿段階からみてゆこう。

そのなかで、鉛筆による起稿で先行する草稿が同居していないものについて、たとえば、その文字の大小や書き込み位置などに注目して、宮沢賢治記念館が所蔵する自筆原稿の資料（モノクロのマイクロコピーと精密複製原稿によるカラーコピー）にあたってみると、その開始形の本文表記の字態（文字の大小など）に、類似性のある集団がいくつかみえてくる、ということがある。たとえば、

【a類】 野を無視した大文字で起稿した〈写稿〉。

1) やや大きな文字の場合、2) 小さな文字の場合。

【b類】 野を意識して起稿した〈写稿〉。

【c類】 用紙上部にやや大きな文字で起稿した〈写稿〉。

【d類】 用紙上部で「や」の枠で囲んだ〈写稿〉。1) やや大きな文字の場合、2) 小さな文字の場合。

というような、おおよその整理ができそうである（のちの草稿が同居するもので、用紙下部に起稿するものもある）<sup>(4)</sup>。

【a類】

氷上

民間薬

さき立つ名譽村長は

国土

保線工事

たそがれ思量惑くして

来賓

軍事連鎖劇

沃土ノニホヒフルヒ来ス

酸缸

僧の妻面膨れたる

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし

【b類・1】

祭日

塔中秘事

いたつきてゆめみなやみし

流水

水榭松にまじらへば

【b類・2】

著者

初七日

開墾地落上

四時

雪の宿

日本球根商會が

副業

卒業式

秘事念仏の大師匠二

廃坑

記念写真

あかつき眠るみどりごを

村道

歯科医院

塀のかなたに嘉菟治かも

など

嘆願隊

峽野早春

【c類】

母

吹雪かぐやくなかにして

翁面おもてとなして世経る

など

砲兵観測隊

きみにならびて野にたてば

雪げの水に涵されし

翔けりゆく冬のフェノール

【d類・1】

短夜

羅沙壳

退職技手、

式場

中尊寺

コバルト山地

悍馬一

柳沢野

われのみみちにたゞしきと

【d類・2】

医院

心相

岩頸列

老農

臘月

崖下の床屋

市日

巡業隊

うからもて台地の雪に

曉眠

来々軒

ほのあかり秋のあぎとは

ここには、各類の起稿の時差が推測されるときにも、こうした記入の仕方が類似している草稿の集団性に、鉛筆を手にした詩人が、複数の詩稿をほぼ同時期に起稿している、そのようなありようが《文語詩稿》再編の制作現場にあったことをうかがわせる。

そこから推理すれば、起稿時の鉛筆による手入れはその都度であったとしても、筆具を取り換えた手入れの場合、同じ筆具で複数の草稿に対して一括しておこなうということが繰り返された、そのような推敲現場があった可能性もまた考えられるのである。ただ、これから筆具過程の分析をおこなうにあたって、鉛筆による起稿については、それを分節化せず、鉛筆開始稿として一括、単純化して示し、以後の手入れ筆具を整理してゆく。鉛筆による起稿後、展開される手入れで用いられる筆具には、後に示すとおり、ほぼ一定の使用順が想定されるのであり、起稿の時差は、そのまま手入れ筆具の使用順に時差を与えるにすぎないとみられるからである。

3

鉛筆・赤インクの《写稿》群における筆具の使用順について、95篇を整理してみると、いくつかの類型めいた実態が現われてくる。鉛筆開始稿群における筆具の過程には、

という場合があり、インク開始稿群における筆具の過程では、

詩稿	起稿	手入れ	同類の詩稿
商人らやみ	青	青	
涅槃堂	藍	鉛	水と濃きなだれの
車中	藍	鉛	
菱花	藍	藍	聚雨など17篇
氷雨虹すれ	藍	藍鉛藍	
岩手公園	鉛	鉛鉛鉛	開墾地落上
祭日	鉛	鉛鉛	母など4篇
流水	鉛	鉛	来賓など13篇
嘆願隊	鉛	鉛	退職技手など8篇
四時	鉛	鉛赤	
著者	鉛	鉛朱	
林の中の柴	鉛	鉛墨	
老いては冬	鉛	鉛青	
巡業隊	鉛	鉛藍	臘月など24篇
医院	鉛	鉛鉛藍	悍馬など8篇
記念写真	鉛	鉛青藍	老農
市日	鉛	藍	塔中秘事



という場合がある。

それぞれの手入れ過程をにらみあわせてみると、

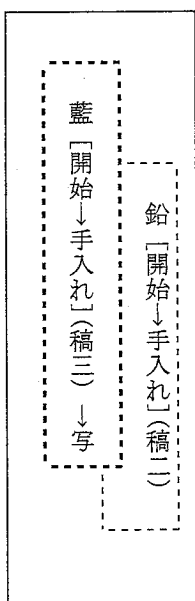
鉛筆↓藍インク

という大枠のながれをうかがうことができる。そのなかで、鉛筆による起稿群の、その手入れには、

鉛↓多様な筆具（限られたものではある）↓藍

という段階的な過程を指摘できるようだ。多様な筆具とした段階から、青インクの手入れが現われ、ブルーブラックインクの手入れに至る。そのことに気づけば、その過程で、インクによる起稿群の出現があった、ということに想定できるのはなからうか（手入れも開始筆具と同種の手入れにとどまる、ただし「車中」と「氷雨虹すれば」を保留、本稿4項で言及）。

たとえば、「吹雪かゞやくなかにして」は、〈写稿〉がブルーブラックインクによる起稿（『新校本全集』校異で下書稿三）なのだが、その用紙上には鉛筆で起稿された先駆形が同居している（『新校本全集』校異で下書稿二）。ということは、この〈写稿〉がインク開始稿であつても、



と、用紙上には一連の過程ともとらえうるから、鉛筆↓ブルーブラックインクという大きなながれのなかで発生したことが明白と思える。要するに、この手入れ状況には、同種の筆具による一括した起稿や一括した手入れの段階があつた、と推定しうる現象が認められるのではないか。

つまり、後に掲げるような階層が想定できるのだ。この過程で、鉛筆によって〈写〉の符号を与える〈写稿〉の成立段階があるが、それは、必ずしも手入れの最終段階であつたわけではない。手入れが鉛筆だけの場合には、最後に〈写〉の符号が与えられたとみることができようけれども、他の筆具が手入れに用いられている場合があるのであり、たとえば、

藍開始↓手入れなし↓写の付与（涅槃堂など、ただし涅槃堂には藍インクの傍点部分に鉛筆の棒線を引く）

という事例もみえるところからも、鉛筆手入れ段階以外にも、インク開始形やインク手入れ形に対して、鉛筆による〈写稿〉の一括した選出の場があつた、とみられるのである。

起稿 ↓ 手入れ

鉛 ↓

鉛 ↓ 鉛

鉛 ↓ 鉛鉛

鉛 ↓ 鉛鉛 ↓ 鉛

鉛 ↓ 鉛 ↓ 赤

鉛 ↓ 鉛 ↓ 朱

鉛 ↓ 鉛 ↓ 青

青 ↓ 青

鉛 ↓ 鉛 ↓ 青 ↓ 藍

鉛 ↓ . . . ↓ 藍

鉛 ↓ 鉛 ↓ . . . ↓ 藍

鉛 ↓ 鉛鉛 ↓ . . . ↓ 藍

藍 ↓ .

藍 ↓ 藍

鉛筆段階

鉛 ↓ (別の鉛)

多様な段階

赤、青、朱墨 ↓ 藍 ↓ (別の藍)

藍インク段階

藍 ↓ (別の藍)

そのように考えると、次の手入れ筆具の、

\*インク開始稿

\*インク開始稿

という階層のなか、▶に指示するあたりに、(写稿) 成立の場を想定することができるのかもしれない。それはまた、成立後の手入れがある可能性をも示唆しているよう。

4

このように手入れ階層を想定するとして、それぞれに鮮明な階層性を、その手入れ実態から推敲の共通性を見いだすことができるのだろうか。試みにひとつの階層をとりあげて、その推敲現場をかいま見ておきたい。

青インクを用いた手入れ段階をもつものが4編あるので、その現場を具体的にとりあげてみる。手入れの実態は次のとおりで、上に青

インク手入れの直前形を掲げ、下に青インク手入れ形を示している（傍線は推敲を受けた詩句。「・」を語、「△」を語句、「○」を詩句として、手入れの程度を区別した）。

\*（「記念写真」鉛手入れ形）

学生壇を並び立ち

教授助教授みな座して

つめたき風の聖餐を

かしこみ呼ぶと見えにけり

（あな虹立てり降るべしや）

（さなりかしこはしぐるらし）

…あな虹立てり降るべしや

さなりかしこは降れるらし…

写真師台を見まはして

ひとりに面をあげしめぬ

こはそもいかに

身をうち顫ふ学の長

それ身ぞ顫ふそのことの

ゆゑはにはかに推し得ぬ

大礼服にかくばかり

美しき効果をなさんとは

いづこの国の文献か

よく録したるものあらん

雪刷く山の目もあやに

たゞさんらんと身を顫ふ

↓・（あな虹立てり降るべしや）

↓・（さなりかしこはしぐるらし）

↓○時しもあれやさんらんと

↓・…それ身を顫ふそのことの

↓・美しき効果をなさんこと

↓・いづちの「国↓邦」の文献か

↓・よく録し「た↓つ」るものあらん…

しかも手練の写真師が  
三秒ひらく大レンズ  
千の瞳のおのおのは  
朝の虹こそうつつしけれ

↓・千の瞳のおのおのには  
↓△朝の虹こそ「うつつしけれ」↓宿りけれ

\*〔老農〕鉛手入れ形  
火雲むらがり翔べば  
そのまなこはばみてうつろ

火雲むらがり偏れば  
そののんどしづにたゆたふ

↓△火雲あつまり去れば  
↓○表束を遠くあぎたふ

\*〔老いては冬の孔雀守る〕鉛手入れ形  
老いては冬の孔雀守り  
がまのはばきとかはごろも  
園の広場の午后二時は  
訪ひ来る客もなし

↓・老いては冬の孔雀守る  
↓△園の広場のひるすぎは  
↓○湯管のむせ「ぶ↓び」たらほのか

あるひはくらみまた燃えて  
ふりくる雪の綿なすは  
さは遠からぬ雲影の  
日を越し行くに外ならね

↓△日を越し行く「に外ならず」と仰ぎ見る

\*〔商人らやみていぶせき〕開始形  
商人ら  
やみていぶせきわれをあぎけり

川ははるかか峽に鳴る

ましろきそらの蔓むらに

雨がちなむみそさざぬ

やがてちぎれん土いろの

かばんつるせし赤髪の子

↓△糊に堅めし土いろの

↓△かばんを「つるす↓いだく」赤髪の子

恥いや積まんこの春を

つめたくすぐる春の風かな

↓○「↓まこと↓病みに」恥「■むひるすぎを」(■は積の欠)

それぞれの詩の場は、

記念写真

盛岡高農校長佐藤義長。一六(大正五)・一一・三裕仁親王の立太子礼挙行にかかわるか。

老農

麦畑に立ちつくす老農。火雲をひでり雲ととるか、夕焼け雲ととるかで、詩想は異なってくる。

老いては

花巻温泉動物園の園丁。花巻温泉は「徒衣ぜい食のやかららに賤舞の園を供すとか」と批判的。

商人ら

生きながらえた病者。宮沢賢治の土壌改良に奔走した東北碎石工場技師としての挫折に重なる。

というもので、時・場・人ともに異なり、それを支える詩想も重なりあうところはない、といつてよいだろう。そして、語や語句のレベルでの手入れに共通する傾向も特にはうかがえない。

けれども、詩句レベルの手入れについて検討してみると、たとえば次のようにも、そこに託されたところを読みとることができないか。

○時しもあれやさんらんと ……撮影の「時しも」大礼服の学長が「さんらんと」武者震いするのを強調。

○麦束を遠くあぎたふ ……ひでり雲を仰ぐ農夫と、収穫を急ぐ麦畑を並置した、凶作の兆しを強調。

○湯管のむせびたゞほのか ……真昼の湯管のほのかさを強調することによって、夜の温泉場の賑わいを暗示。

○病みに恥積むひるすぎを ……義理を欠いてまで生きていることに、自責の念を深くする。

このように読みうるならば、この手入れ階層には、詩人の「批判的な」まなざしが照射されているようにみえる。「批判的な」というのは、花巻温泉の遊興性や大礼服を着た学長の国士性への批判から、凶作の兆しに立ちつくす老農の背後にある農村の後れというものに對する批判や、農村改革の志を果たせぬまま生きている自分自身に對する批判など、もちろん一様のことでない。また当然のこと、他の筆具の段階で、「批判的な」まなざしがみられない、ということではない。それぞれの詩稿は、それぞれに与えられた詩想の熟成に向か

って、推敲がおこなわれている。推敲自体が実は批判的営為なのであり、そこにはそれぞれの詩想に応じた、批判の基準が導入されているはずなのだ。

したがって、その手入れ階層における固有なものとして指摘することはできないけれども、この青インク手入れ階層には、右のようなかたちで「批判的な」まなざしがそれぞれに現われている、ということである。

5

筆具による手入れ階層を想定すると、〈写稿〉を含む詩稿の、〈写〉の符号（添えられた横線も含む）が与えられた段階として、複数の機会が浮かびあがってきた。しかも、手入れの途中段階で与えられる場合も想定されてくるのだから、〈写〉の符号は、推敲の完了を必ずしも意味していない、ということである。つまり、定稿段階も射程に入れると、〈写稿〉の成立もまたひとつの手入れ階層・ただし詩人が詩稿の熟成を自信をもって認めた段階・である、とみななければならぬ。

すると、〈写稿〉の位置づけを、どのように判定してゆけばよいのか（以下に示す〈写稿〉の表記実態については、「資料篇ⅰ」として、主なものをその自筆原稿の複写によつて別に掲げるので、参照されたい）。

当然〈写〉の符号の与え方ということも、手入れ内容の熟成度とともに判定のがかりとして、検討されなければならないだろう。たとえば、その符号が後で与えられたと考えてよい、手入れなしの〈写稿〉をみると、

詩稿	起稿	符号に対する本文
民間菓	鉛	重なる
軍事連鎖劇	鉛	重なる
退職妓手	鉛	重なる
砲兵観測隊	鉛	横線にかかる
きみになら	鉛	横線にかかる
嘆願隊	鉛	横線にかかる
塀のかなた	鉛	横線にかかる
中尊寺	鉛	重ならない、外枠が重なる
うからもて	鉛	重ならない、外枠が重なる
涅槃堂	藍	重なる

早儉 藍 重なる  
 水と濃き 藍 重ならない

という実態がある。

符号とかかわる場合が多く、そうでないものも「外枠が重なり」っている（外枠の付与は、本稿2項に示したd類に該当、本文成立後間もないとみられ、この処置事例は少なくない）。当然のこと、手入れを経ている〈写稿〉の場合も、本文上に重ねて、あるいは部分的に引っかけたものが多い。それは、手入れもまた、符号に重なり、または、かかっている場合が多い、ということである。すると、符号は、本文手入れの後、その上に重ねあるいはかけて与えた、と、手入れなし稿の実態も踏まえてひとまずはみることができようか。

しかし、実際には、「林の中の柴小屋に」のように（赤インクによる〈写稿〉だが）、赤インクの符号に重なっている手入れの、「毛筆は赤インク（写）印 島田注 よりも後」と『新校本全集』校異が指摘しており、それは、

起稿 ↓ 手入れ ↓ 写 ↓ 手入れ

鉛 鉛 赤 墨

という過程であって、〈写稿〉成立後の、符号に重ねた手入れもあることを知る。

あるいは、鉛筆による〈写稿〉のなかにも、先に、

起稿 ↓ 手入れ

鉛 鉛鉛鉛

と示した「岩手公園」の手入れの場合、「③（鉛筆の三段階め 島田注）の推敲時の文字は、写を避けてある」と、新校本全集校異は指摘しており、ここには、

起稿 ↓ 手入れ ↓ 写 ↓ 手入れ

鉛 鉛鉛 鉛 鉛

という過程があったわけで、同種の筆具を分別できれば、〈写稿〉成立後の、符号を避けた手入れを認めることができる場合である。

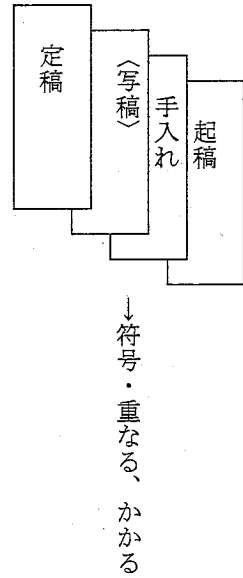
さらには、「毘沙門の堂は古びて」は、用紙下半に鉛筆の小さな文字で起稿した下書稿二に、「同じ鉛筆」（『新校本全集』校異）で手入れがあり、本文に重ねて符号を与えている。ところが、その符号から離れるようにして、〈写稿〉の上部余白に、ブルーブラックインクによる下書稿三が手入れなしで同居している。それは、〈写稿〉成立後に展開した余白稿とみられるものだ。そのような場合もある。

つまり、〈写稿〉の草稿（用紙）上段階では、模式図1のように、

〈写稿〉形成 ↓ 成立 ↓ 定稿段階

と展開してゆく場合がある。

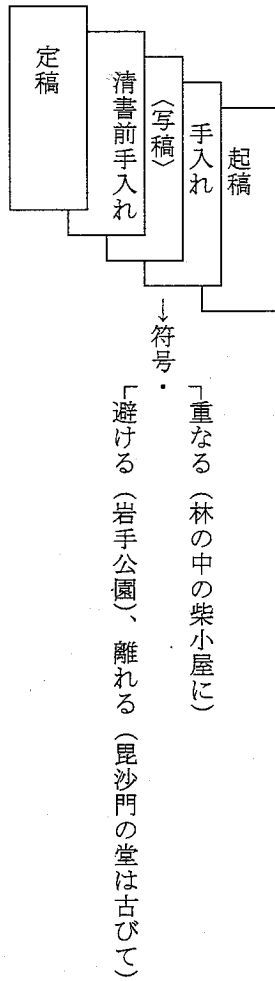
図1



とともに、模式図2のように、〈写稿〉成立ののちに、さらなる手入れ—定稿清書前手入れ、とも命名しうるもの—を経てから、定稿用紙に展開してゆく、

〈写稿〉形成↓成立↓手入れ↓定稿段階  
 という場合もまたある、ということなのである。

図2



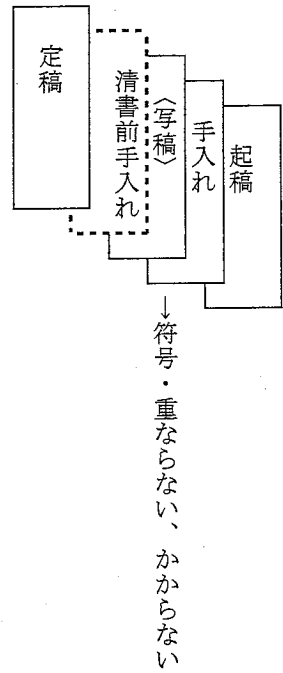
そこで、符号を避けているのかもしれない、という認識をもってあらためて自筆原稿資料にあたってみると、〈写〉印やその横線を避けているのではないかと見える例が散見されてくる。そのなかには、本文内容の推移と照合してみると、符号を与えたのちに手入れを加えた、と推理しうるものもあって、模式図3のように、〈写〉の符号を与えたのちにもおこなった手入れが存在している可能性は強い、といえる。

けれども、たとえば、ブルーブラックインクの場合、濃淡の識別は困難で、符号の付与とそれに重なりまたかかっている手入れ文字との時差、あるいは、符号に重なりまたかかっている手入れとかかわらない手入れとの時差、などを客観的に判定するがかりがない(科学的解析をもってすれば不可能でもなからうが、自筆原稿の貴重さを考えると、それは提案し難い)。したがって、次の模式図に点線で示しているように、符号にかかわらない起稿とは別の筆具の場合、〈写〉印付与後の手入れについて、その可能性がある場合を分別する



必要があろう。

図3



こうした現状は、再編輯群から選出された〈写稿〉をウル定稿として位置づけ、〈写稿〉↓定稿間にみえる詩想の変容をつかみとろうとする立場からいえば、その基準となる〈写稿〉の本文を、精確に特定することの困難さを示唆している。

この〈写〉の符号付与後の手入れ―定稿清書前の手入れの存在をうかがうとき、見落としてならないのが、〈写〉印を与える段階の鉛筆と、定稿を清書する段階のブルーブラックインクとの存在だ。それらの筆具が、〈写稿〉本文のさらなる手入れに用いられる場合を想定すべきなのである。

それを前提とするならば、本稿3項において、筆具過程の類型から外れている、とした「車中」と「氷雨虹すれば」についても、ある程度合理的な筆具の過程を説明しようように思う。

たとえば、「車中」の場合、その鉛筆の手入れが〈写〉の符号を与える段階のものとすれば、

起稿 ↓ 手入れ ↓ 写 ↓ 手入れ

藍 ・ ・ ・ 鉛 ↓ 鉛

藍 ・ ・ ・ 鉛 ↓ 鉛

という、ふたつのありようが考えられよう。いずれにしても、〈写稿〉形成にかかわる筆具使用の階層は揺るぐことなく、この場合は鉛筆手入れが符号にかかわらないものであることから、後者の場合、定稿清書前に位置する手入れだった可能性が浮上してくるのである。また、「氷雨虹すれば」の場合も、②連に対する手入れのうち、鉛筆によるものが〈写〉の符号を与える段階で、後のブルーブラックインクによるものが定稿を清書する段階とすれば、

起稿 ↓ 手入れ ↓ 写 ↓ 手入れ ↓ 定稿

藍 ・ 藍 鉛 ↓ 鉛 藍 ↓ 藍

という想定が浮かびあがってくる。鉛筆の手入れは符号にかかっているとところから、〈写〉の符号を与える以前と推定可能だし、ブルー

ブラックインク手入れは符号にかからず、さらに「上方余白に：あらためて書き下している」(『新校本全集』校異) ところから、符号を遠ざけているとみることも可能だからである。

この2例からみえるのは、鉛筆とブルーブラックインクとの手入れには、時差がある、ということだろう。鉛筆手入れは、(写)の符号の付与時に隣接し、ブルーブラックインク手入れは、定稿清書時に接近している。もちろん、定稿用紙を眼前にした詩人の、草稿に対する推敲としてはある意味最終の、詩想と表現との折り合いをつけようとする「間」が、存在していたと考えられてよい。そこでは、(写)の符号を与えた鉛筆や、定稿を清書したブルーブラックインク以外の、別の筆具の侵入もまたありうる。

たとえば先の、「林の中の柴小屋に」の毛筆(墨)による場合のように、筆具の多様性(限られた種類ではある)を秘めた推敲現場であつたらう。

すると、(写稿)成立↓定稿起稿の間に、次のような手入れ階層を想定できよう。

(写稿) ↓ 成立後段階

鉛

多様な段階

墨など

清書直前段階

↓ 定稿

藍

本稿2項以降で想定してきた、(写稿)成立前後の手入れ階層が意味しているのは、再編稿群からの精選であり、ウル定稿の選択であつたとみるこの作業が、すでに出来上がったものを選出対象としていたのではなく、定稿とすべき(写稿)を形成する推敲段階があり、成立した(写稿)を定稿に向かつてさらに推敲してゆく段階を有している、口語詩(心象スケッチ)にもみられた、まさに「動態」としての(写稿)のありようなのであり、詩人がとつた態度なのである。そこには、定稿の和紙表紙にあつた、

・想は定りて表現未だ足らざれども現在には現在の推敲を以て定稿とす。

〔文語詩稿五十篇〕

・想は定まりて表現未だ定らず。唯推敲の現状を以てその時々定稿となす。

〔文語詩稿一百篇〕

という宣言の実相そのものが、(写稿)段階にもまた現われていたのだ。

6

このような手入れ階層を踏まえながら、定稿が清書されるが、しかしその段階に入っても、なお推敲の手はゆるめられていない。先の「現在は現在の推敲を以て/唯推敲の現状を以て」という注釈は、定稿段階に入っても実行に移されているのである。定稿の成立、ということであれば、その手入れ過程もまた押さえておかなければならない。それを押さえたとき、(写稿)と対校しうる、「現在の」あるいは「現状の」定稿本文が現われることになる。

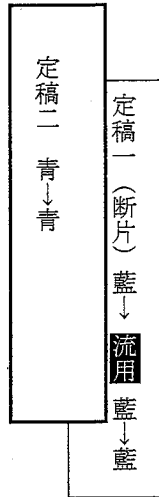
定稿にかかわる『新校本全集』第七巻校異の記述を総合すれば、1篇の例外を除き、定稿はブルーブラックインクで起稿、ブルーブラ

ツクインクと青インクによる手入れがあった、ということになる。その手入れ順は、

藍開始↓藍手入れ↓青手入れ

と、ひとまずは推定されるものであったようだ。もちろん定稿を起稿段階から支配している筆具はブルーブラックインクであり、青インク手入れのちにブルーブラックインク手入れがなかったとはいきれない。ブルーブラックインクと青インクとは、手入れのうえで重なることがないようで、また青インク手入れの施行数もブルーブラックインク手入れをはるかに下まわっており、その先後は断定しにくい。推定のがかりとなるのが、例外の1篇である「腐植土のぬかるみよりの照り返し」の場合である。図4として左に模式化するように、これにはふたつの定稿があり、しかも起稿の筆具が異なっている。

図4



ブルーブラックインクで起稿したのが定稿断片で、これは、「こらはみな手を引き交へて」の定稿用紙として流用されて、ブルーブラックインク開始↓ブルーブラックインク手入れ、という本文形成の過程を経る。定稿を書き損じたあと、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」のほうは、新たな定稿用紙に取り換えて青インクで起稿し、「同じインク」(『新校本全集』校異)で手入れを受けるに至るのである。ここに、定稿の起稿においては、

藍インク↓青インク

という、筆具の過程が想定される。そして、定稿群における、起稿時の書きながら手入れは当然のこと、本文への手入れ実態をみると(終章を参照のこと)、ブルーブラックインクによる手入れが圧倒的で、青インクの手入れ実績は決して厚くはない。ブルーブラックインクによるものが多いのは、起稿した筆具による先発の手入れであったことをうかがわせ、青インク手入れの少なさには、その後発性をうかがうことができるのではなからうか。併せ考えると、定稿の成立には、

藍インク↓青インク

という2段階の見直しがあったといえる(とすれば、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」は最後の定稿、といえるのだろう)。

つまり、定稿用紙上の起稿に対する手入れの階層は、

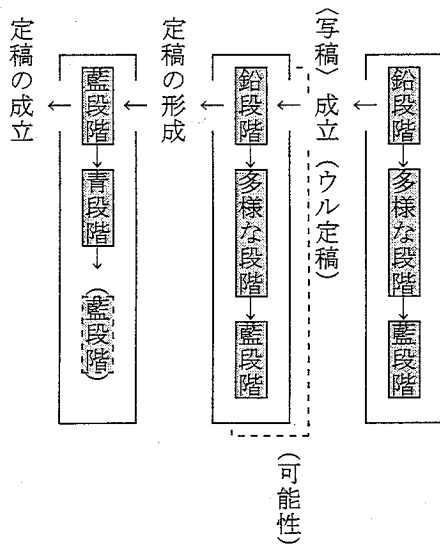
起稿↓**藍インク段階**↓**青インク段階**↓**藍インク段階**↓成立

というものであった、と想定されるのである。

以上、分析してきた(写稿)の生成から定稿の成立に至る手入れ階層を、総合して示せば、後に掲げるようである。

この想定から、〈写稿〉成立にかかわって、手入れが幾層にも重なる実態があらためてみえてくる。しかも、想定作業をとおして、その階層の分別・分離が軽快にはできない、という実状も再認識した。この実状と、それに対する想定とにしたがえば、定稿本文と比較すべき、基準となる鉛筆・赤インクの〈写稿〉本文（ウル定稿）の特定に困難がともなう、そのことが突きつけられている、といえよう。けれども、それぞれの定稿に託された〈意味〉に迫り、詩集の企図にも迫ろうとするためには、再編段階でたどりついたウル定稿が、さらにどのように変質・変容を遂げて定稿に到達したのか、その過程に現われてくるであろう詩人の意志を、読み解きうる程度の論料を用意する必要がある。

そのためには、完璧ということが得難いこの状況ながら、推敲現場の実状に対して想定を加えつつ、〈写稿〉本文をいかに「合理的に」とりだすか、ということが課題となろう。そのうえで、〈写稿〉と定稿との本文異同の実態を提示し、そこに現われた推敲のありようが、少なくともどのような傾向を示しているかを掴むこと、そうした作業に、第3章において向かうことになる。



(注)

1 本研究の1章1節。

2 『宮沢賢治明滅する春と修羅』（蒼丘書林一九九三）。

3 筆具については、図表等では、鉛筆、赤鉛筆、ブルーブラックインク、赤インク、青インク、黒墨、朱墨を、鉛、赤、藍（インク）、赤、青、墨、朱と略示することがある。

4 「毘沙門の堂は古びて」が鉛筆で用紙下部に起稿後、ブルーブラックインクによる次稿がその上部に展開しているもの、など。  
 5 初期稿の「了稿」における起稿の記入状況についても、類似性を認められるグループがみられる。たとえば、24系・鉛筆開始  
 (了稿) 群の起稿の記入状況を自筆原稿資料でみると、

丘 野を用いて上半に小さな文字  
 病中幻想 野を用いて上半に小さな文字  
 老農 野を用いて上半に小さな文字  
 雪峽 野を用いて上半に小さな文字  
 機会 野を用いて上半に小さな文字  
 雪とひのきの われらひとし 野を用いて上半に小さな文字  
 恋 野を用いて上半に小さな文字

と指摘できよう。これらがほぼ同時期に起稿されて同じグループとして推敲されていった、という推理も可能であろうと思う。

6 鉛筆・赤インクによる「写稿」について、その手入れ実態を、次に一覽する。なお、「詩稿」は、定稿題または冒頭詩句を5字分まで示した。「草稿」は、「写稿」が成立した下書稿段階を『新校本全集』校具による逐次番号で示し、「了」は「了」印の付与を示している。「始」は起稿した筆具を示し、ふたつの「手入れ」には、起稿時の書きながらの手入れは原則としてここに示さない。「メ」はメモ。「写」は、「写」の符号の筆具、ただし「了」としたものは「写」でなく鉛筆による丸囲みの大きな「了」の文字であったもの。「定」は定稿を起稿した筆具を示した。

〔鉛筆開始〕		〔草稿〕		〔手入れ〕		〔写〕		〔定〕	
うからもて	三	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
中尊寺	三	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
きみになら	二	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
砲兵観測隊	二	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
軍事連鎖劇	二	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
退職技手	一	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
民間菓	一	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
塀のかなた	一	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛

〔詩稿〕		〔草稿〕		〔手入れ〕		〔写〕		〔定〕	
塔中秘事	七	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
市日	一	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
酸虹	六	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
病技師一	六	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
ほのあかり	四	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
巡業隊	四	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
雪の宿	四	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
初七日	三	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛





したい。

詩稿	草稿	始	手入れ	写	定
小きメリヤ	三藍・了	四鉛鉛		赤	藍
早春	二藍・了↓鉛	三鉛鉛↓四藍		鉛	存せず
毘沙門の堂	二	鉛	鉛↓三藍	鉛	藍
川しろじろ	一赤・了↓鉛		鉛	鉛	藍
電気工夫	一赤・了↓鉛		鉛	鉛	藍

7 本研究1章の注4において、24系用紙・鉛筆開始稿群における〈了〉印付与の段階を、やはり手入れ筆具の階層を設けることで想定している。

8 島田『文語詩稿叙説』3章2節参照のこと。

9 『歌稿「B」』の379番歌が「みんなして／写真をとると台の上に／ならば朝の虹ひらめけり」とあり、「◎朝の写真詩体に直す」のメモをもつ。「記念写真」がそのメモの実現とみられるが、この歌は「大正五年十月より」に編入されている。校長が大礼服を着用しているところから、相当な「記念」行事とみなければならぬ。

10 大沢正善氏は夕焼け雲と解し、「老／農」というテキストは「永遠に繰り返される／自然と人間が共生する営為」の「こまを誌した「年代記」なのかもしれない。

と考えている（「老農」、『宮沢賢治文語詩の森第三集』所収、柏書房二〇〇二）。

11 未定稿「歳は世紀に會つて見ぬ」の最終詩句。農氏の窮状を踏まえ、花巻温泉建設を批判しているもの、全文を引く。

歳は世紀に會つて見ぬ  
石竹いろと湿潤と  
人は三年のひでりゆゑ  
食むべき糧もなしといふ

稲かの青き槍の葉は  
多く倒れてまた起たず  
六条さては四角なる  
麦はかじろく空穂しぬ

このとききみは千万の  
人の糧もてかの原に  
亜鉛のいらか丹を塗りて  
いでゆの町をなすといふ

この代あらば野はもつて  
千年の計をなすべきに  
徒衣ぜい食のやかららに  
賤舞の園を供すとか



1 2 「記念写真」の下書稿一では、「にせものの黄金をつけたるこの国士さんらんとして風にをのく」という手入れがみられ、〈写稿〉を含むこの段階でも、大礼服に象徴される国士性に対する批判意識が継承されていたとみられる。

1 3 赤インクによる他の〈写稿〉の起稿後の手入れは、鉛筆によるもの。

1 4 「車中」は、ブルーブラックインクの毛筆で起稿し、符号を離れた第一連3行「たばこ」の左行間に鉛筆で、「はまき」と書き入れている。

1 5 「氷雨虹すれば」の〈写稿〉第二連(②)の起稿冒頭句は、〈写〉の符号の下にある。ブルーブラックインクの最終手入れは、符号を離れた左上余白に小さな文字で書かれた「火をあらぬ／ひのきづくり」を「を」は「を」／ことばもて／どよもすべけれ」である。

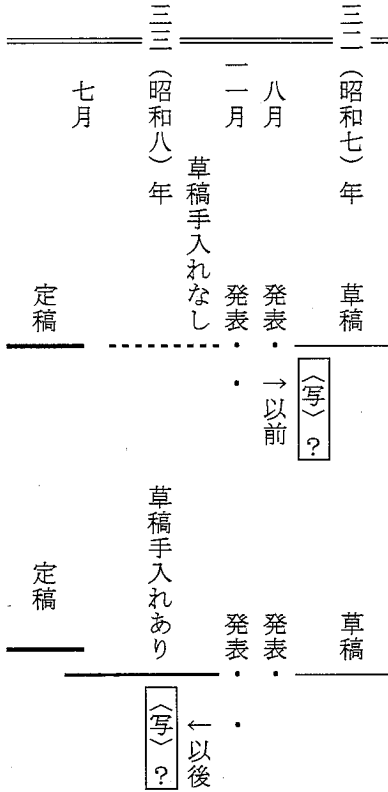
4節 〈写稿〉の成立

1

前節で、〈写稿〉を含む草稿上では、いくつかの手入れ階層をもっている場合が多く、どの段階で〈写〉の符号が与えられたのかを特定するのは困難である、そのような状況に置かれていることを明らかにした。詩稿用紙上のいわば空間的な〈写稿〉の成立が、精確にはとらえきれない、ということである。そのような困難さは、〈写〉の符号を与え始めた、いうならば、時間的に〈写稿〉の成立を見定めてゆこうとする場合についても、当然いえることだ。ただ、その時期を想定するてがかりはみえていない。

『女性岩手』誌に発表された詩稿の存在である。

もし、〈写稿〉を含む草稿が、雑誌発表という詩稿の熟成を認めた行為によって、ウル定稿としての機能を終えたとすれば、草稿に対して〈写〉の符号を与えたのは、発表稿以前のこととみるか、あるいは「定稿に写した詩稿」というただの心覚えとして定稿清書段階に与えられたとみるしかないだろう。



しかし、雑誌に発表された口語詩が、その草稿をさらに展開させ、定稿に至った以後も手を入れていたものもある、そのような詩人の態度からして、《文語詩稿》の場合だけ、発表稿の存在によって草稿の推敲を終息させる（右に図示した上段の場合）、というのはいさぐらい。また、〈写〉の符号も、それが与えられたのちに手入れがあった場合を、これまでにみてきてもいい。符号が「定稿に写した」という意味であったならば、それにおさまらない事実がある。したがって、図示した下段の場合のように、〈写稿〉を含む草稿が、発表後

もなお草稿として展開し、定稿に向かっている、という予想に立つべきであろう。

『女性岩手』は、三二年八月に創刊され、三四（昭和九）年一月に第九号をもって終刊した、花巻の地域女性誌である。妹トシの女学校時代の級友でもあった多田保子によって編集・発行されたものであるが、男性の寄稿も多く、その発刊趣意は、

巻頭言によれば、全女性の問題の探究であり、社会問題の探究であり、全生活の探究であり―足下の問題の探究であり、伝統と因襲の時代と社会を止揚し、健全な女性の道を歩み真の女性岩手の確立―その為には男性、経験者權威者の所見もきき発展のモーメントにする―とある。

（小原忠『女性岩手』と賢治作品）

というもので、これは文学愛好家のための同人誌でなく、さまざまな地域社会の課題を取りあげて知見を広げ深めようという総合的な教養誌としての性格が濃かった。やはり「伝統と因襲の時代と社会」に圧迫されていた東北／岩手の農村改革に立ち向かってきた宮沢賢治も、その趣旨に共感していたように思える（創刊号の「祝創刊」広告にも宮沢賢治の名があることを小原は指摘している）。

実際に宮沢賢治が寄稿したのは、次のとおり、積極的に応援していた、という露わな感じをけして与えるものでない。

創刊号 「民間薬」・「選挙」

第四号 「祭日」・「母」・「保線工事」

第七号 「花鳥図譜」・七月

（三二年 八月一日発行）  
（三二年 一月一日発行）  
（三二年 七月二〇日発行）

けれども、まず創刊号に寄せ、その後は2号ほどの間を置きつつ、第四号・第七号と作品を寄せているところに、継続性を読みとることもできるだろうから、目立たぬように支援していた、といえるのではなからうか。三二年に母木光に宛てた書簡で、宮沢賢治は、

何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつてゐるので、目立ったことがあるといつても反感の方が多く、じつにいやなのです。じつにいやな目にたくさんあつて来てゐるのです。 （書簡421 六月二一日付）

という「目立ったこと」に対する慎重さを吐露していたからである。それは、「じつにいやな目にたくさんあ」うことへの忌避でなく、結果的に「反感」を抱かれても仕方がない、「社会的被告のつながり」を断ち切ろうと、農村改革に努めながら挫折してきた自らの道程を省み、踏まえた自己批判のうえに導きだされたもの、と私には思える。ひるがえつていえば、「社会的被告のつながり」としかみられない自分が「目立ったこと」をすれば、地域誌でしかも詩誌ではない『女性岩手』誌の歩みに対して、正当な評価を妨げかねない、という事態を懸念していたのかもしれない。

あるいは、創刊号に口語稿でなく文語稿を与えた、というところに、この雑誌に対する詩人宮沢賢治の期待もまたこめられていた、と

思える。「全女性の問題の探究」であり、社会問題の探究であり、全生活の探究」に向かう、高い意識をもったこの雑誌に、集う読者層は当面相当の教養あるひとたちであり、短歌をはじめとした「文語」脈に親しんでいたから、という判断もあつたらうが、あえて創刊に合わせたところに、詩人の意図めいたものが浮かびあがっているともいえる。

というのも、二六（大正一五）年にさかのぼるが、

そのうちフキンランド公使が日本語で講演しました。それが尽く物質文明を排して新しい農民の文化を建てるといふ風の話で、…早速出掛けて行って農村の問題特にも方言を如何にするかの問題など尋ねましたら、向ふも椅子から立っているいろいろ話して呉れました。やっぱり著述はエスペラントによるのが一番だとも云ひました。

（書簡221 二月二日付父宛）

と（傍線は島田）、すでにもう考えはじめていた課題に、このとき立ち戻った詩人が、ひとつの解答として、農村文化の表現の標準に「文語」を提案する、という大胆な試みをおこなったのではないか、ということだ。そして、この雑誌の読者は確かな手応えを詩人に与えているのである。第二号に寄せられた読者「I子」の、

すつかり洗練され切ったこの二篇を口誦して見るとき、この田園詩の物語る世界が、空間に再現されるばかりでなく、其の発声さへもがはつきりとときと取れる感じがいたします。<sup>(2)</sup>

とした好評に、詩人も、その第四号へは、「口語の方をと思つてゐましたが雑誌の批評を見て考へ直して定形のにしました」（書簡434 一〇月推定藤原嘉藤治宛）と応じている。ただ、「考へ直して」というところに、すでに『女性岩手』への支援を求められていた詩人が、寄稿に関して、連載をしないことや、文語稿をまず先にして口語稿を次にすること、などといった程度の見とおしをもっていたところを、予定変更して再度「定形の」文語稿を送る、という口振りがうかがえる。

詩稿	初期稿	再編稿	（写稿）を含む草稿
民間業	・	発↓一	（下書稿一に鉛筆による）（写）
選挙	・	一↓発	（下書稿一に青インクによる）（写）
祭日	一↓二↓三↓四↓五↓発		（下書稿五に鉛筆による）（写）
母	・	一↓二 ↓発	（下書稿二に鉛筆による）（写）
保線工手	・	一↓二↓三↓発	（下書稿三に鉛筆による）（写）

もちろん、そのような提案を試みうるほどに、《文語詩稿》の再編に意義を見だし、詩稿の熟成を果たしつつある詩人の状況があったと認めていい。そうした背景をもって「発表」の場に持ち出された5編の《文語詩稿》について、まずは『新校本全集』第七巻校異の記述にしたがい、それぞれの草稿段階の形成過程を、発表形を軸に整理、一覧すると、右のようである（一二：は下書稿逐次、発は発表稿）。

詩稿	稿	起稿	手入れ	備考
民間薬	一	鉛*		
選挙	一	鉛*	鉛↓藍	ただし競合せず、前後は決め難い。
祭日	五	鉛*	鉛①↓鉛②	鉛②は題名の新設のみ。
母	二	鉛*	鉛①↓鉛②	
保線工事	三	鉛*	鉛①↓鉛②↓藍	

さらに、〈写稿〉を含む詩稿の本文形成の過程を、やはり校異の記述にしたがって整理した結果、現われてきたのが右のような筆具の過程であった（起稿で\*のあるものは、起稿の筆具による「書きながら」の手入れがある場合、①②は分別を示す、・はその段階の手入れなし）。

このような推敲状況のなかで、それぞれの発表稿と〈写稿〉を含む詩稿とが、どのような関係を結んでいるのか、以下、その現場に立ち入ってみることにする。

2

創刊号に発表された2編について、〈写稿〉を含む草稿と発表稿、定稿との本文関係をあらためて分析する。

『新校本全集』校異では、逐次形単位で推敲の実態が記述されているが、ここでは、草稿における本文への手入れ階層に着目し、それぞれの階層が、発表稿や定稿の本文に対してどのような位置関係に立つのか、を意識して定稿に至る推敲現場を再現してみるのである。

先に、詩句表現の推敲実態から、本文関係を整理し直して、下書稿と発表稿の位置関係を確かめてみよう（理由は後述するが、この2編については、漢字／かなの別、ルビの有無などの表記の実態は問わない）。

まず「民間薬」の場合である（題名は省略、棒線は島田、以下同じ）。

【発表稿】

たけしき耕の具を帯びて  
ひぐまの皮は着たれども  
夜に日をつけるひと月の  
卑泥のわざに身をわびて  
しばしましろの露おける  
すぎなの畔にまどろめば  
はじめはぬかの雲ぬるみ  
啼きかひめぐるむらひばり  
やがては古き巨人の  
石の匙もて出できたり  
ネプウメリてふ草の葉を  
薬に喰めとをしへける。

【下書稿】最終形

たけしき耕の具を帯びて  
熊熊の皮は着たれども  
夜に日をつける一月の  
水田のわざに身をわびて  
しばしましろの露置ける  
すぎなの畔にまどろめば  
はじめは額の雲ぬるみ  
鳴きかひめぐるむらひばり  
やがては古き巨人の  
石の匙もて出できたり  
ネプウメリてふ草の葉を  
薬に喰めとをしへけり。

【定稿】(便宜上行形式で表示)

たけしき耕の具を帯びて、  
熊熊の皮は着たれども、  
夜に日をつける一月の、  
水田「||・↓干泥」のわざに身をわびて、  
しばしましろの露置ける、  
すぎなの畔にまどろめば、  
はじめは額の雲ぬるみ、  
鳴きかひめぐるむらひばり、  
やがては古き巨人の、  
石の匙もて出できたり、  
ネプウメリてふ草の葉を、  
薬に喰めとをしへけり。

これを見ると、太点線の語が太棒線の語に変わる程度で、ほとんど同文的な関係といえるが、名詞と助動詞の継承に注目すれば、「下書稿・定稿」に対して、発表形だけが異質と考えられ：発表形よりも下書稿の方が定稿に近いと考えられる。「『新校本全集』校異」ものである。けれども、下書稿もなしに、いきなり発表原稿が提出できたとは思えないから、この下書稿は、発表稿を生んだのちも、下書稿として手入れを受けることはなかったけれども、定稿化に向かって生きつづけていたのであり、たとえば、次のような過程を想定することができるだろう。

下書最終形 → 発表形 → 定稿形

つまり、この下書稿以前にウル稿がなかったのかどうかは留保しつつ、この下書稿には書きながら以外の手入れがない点を認識すると、発表形は、この下書稿を土台としたバリエーション(異文/異形)である、という見方も成り立つ可能性がある。

次に「選挙」の定稿は(所在不明、十字屋版全集によるが、句読点はみられない)。

選挙

(もって二十を勝ち得んや)  
 (さらに五票もかたからず)  
 (いかにやさらば太兵衛一族)  
 (いなうべがはじうべがはじ)

はじめの驚馬をやらふもの  
 雲うち噛める次の騎者  
 その馬弱くまだらなる  
 懼るゝ声はそらにあり

(雲は雪の誤植か)

というもので、下書稿の手入れ(第一連の太破線、第二連の太点線・第三連の太棒線)と発表稿との関係を、『新校本全集』校異は「前後は決めにくい」というが、表記に関する異同を除いて整理してみると、次のような配列が考えられる。

【下書稿】(鉛手入れ)

(もって二十を勝ち得んや)  
 はじめの驚馬をやらふもの  
 (更に五票)も↓を)加(得ん↓ふべ  
 き)↓(も↓は得↓(はや  
 すきなり↓もかたからず))  
 雲うち噛める次の騎者  
 (太兵衛の一族はいかならん)  
 その馬弱くまだらなる

【発表稿】

(もつと二十を勝ち得んや)  
 はじめの驚馬をやらふもの  
 (さらに五票も難からず)  
 雲うち噛める次の騎者  
 (太兵衛の一族はいかならん)  
 その馬弱くまだらなる

【下書稿】(藍手入れ)

(もって二十を勝ち得んや)  
 はじめの驚馬をやらふもの  
 (更に五票もかたからず)  
 雲うち噛める次の騎者  
 (↓さらば↓「↓いかにやさらば」太兵衛)の  
 ↓「一族」はいかならん↓「?  
 その馬弱くまだらなる

第二行についていえば、下書稿の開始形に対する鉛筆手入れが、発表形へ展開する一方、ブルーブラックインク手入れ形へ継承されて定稿形に採用されていた、とみるのが合理的であろう。だが、ブルーブラックインクによる第三連への手入れは、下書稿↓発表稿↓定稿、という展開をあてはめることが難しい。右に位置づけたように、発表形は、下書稿の開始形・鉛筆手入れ形と、ブルーブラックインク手入れ形との間に置くべきが、合理的だ。鉛筆手入れ形↓発表形のながれがあったとともに、鉛筆手入れ形↓ブルーブラックインク手入れへのながれもまたあり、そのブルーブラックインク手入れ形を経て、定稿形に至ったとみるのが順当なのである。つまり、この下書稿は、発表稿の登場をもって閉じられたのではない。「選挙」の場合は、

鉛手入れ形 → 藍手入れ ↓ 定稿形

↓ 発表形

という過程が想定され、下書稿は、発表形というバリエーションを生みだしつつ、その後も手入れを受けながら、定稿化への候補稿として生きた、ということなのである。

こうした詩句表現の推敲実態を踏まえたくて、次に、本文表記にかかわる推敲の実態から、下書稿と発表稿、定稿との関係についてみよう。なお、本文表記のうち、ルビの有無については、創刊号の発表稿には一切なく、また、第四号のために文語詩を送稿した際の、先の書簡434には、

振りがなを落とさないことと、あまりははじめの方へは載せないこと、何卒お伝へねがひあげます。

ともあった。これは、創刊号の掲載分で、詩人の原稿にあったふりがながすべて落とされていたために、詩人があえておこなった注意指示であったとみられるので、ここでは分析の対象としない。

漢字／かな表記についていえば、「民間菓」の場合、次のとおり、定稿に至る過程で表記の変化は3か所あって、いずれも下書稿 ↓ 定稿に向かつて密接であり、その親近性がうかがえる。

発表形	下書最終形	定稿形
ひぐまの皮は	熊熊 <small>くまぐま</small> の皮は	↓ 熊熊の皮は着たれども
ひと月の	一月 <small>ひとつき</small> の	↓ 夜に日をつける一月の
啼きかひめぐる	鳴きかひめぐる	↓ 鳴きかひめぐるむらひばり

下書最終形におけるこの漢字／かな表記の、定稿形との親密さは、定稿清書の段階まで下書最終形が詩人に影響を及ぼした、ということを示唆している。やはり、下書最終形がウル定稿として生きつづけていたことを、補強する証左であろうから、先に想定した過程にここでも矛盾しない、ということである。

「選挙」も、次のとおり、変化が3か所あったが、1か所は定稿形の独創であり、あとは、発表稿 ↓ 定稿に向かつて密接な場合と、下書稿 ↓ 定稿に向かつて密接な場合とであり、親近性をうかがいうる実態でない。



発表形

下書最終形

定稿形

かち得んや  
さらに五票も  
難からず

かち得んや  
更  
に五票も  
かたからず

・贏<sup>か</sup>ち得んや  
・さらに五票も  
↓  
かたからず

ただし、漢字／かな表記の推敲実態にかかわらず、詩句手入れの実態からいえば、「選挙」における下書ブルーブラックインク手入れ形と定稿との親密さは決定的で、発表稿以後も動いて、これが定稿化候補補としてあったことはまちがいない。要するに、その下書稿が発表稿ののちもウル定稿としてあった、ということについて、詩句表現と本文表記の継承からみて「選挙」はそう判断しうるものであり、「民間薬」も本文表記の継承からするとその可能性がある、といえそうである。

さらに、『女性岩手』第四号の発表稿によつて事例を加えてゆこう。やはり、詩句表現の推敲実態から、詩稿ごとに本文関係を整理し直して、下書稿と発表稿の位置関係を探ってみる（漢字／かなの別、ルビの有無などの表記の実態は次項で分析する）。まず「祭日」の場合である。

【下書稿】（鉛①手入れ形）

【発表稿】

【定稿】

①谷権現の祭りとして

祭日  
谷権現のまつりとして

祭日  
①谷権現の祭りとして

麓に白き幟たち

麓に白きのぼりたち

麓に白き幟たち

むらがり続く丘丘に

むらがり続く丘丘に

むらがり続く丘丘に

鼓の音の数のしどろなる

鼓の音の数のしどろなる

鼓の音の数のしどろなる

②穎花青じろき稲むしろ

穎花青じろき稲むしろ

②穎花青じろき稲むしろ

水路のへりにたゞずみて

水路の縁<sup>へり</sup>にたゞずみて

水路のへりにたゞずみて

朝の曇りのこんにやくを

朝の曇りのこんにやくを

さくさくさくと切りにけり

さくさくさくと切りにけり

さくさくさくと切りにけり

とあって、ほぼ同文である。掲げた下書稿の五は、鉛筆②（『新校本全集』校異が「別の太い鉛筆」とするもの）による手入れが題名を付与するのみであるので、本文としては、鉛筆①（『新校本全集』校異が起稿と「同じ鉛筆」とするもの）による手入れ形を、発表稿、定稿と並置して掲げた。これを見ると、下書稿は、そこに題名がないという点で、発表形の前に位置づけてよい。つまり、

鉛①手入れ形↓発表形↓定稿形

という過程が想定できる。なお、下書稿にはさらに題名を与えた鉛筆②の手入れ段階があり、これをどこに位置づけるかは、表記の実態分析を踏まえて、想定することにした。

次に「母」について、『新校本全集』校異の逐次にしたがって、ただし、下書稿はその最終手入れの実態を含めて、本文を並置してみると、次のとおり、複雑な手入れを経てたどりついた下書稿の最終詩句を継承するかたちで、発表稿・定稿が展開していることが分かる。

【下書稿】（鉛①↓②手入れ）

母

雪袴黒くうがちし  
うなるのこ瓜食み来れば  
風澄めるよもの山はに  
うづまくや秋のしらくも

【発表稿】

母

ゆきばかま黒くうがちし  
うなるの子瓜食み来れば  
風澄めるよもの山はに  
うづまくや秋のしらくも

【定稿】（十字屋版全集本文）

母

雪袴黒くうがちし  
うなるのこ瓜食みくれば  
風澄めるよもの山はに  
うづまくや秋のしらくも

その身こそ瓜も欲りせん  
齡弱き<sup>ハヤシ</sup>そのこのははは↓母・

↓の手すさび↓・（にしあれば）

【以下2行は手入れの節目ごと】

【ひたすらに↓手すさびに】紅きすす

きの穂を【あつめ↓つみて】

野をよぎりくる

←

すすきの穂【手すさびに】つみ↓紅き

その身こそ瓜も欲りせん  
齡弱き母にしあれば

手すさびに紅き萱穂を

つみ集へ野を過ぎるなれ

その身こそ瓜も欲りせん  
齡弱き母にしあれば

手すさびに紅き萱穂を

つみつどへ野をよぎるなれ

を」

「したがひて↓手すさびつ」野をよぎ

りくる



手すさびに紅き萱穂を

「折りとりて↓つみつどへ」野をよぎ

りくる↓野をよぎるなれ」

この場合も、

鉛①手入れ形↓鉛②手入れ形↓発表形↓定稿形

という過程を想定するのが自然なことであろう。

最後に、「保線工事」の場合をみよう。

ここでも、『新校本全集』校異の逐次にしたがって、その本文を並置してみると、次のようである。

【下書稿】（藍手入れ形）

保線工事

狸ヌミの毛皮を耳にはめ

シャブロの束たばに指組みて

うつろふ窓の雪のさま

黄なるまなこに泛なべたり

雪をおとして立つ鳥に

妻がけはひのしるければ

笑まひかそけきたまゆらを

松は畳めり風のそら

【発表稿】

保線工事

狸ヌミの毛皮を耳にはめ

シャブロの束たばに指組みて

うつろふ車窓くるまどの雪のさま

黄なる瞳ひとみに泛なべたり

雪をおとして立つ鳥に

妻がけはひの著しるければ

ほのかに笑あまふその頬を

松は畳めり風のそら

【定稿】（藍↓藍手入れ）

保線工事

①狸ヌミの毛皮を耳にはめ、

シャブロの束たばに指組みて、

うつろふ窓の雪のさま、

黄なるまなこに泛なべたり。

②雪をおとして立つ鳥に、

妻がけはひのしるければ、

「ほの↓仄」かに笑あまふたまゆらを

松は畳めり風のそら。

ここで注目されるのが、定稿詩句「ほの↓仄」かに笑まふたまゆらを」の詩句生成であろう。そこには、発表形↓定稿形のながれとを、合成することで成ったのではないか、と思わせる実態が潜んでいるようだ。

下書鉛②手入れ  
しばしは明きその頬を↓ほの  
かに笑まふその頬を

発表形  
ほのかに笑まふその頬を

下書藍手入れ  
笑まひほのけきその頬を↓笑  
まひかそけきたまゆらを

定稿開始形  
ほのかに笑まふたまゆらを

実際、もう少し細かく分析してみると、右のような推敲現場がみえてくる。つまり、下書稿鉛筆②手入れ形を承けた発表形の「ほのかに笑まふ」と、下書稿ブルーブラックインク手入れ形の「たまゆら」とが合体しつつ、定稿形に至ったことについて、

鉛①手入れ形↓鉛②手入れ形 → 藍手入れ形↓定稿形

↓発表形

という過程が想定されるのである。

このことは、詩人が定稿の清書にあたって、発表稿（雑誌）も傍らに置いていたであろうが、この下書稿をも手許に置いていた状況もうかがわせよう。下書稿のブルーブラックインク手入れは、あるいは定稿に近接していたのかもしれない。定稿用紙の前に、手にしていたのがブルーブラックインクの筆具であり、下書稿手入れはそれによっておこなわれた、という可能性も考えられるからである。そうした状況に、このブルーブラックインク手入れがあったとすれば、逆に、発表形のほうにある「よさ」を受け容れてもよいであろう。もう1か所あったブルーブラックインク手入れは、それを実行したとみられる過程をみせている。

下書鉛②手入れ形

シャブプロの束を身に投げつ

発表形

シャブプロの束に指組みて

下書藍手入れ形

↓シャブプロの束に指組みて

定稿形

この事実から、右の過程図は次のように補整されなくてはならない。

鉛①手入れ形↓鉛②手入れ形 → 藍手入れ形↓定稿形

↓発表形

こうしたありようを見ると、「保線工事」の下書稿については、まさしくウル定稿として、定稿にかぎりなく接近しつつ機能していた、といえるもののではないか、と思える。

それに対して、「母」は、その詩句表現の推敲実態だけを踏まえていうと、

鉛①手入れ形↓鉛②手入れ形↓発表形↓定稿形

という過程が浮かびあがってくるころまでであり、発表稿以後の下書稿の動向については、「祭日」の場合とともに、次の本文表記における推敲実態の分析にゆだねるしかない。

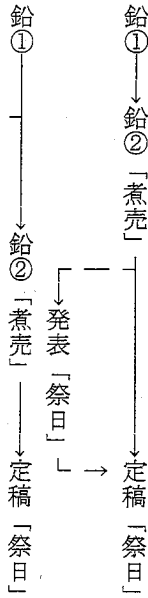
4

ここで、漢字／かなの別、ルビの有無という本文表記にかかわる推敲の実態から、下書稿と発表稿、定稿との関係について、あらためてみてみよう。

「祭日」の場合、定稿に至る過程で変化が見えたのは、次の5か所であった。

発表形	下書最終形	定稿形
a 谷権現のまつりとして	谷権現の祭りとして	↓谷権現の祭りとして
b 麓に白きのぼりたち	麓に白き幟たち	↓麓に白き幟たち
c むらがり続く丘丘に	むらがり続く丘丘に	↓むらがり続く丘丘に
d 穎花青じろき稲むしろ	穎花青じろき稲むしろ	↓穎花青じろき稲むしろ
e 水路の縁にたゞずみて	水路のへりにたゞずみて	↓水路のへりにたゞずみて

いずれも発表形でなく、下書最終形表記のほうを採用して、定稿形は、下書最終形に親近性がある。ただし、その下書稿には、題名のみを与えた鉛筆②の手入れが含まれている。とすると、詩稿題名の推敲順序が問題になるが、考えられるその過程は、次の二通りになるだろう（…手入れ形の略）。



↓発表「祭日」

いずれをとるべきなのか。

詩稿題名のみにかざれば、定稿が発表稿の題名を採用した、という点で、前者の過程が考えられて当然だが、少なくとも、詩稿本文だけでみれば、下書最終形（鉛筆①手入れ）のほうが、定稿形により親密なのだ。そこに、発表稿以後も定稿候補稿として生きつづけていた下書稿の存在を確かみにみてよいであろう。ただその意味では、鉛筆②手入れが、後者の過程でとらえられる余地もある。

「祭日」における下書稿鉛筆②手入れと発表稿の位置づけについて、ふたつの過程を想定し、詩稿題名にかかわる推敲の揺れを考えようとするのは、少なくとも「祭日」の場合、詩人自身の題名への執心からくる、推敲の揺れが（了稿）以来のこととしてあったからである。発表稿がくるまでは、たとえば、詩の場の「谷権現の祭り」に対して、それと重複する「祭日」という命名は避けようとしてきた詩人の動きがある（下書稿一↓二↓三↓四）。そこに、「等価関係なら表題を省略することができる」詩の場と題名とであってみれば、「互いに補完しあう」関係へと向かった、詩人の命名態度がみえるのだ。

ならば、「谷権現の祭り」を継承したうえで無題とした下書稿五において、追加手入れされた題名「煮売」は、下書稿一の「祭日」を棄てて、下書稿四の「茶亭↓煮売屋」へと向かってきたながれを承けて、この人物の行動をより具体化しようとした命名だったといえる。つまり、

茶亭↓煮売屋」↓・（鉛筆①）↓煮売（鉛筆②）

という命名過程は親密で自然なのである。しかし、そこから発表稿が、詩の場に「谷権現の祭り」を有しながら、下書稿一の復活ともみえる「祭日」としたならば、それはそれまでの命名行動に反してしまふことになる。

だが、発表稿の「祭日」は、下書稿一の「祭日」の復活なのではない。

というのは、下書稿（五）の鉛筆①手入れで、詩の場には大きな変質があったのである。それは、

さやかに青き稲<sup>むし</sup>↓いまだに青き稲<sup>むし</sup>↓なほ青じろき稲<sup>むし</sup>↓穎花<sup>はな</sup>青じろき稲<sup>むし</sup>

という推敲に現われている。たどりついた「穎花青じろき稲むしろ」とは、時期が来てなお結実しない稲田のことである。人物の周縁を「青き稲田」としかつかまえられなかったところから、詩人は、下書稿五で凶作の兆候を露わにした詩句を獲得して、この人物の背後に迫っている凶作の危機を詩の場に忍ばせたのだった。

この凶作認識が詩人に重くのしかかっていたからこそ、命名は、等価・補完関係といった「役割」よりも、詩の場との緊張関係を構築する「表現」そのものとして、意図されたといえるのではないか。凶作認識が支えた詩の場では、それぞれの命名企図が、

煮売 : 祭りに対して補完 ↓ 凶作の予兆のなか祭礼を迎える農婦(焦点化・象徴として提示)

祭日 : 祭りに対して等価 ↓ 迫る凶作危機のなかで迎えた例大祭(逆説化・祈念を含む提示)

といった、「役割」から「表現」そのものへ転換し、緊張関係の構築を志したものであつてみれば、繰り返される悲惨な凶作に立ち向かうにつけてきた農村の深い祈りさえもこめて「祭日」か、凶作に立ち向かうしかない農村の深い苦悩をたんと祭の支度をする農婦ににじませた「煮売」か、それに揺れ動く詩人がいて、不思議でない。したがって、

・ ↓ 煮物(鉛筆②) ↓ 祭日(発表稿)

・ ↓ 祭日(発表稿) ↓ 煮物(鉛筆②)

というふたつの命名過程は、それぞれに想定しうるものなのである。

けれども、いずれかに断定するてがかりはない。ただし、自筆原稿の資料を見ると、鉛筆②による「煮物」という題は、(写)の符号の上方にあつて、符号を避けているようにもみえる。それにこだわってしまうと、発表稿のうち、(写)の符号を鉛筆で与えた直後にも、閃いてきた題名をその筆具で書き込んだものかもしれぬ、という想像もむやみに掻き消してしまうわけにはゆかない、そのような真実味がそこにはやはりある。

「母」の場合にも、後に掲げるように5か所に変化が見えた。

定稿形は発表形本文の5か所とも不採用としているのである。その分、g・hについては定稿形が独自に改めているが、f・i・jは下書稿最終形の表記を復活させている。詩句表現の推敲実態からは、発表形↓定稿形という過程が順当にみえたのだけれども、本文表記の実態からは、下書最終形↓定稿形に向かつて親密になっているのである。

### 発表形

f ゆきばかま黒くうがちし  
g うなるの子瓜食み来れば  
h その身こそ瓜も欲りせん  
i 手すさびに紅き萱穂を

### 下書最終形

雪袴黒くうがちし  
うなるのこ瓜食み来れば  
その身こそ瓜も欲りせん  
手すさびに紅き萱穂を

### 定稿形

↓ 雪袴黒くうがちし  
・ うなるのこ瓜食みくれば  
・ その身こそ瓜も欲りせん  
↓ 手すさびに紅き萱穂を

j つみ集へ野を過ぎるなれ つみつどへ野をよぎるなれ ↓つみつどへ野をよぎるなれ

そうするとここでは、

鉛①手入れ形↓鉛②手入れ形 ↓定稿形

↓発表形

という過程を想定すべきではないのか。

つまり、下書最終形が、詩人にとつて、やはり定稿候補稿として生きていた、というありようが浮かびあがってくるのである。発表形の位置づけについては、「民間薬」や「選挙」の場合に似てバリエーションとみることが可能であろう。

「保線工事」の場合には、変化は次の3か所だけに見えた。

発表形

k うつろふ車窓の雪のさま

↓黄なる瞳に泛べたり

m 妻がけはひの著るければ

下書最終形

うつろふ窓の雪のさま

↓黄なるまなこに泛べたり

妻がけはひのしるければ

定稿形

↓うつろふ窓の雪のさま

↓黄なるまなこに泛べたり

↓妻がけはひのしるければ

定稿形が採用した3か所は、いずれも下書最終形（鉛筆②手入れ形）であり、ここでも、下書稿↓定稿に向かつて親密なのである。確かに、発表形はブルーブラックインク手入れ形に一部分影響を与えてはいたけれども、本文の継承という点では、詩句表現・本文表記のそれぞれで、定稿は下書稿の影響下にあった、といえる。発表稿以後の下書稿は、やはりウル定稿として機能していたのである。

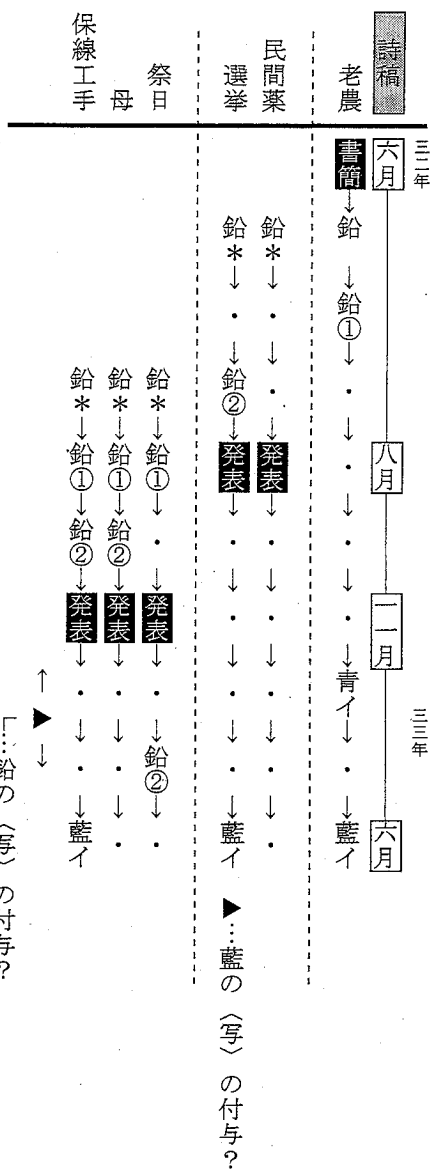
要するに、詩句表現と本文表記の継承からみて、「祭日」・「母」・「保線工事」の場合もまた、その下書稿は、発表稿のちもウル定稿としてありつづけた可能性が強い、といえそうなのである。

こうして《文語詩稿》の雑誌発表形と、《写》の符号が与えられた下書稿（詩稿用紙に展開したものとしては最終草稿に位置づけられる）における手入れ過程との関係を検討してみると、発表形ののちに位置づけうる手入れが存在する可能性が指摘できるのである（「選挙」・「祭日」・「保線工事」）。また、手入れのないもの（「民間薬」）も、手入れが発表形に確かに先行しているもの（「母」）も、本文表記の定稿への採用実態からみると、その草稿が雑誌への発表以後棄てられたとはみえないことが指摘できる。



つまり、詩稿用紙に展開した草稿は、発表稿をもって閉じられたわけではない。

あらためて、最終草稿における手入れ過程に、発表稿を位置づけてみると、次のように整理できるだろう。本章1節でとりあげた書簡形を有する「老農」も併せみることにする（\*は起稿時の「書きながら」手入れ、①は起稿と同じ鉛筆の手入れ、②は別の鉛筆の手入れ）。



「…鉛の〈写〉の付与？」

書簡形・発表形のそれぞれが、その時期をほぼ限定できるから、ここには時間軸もみえてくる。三三年の六月は、定稿用紙の準備がなされた時期で、定稿清書にはブルーブラックインクが用いられたところから、草稿上に現われたブルーブラックインク段階が定稿清書段階に近接していると仮定し、そのあたりに置いている。

それぞれの〈写稿〉を含む詩稿が、雑誌発表（書簡引用）された以後も草稿として生きていたとすれば、定稿に写すべきであると指示する鉛筆の〈写〉の符号は、発表（引用）時期よりもち、と考えてよからう。六月の「老農」は、鉛筆手入れ段階のものになるインク段階に青インク手入れ→ブルーブラックインク手入れを有しており、八月の「選挙」も（この〈写〉はブルーブラックインクによるが）、ブルーブラックインク手入れ段階をもつ。このブルーブラックインクは、定稿清書段階のものとかわる可能性が強い。さらに、一月月の「祭日」鉛筆②手入れが、発表稿以後のものともみうるから、その鉛筆が、〈写〉の符号を与えた鉛筆とかかわってくる可能性もある。とすれば、鉛筆の〈写〉の符号を与えた〈写稿〉の成立が、ブルーブラックインク手入れ段階よりも前で、青インクや鉛筆②手入れ段階以後にあったか、と推理される。



・卑泥のわざに身をわびて  
・(太兵衛の一族はいかならん)

(「民間薬」)  
(「選挙」)

という詩句にうかがわれるとおり、農作業や選挙活動における反近代性の指摘であり、それはそのまま東北／岩手の後進性への告発を実は秘めているよう。『女性岩手』の「伝統と因襲の時代と社会を止揚し」たいという趣意に内部で深く呼応したものであり、ほぼ巻頭に掲載されたこの2編が示す針路は、過烈な方向性さえひそめていた。

けれども、先にあげた読者は、実はそこを素通りしており、その評価は、文語態による「この田園詩の物語る世界が、空間に再現されるばかりでなく、其の発声さへもがはつきりとときとれる感じ」だけを指摘して、その造形性と音楽性の豊かさに注目していたが、もちろん詩人もそれを目論んでいたにちがいないけれども、「社会問題の探究であり、全生活の探究であり―足下の問題の探究」に向かおうとしたこの雑誌に寄せた、作品の思想性は、見過ごされていたといえる。

こうした読者の存在を知った詩人が、第四号に発表したのは、「祭日」・「母」・「保線工事」に総題を「母」としたものであった。これについて、小原忠が「婦人雑誌としてふさわしいものとして選んだものとおもわれる」と感じたように、女性を素材とした田園詩で、人物たちの行動も穏やかなものであり、詩人は読者の評言にに応じている、とみえる。だが、田園詩そのものである「祭日」や「母」の、

・穎花青じろき稲むしろ

(「祭日」)

・うなるのこ瓜食み来れば

(「母」)

という詩句には、その時期になっても結実しない稲や、漬け瓜を食むしか空腹を満たされぬ児とそれさえ口でできない母のありさまととらえられているのであり、その背後には、凶作農村、飢饉の風土という問題が潜んでいるのである。

そして、シャブロを携えて持ち場に向かう「保線工事」は、冬場の出稼ぎ農民の肖像であった可能性<sup>1,2</sup>がある。彼が妻を想うのも、もう長い間家庭を離れているためだ。とすれば、

・雪をおとして立つ鳥に／妻がけはひのしるければ

という詩句には、夫を待ちわびている妻のすがたも透けてみえる。農村がその貧困によって直面した家族の離散という現実の一端が、ここには提出されている。こうした発表稿に、

社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ

『雨ニモマケズ手帳』

といった詩人宮沢賢治の覚悟の反照がほのみえないだろうか。少なくとも、右に示した発表稿の詩想に通底している〈農村〉への視座が、《文語詩稿》の針路のひとつを定めようとしているように思える。

しかし、時代は日中戦争から世界戦争に向かつてひたはしり、国民生活は窮乏を強いられてゆく（『近代日本総合年表第四版』により、アトランダムに引いた）。

三一年 九月 満州事変始まる

東北地方の冷害・凶作による農村不況深刻化

三二年 三月 満州国建国宣言

五月 五・一五事件

六月 満州国承認決議

七月 文部省農漁村の欠食児童20万と発表

一〇月 満州へ武装移民団出發416人

三三年 三月 国際連盟脱退

さらに国家は、統制と弾圧の強化が、国民生活に重圧をかけてきていた。

そんななかで、《文語詩稿》再編が向かうところ、農村の現状を題材とした詩稿の、「発表」によって確かめるなどということは、あるいは「社会的被告」として「反感」をうるといった程度ではすまされぬ事態をうむ虞もある、と考へざるをえない。「発表」を回避して、〈写〉の符号を与えることによつて詩稿の熟成を押し進めようと、詩人はしている。それは、「社余農村を最後の目標として只猛進せよ」という志の〈詩的実践〉として、「闘ふための仕度」として《文語詩稿》がまさにあるうとしている現場そのものだ、といつてもよいのではないか。

(注)

1 『賢治研究』8号（一九七一・八）。

2 『新校本全集』第十六卷上補遺・資料篇所収。

3 題名の推移を、次に掲げる。また、谷権現の祭り・蒟蒻を切る人・パラソルの農婦という素材の、詩の場における有無も併せ掲げる。なお、↓は変化、・は消失、↓は新設、○は同素材有り、↓・は削除。発表稿の位置は『新校本全集校異』の配列にしたがつた。

過程	題名	谷権現	蒟蒻	パランル	用紙など
→ 下書一 初期下書二 (祭日消されぬまま) ← 下書三	青田の中の商店↓祭日 (祭日消されぬまま)	○ ↓	○	○	無野、(了)あり 一余白 一ウラ
→ 下書四 再編下書五 ← 発表稿	茶亭↓煮売屋 ・ ↓煮売 祭日	○	○	○	2系 四ウラ、↓別の太い鉛筆、(写)あり 女性若手
定稿定稿	祭日	○	○	○	定稿用紙

これを見ると、下書稿一の段階ですでに、詩人はこの詩稿に対する命名に揺れている。鉛筆で起稿した「谷権現の祭りの日、青き稲田のへり」で出店の人が蒟蒻を切っているのを、祭りに急ぐ児を背負った農婦がうらみがちに通り過ぎてゆく」この詩の場に、詩人は、「青田の中の」「商店」という、場のなかの点景に集約してゆく題名をいったんは与えるのだが、同じ鉛筆の手入れ段階で、「谷権現の祭り日」を詩の場から削除(隠蔽)するとともに、出店の「母」と祭りに急ぐ「若き母」という二人の女性を対比させてゆくと、題名を、詩の場の枠組みを提示し補完するとみられる「祭日」に変更する。

ところが、その「祭日」が消されぬまま、余白に下書稿二を起稿し、「谷権現の祭り」を鼓の音を響きわたらせて復活させる一方、母たちを「をみな」と呼び変えて、さらに用紙裏面に移した下書稿三で、詩の場としては下書稿二を引き継ぎながらも、その「祭日」の題名は与えなかったのである。それが、未使用の用紙にあらためて起稿した下書稿四で、命名そのものは復活する。ただし「祭日」ではなく「青田の中の商店」のながれを引く「茶亭」だった。この段階で、鼓の音が響きわたる谷権現の祭りの詩の場から、児を背負う若き母の姿はすっかり消え去り、蒟蒻を切っている人物だけがクローズアップされてくる。「茶亭」(煎じ茶などを供する小店)という題は、この人物の身の上をおぼろに明かすが、さらに「煮売屋」(飯と煮物を供する屋台)へと調整されて、より具体的な人物像が現われてくるのである。

4 栗原敦氏「『文語詩稿』試論」(『宮沢賢治 透明な軌道の上から』所収、新宿書房一九九二)。

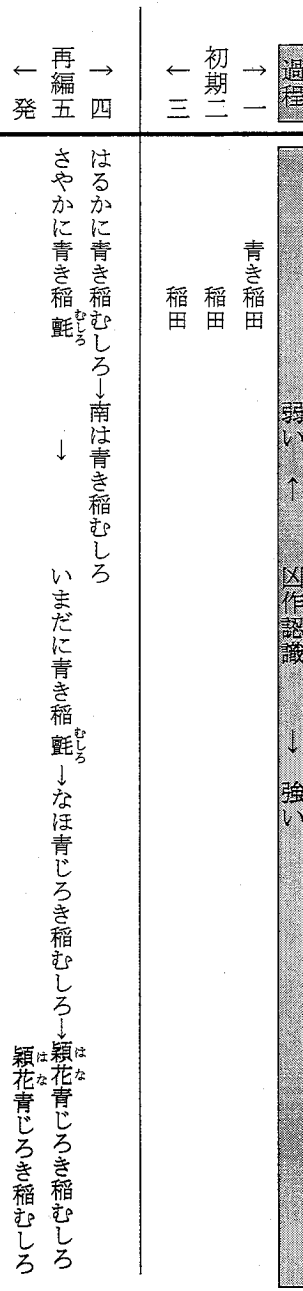
5 注3に同じ。

6 茶亭↓煮売屋 ↓ ↓煮売 という命名過程を「親密で自然な」と記述したが、その題名がもたらす意味としては、「茶亭↓煮売屋」と「煮売」とでは大きな差異が生まれている。前者は、「亭・屋」によって限定されることで商いの印象が強く残り(下書稿一では「商店」と明示されていた)、蒟蒻を切る人物も商売につらなる人物に造形されてしまうが、後者で、「煮売」の限定が

外されると、その人物造形が、祭日だけでも副業として出店を張って現金を得なければならぬ農家の主婦にまで、拡大されてくる。店でなく人物の行動に焦点化されることによって、小さな農山村の年中行事における暮らしの現場が彷彿としてくるのである。そうした人物像に焦点化する意図がこの命名にはあると思える。

7 谷権現は、谷内権現とも称する東和町の丹内山神社から発想した創作という(小沢俊郎による『新修宮沢賢治全集』第六巻語注)。丹内山神社の例祭は、「旧八月一〜二日」(神社名鑑一九六四)であり、稲は結実する頃。似た状況を「盆地に白く霧よどみ」が「稲田の水は冽くして／花はいまだにをさまらぬ」(下書稿三「二学期」)などともとらえている。

8 稲田にかかわる表現の推移を、次に掲げる。



穎花青じろき稲むしろ

9 1章1節1項を参照のこと。  
10 注1に同じ。

11 「祭日」の詩層の底には、  
モツペをうがち児を負ひて  
青きバラソルかざしつゝ  
祭りに急ぐ農婦あり  
はじめに店をうちのぞき  
歪める梨と菓子とを見

次には切らるゝこんにやくを  
やゝながしめにうちまもり  
その故なにかわかかねども  
うらむがごときまなごして去る

(下書稿一 開始形、(了稿)か)

という記憶が埋められている。「母」については、岡井隆氏「文語詩の発見」が、背後にはおそろく病める賢治には、もはやどうしようもない暗い現実が沈んでいる。賢治が思いやっているのは、やはり「母」

の飢えである。このモチーフを見逃すわけにはいかない。

〔文語詩人宮沢賢治〕所収、筑摩書房一九九〇〕

と指摘している。

1 2 『詩ノート』の「一〇八八 祈り 一九二七、八、二〇、」に、

倒れた稲を追ひかけて 身を切るやうな利金を借りて

これからもまだ降るといふのか やうやく肥料こえもした稲を

一冬鉄道工夫に出たり まだくしゃくしゃに潰さなければならぬのか

とあって、不作や凶作、あるいは恐慌による不況のために冬場には、農村から、男たちは工夫や鉞夫として出稼ぎに向かっていたことを詩人は承知していた。

1 3 発表稿に重なる時期に推定される書簡下書き（書簡433、三二・一〇推定草野心平宛）に、

あなたへも数回手紙を書きかけましたが、主義のちがひですか、何を書いても結局空虚なやうな気がして、みんな途中でやめました。ちがった考を許すならやつぱりにせものです。何としても闘はなければならぬといふと、それはおれの方だとあなたは笑ふかもしれません。さうでもないです。わたくしの今迄はたゞもう闘ふための仕度です。

とあって、「主義のちがひ」と、草野心平との生き方の違いを訴えながら、病床の宮沢賢治が「さうでもないです。わたくしの今迄はたゞもう闘ふための仕度です」というとき、その仕度に、《文語詩稿》の再編作業もまたあったと考えられる。

第3章 定稿化の過程



## はじめに

本章は、〈写稿〉から定稿に至る過程を、本文異同の実態を把握したうえで、それぞれの〈写稿〉と定稿とにおける詩の場の変容と詩想変容の程度について概観し、詩の場の変容程度が大きいとみた詩稿について、その詩想の内実を考察して変容の程度を明らかにする。

1節が定稿化にともなう本文異同の実態把握と、その分析をおこなって、異同傾向を明らかにする。

2節で定稿化による題名のゆくえを軸に、〈写稿〉から定稿に至る詩の場の変容ぶりを概観する。

3節では、詩の場に相当の変容をみた詩稿について、その詩想の変容実態を具体的に考察し、場の変容が詩想の揺らぎや改変によるのではないことを推定する。

4節は、定稿化が、詩人にとっては詩想の定立に向かう過程であったという仮説を提案する。

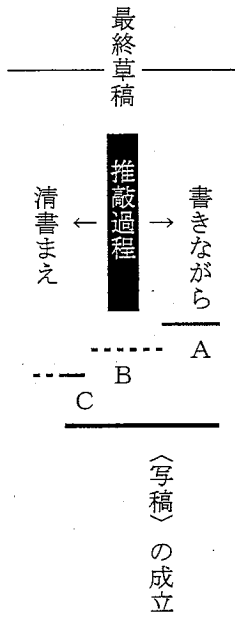
1節 〈写稿〉本文の想定と、定稿本文との異同

1

《文語詩稿》の再編に向かった詩人宮沢賢治が、その作業を、鉛筆と赤インクによって〈写〉の符号を与える詩稿の撰定に向かって収束させていったのが、一九三二（昭和七）年一月以降、三三（昭和八）年六月頃の定稿用紙の準備がととのうまでの間であつたらう、と想定した。

その鉛筆や赤インクによる〈写稿〉の成立はおよそ100編、そのすべてが定稿化されているところから、詩人も、それらをもってウル定稿に位置づけつつ、百編というまとまりをもったウル定稿集の構想さえ構築しようとしていた、と考えられるほどである。そのウル定稿集構想の実体に迫ろうとすれば、あるいは、ウル定稿と定稿との差異に意義を見いだそうとすれば、〈写稿〉としての本文を精確につかまえる必要がある。けれども、〈写稿〉の成立は、〈写〉の符号がどの手入れ段階で与えられたかを特定するのに困難な場合が多く、精確にはつかみきれない、という実状がある。すでに、鉛筆と赤インクによる〈写稿〉を含む詩稿について、個別にその用紙上に現われた手入れ過程をたどり、〈写〉の符号が与えられた段階を判断して、〈写稿〉想定本文を提案している。それは、〈写〉の符号が一括して与えられた段階がある、という可能性を踏まえずにおこなった、詩稿ひとつひとつの手入れ過程を、いわば「縦の時系列」での読み解こうとした試みであつた。

本稿は、手入れ過程の「縦の時系列」をにらみながら、詩稿それぞれの手入れ過程を、「横の時系列」でもとらえる〈階層〉を想定することに、よつて、〈写稿〉を含む詩稿の動きを〈群〉で把握しながら、〈写〉の符号が与えられた状況（様態／様相）に傾向を見だし、それをも踏まえて〈写稿〉の成立段階を想定しよう、と試みるものである。このように〈写稿〉本文に迫ることによつて、ウル定稿集の実体に接近し、定稿との差異のより精確な実態をつかもうとすることを、目標としたい。



鉛筆・赤インクによる〈写稿〉の成立は、起稿した最終草稿が推敲される過程にとらえられるが、〈写〉の符号が与えられたのちの

のと考えられる定稿清書前に位置づけるべき手入れが、幾例か見いだせるということがある、〈写〉の符号が与えられた手入れ段階を正確に特定することが困難な場合のあることが分かっている。すると、手入れ過程における〈写稿〉成立の段階は、右のようにも概念化できる。

Aに位置づけるものは、起稿（書きながらの手入れを含む）後の手入れなし、という場合があり、手入れがあっても起稿と同じ筆具を用いたもので、〈写〉の符号が与えられる以前と推定できる段階である。次に、Bに位置づけられるものは、起稿とは異なる次段階の筆具による手入れがあつて、それが〈写〉の符号が与えられる前か後かを判断することが不可能な段階にある。そして、Cに位置づけるものは、明らかに〈写〉の符号が与えられた後に手入れがあつた場合を含むもので、最終手入れが多く定稿の起稿にも用いられるブルーブラックインクによつており、それは清書直前手入れと想定することも可能な状況である。要は、〈写稿〉の成立後、定稿の清書前にも最終の手入れが加わっているのか、どうか、ということである。これにしたがつて、まず、鉛筆・赤インクによる〈写稿〉の成立についていえば、定稿との間にもう一段階、定稿の清書より前におこなわれたと考えられる手入れ層が推定されるのであり、必ずしも〈写稿〉を含む詩稿の最終手入れ段階でその成立が果たされたものでない可能性があるのだ。つまり、〈写稿〉の成立以前の手入れとも、定稿清書前の手入れとも、判断しがたい場合があるのである。すると、その〈写稿〉の本文は、次のような3類型に分別できよう。

I 類として、

・鉛筆、赤インクの〈写〉↓〈写稿〉成立後、手入れなしとみられる場合。

を想定、次のとおり、自筆原稿の様態から、その手入れ状況と符号の付与との関係を判断する。

手入れなし、書きながら手入れのみの場合。開始と「同じ鉛筆」・「同じインク」（それぞれ新校本全集校異の記述による）の手入れで推敲がとまる場合で、手入れが符号に重なるまたはかかっているものが多い。

また、II類として、

・鉛筆、赤インクの〈写〉↓〈写稿〉成立後、手入れの可能性もある場合。

を想定、次のとおり、自筆原稿の様態から、その手入れ状況と符号の付与との関係を判断する。

最終手入れが、鉛筆の場合、符号にかからない。インクの場合は、符号にかからないのが大勢にみえるが、重なる、またはかかる場合もある（段階を特定したい同種のインク手入れの場合も、たとえば、ブルーブラックインク①手入れが〈写〉の符号が与えられる以前にあつて、そのうえで符号が与えられ、その後インク②によつて符号にかからない手入れがおこなわれた、という状況が考えられる）。

さらに、Ⅲ類として、

・鉛筆、赤インクの〈写〉↓〈写稿〉成立後、手入れありとみられる場合。

を想定、次のとおり、自筆原稿の様態から、その手入れ状況と符号の付与との関係を判断する。

最終手入れ段階の鉛筆が、〈写〉の符号から遠い、あるいは、それを避けているともみられる場合。多く最終手入れ段階のブルーブラックインク手入れで、符号にまったくかからないか、避けているともみられるもの。

こうした類型化は、自筆原稿資料を通観したうえでのものだが、私による判断にすぎない。けれども、定稿開始形本文と対照するための〈写稿〉本文の想定にあたって、手続きを明確にすることで、恣意的な判断に揺れることを避け、可能なかぎりの客観性を与えようとするものである。したがって、この作業は、別の判定基準による〈写稿〉本文の想定を妨げるものでなく、ひとつの試みとして〈写稿〉本文を提案する、という立場にある。

ただし、原則として右の判断内容によって〈写稿〉群を類型化するが、判断の条件にはずれてはいても、〈写稿〉を形成するその草稿上の推敲過程全体からみて、要件を満たさぬ現象について、ある程度合理的だとみられる説明が成り立つ場合、例外的に扱うことがある。その場合は、「附章・〈写稿〉想定本文と定稿開始形との本文対照」のなかで説明を加えることとしたい。

## 2・1

I類の〈写稿〉として、次に一覧する詩稿群の手入れ段階を想定する。

なお、表に指示する事項については、次のとおりである（以下同）。

1) 「詩稿」は、定稿題または無題定稿の冒頭詩句を5字分まで示した。

2) 「草稿」は、〈写稿〉が成立した下書稿で『新校本全集』校異による逐次番号を示し、ヨはその余白稿、「了」は〈了〉の符号を示して、「始」は、起稿した筆具を示した。

「手入れ」は、〈写稿〉に至る手入れ筆具の順を示したが、起稿時の書きながらの手入れは原則として示さない。

「写」は〈写〉の符号の筆具、ただし「了」としたものは〈写〉でなく鉛筆の大きな「了」の文字であったもの。

筆具は、鉛筆を「鉛」、ブルーブラックインクを「藍」、赤鉛筆を「赤」、青インクを「青」と示した。「メ」はメモ。

3) 「清書前」は、定稿清書前の手入れ段階。「定」は定稿を起稿した筆具を示し、その「手入れ」には筆具の順を示した。



II類の（写稿）として、次に一覽する詩稿群の手入れ段階を想定する。なお、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」は、定稿への起稿

2・2

3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0
夜	雨	廐肥をにな	けむりは時	みちべの苔	燈を紅き町	玉蜀黍を播	吹雪かゞや	あな雪か屠	夜をま青き	血のいろに	賦役	涅槃堂	水と濃きな	商人らやみ	四時	われのみみ	母	僧の妻面膨	流水
一	一	四	四	一	二	二	三	三	四	四	二	三	三	二	三	二	二	三	一
藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	青	鉛	鉛	鉛	鉛	鉛
藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	・	・	青	鉛・赤	鉛	鉛	鉛	鉛
鉛														鉛	鉛				
・														・	・				
藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍	藍
・	藍	・	藍	藍	・	藍	藍	藍	藍	・	藍	藍	藍	藍	藍	・	・	・	・
														藍	(十字屋版全集)				
														藍	藍	藍	藍	藍	
5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	5	4	5	4	5	4	4	5
化	化	化	化	新	発	化	新	新	発	発	新	無	化	発	発	新	新	発	化
開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	開始と	書きながら手入れのみ	書きながら手入れのみ	書きながら手入れのみ	開始と	開始と	赤鉛筆、写に重なる	鉛②、横線にかか	鉛②、横線にかか	鉛②、横線にかか
「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」	「同じ」

と手入れが青インクによる者で、他の（写稿）による定稿化に後れて成った可能性もあるが、含めて考察する。  
 なお、表中の、「手入れ」・「清書前」・「定」では、次のような指示符号を加えている場合がある。

手入れ 写  
 鉛↓？鉛  
 鉛 鉛 赤 鉛 鉛  
 鉛↓？鉛

清書前 定  
 ↓鉛？  
 ↓鉛？  
 鉛②？  
 藍？↓藍  
 鉛？↓鉛

▽最終手入れは、（写）印の付与後を含むか、または付与後の可能性がある。  
 ▽最終手入れが、（写）印の付与後の可能性がある。  
 ▽同右。  
 ▽最終手入れは、定稿清書前のものを含むか、または清書前の可能性がある。  
 ▽最終手入れは、定稿清書前のものを含む可能性がある。

また、筆具で「赤」は赤インク。

詩稿	草稿	手入れ	清書前	定	手入れ	遺稿	手入れ備考
1 来賓	三 鉛	鉛↓？鉛	鉛？	鉛	鉛	化	鉛、写に重ならない
2 麁坑	四 鉛	鉛	鉛？	鉛	鉛	発	鉛は1箇所、写に重ならない
3 開墾地落上	一 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	新	鉛②、写に重ならない
4 祭日	五 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	発	鉛① 1箇所横線かかる、写↓鉛②題？
5 秘事念仏二	二 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	化	鉛③、写に重ならない
6 酸缸	六 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	発	鉛、横線に多くかかる
7 ほのあかり	四 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	発	鉛、写に重なる
8 うたがふを	三 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	発	鉛、1箇所写に重なる
9 腐植土のぬ	二 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	発	鉛、3箇所は写に重なる
10 初七日	三 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	新	鉛、題が写に重なる
11 コバルト山	三 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	発	鉛、題が横線にかかる
12 短夜	二 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	化	鉛、1箇所横線にかかる
13 副業	一 鉛	鉛	鉛↓？鉛	鉛	鉛	化	鉛、2箇所横線にかかる

Ⅲ類の〈写稿〉として、次に一覽する詩稿群の手入れ段階を想定する。  
 なお、表中の「手入れ」では、Ⅱ類に加えた符号のほかに、次のような指示符号を加えている場合がある。

草稿	始	手入
一了↓鉛		
二了↓鉛 ↓三鉛		
三了 四鉛		

鉛	鉛	写
↓鉛		清書前
↓二藍		定

- ▽〈写稿〉が〈了稿〉手入れから始発した場合。
- ▽〈写稿〉が〈了稿〉手入れから始発、別稿として手入れ形展開の場合。
- ▽〈写稿〉が〈了稿〉を踏まえつつ、別稿として始発した場合。
- ▽〈写〉印付与後に手入れがあったと仮定する。
- ▽〈写〉印付与後、定稿清書前手入れが別稿に展開したと仮定する。

1 8	鶯宿はこの	一	鉛	鉛	示	鉛②?	藍	4	発	イキル一鉛②、横線にかからない
1 7	塔中秘事	七	鉛	鉛	鉛	藍?	↓藍	4	発	藍、1箇所横線にかかる
1 6	紀念写真	二	鉛	鉛	鉛	藍?	↓藍	4	無	藍、1箇所横線にかかる
1 5	齒科医院	三	鉛	鉛	鉛	藍?	↓藍	5	発	藍、1箇所横線にかかる
1 4	国土	一	鉛	鉛	鉛	藍?	↓藍	4	新	藍、1箇所横線にかかる
2 4	古き勾当貞	一	藍	藍	鉛	藍?	↓藍	5	新	1箇所以外横線にかかる
2 3	病技師二	二	藍	藍	鉛	藍?	↓藍	5	新	3箇所写に重なる
2 2	残丘の雪の	一	藍	藍	鉛	藍?	↓藍	4	化	1箇所横線にかかる
2 1	葵花	三	藍	藍	鉛	藍?	↓藍	4	発	1連・4連手入れ、写に重なる
2 0	天狗葦けと	四	藍	藍	鉛	藍?	↓藍	4	化	写に重なるあり
1 9	車中一	一	藍	藍	鉛	鉛?	↓鉛?	5	新	鉛1箇所のみ写か、写に重ならない



また、筆具で、「朱」は朱墨。

鉛 鉛

藍 ↓ 三藍

藍 ↓ 藍

▽ (写) 印付与後、清書前の手入れ、さらに別稿に展開したと仮定する。  
▽ 清書前手入れと仮定する。

詩稿	原稿	始	手入れ	写	清書前	定	手入れ	遺稿	手入れ備考
1 川しろじろ	一了 ↓ 鉛	鉛		鉛	藍 ↓ 二藍	藍		4 発	赤 ↓ 鉛 ↓ 写か、藍、写の上重なる
2 電気工夫	一了 ↓ 鉛	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 化	赤・了 ↓ 鉛 ↓ 写か、藍、写かかる
3 市日	一	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 新	藍、横線にかからない
4 来々軒	一	鉛	(鉛題メモ)	鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 新	藍、横線にかからない
5 林館開業	一	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		4 新	藍、横線を微妙に避けるあり
6 曉眠	三	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍青メ		4 新	藍1箇所のみ、写に重ならない
7 沃土ノ二ホ	三	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		4 発	藍、写に重ならない
8 盆地に白く	三	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		4 発	藍1箇所のみ、写に重ならない
9 早春	二了 ↓ 鉛 ↓ 三鉛鉛	鉛		鉛	↓ 四藍 現存せず	藍		4 発	藍は余白稿、写に重ならない
10 臘月	二	鉛		鉛	藍 ↓ 三藍 藍	藍		4 新	藍、写重ならない、余白清書前か
11 毘沙門の堂	二	鉛		鉛	↓ 三藍 藍	藍		4 発	藍は余白稿、写に重ならない
12 式場	一	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		4 新	藍、写重ならない、メモ横線に接する
13 雪の宿	四	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 発	藍1箇所のみ、写に重ならない
14 崖下の床屋	三	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 発	藍、写に重ならない
15 翁面おもて	三	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 新	藍削除線1箇所、横線と交わる
16 水榭松にま	二	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 発	藍、写に重ならない
17 村道	二	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 化	藍、横線を避けるあり
18 老いては冬	一ヨ	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 発	青、横線にかからない
19 著者	一	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 新	朱、写重ならない、消線導線は交わる
20 卒業式	一	鉛		鉛	藍 ↓ 藍	藍		5 新	藍、横線にかからない

3 7	水雨虹すれ	三	藍	藍	鉛↓?	鉛	藍↓	藍	4	発	鉛の後写か、藍②横線かからない
3 6	早俛	二	藍	・	鉛	鉛	藍↓	藍	5	化	藍1箇所のみ、写に重ならない
	詩稿	草稿	始		手入れ	写	清書前	定		遺稿	手入れ備考
3 5	林の中の柴	二	鉛	鉛	鉛	赤	墨	藍	4	化	墨、「赤インクよりも後」
3 4	小きメリヤ	三了	四鉛	鉛	鉛	赤	↓二鉛	藍	4	発	横線かかる、後↓四↓二手入れ?
	詩稿	草稿	始		手入れ	写	清書前	定		遺稿	手入れ備考
3 3	巡業隊	四	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	発	藍①と同一箇所藍②、横線避ける
3 2	心相	三	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	発	藍②とみる、写微妙にかからない
3 1	病技師一	六	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	4	発	藍②とみる、横線避けるあり
3 0	老農	七	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	発	藍、横線にかからない
2 9	医院	一	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	新	藍、横線にかからない
2 8	雪げの水に	一	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	新	鉛②は写重なるが藍はかからない
2 7	白金環の天	三	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	化	藍、消し線写にかかるのみ
2 6	保線工手	三	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	化	藍、写に重ならない
2 5	羅沙壳	三	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	発	藍、写に重ならない
2 4	悍馬一	五	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	発	藍、横線にかからない
2 3	悍馬二	一	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	4	化	鉛②は横線かかるが藍かからない
2 2	岩手公園	三	鉛	鉛	鉛	鉛	↓鉛藍	所在不明	4	発	鉛③は写を「避けてある」藍は丸番号
2 1	岩頸列	一	鉛	鉛	鉛	鉛	藍↓	藍	5	新	藍1箇所のみ、写に重ならない

以上の類型にしたがって、それぞれの〈写稿〉本文を想定し、定稿開始形本文との対照をおこなない、「資料篇Ⅱ」として提示する。

4

〈写稿〉・定稿開始形間の本文対照を踏まえて、異同の実状とその程度を、まず類型ごとに計量的に把握し、のちに概観することにし

たい。その異同の実状分析には、文法的品詞論的な単位の整理法を採らず、別に観点を定めて分析単位をあつらえ、それによって〈写稿〉・定稿間における、推敲内容(質)の傾向ではなく、推敲規模(量)の傾向を把握することを試みる。  
 ここで設定する異同の観点とその定義は、次のとおりである。

① 詩稿題名について

〈写稿〉段階の詩稿題名に想定したものが、定稿段階でどのように変化したか、次の5類型に分別した。

- 例) 民間菓 (写稿) ↓ 民間菓 (定稿) …… 題名の継承
- 例) 柳沢 (写稿) ↓ 柳沢野 (定稿) …… 題名の変更
- 例) 鼓者 (写稿) ↓ 「いたつきてゆめみなやみし」 (定稿) …… 題名の消失
- 例) (写稿) ↓ 氷上 (定稿) …… 題名の新設
- 例) (写稿) ↓ (定稿) …… 無題の継続

題名の変化は、詩稿本文の異同とは切り離して、分析の対象としたい。

② 詩稿本文について

・ 改編 …… 詩稿本文が、大規模な手入れによって再改編されているとみられるもの、とした。この場合、〈写稿〉・定稿開始形間における詩句・語句の変化について、そのいちいちの対応関係は提示しなかった。

・ 詩行/句 …… 詩稿本文のうち、詩行(写稿)単位で推敲されて詩句(定稿)単位で反映されたもの、とした。

例) 訪ひ来る客もなし (写稿) ↓ 湯管のむせびたゞほのか。(定稿)

・ 語句 …… 詩稿本文のうち、詩行/詩句の一部が変化しているもの、とした。

▽2文節以上に及ぶ場合も、原則として品詞分解的に単語単位で指摘せず、一括して語句異同とした。

例) シャプロの束を身に投げつ (写稿) ↓ シャプロの束に指組みて、(定稿)

▽語句変化が、意味的に分離して現われている場合は、それぞれを語句異同として指摘した。

例) 手觸れ得ね舍利の寶塔 (写稿) ↓ 手觸れ得ず 十字燐光、(定稿)

・ 表記 …… かな↓漢字・漢字↓かなの変化、括弧の新設・削除を対象として、文字・括弧別に指摘する。ルビの新設・除去は

異同としては指摘しないが、附章の本文対照に状況を示した。これによって、詩稿本文の異同量を把握して、それがどの程度本文に及んでいるのかを、

改編	……	大	詩形に占める規模が50割をこえるもの
詩行・語句・表記	……	大↑	30割を超えるもの
		中	10割を超えるもの

ほぼ異同なしの場合 ……  
 ↓小  
 小  
 " " 1行を超えるもの  
 1行に満たぬもの

③ 詩稿形式について

いわゆる詩形については、詩稿本文における連の数と連を構成する行／句の数の変化をとらえる。次のように提示した。

▽ 複数連の形式（定稿で連を指定する丸番号があるもの）の場合、  
 例） 3行／5連（写稿） ↓ 4句／4連（定稿）

③③③③③ ↓ ④④④④④

〈写稿〉段階で丸番号が与えられていない場合もあるが、新校本全集校異の記述や自筆原稿資料によって、本文配置の実態をみて、連形式かどうかを私に判断した場合もある。

▽ 1連の形式（行や句を列／連ねる形式、定稿で丸番号が与えられていないもの）の場合、  
 例） 7行形（写稿） ↓ 7句形（定稿）

7 ↓ 7

などと示した。なお、定稿で、丸番号は与えられていないものの、配置から連的構成がみられるものについては、7・5などと表示した。

これによって、I類〈写稿〉・II類〈写稿〉・III類〈写稿〉、それぞれの本文と定稿開始形との異同実態を把握した。

5

異同の実態を分析してみると、以下のようである。

まず、詩稿題名は、〈写稿〉段階で有題稿が6・8編あつたが、定稿化による開始形段階で、

詩稿数	題名の変化
4	継承
2	変更
8	新設
9	消失
1	無題
8	
2	
3	

という状況を呈している。定稿化で現われた題名に対する推敲態度として、

・ 題名に手が入ったものが3・5編に及び、なかでも消去稿が新設稿を上まわっていること。

・有題稿が9編減少して59編、無題を継続したままの詩稿は41編にまで膨らんだこと。  
 などが特に指摘できるが、それは題名を失う方向にある、とみえる。その推敲現場を、穏やかなものであったとはいえないだろう。継  
 承された題名について一覽しておく、次のとおりである。

牛	著者	嘆願隊
母	賦役	病技師 (一)
夜	副業	病技師 (二)
臘月	萎花	民間薬
市日	酸缸	岩手公園
短夜	晓眠	峡野早春
国土	心相	齒科医院
村道	早儉	保線工手
車中 (一)	中尊寺 (一)	退職技手
式場	涅槃堂	紀念写真
廃坑	雪の宿	崖下の床屋
医院	岩頸列	砲兵観測隊
悍馬 (一)	卒業式	軍事連鎖劇
老農	巡業隊	コバルト山地

67編あった(写稿)の有題稿のうち、それを継承したものが41編にとどまっている、ということである。つまり、26編に異同が  
 みられ、そのうち、題名の変更というかたちで現われたのが、次の8編であった。

新年	↓来賓	柳沢	↓柳沢野	悲歌 (↓初七日) ↓初七日
悍馬図	↓悍馬	開業日	↓林館開業	ポランの広場のうた ↓ポランの広場
ロマンツェロ ↓流氷		林氏叱弟子 ↓来々軒		

そして、題名を消失したものが次のように18編、これもけして小さくはない数値である。

朝↓・  
峠↓・  
僚友↓・  
書院↓・  
鼓者↓・  
歌妓↓・  
園丁↓・

病相↓・  
戸主／家長↓・  
失意（↓家）↓・  
二期↓・  
軍馬補充部↓・  
女学校附近↓・  
病院の花壇↓・

ロマンツェロ↓・  
銀行家とその子↓・  
名医小野寺青扇↓・  
橋場線七つ森下を過ぐ↓・

逆に、〈写稿〉段階に無題であったものに題名が新設された場合が、次のとおり、10編あるけれども、消失稿を補うには到底足りない数だった。

・↓四時  
・↓聚雨  
・↓氷上  
・↓早春

・↓（煮売）↓祭日  
・↓羅沙売  
・↓電気工夫  
・↓塔中秘事

・↓開墾地落上

こうした題名変化の計量的実態から少し踏みこんで、詩人の命名態度についてひとこといえば、変更や消失する前の題名をみると、たとえば、

悲歌 病相 失意 林氏叱弟子 ロマンツェロ

などといった感情表出の露わなものがあり、あるいは、

銀行家とその子 橋場線七つ森下を過ぐ

などの説明的なものがあった。詩人はそうしたものを避けて、場所、人物、時期、気象、行事、景物など、ところやもの、ことの提示に

向かう単純化・簡明化への傾向がみられるようだ。もし、時・所・人などの科目別に整理しまとめたとしたならば、それはまるで索引インデックスのようなものである。ただ、そのなかにも、たとえば、

葵花 酸虹 曉眠 嘆願隊 病技師 林館開業 塔中秘事

などという題名があつて、単純・簡明とはいへぬ結びつきが暗示されるその語構成からも、詩人が無作為な命名を意図していたわけでもないことが分かる。

6

次に、詩稿本文の異同について、実態をまとめよう。

本文異同を把握する単位とした、改編・詩句（語句、表記をともなう場合も含む）・語句（表記をともなう場合も含む）・表記（のみ）という手入れを、どれほどの詩稿がうけたかをみると、

異同単位	詩稿数		語句		表記	なし
	1	1	1	1		
改編	1	1	3	3	5	9
詩句	5	6	1	7	2	
語句	1	1	5	6	6	0
表記	1	1	5	6	6	0

という状況であつた。90割の〈写稿〉本文が手を入れられて定稿化している。そして、改編された詩稿を除くと、1編あたり（79編）が平均3・6箇所あまりの手入れをうけている、ということだ。詩人の推敲はとどまるところがない。ただそれは、『新校本全集』校異に現われている『文語詩稿』の初期稿に対する推敲現場に比べると、さほどな量でないようにもみえるのだけれども、ウル定稿としての〈写稿〉であつてみれば、改編をあえてひとつとして加えたとして、300箇所にも及ぼうとする本文への手入れが存在しているのは、それがやはり、ほぼ完成された決定的本文にウル定稿、などでなかつたということである。

〈写稿〉本文は、ウル定稿としての強度をどの程度具えていたのだろうか。さらに異同（量）からうかがえる、それぞれの詩稿本文における推敲の程度（規模）を整理してみよう。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類で分別を試みた異同程度ごとの詩稿数からみると、次のとおりであつた。

推敲規模

大

大↑

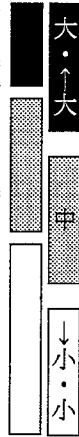
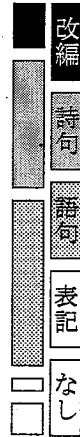
中

↓小

小

詩稿数 15 6 33 36 10

大規模な手入れに向かったとみうるものが21編あるが、半数近くの推敲現場が小規模な手入れであったということになる。そこで仮に、〈写稿〉↓定稿の推敲現場について、「大・大↑」という規模の手入れをうけた詩稿本文が不安定であったとし、「中」の規模をやや安定的、「↓小・小」の規模を安定していたとして、その割合を、異同単位の割合とともにみると、次のようである。



安定的・安定とみる詩稿本文が80割近くを占める、というあたりに、定稿に至る〈写稿〉に対する詩人の推敲態度もうかがえようか。ひとつひとつの異同について、その推敲意図の吟味を果たさぬままに断言することはならないが、ただ計量化によってえられた実態からその傾向をいうならば、〈写稿〉・定稿開始段階における手入れの規模は、比較的小さな程度にとどまるものが多く、おおむね穏やかな推敲現場であった、と想定をしてもよいか。そこでは、未完・未成熟というのではない、なお整備を必要とするけれども、比較的安定的な詩稿本文が多数を占めて、まず用意されてあった。ウル定稿としての〈写稿〉本文が、ある程度の熟成を果たしてきたものである、ということになる。

もちろん、定稿化の過程には、20割あまりの大規模手入れがあったから、まったく穏やかであったはずもない。たとえば、改編による手入れの場合をみると、

詩稿	題名	詩形	連変化
林の中の柴小屋に	・ ↓	②② ↓ 23	2連 ↓ 1連
岩手公園	岩手公園 ↓ 岩手公園	④④ ↓ ④④④④	2連 ↓ 4連
小きメリヤス塩の魚	戸主 / 家長 ↓	④④④④ ↓ ④④	4連 ↓ 2連
軍事連鎖劇	連鎖劇 ↓ 連鎖劇	⑤ ↓ ⑥⑤	1連 ↓ 2連
たそがれ思量惑くして	書院 ↓	④④④④ ↓ ④④④④	4連 ↓ 3連
川しろじるとまじはりて	・ ↓	③④③③ ↓ ④④④④	1連 ↓ 2連
電気工夫	・ ↓ 電気工夫	10 ↓ ④④	1連 ↓ 2連





という状況で、題名への刺激も三分の一に及び、ほとんどの詩形に変化を与えたところに、烈しい推敲現場を髣髴させている。ここでは、ウル定稿としての〈写稿〉の、詩稿本文におけるいわば「未成熟」の極が現われているのである。さらに、詩形について。これは、〈写稿〉・定稿開始形間の連数の変化からみよう（丸数字が変化した詩稿の数）。

連数の変化	↓1連	↓2連	↓3連	↓4連	↓多連
1連13編	11	②	・	・	・
2連49編	・	4	・	②	・
3連6編	・	・	5	①	①
4連29編	①	②	・	23	・
多連3編	・	・	・	・	1・①
↓定稿	17編	48編	6編	26編	3編
増減	+4	-1	±0	-3	±0

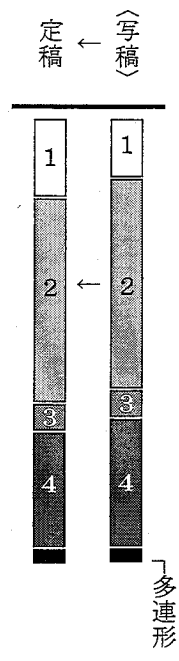
▼多連↓多連〔腐植土のぬかるみよりの照り返し〕。

連数変化を示した詩稿は16編、そのうち10編が前節に指摘した大規模な手入れをうけたものである。他は、

詩稿	本文	題名	連数の変化	連変化
あな雪か屠者のひとり	句1語3表1	無題	②②②②↓2・2・2・2	3連↓4連
峡野早春	句2・	継承	②②②②↓2②②②	4連↓1連
あな雪か屠者のひとり	句2語5表2	継承	④⑥⑩④↓④⑥④⑥④	4連↓5連
記念写真	語3	継承	②②②②↓④④	4連↓2連
村道	語2表2	継承	④④↓②②②②	2連↓4連
僧の妻面膨れたる	語4表2	消失	①②…12連分…②↓1・2…12烈分…2	13連↓1連
鶯宿はこの月の夜を雪	・	・	・	・

というものであった。詩稿本文の異同からみれば、「峡野早春」・「あな雪か屠者のひとり」・「記念写真」が「中」程度、他は「↓小」程度である。ここでは詩行／句数の総量は変わらないかたちで連の増減がはかられており、「峡野早春」の場合も、消しゴムで削除された第三連が定稿化で復活するというのが実態だ。つまり、連構成の調整であって、新たに連を創設したり既存の連を削除したりしたもので

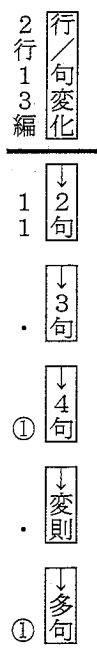
はない。したがって、この詩形変化が詩の場に大きな変容をもたらすということはない。  
 ここで、連構成の変化をその割合を示せば、



というものが、そのおおよそである。1連形のやや増ということが指摘できるが、2連形を主とし4連形を従とする(写稿)段階からの全体の傾向は変わらない。  
 それに対して、連の構成に変化はないが、連を形成する行/句数のみが変わ化した、という場合が、前項に掲げた「川しるじるとまじはりて」・「早春」・「吹雪かどやくなかにして」・「開墾地落上」・「卒業式」にみえる。他にも、

詩稿	本文	題名	行/句数の変化
うたがふをやめよ	句3語3表2	無題	③③→④④④
心相	句1語6表4	継承	④⑧→④⑦
国士	句1語4	継承	⑤④→④④
翁面おもてとなして世を	句1語1	無題	7→6
雪げの水に涵されし	句1語2表1	無題	④⑤→④④
牛	句1語2表1	継承	③⑨→③⑩

などにみえる。それらは、詩稿本文の異同程度が「↓大」「大」の程度にあるもの多く(「うたがふをやめよ」が「↓大」)、右の「心相」以下も「中」程度の手入れをうけた結果だった。ここでは、特に詩句の増加した詩稿に、場面の詳細化に向かう過程で、新たな素材が加わったり素材を入れ替えたりという、詩の場の変容があった可能性も考えられる。連を形成する行/句数のみの変化も看過できない事態なのだ。その行/句数の、(写稿)・定稿開始形間の変化をみると、



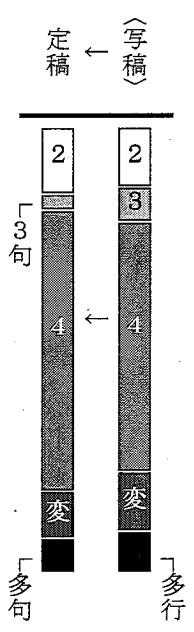
増減	↓定稿 1 5 編	3 編	6 4 編	1 1 編	7 編
+	2				
-		4			
+			4		
-				2	
-					2

多行	9 編	変則 1 3 編	4 行 5 8 編	3 行 7 編
			①	①
				3
	①	③	5 6	③
	①	1 0		
	7		①	

▼各連の行／句数が一定でない  
▼1連形式で5行／句以上(ただし連意識がみられるものは除く)

という状況であり、これを割合で示すと、



というもので、変化は小さく、4行／句による連形成が常に圧倒的であった。

なお、〈写稿〉・定稿それぞれに現われた連を形成する行／句が変則でない2連形・4連形の詩稿数の変化は、次のとおりであった(丸数字ひとつが1連で、数値は行／句数)。

- 連・
- ④④ 3 8 編 ↓ 4 1 編
- ③③ 1 編 ↓
- ②② 5 編 ↓ 4 編
- ④④④④ 1 5 編 ↓ 1 5 編
- ③③③③ 4 編 ↓ 3 編
- ②②②② 7 編 ↓ 8 編

また、《文語詩稿》にあつて特異な形式ともみえる、連意識が希薄な〈写稿〉、連番号をもたない定稿で、1連形とみるものの展開は次のとおりであった(定稿で連意識がみえる表記のものも含める)。

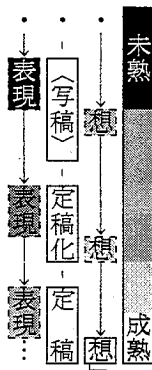


〔写稿〕が定稿化されるに至る過程で、「中」↓「小」とする手入れ規模が、本文のそれぞれの要素で過半をはるかに超えており、おおむね安定的であったといえようところに、ウル定稿としての位置づけも妥当であろうとみえるのだけでも、その反面、それぞれ35編、21編、16編に「大↑」（大に向かう）とする激しい手入れもあった、という点に注目すると、詩人がふたつの定稿集をまとめたとき、その和紙表紙に書きつけた宣言とも自戒ともみえる次の文言が、やはり実感をもつて迫ってくる。

・本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在在は現在の推敲を以て定稿とす。〔文語詩稿五十篇〕

・本稿集は定まりて表現未だ定らず。唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。〔文語詩稿一百篇〕

ふたつの集はともに定稿として明記されながら、「表現未だ」と自戒されているのである。ウル定稿としての〔写稿〕の推敲現場に激しい手入れも与えられたのは当然のことだったといえる、ところが、詩人は「想は定（ま）りて」という宣言もおこなっているのである。定稿の成立に、「想」↓「表現」という過程があったことを示している。そのように「想」のほうに、先行してその極限にたどりつけたのはどういふわけであったのか、と考えてくると、そこに、ウル定稿としての〔写稿〕が存在していたことを踏まえなければならなくなる。



「表現」的には手入れの両極を呈した〔写稿〕本文も、多くは穏やかな推敲に委ねられる傾向にあり、安定的なものであったとみられるところから、そのような詩の場を支える「想」もまた相当な熟成が果たされていたもの、と考えられるのではないだろうか。言い換えれば、ウル定稿としての〔写稿〕とは、「想」の熟成のほうを基準にして撰びとられたものであった、という可能性を濃くしている。つまり、右に示した図のように、「想」の熟成ぶりを詩人が認めた〔写稿〕によつてこそ、その定稿化が「想は定りて」という宣言を可能にしているとみられるのである。そのような「想」と「表現」の具体的なありようは、次章で検討してゆくことになる。その際、視点を詩稿題名の変化相に置いて、詩稿本文や詩形の異同も踏まえて考察を試みたいと思う。

(注)

1 I類とした〔写稿〕は39編である。定稿開始形との異同の実態は、次のとおりである。表の「詩稿」は、定稿題(\*)または冒頭詩句を5字分まで示している。詩稿は、その異同程度によつて、大・大↑・中・↓小・小に分別して示した。以下同じ。

詩稿	題名	本文異同	程度	詩形〔写稿〕↓定稿開始	遺稿	備考
----	----	------	----	-------------	----	----



2連 19編  
1連 5編  
詩形の変化  
↓1連  
↓2連  
↓3連  
↓4連  
↓多連

異同の程度  
詩稿数  
大  
大↑  
中  
↓小  
小

題名の変化  
詩稿数  
継承  
変更  
新設  
消失  
無題

I類における実態を、詩稿題名・詩稿本文・詩形ごとに整理しておく。詩形については、その連構成の変化を示す（丸数字で示しているのが変化稿の数）。

*民間薬	継承	字1	1	2	1	2	5	新
*柳沢野	変更	字1	2	2	2	2	5	新
*夜	継承	字1	4	4	4	4	5	新
*退職技手	継承	字1	6	6	6	6	4	新
*退職技手	消失	字1	4	4	4	4	5	新
きみになら	無題	字1	9	9	9	9	5	新
廐肥をにな	消失	字1	4	4	4	4	5	新
われのみみ	消失	字1	4	4	4	4	5	新
塀のかなた	消失	字1	4	4	4	4	5	新

*ポランの広	変更	字1	4	4	4	4	4	4	発
*母	継承	字1	4	4	4	4	4	4	新
*嘆願隊	継承	字1	4	4	4	4	5	新	
うからもて	無題	字1	2	2	2	2	4	新	
*流水	変更	語2	4	4	4	4	5	化	
玉蜀黍を播	消失	語2	4	4	4	4	4	化	
日本球根商	消失	語2	4	4	4	4	4	化	

句読点・丸番号なし











一般的に、その機能からみると、題名はまず作品の索引インデックス引としてであろう。ただそれが番号付けや日付け、あるいは備忘的な語句を添えるというのでなく、自立した（ことば）によって命名表示されてゆくところに、題名そのものを読み味わうという表現としての機能もまた与えられてくる。詩の場というものを支える詩想があり、それを実現する詩稿本文と同様、詩稿題名もまた詩想を具現する本文のひとつなのである。しかもそれは、詩稿本文と分離され独立して、本文冒頭に提示されるという際立った扱い、存在としてある。そこに、詩稿題名の宿命がみえているのではないか。深いところで詩想と確実に接していて、端緒・導入・要約・注意・暗示・象徴…などといった、さまざまなレベルでの役割を担って現われざるをえない。要は、詩の場を支える詩想という暗部に参入しうる、その指標として題名がある、ということだ。

その題名が、官沢賢治最晩年の営為である《文語詩稿》（草稿から定稿に至る過程を踏まえている）の、鉛筆と赤インクの（入写）の符号によって撰びとられたウル定稿段階で、100編のうち68編に与えられていた。それが定稿化（開始形）されたとき、

継承 ↓ 変更 ↓ 新設 ↓ 消失 || 無題

42編 8編 9編 18編 23編

有題59編 無題41編

という題名変化をみせたのである。状況は、定稿化によっても無題継続のままの詩稿が23編、また題名を消失したものが18編に及び、無題の詩稿が増加しているというふうに見える。さらにいえば、

継承 || 無題 ↓ 変更 ↓ 新設 ↓ 消失

無変化65編 変化35編

と、三分の一超の詩稿に題名変化がみられ、ウル定稿としての（写稿）群の詩稿題名への、詩人の態度はけして穏やかなものでない、ということがいえそうである。

特に、既存の題名を消失するものが、題名の変更及び新設の場合に迫るほどで、結果的に無題稿が増加しているところに、詩人の命名に対する消極的な態度をみることもできよう。もしそうであれば、それはどういふことなのか。たとえば、栗原敦は、

ここから先は推測に過ぎないが、「文語詩稿五十篇」「一百篇」に残された表題が大むね本文との補完関係をひきずるものに限られていることから見れば、「文語詩」定稿の推敲にあたって、官沢賢治は、表題そのものも可能な限り消去したかったのではないかと思

われるのである。

と述べて、「推測に過ぎない」としながらも鮮烈な提案があった。詩人自身「文語詩双四聯<sup>3</sup>」と称して新たな形式を模索していた、その近代文語詩が詩の場の指標を喪つて、無題のままに群れをなしてあやなす、その（詩）世界は、たぶんかぎりなく妖しい。読者としては、魅力的な提案だとも思えるのである。

2

だが、定稿には、詩人が命名に執着しようとしている気配がいくつかうかがえる。

26行罫の定稿用紙上には、無題稿（題名消失・無題継続）の場合でも、詩稿本文の開始が相当の空白行をおいてから現われる、という実態があることだ。たとえば、4句／2連形の18編について、具体的にその開始行をみると、左のとおりなのである。

開始行 6 7 8 9 10

無題稿 ・ ・ 2 2 1 4

26行罫のほぼ三分の一、9行もの空行をとっているのは、そこに題名を書き込む予定がある、というふうに見える<sup>4</sup>。

有題稿（継承・変更・新設）の題名の位置と詩稿本文の開始行について、やはり4句／2連形の20編（「母」は定稿散逸、「ポランの広場」は表記が異例なので外す）についてみても、次に示すように破格的なものもあるが、4行め前後に詩稿題名を置いて、詩稿本文は10行め前後から開始する、というのが、有題稿本文の表記実態であつて、それは、無題稿の表記形態にほとんど重なる。

題／開始行	6	7	8	9	10	11
2行 1編	1	・	・	・	・	・
3行 1編	・	・	1	・	・	・
4行 1編	・	・	1	1	1 4	・
5行 2編	・	・	・	・	1	1

っている。空行にはまだ題が置かれていないだけ、という状況なのである。事態は他の詩形の場合にもほぼいえることだ。こうした表記法による定稿本文が醸している場を見つめると、定稿集『五十篇』と『一百篇』をまとめたとき、原稿を収容したそれぞれの和紙表紙に詩人が書きつけた、次のような、それぞれの文言を想起こしてしまふ。

・本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在は現在の推敲を以て定稿とす。  
・本稿想は定まりて表現未だ定らず。唯推敲の現状を以てその時々定稿となす。

(五十篇)  
(一百篇)

定稿用紙に存在するこの空白は、「表現未だ足らざれども／表現未だ定らず」という文言そのままの現場ではないのか、というふうに見えてくる。題名が「未だ足らざれども／未だ定らず」というのである。

また、考えてみれば、減じたとはいえ、題名を継承するものがいまだ多数であるうえに、定稿開始形に題名が新設される、また変更してでも定稿に与える、という詩人の姿勢が一方には確かにあって、有題稿がなお過半数を占めている、という状況を過小に評価しなければならぬ必然性もないように思える。

さらにいえば、定稿段階でも清書後の本文手入れはあり、詩稿本文には手入れがあるにもかかわらず、詩稿題名が削除されるという例がない。逆に、なお題名に手を入れるものがわずかに1例だが、ある。定稿最終形「軍事連鎖劇」だ。清書のブルーブラックインクが、定稿化にあたってまず、(写稿)の詩稿題名「連鎖劇」は継承しつつ、詩稿本文を改編して次のように開始形をととのえている(便宜上、定稿も行形式で表記した)。

#### 連鎖劇

そのとき角のせんたくや  
まったくもつて涙をながし  
やがてほそぼそなみだかわき  
すがめひからせ  
トンビのえりを直したりけり

(写稿)

#### 連鎖劇

①キネオラマ、  
寒天光のそがゆゑに、  
びたと煙草をなげうちし、  
上等兵の袖の上、  
また背景の紺の上を、  
雲どしどしとびにけり。

②そのとき角のせんたくや、  
まったくもつて涙をながし、  
やがてほそぼそなみだかわき、  
すがめひからせ、  
トンビのえりを直したりけり。

(定稿開始形)

〔写稿〕は、舞台劇と映画を組み合わせた演劇である連鎖劇に、観客のひとりである「せんたくや」が、「そのとき」感極まって涙するところから、「やがて」涙が「ほそほそ」とかわいてくると、気をとりなおして外套の襟を「直した」、その一部始終を記録したものが、何に對して感涙したのかが隠されたまま、ただそれが、けして感激の熱き涙などでなかった、と私には思えるのだが、詩人の託した詩想は不分明である。

しかし、定稿は、〔写稿〕の題名をそのまま継承しつつも詩稿本文の改編に向かった結果、「連鎖劇」が指示する内容の一半が明らかに成って、詩の場を支える詩想もやつとその輪郭をみせてきた、といえるのだろう。言い換えれば、詩形の改造をもつたこの詩稿本文の改編が、少なくとも詩想自体の改変によるのではなく、「連鎖劇」という枠組みのなかで、その詩想をより明確に伝えようとする「表現」の熟成であった、とみることができないのではないか、ということだ。

けれども、定稿に現われてきたのが、舞台上で煙草を投げ捨てる上等兵の演技と、背景のたぶんキネオラマ（パノラマに色光線を用いて景色を変化させて見せる装置）による激しい雲の流れだけなので、「せんたくや」の涙の真意はなお判然としないままである。ただ、ほどなく、詩人は開始形の2か所に手を入れる。ひとつが題名に對してのもので、

#### 「↓軍事」連鎖劇

という、「軍事」の語を導線を引いて加える作業だった。劇の内容が明確に戦争ものであることを提示したのである。いまひとつは、①連の第五句について、

また背景の「紺の上↓暁ぞら」を、

と、舞台上のスクリーン代わりの暗幕を示していたものを、舞台上の刻限を示すことに変えるのである。この手入れが、すでにあつた、

雲としどしととびにけり。

という表現に結びつくと、そこには、嵐のあとというよりも嵐の前の雰囲気が出出されている、と思われてくる。さらに、そうした舞台の演出に、「軍事」という題名のもつ重みが響きあうことによつて、なにか不穏なものが迫りくる感じ、それを読む者に突きつけているように思われてならない。舞台はどつやどつや戦場なのであり、「ぴたと煙草をなげうちし、上等兵」の仕草にはなにやら緊迫した気配が立



ちこめようとしている。とすれば、たとえば、戦闘が再開されようとしているときを伝えようとしているのかもしれない、そのときが間近なことを暗示しているのである。そうした劇の進行に即して、

そのとき角のせんたくや、まったくもって涙をながし、

ということが接続してくる。ならば、涙する「せんたくや」自身、かつて戦場で死と向かい合った人物かもしれない、あるいは戦地に赴いている家族や縁者があって、その戦死を予感したのかもしれない、などと思えてくる。そのように詩の場を再構築しつつ、詩人はあえて「軍事」という等価的ともみえる語を定稿題に加えたのである。

また、こうした定稿化のさなかに、追加の〈写稿〉としてブルーブラックインクと青インクによるものが23編撰びとられてやはり定稿に向かったが、その題名の変化相は、

継承 ↓ 変更 ↓ 新設 ↓ 消失 ↓ 無題  
8編 3編 6編 2編 4編

というもので、定稿における有題稿が四分の三近くに及んでおり、鉛筆・赤インクの〈写稿〉群の場合をしいでいる（注末の一覧表i参照）。あるいはまた、定稿集のなかには、同じ題を有する定稿も存在してくるのだ。「車中」と「病技師」である。「病技師」の場合は『「百篇」中に並存している。それぞれの詩の場は明らかに異なっており、別題も考えうるのにもかかわらず、その場所、その人物をそのように指定しなければならなかった、ということであろう。そこに現われているのは、そう指示したいという詩人の命名意欲である。

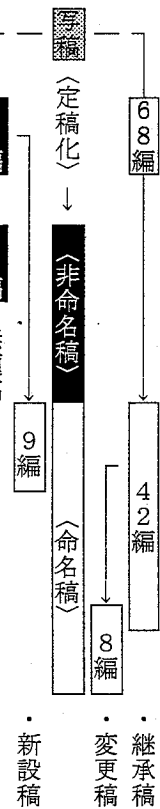
3

このように、再編段階以後の詩人の命名への執着をみるならば、題名の変転という現象そのものも、新たな観点からとらえなおす必要があるだろう。

たとえば、先に有題稿と無題稿という分別を揭示したけれども、無題稿を一律に「題が無い」として扱ってよいのか、ということがある。〈写稿〉以後定稿に至ってなお詩人の命名への執着はありつづけている、ということ前提として、無題という現象をあらためてとらえなおそうとすれば、無題継続稿が、〈写稿〉段階以後も命名を模索しながらも未定なのに対して、題名消失稿は、〈写稿〉段階で既に題名を得て命名の領域に達しているのであって、定稿における題名の消失が詩人のいう「現在の推敲」もしくは「推敲の現状」としてある、という見方もとりうるのではなからうか。

↓ 18編

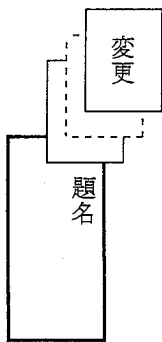
・消失稿



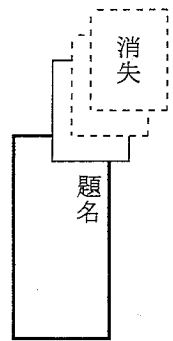
その立場からすると、題名変転の実相は、右の図表に示すように、命名・非命名というレベルでの展開相であった、ともみられるのである。つまり、消失稿とは、題名が消去され、命名を放棄したものなのでなく、新たな題名に変更すべく思案中である、というありようとして理解しうるのだ。すると、消失稿の実質は命名稿の領分にまだある。そうみると、命名稿は59編に減じたのではなく、定稿開始段階に至って題名新設稿の参加も得、77編にまで及んできた、ともいえる。ただし、本稿は、(写稿)・定稿間における題名の変転に限定している。(写稿)以前の命名歴も併せみるならば、もつとダイナミックな題名変化の諸相がみえてくるのであり、その変化相はもつと精密に理解され、変転についても異なる整理結果になるだろうと思えるが、ここでは、以前の命名歴には踏みこまず、限られた時点での状況を把握しておくにとどまる(初期稿段階からの命名過程を視野に入れた考察は、本稿を承けておこなう、変更・新設・継続・消失及び無題継続という実態の背景を探る試みのなかで、加えてゆきたい)。

定稿は、題名消去の方向にあるのではない、という考えのもとに、(写稿)から定稿への過程で現われた新設・消失・変更といった変化相を、次のようにも命名の階梯のなかに位置づけうるだろう。

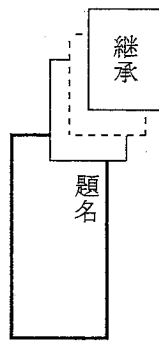
まず、眼にみえるかたちで、題名の再提案を果たした変更稿がある。(写稿)段階からさらなる推敲を詩稿本文にも詩稿題名にも果たしたもので、「現在の推敲」あるいはまた「推敲の現状」段階として、「表現」の熟成がともに果たされたものとして位置づけられるのではないか。その意味で、定稿としてもつとも安定的な本文が得られているものと想定しうる面がある。



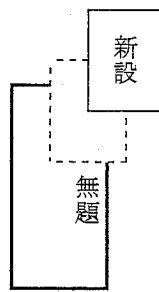
次に位置づけしておきたいのが、消失稿である。既に得ていた(写稿)段階の詩稿本文に推敲を果たすとともに、詩稿題名にもやはりさらなる推敲を加えようとして消失させたが、再提案すべき題名を「現在」進行形で用意しつつあり、題の見えないことが継承稿に後れをとっているわけではない。有題稿における題名の消失とは待機している状態なのであり、題名分の定稿用紙空行も、実質的なスペースと



してそこにあると想定する。  
 その点、微妙な本文状況をはらんでいるのが、継承稿であろう。



詩稿本文への推敲を果たしながらも、詩稿題名をそのままに置くというところに、継承された題名が、決定のものとも変更すべきを留保しているものとも、判別しがたいところがあつて、本文の熟成状況は相当安定したものから不安を抱えたものまで相当幅広く想定すべきであろう。ただ、〈写稿〉段階で得ていた題名を再検討したうえで継承するという推敲の過程を経ている点で、〈写稿〉段階に無題であつた新設稿よりも一歩すすんだ段階にあるとみてよいか。



新設稿については、〈写稿〉の成立から定稿開始形に至る間に、はじめて題名を得たものである。〈写稿〉より以前に題名をもっていたものもあるが、〈写稿〉としては無題の状態で成立したものが、定稿化の段階で、詩稿本文の推敲にともなつて題名案もまた浮上し、定稿用紙上に、あらたに提示された、とみなされよう。無題の〈写稿〉に対して推敲を加えた結果、こうして、題名を新設する場合と無題のままに置いている場合と、ふたつの現象がみえるというのも、やはり命名に固執する詩人の一半がかいま見えるのではないか。  
 無題を継続する詩稿本文の推敲現場は、次項に示すが、傾向として緩やかなのではない。草稿上には、題名案のメモさえ見えず、詩稿本文の推敲で手一杯であつたというのだろうか。

継続  
無題

しかし、まったく手入れのないままに、変更や消失、新設といった題名の動きをみせた詩稿も実は7編存在している。そのことを考えあわせると、無題稿の題名について、詩人が推敲の眼を留めなかつたはずもない（それは継承稿についてもいえることである。手入れなしの無題稿は1編、継承稿は2編ある）。題名案が未提出のまま、なおもその未定が継続されつづけているところに、無題稿本文の不安定さが現われている、とみることができるのだろうか。

4

ここで気にかかってくるのが、詩稿題名の変転、あるいは命名のないままに置かれる、その事態が意味するところだろう。

詩の場合は、詩稿本文と詩稿題名という表現と、それを支える詩想とによって成立している、という立場からすれば、詩稿題名そのものの未熟がまず考えられてよいが、緊密な関係にある詩稿本文の未達によつてその緊張関係に不安定なものが生じた、とも考えられる。さらには、詩稿本文に向かう詩人の内部で、詩の場を支える詩想に変質がもたらされたために、題名もまた変転を強いられたのかもしれない。前者の場合、〈写稿〉のウル定稿性を引き継こうとする詩人の態度が基盤にあつて、〈写稿〉は、定稿化によつてさらなる成熟に向かうとしていえるといえる。けれども、後者の場合であれば、詩人は〈写稿〉のウル定稿性を崩落させつつ、再編稿以来構築してきた《文語詩稿》の針路に新たな展開を与えようとしている、とみななければならぬ。

そこで、詩稿題名と緊密な関係にある詩稿本文の異同量から、その推敲の程度（規模）を分別して（2章の注を参照）、その割合を詩稿群ごとにもみると（帯グラフにして後に掲げる）、まず〈非命名〉稿（無題継続稿）と〈命名〉稿（題名消失稿を含む）の対比から（グラフA/B）、前者は「中」程度の手入れが膨らんでおり、後者は「↓小」・「小」の手入れがその半ばに達している、ということが指摘でき、詩稿本文の推敲現場としては、〈非命名〉稿のほうが穏やかなものでなかつた、といえるようだ。

このことが示唆するのは、たとえば、次のようににも概念化されよう、〈写稿〉段階からの本文／詩想の未熟がもたらした不安定な推敲現場であり、詩想の不熟ということがあつて、詩稿本文への手入れを過熱させ詩稿題名への命名意欲を冷えこませている、ということなのだろうか。

・ 詩想の変質しやすさ  
 (写稿) 定稿化 ↓ (不安定) ⇔ ↓ 詩の場の変容 ↓ 命名の未定

・ 本文の推敲の必要性

けれども、(命名) 稿として現われることになった新設稿(グラフ a) をみると、詩稿本文への大規模な手入れによって命名に至った場合があると同時に、詩の場を変容させようもない、すなわち詩想の変質をうかがいようもないと思える程度の小規模な手入れで(まったく手入れなしが 1 編)、詩稿題名を得た場合もまた半数に及ぶのである。そこからいえば、無題の継続という(非命名) 稿にも、「↓小」・「小」の手入れにすぎない安定的な詩稿本文をもった 7 編があった。つまり、(写稿) 以来の詩想の不熟をもって、(非命名) 稿の無題継続を一概にはかることは、どうやらできないようだ。(命名) 稿の他の変化相についても、詩稿本文への「↓小」・「小」の手入れの割合に注目すると、変更稿(グラフ d) が、題名には大きな揺れを生じたとみられる場合もあるのにかかわらず、詩稿本文への手入れは小規模で安定的であったし(まったく手入れなしが 3 編)、題名を仮に保留した消失稿(グラフ c) もまた、詩稿本文への手入れは小規模であった傾向が強いのである(まったく手入れなしが 3 編)。

異同程度

大・大↑

中

↓小・小

A 非命名稿	5 編	11 編	7 編
B 命名稿	16 編	22 編	39 編

a 新設稿	3 編	1 編	5 編
b 継承稿	8 編	16 編	18 編
c 消失稿	5 編	3 編	10 編
d 変更稿	2 編	6 編	

要するに、詩の場に変容がみられない場合でも、題名は変転しうるということであり、詩人の命名へのこだわりは、ここにも指摘できようである。そこでは、詩稿題名が、詩想を具現する表現のひとつとしてやはり存在している、といえるのではないか。そうであるならば、《文語詩稿》における題名のゆくえはもうある程度推定できよう。

もちろん、詩稿本文の改編レベルの手入れに向かう詩人の内部に詩想の変質があり、変貌をとげる詩の場に対して命名が追いつかぬ、という事態もなかにはあるだろう。それに留意しつつも、基本的には(写稿)を踏まえて定稿に向かう詩人の、《文語詩稿》という営為は、詩の一般として、命名をとまなう表現推敲の経過を、次のようにやはりあゆんでいる、と想定できるのではないだろうか。

・詩稿題名の成立

〈写稿〉定稿化↓詩想の実現↓・詩想の深化 ↓成熟した詩の場へ

・詩稿本文の成立

詩人は「表現」の成熟に向かって、命名の途につくほかない。ただ、そのことが、現われている題名をみると、複雑、高尚、難解、特異などといった方向にばかり傾いてゆくことを必ずしも意味しないようだ。むしろ、単純、平常、平明、簡明などといった方向に工夫されてゆくこともあるのだろう。

5

いま「基本的には〈写稿〉を踏まえて、定稿に向かう」とした詩人の態度について、それぞれの詩稿の詩の場が、〈写稿〉と定稿開始形との間に、どう移行しているのかを把握することで、確かめておこう。詩の場の把握には、さまざまな要素を設定しようと思うが、ここでは、時季・舞台・人物・事態という4点に着目してみる。〈写稿〉・定稿間に現われたその変化をとらえることによって、詩の場における変容の有無をつかむこととした(注末の一覽表ii参照)。その結果は次のとおりである。なお、△は小さな変化と判断されるもの、×は大きな変化と判断されるもの。

題名	時季	舞台	人物	事態
無題稿 23編	・	△ 2・	△ 3・× 1	△ 1・× 4
新設稿 9編	・	△ 2・	△ 1・× 1	△ 2・× 1
消失稿 18編	・	・ × 1	△ 2・× 2	△ 2・× 2
継承稿 42編	・	△ 1・	△ 6・× 2	△ 3・× 1
変更稿 8編	△ 1・	・	△ 1・	△ 1・

詩の場のそれぞれの要素に現われた変化は、合算すると、小さな変化が28件、大きな変化が15件であるが、詩稿数でいえば、小さな変化のみ現われたのが20編で、大きな変化が現われたものは10編である。ひとつひとつをみる必要があるが、前提として考えられようことは、詩の場の変容が小さい、ということ、それを支える詩想の変質程度も小さい、ということである。たとえば、大きな変化

とみた10編のうち、「古き勾当貞齊が」は、

名医小野寺青扇

名医小野寺青扇が

いしづみ低く垂れ覆ひ

雪の楓は暮れぞらに

黄なるその芽を覗かする

並みて翔けこしむらすづめ

たまゆらりうと羽はりて

宙に停るやたちまちに

りうと羽はり去りにけり

(写稿)

①古き勾当貞齊が、

いしづみ低く垂れ覆ひ、

雪の楓は暮れぞらに、

ひかり妖しく狎れにけり。

②連れて翔けこしむらすづめ、

たまゆらりうと羽はりて、

沈むや宙をたちまちに、

りうと羽はり去りにけり。

(定稿開始形)

とあって、碑に刻まれた人物名の変更が大きな異同で、人物の特定が困難でその意図が読みとけない不安はあるものの、詩稿本文が設定した詩の場の枠組みには、(写稿)からみてもほとんど変わりが無い。つまり、それを支える詩想に劇的な改変があったわけではなからう。

また、「峡野早春」の過程では、

夜見<sup>よみこ</sup>來の川のくらくして

斑雪<sup>はだれ</sup>しづかにけむりだつ

二すじ<sup>ふたすぢ</sup>白き日のひかり

ややになまめく笹のいろ

稔<sup>ね</sup>らぬなげきいまさら

春<sup>はる</sup>をのぞみて深めるを

↓削除されている

①夜見來の川のくらくして、

斑雪しづかにけむりだつ。

②二すじ白き日のひかり、

ややになまめく笹のいろ。

③稔らぬなげきいまさら、

春をのぞみて深めるを。

雲はまばゆき墨と銀  
波羅密山の松を越す

(写稿)

④雲はまばゆき墨と銀、  
波羅密山の松を越す。

(定稿開始形)

というかたちで、(写稿)段階で消しゴムでいったん消されていた詩句が、定稿清書段階に微妙に推敲されて復活している。しかしそれは、次のとおり、(写稿)成立以前の詩句を復元する、という事態だったのである。こうした第三連の復帰が意味している

下書稿 開始形 ↓ (写稿)

定稿開始形

稔らぬ「なげき」→「らみ」「いまさら」に ↓ 「いよいよ」に ↓ 稔らぬなげきいまさら

のは、(写稿)直前形をほぼ受容するということであって、(写稿)における詩の場に隠されていた詩層が再び隆起してきたという具合で、場が変容したというよりも、これによって詩の場を支えている詩想はむしろ鮮明にされてきた、と考えられるものだ。いったん削除したところを復活に向かう過程で、その詩想は深まりを得たといえる。

さらには、次の1編、「うたがふをやめよ」についても、詩の場が変容したとみるのには、ためらうところがある。

ナリトナリアナロ 林はさむくして

いさゝかの雪凍りしき

根まがり杉ものびたつを

①うたがふをやめよ、  
林はさむくして、

いさゝかの雪凍りしき、

根まがり杉ものびてゆるゝを。

アナロナビクナビ 林の雪の上

青き杉葉の落ちちりて

そらにはあまたからすなけるを

②胸張りに立てよ、  
林の雪のうへ

青き杉葉の落ちちりて

空にはあまたからすなけるを。

ナビクナビアリナリ 杉のうれたかみ

鳥いくむれあらそへば

霧こそさつとさくらめき落つれ

③そらふかく思せよ、  
杉のうれたかみ、

鳥いくむれあらそへば、

水霧ぞさつとひかり落つるを。

(写稿)

(定稿開始形)



ここにみえる大きな異同は、法華経陀羅尼品第二十六にみえる毘沙門天の、衆生の「幸福、安寧、守護、擁護、防護」のために唱えた、阿梨・那梨・窈那梨・阿那盧・那履・拘那履（大正新脩大藏経による）という呪文を詩人なりに組みかえた詩句を、

うたがふをやめよ・胸張りて立てよ・そらふかく息せよ

と改めた推敲であろう（傍線部）。それは詩人による呪文の翻訳であると考えられるところもあって、そうならば、語り手は法華経の護持者として、迷いにある者を守護しようとしていることに変わりはない。定稿にはむしろ、語り手が自らに言い聞かせているともみえるふしが現われており、詩の場はかえって明快さを増したといえる。迷える者を、語り手自身でもあるのだとしたら、たとえば、信仰や生き様に悩みつづけてきた宮沢賢治自身に引き寄せてみると、この詩稿のもつ叫びの韻律が、より切実になってくるのである。そうであれば、この詩稿も（写稿）段階に得た詩想を改めたのではなく、強化したといえるのだろう。

このようにみえてくると、詩の場が大きく変容したとみられ、その詩想にも大きな変質があったかと考えられてもよいのは、次のわずかな7編ということになるのか（○はほぼ変わりないと判断されるもの）。

詩稿	詩季	舞台	人物	事態	異同
吹雪かゞや	○	×	×	×	消失・改編
電気工夫	○	△	×	×	新設・改編
岩手公園	○	○	×	×	継承・改編
毘沙門の堂	○	○	×	×	無題・句2語0
林の中の柴	○	△	○	×	無題・改編
ほのあかり	○	○	○	×	消失・句3語2
川しろじろ	○	○	○	×	無題・改編的

人物や事態が大きく変容した詩の場とは、そこを支えていた詩想に変質が起きたことによるのは、間違いない。右の詩稿について、（写稿）段階にたどりついた詩想が、具体的にどう変質したのか。（写稿）として撰びとられた詩想が棄てられて、まったく新たな詩想に改変されてしまう、という詩想の不安定さあるいは脆さがそこにみられるのかどうか。

次節で、詩の場の変容実態を具体的に推敲の現場にたどることにより、その詩想変質の実状を見定めてみたい。

(注)

1 すべて定稿化されている。ここにいう「ウル定稿」とは、直前稿という位置関係をのみいうのでなく、定稿に向かう詩想の血脈を保有した実質稿として、私は位置づけてゆこうとしている。なお「ポランの広場」は「了」の符号だが、大きさと横線を伴う点で「写」の感じに近く、「写稿」に含めて考察する。

2 「文語詩稿」試論（『宮沢賢治 透明な軌道の上から』所収、新宿書房一九九二）。

3 詩法メモ3（『新校本全集』第十三巻下所収）に「文語詩双四聯に関する考察」として、

一、概説 文語定型詩、双四聯、沿革、今様、藤村、夜雨、白秋、

二、双四聯に於る起承転結

三、格律、単句構成法、

四、韻脚、

などと記されている。詩人が意図した詩形式が具体的にどのようなものであったか不明だが、定稿にもっとも多くみられる4句／2連形を基本とするものではないかと推定される。

4 澤田由紀子「宮澤賢治「文語詩稿」におけるリ定稿性リについての考察」（『甲南大学紀要』111-1999・三）が、用紙冒頭の余白に着目し、「これから表題を書き加えていくことができるように、残した余白と見ることができよう」と指摘している。島田も「題名のゆくえ、文語詩双四聯と、遺稿の〈山〉と、定稿集分立と」（『論考宮沢賢治』32000・八）で本稿に先立ち同様の検討を試みていた。

5 2行め題・6行め本文が「齒科医院」、3行め題・8行め本文が「廢坑」、4行め題・8行め本文が「砲兵観測隊」、9行め本文が「軍中（一）」、5行め題・10行め本文が「国土」、11行め本文が「早儉」。

6 日本国語辞典第二版によると、「大正時代に流行した」といい、用例に「新しい言葉の字引」（服部嘉香・植原路郎一九一八）を挙げて、

連鎖劇（略）舞台には演ずることの出来ぬ風景、器物はこれを活動写真で見せ、処々の要所に実物の俳優を用いてという部分的な記述を引く。「連鎖劇」定稿開始形においても、「演ずることの出来ぬ風景」として「雲どしどしとび」去る空の景が舞台上に映写されているものであろう。また「軍事連鎖劇」については、御園座演劇図書館（名古屋市）による「大正時代の未所蔵芝居番付け一覧」の184・185の項に、

1922 大正11 1/18 軍事連鎖劇太陽団 大橋幸太郎一行

1922 大正11 1/9~15 軍事連鎖劇太陽団 大橋幸太郎一行 二の替り

とあり、「軍事連鎖劇」という呼称でおこなわれたものが存在したようだ。その劇内容、太陽団や大橋幸太郎一行などについては未詳だが、「軍事連鎖劇」というジャンルがあつた可能性もあり、この名によつて当時の人々にはあるイメージが共有された可能性もある。その点についてはなお調査中だが、宮沢賢治が、大正時代だけでなく昭和に入つてから「軍事連鎖劇」を観た可能性もある。山田積一『おふくろの日記そして人生五十年』（創造出版一九八七、未見）が著者の母による育児日記の「昭和8年6月20日」の記述、

太陽団一行の軍事連鎖劇をみに行く

を引用しているという。富山県中新川郡北加積村（現滑川市）におけることである。

7 植木雅俊訳『法華経』（岩波書店二〇〇八）を参考とした。なお、引用した陀羅尼は、竺法護訳『正法華経』では富有・調戲・無戯・無量・無富・何富とあり、本田義英の訳では「富める者よ。踊る者よ。讃歌に依つて踊る者よ。火神よ。歌神よ。醜悪なる歌神よ」（『法華経論』）とあるという（坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』（下）の注、岩波文庫）。

8 この詩稿の素材となつたのが、「下限は遅くも大正一二年三月、おそらくそれよりも早い時期」（『新校本全集』第一巻校異）の題材による短唱群（冬のスケッチ）であり、その成立時期は妹トシ子の死（三一（大正一一）年一月）に近接している。『春と修羅』の詩章「無声慟哭」や詩章「オホーツク挽歌」に展開されたのが、亡妹のゆくえにかかわる信仰上の彷徨であつた。

一覧表 i ▼ブルーブラックインク・青インク（写稿） ↓定稿開始形の題名異同、

詩稿	再編稿	定稿	変化
公子	・ ↓病后IIエルテル ↓手簡	公子	変更
麻打	・ ↓護岸工事 ↓	麻打	新設
そのとき酒	・	・	無題
早池峯山巔	早池峯山山巔	早池峯山巔	変更
社会主事佐	社会主事 ↓「・ ↓県」社会主事 ↓佐伯正氏	社会主事佐伯正氏	継承
退耕	退耕	退耕	継承
暁	・ ↓	暁	新設
上流	・ ↓	上流	新設
秘事念仏一	・	・	無題
岩手山巔	・ ↓頂上風の中の石に米と銭あげて拜む農民たち	岩手山巔	変更

ブルーブラックインク  
（写稿）



日本球根商	○春	○病院の花壇	○いたつきびと、看護	○風信子華まがつみの
われのみみ	○春	○(病床)	○われい病者	○下品ざんげのさま
玉蜀黍を播	○春	○軍馬補充部↓	○技手、農婦ら、所長	○いそぎひれふせひぎ
古き勾当貞	○春か	○石碑	○小野寺青扇↓勾当貞齊	○ひかり妖し
夜をま青き	○夏	○大迫の宿	○ひとびと、歌妓	△あはれはかな↓ひとりたより
あかつき眠	○夏	○小店	○(母親)、みどりい	○しとみ上げれば
ほのあかり	○秋	○鮫幣神社	○社司の子、(父)、母	×わらふ↓ありかを知らず
盆地に白く	○秋	○遠野盆地	○われ、ひとびと	○花はいまだにをさまらね
たそがれ思	○冬	○報恩寺	○(語り手)、寄寓僧類青き僧	○四請を了へ
いたつきて	○冬	○病床	○(病者)、鼓者	○いたつきてゆめみ
吹雪かゞや	○冬	×峠↓、吹雪中	×(人)↓犬(人?)	×妖しき目、冴ゆれば↓
鶯宿はこの	○冬	○七つ森(車中)	○(語り手)	○七つ森を過ぎる
老いては冬	○冬	○花巻温泉遊園地	○園丁	○湯管のむせびたごほのか
小きメリヤ	○冬	○街の露店	△家長たち、ひと楽隊↓	○感ひ
氷雨虹すれ	○冬か	○花巻農学校	○(僚友)、われ、公	△ことばもて↓神祝にどよもす
羅沙売	○	○村落共同井戸	○羅沙賣り  ひと	○水繩を操りあぐる
早春	○春	△・↓峽の鉾山和賀	△われ、↓技師ら	△まことのことば、↓鉾脈
開墾地落上	○春	○開墾地種山?	○高清	○開墾地落成
電気工夫	○春	△田野か↓電塔	×名与村長、耕者↓電気工夫	×うなづき笑ふ↓攀ぢる電塔
祭日一	○秋	○丹内山神社	○蒟蒻を切る人	○さくさくさくと切り
聚雨	○夏	○新墾地	○人	○故なく怒る身は暗し
氷上	○冬	○スケート場	○町の子女塾舎生、庶務課長	○さざめきしげく
四時	○冬	○軽鉄鳥谷ヶ崎駅	○助役農学生ら議員たち小使	○古時計四時うてば
塔中秘事	○冬	○小岩井農場脱穀塔	○女	△ひそかなる↓なにごとか
夜	○	○農家	○(人、農民?)	○もろ手ほてりに耐えざる
				わらひ

車中〔一〕	○	○車中	△大坊主きみ↓開化郷士ひと	○清純とよみし
病技師〔二〕	○	○丘裾	○をとめら、われ	○死相われにありや
中尊寺〔一〕	○	○金色堂中尊寺・平泉	○大盗	○おろがむ
退職技手	○	○苗代田	○おのれ  退職技手	○暴れんぞ、田螺ひろへり
民間薬	○	○畔	○(農民)、巨人	○水田のわざに身をわ
峡野早春	○	○峡野、夜見来の川	×・↓(嘆く人)	△・↓稔らぬなげき
暁眠	○	○贖物師の門	○ひと(木藤)	○はかなくなほねむる
牛	○	○牧地と工場苦小牧	○(エーシヤ牛)	○たわむる、
賦役	○	○岩手山放牧地	○おのれ  農民	○あれと云はれしわざ
卒業式	○	○農学校	○慈鎮和・のごとき人	○うなじに副へし半巾
短夜	○	○目あかし町・同心町	○屋台の主人	○むらをさびしく苦笑ひ
村道	○	○村道	○詮之助、ヤコブ、犬、熊	○赤目に店をばあくる
悍馬〔二〕	○	○農道	○馬、封介	○そだたき叩く
医院	○	○医院	△學士、うなゐのこ二人↓三人	○神農像に饜ささぐ
廃坑	○	○鉦山桂沢?和賀?	○まもりびと	○坑々の荒れて
酸缸	○	○郡役場	△郡長、甲齊↓・	○酸えたる虹をわらふ
国土	○	○山嶺・稜線	○(人)	○寿量の品は鎮まりぬ
老農	○	○麦畑	○老農	○そのまなこはばみてうつろ
齒科医院	○	○齒科医院	○たはれめ	○かぼそき肩をおののかす
萎花	○	○花巻精養軒?	○人々、をとめら、団、会長	○溶けしさま↓うつつもあらざり
副業	○	○農家	○ひと	○兎はまにあはね↓つくのはね
岩手公園	○	○岩手公園	×・↓タピング親子	×・↓団欒
市日	○	○丹藤川沿村落	○童、姉	○栗を食う鏡欲り
巡業隊	○	○はたごや	○楽手たち、長	○そごろに、わびしき
母	○	○日居城野	○母、うなゐのこ	○その身こそ瓜も欲り
早俣	○	○早割れ田	○家長たち	○白き空穂のなかにして
砲兵観測隊	○	△セガ↓クゾ	△士官ら↓ひとびと	○雲をあざけり

軍事連鎖劇	○冬	○劇場	△せんたくや、↓上等兵	△泪ながし、↓煙草なげうち
嘆願隊	○冬	○(警察署?)	○当主(嘆願の人々)	○いまだに放たれず
涅槃堂	○冬	○病床、涅槃堂報恩寺?	○われ  病者?	○得も死なず↓命なほ
コバルト山地	○冬	○早池峯毛無森?	○	○ひらめき酸えてまた青き
記念写真	○冬	○盛岡高等農林	○学 <small>まな</small> の長 <small>なが</small> 学生教授助教授寫眞師	○身を顛 <small>たふ</small> はす學 <small>まな</small> の長 <small>なが</small>
臘月	○冬	○水車小屋	○あるじ	○かうかうと水車はめぐる
式場	○冬	○花巻国民高等学校	○部長	○訓辞をなせるなり
雪の宿	○冬	○大迫の宿	○書記、うため、博士、郡長	○や、凄涼のおもひあり
崖下の床屋	○冬	○床屋花巻	△唾子、支店長アーティスト↓町助役理髮技士	○弟子の缺をとりあぐる
著者	○冬か	○盛岡高農見本園か	○著者	△しづにをくびし、若き紳士↓夢なれや
岩頸列	○冬	○箱ヶ森壽ヶ森大石山南昌山東根山	○芝雀	○寒げなる山によきによきと
保線工手	○冬	○車中	○保線工手	○妻がけはひにほのかに笑まふ
病技師(一)	○冬か	○飢饉供養塔松庵寺	○技師	○風のなかにて泣かん
心相	○冬か	○岩手山麓か	○(語り手)	○たよりなきこそころなれ
翁面おもて	○	○病床	○われ	○やみほほけつかれ
天狗草けと	○春	○測量地(温泉遊園地)	○親方、(語り手)	○測量中
腐植土のぬ	○春	○春木場駅前広場	○子、駅夫、人々、女、宿屋	○りんと立ちたる子
雪げの水に	○春	○外山御料牧場	○牧夫	○兎のごとくはねたる
血のいろに	○春	○岩手病院	○患者、綿羊、医師をとめら	○凶事の兆
残丘の雪の	○春	○早池峯山	△サラーなるひと↓女 <small>ひと</small>	○よりよき生のねがひ
うからもて	○春	○台地(部落)	○児ら	○憑 <small>よ</small> りくる
商人らやみ	○春	△・↓(商家)	○われ  病者	○病みに恥つむ
みちべの苔	○春	○みちべ	○(語り手)	△まがつの神の塚↓呼ばはる
秘事念仏二	○春	○北上川岸	○元信齊、妻子	○陸稻を播きつくる
沃土ノニホ	○春	○青貝山	○モロビト、(ナレ  語り手?)	○入会の山林手入れ
毘沙門の堂	○春	○成島毘沙門堂	×母、みどり↓堂守	×あまの邪鬼払ふ↓眼やさしき

水と濃きな  
 厩肥をにな  
 川しろじろ  
 林の中の柴  
 白金環の天  
 あな雪か屠  
 さき立つ名  
 燈を紅き町  
 けむりは時  
 うたがふを  
 僧の妻面膨

○夏  
 ○夏  
 ○夏  
 ○秋  
 ○秋  
 ○秋  
 ○冬  
 ○冬  
 ○冬  
 ○冬  
 ○冬

○早池峯山巔  
 ○新墾畑  
 ○イギリス海岸  
 △苗代田、↓土蔵  
 ○煉瓦工場  
 ○豊沢橋  
 ○寒煙の戸外  
 ○役場？学校？  
 ○車中  
 ○杉林  
 ○本堂教浄寺

○やぶれし神  
 ○(農民)  
 ○われ  
 ○面青膨れ眼ひかる男  
 ○技師  
 △屠者たち↓4人に  
 ○村長沙弥技師女訓導  
 △子、書記↓マント  
 ○(人)、をとめ  
 ○(語り手)  
 ○僧、僧の妻

○青々と行衛しらずも  
 ○熱く苦しきそのわざに  
 ×うち感ふ↓いたつきつかれ  
 ×↓いかさまさい  
 ○写真にとり↓出で仰ぎ  
 ○うみ  
 ○寒煙毒をふくめるを  
 ○銅版の紙片をおもふ  
 ○ひるのたびぢの対話  
 ×陀羅尼品↓やめよ  
 ○寄進札そごるに誦み



### 3 節 詩の場の変容と詩想の変質

はじめに

〔写稿〕の定稿化にあたり、詩の場に大きな変容があったとみる7編について（川しろじろとまじはりて）は序章においてその過程をみた）、その命名の変転を軸にして、

1 題名消失稿 「吹雪かゞやくなかにして」・「ほのあかり秋のあぎとは」

2 題名新設並びに継承稿 「電気工夫」・「岩手公園」

3 無題継続稿 「昆沙門の堂は古びて」・「林の中の柴小屋に」

に取り分け、その変容の実態を、場合によっては〔写稿〕以前の本文にも遡ってその推敲現場をたどることにより、詩想変質の内実に迫る試みをおこなう。

1・1

定稿で題名を消失してしまうという事態に至った詩稿2編について、詩の場の変容から詩想変質の内実に迫る作業を、本節では試みた

まず「吹雪かゞやくなかにして」の定稿本文は、次のとおりである。

①吹雪かゞやくなかにして、 まことに犬の吠え集りし。

②燃ゆる吹雪のさなかとて、 妖しき<sup>あや</sup>手<sup>て</sup>をなせるものかな。

その題材をどこから得たのか未詳だが、《文語詩稿》として22系の詩稿用紙に起稿されたのは、一九三二（昭和七）年以降の再編段階のことと推定される。三〇（昭和五）年前後から三一（昭和六）年にかけて形成された初期稿段階のように、草稿上に〔了〕印が与えられていないからである。三三（昭和八）年前後に鉛筆による〔写〕印を与えてウル定稿に撰びとると、その八月には、定稿として『文語詩稿五十篇』に収められた。

起稿（下書稿一）と〔写稿〕（下書稿三）とをまぜずみよ。

峠

①燃ゆる吹雪のさなかにて  
なんぞ妖しき<sup>■</sup>「ルビ」「まみ」のさま

②吹雪たちまち過ぎ往きて  
片雲<sup>■</sup>プリズムを示したり

(下書稿一手入れ形)

峠

①吹雪かゞやくさなかには  
燃えて妖しきグリムプス

②冴ゆれば仰ぐ尾根の上

片雲<sup>■</sup>プリズムをひるがへす

(下書稿三(写稿))

題名が指示するとおり、これはどうやらある「峠」における吹雪の最中とその通過後とを対置した自然詩篇として、生成されている。その推敲は、2行/2連、七五調という定型の枠を守りながら、それぞれの連において、

なんぞ妖しき<sup>■</sup>のさま                    ↓                    燃えて妖しきグリムプス  
吹雪たちまち過ぎ往きて           ↓                    冴ゆれば仰ぐ尾根の上

という手入れ結果がみられた。表現そのものは、「グリムプス」という象徴的な詩語へ、「冴ゆれば」と省略を効かした詩句への置換によって、やや難解さを加えながらも、対の連としての整備をよく果たしている。(写稿)の要は、①連の「グリムプス」(glimpse)である(う)、②連の「プリズム」(prism) 口語稿で数例、文語詩稿では未定稿「雪峽」に見いだせる)、それぞれの詩語が効果的に配置されて、その輝きの変化がうまくとらえられている。吹雪の通過という時間軸にそって、光をはらんで吹雪が地上を襲う妖しい景から、いまや天空で陽光が散乱反射しているいわば聖なる景へ。地上から天上へと視点を移すことで開放的な空間性までも具え、四次元的な詩の場が構築されている、と説明しうるだろう。「峠」という場所に出現した状況の対照性を明示することによって、この風土が烈しくも宿してい

る、闇と光あるいは暗と明といった自然現象の二面性を鮮やかに提出している。

北上山地と奥羽山脈によって閉じられた岩手では、「峠」とは、人々にとってその生活場面で、どうしても越えなくてはならぬ場所なのであり、その地勢のためだけでなく、ときに困難をもたらし、ときに慰藉を与えてくれる、といった多様な自然の力にも出会い、かわらざるを得ない、特異な場所なのであった。若き日、山野を跋扈していた詩人にとつて、「峠」の記憶は臚なものではなかったはずである。それが、定稿化に際して、〈写稿〉にあつた吹雪の後の光景を捨象するとともに、「峠」という指定を取り下げ、①連にみられた吹雪の妖しさのほうに集中して、詩の場の再構築を果たしている。

その変容は、〈写稿〉の草稿上でおこなわれた手入を承けるものでなく、定稿上に不意に現われたもので、詩人の内部における推敲段階を経て成つた、ということである。その推敲結果は、まず梓組みとなる連構成は継承しつつも、詩句構成は「七五、七五。」から「七五、七七。」へと転調して、ある意味心地よい切れをもつていた詩文末が、なにかをひきずるような重たい韻律を内蔵し、それがこの詩の場を支配していることに注目したい。

そしてそこでは、〈写稿〉におけるあの「グリムプス」の正体を、つかみだそうとしているようにみえる。〈写稿〉前半部の「吹雪かゞやくさなか」という閉鎖された場だけを引き受けて、①連「かゞやくさなか」から②連「燃ゆる・さなか」へと、吹雪という時空そのものを二段階に分節する構造になつているところからも、それはいえるのではないか。その構造のうえに、吠え集う犬の群れが不意に現われ、そこに妖しい「註」（まみ）の存在を発見し焦点化してゆく。時間軸のうえに立ちながらも、ここからそちらへ、そこから向こうへ、そしてさらに向こうへ、といった際限のないような奥まり、あるいは威圧によって生ずるような昂まりを蔵した、重層的な構造をもつ空間へと、詩の場は不気味に変容しているといえる。

1・2

このような詩の場の変容をもたらした過程は詩人の内部にあるのだから、その契機あるいは経緯が不明なのであり、簡潔ではあるが必ずしも簡明でないこの本文から、その詩想をくみだすのは容易でない。

ただここでは、定稿として構築された詩の場の、輝く吹雪から燃える吹雪へといよいよ烈しくなるとき、出来事として、まず「犬」の群れが現われ、やがて「註」の発見があつた。そうした詩人の新たな設定に着目して、「犬」と「註」とが、それぞれ意味していることを探ることによって、詩想の内実に向つてゆくことができるかもしれない。

①連で「吹雪かゞやくさなかにして」という状況が成立したとき、草稿段階にはまるでみえなかつた「犬」の群れが現われるのだが、それが、

まごいに犬の吠え集りし

と表現されている点に注意をしよう(傍点は島田)。まごいに、そうであった、という得心めいた言いまわしが気にかかるのだ。そこには、吹雪など天気が崩れると犬が群れてくることがある、などといった古くからの言い伝えめいたものが前提にあるかのような措辞なのである。この「犬」が登場した背後にも、たとえば『遠野物語』の三六話にあるように、

・猿の経立、御犬の経立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近きニツ石山は岩山なり。ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに、処々の岩の上に御犬うづくまりてあり。やがて首を下より押し上ぐるやうにしてかはるがはる吠えたり。正面より見れば生まれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さしといへり。御犬のうなる声ほど物凄く恐ろしきものはなし。

といった、「雨の日」に「御犬」が群れて「うなる」といった伝承がひそんでおり、そうしたイメージが、この「犬」に重なっている可能性もある。『春と修羅』の「犬」(二二、九、二七)にも、

うしろへまはつてうなつてゐる

わたくしの歩きかたは不正でない

それは犬の中の狼のキメラがこはいのと

もひとつはさしつかへないため

犬は薄明に溶解する

とあって、「犬」が秘めている(狼)性に詩人はずいぶん前から注意していた。ここではその「犬」が、吹雪が「かどやく」という異様な空間の現出とともに、「犬」が遠吠えに呼び合つて群れをなすという。そこに、野生／本能を呼び覚まされたものの妖しいすがたが立ちあがってきているのではないか。

吹雪の襲来と御犬／狼の出現という、そうした共存関係については、イーハトヴの童話集『注文の多い料理店』に収められた「水仙月の四日」にもみえていた。

二疋の雪狼が、へろへろまつ赤な舌を吐きながら、象の頭のかたちをした、雪丘の上の方をあるめていました。こいつらは人の眼には見えないのですが、一ぺん風に狂ひ出すと、台地のはづれの雪の上から、すぐばやばやの雪雲をふんで、空をかけまはりもする

のです。

これを見ると、詩人には風雪の到来と狼（御犬の転訛であろう）の跳梁とがすでに結びついている。この「水仙月の四日」は、少年が吹雪に遭難する物語であるが、雪狼は風雪の精霊たる「雪童子」の配下として登場する。この童話の世界を支えていたのが、たぶんこの地方の伝説や民話の一端であったろうが、この詩稿においても、そうした伝承が詩層のひとつとしてこの詩の場の内部に埋められている、と考へてはならないだろうか。ただ、伝説・民話の世界とはいっても、たとえば『遠野物語』とその「拾遺」とにみられる狼伝承は、実に「こはい」物語ばかりなのだった。たとえば、三九話に、

・ 佐々木君幼き頃、祖父と二人にて山より帰りしに、村に近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破れ、殺されて間もなきにや、そこよりはまだ湯氣立てり。祖父の曰く、これは狼が食ひたるなり。この皮ほしけれども、御犬は必ずどこかこの近所に隠れて見てをるに相違なければ、取ることができぬといへり。

とある。あるいは馬をことごとく喰い殺し（三八話）、あるいは人間に襲いかかり腕骨を噛み砕く（四二話）などともある、この御犬／狼の伝説とはこの地方風土の幽闇な世界をとらえたものであり、吹雪とともに、自然界の混沌たる摂理としては負の領域にあるものとして人間たちには認められよう。（写稿）では「峠」と題し、そこにおけるふたつの光景「グリムプス」と「プリズム」を対置することによって、自然現象の二面性を象徴的に提示していた。それが、定稿では負の風土詩篇へ集中してゆこうとしているように、ひとまずはみえる。

ここに至って「峠」という題名を失うのだが、これもたぶん御犬／狼伝説をその詩層にとりこんだことが関係しているのではないか。やはり『遠野物語』を例に引くならば、彼らとの遭遇は、里まで下りてきた場合もあつたが、その多くが次のように、峠あるいは丘だつた。

- ・ 境木峠まがひげたきと和山峠わやまとうげとの間にて (三七話)
- ・ 境木越まがひげの大谷地おほやちへ狩りにゆき (四一話)
- ・ 六角牛山の麓ふもとにヲバヤ、板小屋などいふ所あり。広き萱山なり。 (四二話)
- ・ 駒木境の山に萱刈りに行くと (拾遺二二三話)
- ・ 立丸峠まで来ると (拾遺二二四話)

つまり、御犬／狼の出現から、境・峠・萱山（丘）などといった場所が、その属性として浮かびあがってくるというのは、この風土に生きる人々にとつてはほとんど共同の幻想だったにちがいない。また実際に、そのような場所で「犬」に遭遇した鮮烈な体験／記憶が詩人にもまたあつたらうことを考えてよい。だから、「犬」の現われた定稿の詩の場に、題名としてはあえて「峠」をいただくこともない、というのが消失した事情の一端としてあつたとみうる余地はあろう。

とすれば、なぜ後継の命名がおこなわれないのか、ということが課題になってくる。その点については、詩の場の変容とともに起きていたであろう、詩想の変質ということがかかわっていたにちがいない。

1・3

負の自然／風土へとその視座が移行しようとしているとみえる過程で、自然現象の二面性を明快に認めていた〈写稿〉段階の詩想がどう変つていったのか、については、②連の「燃ゆる吹雪のさなか」に至つて発見される、

妖しき<sup>ま</sup>目をなせるもの

という、この存在の理解から導かれてくるにちがいない。

「<sup>目</sup>」は、この詩層の底に位置しよう下書稿一に現われていた詩語の復活であつた。「<sup>目</sup>」とは、諸橋大漢和辞典によると<sup>目</sup>に同じという。さらに「<sup>目</sup>」は、みる、であり、<sup>目</sup>「集韻」を引く。その「<sup>目</sup>」の項には、みる、明かに見る、視察する、とあつて、

察也「設文」、視也「広雅」、一曰邪視「集韻」

などを引いている。この語に対する詩人の理解がどこまであつたのか不明だが、「<sup>目</sup>」の意には「一に曰く邪視なり」（訓詁は島田）というところをも含んだものであつて、〈写稿〉の「glimpse」という実体が、定稿でいまい少し具体的な鋭い眼光としてよみがえつてきた、ということであつたのではなからうか。

この「<sup>目</sup>」を、前連を承けて御犬／狼のものであるとみる、その可能性も否定しないが、不思議なことに、『遠野物語』の狼は吠える姿が多くとらえられ、「水仙月の四日」でも雪狼が「へろへろまつ赤な舌を吐き」「青い焰がゆらゆらと燃え」る、その口もとばかりが注視されていて、その眼については記述がない。

狼に印象的なのは、どうやら吠え声とその口である。実は、古代以来それは注目されてきたことだつた。たとえば『万葉集』（一六三六番歌）に、

舍人娘子が雪の歌一首

大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに

の歌がある。「大口の」は「真神（狼の異名）の口が大きい意から冠したもの」（伊藤博）という。「真神」（まかみ）が狼の異名であるのは、「地名「真神の原」に枕詞「大口の」がかかっているところから推定される語。狼を畏怖して神と呼んだもの」（日本国語大辞典第二版、小学館）とする。要するに、狼＝大口という印象が決定的な伝承の祖型なのである。『遠野物語』や賢治童話が声や口をもって狼をとらえたのは、むしろ正当な手法を踏まえたものだったといえる（さらには、狼の住み処に雪を配するところに、狼と吹雪という古層の伝承が反映しているのではないか、という想像も呼びこんでくる）。

この「目」はやはり、「犬」の群れているさらにその奥の方に、もうひとつの別な存在として現われているのではないか。「犬」の群れの背後にあつて、吹雪のほむらのなかを立ちつくしている影がある、というふうな。そのような影の所有物として、妖しくひかる「目」が発見された。そう考えてみれば、「水仙月の四日」においても、雪狼のほうではなく、雪童子とその支配者である「雪婆んご」のほうに異様な眼を見いだせるのである。

雪童子の眼は、鋭く燃えるやうに光りました。そらはすつかり白くなり、風はまるで引き裂くやう、早くも乾いたこまかな雪がやつて来ました。

雪婆んごの、ぼやぼやつめたい白髪は、雪と風とのなかで渦になりました。どんどんかける黒雲の間から、その尖つた耳と、ぎらぎら光る黄金の眼も見えます。（中路）その眼は闇のなかでをかしく青く光り、ばさばさの髪を渦巻かせ口をびくびくしながら、東の方へかけて行きました。

「妖しき目をなせるもの」とは、「犬の吠え集りし」その、さらに奥まったあたりにひそんでいる、なにものかではないのか。それは、右の雪童子や雪婆んごの「鋭く燃えるやうに光り」「ぎらぎら光る黄金の眼」にも重なるような存在、それらによつて象徴されるところのものであるように思えてならない。雪婆んごとは、雪風を呼び寄せるエネルギーそのものの擬人的比喩で、自然の非情さを象徴した鬼神なのであり、彼女によつてある意味翻弄されている雪童子は、そのエネルギーによつてうみだされた雪と風そのものの比喩なのである。ここでは、遭難した少年に対して雪童子の瞳が「ちよつとをかしく燃え」て救いの手をさしのべる、というのが要点だった。そこでは、自然の優しい風情といった側面を認めてよいのだけれども、それでも彼は「こつちへとつておしまひ」（命を奪つてしまえ）という雪婆んごの命令に本来したがうしかない、鬼神のがわのひとりであることにまちがいない。この頭わな二面性は、自然界の混沌性を象徴的に示している。

この詩稿も、〈写稿〉段階では、吹雪を軸に自然現象の二面性を対比的に鮮やかに切りとつてみせていた。だが、定稿に至つて提示されてきたのは、吹雪の内奥にひそむ自然界の「妖しき」ありようなのである。しかしそれは負の領域としてただ一方的に提示しようとし

ているのではなく、たとえば明暗・正邪などといった相反する関係や事態などその一切を未整理に内蔵している、自然界というものの「妖しき」ありようとして、不気味さの渦まく秘かな場が構築されたのではなかるうか。そして、そうした風土を人々は生きてきたのであり、いまも生きている。

1・4

『遠野物語』はまた、鬼神たちの棲むこの風土を如実に、次のようにも再現してみせている。

・正月十五日の晩を小正月といふ。宵のほどは子供ら福の神と称して四、五人群れを作り、袋を持ちて人の家に行き、明けの方から福の神が舞ひ込んだと唱へて餅をもらふ習慣あり。宵を過ぐればこの晩に限り人々けつして戸の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出でて遊ぶと言ひ伝へてあればなり。(中略)顔はすてきに赤く眼はかがやけり。(一〇二話)

・小正月の夜、または小正月の夜ならずとも冬の満月の夜は、雪女が出でて遊ぶともいふ。童子をあまた引き連れて来るといへり。里の子ども冬は近辺の丘に行き、櫓うら遊あそびを面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりといふ者は少なし。(一〇三話)

小正月の夜には、「山の神」も「雪女」も同じく遊行するというのだ。里まで下りてくる山の神のその「顔はすてきに赤く眼はかがやいていたが、「見たりといふ者は少な」い雪女については、たぶん里まで下りてこないで、その姿がどうもはつきりしない。ただ、「童子をあまた引き連れて来る」というからには、彼女も雪婆ゆいばさんの縁者なのである。とすれば、雪の童子たちにも先駆けるものとして御犬／狼の群れがともなわれていたにちがいない。

ならば、里に下りてくる山の神の場合も、出現に先駆けるその眷属として、山に棲む御犬／狼がまず群れてくる、という現象もあつたはずである(山の神もまた女性神とみられ、雪女とは親近性をもっている)。それが語りとして加えられていないのは、山の神の脅威のほうに意味をみいだした伝承を『遠野物語』が採つたためであろう。それにしても「真神」と呼ばれ「御犬」と敬称されていたように、彼らもまた確かに神の一族なのだった。

この地方のこうした伝承世界を背景にすえるならば、この詩稿が到達した定稿の詩の場を支えているのは、この風土に対する(畏怖)の念である。自然界のはらむ混沌とした妖しさへの畏れであり、この風土に棲みついてときに猛威をふるってきた鬼神たちへの怖れであるにちがいない。それは、(写稿)の詩の場を支えていた、この自然現象の明暗それぞれの現われに対する好悪や愛憎の念に、まったく異なっているものでもない。好悪や愛憎などといったところを踏み超えて、はるか深奥にある敬虔という人々の心性にまで、詩人がたど



りついできたといつていいのではなからうか。そこには、この自然／風土に折り合いながら寄り添って生きてきて、これからも生きてゆかなければならぬ人々の、もっとも純度の高いすがた——祈りというものもまたこの場に息づいているのである。そうであれば、〈写稿〉に定位された詩想が、定稿への過程で改変されたわけではない。詩人の内部で起きたこの詩想の変質は、むしろ深化とみえ強化とみえる。

すると、定稿がなお命名を保留している事態もまたみえてくる。この詩の場を支える詩想のその深みを言いあてるところまで、命名がまだ熟していないというのである。それを、

本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在には現在の推敲を以て定稿とす。

『文語詩稿五十編』和紙表紙<sup>(1)</sup>

として、「現在の推敲」をもってあえて「定稿」に認定したということになる。「未完成の完成」(農民芸術概論綱要<sup>(1)(2)</sup>)という詩人の信念が根幹にあつたろうが、「表現未だ足らざり」るものをなぜ「定稿」と位置つけたのか。そこには、「想は定りて」と断言し、確かに宣言しえた詩人がいる。詩想の定立こそ『文語詩稿』の優先課題であつたのであり、その実現に対する自信というものが、大きな要因としてあつたにちがいないのである。

1・5

「ほのあかり秋のあぎとは」は、推敲規模としては改編的ではないが、変化の効果としては「吹雪かゞやくなかにして」にも劣らぬ、烈しい変容を詩の場にもたらしている。ただ「吹雪かゞやくなかにして」の場合に異なるのが、〈写稿〉に想定される本文がその用紙上で手入れを受け、それを承けて定稿に至る点である。まず、定稿開始形本文をみよう。

①ほのあかり秋のあぎとは、  
官<sup>つか</sup>の手からくのがれし、  
ももどりのねぐらをめぐり、  
社司の子のありかを知らず。

②社殿にはゆゑへののりど、  
そのははは(ことなき)ままだ、  
ほのかなる泉の声や、  
しらたまのもちひをなせる。

次に、〈写稿〉に想定されよう本文と定稿化に向けた手入れ形本文とを対照する。

失意

おほいなる秋のあぎとは  
ほのじろく林をめぐり  
頬蒼くまなこひかりて  
社司の子ぞつめたくわらふ

社殿にはゆふべののりと  
もも鳥のかへりもだすや  
そのはははことなきさまに  
しらたまのもちひをなせる

（写稿）想定本文

家

ほのあかり秋のあぎとは  
ももどりのねぐらをめぐり  
官つかさどの手からくのがれて  
社司の子のありか知らずも

社殿にはゆふべののりと  
ほのかなる泉の声や  
そのはははことなきさまに  
しらたまのもちひをなせる

（写稿）手入れ最終形

この詩稿の変容として第一に挙げなければならない変化は、中心人物の在／不在という、決定的な相違である。その「社司の子」を、小沢俊郎が「モデルは鼈幣神社の社司の子阿部孝と思ひ浮かべられる」とした<sup>13</sup>。一八九五（明治二八）〜一九八四（昭和五九）年。花巻川口町南万丁目出身（父は鼈幣神社宮司）。花城小学校で一年上級、中学の同級生。後、一高・東京帝大（文科・英文学）に進学。卒業後、愛知一中教諭を経て高知高校教授、戦後は高知大学文理学部教授、学長を務めた。学生時代は帰省のたび賢治と会い、親交があった。後、高知大学学長となる。

（新校本全集第十五巻校異及び新宮澤賢治語彙辞典から摘記）

という人物である。鼈かま幣かま稻荷神社は、

祭神は宇迦之御魂命・豊受姫命、例祭は九月九日、元和元年陸中国胆沢郡より遷座、同年九月靈験として一夜山中潰裂して清水湧く、鼈が幣をくわえて先導するにより社名あり、明治初年郷社に列す。

（神社名鑑一九六四）

という由来をもつ。郷社は社格で、一八九一（明治四）年に神道国教化に向かう明治新政府によって定められたもの。県社の下だが、地域の村社を附属として最首に位置する神社である。

〈写稿〉以前の過程についても一瞥しておく。

この詩稿の素材となったのが、『歌稿「B」』の「大正八年八月より」とするなかに連作されている「秋のあぎと」（あぎとは腮、周囲の山々を魚の剥き出しの歯列をイメージしている）の語句を用いた736・737番歌の2首で、そこには「詩体に直す」として枠囲み

がされていた。

・巨いなる

秋のあぎとに繞られし

薄明をわがひとりたどれる。

・そらのはて

わづかに明く

たそがれの

秋のあぎとにわがとらるゝらし。

(736 番歌)

(737 番歌)

「大正八年」は、宮沢賢治が盛岡高等農林学校研究生として稗貫郡土性調査に取り組んでいた期間だが、この年は東京で病に倒れた妹トシ子を花巻に連れ帰って自身も花巻におり、のちの稗貫（花巻）農学校の前身である稗貫郡立農蚕講習所に出講していたようだ（新校本全集第十六卷下年譜篇）。このとき、阿部孝はまだ東京帝大の学生であった。<sup>(14)</sup>

1・6

歌稿は、「われ」が「秋のあぎと」に脅迫的なものを感じながら、夕暮れをひとりどこかに向かつて歩んでいる、という場面である。それが鉛筆によって歌稿余白にまず「詩体に直」され、

やつれたるなれを見んとて

そがなかをわが急ぎきて

かなしみのさはふかかりし

あゝなれはかなしくわらふ

と、「秋のあぎと」に囲まれるなか傷心の友に会いに出かけたことを、歌稿に重ねて明らかにしている（新校本全集校異、下書稿一とす）。たぶん三〇（昭和五）年のことであつたろう。これを承けて三一（昭和六）年前後に、詩稿用紙上（無野）でブルーブラックインクによって起稿されて《文語詩稿》化がはかられてゆく。

そうした初期段階から、三二（昭和七）年以降の再編段階に展開してゆく過程で、詩の場に現われてくる題名や、人物の描写は、次のように推移している（下書稿としての逐次は新校本全集校異による。「われ」の行為として重ねて読みうると思われる詩句を（ ）で示した。また、手入れとして「↓」は変化、「・↓」は新設、「↓・」は削除の記号、以下同）。

過程	初期段階	再編段階
草稿	下書稿二開始形↓手入れ形	下書稿三開始形↓手入れ形
題名	訪問 急ぎて来しに↓いそがしくおとな ひくれば 失意 （森をめぐりて↓林をめぐり）	失意 （林をめぐり）
鳥	・↓はゞたける鳥のけはひを 「なれ」の前に位置	
なれ	あゝなれのつめたくわらふ なれはたゞつめたくわらひ↓なれ のたゞつめたくわらふ	なれのたゞつめたくわらふ↓社司の子ぞ つめたくわらふ
ちち	・↓ながちゝのぬさやさゝげん 「ちち」の後に位置 ももどりのかへりすだくや	社殿にはゆふべののりと もも鳥のかへりもだすや
はは	・↓ながはゝは／もちひなせる ながはゝは／もちひなせる	なが（以下不明）↓そのはゝは／もちひ なせる
符号	〈了〉印付与 ↓遺稿整理時番号 No.1	↓遺稿整理時番号 4 〈写〉付与か

変化は、まず詩想の変質をうかがわせる、

「訪問」↓「失意」

という題名の変転から始まるけれども、その下書稿三は初期稿から再編稿に至る過渡的位置にある、とみておくべきであろう（下書稿二

のウラに展開したものであり、用紙の遺稿整理時番号No.1は初期稿に多い。傷心の友を心配した「われ」の存在を強く感じさせたその語り口がやや稀薄になり、場の重心が「なれ」の失意とその親のほうに移って、「頬蒼くまなこひかりて／なれのたゞつめたくわらふ」（下書稿三手入れ形）失意の者の表情をとらえている。そこからさらに、再編稿である下書稿四（写稿）に至る、遺稿整理時番号4は5とともに最終草稿に与えられている（において「なれ」を「社司の子」と言い換え、あらためて詩の場が神社であることを示しなおすところまでゆくのである）。

こうして「われ」の存在感が稀薄になるとともに、「なれ」の背景が色濃く現われてきたとき、「ゆふべののりと」をあげ「しらたまのもちひ」をこねて、いかにも平常心を装っている父母のありようもほぼ変わりがなくようにみえるが、「われ」と「なれ」の間にあつて昂ぶる気持ちを暗示するかのよう位置していた「はゞたける鳥のけはひ」（下書稿二手入れ）が、「ちち」「はは」のがわに移動して、「鳥」にかかわる表現も、

ももどりのかへりすだくや（下書稿三） ↓ もも鳥のかへりもだすや（下書稿四）

とあらためられて、胸騒ぐものを秘めた父母の存在感が強調されていよう。この暮れ方に鎮守の森に帰って、飛び繞り鳴き騒ぐたくさんの鳥が、次から次に我が巢に落ちついてはやつとおとなしくなっているそのさなかだ、としたこの喧噪と沈黙のいわば乱立状態が、子の嘆きとともに親の穏やかならぬ心のありように重なってくると思えるからである。

ただそれでも、詩の場の枠組みそのものに大きな変容があつたわけではない。

その〈写稿〉が、手入れによつて突如変化をみせる。三三（昭和八）年に入つてからだろうか。

「社司の子」の煩悶の内容については、下書稿一の手入れにみえる「ながおもひやぶれし」というほどのがかりしがなく、どのような「おもひ」であつたのか、不明というほかなかつた。それが、手入れによつて、

官つかの手からくのがれて

社司の子のありか知らずも

と、劇的なかたちで明かされるのである。小沢論がこれを「官憲に追われる身であるという設定」と読み、さらに「おそらく危険思想のゆえに官憲に追われるわが子を信じ抜いて、そつと逃げさせ」たものと、大胆に読みこんだ。子の失踪に対して、この場へのこされたのは「さりげなく日常の営みを続けている父と母」の姿だった。題名も「失意」から「家」へと転じ、新たな命名がおこなわれて「主題はまさしく家に移った」と小沢論はみている。こうした詩想の第二の変質によつて、最終手入れ稿の第一連はあたかも「序」のごとくに位

置づけられ、詩の場の核心は第二連にあって、次のような父母のありように焦点化されるのである。

社殿にはゆぶべののりと

ほのかなる泉の声や

そのはははことなきさまに

しらたまのもちひをなせる

小沢論は指摘しないが、ほぼ〈写稿〉を受け継いだ本文といえるここにも、「重要な一句」が出てきているのではないか。「もも鳥のかへりもだすや」に換えて現われてきた「ほのかなる泉の声や」という詩句である。靈験により湧き出たというこのお社のかすかな清水の音を、はつきり聴きとりうるほどの静寂がここにある。それはまた、清らかな静寂でもあったようにみえる。第二の変質がどのような意味をもたらすものであったかは、喧噪と沈黙の乱立から、静寂そのものへと反転したこの詩の場のなかに、てがかりがあるように思える。

日常の生業をふたりはたんたんとこなしている。子の逃走という異常な事態にこの親は動じない。小沢論のいうように「わが子を信じ抜い」ている親の肅々と平常心を保った姿なのであり、それがこの静寂の場に調和していよう。だが、「わが子を信じ抜い」ているという読みとりと与しながらも、やはりこれはみせかけではないのだろうか、とつい考えてしまう。少なくとも私はそうである。ただ、内心に動騒をいまでも引きずっている、などというのとは異なる、そこを突きぬけて彼らはもつと深いところに降り立っているのではないか、という疑念なのである。それは、静寂へと反転したことが及ぼす、「はは」の「ことなきさまに」というありように、私が奇妙な感じを抱いたところからうまれている。

「ことなきさまに」(何事もなかったように、すなわち平静であろうと努めて、の意にも受けとれる) というのは、事ありということが前提されているとみてよいであろう。そこであらためて、〈写稿〉とその手入れ稿と、それぞれの「ことなきさまに」の内実を探ってみると、次のような差異をみる事ができないだろうか。

○「もも鳥のかへりもだすや」(喧噪) - 「ことなきさまに」(動揺を押し隠すさま)

○「ほのかなる泉の声や」(静寂) - 「ことなきさまに」(何かを押し隠すさま)

騒然とした外部に対する「ことなきさま」とは、平静を装うことであり、それは信じ抜いてはいても動揺している、ということの裏返しだといえるのだろうか。だから、気丈にも、と読むことも成立する。母親であれば男親以上におおさら子の安否を気遣うのは、自然なことだ。けれどもここは、国家によって郷社と定められた地域の拠点神社だった。官憲に追われるような国家への裏切りを犯した子への心配を、おもてだたせることは慎まねばならない。父親もまたたぶんその本心を押し隠して、神官として「ゆぶべののりと」をいつものように勤めて、国家とこの地域の安寧を言祝いでいる。そのような場が〈写稿〉においては構築されようとしていたと考えられよう。

では、その手入れ稿に新たに現われた、この「はは」の「ことなきさま」とは、いったいなにを押し隠しているというのか。

静寂がやはり人物たちの心中に、あるいは心中を反映しているとすれば、それは、子を信じ抜く気持ちの不動不拔であることよって獲得された、平常心の現われとみていいだろう。すでに平常心を獲得している者が、「ことなきさま」に「一氣丈にも餅をつくる、というの」は饒舌にもみえる。やはり隠されていることがあるのだ。それは、まさしく「祈り」という静かな行為を秘めているのではなかったか。もちろん、神に奉仕する者は祈りを日常とする。ただそれが、神そのものを祈るがわにあり、なにかを神に祈るのは、ふつう崇敬者からの依頼を請けた場合であろう。それが、神饌である「しらたまのもちひ」をなすのに、「ことなきさま」であると語られるところに、神をただ祈るのでない、別の「祈り」がある。だから、平静を装って、隠しているのである。

その「祈り」とはなにか。

いま、あえて崇敬者に転じた「はは」が神に対して祈るのは、やはり、子の無事ということであるにちがいない。しかし、そのような「はは」の思いを「ことなきさま」に隠さねばならないというのは、いったいどういうことなのか。あらためて、「はは」の「ことなきさま」の意味を問いかえてみると、我が子の無事を神にひたすら祈ることが、一種のむじれとしてある、ということに気づく。というのも、末端に近い郷社とはいえ、国家神道の体制下にあるこのお社で、国家権力によって追われている我が子の正義を信じて無事を祈るというのは、国家の神に対して国家を呪詛するにほとんどひどい行為になるのではないか。端的にいえば、「はは」は国家が誤っていると、〈古層〉<sup>(1)</sup> 以来の地霊であるお社の祭神に静かに訴えているのではない。

近代国家が介入する以前からこの地域と人々を護ってきた神社神道におけるこの神本来の性格というものは、国家神道に位置づけられてもおお並存しつづけていることは確かだった。いわば二重構造をもつて一体化しているこの神への「はは」の祈りは、〈古層〉以来のこの土地（人々）に根づいた神に真摯に向かっているがゆえに、表層に飾られた国家（天皇）につらなる神に対しては、なおのこと秘められた〈抵抗の祈り〉とならざるを得ないのであって、それは「ことなきさま」におこなうしかない性質をはらんでいたのである。「しらたまのもちひをなせる」のも、いわゆる陰膳として、子のためにおこなっているのかもしれない。

そうみると、神官があげていた「ゆふべののりと」も、「ことなきさま」に／しらたまのもちひをなせる」ことに対応していて、同じ位相にあったと考えられてくる。この父もまた、明治維新以後、国家によって神官として定められ、国家に奉仕する者であるけれども、日々の勤めに装ってこの土地（人々）の神に、国家（天皇）の安寧ではなく、我が子への信頼を篤く語りかけ、その名誉の恢復を静かに切に祈りかけていたと思われてならない。その姿も表情もみえぬまま、声だけが社殿に響き、「泉の声」に重ねられてゆく、このような父の場を構築した詩人の意図とは、その祈りもまた静寂のなかにとりこまれてゆく密かな〈抵抗の祈り〉だったと考えられるのである。

しかし、そうした祈りに向かう詩の場は、家というレベルを超えてゆくのではないか。

1・8

そもそも、官憲に追われる事態の設定が、三三年夏の定稿化に向けておこなわれてきたことに注意すれば、時代はまさに強硬な思想統制に向かっていた。たとえば、

二八年 三月十五日「共産党員全国の大検挙（幹部の多くは逮捕を免れる。488人起訴。）」

二九年 四月一六日「共産党員全国の大検挙。党組織壊滅的打撃をうける（339人起訴。）」

三〇年 二月二六日「共産党全国的大検挙（7月、検挙1500人のうち起訴461人）」

（近代日本総合年表）

という、日本共産党にかかわる一連の事態があった。もちろん壊滅的打撃を受けたのちも、運動家たちはその再建に立ち向かっている。官憲は、それを執拗に追いつづけるのだった。

こうした思想統制は当然岩手にも及び、それは必ずしも共産党員にかぎらず、この地方の窮乏に苦悩するあまり社会改革を求めて活動した人たちにも及んでいる。『岩手県の百年』<sup>(1)</sup>によれば、この時期に3件の弾圧事件が起きていた。

三〇年一月 二日「共人会事件」、県下の小学校教員を主に、115人検挙（以下、検挙者数は年表の記述による）。

三一年二月 二日「岩手医専赤化事件」、岩手医専ほか学生を主に、18人検挙（『岩手近代教育史』によれば24人）。

三二年 四月一六日「新興教育連盟事件」、三陸沿岸の小学校教員を主に、32人検挙。

いずれも、東北／岩手における農山漁村の惨状を克服しなければならないという信念から、生まれた活動であった。それらは、詩人の《文語詩稿》の過程にまさに覆いかぶさるように起きている。

《文語詩稿》に向かいはじめたのが三〇年前後、その内省的な自分史構築による作業が、三一年の秋に病によって閉ざされてしまう。けれどもその闘病のさなか、詩人はあらためて、

社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ

（『雨ニモマケズ手帳』）

と決意する。その覚悟のもとに、三二（昭和七）年以降は死病を背負った者の《詩的実践》として、《文語詩稿》は再編に向かってゆくことになる。そのとき、特に三二年末の「岩手医専赤化事件」が、詩人に与えた衝撃は見過ごせないのではないか。事件は、

セツルメント活動として、農村の住民の栄養状態、病人の治療など、各地を巡回しながらボランティア活動をしていた医学生グループが対象になった。

（『岩手県の百年』）



という。宮沢賢治が、農村改革の基盤として土壌改良の実現を志し、石灰肥料の販売に県内・県外を奔走していたとき、彼らもまた農村を巡回して農村生活の改善に立ち向かっていたのだ。この事件は、医専生3名の起訴、審理から、治安維持法違反による懲役刑（執行猶予）判決が出る三二年一月一〇日まで、『岩手日報』・『岩手毎日』などの新聞各社ともに継続的に報道をしている。そのような事態に詩人もまた眼を凝らしていたであろうから、「官の手からくのがれし」という虚構化の、ひとつの契機としてこの事件があった、と考えられてもよからう。

また、「社司の子」のモデルに想定される阿部孝は、この時期には旧制高知高校の教壇に立っていたはずだが、三三年には高等教育の現場でも、

四月 鳩山文相、京都帝大滝川幸辰の辞職を要求。

五月 滝川教授休職発令。

七月 京都・東京両帝大の学生ら、滝川事件にあたり、全国大学に呼びかけ、大学自由擁護連盟を結成、滝川教授復職・鳩山文相辞職などを決議。滝川・佐々木惣一・宮本英雄・森口繁治・末川博・恒藤恭・田村徳治、免官。

などという事態が起きている（近代日本総合年表）。「社司の子」の周囲にもいま、国家主義という時代の闇が確実に垂れこめていたのである。

小沢論も指摘していたのだが、盛岡高等農林学校時代の保阪嘉内の退学や農学校時代における演劇教育の挫折、そして羅須地人協会時代の圧力など、いくつもの小さな弾圧を宮沢賢治自身もまたすでに実際に経験してきていた。そのことも考えあわせると、その設定は、友とのかつての記憶を超え、一族の枠組みを超えて、現在の社会状況の暗部を見据えている結果であるとしても、不思議なことではない。日本資本主義の成立から帝国主義による軍国化へと突き進んでいるこの時代を、詩人が見据え、農村のゆくえを左右するそうした〈社会〉のありようを視座とした詩想を醸してゆくことは、「社余農村を最後の目標として／只猛進せよ」という覚悟のもとに再編段階から定稿化に向かおうとしている詩人にとって、それはむしろあるべき針路のひとつであって、けっして無謀なことではなかった。

1・9

さらに付け加えるなら、『雨ニモマケズ手帳』の覚悟よりも以前に、詩人が「象徴的ファンタジー／革命」と題した一幕物の劇を構想していたという見過ごせない事実もある。

その用紙（丸善特製二）によって、購入されたと推定される二三（大正二二）年から三〇（昭和五）年の書簡流用まで、使用期間に幅があり構想の時期は特定しがたいが、官憲に追われる事態が本詩稿に設定される以前のものであることはまちがいないであろう。長いが全文を引く。

第一場 前方デ火盛ニ燃エルノ六名ノ長髪等ノ青年纏レテ砂上ニ座ス、兵士一〇、少尉A命令ス、兵士コレヲ突殺ス、

第二場 或ル高格神社ノ拝殿、柱、格子扉、鏡、等ノ労働服ト寶石トヲ着ケタル青年神前ニ額イテ独白ス、神殿靈動ス奉幣使及隨員  
神官等壇ヲ登ル、「才前ハ何カ、奉幣使ニ先テ參殿スルトハ何ダ、下レ。」青年退出

第三場 社前ノ公園広場、松ノ植込等、歩兵戒嚴ス、遙ニ銃声ノ憲兵等短銃ヲ擬シテ群衆ヲ去ラシメル。群集次第ニ整然列ヲナシ「  
…スルハ軍隊カ」等歌ヒテ去ル

第四場 社殿玉垣内、紋付き背広フルツク等ノ高官、資産家等肅トシテ列座ス。「モウ軍隊ニスツカリヤラシイ」等云フ。突

然白タスキヲカケ短袴ヲツケタル青年白刃ヲ携ヘテ門ヨリ入ル、群集動揺色ヲ失スル、門外寂トシテ声ナシ、青年 集中ニ  
入ヲ索メ鳥打ヲ冠レル若者ソノ他三ヲ射ス、集次第ニ退ク、一名ニ刀ヲ擬ス、一青年立チテ制ス、互ニ下ラズ、

(新校本全集第十三卷、構想メモ創44最終形態)

「或ル高格神社」の社殿には錚々たる高官と資産家たちが列座している。前の広場では民衆と軍隊とが対峙して緊迫した情況だ。そこに白刃を携えた「白タスキの青年」革命家が現われ、群衆のなかに「鳥打ヲ冠レル若者ソノ他」(内偵の官憲や密告者であろうか)を索めては刺し、なお一人に刃を向けたとき、これを制して立ちはだかる一青年と、青年革命家とは無言のまま一歩もひかない。

この終幕直前のふたりの対峙は、革命と保守といった敵対者の対立でなく、ともに「群集」のがわにあつて改革を正義と信じているのであつて、暴力革命も辞さぬ青年のやまざる熱情と、人を殺してまではならぬという倫理に徹した一青年の命を賭した諫止と、そのような対極にある情と理の対峙であつたとみえる。一青年の背後には、二六(大正一五)年の『農民芸術概論綱要』に掲げられた「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(序論)という、詩人の信仰上の理想がひかえているように思えてならない。

この戯曲構想は、『新校本全集』がとりあえず整理して「構想・梗概メモ」に位置づけた、まさに梗概にちがいないのだけれども、その綿密な劇的構成とすでに充分な文学的表現とが一体となつた、やや通俗的な展開ともいえようが、妙に具体的でなまなましく緊張感のある叙事詩としてこれ自体が読まれてもよい、それほど完成度に注目すべきではないか。

たとえば、用紙のウラに鉛筆で起稿された四場構成のこの本文が、「透けて見える用紙の行にあわせて布置して」いる。それは、清書的自覚の現われなのであつて、メモという程度ではないのだ。そういう自覚的な態度は内容的なことにも及んでいる。その推敲現場では、第一段階の鉛筆手入れで、第一場を新たに設定して場を順次ずらし、未完であつた第四場を未完のまま第五場として、さらなる場面展開を考へていたふしがみえる。

ところが第二段階の赤インク手入れで、未完の新第五場を削除、第三場から改められた新第四場をもつて終幕するよう変更されて、しかもそのとき、実は新第四場の末尾では、

「A↓一青年」立チテ制ス、「A↓・」[B、↓・]互ニ下ラズ、「A刀ヲ棄ツ、↓・」[A B握手ス↓・]

という赤インクによる削除手入れがあつて、先に掲げた最終の形態を得ていた。

鉛筆手入れ段階までは、対峙していた青年革命家(A)と一青年(B)とがついには歩み寄り和解するという場面があつたのである。すると、削除された新第五段には大団円の結末が予定されていた、と推測される。それでは、迫真の場面展開で極まってきた舞台の緊迫感が、ほとんど台無しにされてしまう。この革命のありかたをも問いかける叙事詩に、詩人はその内部でも相当の推敲を果たしていると考えられるのだ。置き忘れられてよいようなメモではけつしてなかつた。

たとえば、暴力の否定を共有したならば、ふたりの正義は、軍隊によつて民衆を踏みこむこの国家の正義に優越するのではないか。「高格神社」を戴いたこの国の歴史を検証しうる現在の私にはそうみえる。当時の官沢賢治は、その時代の渦中にあつて、革命に対する共感的なまなざしを持ち得ていたのだ、ということになる。少なくとも、国家神道に象徴される日本の、国民の精神までも意図的に統制してゆくありように対して、「象徴的ファンタジー」とオブラートしながらも正義の革命を構想した、その思いが詩人には依然として秘められていて、「おもひやぶれ／つめたくわらふ」友を案ずる「われ」(歌稿、初期稿、(写稿)成立前後)という自伝性を超えて、「官の手からくのがれて／社司の子のありか知らずも」(写稿)最終手入れ)という現在性／時代性をはらんだ場へと変容する契機のひとつとして反映していた可能性がまったくないとはいえない。

だから、神社を舞台としたこの詩稿が、官憲に追われる子を設定し、その父母に(抵抗の祈り)をひそませたとき、その詩想のなかに、現今の社会のありように対する批判が醸されてゆく、というさらなる詩想の変質へ向かつた可能性はあるのだ。そしてそれは、定稿という詩の場に確かに現われているようにみえる。それが題名の消失という事態であつたのではないか。

1・10

定稿は、なぜ題名を失つたのか。

それは詩人にとつて、この国の近代化のみちのりを、たとえば教育の躍動を硬直化させ農村の生活を陥れてきた現実として体験しながら、凝視しつづけてきたそのゆく先が、実は「誤つたものではないのか」という、国家批判をもはらんだ詩想が醸されてきたとき、それにつながる題名を定稿本文として提示することがためらわれたからである、という仮説を提出したい。地域の間関係にからんだもの、そして時局を批判的にとらえたものについては、拙速をおそれて意識的に命名をひかえた場合もあつたらうと考えられるからだ。それは命名の放棄とは異なるありようであらう。

官沢賢治に、国家批判をほらんだ思想が存在していた可能性については、それを否定できないひとつの出来事があった。

『農民芸術概論綱要』の「農民芸術の興隆」の部だけをあらためて詳述した『農民芸術の興隆』（生前未発表だがやはり二六年頃と推定しておく、花巻空襲により焼失）が、官沢賢治の死後、友の会(2)によって三五（昭和一〇）年八月発行の『官沢賢治研究3』に発表されるとき、「宗教は疲れて科学によって置換され 然も科学は冷く暗い」という項のその冒頭が、次のようにあった。

宗教中の天地創造論 須弥山説 ○道は拝天の余俗である歴史的誤謬  
見えざる影に嚇された宗教家 ○宗

編集者によって、「○道」「○宗」と伏せ字にされている箇所がある。<sup>(2)</sup> 言論統制が厳しくなっているこのとき、伏せられたのは「神道」と「真宗」であった。ここで官沢賢治は、「神道は拝天の余俗である歴史的誤謬」と認識していたのである。「宗教は疲れて」いるという論点からすれば、神道は「拝天の余俗」であつて、それは「歴史的誤謬」だ、と読まれてよからう。「拝天の余俗」は、『春と修羅第二集』の「一五四 単体の歴史 一九二四、七、五」に「拝天の余習」（拝天は天をかしこみ戴く、余習は餘習で、昔からのこつているならわし）とあつたのをふまえると、「拝天の余俗」は、天をかしこみ戴くという昔からの俗習の意になるであろうが、そのような神道は誤謬だと指摘しているのである。近代化の支柱のひとつとして神道の国教化がすすめられていたから、「拝天」の語も、記紀神話による皇統の神格化を殊に図ってきた、日本の近代化へのあゆみを髣髴とさせよう。これは少なくとも国家神道に対する冒瀆にほかならない。皇統の否定につながりかねないことばづかいは、この時代には、受けいれられないことだつた。<sup>(3)</sup>

こうした認識を持っていたことを踏まえると、  
二六（大正一五）〜三〇年▼農民芸術概論綱要↓農民芸術の興隆↓象徴的ファンタジ―／革命——」

三〇〜三三年▼「ほのあかり秋のあぎとは」稿一↓稿二↓稿三↓稿四↓〈写稿〉手入れ以後

という道筋がみえてくる。農村改革を構想した羅須地人協会時代以後、革命を夢想したことなどを経て、いま、傷心の友とその家族の光景を題材とした《文語詩稿》化の展開のなかに、官憲に迫られるという題材が侵入して、ついに題名を失った「ほのあかり秋のあぎとは」を定稿化したのである。時の権力には追われたとしても、「杜司の子」のほうに、たとえば「ほんたうに幸になる」（『銀河鉄道の夜』<sup>(4)</sup>）とことへたどりつきたための正義が具わっているとすれば、〈抵抗の祈り〉に向かうこの詩の場は、さらに一国家をも突きぬけてゆく可能性をも秘めてくる。

つまり、この詩稿における詩想が、《文語詩稿》の最終過程で突然尖鋭なる第三の変質を起こして定稿に至ったかのようにとらえられてしまうが、それは必ずしも不意な変貌ではなかった、ということになる。友情から家族愛へ、家族愛から憂国へ、その彼方に「ほんた

うのさいはひ」がとらえられてゆく。詩人の視座はしだいに高まってゆくのである。ただ、辺境の地に生を営む人々のがわに立ってこの国のゆくえを憂える、——しかも批判的なまなざしに支えられているといったかたちが、急進的なこの国家主義の時代にはなかなか理解されないことであつたらう。

なお、定稿が〈写稿〉最終手入れ形から消失させたものは、題名だけではない。

官つかみの手からくのがれて

社司の子のありか知らずも

(写稿)最終手入れ形)

官つかみの手からくのがれし、

社司の子のありか知らず。

(定稿開始形)

「からくのがれて」いまもなお「ありか知らずも」(傍点は島田)とする最終手入れ形の、この詩句の語りがいまだ詠嘆的情調によって支配されているのは明白であろう。けれども定稿開始形の詩脈は、「からくのがれし社司の子」の「ありか知らず」とたどれる、事実を冷静に示そうとする語りなのであつて、これは客体化に向かつている。そのとき、失踪した「社司の子」と語り手の関係が、どこか、「象徴的ファンタジー／革命」の終局で

一青年立チテ制ス、互ニ下ラズ

とした、かつての詩人の態度にかようとみえないうか。

歌稿余白以来、語り手は「なれ／社司の子」に同情的な立場にいたとみてよいが、定稿に至って、革命の熱情は、官憲におわれるような(暴力的なものをひそめた)方法をとるべきでない、「社司の子」のがわへの戒めもまた、詩の場に築こうとしている。そのように考えてはならないか。そうであれば、平衡バランス感覚といつてもよいであろうこの制御は、暴力革命を否定しているものであり、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」とした、あの遙かな志からきているものと考えられてくるのである。その志は、この国をも「世界」のうちに当然とらえているであろう。改革すべきことをはらんだ近代化を批判しても、この国そのものを全否定するとはあり得ない。「世界がぜんたい幸福に」なるためにも、この国もまたぜんたいが幸福に向かつてゆくこと。この時代が無謀な歩みをつづけるかぎり、あの父母の(抵抗の祈り)が秘めていた、「ほんたうに幸になる」ところに向かおうとする揺らぐことのない不断の信念をもつことよつて、人々がまず精神的に、そして社会的につながつてゆく、それが改革へのひとつの針路として浮かびあがってくるのではないか。病床にある実践者の、それは限界でもあつた。

一青年が、軍隊に囲まれたなかで、あえて青年革命家を諫止したように、軍国主義の突出が露わなこの時代だからこそ、社司の子のありかたもあえて問わなければならない。この詩稿において、ついに不変であつた「秋のあぎ」という不気味に不安な山々の光景は、こ

の時代の脅迫的な社会状況を暗示的に映しだした心象風景でもあったのである。

1・11

詩の場の大きな変容と題名消失とがあったものとして、ここにとりあげたふたつの詩稿で、詩の場の変容とそれを支える詩想の変質の過程において、鬼神あるいは地霊といった「古層」以来の日本の神が関与しているとしたのは、必ずしも偶然の一致ではなかった、と思えてならない。その風土に対してもその生活のなかにあっても、この地方に生きる人々の内部に、連綿と受け継がれてきた「畏怖」と「祈り」とがあった。その発見と提示は、社会や農村のために「只猛進」するとした覚悟のもとに企てられた再編以後の《文語詩稿》において、「詩的実践」としてその視座に「社会性」を獲得しようという詩人の態度が貫かれているゆえであったろう。

そうした態度がもたらしたものは、ふたつある。

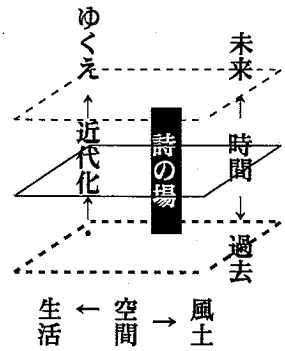
詩人がこの土地（人々）の神々をとらえて、その詩想を変じていった過程は、まったく新たな想へと改変し、移行しようとしたのではない。それは、ひとつはこの風土の深層においてゆくことであつたし、いまひとつはこの時代の過ちによってその生活を危うくすることの非を問うことであつた、とみることができ、詩想の変質はむしろ豊かさをもたらしてきているのではなからうか。そのことは、すでに見当を示してきたが、題名の消失とそのゆくえにもからんでいたろう。これがひとつめである。



あらためて詩想の変質と題名の消失についてまとめれば、右のようになるか。

ふたつめは、この土地（人々）の神々をとらえることによつて、詩の場における連と連との間や連内部に付与される時間性／時代性が、そのスパンをはるかに長大なものに変えたことであろう。しかも、「祈り」をあわせとらえたことで、詩の場の時空を未来に向かつても開いているのである。これもまた概念化して示せば、後のような図を描けよう。

そこでは、三次元空間に長大な時間空間を与えることによつて、詩人の記憶を積んだ詩層構造から成るその詩の場に四次元性を与え、詩想のさらなる発展を可能にする時空を実現されていたとはいえないだろうか。その結果、「吹雪かゞやくなかにして」が風土詩篇として、その風土性をいよいよ濃密にしたのであり、「ほのあかり秋のあぎとは」が生活詩篇としてありながら、そこに社会詩篇としての性格を強く帯びてきたのである。



(注)

1 赤坂憲雄『遠野／物語考』(宝島社一九九四)の「第三章境界考 4 山中の境界―峠」に、遠野物語における峠の考察がある。伝承の背後にあるこの地方の人々の生活と峠の関係が示唆されている。なお、「水仙月の四日」や「ひかりの素足」では峠の丘や峠を舞台として吹雪に遭難した子どもたちの明と暗とが提示されていたが(天沢退二郎「峠を登る者」、『宮澤賢治』筑摩書房一九八六)、この詩稿の原点につらなっているものと思える。

2 『遠野物語』を柳田国男に口述した佐々木喜善と、宮沢賢治は二八(昭和三)年八月にはじめて交信(書簡242)して以来、交流をもっていたらしく、三二年五月には佐々木がつづけて三度も病床を訪れ、「長い時間話し」(二二日)、「仏教の最奥をきいて」(二五日)、「六時間ばかり居る」(二七日)という親しみようであった(新校本全集第十六卷下年譜篇)。「遠野物語」にも、遠野物語的世界にも宮沢賢治は無縁でなかったとみられる。なお本文の引用は角川文庫改版一九九七による。

3 狼は、ヨーロッパ・アジア・北アメリカに分布して32亜種あるという。日本にはニホンオオカミとエゾオオカミの2亜種いたが明治時代に絶滅したとされる。ただ、『婦人家庭百科』(三省堂一九三七、ちくま学芸文庫版による)では、

種類が多く、我国では樺太にわづかに棲み、性甚だ兇猛で、古来恐るべき猛獣とされた。昔、我国内地で俗に「おほかみ」と呼ばれてゐたのは実はこの種のものではなく、その一種である「やまいぬ」をいったものであるが、今では殆ど絶滅した。という記述があり、昭和初期のこれも狼に対する認識のひとつであった。なお、『遠野物語』の四一話には、

和野の佐々木嘉兵衛、ある年境木越の大谷地へ狩りにゆきたり。死助の方より走れる原なり。秋の暮れのことにて木の葉は散り尽くし山もあらはなり。向かふの峰より何百とも知れぬ狼こちらへ群れて走り来るを見て恐ろしさに堪へず、樹の梢に上りてありしに、その樹の下をおびただしき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。その頃より遠野郷には狼はなほだ少なくなれりとのことなり。

と伝える。ただし、柳田国男「狼のゆくへ」(『孤猿隨筆』創元選書一九三九)は、昭和に入っても狼らしい捕獲があったことを伝

えて「これを要するにこの日本語でオオカミといった獣ならば、私はまだ日本のどこかの山に居るだろう」という説である」(『新編柳田国男集』第十一巻、筑摩書房一九七九)との立場を表明している。

4 たとえば釜石市にあるオイネガ森は狼ヶ森と宛てることができようが、六六五の山である。他にも狼を地名に持つ所について、『岩手の地名百科』(芳門申麓、岩手日報社一九九七)をみると、雫石町の狼森が三八〇の山、狼久保・狼穴の地名をもつ二戸や、狼沢(おいのざわ、おおかみざわ)の地名をもつ岩泉町など山間部である。また、盛岡市下米内や雫石町長山などに狼沢があり、遠野市附馬牛に狼石がある。山野を渉猟する狼ゆえ、やはり山の迫る地域に由来の地名が多い。

5 佐々木喜善が三一年にまとめた『聴耳草子』(ちくま文庫版一九九三)の「九二番狼石」のなかで、ある村で吹雪のなか「みすばらしい姿をした旅の巡礼の母娘」が行き暮れて一夜の宿を乞うがごとく拒まれて、村はずれの寺の軒下に宿った、という記述につづけて、

旅の母娘は吹雪の吹き込む本堂の軒下に抱き合っていたが、和尚はその姿を見て、可愛想な奴等だ。今夜のうちに狼に喰われてしまふだんべえがと言っていた。

その夜は大変な大吹雪になった。真夜中頃になると山の方から狼どもの叫び声が、吹雪の合間合間から聞こえて来た。その叫び声だんだん寺の方へ近づいて来た。母娘の者はあまりの恐ろしさに堅く抱き合っている。庫裡の方では狼の吠える物凄いい声を聴きながら、ああとうとう狼がやって来たなア。いよいよあの母娘の者がとって喰われてしまふだろうと和尚は言っていたが、寺の内へは入れようとしなかった。

とあって、吹雪と狼、という関係がみえている。ただ、さらにこの話を読み進めてみると、やはり母娘の姿は消えてしまつていて、娘は狼たちに実は助けられており(たぶんもう登場してこない母もであろう)、その無謀を抑えるほどの信頼を狼たちと結んでいた。後日談の内容はともかく、害をなす狼もときに人間を庇護する存在として現われるということも信じられていたようだ。秩父の三峯神社など狼・犬を災難除けの護りとしている。ここもその二面性をとらえており、鬼/神性が与えられる存在といつていい。『遠野物語』拾遺には、「三峰様という」「狼の神」が「旧仙台領の東磐井郡衣川に祀つてあり、「悪事災難のあつた時、それが何人かのせいである」という疑いのある場合、それを見頭わそうとしてこの神の力を借りる」とした話が採られている(七一・七二・七三話)。

6 『新校本全集』第十六巻年譜篇によると、一六(大正五)年五月の項に、高橋秀松(盛岡高農同級生)とともに北上山地を探訪したときの事件が載る。高橋の回想によるもので、

(略)流れがあるばかりで人家が見当らない。土橋の上でねる事にきめていたら川下の方から一老人が現われた。「オメエサンダチ、ナニシテル、こん処で寝たら狼にやられるぞ、オラノウチサオデンセ」と親切な言葉に導かれて、二人は老人について川上につづたら、大きな一軒家があつた。



という。年譜篇は「この家での体験が「丹藤川」として書かれた」としている。その「丹藤川」を先駆形に展開し、改題された「家長制度」には、

主人はもとの席へ帰ってどしりと座る。／＼どうも女はぶたれたらしい。／＼音もさせずなに撲つたのだな。その証拠には土間がまるきり死人のやうに寂かだし、主人のめだまは古びた黄金の銭のやうだし、わたしはまったく身も世もない。

という終末がみえる。宮沢賢治のこうした山野体験のなかで、「犬」との遭遇があったとしても不思議ではない。それにしても家を支配する「主人」の、その「めだまは古びた黄金の銭のやうだ」というこの遠い記憶は、「妖あやしききをなせるもの」を発見したこの詩稿のいずれかの詩層に、絶対的「畏怖」という光源を同じくして埋まり息づいているのかもしれない。

7 宮沢賢治の口語詩・童話でも、犬については、その形態や声、走りにかかわる表現は多く見いだせるが、その眼光を重くとりあげている例がほとんどない、ということも指摘しておきたい。

なお、信時哲郎が宮沢賢治の足跡をおさえてまったく異なる提案をしている。この詩稿と口語詩稿「馬が一疋」との関連を指摘し、農学校教師時代の宮沢賢治が遭遇した、農事講演会に参加できなかった不如意な農夫の、会場を吹雪のなからうかがっている瞳ととらえて、詩稿で「持ち主が人間であるということさえ示していないのは、不気味さをいっそう引き立たせようとしているからだろう」とみている（『宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈下』、宮沢賢治文語詩研究会資料二〇〇八・八）。

8 『萬葉集釋注四』集英社一九九六。万葉歌の引用も同書。

9 酒井角三郎「心象の雪―宮沢賢治における詩の誕生―」『極限の論理』所収、筑摩書房一九七〇）と佐藤通雅『注文の多い料理店』論（『宮沢賢治研究叢書』5『注文の多い料理店』研究Ⅰ』所収、学藝書林一九七五）は、雪や雪婆ゆいんご、雪童子を「宇宙」あるいは「天」に属するものと指摘し、須田浅一郎「水仙月の四日」をめぐって（『宮沢賢治研究叢書』6『注文の多い料理店』研究Ⅱ』所収、学藝書林一九七五）では、雪婆ゆいんご・雪童子・雪狼を雪を象徴する超越者のチームとみ、雪婆ゆいんごを「冷酷」というより非情と呼ぶべき自然の猛威としての雪を象徴するものである」という。

10 『民俗学辞典』（柳田国男監修、東京堂出版一九五二）「山の神」項参照。

11 現存しない。文圃堂全集の記述によるもの。

12 その「結論」に、「永久の未完成これ完成である」との宣言が「宮沢賢治一九二六年の考」として記されていたが、これはその後詩人の命題として抱かれつづけていたのである。

13 「秋のあぎと」考（『宮沢賢治論集』3所収、有精堂一九八七）。なお、阿部孝に想定される人物は『ラジュウムの雁』、『詩ノト』の「一〇五七（古びた水いろの薄明穹のなかに）一九二七、五、七、」にも登場する。

14 小倉豊文『宮沢賢治聲聞縁覚録』（文泉堂出版一九八〇）。

15 注10の小沢論は、官憲に迫られるという事実は今まで確認されておらず、詩稿上の事件は虚構である可能性が強いことを指摘

し、信時哲郎「宮澤賢治「文語詩稿五十篇」評釈下」(信時・澤田由紀子・島田による勉強会である宮沢賢治文語詩研究会二〇〇八資料)における本詩稿の評釈で、教職に就いた阿部が危険思想をもって活動したとは考えられないが、

大正九年といえは、一月には東大助教の森戸辰男が「クロポトキンの社会思想の研究」を発表したために休職処分となり、二月には九州の八幡製鉄所で一万数千人が参加するストライキが起こり、五月には日本で最初のメーデーが開催されている。東京の空気を吸った阿部が、このような雰囲気と全く無縁に大学生活を送っていたとは考えにくい。

とする。

16 末木文美士『日本宗教史』(岩波新書二〇〇六)。神道を含めた宗教の「(古層)のありかを見定め」る作業が試みられている。氏は「土着の神祇信仰と仏教との関係、あるいは個別的な神と仏の関係」をつけた「神仏習合こそ、日本の宗教のもっとも(古層)に属する形態と言うことができる」として、「(古層)が累層し近代宗教が定立してくる過程を追っているが、本論でいう神の(古層)は、神仏習合以前、古代の人々が育んできた土着の神祇信仰をイメージしている。

17 山川出版社一九九五。

18 『岩手日報』(三二・二二・二夕刊)によると、その摘発は、

県特高課並びに盛岡署では二日午前五時検事局の指揮を得て盛岡市四ッ谷町米穀商平野民次郎(二三)及び岩手医専、盛岡高農生からなる極左系の文学思想青年約十名を各自宅に寝込みを襲つて検挙し疾風迅雷的に家宅捜査して証拠品書籍等を押収ということであった。結果として治安維持法違反により起訴されたのが医専生3名、「日本共産青年同盟拡大強化の活動をなし」(岩手日報三二・一〇・二八付)たことに對して、懲役刑(執行猶予つき)が言い渡された。この間、『岩手日報』(三二・九・九付)は、被告たちの「横顔」を、否定的にはなく、

岩手医専赤化事件の内面は又一面時代の波に押し流されて踊る純真インテリ学徒達の苦悩を歴然と物語るものというリード文を付けて報道している。

19 一八(大正七)年、学友保阪嘉内が虚無思想の持ち主として学籍を除名される。二四(大正一三)年、学生の赤化を懸念する文部省が学校演劇の禁止を通達したことで農学校における演劇教育は途絶する。二七(昭和二)年か、羅須地人協会が社会主義教育をしているとの噂から花巻警察署長による事情聴取を受けて活動を縮小する。

20 注12の信時論が「これもモデルには阿部がいたのかもしれない」と感じたように、この戯曲構想は、この時代のなかに置いてみると、「ほのあかり秋のあぎとは」との接続をどうしても思わせるのである。

21 在京の岩手詩人たちと草野心平が中心となって、三四(昭和九)年八月に発足、草野心平の編集になる『宮澤賢治研究』を三五年四月の1号から三六(昭和一一)年二月の5・6合併号まで発行した。

22 杉浦静「宮沢賢治「農民芸術の興隆」中の伏字について」(大妻コタカ記念会『ふるさと』49号一九九七・三)参照。「真宗」

の伏せ字について、氏はその意図は不明としつつ、真宗と天皇家とにかかわりがあることを指摘している。

23 一八九二(明治二五)年一月、東京帝国大学教授久米邦武は、その論文「神道は祭天の古俗」が『史学雑誌』(一八九二)

から『史海』に転載されると神道家らの非難がまきおこり、三月帝国大学教授を非職となっている(近代日本総合年表第四版)。また、大本教の出口王仁三郎は、その独自の神話解釈が天皇否定につながるとして、三五(昭和一〇)年二月、不敬罪・治安維持法違反で逮捕され、翌年には大本教解散の命令がくだるといふ事件もあつた。

24 初期形第三次稿に設定された「北十字とプリオシン海岸」において、カムパネルラが「おっかさんは、ぼくをゆるして下さいだらうか」と「いきなり」いいだし「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう」とつづける。それに対して「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないぢやないの」とジョバンニが「びつくりして叫ぶ」と、「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さいと思ふ」と答えた。そのときのカムパネルラは「なにかほんたうに決心してゐるやうに見える」。

この挿話は、第一次稿以来第四次稿までほぼ引き継がれてきたこの物語主題のひとつ、

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになつたねえ、どこまでもどこまでも一緒にいかう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない。」／「うん。僕だつてさうだ。」カンパネルラの眼にはきれいな涙が浮かんでゐました。／「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」ジョバンニが云ひました。／「僕わからない。」カムパネルラはさう云つてゐましたがそれでも胸いっぱい新しい力が湧くやうにふうと息をしました。

という後半の重要場面に先立つかたちで創出され、第四次稿にも継承されることになる。「ほんたうのさいはひ」に向かう実践のありようが、まずは母と結びついて出てくる、このところに注目すべきであろう。「ほんたうのさいはひ」の内実には、母にゆるされるものという本質を具えていなければならぬ、ということなのだろうか。第三次稿が大正末年には成立していたという推定もある(『官沢賢治必携』学燈社一九八一)。とすれば、カムパネルラの決心という主題の形成は『農民芸術概論綱要』の形成期に重なつてくる。さらに、最終の第四次稿を成立させる黒インク手入れが、三一年頃かとも推定されており(同上)、その時期はこの詩稿が歌稿余白から詩稿用紙へ《文語詩稿》化される時期にも重なる。そして、その初期の手入れ過程で「はは」という存在が設定され、やがて官憲に追われ失踪した「杜司の子」が造形されてくる。そうした併走的な過程を踏まえてみると、あのカムパネルラの決心が、この詩稿にもあるいは投影しているのではないか、その可能性を思うのである。もしそうであれば、「杜司の子」の危険思想とはカムパネルラの決心と同質なものであり、「はは」も「ゆるして下さい」ものではなかつたか、と考えられてくる。

題名新設稿とみる「電気工夫」定稿開始形本文は、次のとおりである（口語訳も併せ掲げる。便宜上行形式で表示する。以下同）。

電気工夫

①（直き時計はさま頑く、  
 さはあれ攀ぢる電塔の、  
 四方に辛夷の花深き。

憎に鍛えし瞳は強し）

四方に辛夷の花深き。

②南風光の網織れば、

艸火のなかにまじらひて、

ころろと鳴らす碍子群、  
 蹄のたくひけぶるらし。

4句／2連に整えられた定稿だが、一九三一（昭和六）年前後の《文語詩稿》初期段階に、無野用紙に展開したその草稿は一枚、しかしその本文生成の現場は錯綜しているといつていい様相を呈している。

そこではまず、無題のまま、赤インクで開始して書きながらの手入れを経た後、〈了〉印がまず与えられたとみる（初期稿）。そして三二（昭和七）年以後の再編段階に入ると、赤インクによる手入れを受けたうえで、その第一連相当4行分の下部余白に鉛筆による4行分の書き込みがおこなわれ（そのとき赤インク稿は削除されていないが、鉛筆書き込み形を代案として併存させたつもりかもしれない）、それに対して横線もかかるかたちで〈写〉の符号が与えられたと仮定する。

つまり、〈写稿〉は、次の上段に示しているような、未整理な本文構成のままに、無題稿として成立したかたちである。その後、〈写〉の符号に重なるかたちでブルーブラックインクによる大幅な手入れがはじまるが、新校本全集校異の記述も参照しながらたどってみると、どうも3段階に分別できそうである。その第一段階に位置づけられるのが赤インク稿の本文傍らへの手入れで（このとき鉛筆併存形には手入れも削除もなく、ついに無視されてしまっている）、下段に掲げたのが、その本文である。

▼〈写稿〉に想定するもの

四方は辛夷の花盛りあがり「↓艸を燃すと蹄も焼けば  
 赤楊の毬果の日に黒ければ そのけぶりおぼろに青く  
 艸を燃すと蹄もけぶし 村長はひとりうなづき

▼A稿と仮称するもの

退耕

四方に辛夷の花盛りて  
 赤楊の毬果の黒ければ  
 艸火のなかにまじらひて

名与村長うなづき行けり 四方に盛る辛夷の花樹

正しき時計はそのさま頑く (下部に鉛筆で並存)

憎悪にきたえし瞳は強し

楊の花芽らひそかに熟し

蛙のたまごもほごれて啼けば

北風氷とひかりを吹きて

老いたる耕者もしづかに笑ふ

(赤インク手入れ稿に鉛筆書き込み形)

名与村長うなづき行けり

正しき時計はそのさま頑く

憎悪にきたえし瞳は強し

楊の花芽らひそかに熟し

蛙のたまごもほごれて啼けば

北風氷とひかりを吹きて

老いし耕者も笑ふなり

(写稿) 本文への藍インク①手入れ形、棒線は島田)

この〈写稿〉成立から第一段階手入れを経たA稿は、「正しき時計はそのさま頑く／憎悪にきたえし瞳は強し」という字下げした詩行をばさむ構成は変わらぬまま、「名与村長」と「老いし耕者」とが対置される構成で、命名も含めて詩句には、次のようなやや目立つ手入れがおこなわれている(傍点は島田)。

題名	↓	退耕
村長	↓	艸火のなかにまじらひて
耕者	↓	老いたる耕者もしづかに笑ふ

この推敲は、〈写稿〉本文の延長上にあるものであって、〈写稿〉成立以後もつとも近い手入れに位置づけられよう。詩の場はこれによつて、ふたつのが明らかになる。ひとつは、「名与村長」が元村長で、いまその職を退いてこの春から農耕に従事しているということ、そしてふたつめに、「老いし耕者」がそれを見てはつきりと「笑ふ」ということだ。要点は、その「笑ふ」ことが意味するところにあるのだろう。

その点については、「正しき時計はそのさま頑く／憎悪にきたえし瞳は強し」という詩句の理解にかかっているよう。実は、この詩稿には「源流」がある。『詩ノート』にみえる一〇五一番稿(一九二七、四、二八)で、無題だった。それを参照することとして、本文(最終形)を内容上分節して、場面ごとに掲げると左のとおりである。

場の状況設定	村長の行動	耕者の反応
あつちもこつちもこぶしのはなざかり	名与村長わらつてうなづき	小さな三角の田を

角をも蹄をもけぶす日なかです

やなぎもはやくめぐりだす

はんの毬果の日に黒ければ

正確なる時計は蓋し巨きく

憎悪もて鍛へられたるその瞳は強し

三本鍬で日なかに起すことが

いったいいつまで続くであらうか

水片と光を含む風のなかに立ち

老ひし耕者もわらひしなれ

この口語稿によれば、時計と瞳の持ち主はどうやら「名与村長」と考えてよいだろう。すると、頑く「正しき時計」（融通が利かないことのとえ、とみる）も、強く「憎悪にきたえし瞳」（専横な為政に対する村民の批判ものともしなかつた、ととる）も、村長時代の役人風を揶揄しているのではないか、と思える。そういう世評をいただいた人物で、しかも役人、親方然と生きてきた者が、いまさらうまく既存農民と共同体を保てるのか、それ以上に「いつたいいつまで続くであらうか」という語りは老農夫の思いにも重なるものとみると、農作業という重労働に耐えられるのか、長続きするはずがない、とみられてしまっても仕方ないところだろう。「老ひし耕者もわらひしなれ」とした「なれ」の強調的な結び方は、そのあたりの心境を反映しているとみえる。

すると、口語稿の場を《文語詩稿》に平行移動させてみると、《写稿》段階における「老いたる耕者」が「しづかに笑ふ」ところには冷笑の気配も感じられてこようし、その展開であるA稿「退耕」における「老いし耕者」の「笑ふなり」とした強調表現に至ると、口語稿にも重ね合わせられ、嘲笑の気配さえ感じられてくる。なお、「耕者も」と、いきなり並列の助詞で受けとめられているのは、「源流」たる一〇五一番稿に「名与村長わらつてうなづき」に依じて「老ひし耕者もわらひしなれ」（傍点は島田）とあった、その名残としても理解しうるであろう。これは、身の程知らずにも名誉村長が、いま嬉々として農作業に手をそめているのに対した、老いし耕者の応酬なのだ。

要するに、《文語詩稿》「退耕」の形成は、爛漫の春を迎えた田園に持ちこまれた人間関係の劇、詩の場はそれをとらえようとしていたと思える。老農夫にとっては、この春の田園に「北風氷とひかりを吹く」今日の天候の異常さに一抹の不安も抱いていたはずだが、暢気とも傲慢ともみえる退耕者の侵入で面倒はもうひとつ増えたのである。だが、そこには、いずれにも抗いようがない、という自嘲の思いもまたこめられていたのかもしれない。

2・2

それが、ブルーブラックインクによるさらなる手入れ、第二・三段階にわたるところで、詩の場は急展開する。

《写稿》・ブルーブラックインクⅠ手入れ形の余白におこなわれているものだった。《写稿》・ブルーブラックインクⅠ手入れ形の改編的推敲に向かつて、しかも延長的な態度ではないので、やや時間を経てからの定稿化に近い段階とみて、仮に定稿清書前の手入れに位

置づけておきたい。

第二段階ではまず、丸番号①②③④を与えた本文が現われる。第三段階の手入れ形も対照することとして、下段に掲げよう。

▼B稿と仮称するもの

(退耕↓・↓)電気工夫

- ・↓①(直き時計はさま頑く憎悪に鍛えし瞳は強し)

- ②↓・さあれやのぼる電柱の四方に辛夷の花盛りぬ

- ③↓②ひかりを吹きて北の風変圧函を過ぎ行けば

- ④↓・艸火のなかにまじらひて豚の蹄もけぶるらし

(用紙余白へ、藍インク②手入れ形)

▼C稿と仮称するもの

電気工夫(②手入れのまま)

- ①(直き時計はさま頑く憎に鍛えし瞳は強し)

- さはあれ攀ぢる電「柱の||塔の」四方に辛夷の花深き

- ②南風光の網織れば

- ごろろと鳴らす碍子群  
艸火のなかにまじらひて  
蹄のたくひけぶるらし

(②手入れ形に対する藍インク③手入れ最終形)

B稿の始発で、(写稿)・A稿段階の「名与村長」と「耕者」の姿が見えなくなつて、「電柱」をよじ登っているらしい行為者が現われ、それを「電気工夫」と命名して、舞台の中心人物を完全に入れ替へるのである。そして、村長の所有とみられたあの詩句も、「(直き時計はさま頑く/憎悪に鍛えし瞳は強し)」と少しととのえられ括弧でくくられて、冒頭に移されている。それが括弧でくくられたことによつて、語り手の独白らしいことが明らかになるとともに、その指示対象が、電柱をのぼる者に転じているのである。

なぜ、ここに至つて突然詩の場が転換したのか、変容の契機は本文生成の過程からは推理しようもない。ただこの詩稿には、「源流」のさらに水源にも位置するかもしれない口語稿が、もう1編ある。それを足がかりにして、その背景に迫ることができるかもしれない。それは『春と修羅第二集』の三四〇番稿(一九二五、五、二五)の下書稿二・三(赤野用紙のオモテ・ウラ)にかいま見えていた。そこでも田園を舞台に、「名誉村長」と「老いたる耕者」とが、一瞬現われて、そして消えていったのである。一瞬のその姿とは、

・草を焼かうとして／馬か山羊かの蹄も焼けば 名誉村長わらってすぎる  
・(塵を燃くとして蹄も焼せば 老いたる耕者のしづかに忿る)

(下書稿二、手入れで削除)  
(下書稿三、手入れで削除)

というものだった。ふたりがひとつの詩の場において遭遇するということではないが、「名誉村長」がやはり「わらってすぎる」のに対して「老いたる耕者」のほうは「しづかに忿る」とあって、その表情に注目すると、『文語詩稿』におけるA稿の場面とは異なりがある。ふたりのこの好対照は、なにを示しているのだろうか。

その表情を、A稿の舞台に移してみると、退耕を表現した名誉村長の笑いと、それを不快に思う老いし耕者の忿り、というふうにもみえるのだが、このふたりはしかし、口語稿の詩の場の過程では交互に現われては消えていたのであって、対峙していたわけではない。となれば、ふたりは、ある事態に対してそれぞれに「笑ひ」と「忿り」とを示したことになる。

ふたりはいったい何に反応しているのか。

三四〇番稿における「名誉村長」「老いたる耕者」それぞれの場で、本文的にほぼ異同もなく共有されているのが、

そらでは春の爆鳴銀が／甘ったるいアルカリオンを放散し 空中  
／驚やいろいろな鳥の<sup>つら</sup>綱が／ぎゆつぎゆつ乱れて通って行く 春の爆鳴銀 Ⅱ？

ぼんやりけぶる紫雲英の花簇と／茂らうとして／まづ緒く灼 地上  
けた芽を出すかつらの木 紫雲英の花簇Ⅱ田

という詩句で、空中と地上との景を並置するものだった。地上の「紫雲英の花簇」がレンゲ草が咲き布いた田圃であるのは明らかだが、空中の「春の爆鳴銀」というのがつかみにくい。これについては、木村東吉が「雷雲を意味するものであれば、午前中から積雲・層積雲が発生しているので、これが関連するであろう」として、それが稲妻と雷鳴であった可能性を示唆している。

そのイメージには惹かれるところがあるけれども、これに近接する「三二七 清明どきの駅長 一九二五、四、二一」の下書稿一手入れ形には、次のような表現があった。

六列展く春のグラウンド電柱に  
青くわななく金属線が渡されて  
碍子もみんなごろごろ鳴れば



馬はそいつを蜂かと思ひ  
汽車は触媒の白金を嘔いて（以下略）

花巻市街の光景で、「青くわななく金属線が渡されて／碍子もみんなごろごろ鳴る電柱がスケッチされている。《文語詩稿》でも季節はずれるが、「電線の叫びのひまに／うちどもり水はながるゝ」（二月）下書稿一」と、うなりをあげる電線がとらえられている。いずれも「爆鳴銀」の爆鳴にもかような表現とはいえないか。三四〇番稿の場合も、うなりをあげる電線とごろごろ鳴る碍子群のありさまを、「そらでは春の爆鳴銀が／甘ったるいアルカリオンを放散し」と表現した可能性はないのだろうか。そのような理解が許されるならば、名誉村長の笑いと老いし耕者の忿りという、対照的な反応が意味するところも、みえてきそうなのだ。

2・3

「一九二五、五、二五」とした日付が、俄然意味を帯びてくるのである。

次に示すように、花巻では温泉郷の振興策が積極的に展開した時期で、その翌月には、西花巻と花巻温泉とを結ぶ電気鉄道が全線開業するからである。

一九二〇（大正 九）年 四月 松倉温泉・志戸平温泉間、電車開通。

二二（大正一二）年 五月 台新温泉開業（二四年花巻温泉遊園地に改称）。

五月 志戸平温泉・大沢温泉間、電車運転開始。

西花巻・台間、鉄道工事着手届。

二四（大正一三）年六月頃 電気鉄道起工式、花巻温泉電気鉄道の線路買収完了。

二五（大正一四）年 八月 花巻温泉電車全線開業。

一月 大沢温泉・西鉛温泉間、電車運転開始。

台・花巻温泉遊園地計画とその実現を主導したのは盛岡電気工業株式会社（金田一国土社長、彼は盛岡銀行頭取ほかを務め、県経済界の大物である）だが、その前段階に花巻と豊沢川上流の4温泉（松倉・志戸平・大沢・鉛）を路面電車で結ぶ事業があり、さらに瀬川流域にある台温泉再開発計画の提出が花巻電気株式会社（取締役宮沢善治、父政次郎は株主だった）を中心とした地元経済人グループと町村の首長らによつてすすめられていたのを、二一（大正一〇）年に県域経済界の雄である盛岡電気が引き取ったのである（花巻電気はその過程で吸収合併された）。それを景気に台温泉の再開発は、花巻温泉という全国圏域の「温泉リゾート」の創設に向かい、その交通にはより近代的な電車による鉄道を採用して、田園のなかに急ピッチで線路と架線とが敷設されていったのである。

そうみてくると、A稿に、電柱とそれによじ登る工夫が突如現われてくるのも、必ずしも不意なことではなかった、といえるように思える。もともとそれは、詩の場に見えているものであったのに、ある人物の退耕による対立的人間関係に焦点化しようとしていた詩人の眼界からは、たまたま外れていただけであつたのかもしれない。要するに、ふたりがそれぞれに見つめているのは耕地の合間を立ち並ぶ架線の柱列であつた、という場面が浮かびあがつてくる余地を生じさせよう。

そのとき、名譽村長からすれば、懸案だつたこの地域の振興がいよいよ促進されてゆくことに、我が意を得たりと笑みをこぼすのも当然のことだつたにちがいない。たとえば、計画の段階では、

千葉節郎(湯本村長)、照井孝介(花巻町長)らが台軌道調査会を組織、運動を盛り上げた。

と、『花巻温泉物語(増補)』は二一年一月まで村長を務めた千葉節郎の存在をいい、あるいは『稗貫風土記第1巻人物篇』は、二四年四月に二度目の村長返り咲いた吉田論について、次のようにいふ。

大正の始めに当時岩手県第一と唄はれたモダン役場を建ててその中に収まり、黙々として花巻温泉を誘致、村の大財源を作つたなど、言論の人でない(以下略)

吉田論が初めて村長として在任したのは、〇六(明治三九)年二月から一〇(明治四三)年三月であるから、「大正の始めに当時岩手県第一と唄はれたモダン役場を建ててその中に収ま」るのはあたらぬように思えるが(大正始めの村長は千葉節郎である。千葉もこのとき二度目の村長で、〇五(明治三八)年五月から〇六年二月まで吉田の前任だつた)、「黙々として花巻温泉を誘致」というのが千葉前村長のことを錯誤したのでないとする、二四年の「花巻温泉電気鉄道の線路買収完了」の仕事を指しているのかもしれない。ただ、吉田論の二度目のこの村長在任は三四(昭和九)年九月までであり、詩人の存命中は現職であつた。いずれにしても、「電気工夫」における名譽村長としては、千葉節郎あたりを想定してみたくなる。

いずれにしても、花巻温泉の実現に尽力したなかに、村長がいた。けれども、篤実な老いし耕者にとつては、凶作・不作のつづいたこの年頃に村政が農民生活の直截な再興のほうではなく、遊興地の開設による地域開発、経済発展のほうを優先させようとすることに對して、苦々しい思いを抱かせられるのもまた自然なことであつたらう。

このように、ふたりそれぞれの反応の意味を、対立的なこととして一応の説明ができるのである。その説明は、A稿段階で、名譽村長が「憎悪(にくしみ)にきたえし瞳」(専横な為政に對する村民の批判ものともしなかつた)をしていた事情にもかぶさつてくることになる。県やこの地域の有力な経済人がこぞ取り組もうという一大事業に表立つた反対もなかつたらうが、資本家がわに立つて農村の危急を解決しようとする村長への批判は、いま窮乏に瀕している農民のがわには根強くあつたらうということである。

実際に、この「老いたる耕者のしづかに忿る」姿の背後に、詩人の姿を探ってみると、花巻温泉遊園地に向けて醸成された懐疑的なまなざしに出合うことになる。『詩ノート』に、「一九二七、四、八、」の日付をもつ一〇三三番稿があるが、これは花巻温泉の花壇造園に携わつた際の心象スケッチで、

今日の設計には、あの悪魔風の鼠と赤とを使ってやらう

といつて花を選択しようとするのである。あげくに「悪意」と命名、花巻温泉遊園地に対する詩人の態度を示している。ここに、花巻温泉計画が、彼の志す装景による理想的な田園建設のモデルにもなりうる反面、この時代にありがちな遊興地の悪所化もともなわれてくる現実があり、その間で苦悩している宮沢賢治の姿をとらえてもよい。

三〇年以降展開してゆく《文語詩稿》では、花巻温泉に対しては、しだいに批判的な視座を獲得するに至っている。たとえば、その初期段階に起稿し、手入れて「遊園地工作」と命名されたが、その展開形で題名を失って未定稿に置かれた詩稿がある。その第三・四連に、このとききみは千万の／人の糧もてかの原に／亜鉛のいらか丹を塗りて

(第三連)

この代あらば野はもつて／千年の計をなすべきに／徒衣ぜい食のやかららに／賤舞の園を供すとか (第四連)

とあって、詩人は、遊園地よりも「野」の「人」、ここに生きる人々の生活のほうに投資すべきだ、というのである。「きみ」とは特定個人を指してはいまい。利益追求にはしる地方資本家たちと、それに追従する地方役人たちという存在だ。農業技師宮沢賢治には、農山村の遠い将来までも見据えた農耕地などの開発・整備が喫緊の課題であるという認識が強くあった。詩人宮沢賢治にとっては、花巻温泉遊園地の問題は、農村社会が抱えている課題に立ち向かうとき、批判すべき対象のひとつとして現われてくるものであった。三一年秋からの闘病生活のなかで、「社会↓・」農村を最後の目標として「只猛進せよ」(雨ニモマケズ手帳)として、いよいよ農村社会のために立ち向かうという覚悟をあらたにし、そのもとで《文語詩稿》の再編を果たして、いま定稿化に向かおうとしているとき、この詩稿の展開が、花巻温泉の遊興地化がもたらす弊害や田園の人間関係の劇を超えて、もつと大きな課題に立ち向かおうとするのは、むしろあるべき針路だったといつてもよからう。

電柱と工夫が登場する契機は、そこにあるといえるのかもしれない。ただ、詩人がここで固執しようとするのは、花巻温泉遊園地の建設に対する批判という限定的なことにとどまるものではない、とみるべきであろう。事実、水源にも想定しうる三四〇番稿も「源流」たる一〇五一番稿も、そして《文語詩稿》の「退耕」にも「電気工夫」にも、その詩の場に花巻温泉遊園地そのものをうかがわせる要素はない。遊園地そのものへの批判には、先に引いた一〇三三番稿にみられるように、別の詩系譜が用意されていた。

2・4

この詩稿では、電柱と工夫の出現というB稿への発展によって、「退耕」から「電気工夫」へと命名にも変更があり、名誉村長と老いし耕者もそこから失せたかのように述べてしまったが、彼らは退場したわけではない。というのも、最終連には、

④ 舂火のなかにまじらひて／豚の蹄もけぶるらし

とあつて、昔からの農事始めとして草焼き作業はつづいていく。そのなかで、放し飼いの豚の蹄も焦げて煙っているらしい、とユーモアたっぷりの光景のなかにも、煙のために彼らの影は見分けがつかないふうであるが、そこに紛れてあるにちがいない。すると、電柱／電塔と工夫という存在が、それがたどりつく先にある花巻温泉の紅燈も見えぬ真昼に、退耕者をも包含したところの農民たちの眼前に立ち現われているのである。ただそこでは、名誉村長と老いし耕者の対立といった劇は、もう詩層の内部に埋められてこの詩の場からは後退している。もちろん農村内部の対立や課題が解消されたわけではない。問題は、それを超えたところにあるもののほうが深刻だ、というのであつたらう。

〈社会性〉を深くしたその視座が、大地に屹立し、また地上に林立する近代化の象徴たる電塔をとらえたのである。そこには、どのような詩の場が構築されるのか。たとえば、さらなるC稿への展開で大きく改まったのは、

② ひかりを吹きて北の風／変圧函を過ぎ行けば

(B稿・藍インク②手入れ形)

② 南風光の網織れば／ごろると鳴らす碇子群

(C稿・藍インク③手入れ最終形)

としたあたりであろう。②連の前半、上部空間を示す詩句で、後半の地上(下部空間)の景と対照化されている。そこで、「北の風」から「南風」への変換がもたらしたのは、北風(気候不順を予兆しよう)という語の侵入によって生じていた雑音を消して、田園の春という詩の場の枠組みを純化したことであつたとみえる。それは、ある意味②連の場の枠組みを透明化し、構成要素をできうるかぎりしぼりこむ、ということであつたらうか。また、「変圧函……」から「……碇子群」への変換は、②連が基本的に視覚に訴える表現であつたのを、これに音を呼びこみ、聴覚による表現性の取り込みをもたらし、舂火のけぶるその上部空間にある「碇子群」という存在の、地上景との差異化を果たして、近代化の象徴たるを印象づけているのである。

ここで気づくのは、上部空間から下部空間へと視点の移動があることだが、それは①連も同様だったのであり、「四方に辛夷の花深き」という地上の原景も、電柱／電塔と工夫のありようを受ける位置にある。つまり、近代化に向かうもの下、あるいは後に、地上の原景は位置づけられている。まるで後塵を拝するものごとく原景を生きつづけてきた農民たちの頭上に、電柱／電塔と工夫という存在がある、というその構図が、ひとつの暗示を我々に与えている。近代化が果たされようとしている一空間と、非近代をそのままに継承しつづけるしかなかった空間とが、春爛漫のこの田園に、融合するかたちではけつしてなく、乖離的にただ同居している。置き去りにされたままの農村という非近代の時空を踏みつけにして、近代化が推し進められようとしている、ということだ。電柱／電塔が屹立するほどに、

踏み台となつてゐる農村の基盤において、近代化の後れが露呈する。  
B稿からC稿へ、2行／4連構成が前後2連ずつを合体させた4行／2連形に再編成されても、近代化と非近代とが遊離している場の構築、その針路を変へることがない。要するに、この詩の場の変容を支える詩想は、(社会性)をいよいよ深くするという変質を起している。田園を舞台にしているとはいへ、非近代の場から近代化のありようを問ひかけるこれは、すでに社会詩篇に分別してもよい。定稿もまた、この段階をほぼそのままに受け容れてゆくのである。

2・5

しかし、問ひかけの内実は、農村の基盤を踏みにつつてゐる近代化批判、というところにとどまてはならないのではないか。それは、A稿では名誉村長に対するものとみられた、

(直き時計はさま頑く／憎に鍛えし腫は強し)

という人物批評の独白が、B稿以後は工夫に対するものへと移行し、しかも冒頭に置きかえられたのはどのような意図からなのか、あらためて問おうとするとき、自然と立ちあがつてくる疑念ではないかと思う。

というのも、これは工夫に対する端的な初発の印象にちがひあるまいが、たとえば近代化を担う自負、そのはつらつとした工夫像にはおよそ遠いのである。そこに並んだ「頑く」「憎」「鍛えし」「強し」ということは、こつこつとした語感をもつて強者のさまを提示するのだけれども、それらの総体がここに醸しているのは、かたさとは裏腹のもろさなのではないか。

決定的なのが、「憎」の一語であろう。彼は、電気工夫としての誇りとか余裕とかいったものを喪失しているのだ。そこにあるのは、たとへば頑固な職人氣質的な顔つきなどでなく、ただ労働に追われている者のきびしい相貌であり、まさしく近代資本の生みだした疲れた近代人なのである。彼は、この田園にわずか一年足らずで出現した架線の柱列のひとつ、直立する電塔によじ登る。その近代設備の頂上にあつて、非近代的空間を足下におさめているのだけれども、それは、勝利者という存在ではなかつた。日清・日露戦争から第一次世界大戦を経た過程で、発展を遂げてくる日本資本主義を支えてきた、「職工」と呼ばれる人々のつらなりにある下層労働者のひとりなのである。この「腫」の見つめているところは、あの名誉村長の場合に反転している。

たとえば、彼が身につけている「直き時計」は、労働の要件である時間の束縛そのものを象徴するとみえ、「憎に鍛えし腫」とは、労働環境の酷薄さ(労働条件、生活の貧しさや差別的な人間関係など)に対する抵抗の現われだ、ともみえる。語り手は、近代化が生みだした労働者階層の苦悩そのものをつかまえ、呟いている。工夫もまた、この国の近代化というありようのなかで踏みつけにされていたの

である。

ここで見逃してならないのが、近代労働者の供給を農村がまた担っていたことであろう。

実は、工夫であつて技師ではないこの「電気工夫」の出自も農民、もしくは農山村を離れざるをえなかつた若者であつた可能性がある。『詩ノート』一〇八八番稿「祈り」（一九二七、八、二〇）には、こんなスケッチもあつた（傍線は島田）。

倒れた稲を追ひかけて

これからもまだ降るといふのか

―冬鉄道工夫に出たり

身を切るやうな利金を借りて

やうやく肥料こえもした稲を

まだくしゃくしゃに潰さなければならぬのか

電気会社が

ひなかも点すこのそらのいろ

田ごとにしめも張り互し

かながらの幣さへたてて

稔りある秋を待つのに

無心に暗い雨ぐもよ

雨雲に覆われた暗い昼間に、点つていたのは花巻温泉大通りのイルミネーションではなかつたらうか。それを遠くに見やりながら、「冬鉄道工夫に出たり」して糊口を凌ぎ借金を重ねて田をまもる、そのような農民の姿がとらえられていた。農村の慢性的な疲弊、生活の窮乏が男たちの出稼ぎを必要とし、不如意のために青年の流失や娘たちの身売りを生んでいた（花巻温泉遊園地の「遊び女」たちの供給源も東北地方の農山漁村だったはずだ）。この「電気工夫」が、農村から出た者であつたとすれば、二重に踏みつけられている非近代の空間を、詩の場は現出させていることになる。

そうでなかつたとしても、近代化のがわに組み入れられた労働者と、その下には、後れた非近代空間である農村／農民たちが、無邪気な田園の春のなかに、かげ（近代を生きる労働者の苦悩）を背負い、かげ（非近代を生きる農民の苦悩）として踏みつけられる、そのような関係としてとらえられて、近代化のもたらしている二重のゆがみという問題をこの詩稿は提出している、という読みは可能なのではなからうか。

無題の（写稿）から定稿化に向かつて、詩の場の変容とともに「退耕」↓「電気工夫」という曲折をたどりながら命名も果たした、この詩稿の詩想変質は、田園生活における農村内部の対立から、近代と非近代のありようを批判的にとらえるところへ転換し、その（社会性）を拡充・深化させてゆく過程をもっているのである。やつと与えられた題名「電気工夫」は、詩の場における近代と非近代をつなぎあわせるアンカーボルトとして象徴的に機能するものであり、しかもそれが、冒頭の「直き時計はさま頑く／憎に鍛えし瞳は強し」という詩句にじかに接続する工夫によって、そのあわせめがどうやら歪んでいる、ということに気づかせられてゆく。この詩の場における詩人の命名意図はけっして軽くはない、そう考えられるのである。

題名継承稿「岩手公園」の過程については、三二年以降の再編段階に起稿したと推定する下書稿三の推敲現場から検討をしてみたい。ここには三段階の現場がみえる。まず鉛筆1による開始とその鉛筆1の手入れ、それに対する鉛筆2の手入れ、さらに鉛筆3による手入れ、という推敲過程である。その鉛筆2手入れ形に対して、詩人は鉛筆によって（写）の符号を与えて、ウル定稿の1編に選択したと推定する。そのうえで鉛筆3による手入れが、「写を避けて」（新校本全集第七巻校異）さらにおこなわれるのである。つまり、鉛筆3手入れ形は定稿清書直前にも想定されるもの、ということになる。

▽鉛筆1開始↓手入れ〔1稿とする〕

岩手公園

孤光燈は燃えそめて

〔羽虫もはやく群れたれど↓（ほの

かに↓ゆふべを）しろくいらだ

ごと〕

東はるかに散乱の

さびしき銀は声もなし

なみなす丘はぼうぼうと

青きりんごのいろに暮れ

ひとりそぼだつ高洞山は

▽鉛筆2手入れ形〔2稿とする〕

岩手公園〔1が残る〕

①なみなす丘はぼうぼうと

青きりんごのいろに暮れ

ひとりそぼだつ高洞山は

▽鉛筆3手入れ形〔3稿とする〕

岩手公園〔1が残る〕

①「かなた」と老いしタッピングは

杖をはるかにゆびさせど

東はるかに散乱の

さびしき銀は声もなし

②なみなす丘はぼうぼうと

青きりんごのいろに暮れ

大学生のタッピングは

山火の痕ぞかぐるなる

まひるを経来し分析の

酸のけぶりに胸いたみ

わがしわぶけばあやしみて

ふりさけ見ゆく園つかさ

孤光燈にめくるめき

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかにたそがるゝ

山火の痕をすぐろへり

③ 老いたるミセスタンピング

「去年なが姉はこゝにして

中学生の一組に

花の名をこそをしへしか」

④ 孤光燈にめくるめき

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかに「以下削除のまま」

(写稿)か

これを見ると、その変化の激しさに驚くほどだ。詩形が、4行/2連形にまとめられようとしていたのに、4行/4連形に引き戻されている。詩句表現も詩形も凝縮化に向かう《文語詩稿》の定型化の傾向に逆流しているうえに、「岩手公園」という詩の舞台に変化はないものの、異国から来た家族の突然の登場に驚かされるのである。

下書稿三という詩の場がどれほど劇的に変容したのか。開始形の詩語が変転してゆく過程を、手入れごとにあらためてまとめてみたのが、後に掲げる表である。(○は開始形とほぼ同文、×は削除、◎は開始形とほぼ同文の復活)。

岩手公園を舞台に、悩みを抱いた青年を遠近の外景をとらえるなかにはさみこむ、しかもその景物も青年の内景を反映させた、寂しさのただよう叙情詩として開始されたものを、鉛筆1手入れで「いらだち」にまで増幅させようとしたものの、一転、鉛筆2手入れによって削除を重ね(第一・二連)、「わが」存在を詩の舞台から隠蔽するのである。公園から遠くの山河を眺望し、また公園のなから近景である街のたたずまいをとらえて、2連構成の簡明な叙景詩を成立させている。叙情から叙景へ、そこに詩想の変質があったろうことはまちがいない。そしてこのときたぶん、鉛筆の(写)の符号を与えた、と推定する。

けれども、いよいよ定稿化に向かうなかで、この叙景詩構想は崩され、思いもかけなかったタピング一家が、その舞台に突然加わってきて、詩の場は二転するのである。盛岡バプテイスト教会牧師ヘンリー・タピングには、中学時代に英語を学び、高農時代には聖書講座に通うという交流を宮沢賢治はもっていた。「大学生のタピング」はウィラード、一八九九(明治三二)年生まれの彼が大学生であるとすれば、一家が盛岡を去る一九(大正八)年に近い頃の記憶がここに重ねられたということになる。そうした詩の場を支える詩想に、



さらなる変質があったとも当然考えられてよからう。こうした変転の様相に対して、私たちは異国からの訪問者の登場のほうに注目しながらであって、[2]稿から[3]稿に向かう詩の場の変貌ぶりに眼を奪われがちだ。しかし、後述するが、実はこの[2]稿と[3]稿との距離はそれほど遠くはないと考えられるところがある。むしろ距離は、[1]稿と[2]稿の変転のほうにあって、それも相当な落差を秘めているといえるのかもしれない。そのことから先に説明してゆきたい。

段階	開始形詩語	手入れ1	手入れ2	手入れ3
題名	岩手公園	○	○	○
第一連	弧光燈の羽虫	○	○	○
	さびしき銀雲	○	×	◎
第二連	夕暮れの丘々	○	○	○
	高洞山の山火	○	○	○
第三連	胸のいたみ	○	×	○
	わがしわぶき	○	×	○
第四連	弧光燈の羽虫	○	○	○
	街のたそがれ	○	○	○

2・7

下書稿三を再編段階の展開と推定しているが、そこに到達するまでの過程から、まずたどっておこう。それは、三〇(昭和五)・三一年の初期段階の展開に推定されるもので、「了稿」として成立した下書稿一と、その展開である下書稿二とが、いずれも無題のまま形成されている。

「わが」ことを吐露している第三連にしばってその本文の推移をみると、そこには「瓦斯」や「分析」の語がみえるところから、化学実験や分析を学んだ盛岡高等農林学校の学生(高学年であろう)、あるいは土性調査とその分析に集中した研究生の頃を題材としたもので、自伝詩篇として当初はもくろまれたものとみられる(ただし下書稿二手入れのなかには下書稿三開始形に直結するところがあり、再編段階に重なる時期におこなわれた可能性もある)。

③まひるを青き瓦斯の焰を

酸の蒸気に胸いたみ

ゆふべはひとりこゝにして

きみおもふ日の数つもりしか

(下書稿一手入れ形)

まひるは青き瓦斯の火や

酸のけぶりに胸いたみ

ゆふべはこゝに商量の

むなしき日数つもりしか

(下書稿二開始形、×印削除)

まひるを経来し分析の

酸のけぶりに胸いたみ

わがしわぶけばあやしみて

ふりさけ見往く園つかさ

(下書稿一手入れ形、再編段階に)

ここでは、まず「きみおもふ」詩篇として下書稿一が成立する。「こゝにして」とは岩手公園のこととみてよからうが、ただそれが「恋」であるとは断定できない。年譜等によってもその時期に女性の影はほとんどみえない(ただ、『文語詩篇ノート』の末尾索引メモに「農林第二年第一学期 Zweite Liebe / 果樹園」があり、その二度めの恋というものの内実は不明である)。この詩稿には、一八(大正七)年六月の歌稿数首が関連するという。すると、この時期の「きみおもふ」対象として、たとえば、その三月に虚無思想を疑われて突如学籍除名となり岩手を去っていった親友、保阪嘉内がいる。また一二月には、日本女子大学校在学中の妹トシ子が倒れ、官沢賢治は母と上京し、看病にあたっている。

次の下書稿二段階になると、「きみおもふ」ことが「商量」の日々に置き換えられている。「商量」とは、「ハカラフコト。考ヘワクルコト」(言海、ちくま学芸文庫版)で、恋愛の悩みに用いないこともあるまいが、ここでは盛岡高農卒業・研究生の前後に父との間に発生した問題、進路については、家業を継がせようとする父とそれを厭うて山師まがいの起業をも提案する子の確執があり、あるいは信仰について、浄土真宗の敬虔な門徒である父と法華経を護持し日蓮主義にも奔ろうという子との闘いがあったのであり、そうしたなやみであったとみるほうが、内容としてもむしろふさわしい。

要するに、悩みを抱きながら化学分析にたずさわっていた青春時代を呼び戻し、その記憶のいくつかについて、「きみ」への思いや「わが」ことの内実を文語によって再現することで、あのときの自分のありようを再点検しようというのではなかったか。いわば自分史の精査を果たす自伝詩篇として形成されてきたといえる側面がある。そして、それを承けて下書稿三も開始していた。それが、手入れ段階で自伝性の中核といえよう「わが」存在を隠蔽してゆくのである。

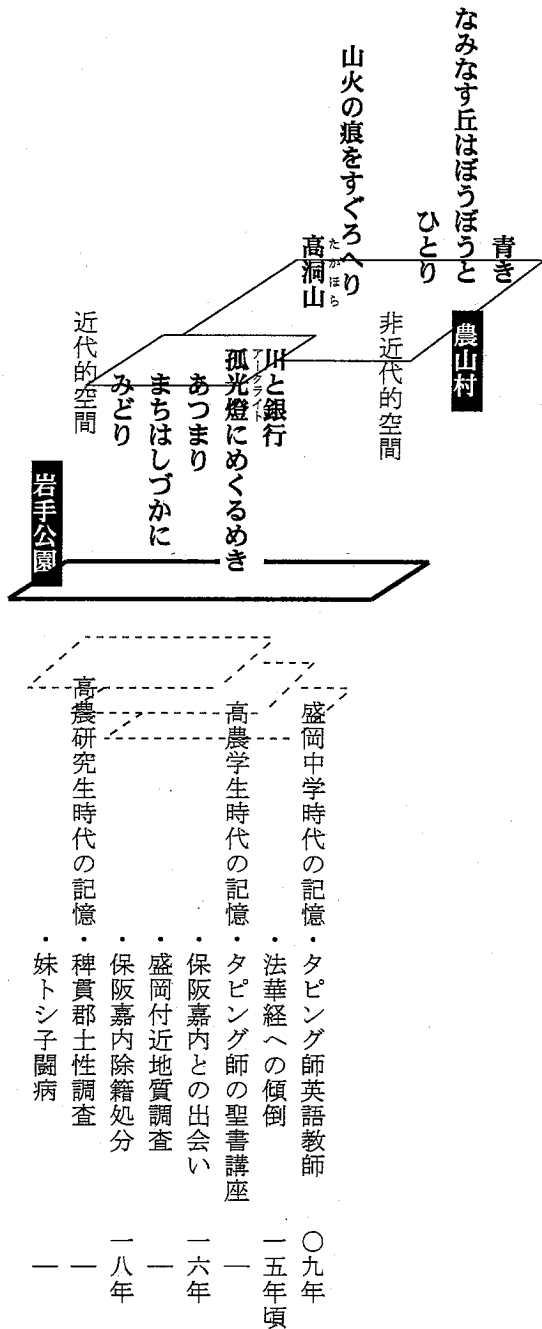
その詩想には、どのような変質が起きたのだろうか。

「わが」ことを詩の表舞台から退場させることによって、私のいる「岩手公園」から、詩の場には誰もいない(逆に言えば、誰のものでもある)「岩手公園」が出現する。つまり、開かれた近代空間としての「岩手公園」なのである。そして、そこを立ち位置にして、先に遠景をとらえ(①連)、後に近景をとらえる(②連)。このように②稿に構築された詩の場とは、どういう意味をもっているのだろうか。それに応えるためには、②稿の詩の場が緊密な対構成によって構築されていることを指摘する必要がある。

夕暮れの岩手公園という場の大枠のうえに、遠く「なみなす丘はぼうぼう」とあり、近くに「まちはしづか」にあるという光景の対置

が、①連・②連としてある。そして、それぞれの枠組みのなかにある点景や様態が、およそ対応するように配置されているのである。左に掲げている概念図のように、さまざまな対応がみられるのだけれども、もつとも対比的な意味をもつとみられるそれは、①連結句の「山火の痕をすぐるへり」と②連の起句「孤光燈にめくるめき」とであろう。

「山火の痕」とは、春になると、山仕事や農作業の開始を告げる里山の山焼きあるいは耕地の野焼きをおこなった、その痕跡のことである。盛岡の北にある高洞山(五二二峰)に「草木ノ末黒キ」(言海、「すぐる」の項)とてを発見し、村人たちが嘗んでいる細々とした生活を思いやっているのでないか。その後には、外山高原や北上山地に住まう農山村の人々の姿が折り重なってくる。それに対して、「孤光燈にめくるめき」近代公園を整えた街の生活がある。明治時代、都市にあつては孤光燈の設置は近代化の象徴だった。辺境の地方都市である盛岡では、孤光燈が整備された公園にせよ街路にせよ、昭和に入ってもなお先進のなごりをとどめ、近代の香を放つていたはずである。そこには、夕暮れのなかに青ざめて沈んでゆく農山村のこちらがわで、近代の灯しにみちびかれて美しく暮れゆく街の存在を、自覚的にとらえている詩人がいるのではないか。



自覚的とは、盛岡高等農林学校時代の憂愁の記憶をはるかに超えた地点に立つに至ったという意味である。それは、(社会性)を具えた視座に立つことであり、官沢賢治における(私的)な記憶は詩の場を形成する詩層の底部に埋められて、その表層に現出したのは「非

私的に表現した」世界である、ということだ。貧しさから抜け出せようもない非近代的時空と、豊かさが求められようとしている近代的時空との落差、あるいは格差を詩人は眼前にとらえている。そこには、〈自伝性〉から〈共同性〉・〈社会性〉へと向かって舵を切った、詩の場とそれを支える詩想の相当大胆な変節、転換があつたとみてよいであろう。そうした詩想の変質をよしとした詩人は、この段階で〈写〉の符号を与えたのであつたらう。

2・8

しかし、こうして詩想の深まりを達成したはずの詩人は、さらに手を入れてゆく。重なるが、**2**稿・**3**稿に定稿も併せて掲げよう。

**2** 鉛筆2手入れ形

岩手公園 **1**が残る

① なみなす丘はぼうぼうと  
青きりんごのいろに暮れ  
ひとりそばだつ高洞山は  
山火の痕をすぐろへり

**3** 鉛筆3手入れ形

岩手公園 **1**が残る

① 「あなた」と老いしタピングは  
杖をはるかにゆびさせど  
東はるかに散乱の  
さびしき銀は声もなし

② なみなす丘はぼうぼうと  
青きりんごのいろに暮れ  
大学生のタピングは  
口笛軽く吹きにけり

③ 老いたるミセスタンピツグ  
「去年なが姉はこゝにして  
中学生の一組に  
花の名をこそをしへしか」

**2** 孤光燈にめくるめき

**4** 孤光燈にめくるめき

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかにたそがる

(写稿) 想定本文)

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかに「以下削除のまま」

(写稿) 手入れ形)

(写)の符号を避けた③稿の形成が定稿清書の直前に近いかとみえるのは、それが定稿本文にほとんど同じであることとともに、最終詩句が書きさしのままに置かれているからである。そうであれば、定稿用紙を眼前にしながら、どうしてこうも突然、しかも十数年も前の、タピングという外国人親子との記憶を呼び起こし、詩の場の主役に組み込んだのか。

その契機は不明だが、その意図は明らかである。

この詩稿が「岩手公園」と命名された段階から、詩想の変質は起きている。その変質が、(自伝性)から(共同性)・(社会性)へと視座を移したことによつてはかられた、拡充・深化という性質のものであったことを前節でみたが、タピング親子は、その「岩手公園」がまつている(共同性)・(社会性)を、さらに浮かびあがらせることによつて詩想の深度を増すために、撰びとられたと考えられるのである。②稿がとらえた、非近代的時空と近代的時空との落差あるいは格差の意味を、詩人はあらためて見つめてゆくのだ。

盛岡城址が岩手公園として開園、一般に開放されたのは、〇六(明治三九)年九月一日。このとき、宮沢賢治は一〇歳である。前年は東北三県大凶作の年であり、新校本全集第十六卷下年譜の〇六年には、

三月 東北地方大飢饉。宮城・岩手・福島県の窮民を公営土木・耕地整理・植林事業・漁網製作などに就業させ救済をはかる  
とあるが、その四月に始まった岩手公園の造営も県がおこなった「土木事業施行」による救済策であり、総工費2万1467円、労働者数は述べ2万2223人であったという。近代市民の自由に憩う場として成立した岩手公園は、餓えに襲われた非近代に生きる人々の救済をも担った場なのである。

タピングが、辺境のこの地方にキリスト教の伝道のために入ったのが、〇七(明治四〇)年である。それから十年あまり妻ジュネヴィーヴとともに、未開の地に文化や教育における近代化の礎を築く一翼を担いつづけてきた。そこに詩人が敬意さえいだいていたのは、ふたりの気品ある「老い」の指摘にうかがえるように思える。そのように日本の辺境にあってその近代化に尽くした異国の家族が、近代的公園として整備されてきた岩手公園に憩うのだ。(写稿)がたどりついていたのは、まさにそこが近代空間そのものであることを強調する場ではないだろうか。

岩手公園に憩うタピング親子、その空間だけをとりだしてみよう。

「かなた」と老いしタピングは

杖をはるかにゆびさせど

大学生のタッピングは  
口笛軽く吹きにけり

老いたるミセスタンピング

「去年なが姉はこゝにして

中学生の一組に

花の名をこそをしへしか」

孤光燈イクライトにめくるめき

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかに……

安らかで静かな光景である。この場を核に定稿化に向かうわけであるが、

この詩は文語詩中の最高に位する優れた作品の一つであると思ひます。タッピング一家の散策の叙景をこれ程如実に描写した手腕の影

には矢張り彼独自の凝縮した鋭い眼が感ぜられます  
という指摘をしていたのが吉本隆明であった。

「若い」た夫妻の物腰の優しさ、口笛を吹く青年の軽やかさ。彼らをとりまいている時空は、燦めいている灯りとつややかに揺れている緑樹、そして涼やかにながれてくる川の風によって満たされている。彼らには、ゆったりとして豊かな精神と、それを支えうる生活がある。それこそが近代化のめざしている理想である。

こうしたタッピング一家の登場によって「岩手公園」は、たとえは、「ゆるぎない構図と豊かな色調によって、美しいタブロー」として見事に仕上げられた「一編ひとまは」としても受けとられてきた。けれども、その「手腕の影には矢張り彼独自の凝縮した鋭い眼が感ぜられ」という、吉本隆明の暗示に立ち止まらないではいられない。

その眼は、そのとき、公園から「かなた」と指示されたところ、こなた岩手公園に比べれば、「ぼうぼうと」して拡がる「さびしき」光景に向かっているのである。それは、**1**稿にあった東の北上山地をみやる望遠の視点を復活させつつ、漠然としたかたちで提示された東北／岩手の風土とそこに営まれているもうひとつの生活空間だった。

かなた

東はるかに散乱の  
さびしき銀は声もなし  
なみなす丘はぼうぼうと  
青きりんごのいろに暮れ

岩手公園

孤光燈にめくるめき  
羽虫の群のあつまりつ  
川と銀行木のみどり  
まちはしづかに……

その眼がとらえたところは、  
ひとりそばだつ高洞山は／山火の痕をすぐろへり

1稿段階に比べると、その痕跡に農山村という非近代的な空間を示していよう、  
という手前にあつた点景を詩の舞台から退場させ、詩の場に占める面積も四分の一に圧縮されている。この風土と生活に向けられた視線は、詩想としての強調法からいえば後退している。けれども、この後退は、詩想の衰弱を必ずしも意味しない。それが、ここではない「かなた」という認識を、2稿の①連が遠景から開始されたのと同じ位相で、やはり冒頭に置いて、こちらの世界とは隔絶した存在であるということが示唆されているのである。ここ、夕暮れをめくるめく岩手公園という象徴的近代空間からは、いわば切断されたところに、ぼうぼうと蒼ざめて暮れなすむ丘丘がある。集中する光と拡散する光とは、かたや点りつづけるものであり、かたや滅しゆくものである。それぞれを支配している静寂の感じは、そのまま時空の明と暗とを歴然とさせるのだ。

それは、明治以降のこの国の近代化がもたらした格差の構図そのものなのではないか。  
その定稿は、次のとおりで、ほぼそのままを継承するのである。

岩手公園

① 「かなた」と老いしタピングは、  
杖をはるかにゆびさせど、  
東はるかに散乱の、  
さびしき銀は声もなし。

② なみなす丘はぼうぼうと、  
大学生のタピングは、  
青きりんごの色に暮れ、  
口笛軽く吹きにけり。

③ 老いたるミセスタピング、  
中学生の一组に、  
「去年こぞなが姉はこゝにして、  
花のことはを教へしか。」

④ 孤光アイダライト燈にめくるめき、  
川と銀行木のみどり、  
羽虫の群のあつまりつ、  
まちはしづかにたそがる。

しかし、ここ、岩手公園が、大凶作による窮民対策として誕生したという事実をやはり見過ごしてはならないだろう。岩手公園という小さな近代空間の基底にはこの地方の飢饉の風土というはるかな時空が蔽にあり、その底部とつながった先に露出しているのが、「ぼうぼうと」して「さびしき」「かなた」の景なのである。

タピングがそのような意識をもって指し示した、といたいのではない。むしろ夕陽に照らされた山景に心が動いた異邦人の、何気ない仕種として無難に提示されたところに、すでに②稿における風景そのものの対比による現実認識にとどまらない詩想の蠢きが秘匿されているように思えてならない。タピング一家の登場は、「岩手公園」という時空の近代性の証明であるとともに、小さなその近代空間が踏みしめている非近代的空間の広がり眼を向けさせる無意識な契機として仕組まれていると考へてはならないか。その命名に固執した詩人がたどりついたのは、格差を拡げてゆくこの国の近代化の一端を、タピング家族の登場によって指し示そうと詩人はしている、そのような詩想を秘めているのではないか、ということなのである。

2・9

以上の2編について、まとめておく。

「電気工夫」については、すでに吉本隆明が「彼自身（宮沢賢治、島田注）の人間は少しも顔を出さないのですが、それにもかかはらずヒューマニステイクな思想性が一すぢ底流してゐます」として、その一例としてあげていた。本稿の読解は、彼のいう「ヒューマニステイクな思想性」を説明するひとつの試みとして位置づけられるのかもしれない。その詩の場に題名さえ示せなかつた（写稿）の地点から、詩の場も変容し、それを支える詩想も変質してゆくが、それは、（社会性）を視座にとりこむことによつて果たされた、（写稿）段階の詩想を拡充・深化する方向で、近代化を象徴する「電気工夫」という命名に定着する定稿までたどりつけたと考えられる。



それに対して、「岩手公園」は（写稿）段階からその命名を継承しつづけた詩稿である。だが、詩の場の変容は、その振幅を激しくしていた。そこでは、詩想の大きな転換とかがあった。まず（自伝性）をその詩層のなかに沈めることで、詩想は（共同性）・（社会性）の視座に立ち、農山村と都市という風景の対置を果たした。そのうえで、異邦人を舞台にあげて岩手公園の近代性を強調して、飢饉の風土を「かなた」へと追いやるのである。自伝詩篇から風土詩篇へ、そして都市の生活詩篇へ。詩人の眼は岩手公園の、この地方ではなかなば突出した近代性のほうに集中してゆくようになっている。ただ、この街で宮沢賢治自身も最先端の農学（農芸化学）を学び、ここを拠点に地域の地質踏査に向かいながら、青春期の悩みを抱えてこの公園を彷徨したときもあつた。近代化の恩恵に浴した自らの体験があつて、詩人宮沢賢治の生涯のゆくえが定まっていたのはまちがいあるまい。

読み解いてきたとおり、ふたつの詩稿ともに、近代的時空と非近代的時空との、文字どおりその落差によって場面を構成するという詩の場にたどりついているのであつた。そのときそこでは、非近代的時空を近代的空間からとらえられている、ということが要点であるのかもしれない。けれども、この街で得たところのものをもって、非近代的時空の変革に挑んできたにもかかわらず、現実にはどれほどのことも果たせていないという事実がある。詩の場にただよう調子のひとつは未達感ではないのか。

たとえば、「かなた」における詩人のまなざしは、タピングのいかにも充足したまなざしの陰で、実は無力である。「社余農村を最後の目標として／只猛進せよ」（雨ニモマケズ手帳）という覚悟を承けた再編段階以後の詩人の、拠つて立つ基軸は確かに非近代的時空のわにあるのだが、〈詩的実践〉というかたちでしかそこに立ち得ないという、その境界を自覚してもいたはずなのである。田園詩篇のなかで、そして生活詩篇のなかで、この国の近代化のありようを批判的に問い、その（社会性）を色濃くにじませてゆく過程には、詩人宮沢賢治のこの（詩的実践）に懸ける最後の熱情が深く、そして静かにこめられようとしている、とみるのである。

（注）

- 1 宮沢賢治記念館蔵自筆原稿の精密複製による。資料篇 i 参照。
- 2 黒塚洋子「電気工夫」（『宮沢賢治文語詩の森第二集』所収、柏プラノ二〇〇〇）が、『詩ノート』の一〇五一番稿を源流として指摘した。ここでは電気工夫という要素は入り込んでいないので、氏は「源流」として把握している。
- 3 注2の論で、前者を「几帳面だが頑固で融通がきかぬ風にみえる」とし、後者を「周囲から憎悪の目を向けられるような経験が何度もあつて、その度に男は鍛えられていった」と推量している。
- 4 『春と修羅第二集』の三四〇番稿（一九二五、五、二五）の草稿。

三四〇 瓔珞節 一九二五、五、二五、  
にはとこが  
月光いろに咲いたので

三四〇 一九二五、五、二五、  
あちこちあをじろく接骨木が咲いて  
鬼ぐるみにもさはぐるみにも

鬼ぐるみにも

まばゆい青や緑金や

嬰珞がみなかけられる

草を焼かうとして

馬か山羊かの蹄も焼けば 名誉村長わらってすぎる

そらでは春の爆鳴銀が

甘ったるいアルカリイオンを放散し

驚やいろいろな鳥の廻マユが

ぎゅつぎゅつ乱れて通って行く

ぼんやりけぶる紫雲英の花簇と

茂らうとして

まづ赭く灼けた芽を出すかつらの木

(下書稿二開始形)

5 「創作日付の日の気象状況」『宮澤賢治《春と修羅第二集》研究—その動態の解明—』溪水社二〇〇〇)。

一九二五 △三二七下—(赤野・手入れ)

二七 —△一〇五一(詩ノート)

二八

三〇 —△三四〇下二・三(赤野)

三一 —△「二月」下書稿一(22系)

三二

三三

三三

△「電気工夫」③手入れ(無野)「ころろと鳴らす碍子群」

「春の爆鳴銀が／甘ったるいアルカリイオンを放散し」  
「電線の叫おとびのひまに／うちどもり水はながるゝ」

「わななく金属線が渡されて／碍子もみんなころろ鳴れば」  
「。」

青だの緑金だの  
まばゆい巨きな房がかかった  
(塵あぐたを燃やすと蹄も焼けば 老いたる耕者のはるかに忿る)  
そらでは春の爆鳴銀が  
甘ったるいアルカリイオンを放散し  
驚やいろいろな鳥の廻マユが  
ぎゅつぎゅつ乱れて通ってゆく  
(塵を燃くとして蹄も焼せば 老いたる耕者のしづかに忿る)  
ぼんやりけぶる紫雲英の花簇と  
茂らうとして  
まづ赭く灼けた芽を出す桂の木  
(下書稿三開始形)

とあって、三四〇番稿は、三二七番稿「碍子もみんなころろ鳴れば」と「二月」の「電線の叫おとびのひまに」との間に位置づけられ、電線や碍子が鳴動するという詩人の感性帯に含まれている。

7 大原皓二「花巻温泉創業と宮沢賢治のかかわり」(宮沢賢治学会イーハトーブセンター主催冬季セミナー「宮沢賢治と温泉II」資料二〇〇六・一一)による。

8 花巻温泉建設の経緯、規模、評価などについては、岡村民夫『イーハトーブ温泉学』(みすず書房二〇〇八)の「I 潜む湯治場」・「II 華やぐ温泉リゾート」に詳しく説かれている。

9 『花巻温泉物語(増補)』は、佐々木幸夫著、熊谷印刷出版部一九九六。『稗貫風土記第1巻人物篇』は、八木英三編一九五一。大正時代の湯本村の歴代村長は次のとおり。

一〇年	一一年	一二年	一三年	一四年
千葉節郎	一杉村孫左衛門	二高橋竜蔵		四吉田諭

千葉節郎も吉田諭も、もともと地域の有力な農民であり、農会や産業組合の役職に就いている(『岩手県稗貫郡湯本村誌』の付録「湯本村名譽録」、三田憲編湯本村役場一九二〇)。彼らの場合の「退耕」は、本業に復帰する、あるいは公務の傍ら農耕にいそむ姿をも意味する可能性がある。吉田諭の人となりの一端として、『稗貫風土記第1巻人物篇』に、

…村会と村長は二十余年に渉つて殆んど連続当選、大正昭和を通じて村の王様であった。…

…瘦躯怪面「湯本の蟹」の仇名を取つた。正に平家蟹の甲羅の様な怪面の持主であつた。法被を着、モンペを穿き、更に御丁寧に五六歳の孫まで背負はされて花巻の町村長の集会に出て来たものである。…

昭和四年花巻組合中学校創立運動の当時、花巻町以外の負担金が二千四百円、…金銭のこととなれば表面作つて誰も発言する者が無い。すると真先に吉田が立つて「湯本は二百円出す、あとは可然」とこれ文発現した。これに依つて他も否応なしにスラスラと決定した。当時の二百円は今のやや十万円、村会にも計らず一断を以て決する所この人の信望ならでは出来得ない筈当である。昭和九年七十七歳の長寿で大往生を遂げた。

という紹介がある。昭和九年の逝去ということは、二度目の村長を死ぬまで務めたということである。現職でありながらもまさに「名譽村長」と言うにふさわしい人柄のようにも見える。ただし、その剛胆さに対する「この人の信望」という評言は著者のものであり、それを喝采した村人もあつたにちがいないが、疎んじた村人がいなかったということでもないだろう。なお、二四年四月に杉村孫左衛門が村長就任を認可されたが、同月二九日に吉田諭が村長就任を認可されている(『花巻市歴史年表』、花巻史談会二〇〇五)。その経緯を調べてみる必要がある。湯本村歴代村長に関する資料は、岩手県立図書館の佐藤尚子氏によって示されたものである。感謝したい。

10 さらに、同日付の一〇三四番稿には、  
毛布着て／また赤き綿ネルのかつきして／八時始めの学校に行く子ら／遊園地近くに立ちしに／村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ

と、衝撃的な発見もしている。花巻温泉が遊興地としての機能を積極的に整備していた、ということである。ただし、花巻温泉計画はみごとに成功し、全国的なリゾート地となって、村の、地域の「大財源」のひとつになっていったのであり、世界戦争に向かつていた当時の日本が、国家的な政策として農村を人材と物資を「搾取」する場としていたとき、国策に逆らわずにそれでも農村を活性化しようとするひとつの手法として、地方経営を担うこの人たちが描いた戦略的なリゾート都市構想そのものは高く評価すべきであろう。その点では、宮沢賢治は農民のがわにすり寄りすぎている一面があるといえる。

11 注8の岡村論で、氏は「異稿のたぐいを別にすれば」として、

- ・ 四〇九 「冬」 (一九二五、二、五)
- ・ 一〇三三 「悪意」 (一九二七、四、八)
- ・ 一〇三四 「」 (一九二七、四、八)
- ・ 一〇五五 「」 (一九二七、五、三)
- ・ 一〇五七 「」 (一九二七、五、七)

・ 「遊園地工作」 文語詩稿未定稿

という6編を「花巻温泉に対する批判を含む賢治の詩」と指摘している。

12 『春と修羅』に「電線工夫」(一九二二、九、七)という作品があった。そこで工夫は、

でんしんばしらの気まぐれ罫子の修繕者／雲とあめとの下のあなたに忠告いたします／それではあんまりアラビアンナイト型です／からだをそんなに黒くかつきり鍵にまげ／外套の裾もぬれてあやしく垂れ／ひどく手先を動かすでもないその修繕は／あんまりアラビアンナイト型です／あいつは悪魔のためにあの上に／つけられたのだと云はれたとき／どうあなたは辯解するつもりです

これは豊沢町から豊沢橋を渡った「花巻大三角路」に敷設された、「花巻グランド電柱」と詩人が呼ぶその罫子を修理している姿である。注2の論で黒塚氏はこれを「マジカルなこの仕事に従事する工夫がユーモラスに描かれて」いると受けとる。確かに、『春と修羅』時代には「電線のオルゴール」(「ぬすびと」)を聴こうとする詩人がおり、電気工夫とのいわば幸福な出会いの記憶もあったが、「罫子」を「悪魔のために」「つけられたのだと云はれたとき／どうあなたは辯解するつもりです」という詩人の態度には、ただユーモアだけでない「でんしんばしら」への視線も感じさせるところがある。

13 『近代日本総合年表第四版』によって、全国の同盟罷業と小作争議件数をみると、

	二四年	二五年	二六年	二七年	二八年	二九年	三〇年	三一年	三二年	三三年
同盟罷業	295	270	469	346	332	494	763	864	778	525
小作争議	1532	2206	2751	2052	1866	2434	2478	3419	3414	4000

という状況である。いずれも三〇年以降激増をみせた。三三年六月、大審院が労働争議の場合にも暴力行為等処罰法の適用があるとした判決を出しているから、労働者と資本家との対立が過熱してきていたことが推測される。労働者がわはそれほど追いつめられていたのである。たとえば、成田龍一は次のような事件を指摘する（『大正デモクラシー』、岩波新書二〇〇七）。

富士紡川崎工場の争議では、応援に駆けつけた組合員が工場内の煙突によじ登り、一三〇時間も居座る「煙突男」となり、警官もてこずる事態となった（『東京朝日新聞』一九三〇年一月一七日）。

なお、「直き時計はさま頑く」という表現については、時空を異にする現代という地点からも、その理解へのてがかりが発せられている。考えさせられ、二〇〇八年二月八日 付『朝日新聞』の「朝日歌壇」に、「ホームレス・公田耕一」の次の歌が初入選した。

（柔らかい時計）をもちて炊き出しのカレーの列に二時間並ぶ

米国に端を発した金融危機が世界的経済不況をもたらしたなかで、日本でも一〇月以後「派遣切り」というリストラが全国を席卷した。公田氏もその犠牲者ではないのか。突然職を喪い、「さま頑く」「直き時計」をも失った労働者の手に、いまあるのは「（柔らかい時計）」だった。暖かな人間関係を回復しても、時間にもう縛られない、ということが、必ずしも自由な心身をもたらすのでない。近代以後の労働者がおかれた不安な境遇は「憎に鍛えし瞳」をもちつづけているのであり、現代に至ってもときに強く噴出する。

14 こうしてこの詩稿上から「退耕」とした命名は退場するが、鉛筆による〈写稿〉に後れて、鉛筆〈写稿〉の定稿化の簡かとも想定されるブルーブラックインクによる〈写稿〉の追加があった。そのなかに、やはり「退耕」と題していた詩稿があり、こちらは「退耕」のままに定稿化されてゆく。問題の定稿が存在するので、「電気工夫」の「退耕」がその命名を嫌って変容に向かったとはいえない。定稿「退耕」の開始形は、次のとおりで、

退耕

①ものなべてうち訝しみ、 こそ粗き朋らとありて、

黄の上着ちぎるゝまゝに、 栗の花降りそめにけり。

②演奏會せんとしらせ、 いでなんにはや身ふさはず、

豚はも金毛となりて、 はてしらず西日にかくる。

①連では既存農民となかなか和めぬ退耕者があり、②連は「文化」的な集いにももう参加できる身の上でないことを吐露するものにみえて、これは「名誉村長」の退耕とは次元を異にしている。農学校教師を退いた宮沢賢治が、農耕自炊の独居生活を試みた時の姿を髣髴とさせるものだ。ただ、有力商人の長男による退耕が、既存農民になかなか受け入れられがたく、農耕作業が、音楽会に出かけるような余裕を許さぬ厳しいものであることをうかがわせる点で、「名誉村長」の退耕とそれを笑ってみていた「老い

し耕者」との構図がまったくあてはまらないというものでもない。この退耕者も「名誉村長」も、既存農民からすれば、信用ならないのである。すると、詩人は「電気工夫」の「退耕」で、まるでひとごとのように「名誉村長」の退耕を突き放し批判しようとしていたわけではない。詩人自身もまた痛みをもって、「老いし耕者」のまなざしを身に受けていた、と考えられてくる。

15 島田『文語詩稿叙説』の第3章〈写稿〉論で、下書稿三に「岩手公園」という題名が与えられていないという錯誤のままに分析をおこなっている。本稿はそれを改訂するものである。

16 諸家にこの指摘があるが、島田も『文語詩双四聯』の成立（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第28巻一九九四・一二）で、『校本宮澤賢治全集』をテキストに、『文語詩稿』が定型に至る過程の詩形変化を分析して、詩形の圧縮に向かう大きな流れがあることを確認した。

17 夫妻は〇七年から一九年まで盛岡に滞在（新校本全集第十六巻年譜）、Henry・Topping は盛岡バプテリスト教会牧師として、夫人 Genevieve は教会附属の盛岡幼稚園創立者として活躍（岩手公園詩碑）。宮沢賢治が〇九（明治四二）年盛岡中学一年の一学期までヘンリーは英語教師としていたし、一五（大正四）年高農一年のときには聖書講座を聴講したという（新宮澤賢治語彙辞典）。

また、盛岡幼稚園は〇九年設立認可、岩手県最初の幼稚園である。子供にニューヨーク生まれの姉 Helen、東京生まれの弟 Willard があった。Helen については、吉田敬二が小林功芳論（「タッピングの家の人々」、『日本英学史学会』21号）によって「盛岡中学で英語を教えて」いたとし、中学の英語教諭長岡拓が「英会話の練習のためヘレンを招いて、学生たちと岩手公園に行きその間絶対に日本語を使わせなかったという話」を紹介しているが（「岩手公園」鑑賞、「宮沢賢治文語詩の森」所収）、未詳、Willard は父同様日本で宣教師として活動した。

18 『新校本全集』第七巻校異に、『歌稿（A）（B）』の「大正七年五月より」という制作期の見出しによる歌群のうち652〜656番歌について指摘がある。たとえば、

暮れざるに／けはしき雲のしたに立ち／白みいらだつ／アーク燈かな。（653）  
などといったもの。注16の吉田論は「下書稿二までは、短歌の「険しきいらだち」が主調であった」とする。

19 『文語詩稿』の初期段階では、自らの過去の事件を文語という変換装置によって再点検する、自分史精査がひとつの目的であったという仮説をもっている。注14の同書第1章初期論の1節「前」論／その発生を参照されたい。

20 小沢俊郎「疾中」と『文語詩』（『宮沢賢治論集3』所収、有精堂一九八七）が、次のように指摘していた。  
私的体験を非私的に表現した（『文語詩』）の中に、読者は賢治のいない賢治の生涯を読みとることができる。作者からいえば、他を描くことが同時に自分を描くことであった。

21 山火が本文に現われてくるのは、下書稿一開始形に「高洞山の焼け痕は／「？・」尊菜にこそ似たりけり」とあるところからである。つまり、当初から詩人には人々の営みが見えてはいたのだ。けれども、「わが」ことのほうが初期稿では課題だったとい

うことである。「山火」を題名とした口語稿に、『春と修羅第二集』の四六番稿（一九二四、四、六、）と八六番稿（一九二四、五、四、）がある。四六番稿については、栗原敦（「加害」の影を―「山火」再読）『宮沢賢治 透明な軌道の上から』所収、新書房一九九二）に分析と考察がある。氏は、

作品の初発の時、作者宮沢賢治は、自分が加害者の位置に押し上げられるような思いで「坎坷な」「村人たち」「山の部落の人たち」を見つめた。（中略）けれども、その後の生涯の苦しい営みの末に、最晩年に近く、定稿として整理を果す際には、ついに現実を現実としてたじろぐことなく厳しく受けとめて示す境位にたどりついたのであった。

と論をしめくくっている。山火という現象をとおして、農山村に生きる人々の苦悩を口語稿でも詩人は見つけているのである。八六番稿のほうは、やはり夕暮れに、眼前に広がる田園の風物を、思い出したように山火を遠く見つめては、克明にスケッチしている。人々への関心は、山火が「あつちもこつちも燃えてるらしい」と気づいたとき、「古代神楽を伝へたり／古風に公事くじをしたりする／大償つぐなひや八木巻やぎまきの／小さな森林消防隊」を想起するあたりに現われている。

22 『昭和九年岩手県凶作誌』（岩手県一九三七）に、過去の大凶作を振り返る「明治三十五年及三十八年凶作概説」があつて、その「第二節明治三十八年」の「救済施設」に「土木事業施行」の項があり、次の記述がある（傍線島田）。

土木事業は多罹災民の使役に依り最も多く救済の効果を挙げ得べきに鑑み、三十九年度分の県債償還を繰り延べ之に通常予算より三万円を編入し合計十一万一千七百五十三円を以て国県道修繕其の他の土木事業を起し、別に生業扶助費より七千円を補助して岩手公園を築設し、九千円を砂利採取に、六百円を招魂社移転費に支出した。

『岩手県史年表』の公園開園にかかわる記事に「救済」の語はないが、たとえば『岩手県の百年』（山川出版社一九九五）の年表には「凶作対策事業で岩手公園開園」と指摘がある。なお造営経費等の指摘は一般向けパンフレット「岩手公園ものがたり」（櫻山神社二〇〇五）に示されているところから引いた。

23 「孤独と風童」（未発表一九四五）。『初期ノート』（光文社文庫版二〇〇六）によった。

24 須田浅一郎「文語詩」「岩手公園」の生い立ち（『宮沢賢治に酔う幸福』日本図書刊行会一九九八）。

25 「再び宮沢賢治の系譜について」（未発表一九四五）。『初期ノート』（光文社文庫版二〇〇六）によった。

3・1

〈写稿〉が無題であったのを定稿にも継承した2編について、まず「毘沙門の堂は古びて」から迫ってみたい。

この詩稿には、その始発として、初期段階に（丁）の符号が与えられた下書稿一がある。

これは22系用紙にブルーブラックインクで起稿しているので三一（昭和六）年前後からと想定するが、まずその開始形と手入れ最終

形とを掲げる。題名はない。

マドンナ像のさまなして  
母みどり児をうちいだけば  
そらしろくして桜は遷り  
川は十里をすべりて暗し

をちこち小祠に祀れる像は  
をのにもまことの宝ととなへ  
わづかにながるゝ草火のはてに  
梨またま白く花咲きちりぬ

中ぞらうかべるひとひらの雲は  
蓋とも見えたる椀とも見ゆる  
その児の末をば古ふに似たり

(開始形)

マドンナ像のさまなして  
母みどり児をうちいだけば  
そらしろくして桜は遷り  
川は十里をすべりて暗し

をちこちの小祠祀れる、幾丈の毘沙門像の  
うら青き草火のなかに  
はや千の春を経ぬれば  
梨白く花咲きちりぬ

中ぞらにうかべる雲の  
蓋やまた椀のさまして  
みどりこを占ふといふ

(最終形)

ここでひとつだけ注意しておきたいのは、当初は子を抱いてその健康を地域のそここに祀られた祠の像に祈る母親像に焦点があったのに、手入れ段階でどこかの「小祠」の、しかし「幾丈」に及ぶ「毘沙門像」が現われてきたことである。それが「はや千の春を経ぬれば」ということになる、該当する像も思い浮かんできそうだが、これを受けて、定稿の成立にかかわってゆく再編段階があつて、3段階の過程を経ているものと想定される。

三二(昭和七)年前後に、下書稿一の用紙ウラ下半分に、下書稿二が鉛筆によつて展開した第一段階。その鉛筆手入れ形に対して(写)の符号が与えられたと考えられる三三(昭和八)年前後の第二段階。そして、三三年六月以降の定稿清書の前に、同じ用紙の上半分の空白にブルーブラックインクで下書稿三が記された第三段階である。それぞれの本文を次に掲げる。この段階も命名はない。

▽下書稿二開始形

▽下書稿二手入れ形

▽下書稿三(手入れなし)



おこりあるみどりごを負ひ  
そらしろく桜はうつり  
川水はすべりてくらし

うら青き草火のなかに  
毘沙門の像は年経て

梨白くはな咲きちりぬ

夜ごと来てかあまの邪鬼

あまの邪鬼押へたまへと

いくそたび母はぬかづく

中ぞらにうかべる雲の

蓋やまた椀のさまして

みどりごのはてをうらなふ

〔1〕稿とする

中ぞらにうかべる雲の  
蓋ダイやまたまり椀のさまなる

毘沙門の堂は古びて  
梨白く花咲きちれば

あまの邪鬼払ふと母は  
みどりごを負ひて礼せる

川水はすべりてくらく  
草火のみほのに燃えたれ

〔2〕稿とする、(写稿)と想定)

「中ぞらに：」の詩句2行の頭から本文冒頭に向かつて矢印の導線があるので、一連をなしていた「川水は：」の詩句2行と分離した。

毘沙門の堂は古びて  
梨白く花咲きちれば

胸疾みてつかさをやめし  
堂守の眼やさしき

中ぞらにうかべる雲の  
蓋やまたまりのさまなる

川水はすべりてくらく  
草火のみほのに燃えたれ

〔3〕稿とする

この過程で、詩の場は二度変容している。最初の、初期の下書稿一から再編の〔2〕稿に至る場合から指摘しよう。

ここでは、下書稿一の開始形における詩の場を構成していた人物と毘沙門天にかかわる詩語と詩句について、その変化を一覧すること  
でその実態をみる(・はなし、継承は○、消失は×、△はその詩句は異なるが状況は同じとみられる場合、大きな変化は▲)と、左に示  
すとおりである。

初期稿で形成されてきたのは、或る毘沙門像に我が子の健康を占う「マドンナ像」(聖母像)である。そこから、再編稿は「おこりあ  
る」我が子の平癒を一心に祈願する切実な母親像へと変化していることが分かる(「おこり」の詩語をもたない〔2〕稿も「あまの邪鬼払ふ」  
の語によって病児と知れる<sup>(1)</sup>)。詩形また詩句について、〔1〕稿をさらに省略・凝縮したものが〔2〕稿で、ここでは「毘沙門の堂」とあつて、  
それがどこであるかもほぼ特定され、患った我が子をなんとかしたいと信仰にすがる母親像を、印象的にとらえる。その詩想は聖母像か  
ら現実的な母親像の構築に向かっている。詩人はそれを、ウル定稿とすべく(写稿)として認めたのである。

一	開始	母	・	児	小祠祀る像	・	児の末を占ふ
一手入れ	○	・	○	△毘沙門像	・	○みどりごを占ふ	
二	1稿	○	▲おこり	○毘沙門像	あまの邪鬼押へたまへ	○みどりごのはてをうらなふ	
二	2稿	○	×	△毘沙門の堂	○あまの邪鬼払ふ	△みどりごを負ひて礼せる	

だが、その2稿はさらに大きく変容する。2稿と3稿の骨格ともみえる詩語と詩句とを対照してみよう。

二	2稿	母	・	児	毘沙門の堂	あまの邪鬼払ふとみどりごを負ひて礼せる
三	3稿	×	・	×	○	▲胸疾みてつかさをやめし堂守の眼やさしき

下書稿一段階からほとんど不変だった登場人物たちを、詩人は病児と母親に換えて突如「堂守」を登場させたのである。胸疾みてつかさをやめし／堂守の眼やさしき

と、肺病のために退官したという、やさしい眼をした人物として登場させている。〈写稿〉の詩想は大きく変質したかのようなのである。この3稿が、次のとおり、ほぼそのまま定稿化されているのだ。

①	毘沙門の堂は古びて、 胸疾みてつかさをやめし、	梨白く花咲きちれば、 堂守の眼やさしき。
②	中ぞらにうかべる雲の、 川水はすべりてくらく、	蓋やまた椀のさまなる、 草火のみほのに燃えたれ。

詩想の大きな変質といったが、これが病者の肖像である点で、「おこりあるみどりごを負ひ」「いくそたび母はぬかづく」(1稿)とした、その残影をわずかに曳いているともみえる。詩層に断絶はなく、発展稿とみていいだろう。対照的な構図も定まり、詩句にも弛みはない。ただ、詩の場の変容以前も以後も、詩人はいまだに命名を果たせないでいる。

この定稿は、定稿集『文語詩稿五十篇』のほうに採られているが、その表紙に書きつけられていた「想は定りて表現未だ足らざれども

現在は現在の推敲を以て定稿とす」という文言の、「表現未だ足らざれども」の謂いが、この場合は題名の不足に言いあてられているように思われるところがある。命名もままならぬその詩想の核にあるものはなにか。

3・2

実は、**1**稿↓**2**稿で定着した素材、母子像にしても毘沙門像にしても、「毘沙門の堂は古びて」稿の形成にのみ現われたものではない。その題材は、口語稿に既に見えていた。『春と修羅第二集』に、二八（昭和四）年以前から展開していたとみられる「三九番稿「夏」（一九二四、五、二三）」である。

木の芽が油緑や喪神青にほころび  
あちこち四角な山畑には  
霧が睡たく咲きだせば  
こどもをせをつたかみさんたちが  
毘沙門天にたてまつる  
赤や黄いろの幡をもち  
きみかげさうの空谷や  
たゞれたやうに鳥のなく  
いくつもの緩い峠を越える  
（下書稿「最終形」）

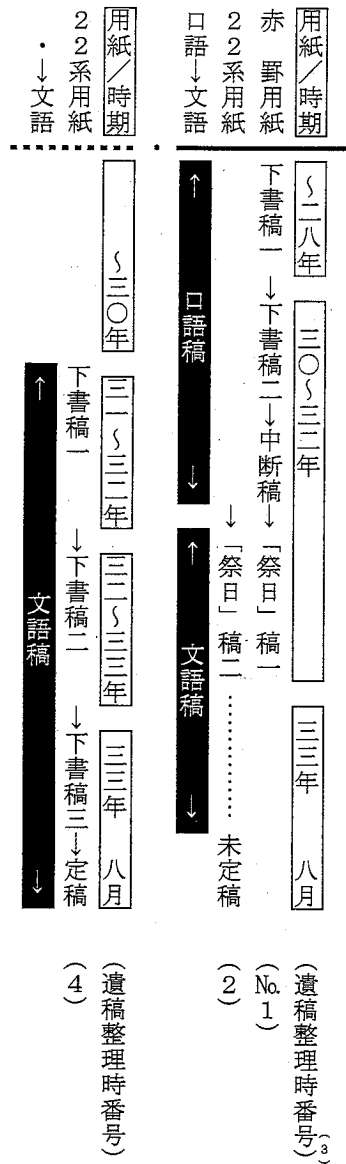
木の芽が油緑や喪神青にほころび  
あちこち四角な山畑に  
霧が睡たく咲き出せば  
この峽流の母たちは  
めいめい赤い幡をたつさへ  
きみかげさうの空谷や  
たゞれたやうに鳥のなく  
いくつもの緩い峠を越え  
お堂にやってみあります  
毘沙門像のおすねには  
だじじな味噌をなんども塗り  
黄金の眼だまをきよとんとして  
ふみつけられた天の邪鬼は  
頭をいくどか叩きつけて

（余白・裏面、中断稿）

これらの題材は、三二年以後の再編稿のなかで、「祭日」と命名されて別に《文語詩稿》化もされているのである。ただ、結果的には未定稿に置かれてしまった。つまり、《文語詩稿》の再編段階で、母子像と毘沙門像とを舞台に置いたものが、「毘沙門の堂は古びて」と

ともに並走しつつ、あったのである。

未定稿「祭日」の過程(次の図表右)に、「毘沙門の堂は古びて」の場合(図表左)も併せて示してみよう。



未定稿「祭日」の下書稿一は、遺稿No.1の(山)に置かれたまま事実上展開がとまっていた一三九番稿の用紙上に記された中斷稿の余白に、口語稿の文語化というかたちで起稿している。同一紙面から発生するという事態からして、これが一三九番稿を承けての文語詩への改作であることは明らかであろう。ここでは、別に詩稿用紙をあらためて展開した下書稿二の段階の本文をみる。

アナロナビクナビ木の芽はほころびて

楊の絮はひかり飛ぶ

をちこち山の畑には

睡たく桐の花咲けり

アナロナビクナビ睡たく桐咲きて  
峽に瘴のやまひつたはる

ナビクナビアリナリ児らをせなに負ひ

赤とうこんの幡もちて

草の峠や水無し谷

越えぞわづらふ母の群

ナビクナビアリナリ赤き幡もちて  
草の峠を越ゆる母たち

ナリトナリアナロ御堂のうすあかり

ナリトナリアナロ御堂のうすあかり

毘沙門像のおんすねに  
味噌塗りまつりおん手形  
いたゞきさすりおろがみぬ

アナロナビクナビ踏まるゝ天の邪鬼  
黄金の目玉をやるせなみ  
堂を出づれば風ぬるみ  
つゝどり四方に鳴けりけり (下書稿二開始形)

毘沙門像に味噌たてまつる

アナロナビクナビ踏まるゝ天の邪鬼  
四方につゝどり鳴きどよむなり

(下書稿二最終形)

この本文が、一三九番稿における詩の場の要素をほぼすべて引き受けている、ということをも、口語稿↓文語稿における詩語・詩句のゆえを追うかたちで、一覽してみると、

詩稿	口語稿(下書一) (↓手入れ)	中断稿	未定稿(祭日) 下書(開始形)	下書稿二(開始形)
状況	こども	・	児ら	瘡のやまひつたはる
人物	かみさんたち	・	母の群	母の群
毘沙門天	かみさんたち	・	毘沙門像	毘沙門像
門天	赤や黄の幡 像に塗る味噌↓	・	赤またうこんの幡	赤またうこんの幡
		味噌	味噌	味噌
		天の邪鬼	天の邪鬼	天の邪鬼
			御堂	御堂
風物	木の芽	・	法華経呪文	法華経呪文
	桐	・	木の芽	木の芽
	風↓	・	桐の鼻	桐の鼻
	紫紺の雲	・	風	風

場所	柳の祭↓ 羽虫↓ 鳥 あちこち山畑 空谷 いくつもの峠	楊の祭 鳥 あちこち山畑 空谷 いくつもの峠	楊の祭 鳥 あちこち山の畑 水無し谷 峠	楊の祭 鳥 あちこち山の畑 水無し谷 峠
----	--	------------------------------------	----------------------------------	----------------------------------

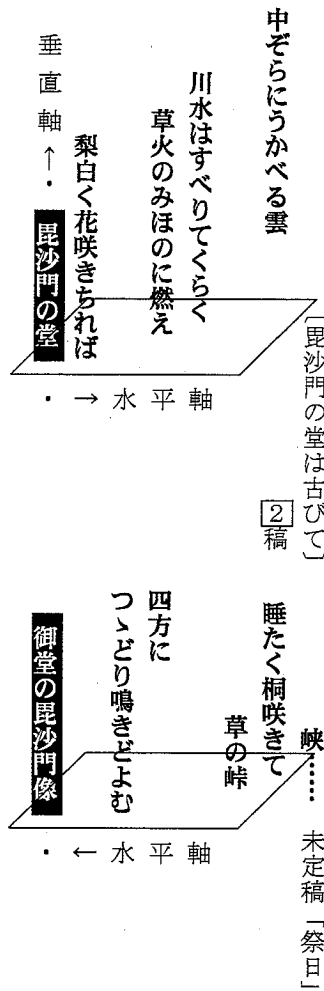
という状況であって、未定稿「祭日」の最終段階では、『法華経』の呪文による各句の導入と、毘沙門像が安置されている「御堂」での行動を追加するという詩の場の構成や、「瘡のやまひ」が流行っているという状況の新設があり、一三九番稿「祭日」ではない、ということはいえる。だが、一三九番稿を踏まえ、それを発展させたものではあっても、その改編ではない、ということもいえるだろう。瘡から子どもを護りたいと、母親たち総出で、まるで呪文に導かれるようにして、毘沙門像のすねに味噌を塗ろうと、山畑を、水無し谷を、峠をいくつも越えてこの御堂に参る、という到達点は、詩想面でも、一三九番稿を継承したうえの発展、とみることが出来る。詩想の改変とはいえないものだ。かつてある「夏」の農山村でみた母親たちの行列であろう、その記憶を、詩人は「祭日」ととらえ、《文語詩稿》再編稿の1編として、展開していたのである。にもかかわらず、「毘沙門の堂は古びて」が、下書稿「二稿（写稿）」までのところで、一三九番稿・「祭日」の詩系譜と、次のような詩句において交錯してしまう。結局、「毘沙門の堂は古びて」の「二稿」において、毘沙門天信仰と母親像とが題材的に定まり、未定稿「祭日」最終形とほとんど重なってくるのだ。

一三九番稿「夏」	「祭日」	「毘沙門の堂は古びて」
二手入れ・子どもをせをつたかみさんたち 手入れ・その像に塗る味噌をたづさへ 中断稿 ・ 毘沙門像のおすねには ・ ふみつけられた天の邪鬼 ・ お堂にやつてまゐります	一 開始形・児らをせなにして母の群 開始形・毘沙門像のおすねに 開始形・ふまるゝ天の邪鬼 開始形・御堂のうすあかり 二手入れ 峽に瘡のやまひつたはる	一 開始形・母みどり児をうちいだけば 手入れ・幾丈の毘沙門像の 一稿・あまの邪鬼押へたまへと 一稿・おこりある 二稿・毘沙門の堂は古びて

つまり、この段階で、具体的な展開は異なっているとしても、詩の場における「人物」と「事態」（病児のために毘沙門天にすがるといふ構成要素が一致する状況が起きているのである。たぶん、そのことによってもたらされたことがある。再編稿群のなかからウル定稿を撰ぶという作業段階のことだ。その結果、〈写〉の符号を「毘沙門の堂は古びて」のほうに与えるという決断があったのではないか。ために「祭日」は選外となって草稿が遺稿2番の山に置かれ、そのまま未定稿となる（定稿に至った詩稿で、「人物」・「事態」が似かよってみえるのは、「秘事念仏の大師匠」2編の場合だけである）。2稿は、ウル定稿として移動させられ、遺稿4番の〈山〉に落ちつくことになる。

さらにいえば、定稿候補から外した「祭日」のその題名を、いまだ無題の「毘沙門の堂は古びて」に移行させることをけっしておこなわなかったところに、「毘沙門の堂は古びて」の詩想の内実が、「祭日」のそれとは、同じ題材を用いているけれども同質なものではなかった、ということが分かるのではないか。言い換えると、ウル定稿として撰びとった2稿（写稿）の詩想は、他の詩稿と同じ題材を用いざるを得ず、命名にさえ届かぬ、まだその程度の「表現」段階にとどまっていたといえる。

3・3



では、「毘沙門の堂は古びて」下書稿2の2稿（写稿）段階がたどりついた詩想とは、どのようなものであったのだろうか。それを考えるてがかりが、人物や場所を取り囲んでいる枠組みとしての田園にあるのではないか。具体的にそれぞれの詩句を詩の場に置いてみて、未定稿「祭日」の場合と比較するかたちで概念化すると、右に掲げたとおりである。これらの風物は、いずれも詩稿の始発段階からすでに設定されていたのであり、途中で追加されたというものが、実はひとつもない（始発にあって、詩形の圧縮上省略されたものはある）。つまり、そのような田園を枠組みとするなかで、詩想を熟成させていった詩稿なの

である。この二者にみえる違いは、未定稿「祭日」が「つつどり」も「四方に」群れとどまつているように、水平軸に沿う風物であるのに対して、「毘沙門の堂は古びて」のそれは水平軸に加えて、「中ぞらにうかべる雲」を仰ぐ垂直軸をもつことであろう。前者は地上の物語に終始するものであり、後者は天上に向かう契機を秘めているものである、ということができよう。

なお、「祭日」の場における水平軸についていえば、母たちの群れを生みだす峡とは、北上山地のそれである。当然散在する峡の村から、それぞれの毘沙門天の御堂に向かつていった、そうした風習が前提としてある。この詩の場は、風土のつらなりをはらんだもので、見えていないその先の風土までも視野に入ってくる余地がある。田園という枠組みはここでは漠とした、実に曖昧なものになっている。けれども、「毘沙門の堂は古びて」の場では、そうした峠や峡といった水平線上の延長は暗示されず、毘沙門堂を中心としたこの田園に焦点化されている。漠とした聖域でなく、求心的なのである。

具体的にみれば、「毘沙門の堂は古びて」の場合、詩の場は、毘沙門堂における、

あまの邪鬼払ふと母は／みどりごを負ひて礼せる

という転の連にみえる人為が、起の連に置かれた、

中ぞらにうかべる雲の／蓋<sup>ガイ</sup>やまたまり／椀のさまなる (まりと椀は並存)

という天空のもとに意味づけられている。「蓋<sup>ガイ</sup>」は天蓋、「高キ柄ノ先、大ニ曲リテ、其端ニ蓋<sup>キ</sup>ノ如キ物ヲ釣り下ゲテ、飾リヲ垂レ、仏像ノ上、或ハ、葬送ノ棺ノ上ナドニカザス」(言海、ちくま学芸文庫版)、それを雲のすがたにみたのであるうし、「椀」もまりと訓むのは古いかたちで、「古へ水酒ナド盛ル器ノ名」(言海)、天蓋と同列に置くとすれば、日常生活に用いる木椀でなく祭祀や法事などに供える器を雲のかたちに見ているのであろう。

この「うかべる雲」を、そのように宗教的な儀式の器物にも見立てようとする詩人には、「中ぞら」のかなた、天上の世界に信仰の究竟が予感されているのではないか。したがって、堂に籠もって幼子をその身からかたときも離すことのない母の祈りも、礼拝する毘沙門像を超えて、さらに天上に向かつて受容されてゆくであろうことを、この詩の場は可能にしている。

ただしそれは、病児の死という最悪の事態をも受容する深いものであって、結の連とした、

川水はすべりてくらく／草火のみほのに燃えたれ



という、その「くらく」「ほのに燃え」ている光景にあえて暗示を読めば、この場合、重篤な幼子の存在さえも思われてくる。地上における切実な祈りと、天上の深い受容と、それがこの詩想の核としてあるのではないか。この段階で、詩稿は田園詩篇のうえに信仰詩篇の領分を呼びこもうとしている。

それに対して、未定稿「祭日」の場合は、その題名が指示しているとおり、一連の共同的な所作があたかも「年中行事」的な記録の如く綴られているとみえる。「アナロナビクナビ」の呪文とともに、「峽に瘡のやまひつたはる」と聞いたとき、母親たちは皆いつものように行動をはじめるのである。

赤き幡もちて／草の峠を越ゆる母たち

御堂のうすあかり／毘沙門像に味噌たてまつる

母たちの隊列が、「ナビクナビアリナリ」の呪文を唱えながらいつものように「赤き幡もちて」、「草の峠を越」えてやってくる。そして、「ナリトナリアナロ」の呪文を唱えながらいつものように「御堂のうすあかり」のなかで「毘沙門像に味噌たてまつる」のである。焦点は母たちの行為そのものにあつて、肝腎の「児たち」はどんな様子なのか、少なくとも語り手の視界からは失せている。祈願をすまずと、「アナロナビクナビ」の呪文を唱えながら「踏まるゝ天の邪鬼」を尻目に、お堂を出た母たちは「四方につゞどり鳴きどよむ」なかに立ちかえる。「ナビクナビアリナリ」の呪文を唱えながら、またいくつもの峠を越えて、峽に抱かれた村に急いで戻らなければならぬはずだ。

もちろん、ここには母親たちの愛情がながれみえている。けれども、それは行事に託されてゆくものであつて、熱に喘ぐ児を抱えて奔る、といった切実さはない。この詩の場には、冒頭連の一句に、

アナロナビクナビ睡たく桐咲きて

とあつた、その「睡たく」すすんでゆく地上の時空が構築されている。毘沙門天さんにお願ひすれば大丈夫だから、といった恒常化した緩みだ。詩想は、それに否定的なものでもない。〈共同性〉の視座に立った詩人が、民間信仰にもすっかりとすがりながら、この風土をたくましく生きる母親たちの生活の「コマをとらえた田園詩篇」なのである。

こうみてくると、毘沙門天信仰と母親像という題材を、定稿として1編にしぼりたいという詩人にとっては、民間信仰の地平を超えることのない未定稿「祭日」よりも、民間信仰の枠を超えて、信仰ということの深まり、あるいはその高まりを探りあてようとす詩想に立ちいたった「毘沙門の堂は古びて」のほうに、〈詩的実践〉の可能性をみたのである。その定稿化に際しても、命名も含めた詩の場

の「表現」のさらなる追求を課題としていたにちがいない。

3・4

まさに、定稿化を目前にした詩の場において、その「表現」は劇変したのである。詩形もその連構成そのものを再編しつつ、病児と母親とに換えて突如「堂守」が登場する。その変化の要点をまとめると、次のとおりである。

過程	
2稿 / 下書稿二（写稿）	<p>・人物 母子像</p> <p>「あまの邪鬼払ふと母は みどりごを負ひて礼せる」</p> <p>・構成 2行 / 4連</p> <p>「中ぞらにうかべる雲の…」第一連</p> <p style="text-align: center;">分設</p> <p>「川水はすべりてくらく…」第四連</p>
3稿 / 下書稿三 定稿直前稿	<p>・人物 堂守像</p> <p>「胸疾みてつかさをやめし 堂守の眼やさしき」</p> <p>・構成 4行 / 2連</p> <p>「中ぞらにうかべる雲の…」</p> <p style="text-align: center;">合本</p> <p>「川水はすべりてくらく…」第二連として</p>
?	<p>・詩想</p> <p>・信仰の深まりや高まりを探る</p>

このような人物の劇的な変換は、2稿（写稿）段階の詩想が大きく変質したことによってもたらされた、と考えられて不思議でない。けれども、3稿の詩想が、（写稿）2稿段階のそれをまったく改変する方向で到達したものであるのか、どうか。もしそうであれば、（写稿）として撰びとった詩想もまた表現ともども、未成熟なものであった、ということになる。その変質とはどのようなことであったのか。まず、人物があらためられた第一連（前連）から、その意味を探ってみたい。

毘沙門の堂は古びて

梨白く花咲きちれば  
胸疾みてつかさをやめし  
堂守の眼やさしき

(下書稿三、**3**稿とする)

この「堂守」が担おうとしているのは、いったい何なのだろうか。

ひとついえることは、毘沙門天を病からの守護神としてこの地方の人々が信仰にとりこんで以来(坂上田村麻呂の時代以来といわれる)、その長い長い経験のなかで、もっともおそれられてきたのが、胸を病むことであつたらう。それは老若男女を問わぬ。「胸疾みてつかさをやめし」と、詩人がこの「堂守」の履歴を明らかにしたことも、病児にかぎらないこの毘沙門堂の信仰的地位を示すことであつた、と考えられてくるのである。病ある者をひろく受容する、毘沙門堂という奥深い場が「堂守」の登場によつてひらかれていることを、指摘しなければならぬだろう。

この、「つかさをやめ」、野にくだったそのひとの「眼やさしき」さまには、人々のがわに立つて人々の病苦を見守ろうとする存在が託されているようにみえる。そこには、詩人のあの理想像が確かに委託されているように思われる。<sup>(8)</sup>

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

そして「サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」と手帳に刻みつけた肖像である。あの病氣の子ども祈りに疲れた母も引き受け、死と

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ツテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒドリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

(雨ニモマケズ)

闘う人を安らかにし欲望に溺れる人たちを鎮める。もちろん「堂守」そのひとがここでそれを果たそうというわけではない。彼はそこへみちびくひとなのだ。毘沙門堂は信仰へのひとつの入り口なのである。ここからなぞ超えて、人々はさらなる信仰の場である天上への祈りに向かい、その生活も生死さえも委ねてゆく、というふうに通かれてゆく。

そうした場の設定としても、連の再構成は必要なことであつたと考えられる。

②稿（「写稿」）で序盤（起連）と終盤（結連）に分離して置かれていた風物を統合して、③稿は第二連（後連）として配置するのである。たとえば、その③稿をもとにほぼ異同なく定稿用紙に移したその本文（表記）について、対馬美香が「第一連と第二連の間に、意識的に配されたやや広い行間は、時間の推移を表していると思われる」と指摘したけれども、すでに③稿段階において、詩人がこの新第二連に現出させようとしているのは、次のような毘沙門堂をつつみこむ静謐な空間と時間がひかえた場だった。

中ぞらにうかべる雲の

蓋やまたまりのさまなる

川水はすべりてくらく

草火のみほのに燃えたれ

（下書稿三、③稿とする）

と、この毘沙門堂を抱くように、天上に至る景と地上における生活風土の景とが広がっている。配置されている雲・川水・草火という風物のもつ時間性（流動し継続するもの場）と空間性（垂直軸・水平軸の交錯する場）によつて、奥まりと高まりのある光景が実現されているのだ。「中ぞらにうかべる雲」の背後にひかえている天上の世界が、毘沙門堂をいたたくこの地上をつつみこんでいる。川水が「くらく」流れているかたわらで、たとえば農民の営みである草火は「ほのに燃え」るばかりだが、それは祈りや労苦また生死を、まるごと受け容れようとしている光景なのではないか。

ここにある静まりは、つめたさでなく、やさしさであろう。第一連（前連）の「堂守の眼」と響き合うものだ。この詩の場には、祈りとその受容が交響している。ここには、地上と天上と、人々と神や仏と呼ばれる存在と、それらが「一の意識」（農民芸術概論綱要）にも到達しうる、そのような可能性が秘められた場を現出させているのではないだろうか。「堂守」が詩人の理想的な人物像だとすれば、この詩の場に現われているのは、先取りされた理想的世界だとみてもよい。それを支えている詩想は、毘沙門天に対する信仰を契機に、人々が信仰のさらなる深まり、さらなる高まりに向かつてゆくこと、そのような祈念によつていのである。ただそれが、「くらく」「ほのに」しか現われてこないところに、眼前の「利益にただすがりがちな、この風土に生きる人々に対して、ある覚醒を迫るものでもある、ということであろう。その意味において、（「写稿」）段階の詩想のさらなる深化あるいは強化であり、対象への批判さえ内蔵して、確かに大きな変質ではあつたのだ。

こうした詩想への到達がある、というところからうかがえるのは、たとえばこの地方における非近代と近代化という相剋などといった、これまでみてきた外部との問題に向かう針路とは別に、農山村に生きる人々自身の、内部に立ち合おうとする針路もまた用意している、ということだろう。ここでは、それが信仰のありかたという課題であった。

「堂守」に「雨ニモマケズ」の投影をみようとしている立場からいえば、それが書きこまれた『雨ニモマケズ手帳』は、三一年の死病の再発症によって、自らの信仰の未熟さを見つめなおすことになった詩人宮沢賢治の、法華経信仰に再出発する決意の記録集という性格をもっている。死病さえ「道場」(『雨ニモマケズ手帳』)ととらえる詩人宮沢賢治は、自己批判を深めるなかで、あの覚悟もまた手帳に刻みつけたのである(44〜46頁)。

敵に／日課を定め／法を先とし／父母を次とし／近隣を三とし／社舎農村を／最後の目標として／只猛進せよ

という覚悟を貫いているのは、信仰達成への志であろう。詩人は、人々の毘沙門信仰を見くんだり、否んだりしているのではない。この詩稿によって、信仰の深みへ、高みへ、ともに参入しようと誘っているのである。もちろん、誘いは高慢から発したものではない。手帳には、次のような戒めもまた記されている(139・140頁)。

筆ヲトルヤマツ道場観ノ奉請ヲ行ヒ所縁ノ仏意ニ契フヲ念ジノ然ル後ニ全力之ノニ従フベシ

断ジテノ教化ノ考タルベカラズノタゞ(正直ニ)純真ニノ法樂スベシ。ノタノム所オノレガ小才ニノ非レ。タゞ諸仏菩薩ノノ冥動ニヨレ。

「筆ヲトル」に際し、徹底的な自己否定と諸仏菩薩への帰依とを戒めとするところに、この田園の詩篇に重なる信仰詩篇の色あいをみるべきだと思ふ。誘われてゆくのは、詩人宮沢賢治自身も含まれてある。

3・5

次に「林の中の柴小屋に」の過程<sup>10</sup>についてみよう。

23句にも及ぶ長大な定稿本文は、前半が7句、「どてら着て立つ風の中」まで(句点が与えられている)、後半が「西は縮れて雲傷み」以下、16句をもって構成されている。七五調の句をつらねて結句を七七調で閉じる、長歌形式を借りているが、そうした伝統的な定型韻律に支えられた叙事詩なのであり、あるいは、内容を併せみると、これは物語詩だともいえよう。《文語詩稿》定稿群では特異な、長

大詩稿数編のなかのひとつである。<sup>123</sup>

要するに、豪農の家に生まれ、かつては神童と呼ばれ育つた男がいまでは「面青膨れて眼ひかり」、もうすっかり濁酒（密造酒）といかさま賭博とにのめりこんでしまつて、今日もまた遊び仲間の訪れを待っている。ほつたらかしのされたまま「古りし苗代」も「水黴き」状態だ。農民でありながら、その生業を棄ててしまつていのである。にもかかわらず、なお農村にあつて放埒な生活をつづけていられるとは、小作料の収入あるいは小作地を引き上げてする借金をなどそのたすきにしているのであらうか。その小作農民のほうに、貧窮に耐えきれず、あるいは小作地を奪われて、やむなく都市労働者として棄農し離村する状況はこの時代にも多くみられたことであつたが、富農でさえ没落するというもうひとつの光景も近代の農山村には、ままみられたのである。

本文は次のとおり。

林の中の柴小屋に、醸し成りたる濁り酒、一筒汲みて帰り来し、  
むかし着れの神童は、面青膨れて眼ひかり、秋はかたむく山里を、  
どてら着て立つ風の中。西は縮れて雲傷み、青き大野のあちこちに、  
雨かとそゞぐ日のしめり、こなたは古りし苗代の、刈敷朽ちぬと水黴き、  
なべて丘にも林にも、たゞ鳴る松の声なれば、あはれさびしと我家の、  
門立ち入りて白壁も、落ちし土蔵の奥二階、梨の葉かざす窓べにて、  
筒のなかばを傾けて、「↓その齒に風を吸ひつゝも、」しばしをしんとものおもひ、  
夜に日をかけて工み来し、いかさまさいをぞ手にとりにける。

しかし、この定稿を呼び込んだ（写稿）は、意外なことにわずか2行／2連ほどのものだった（新校本全集校異では下書稿二）。

面青膨れて眼「弱く↓ひかり」  
どてら着て立つ風の中

西日ひた降る苗代は  
刈敷朽ちぬと水黴き

（鉛筆開始同手入れ）

これは、「法印の孫娘」という口語詩稿の、用紙オモテ右下余白に記されたものである。初期稿に与えられる（丁）の符号もない余白

稿で、口語稿の文語化とみられるから、三二年以降の再編段階におこなわれて、〈写〉の付与となったものであろう。

断片的にもみえるこの詩行が、〈写稿〉としてウル定稿の地位を担ったことは、その第一連が定稿前半部の人物造形の核にそのままなっていること、また、その第二連が定稿後半部のうち棄てられた苗代のありさまとしてそのまま採用されていること、などを指摘でき、定稿生成の核になっていったらしいことや、たぶん定稿清書前の段階に至って、〈写稿〉の用紙上（すなわち「法印の孫娘」の本文の上）に重ね書きするかたちでさらに、毛筆に墨を用いた22句にも及ぶ〈写稿〉の詩句も踏まえた発展形を展開させていったのである（新校本全集校異では下書稿三）。この毛筆稿本文は、数か所の異同はみられるが、定稿本文に重なるものであるから、

〈写稿〉（下書稿二）↓毛筆稿（下書稿三）↓定稿

という過程が認められるようである。つまり、わずか4行ほどの田園詩篇である〈写稿〉を支えていた詩想が、実に23句を費やして構築される社会詩篇を成立させうる内実をもっていたと考えられるのだ。ただ、そのような展開を可能にした、この〈写稿〉の内実は、もう少し追跡しておく必要がある。

3・6

〈写稿〉には、赤インクによって〈写〉の符号が与えられている。自筆原稿資料を見ると、その本文の左上にかぶせるように記されているものであり、それは見方を変えたと、口語稿本文の下部にかかって位置し、その横線が口語稿全体を支えている、ということになる。口語稿のほうにもかかわって与えられたとすれば、その詩想に対しても与えられた、と考えることも可能なのである。実際、〈写稿〉は次のとおり、口語詩稿「法印の孫娘」<sup>14</sup>を踏まえた文語詩化稿だった。

法印の孫娘（行数）

どてらを着たまゝ酔つてゐた

あの青ぶくれの大入道の

あの顔いろや縦の巨きな頬の皺は

夜どほし土蔵の中にでも居て

並々でない興奮をする証拠である

（16・17）

（24〜26）

栗や何かの木の枝を  
わざとどしやどしや投げ込んで

〈写稿〉

面青膨れて眼「弱く↓ひかり」

どてら着て立つ風の中

西日ひた降る苗代は  
刈敷朽ちぬと水黒き

おはぐろのやうなまっ黒な苗代の畦に立つて(10)12)  
西はうすい氷雲と青じろいそら  
うしろでは松の林が  
日光のために何かなまこのやうに見え  
わづかに沼の水もひかる  
(52)55)

第一連は、「法印の孫娘」の法印を説明する詩行から醸されたものであり、第二連は、苗代の光景とその日の情景とが合成され凝縮されて、成立している。そのうえで、定稿用紙を前にした詩人は、〈写稿〉段階で取りこんだ以外にも、「法印の孫娘」の要素をどんどん吸いあげて、次のように長大な物語詩に発展させていったのである。

法印の孫娘 (行數)

わざとどしやどしや投げ込んで  
おはぐろのやうなまっ黒な苗代の畦に立つて(10)12)  
今日もじぶんで葉書を出して置きながら  
どてらを着たまゝ酔つてゐた  
あの青ぶくれの大入道の  
(15)17)  
あの山の根の法印の家か  
あそこはバグヂと濁り酒どの名物すと  
みちを訊いたらあの知り合ひの百姓が云つた  
それほど村でも人付合ひが悪いのだらう  
もつともばくちはたしかにうつ  
(19)23)  
あの顔いろや縦の巨きな頬の皺は  
夜どほし土蔵の中にでも居て  
並々でない興奮をする証拠である  
(24)26)  
ぜんたいあの家といふのが  
巨きな松山の裾に  
まるで公園のやうなきれいな芝の傾斜にあつて

毛筆稿 (定稿清書前)

林の中の柴小屋に、  
醸し成りたる濁り酒  
一筒汲みて帰り来し  
むかし誉れの神童は  
面青膨れて眼ひかり  
秋はかたむく山里を  
どてら着て立つ風の中  
西は縮れて雲ひかり  
青き大野のあちこちに  
雨かとそゞぐ日のひかり、  
これは古り来し苗代の、  
刈敷朽ちぬと水黴き  
なべて丘にも林にも  
たゞ鳴る松の声なれば



まっ黒な杉をめぐらし

山門みたいなものもあれば

白塗りの土蔵もあり

柿の木も梨の木もひかかってゐた

それがなかからもう青じろく蝕んでゐる

どうしてばくちをやりだしたのか

或ひは少し村の中では出来過ぎたので

つい横みちへそれたのか

西はうすい氷雲と青じろいそら

うしろでは松の林が

日光のために何かなまこのやうに見え

わづかに沼の水もひかる

(27) (34)

(38) (40)

(52) (55)

あはれさびしと我家なる

門うち入りて白壁も

やれし土蔵の奥二階

梨の葉かざす窓べにて

手すさびならね業ならね

まづ筒なかば傾けて

夜を日をかけて彫り出でし

いかさま棄をぞ手にとりにけり

(毛筆・墨による展開の開始形)

わずか4行ほどの〈写稿〉(下書稿二)は、《文語詩稿》の形成傾向である、詩形や詩句の短縮・凝縮というながれに実はななっていた。それが定稿段階に入ろうとするとき、再び「法印と孫娘」に立ち戻った詩人は、その55行の本文の過半をもとに長大な毛筆稿(下書稿三)の形成に向かう。その動機はなにか。

〈写稿〉の否定であったのかという点、それは違う。むしろ毛筆稿は、〈写稿〉の選びとった題材をさらに克明に展開させたものなのである。〈写稿〉が選びとっていたのは、「法印と孫娘」の法印像にかかわるところで、孫娘にかかわるところはまさしく切り捨ててしまっている。そこで、法印に集中するのには、暗示的な凝縮化にとどまるのではなく、具体的提示となる詳細化を押しすすめたのが、定稿を前にした毛筆稿だった。その風貌からたぶん「法印」と渾名したのであるが、《文語詩稿》化では戲謔的な呼称はもう影を潜める。墮落しきつたある老いた豪農のいまを、毛筆稿が「手すさびならね業ならね」を削除したうえで、「しばしをしんとものおもひ」を新設したのを定稿は承けて、

その歯に風を吸ひつゝも、しばしをしんとものおもひ、

と、なお1句を加えて描ききるのである。この詩の場に、ユーモアや滑稽味を読みとることも可能であろうが、右に引いたこの人物の仕事には、必ずしも笑いきれない、墮落者の深い悲哀の相が現われている、と思われてならない。欠けた歯並みから吸いこんだ風の冷たさ

が、「しんとものおも」う彼の真実のすがたを誘いだしている。

ここまで詳細にかつ具体的にその人物を造形した詩人の意図は、そのような人物の存在を明示しておきたいということにほかならないであろう。こうした困った悪徳豪農の存在、そうした農村内部に現われたひとつの汚点を詩人は確かに摘発し、批判しているのだが、それだけにとどまるものではない。

3・7

没落したとはいえ、豪壮な屋敷を構えて農村に生活しながら「棄農」し、遊蕩の日々を送る老農夫の存在を、詩人がピンポイントに批判しているものと読みおさめてはならない問題が、この詩の場には示されているのではないか。農村の指導的立場にある地主や有力な自作農民のなかに現われた腐敗、密醸や賭博が批判されなければならぬのは当然のことだが、詩人がここに現出させているのが、もうひとつの「棄農」というすがたをもとらえた場であった、ということである。

年々注意し作付けし居り候へ共

この五六年毎稲の病気にかゝりと書いた

あの筆跡も立派だったが

どうしてばくちをやりだしたか

(35〜38行)

結局捨象されてしまったが、祖稿「法印と孫娘」には、孫娘を使いにして稲作の指導を乞う葉書を書いていた法印の、農に携わろうとしている姿も、実は右のように示されていたのだった(傍点は島田)。

この法印にかぎらず、資力のある自作農を中心に、「年々注意し作付けし居り候へ共」この五六年毎稲の病気にかゝり、そのために農業技術の改善に心を砕いてきたのはもちろんのこと、農村を改革に導きうる潜在力は農民のがわにもこれまできちんとあったのである。いまひとつ捨象されたものが、

或ひはさういふ遺伝なものか

とにかくあのしつかりとした

新時代の農村を興しさうにさへ見える

うつくしく立派な娘のなかにも

その青ぐろい遺伝がやっぱりねむってゐて  
こどもか孫かどこかへ行つて目をさます

(41〜46行)

という、期待と不安を併せ持った孫娘に象徴される、すなわち「新時代の農村を興し」てゆく可能性を秘めた後継者たちの存在だった。老農として地域の農事に指導的な役割を果たしうる人たちや、その後継者たちの存在を、詩人は《文語詩稿》化であたかも突き放すように遠ざけ、定稿では、酒と賭博に溺れる老いた豪農の「棄農」したすがたに集中しているのである。極端な暗部がとりあげられたかたちだけれども、岩手では、小作争議が「大正十四年（一九二五）年に三件で以後一、二件を数えるにすぎないが、昭和六年（一九三一）年の七件から急増」（『岩手県の百年』）してくる。三〇年に襲ってきた昭和恐慌以降、農村は地主を含めてまるごと深刻な窮乏に陥って、「地主小作人ノ経済的行詰り」を生じ、「小作地所有権ノ移動」をきたしたのがもともとも多い原因と、報告はのべている（『地方別小作争議概要』昭和九年）（『岩手県の百年』）。つまり、農村を牽引するはずの地主や富農層にも、経済的な困窮が及んできて、小作農民層との対立を招いていたのである。

そういえば、「法印と孫娘」では、立派な筆跡の老いた豪農が突然酒と博打に狂いはじめたことが理解できない詩人は、冷静な判断や理解を停止してしまつて、「或ひはさういふ遺伝なものか」と不可解なことに預けて、突き放してしまうのだった。《文語詩稿》化で、彼の稲作に対する情熱や次代を担いうる後継者の存在をすべて削り落としてたどりついたところは、しかし、その人物像を悪人として完全否定をする、そのような紋切り型の造形の仕方でない。たとえば、

むかし誉れの神童は、面青膨れて眼ひかり、秋はかたむく山里を、  
どてら着て立つ風の中。（中略）

なべて丘にも林にも、たゞ鳴る松の声なれば、あはれさびしと我家の、  
門立ち入りて白壁も、落ちし土蔵の奥二階、梨の葉かざす窓べにて、  
筒のなかばを傾けて、その歯に風を吸ひつゝも、しばしをしんとものおもひ、

と描かれたその表情は深くその行為は露骨で、異様にも見えるのだが、一方でユーモラスとみえ滑稽味を感じるというのも、むしろ人間味豊かな造形が果たされているといつていい。この「悪役」を振られた人物がたぶん正直者であろうことを、詩人は隠そうとしていないようにみえる。正直者であるかぎり、再生の可能性を充分に具えている。そのような、けつして批判一辺倒でない詩人の含みが、そこにはあるといえるのではないか。

詩人は、彼を吊るしあげ、きっぱりと断罪しようとしているのではないのだ。「遺伝」のように、本人にすべての責めを求めようもな

い不条理な世界に、彼もまた取りこまれていったことを詩人は自覚しているのである。農村の指導的な階層が、その役割をもう自在には担えなくなっていた、その崩落の、ある意味極端な象徴として、濁酒と賭博の老いた豪農が掲げられていった、ということではなかったろうか。彼の墮落の背後には、農山村の窮乏が貧農のみならず富農層にも及び、活力を喪ってゆく現状が浮かびあがってこよう。つまり、農村内部における改革への可能性が閉ざされようとしている、そうであれば、暗澹とした農村の現在と未来とが厳肅に見据えられているのである。

だからこそ、地主や富農層の暗部をこのようなかたちで剔りだし、突きつけなければならなかった。農村の改革は、彼らの良心的主導によつてしかその緒につくことさえできない、ということをも、かつての羅須地人協会活動における農業技術指導をおして、既存農民との確執を体験していた詩人宮沢賢治はよく承知していたからだ。酒と賭博に溺れるこの豪農を、帰農させることができるのは、現実的には同じ仲間である富農層しかない。この長大な詩稿は、彼ら富農たちにその自覚をあらためて問い、課題として投げかけている。詩人はそれほどに、彼らに対する信頼や期待をけつて捨ててしまつてはいないのである。

「社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ」としててがけられた「文語詩稿」定稿が、そうしたメッセージ性を秘めているだろうことを、見過ごしてはならない。

〔写稿〕から定稿に至る推敲の現状からいえば、本文の改編的作業によつて詩の場は変容したというしかないが、それを支えた詩人の詩想には、発展的といえる変質があつても、まつたくの改変ではなかった、といえようが、この詩稿の、

〔写稿〕(下書稿二) ↓毛筆稿(下書稿三) ↓定稿

という過程で、詩の場に題名が与えられぬままであるのは、命名を放棄したというよりも、農村内部の問題、しかもある豪農の腐敗ぶりを具体的に描くことが、特定の人物を暗示してしまう可能性が多分にあるうえに、農村の指導的立場を見失い、崩落しつつある富農層に對して、それでよいのかと無言で問いかけてゆくような場へ発展させてきたことを考えると、命名には慎重にならざるを得ないという、制動を詩人がこの時点では働かせたと考へるのが、分かりやすいのではなからうか。

以上、2編についてまとめると、詩の場の変容とそれにかかわる詩想の変質については、

〔毘沙門の堂は古びて〕 ……〔写稿〕段階の詩想の、信仰の要素をさらに深めて田園詩篇として強化へ

〔林の中の柴小屋に〕 ……〔写稿〕段階の詩想の、具体的な人物造形を果たし社会詩篇として激化へ

ということにならう。

いずれも、〔写稿〕段階の詩想を改変するものではなく、その詩想の枠組みのなかで深化する、もしくはその延長上に発展する方向にある。それまでにみてきた消失稿・変更稿・継承稿における傾向に重なるものだが、質的に異なるのは、それまでにみせた傾向がその視座に農村を取り巻く社会体制に向かう外部への批判軸をもっているのに対して、この3編は、農村や農民のなかに、あるいは自分のなかに問題意識をもった内部への批判軸をその視座にもっていることである。

さて、詩の場に大きな変容がみられた詩稿6編における、それぞれの場の変容と詩想の変質について長々とみてきたが、あらためて一覽してみると、次のとおりである。

詩稿	舞合	人物	事態	詩想の変質
吹雪かざやくなかにし	×峠↓・	×・↓犬(人?)	×吹雪とその後↓吹雪の中の妖しき目	深化・強化
ほのあかり秋のあぎと	○鮎幣神社	○社司の子(父)母	×謹慎状態の子↓失踪の子	強化・激化
電気工夫	△田野、・↓電塔	×村長耕者↓電気工夫	×退耕↓電気工夫	深化・転換
岩手公園	○岩手公園	×・↓タピング親子	×公園の景と眺望↓公園の団欒と眺望	深化・強化
毘沙門の堂は古びて	○毘沙門堂	×母みどりご↓堂守	×あまの邪鬼払ふ↓眼やさしき存在	深化・強化
林の中の柴小屋に	△・↓土蔵	○面青膨れ眼光る男	×・↓濁酒といかさまさいに溺れる	激化

〈写稿〉の定稿化によって、「電気工夫」には、農村社会の現実を凝視しようというその詩想の核にあるものは変わらないが、改変といつてよい視座の大きな転換による場の変容があった。それに対して、他の詩稿の場合、変容した詩の場を支える詩想に、改変的な変質があったとはいえないようである。けれどももちろん、それらは軽度な変質でなく、深化・強化・激化ともいうべき相当な意味を見いだせる、けっして小さくはない変質の程度だ。

ただいづれにしても、〈写稿〉に到達した詩想をもとに、その発展として現われてきた事態なのであって、詩人が〈写稿〉の選択・形成・成立に向けて、その詩想の定位のほうにかなり力を注いだ結果であろうことをうかがわせるものである。したがって、詩の場に変容がほぼみられない、あるいは小規模である場合が多くみられるこの〈写稿〉群の定稿化からすると、多くの〈写稿〉が獲得していた詩想が、定稿に承継されていったことは確かなことであろう。

つまり、定稿化を導く段階の《文語詩稿》構想における針路は、三二年から三三年にかけてすすめられた鉛筆・赤インクによる〈写稿〉成立の段階で、ほぼ固まってきたということができるのではないか。詩人は、《文語詩稿》の定稿化に向けて、詩想の成熟のほうに意をこめていたのである。

(注)

1 ②稿開始形からの手入力で、「夜」と来て「かのあまの邪鬼↓みどり児を圧す」という段階があり、最終的に削除された。  
2 この地方では「毘沙門堂」と呼称されると、花巻市東和町北成島の毘沙門堂を一般的には想起される。尼藍婆・毘藍婆の二鬼坐像を附属し地天女に支えられる兜跋毘沙門像である。「長二丈運慶作」(『邦内郷村志』、南部叢書五)と伝えられ、「日本毘沙門像のうち、最高傑作の1つ」(『角川日本地名大辞典3岩手県』)といい、国の重要文化財に指定されている。平安時代、坂上田村麻呂の東北開拓の際、北方の守護神として毘沙門天が崇敬されてから、この地方では毘沙門天を祀ることがよくみられ、古くから民間信仰の対象となった。

3 草稿の用紙左上隅に、文圃堂版全集(三四・三五年刊)の編集の際と思われる遺稿の整理番号が朱インクでスタンプされている。遺稿はいくつもの山に分かれていて、それら山ごとと同じ番号を付したもので、No.1・1・2・3・4・5・10の別がある。番号と逐次形の関係は、多くの場合番号の若いものほど初期稿である。新校本全集第十六卷上「草稿通観篇」を参照。

4 一三九番稿の「一九二四、五、二三」という日付は、農学校生徒の北海道修学旅行の引率をしていた宮沢賢治が、午後一時四分、花巻駅に帰着した日である。その日のうちに、たとえば東和町北成島の毘沙門堂を尋ねたり、山間部を訪れたとは考えにくい。あるいは帰りの車窓で、恒例の毘沙門天参りの赤い幡を担いどこかの村人たちの姿が遠くにとらえられたのであるうか。それが、かつて流行病に対して村をあげて毘沙門天参りに奔ったという伝承の想起に結びついたのかもしれない。なお、一三九番稿の下書稿一手入れでは「つかれぬやうに病まぬやうに」という毘沙門天詣での目的が示された段階があった。

5 「毘沙門の堂は古びて」

「祭日」

桜は遷り↓・(2稿)

紫紺の雲↓・(口語中断稿)

木の芽↓・(下書稿二手入れ)

羽虫↓・(口語中断稿)

柳の絮↓・(下書稿二手入れ)

風↓・(下書稿二手入れ)

山畑↓・(下書稿二手入れ)

空谷↓・(下書稿二手入れ)

6 この呪文は、法華経陀羅尼品第二十六によれば「毘沙門天王」が「衆生を愍念し、此の法師を擁護せんが為の故に」「呪を説いて、「阿梨・那梨・窶那梨・阿那盧・那履・拘那履」と述べたものである(植木雅俊訳『法華経』(岩波書店二〇〇八)における大正新脩大藏経による訓読から)。未定稿「祭日」におけるこの引用は、文飾上置かれた語り手自身の唱導にちがいないが、ここはその唱導に應じるかのように、詩の場の人物たちもまた口々に諳んじながらすすむさまにも受けとれないか。

7 注2参照。

8 この「堂守」に「雨ニモマケズ」の理想像を重ねて読む試みを提案したは、信時哲郎「毘沙門の堂は古びて」(『宮澤賢治「文語詩稿五十篇」評釈七』甲南女子大研究紀要42二〇〇六・三、及び紀要発表以後の増訂を含む宮沢賢治文語詩研究会二〇〇八資

料「宮澤賢治『文語詩稿五十篇』評釈下」である。

9 「[毘沙門の堂は古びて]」(『宮澤賢治文語詩の森第三集』所収、柏プラノ二〇〇二)。この定稿は、各連の一・二句行と三・四句行の間を4行空け、第一連と第二連の間を5行空けている。連と連とを「やや広い行間」をとって配置するのは、定稿の全般の傾向である。それぞれに、時間経過や空間対照などさまざまな意図をこめていると考えられるものである。

10 二六年の「農民芸術概論綱要」の序論に「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある」。

10 島田『文語詩稿叙説』の第3章(写稿)論で言及しているが、本稿はさらに考察をすすめたものである。

11 注7の信時論が、この詩稿が「七五調で「法印」の姿を追いかけながら、最後の句を七(八)・七で終わらせているあたりは、長歌を意識しているのだろう」と指摘していた。

12 長大詩稿は他に、定稿集『文語詩稿一百篇』に、4連構成で24句の「記念写真」、短歌を連ねるような構成で25句の「鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし」、やはり短歌形式による11連構成で22句の「腐植土のぬかるみよりの照り返し」がある。

13 赤インクによる(写稿)は、他に「鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし」と「小きメリヤス塩の魚」がある。この「林の中の柴小屋に」に至る(写稿)の場合は、『新校本全集』第七巻校異が、「詩稿(表)上に赤インクで「写」と記し左右に横線を引いている(毛筆は赤インクよりも後)」と指摘している。「毛筆」というのは、定稿清書前の段階とみられる(写稿)を踏まえた、22句にも及ぶ本文を有した展開稿(新校本全集校異では下書稿三)のことであるから、赤インクの(写)は口語稿の文語詩化稿(『新校本全集』校異では下書稿二)に与えられたことになる。

14 「法印の孫娘」の本文(最終の手入れと推定される梓囲み等の段階に至る前)を引く。

#### 法印の孫娘

ほっそりとしたなで肩に

黒い雪袴キツペとつまごをはいて

栗の花咲くつゝみの岸を

むすめは一人帰って行った

品種のことも肥料のことも

仕事の時期やいきさつも

みんなはつきりわかっていた

あの応対も透明で

できたら全部トーカーにも撮って置きたいくらい

栗や何かの木の枝を

巨きな松山の裾に

まるで公園のやうなきれいな芝の傾斜にあつて

まっ黒な杉をめぐらし

山門みたいなものもあれば

白塗りの土蔵もあり

柿の木も梨の木もひかかってゐた

それがなからもう青じろく蝕んでゐる

年々注意し作付けし居り候へ共

この五六年毎稲の病氣にかゝりと書いた

あの筆跡も立派だったが

どうしてばくちをやりだしたのか

わざとどしやどしや投げ込んで

おはぐろのやうなまっ黒な苗代の畦に立って

今年の稲熟の原因も

大てい向ふで話してゐた

今日もじぶんで葉書を出して置きながら

どてらを着たまゝ酔つてゐた

あの青ぶくれの大入道の

娘と誰が考へやう

あの山の根の法印の家か

あそこはバグチと濁り酒どの名物すと

みちを訊いたらあの知り合ひの百姓が云つた

それほど村でも人付合ひが悪いのだらう

もつともばくちはたしかにうつ

あの顔いろや縦の巨きな頬の皺は

夜どほし土蔵の中にも居て

並々でない興奮をする証拠である

ぜんたいあの家といふのが

15

近藤晴彦『官澤賢治への接近』（河出書房新社二〇〇二）が「主人公を適当に滑稽化して」いるとし、注7の信時論がこの詩稿をふまえて「大正・昭和の岩手に生きる人々の姿をリアルに、しかしリアルすぎない程度にユーモアを含めて描こうとしていたよ

うに思う」と述べている。

16

「四 昭和恐慌から戦争へ」（山川出版社一九九五）。

或ひは少し村の中では出来過ぎたので

つい横みちへそれたのか

或ひはさういふ遺伝なものか

とにかくあのしつかりとした

新時代の農村を興しさうにさへ見える

うつくしく立派な娘のなかに

その青ぐろい遺伝がやっぱりねむつてゐて

こどもか孫かどこかへ行つて目をさます

そのときはもう濁り酒でもばくちでもない

一千九百五十年から

二千年への間では

さういふ遺伝は

どこへ口火を見付けるだらう

西はうすい氷雲と青じろいそら

うしろでは松の林が

日光のために何かなまこのやうに見え

わづかに沼の水もひかる



#### 4節 定稿化と、詩想の定立と

##### 1 想は定まりて表現未だ定まらず

これまでにみてきたとおり、詩の場に大きな変容がみられたとしても、その場を支える詩想には、深化や発展などといった変質はあるとしても、〈写稿〉段階に到達していた詩想を定稿化でまったく改変してしまふ、といった場合がほとんどないことが分かった。それは、「基本的には〈写稿〉を踏まえて、定稿に向かう」という詩人の態度が、詩の場を支える詩想についても確認できたということである。このことから見とおせるのは、詩人にとって、詩想の定立が表現の定着よりも優先されていた、ということではないか。

つまり、〈写稿〉を撰びとる詩人の眼には、表現の達成よりも、そこに到達してきた詩想の内実のほうの方が重要であった、ということである。そこから、『文語詩稿』を定稿化してゆこうとするとき、その方法の核には詩想の成熟ということがあつたらう。言い換えると、詩想の定立に向かつて表現をととのえてゆくという作業が定稿化によって果たされていったということになる。そうした方法を詩人がとりうる、ということについては、定稿を収容した和紙表紙の詩人による書きつけがてがかりになる。

ただ、それが『文語詩稿』の方法であると言いつてもいい切るものではない。その一端にかぎられて、方法の解明に向けてせいぜいひとつの見とおしをたてる、というあたりにとどまるのであろう。てがかりというのは、次のふたつの文言である。

ひとつは定稿集『文語詩稿五十篇』の和紙表紙に書かれたもので、

本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれど／も現在は現在の推敲を以て定稿とす。

とある。いまひとつが、『文語詩稿一百篇』に書かれた、

本稿想は定まりて表現未だ定まらず。／唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。

というものだ。

これらふたつの文章がはらんでゐる意味の差異については、いまは問わず、「詩想は定まって、詩本文のほうの表現がまだ不足なあるいは定まらないので、現段階の推敲本文をもって定稿としておく」という骨格のほうに注目をしたい。ここにうかがえるのは、詩人の『文語詩稿』における定稿化の方法が、「想」の成熟を承けて「表現」がそれを追う、というものであつたらしいことだ。したがって、定稿

とはいいなからそれはいわば括弧つきのものであって、実質は「現在の推敲／推敲の現状」にすぎない。にもかかわらずなお、詩人がそれを「定稿」とし、詩集にまで編んだのは、どうしてか。もし、その死期の間近なるを予感したからだど、澄ました顔で答えるのならば、その一月ほど後に死を迎える事実をわれわれがあらかじめ握っているからにちがいない。そうではなくて、詩人にはそのような方法をとる必然のようなものがあつた、とは考えられないか。その立場からすれば、詩人は死病を背負いながら、なぜ《文語詩稿》の再編に向かつたのか、という問いからまず答える必要がある。

そのことにかかわつては、《文語詩稿》を途絶させた三二年の闘病生活のなかに示唆もあるはずで、実際にそのときどきの心境を記録した『雨ニモマケズ手帳』を読んでみると、次のような一文が刻みつけられていることを知るのである（44〜46頁）。

巖に日課を定め

法を先とし

父母を次とし

近縁を三とし

社余農村を最後の目標として

只猛進せよ

(10・29の項)

見過ごせないのが、「社余農村を最後の目標として」という点だ。これが最終に位置づけられてあるにしても、法（法華経）・父母・近縁に少なくとも並び立つており、「只猛進せよ」と、そこに立ち向かうことを「巖に」命じられているのである。

花巻農学校の教師として、羅須地人協会の主宰として、そして東北碎石工場の技師として、宮沢賢治の後半生は農村／農民の生活改革に向かうことに費やされた。けれども、すべてに挫折したいま、死病に耐えている身では、その病床で肥料設計に必ずすることくらいしかもうなく、三二年以降、死の前日までそれは実行されている。

ところが、同時に詩人は、「グスコーブドリの伝記」を発表し（三二年）、「風の又三郎」に手を入れる（三三年）などの童話創作に執着しており、また心象スケッチの整理（『春と修羅第二集』の再編）に加えて、《文語詩稿》の再編にも向かっているのだ。肥料設計ほど直接的なものでないにしても、農村／農民の生活改革が世の中の意識改革をも必要とするものであつてみれば、読者を前提としているだろう文学的営為もまた、「猛進」すべきことのうちにあつた、といえるのではなかつたか。すると、《文語詩稿》の再編もそのひとつである、ととらえることができよう。

## 2 「農民芸術概論綱要」の存在

この《文語詩稿》が、「社余農村を最後の目標として／只猛進せよ」という覚悟に根ざしたものであるとき、詩人宮沢賢治が農学校教師を辞して、農村という現場にはじめて踏みだした二六（大正一五）年の出来事が結びついてくる。

そこで立ちあげた羅須地人協会という活動は、「新しい農村の建設に努力する」（『岩手日報』二六・四・一付）ものとして周囲からも認識されていた。もちろん、思いつきではなかった。宮沢賢治には、その一月から三月にかけて開催された、農村青年の育成を目的とした岩手国民高等学校における講義「農民（地人）芸術概論」を整理・発展させた、農民生活の改革原論ともいえるべき「農民芸術概論綱要」という、序論と結論を併せ10章にわたる構想をこの年に手にしていたからである（以下「綱要」とする）。

したがって羅須地人協会活動も、  
おれたちはみな農民である ずるぶん忙がしく仕事もつらい／もつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

という「綱要」の〈序論〉を實踐したものに位置づけられるのである。

だが、二七（昭和二）年には「思想問題」（『新校本宮澤賢治全集』第十六卷年譜篇一月三十一日の記述）に発展したためこの活動の縮小を余儀なくされる。そこで、農業技師・装景者として地域の肥料設計や花壇工作などに専念することによって、改革プランの達成にわずかでも近づこうと努めるが、二八年の夏に結核を発症、やがて病床に就いてその活動は潰えてしまった。それでも、かろうじて小康を得た三一年、あらためて農業技師として、かつて盛岡高等農林学校で関豊太郎博士に学び、その実現を囑望されていた農地の土壌改良のために、石灰肥料の普及・販売に立ち向かう。無謀にも、岩手はもちろん東北各地を奔走し、結果として、起死回生を期したこの活動もまた、九月、病に再び倒れて途絶したのである。

そうした挫折と死病との闘いのはてに、「社余農村を最後の目標として／只猛進せよ」と覚悟を定めて、その残生を農村に向かつて燃やし尽くすことを決意したのである。とすれば、三二年以後の《文語詩稿》の再編に立ち向かう詩人に、農村とまさに向き合おうとしたかつての「綱要」が鮮明によみがえってきたとしても、けっして不思議ではない。

## 3 練意了つて表現し定案成れば完成せらる

「綱要」全体の本意を、具体精密に解く余裕がいまはないが、《文語詩稿》定稿化の方法にかかわりがあるとみられる点について、指摘しておきたい。

まず、「綱要」は、〈農民芸術の本質〉として、

農民芸術とは宇宙感情の 地人 個性と通ずる具体的なる表現である／そは直感と情緒との内経験を素材としたる無意識或は有意の創造である

という。

「宇宙感情」は、「綱要」の〈結論〉にみえる「銀河系を包む透明な意志」にも言い換えるもので、宇宙意志といってよい。〈序論〉の「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」という認識からして詩人にとつては最高位にあるもので、人の個性による表現と宇宙感情とが「具体的」に通じあうこと、それを芸術の本質だという。そのうえで「直感と情緒との内経験を素材」にするのだという。「直感」とは、やはり〈序論〉にいう「銀河系を自らの中に意識」することであり、その直感に地人の生活感情（情緒）が応じたときに生じる内部の経験、それを「素材」にして、「無意識或は有意の創造」——これは無意識の創造から有意の創造への意ととつておくが——、そこに向かうことによつて、「具体的なる表現」は得られるというのだ。

では、無意識あるいは有意の創造過程とは、どのようなものか。

「綱要」〈農民芸術の製作〉では、宇宙感情を「感受した後」に、  
諸作無意識中に潜入するほど美的の深と創造力は加はる／機により興会し胚胎すれば製作心象中にあり／練意了つて表現し定案成れば完成せらる

といい、ここでは、「無意識或は有意」の過程が、次のように分節されていて、内経験（素材）が熟成されつつ無意識中から心象中に至ったところで「有意」となつて現われてくる、といつていいようだ。

・無意識中

・心象中

美的深と創造力 ↓ 興会と胚胎（↓有意）

しかし、製作の要諦はその「意」をどう具体化させるかにあるから、「練意了つて表現し 定案成れば完成せらる」（傍点は島田、以下同）というところに、芸術成立の決め手がある。それは、

・練意了つて ↓ ・表現し

・定案成れば ↓ 完成せらる

ということ、成立までに二段階を踏むことになる。

このように読みとりうるならば、芸術の生成過程において、自らのうちに直感された「宇宙感情／意志」に依じて、それがしだいに言語のかたちをとり、表現の獲得に向かうのには、「意を練り了える」必要があり、過程としては「意」が「表現」よりも先に確立されなければならぬということになる。このとき、先に引用した《文語詩稿》定稿和紙表紙の文言を、呼び起こさせはしないか。すなわち、次のような並置の試みが浮上してくるのである。

練意了つて、表現し

想は定まりて、表現未だ定らざれども

想は定まりて、表現未だ定らず

これを認めれば、農民芸術と定稿化に向かう《文語詩稿》の製作／制作の作法とは、

意 ↓ 表現

想 ↓ 表現

という同一の方向性をもっているといえるのではないか。あるいは、やはり和紙表紙の文言に、

現在は現在の推敲を以て定稿とす。

唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。

ともあった、真の定稿にはなかなかたどりつけないだろうという詩人の自覚も、「定案成れば完成せらる」の、成れば、せらるという苦衷をにじませた言いまわしにこめられている完成に至ることの困難さに呼応しており、これもどうやら両者のありようが重なっている。

「想」を定立してさらに「表現」を高めてゆくという《文語詩稿》定稿化の方法は、<sup>プロセス</sup>「綱要」の応用であったといえそうである。ただし、その困難な道程を、

求道すでに道である

永久の未完成これ完成である

〈序論〉

〈結論〉

と言ひ添えて、立ち向かつてゆく過程そのものに意義あることをはつきり示してもおり、完成が崇高なる達成と位置づけられて、そこに至ることの尊さを強く印象づけている。応用は近道ではないのだ。意／想は、表現と出合うことによつてさらに深められ、深化した意／想がますます表現を巧みにしてゆく、という往復と反復の運動が、そのうちにも延々と展開されてゆくのであろう。あるいは、《文語詩稿》定稿におけるそうした反映のひとつが、定稿用紙上で、二段階にわたるさらなる本文手入れがある、という現象であったと考えるこ

ともできる。

#### 4 宇宙の精神即ち神なるもの

《文語詩稿》定稿化の方法に、「綱要」の態度が反映しているとして、注意すべきなのが、両者の重なる要、あるいは始発に位置しているであろう「宇宙感情」という認識であろう。宮沢賢治は、その半生を、久遠実成の本仏を独自に説く法華經の教えの信行に徹したから、法華經を基軸にした仏教的世界観また宇宙観からその認識が出ているとみて、まちがいあるまい。

たとえ、次のような考え方である。

たゞひとつどうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあつてあらゆる生物をほんたうの幸福に齎らしたいと考へてゐるものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふ所謂信仰と科学とのいづれによつて行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです。すなわち宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐるといふまあ中学生が考へるやうな点です。

(書簡252c下書四、二九年頃と推定、傍線は島田)

ここには、六道あるいは十界を輪廻転生するという仏教の基本的な世界観・宇宙観がその背景にあつて、それは、仏教を受け容れても長い日本人の感覚としてそれほど特異なものではないように思える。ただあえて宮沢賢治らしさを見いだすとなれば、

あらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐる

というような了解の仕方であろうか。

そして、芸術／文学ということについて、宇宙意志の直感／感受から創造の途に就く、という原理もまた、この詩人の独創であつたわけではけつしてない。先人の一人として、たとえば北村透谷がいる。透谷はその「内部生命論」において、「アイデアを事実の上に加ふるものは文芸上の理想派なり。ゆゑに文芸上にては殆どアイデアと称すべきものはあらざるなり」と断言し、「其の之あるは」「瞬間の冥契なり」として、

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは云ふなり(中略)畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎ

ざるなり。(中略)

この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。

と説明している。透谷が、「宇宙の精神即ち神なるものよりして」とストリートにことばを継いでいるあたり、そこに絶対的な信をおいた素朴さといったものを私はみ、そこにも「まあ中学生が考へるやうな」といった宮沢賢治の純情さが重なつてくるように思うのだが、それ以上に、透谷が示している、

宇宙精神↓冥契・感応↓内部の生命・経験・自覚を再造する

とでも整理しうるだろう宇宙精神のみちすじに、

宇宙感情↓直感・感受↓情緒との内経験を有意へと創造する

という、「綱要」における〈農民芸術の本質〉のみちすじとがほぼ符合しており、*inspired* されたふたりの詩人が、その宇宙精神／感情を、言語をもつて「想」を有意な〈想〉に形成してその「表現」へと展開してゆく工程はほとんど重なり合うようにみえる。

また「内部生命論」に先行・密接するもので、

宇宙に精神あるが如く人間にも亦た精神あるなり、而して人間個々の希望は、宇宙の精神に合するにあり、人間世界の最後の希望は全く宇宙の精神に合体するにあり。  
(「頑執妄排の弊」)

という文章があり、これにも、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」とした〈序論〉の考え方がかよってくるだろう。つまり、キリスト教を受容する透谷が「宇宙の精神即ち神なるもの」にしたがおうとした、その延長線上に「宇宙感情の 地人 個性と通ずる具体的なる表現」を求めようとした宮沢賢治の態度を、ひとまず位置づけることができるようにみえる。

## 5 あるいは北村透谷という影

けれども、ここに透谷に直に影響された宮沢賢治がいる、というのではない(その直接的な影響関係を証明するような宮沢賢治文書も伝記的資料も未発見である)。ただ、宇宙言説だけでなくその事績においても、ふたりには、時代も場所もしたがって内実も異なるが、次に掲げるように類似するところがあつて、その対照によつては、詩人宮沢賢治の特性が浮かびあがつてもこよう。

### ▼北村透谷

一八六八・九四・没後日清戦争

### ▼宮沢賢治

一八九六・一九三三・没後日中戦争

聖書

普連土女学校教師 (九〇〜九三?)

『蓬萊曲』自費出版 (九一)

『平和』主筆 (八九〜九三)

『内部生命論』(九三)

『聖書之友雜誌』主筆 (九三)

『エマルソン』(九三・九四刊行)

自死 (九四)

法華經

花巻農学校教師 (二一〜二六)

『春と修羅』自費出版 (二四)

羅須地人協会 (二六〜二七)

『農民芸術概論綱要』(二六)

東北砕石工場技師 (三二)

《文語詩稿》(三二〜三三)

病死 (三三)

(なお、少し因縁めいたことを付け加えておくと、透谷は一八九三(明治二六)年八月に花巻の福井松湖牧師を訪問している。ここには、信仰をもとにして、一方で文学を刻む孤独な作業に向かいながらその試みを世に問ひ、また一方では、現実社会に対して奉仕的な活動を起こしてゆく、ふたりの生きようが相似的に現われていよう。そして、その生を途なかばで閉ざしてしまった、という点でも、ふたりは重なってくる。透谷の死のほうが一〇歳も若い、宮沢賢治も三七歳でやはり早すぎる死だ。透谷の場合、神経を病んでいたが、縊死による明らかな自決である。宮沢賢治の場合、苛酷な精進と過労からきた結核の悪化による死ではあったが、たとえば死の前日にも肥料設計の依頼に応じたほどだから、生への執着はもう断ち切っていた。そうした死の前に、ふたりは次のような作品を、いずれも他者の眼にふれるかたちで書いている。北村透谷の場合は、「露のいのち」と題したほとんど歌謡体のものであった。)

・待ちやれ待ちやれ、その手は元へもどしやんせ。無残なことをなされまい。その手の指の先にも、これこの露にさはるならたちまち棄ちて消えますぞえ。

・吹けば散る、散るこそ花の生命とは悟つたやうな人の言ひごと。

・この露は何とせう。咲きもせず散りもせず。ゆふべむすんでけさは消る。

・草の葉末に唯だひとよ。かりのふしどをたのみても。さて美しい夢一つ、見るでもなし。野ざらしの風颯々と。吹きわたるなかに何がたのしくて。

・結び前はいかなりし。消えての後はいかなりむ。ゆふべとけさのこの間も。うれひの種となりしかや。待ちやれと言つたはあやまち。とく／＼消してたまはれや。

「露」とは、内部生命にしたがおうとしてきた「純聖なる理想家」として、まなざしてきたものの比喩、と考えることはできないか。



すると、この一見軽快な表現に寄り添っているのは、実は虚脱の韻律なのであり、そこには絶望感が忍んでいる、と私には思える。宙つりにされたままの我が理想を、もう終わりにしてくれというのである。ここでは、評論にみられる変則的な漢文脈から遠く離れ、また「露のいのち」に先行する抒情詩群の定型文語脈とも異なっており、これまでの透谷流の文体が棄てられている。俗謡や口語脈を内蔵したこの文体が、たぶんこのときの身の丈にあったことばだったのだ。

「露」といい「消してたまはれや」という。この詩の場は、なるほど抒情的な衣装をまとっているが、それを支える想は、いかにも脆弱で想の形骸が横たわっている、そのような感じがする。想の内実が希薄なのである。余裕ともほど遠い。そこにあるのは、内部生命をいまや放棄しようとしている詩人のすがたなのではないか。

宮沢賢治のほうは、死の二日前に父にすすめられ、絶筆として、次の短歌2首を半紙に認める。

・方十里稗貫のみかも

稲熟れてみ祭三日

そらはれわたる

・病いづまきのゆゑにもくちん

いのちなり

みのりに棄てば

うれしからまし

この年九月一七日から催された、鳥谷崎神社による三日間の花巻祭は快晴であり、実際には、稗貫郡のみならず県下大豊作の年となりとなり、1首めの軽快な表現は、外部の気配と詩人の内部（祈念）とが相乗して得られたものだろう。2首めでは、そのいのちも「みのりに棄てばうれしからまし」という。みのりは実りであり、御法である。これが反実仮想表現であることを踏まえれば、今年の豊作が来年も再来年も来るとはかぎらないその現実を見据えて、半生をかけてきた農村の改革も法華経の信行もいまだ途中なのだ、という詩人の意思表示とみななければならぬ。この表現を支えているのは、やはりあの「社倉農村を最後の目標として／只猛進せよ」と定めたところからきている、確固たる想だったのである。

優劣とか是非とかをいうのではない。

これらの作品だけで、死を前にした彼らの心境を充分にまた精確につかめるはずもないが、少なくともその趣の異なりほどは指摘できない。そこに感じられる差異というのは、個人の性格の多様性などに帰してしまおうわけにはいかないところがある。個性などでのり超えきれぬ時代という壁が、立ちはだかっていたのだから。維新が引き起こした「移動」(「漫馬」)の時代にもたらされてくる暗部を懸命に

生きぬこうとした北村透谷と、帝国主義に向かう時代が置き去りにしてきた「農村」という暗部に立ち向かおうとした宮沢賢治とに与えられた、それぞれの試練の異質さである。抽象的課題と具体的課題との差異といってもよい。

## 6 透谷、「実」から「想」へ

明治という時代は、日清・日露両戦争に勝利して、富国強兵という実質を達成する。文明開化の合い言葉による「実」が求められた時代だった。その草創期を北村透谷は生きる。だから、透谷もはじめ、自由民権の政治活動家として凄まじい「実」の世界にあった。けれども、結局彼はそこから離脱する（一八八五（明治一八）年）。その挫折体験や、その後の恋愛、キリスト教入信という出来事が透谷を文学へ誘い、教会との確執のなかで「想」の世界に立ち合っていたようだ。

そのたどりついたところが「内部生命論」であるが、その間の動きはいまは略すこととして、宇宙精神に感応した内部生命の持ち主は、その論を締めくくって、

再造せられたる生命の眼を以て観る時に、造化万物何れか極致なきものあらんや。（中略）何物にか具体的の形を顕はしたるもの即ち其極致なり、万有的眼光には万有の中に其極致を見るなり、心理的眼光には人心の上に其極致を見るなり。

という。「極致」とは永久不変の存在であろうか。それは、神ともにもある「想」の具現とも言い換えるにちがいない。それを手にしうる地位に透谷は立ち得たのだ。それなのに、半年も経たぬうち、あの「露のいのち」にかいまみえるような、内部生命を放棄しようとする詩人のすがたが現われてくる。もっと端的にいえば、透谷はそのとき信仰を喪おうとする最大の心の揺れに立っていたのではないか、ということである。

疑いを導くところのものは、すでに「内部生命論」のうちに巣くっていたようにも思える。

内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり

宇宙精神<sup>14</sup>神との冥契を結ぶ内部生命そのものが、神のほかは動かせないという。詩人も哲学者も、どう踏んばったところで神の業に及ぼすはずもないという。つまり、詩人透谷はどうしても受動者なのである。平岡敏夫が新保裕司の次の指摘を引いている。<sup>14</sup>

透谷は、内部を発見したのではない。内部を動かす神という絶対的外部をつかんだのである。

「移動」の時代を、「絶対的外部」を戴いて闘う。その意味では、木偶の如く生きようを、一方で「精神の自由」（「明治文学管見」）を

人間の本质としてつかみだし高く掲げようとした詩人透谷が、徹底して引き受けられようとは思えないのである。ならば、「露のいのち」と同時期に発表された「一夕観」のなかに、冥契と自由との最後のせめぎ合いを読みとってはならないだろうか。その終末の部分を引く。

漠々たる大空は思想の広ろき歴史の紙に似たり。(中略) 吁、悠々たる天地、限なく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に対して暫らく茫然たり。

ここには宇宙の精神と向かいあっている透谷がある。しかし、「暫らく茫然」とするばかりで、なにかを語り継ぐこととはしない。ここに『大いなる現実』の一端につらなりつつ、それを凝視、実感している透谷をみる平岡敏夫は、さらに西谷博之の論を要約して「(永遠)の前に立つ(単独者)を見出し」「観念としての(自我)が(実存的自我)に変容した」透谷像を掲げる。だがもう一步踏みこんでいえば、私には、神との訣別がいまにもなされようとしているかの、これは孤絶した光景なのだと思われてしかたがない。最後に取り組んだ『エマルソン』も未完成のまま提出をして新たな針路をそれ以上に模索する間もなく、透谷は「我が事終れり」とした。あの「内部生命論」には「(此論未完)」とあったのだけれども、それを超える「想」世界の追求は、その死によってついにそのままに置かれてしまったのである。

## 7 賢治、〈想〉から〈美〉へ

明治という「移動」の時代にその中核都市にあつて、新たな文学を生みだす基盤ともなったキリスト教という制度のままで、立ち尽くした透谷は、その徹底した近代的自我による独創的文学を豊かに円熟させることなく、時代の閉鎖性に批判的に立ち向かったあの浪漫性や思想性も、『文学界』の仲間たちにただしく継承されることがなかった。宮沢賢治も、大正末から昭和の初めにかけてやはり閉塞してゆく時代のなかにあつた。かつて妹の死によってその信仰に深く揺れたこともあつたが、晩年はむしろそれを踏みしめながら、辺境の地にあつて半ば孤独に童話と詩の制作に集注しつづける。あるいはそれらを「法華文学ノ創作」と認識していたのかもしれないのだが、そのひとつに定稿集としてまとめ差し出した『文語詩稿』があつたといえる。

では、それが向かおうとしたさきはどこであつたのか。それもやはり、「綱要」の〈序論〉のなかにすでにみえていたように思える。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない／われらは世界のまことの幸福を素ねよう

などということばだ。向かおうとするところは、「まことの幸福」なのである。そして、このふたつのことばの間には、

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである

とあって（傍線は島田）、直感した宇宙意志に「応じて現に実行する」という能動的に対処することを自らに課している。したがって、再編以後の《文語詩稿》という仕事が、「綱要」の理想を承けた農村改革に向かう《詩の実践》としてとらえられてもよいのではないか。そこには、眼の前にある農民の人間性を回復しようという志が秘められており、抑圧の時代への批判が根底にある。その意味では、透谷が志していたところのやはり延長線上に位置づけられうるとみえる。ただし、農民芸術の成立による「まことの幸福」の実現ということが、この《文語詩稿》定稿化の直接の主題であったわけではない。それは詩人にとって到達すべき、

最終のもの

（書簡252c下書四）

ということであって、《文語詩稿》における達成はそこに至るひとつの階梯としてあるにすぎない。「最終のもの」が判然としているのだから、それに向かう行動がもし曖昧なら迷走を招くほかない。このように考えてみると、宇宙意志なるものが、詩人の内部でまず言語化され《想》として定立してゆく、そのことが詩人にとって重要だった意味もおおよそ見とおせるのではないか。《文語詩稿》定稿のひとつひとつがなにを志してゆくのか。それを明確に認識することが「最終のもの」に向かう手順としては先行しよう。もちろんそれだけで《想》の先行を説明しえないが、一要因として考えられてよい。また、《想》の定立による詩の場の構築が、さらなる《想》の深化をもたらしうるとともに、それが《美》に至るためには欠くことのない前提だ、ということにも気づくべきであらう。《想》が《美》に至るとは、「まことの幸福」に向かう階梯を一段また一段と着実に昇ってゆくことであり、それは実際に、

人々の精神を交通せしめ、その感情を社会化し遂に一切を究竟地にまで導かんとする（農民芸術の本質）

というものでなければならなかった。つまり、《文語詩稿》の再編とその定稿化において、詩人がまずはかった《想》の定立が、《美》に向かつて機能する詩の成立には必要な工程だった。そうして確かに遺されたのが、ふたつの定稿集だったのである。

たとえば、次に引くのは、『文語詩稿五十篇』に収まっている無題の詩稿である。

①うからもて台地の雪に、  
部<sup>シニク</sup>落なせるその杜<sup>シニク</sup>駒し。

②曙<sup>トほつおき</sup>人、馮<sup>の</sup>りくる児<sup>の</sup>らを、  
穹<sup>の</sup>隆ぞ光りて覆ふ。

こんなふうにも意をとることができようか。

飢饉<sup>けいかつ</sup>の風土にあつて、村は運命共同体である。そこでは人々が気概の血脈を連綿とつないできた。いまもそれを受け継ぐ児らがあの  
駒い杜をさかんに駈けぬけてくる。そして、天空は、児らを、村を、この台地を、輝きながらしつかりとつみこむ。

これは、「人々の精神」が交通し「その感情」が社会化している村落、〈美〉の具現したすがたをとらえようとしている、といえないだ  
ろうか。いわば、ひとつ上の「意識の段階」を先取りしたとみえる、この詩の場を支えている〈想〉とは何か。的確に説明するのは難し  
いけれども、たとえば、「綱要」の〈農民芸術の綜合〉には、

おお朋<sup>の</sup>たちよ 君は行くべく やがてはすべて行くであらう

という、「連帯と前進と」を呼びかけることばがあつた。この詩稿は、たぶんそこに連なるものなのである。

おわりに

こうして、詩想の定立を先行させようとするありようは、極端にいうならば、表現の後追いを許している、という情況もあつたらうこ  
とを想像させる。それが、

・表現未だ足らざれど／も現在は現在の推敲を以て定稿とす。

・表現未だ定らず。／唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。

『五十篇』

『一百篇』

とした認識であつたようにもみえる。清書された定稿本文に対しても実際推敲がおこなわれ、しかもブルーブラックインク↓青インクと  
いう2段階の手入れがあつたことを、新校本全集校異は指摘している。あの無題の定稿群もまだ命名の途上なのであり、題名の模索をつ  
づけている「現在の」「現状」だと考えられてもよい。ただ、そのような「現在の」「現状を以て」した定稿に働きかけられる本文手入れ

は、詩想の定立から確立に向かうことにちがいはないが、定立した詩想がただ延長上に固められてゆく場合だけでは当然なからう。詩想を実現しようとする表現の進化が、かえって詩想を刺激してさらなる深化に向かう契機をもたらす場合もあるにちがいない。それらが「最終のもの」を志そうとする針路に逸れるものではないとしても、深展した詩想があらためて表現の充足をうながして、詩の場の変容はかぎりなくくりかえされてゆく。

推敲の無限性は、

定案成れば完成せらる

〈「綱要」〈農民芸術の製作〉〉

とした詩人の理想の過程に内包されているものであるが、それはまた、無量・無辺の信仰世界を歩む過程にもまさしく重なっているのではなからうか。

(注)

- 1 『文語詩稿五十篇』の和紙表紙は現存しないが、失われる以前に文言が写しとられて、最初の全集である文圃堂版(一九三五)に収められた。
- 2 ちくま文庫版『宮沢賢治全集10』(一九九五)の「宮沢清六編年譜」による。
- 3 「農民芸術概論綱要」は、序論・農民芸術の興隆・農民芸術の本質・農民芸術の分野・農民芸術の(諸)主義・農民芸術の製作・農民芸術の産者・農民芸術の批評・農民芸術の総合・結論からなる。
- 4 『文学界』一八九三・五。本文は岩波文庫『北村透谷選集』(一九七〇)、以下、透谷本文の引用は同書による。
- 5 「内部生命論」が載った『文学界』に先行して載る。
- 6 高橋直美「北村透谷と宮沢賢治」(北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』所収、笠間書院二〇〇四)が両者の信仰を軸に对照をしている。
- 7 一八九三年には藤村に代わり明治女学校に(も?)出校する。なお『平和』・『聖書之友雑誌』主筆時代、平和活動や伝道活動の実践者としてあった。
- 8 色川大吉『北村透谷』(東京大学出版会一九九四、新装版二〇〇七)、平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』(有精堂一九九五)。
- 9 『文学界』一八九三・一一。
- 10 注7の平岡論は「近世の歌舞伎・浄瑠璃・歌謡などの文体を用いる方法意識は、(露のいのち)に対する『優しくして脆き心』(「偶思録」)による相対化であろう」という。

11 『文学界』一八九三・一〇。

12 榎林滉二『北村透谷研究 絶対と相対との抗抵』(榎林滉二著作集1和泉書院二〇〇〇)の第三章第二節の「(2)内部生命論」の基底・キリスト教受容の階梯」で、教会(また宣教師)にある談理・形式・独善を否定する透谷が指摘されている。

13 注12の同書。第一章第二節の「(2)北村透谷における背理・信と不信のはざま」や第三章第一節の「(1)内部生命論の流れ・北村透谷を中心にして」において、おおむね三段階に整理されている。

14 注7の平岡論、新保論「透谷における『他界』」(『文学』一九九四・四)。

15 宮沢賢治には、「雨ニモマケズ」(同手帳)に次の詩句があった。

ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ

これは、農村に起きた不幸に精一杯尽くし、収穫の不安をともに引き受けようとする存在としての木偶の坊である。「ゼンたい幸福にならないうちは」(綱要)序論、無私の行為に徹しようという覚悟の表明とみえる。

16 「評論」(一八九三・四〇五)に発表。その「二、精神の自由」に、次のような一節があった。

精神は自ら存するものなり、精神は自ら知るものなり、精神は自ら動くものなり、然れども精神の自存、自知、自動は、人間の内にのみ限るべきにあらず、之と相照応するものは他界にあり、他界の精神は人間の精神を動かすことを得べし、然れども此は人間の精神の覚醒の度に応ずるものなるべし。

少なくともこれは、人間の精神の自由のほうを主としたうえで、他界との照応にかかわる発展性を提示しているだろう。また、注12の同書、第一章第一節の「(1)透谷論理の道程・近代開示の一視角として」において、「明治文学管見」に遠くない「真・対・失意」(一八九二(明治二五)・七)に「わが内に『我』の全き時にわれは天地よりも大なる矣」とあるのを引いて、榎林氏は「凄まじい『我』尊重論で、それは『天地』より大なると言っているのである」と指摘している。近代人／北村透谷の土台には自我の尊重が本質としてあったことは疑いようがない。

17 「評論」一八九三・一一。

18 注7の平岡論。西谷博之氏の論は、『漫馬』『一夕観』に観る透谷の現代性」(北村透谷研究会編『透谷と近代日本』所収、翰林書房一九九四)。

19 永渕朋枝『北村透谷 「文学」・恋愛・キリスト教』(和泉書院二〇〇二)の「透谷におけるキリスト教」で、氏は、「一夕観」では、「彼と我との距離甚だ遠きに驚く」と書かれる。(中略)信仰、生を支えていた「心」が、土台から崩れていったのだと思われる。

という理解を示して、信仰のみならず、生への執着もまた喪おうとしている、ぎりぎりの透谷が現われている可能性を示唆する。

20 注7の平岡論第七章、『エマルソン』未完成問題」参照。また、榎林滉二「透谷と『エマルソン』」その最後の闘い」(注8

の『北村透谷とは何か』所収)は、最終の第六章「エマルソン小論」が「その最後を「斯くの如くエマルソンの地位はカアライルの地位に異なれり。」と結んでいることについて、氏は「思いはやはり「カアライル」にあった」かと推論して、

「エマルソン」を著しながら、どうしても整理しきれない心が最後に噴出したのではないかとも思われるのである。／(中略)もとより、透谷の生はまさしくカアライル的であった。しかし、理はエマーソンのであった。するとそこで問うべきは、それらの展開論ということになる。

と指摘する。透谷は新たな針路を見据えながらも、そこに向かつてはもう踏み出すことができなかつた、ということであろうか。

21 『雨ニモマケズ手帳』(135頁)に次のメモがあつた。

22 ◎高知尾師ノ奨メニヨリ／1、法華文学ノ創作／名ヲアラハサズ、／報ヲウケズ、／貢高ノ心ヲ離レ、／2、(以下なし)

《文語詩稿》未定稿を收容してしたのである。黒クロス表紙Cに、  
文語詩稿／本稿想未だ熟せず 表現／本より定まらざるもの／発表を要せず

との文言がある。「想未だ熟せず」もの「発表を要せず」という。ならば、「想」の熟した「定稿」は「発表を」前提としていたとみてよいのではないか。



第4章 原詩集の輪郭

はじめに

本章は、鉛筆・赤インクによる〈写稿〉をもとに定稿化されたおおよそ100編<sup>1</sup>が、仮に〈定稿・百編〉とも呼称すべき段階を形成しつつ、それが「文語詩稿」における原詩集として位置づけられるものであった、という仮説のもとに、〈定稿・百編〉の詩集としての輪郭を明らかにする試みをなして、原詩集の成立が実体性をともなったものである可能性に迫る。

1節は、定稿開始形の本文が、定稿としてどれほどの強度をもつて成立したのかを、詩稿題名と詩稿本文との起稿段階の実態を分析するとともに、〈定稿・百編〉という原詩集がどのような構成をもつて成立しようとしていたのかを、自然・田園・生活という詩篇分野を仮定して、その枠組みを明らかにする。

2節では、農村改革への志を抱きながらも、病床にあつた詩人が、〈詩的実践〉として取り組み、まとめようとしていた〈定稿・百編〉が、農村／農民詩集として特化されず、むしろ自然・田園詩篇を上まわつて採用されている生活詩篇について、その位置づけを試みる。

3節では、〈定稿・百編〉の性格として、風土性と時代性とに着目し、特に「馬」詩群をとりあげて考察をおこない、その一端を明らかにする。

4節では、〈定稿・百編〉に現われている社会詩篇としての傾向をとらえ、その意義を探って、詩集構想の一端に迫る。

5節では、自然・田園・生活・社会として設定する詩篇分野を超えて存在する、自伝性の強い信仰詩篇の意味について考察する。

1節 〈定稿・百編〉の成立

1

一九三三（昭和八）年六月以降、まず定稿化されていったものと推定する（定稿・百編）の、その本文成立の実態からみておきたい。まず、もっとも早い「年譜」の三三年六月から八月の項を引く。ただし、そこには誤りが1か所ある。「八月二十五日、「文語詩稿」百篇を推稿選す」というのは『文語詩稿百篇』を指しているから、二二日が正しい。定稿を挟んでいた和紙表紙の詩人の記述を確認すれば、これはすぐに判明することであり、作為というよりも勘違いによるものである。

昭和八年 三十八歳（一九三三）

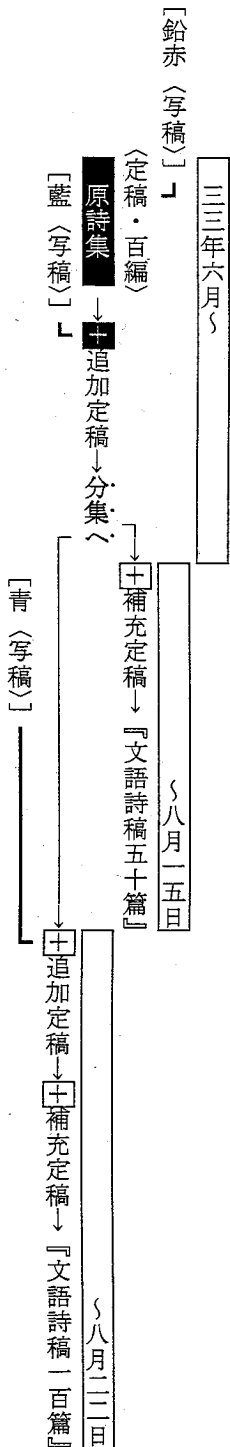
△ 六月、詩稿及文語詩の浄書を始め、自製の原稿用紙にて二百枚以上に達す。

△ 七月、「岩手女性」に詩「花鳥図譜七月」を発表す。

△ 八月十五日、「文語詩稿」五十篇を推稿選す。

△ 八月二十五日、「文語詩稿」百篇を推稿選す。未定稿約八十篇あり。

これを見ると、〈定稿・百編〉は、六月から浄書に入ったものの、どうやら定稿の数が膨脹してゆき、八月には五十篇と百篇とに定稿集が分集されてゆく。つまり、『文語詩稿』と命名されたふたつの詩集へと発展してゆくのである。その発展の過程は本研究最終章で見とおすことになるが、その過程における〈定稿・百編〉の位置を示すと、



という、ふたつの『文語詩稿』の原点にあることになる。あらましをいえば、鉛筆・赤インクによる〈写稿〉による〈定稿・百編〉に、ブルーブラックインクによる〈写稿〉の定稿化が追加されており、詩集は分立して『五十篇』が成立、その過程で青インクによる〈写稿〉が形成されて、『二百篇』に定稿として追加される、そのようなながれである。

先の「年譜」によれば、この過程における詩稿の生産工程もうかがえそうである。六月の「詩稿及文語詩の浄書を始め、自製の原稿用紙にて二百枚以上に達す」という記述がてがかりだ。その「詩稿」とは、『春と修羅第二集』を主軸とした心象スケッチ群を指していよ

うが、定稿用紙を用いた作品数が60編、用紙は72枚である。「文語詩」の定稿のほうは、用紙1枚で足りているから151編151枚であり、合算すると223枚に及ぶ。この符合は、もちろんのこと「六月に」とは限定されていないので、六月中に「二百枚以上に達した」と読む必要もないであろう。「浄書を始め、…に達す」という表現形式は、

六月、詩稿及文語詩の浄書を始め（てから、ついに）は（二百枚以上に達す）

という理解を許すものだからである。要するに、六月から八月にかけて、口語稿と文語稿の定稿が「二百枚以上に達した」と読める。それでも、「文語詩」にかぎっていえば、2か月と20日あまりの回数にして150編（実際には151編）の定稿に到達したのだから、一日平均2編近くを毎日仕上げている計算になる。

この速度を支えていたのが、ウル定稿としての〈写稿〉の存在であつたらうと、一応は納得できる。だがそれにしても、その結果成立した定稿本文の、その定稿性の強度は果たして充分なものであつたのだろうか。少なくとも〈定稿・百編〉の場合、その構成稿の成立が、その本文に強度を与えられていないものであつたとすれば、名称もまだ与えられぬ原詩集としての実体とは、危ういものとみななければならない（ただ詩人の内部に「文語詩篇」という命名が残響していた可能性はある）。

たとえば、3章の2節において論じたとおり、詩人が命名への意欲をもっているとする立場からすると、詩稿本文に対して詩稿題名が与えられているか、否か、というのは、定稿性をはかるひとつのめやすにはなろう。詩想への導入口ともいえよう「表題」が命名されないう詩稿は、一般的な立場では、本文構成としての大きな要素を欠いているといえようから、その定稿性は少なくとも強度不足を指摘するほかないだろう。すると、すでにその実態をみてきているように、定稿開始形では、

題名	あり	59編
題名	なし	41編

という状況がある。つまり、詩稿題名の未決から、五分の二が定稿性の強度不足をかかえている、ということになる。ただし、3章でみてきたとおり、定稿化の過程で、〈写稿〉によって熟成がはかられた詩想を、定稿はほぼ受容しているということがある。定稿性の強度不足とは、表現上の課題であつたとみなしてよい。

このとき、気にかかるのが起稿時の書きながら手入れが、題名を未決にしたままの詩稿群と、題名をいただいた詩稿群とで、やはり差があるということである。起稿時（書きながら）手入れについて、無題稿・有題稿それぞれにおいてみると、

書きながら	無題稿	有題稿	
			計

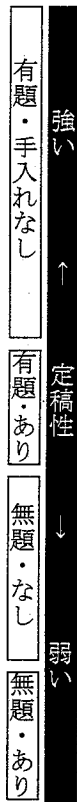
手入れあり	17	15	32
手入れなし	24	44	68

という実態が現われてくる。これを読みかえれば、

無題稿 41編 書きながら手入れ 17編 41・5割  
 有題稿 59編 書きながら手入れ 15編 25・4割

ということになり、命名の果たされた詩稿には明らかに手入れが少ない。つまり、有題稿の詩稿本文のほうが相当安定的だったということであって、より定稿性の強度があると認められるべきであろう。

これをみると、〈定稿・百編〉の開始形は、題名を有し起稿時の手入れもない44割の詩稿が確定したかたちで定稿本文を成し、有題稿の15割が起稿時手入れによって定稿性を確保しようとしている、といえる。すると、開始形本文の定稿性の強弱は、



というような実態が想定できる。題名も手入れもままの詩稿が強度不足であるか、どうかは判断しにくい、詩稿題名のみを課題としているものとみれば、詩稿本文としては定稿性すでに確保しているとみられ、手入れのあった無題稿も詩稿本文の定稿性を高めようとする努力が起稿時段階ですでおこなわれている、といえるのである。

具体的に有題稿で手入れなしの作品をあげると、

砲兵観測隊	悍馬(一)	退職技手	来賓	初七日	著者	雪の宿	聚雨
村道	民間薬	母	岩手公園	祭日	保線工手	ポランの広場	巡業隊
夜	医院	早儉	老農	早春	林館開業	コバルト山地	市日
磨坑	副業	塔中秘事	病技師(一)	柳沢野	連鎖劇	峽野早春	短夜
開墾地落上	悍馬(二)	国土	四時	羅沙売	臘月	牛	式場
氷上	電気工夫	賦役	卒業式				

などが、定稿性の強い詩稿群としてあることになる。

逆に、定稿性の弱い詩稿群として、無題稿で手入れのあつた作品を掲げれば、次のようである。

- |                 |                   |               |               |
|-----------------|-------------------|---------------|---------------|
| 〔いたつきてゆめみなやみし〕  | 〔氷雨虹すれば〕          | 〔たそがれ思量感くして〕  | 〔夜をま青き蘭むしろに〕  |
| 〔あかつき眠るみどりごを〕   | 〔林の中の柴小屋に〕        | 〔あな雪か屠者のひとりは〕 | 〔川しろじろとまじはりて〕 |
| 〔血のいろにゆがめる月は〕   | 〔僧の妻面膨れたる〕        | 〔吹雪かゞやくなかにして〕 | 〔沃土ノニホヒフルヒ来ス〕 |
| 〔みちへの苔にまじろめば〕   | 〔老いては冬の孔雀守る〕      | 〔秘事念仏の大師匠〕(二) |               |
| 〔玉蜀黍を播きやめ環にならべ〕 | 〔腐植土のぬかるみよりの照り返し〕 |               |               |

2

では、定稿性を確保する、あるいは高めるものとみた、詩稿本文に対する起稿時の手入れ実態は、どうであるのか。

開始形本文は、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」1編以外、ブルーブラックインクによる起稿である。その開始形のなかで、「書きながら」(『新校本全集』第七巻校異)とみるブルーブラックインク起稿時の手入れがある。その手入れ内容の状況として、推敲の規模について、

詩句 本文を構成する詩句単位のレベルで推敲されている場合。

語句 一句を構成する語句レベルの推敲、3文節程度まで。

ルビ ルビに対する推敲。

表記 漢字かな・句読点・括弧など、表記レベルの推敲。

と分別し、推敲の内容については、

変更 詩想的な選択行為とみられるもの。

調整 表現的な整理行為とみられるもの。

訂正 誤記などの是正行為とみられるもの。

という類別をおこない、判断できないものを「？」として、その実態を整理してみる(資料篇Ⅲを参照されたい。また「腐植土のぬかるみよりの照り返し」は、青インクによる起稿と手入れによる例外的な1編であるが、ここではとりあえず含めている)。すると、左のとおり、32編に対して51か所に及ぶ手入れがみられるのであつた。

	変更	調整	訂正	?	小計
詩句	・	・	・	・	0
語句	7	17	10	5	39
ルビ	・	・	1	・	1
表記	2	4	5	・	11

これはけつして少なくはない数であろうが、「詩句」レベルでの大規模な推敲がみえないこと、推敲内容も「調整」や「訂正」といった保身的なものが圧倒的であること、などから、起稿時（書きながら）手入れが、実質的に表現上の小幅なものにかぎられたものであることが分かる。3章1節で分析したように、〈写稿〉の定稿化にあたってその本文をおおむね安定的に受容した定稿において、その開始形本文もまた、軽微な起稿時の手入れによっても、安定的な傾向にあるといえる。つまり、その詩稿本文については、定稿性をおおむね確保して、定稿開始形は成立していったということである。

具体的に入力の実態をみよう。

起稿時（書きながら）の手入れのうち、内容として重いのが、「変更」と指示したものである。そのなかで、「語句」規模の手入れについてみると、たとえば、次のような場合があった。

- ・「ことば」から「神祝にどよもすべけれ」。
  - ・「山↓雉」なりき青く流れし」。
  - ・開化郷土と見ゆる「ひと↓もの」。
- (一)氷雨虹すれば(一)  
(二)あな雪か屠者のひとりは(一)  
(三)車中(一)(一)

「ことば」から「神祝」へ、「山」から「雉」へ、そして「ひと」から「もの」へ、という手を入れかたを、一見すると、詩の場の設定にもかかわる「変更」のようにとらえたいくなる。

だが、「氷雨虹すれば」の場合については、〈写稿〉段階以後、〈写稿〉上には「神代なることばにひゞかす」と「ことばもてどよもすべけれ」という、定稿清書前の手入れ案が示されていたのである。詩人は、この草稿を傍らに置いて、定稿に起稿するに際し、前者の詩句案に決しながらも、「ことばもて」には後者の「神祝に」の語句案をあてる、という推敲をおこなったものと推理されよう。詩人は、詩の場に強調をかける方向を選んだのである。

また、「あな雪か屠者のひとりは」の場合は、〈写稿〉段階以後「山鳥よ青く流れし」に落ちついた詩句を採用するつもりで、定稿に「山

(鳥よ)と起稿しかけて、不意にそれを「雉なりき」と「変更」したとみられる。このとき、「青く流れし」という場によりふさわしいものとして、かつての記憶がよみがえったのではなかったろうか。それは「小岩井農場(パート四)」の一節に、

亜鉛鍍金の雉子なのだ

あんまり長い尾をひいてうららかに過ぎれば

もう一疋が飛びあがる

山鳥ではない

(山鳥ですか？ 山で？ 夏に？)

あるくのははやい 流れてゐる

オレンヂいろの日光のなかを

雉子はするするながれてゐる

とあった、流れるように現われてきた夏の雉子のすがたである。それがここでも、晩秋に近い月光の夜に「青く流れ」ていったものとして、山鳥でなく、やはり「雉」がふさわしいとされたのである。

さらに、「軍中」「二」の場合では、「開化郷士と見ゆる」人物を指して、「……というひと」でなく、「……というもの」とすることに よって、より批判的なまなざしを加えようとしたと考えられる。それは、たばこをくゆらし豪語放談している「開化郷士と見ゆる」人物 に対する不愉快がもともただようこの詩の場を強化するものである。

このように考えてくると、起稿時手入れによる「変更」とは、詩想の改変によって詩の場の変容に向かう、といった劇的なものではないといえる。

次に、「表記」の規模の場合を引くと、

・[・↓] [雪やみて朝日は青く、かうかうと僧は看経。]

(僧の妻面膨れたる)

・[・↓] [いまはとて異の銅鼓うち、晨光はみどりとかはる。]

(僧の妻面膨れたる)

という、僧の動きにのみ括弧を加えるという「変更」で、これによって僧の妻との対立が鮮明になってくる。これも場面を強調性する手 入れであって、詩の場を変容するほどのものではない。

こうした「変更」のありように比べると、「調整」や「訂正」については、もとより詩の場を脅かすものではない。 たとえば、「調整」には、

・しとみ上 [げ↓・] ぐれば川音や、

(あかつき眠るみどり)を(

・そは牛飼ひ [て↓] 商ひつ、

(萎花)

▲語句 ▲語句



・降り「來↓」くる雪の綿なすは、  
 ・手触れ得ず「↓・」十字燐光、

(「老いては冬の孔雀守る」)  
 ▲表記  
 (「中尊寺」)  
 ▲表記

などの例がみえ、文語整備や助動詞選択、漢字・かな選択や読点の撤去といった内容である。  
 また、「訂正」としては、

・声を「ぢーち」ゞれの髪を恥ぢ、  
 ・団「↓弁」護士もホップ嘔む、  
 ・ひさげのこりし桃の顆カクの、  
 ・まひるをひとらうちをどる。「↓」  
 ・淨き衣せした「わ↓は」れめの、

(「夜をま青き蘭むしるに」)  
 ▲詩語  
 (「萎花」)  
 ▲詩語  
 (「あかつき眠るみどり」を)  
 ▲ルビ  
 (「玉蜀黍を播きやめ」)  
 ▲表記  
 (「齒科医院」)  
 ▲表記

などの例があり、誤りや不足の表現訂正がほとんどである。いずれにしても、詩の場を変容させるための手入れでなく、詩稿本文を整備する範囲内のもとみてよい。つまり、規模的にも内容的にも、起稿時(書きながら)手入れのおおよその傾向は軽微である、といえる。  
 このように、その手入れのありようを確かめてみると、定稿開始形における詩稿本文は、その起稿段階からすでに、相当確立された詩想とその表現をもって現われてきた、という印象を強くする。それぞれの詩稿が定稿としての強度をある程度具えたかたちで成立しつつ、〈定稿・百編〉は形成されようとしているのである。

3

この〈定稿・百編〉を原詩集として位置づけるとするならば、それが厳密なものではなく、緩やかなものであったとしても、やはり、ならんかの詩集としての枠組みがあった、と考えなければならぬ。〈集〉として、それはまとまりをもっているはずなのである。

詩人にはすでに詩集として、『心象スケッチ 春と修羅 大正十一、二年』(二四(大正一三)年四月)があった。農学校教師時代の産物であるが、心象スケッチはその後も記録しつつづけられ、二八(昭和三)年夏の発病まで書き継がれ蓄積されていたとみられる(番号は与えられていないが、「一九二八、七、二四」の日付をもつ「穂孕期」がある)。病の小康を得た三〇(昭和五)年には、その心象スケッチ群を、詩人は第二・第三の〈集〉としてまとめようと考えていたらしい。草稿を収容した6種の黒クロス表紙には、それぞれにいくつもの書きつけがあるが、そのなかに次のものがあつた。

心象スケッチ春と修羅第二集 大正十三年大正十四年  
春と修羅第三集 自昭和元年至四年

(墨の段階、黒クロス表紙D)  
(鉛筆の段階、黒クロス表紙C)

「第二集」といい「第三集」という、詩集構想の明らかな提示である。これらの口語稿群は、「第二集」分が定稿用紙に展開する段階まではすすむが、「第三集」分は文語化などによって解体され、結局それらは〈集〉として完成するに至らなかった。  
この黒クロス表紙のなかには、三〇年前後に着手された文語詩制作にかかわることについても記述したものがある。

文語「スケッチ↓詩篇原形」 明治四十三年至昭和五年 (赤インクによる段階、新校本全集校異による黒クロス表紙B)

という、時期設定まで示しているが、ここには〈集〉としてまとめようという意識をうかがいにくい。さらに別の黒クロス表紙Aには、次のように書きつけられていた。

文語詩篇「・↓双四聯」(「文語詩篇」赤インク、「双四聯」藍インクによる補記、黒クロス表紙)

ここでは、「双四聯」体の「文語詩篇」を収めるという指示を読みとれる。一括して収めようというのは、〈集〉を前提としたものであろうから、「文語詩篇」という名称に、ブルーブラックインクで「双四聯」という詩形にかかわることばを加えた段階で、詩人はその詩集構想の方向性をにじませているのである。「双四聯」とは、再編段階に展開した「社会主事佐伯正氏」の下書稿四の用紙ウラに次のように記されたもので、新校本全集は詩法メモ3に指定している。

文語詩双四聯に関する「研究↓考察」

- 一、概説 文語定型詩、双四聯、沿革、今様、藤村、夜雨、白秋
- 二、双四聯に於る起承転結
- 三、格律、単句構成法、
- 四、韻脚、

定稿表記としては、4句で1連を構成する2連形を「双四聯」と想定するが、〈定稿・百編〉段階においてそれは、詩形としては35

編を数える。黒クロス表紙で「文語詩篇 双四聯」とした記述段階からみれば、〈定稿・百編〉という〈集〉の詩形を支配するほどでなく後退したかにもみえようが、《文語詩稿》が最終的に到達した定稿151編のなかでは61編にまで及んで、その詩形式を主導している。つまり、「双四聯」という黒クロス表紙段階の指示は定稿群の発展段階でなお生きつづけているのだ。当然、〈定稿・百編〉もその途次にあるものとみてよいであろう。

この「文語詩篇 双四聯」の記述に至ったのは、三二（昭和七）年以降のことで、ちょうど鉛筆・赤インクによる〈写稿〉の成立が相次いでくると推定した時分に重なる。つまり、詩人の内部には、「双四聯」体を主とした〈定稿・百編〉という詩集構想が浮上していた、という仮説を提案しうる状況があり、実際におよそ100編の〈写稿〉が撰びとられて、その定稿化を果たしていったのである。すると、「文語詩篇 双四聯」の延長上にある〈定稿・百編〉は、どのような〈集〉を形成しようとしていたのだろうか。せめてその輪郭だけでも描くためには、〈集〉を構成する枠組みをまず明らかにする必要があるだろう。

そのひとつの観点として、部立ての設定を試みることにする。部立てについては、詩人自身、心象スケッチ集の編集を目論んだメモを残している。口語詩稿〔職員室に、こつちが一足はいるやいなや〕の用紙（再編稿「来賓」下書稿一に転用された）のウラにそれは記されており、三二年の前半までに記されたものかと推定する。

第二、	自然		
第三、	「田園	— 100頁	
	— 社会、	— 15頁	
	心象	— 病氣、	— 50頁
	スケッチ	— 信仰、	— 15
	「生活	—	[250↓20]
第四、	文語、		

（詩法7）

「第二、自然」と「第四、文語」については、第二が自然にかかわる心象スケッチ集、第四が文語による心象スケッチ集ほどの意で、自然・文語という指示は題材や文体の大枠を示すものであって、「第三」に指示されているところは、本質的な並立関係にない。心象スケッチ集「第三」は、その内容を具体化して、田園・社会・病氣・信仰・生活の5項目として、それぞれの分量をページ数で示している。その総体を、あるいは「人間」という大枠にくくることもできるかもしれない。そのもとにある、それぞれの部立て（項目）が、しかしどのような実体を具えているのか、詩人の意図は不明である。たとえば、「病氣」、あるいは「病氣」と「信仰」という部立てに相当するのは、二八年の闘病を題材とした『疾中』詩篇の口語稿が詩人には想定されていたと、杉浦静あるいは木村東吉は指摘する。けれど

も、「田園」といい「生活」というが、前者には後者の要素が踏みこまないか、「社会」というが、そこに「生活」の側面を切り離せるものなのか、などと考えてゆくと、その特定は困難である。

ただ、詩人がスケッチの題材をいくつかの小さな枠組みにとりまとめようとしていたこと、そしてその枠組みに、「田園」「生活」「社会」「信仰」などとする区別を与えたことは注目すべきである。詩人は、そうした類概念によって、作品の分別を意識し、作品の構成を考えていたということになる。その意識が、『文語詩稿』の段階にも接続するものであるかどうか、明らかでないけれども、〈定稿・百編〉の〈集〉としての枠組みに迫るひとつの補助線として、かつて詩人の立てたこれらの類概念を借りて、私に、〈集〉を構成する詩篇分野として立てることにしたい。

詩の場に現出している空間から、

自然詩篇 山河にかかわる空間。

田園詩篇 ムラにかかわる空間。

生活詩篇 マチにかかわる空間。

という3項目を基本的な詩篇分野(部立て)として、要素が複合する詩の場にあつては、要素として大きいと判断したところを指摘した。さらにその場の情況を特記するものとして、

社会詩篇 社会的課題として批判・告発性をはらんだもの。

信仰詩篇 信仰や病気にかかわる状況が現われているもの。

という2項目の詩篇分野(部立て)を設定し、右の基本的分野に重ねて指摘する。ただし、信仰詩篇についてはそれが自伝性を濃密にしている場合、信仰詩篇として独立させて指摘する。

これによって、〈定稿・百編〉をみると(資料篇iiiに指摘する詩篇分野による)。

自然詩篇	10編
田園詩篇	30編
生活詩篇	50編

これに、信仰詩篇10編が独立した詩稿としてある。そして、社会詩篇としての性格をもつてみるとみる詩稿が、自然・田園・生活の各詩篇にわたつて60編あまりを見いだしている。なおこれは、現段階の試みである。ひとつひとつの作品理解がすすみ深まる過程で、分野の移動を必要とする場合が出てこようし、分野そのものの組み替えをしなければならぬ場合も出てくるかもしれないことをわきまえたうえで、提案するものである。

信仰詩篇と社会詩篇の内実については別に考察を加えることとして、以下、自然・田園・生活の各詩篇分野ごとに整理して、〈定稿・百編〉の枠組みを採ってゆく。

4

自然詩篇に想定するのは、次の10編ほどである。

「コバルト山地」

「水と濃きなだれの風や」

「吹雪かゞやくなかにして」

「峡野早春」

「流水」

「国土」

「きみにならびて野にたてば」

「柳沢野」

「鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし」

「岩頸列」

\*北上山地？

\*早池峯山・山頂辺

\*北上山地のある峠？

\*北上川流域

\*北上河畔・花巻

\*奥羽山脈？

\*岩手山麓

\*柳沢・岩手山麓

\*雫石・七ツ森

\*箱ヶ森、毒ヶ森、大石山、南昌山、東根山

詩の場の舞台として推定した地域も併せ示したが、これを見ると、岩手の地勢をざっくりつかんでいるといえるのではないか。その東側に早池峯山を最高峰とする北上山地が南北に走り、西側には岩手山を擁した奥羽脊梁山脈が南北を貫く。その間に低地帯が形成されて、そこを北上川が北から南へと流下している。

そうした岩手の地理的空間の要点を自然詩篇はとらえているのである。

季節

春

夏

秋

冬

早春

天上

地上

大地

ひかりの群青 きららかな風

よどみかがやく白雲 水と濃きなだれの風

馳せる雲

雪 柏ばやし 枯葉艸

すだくむら鳥 アステイルベ

(神) きらめく露

蒼き柏 黒藻の馬

山野

草山 雑木山 松森

温石 (早池峯山)

柳沢野 (岩手山)

海浸す

わびしき雲 あえかな氷霧

月 乱れる黒雲 吹雪

オリオン 白き雲

かがやき燃ゆる吹雪

白き日 ひとひらの吹雪

白き日のひかり

墨と銀の雲

雪 まばらな小松

雪 うれひの野面

氷華きららか はんのき 流水

斑雪 松 笹

波羅密山 大野くらき夜見來川

さらには、この地方風土を印象づける自然の現象が、右のとおり、四季の輪廻をとおして現われる。

自然詩篇からアトランダムに詩語をとりだして、春夏秋冬に配置してみた。これを見ると、天上からもたらされてくる、妖しいほどの

四季の変化によって、地上に刻みつけられるのは、基本的に山の国、雪の国の風土なのであって、その自然の基軸は冬にある、そのこと

が明瞭に伝わってくる詩篇群であろう。そこでは、「かぐやか」でもあるが、「くらぐ」うれひ」を秘めたこの風土が、はるかな神の時

代から形成されてきたことも、詩人は暗示している(「水と濃きなだれの風や」)。

そうした自然風土に生きている、またそれを生きてゆくものの本音を、詩人は、たとえば農にたずさわる人々の視線をもって呟いてい

る。たとえば、「稔らぬなげきいままさらに、春をのぞみて深めるを。」(「峡野早春」という詩句に、われわれは飢饉の風土にある、とい

うこの認識は、自然詩篇群の底部にひそむ肅然とした基調音ではなからうか、と思える。けれども、詩人はそれにただ暗澹としているばかりではない。次の詩稿は題名をもたないが、

きみにならびて野にたてば、  
風きらかに吹ききたり、  
柏ばやしをとどろかし、  
枯葉を雪にまろぼしぬ。

げにもひかりの群青や、  
鳥はその巢やつくろはん、

山のけむりのこなたにも、  
ちぎれの艸をついばみぬ。

(きみにならびて野にたてば) 定稿)

とあつて、「きみ」とともに並び立つ「(われ)」を登場させ、光と風とが輝く季節に懸命に生を営む鳥に託して、わたしたちに不屈にして営々たる生きようの大切さをあらためて提示しているようにみえる。事実、この自然風土にあつて、人々が幸福を願い、祈りつつけてきた、その不断の足跡を詩人は見つけてもいる。

一石一字をろがみて、  
寿量の品は神さびて、

そのかみひそにうづめけん、  
みねにそのをに鎮まりぬ。

(国士) 定稿)

おおおとつらなる山並みを前に、その峰あの尾根にかつて祈りをこめて人々が埋めた、法華経寿量品はいまもなお厳かにありつづけている。自然と折り合いをつけながら、生き抜いてきた人々の軌跡を詩人は認めているのである。飢饉の風土を暗示するこの自然詩篇群は、しかし、そこに生きる人々の存在を前提としている。言い換えれば、そこに生きる人々の視座からとらえられたのが、〈定稿・百編〉における自然詩篇であったということだ。であるならば、自然詩篇群は、その数の寡少さにもかかわらず、田園詩篇・生活詩篇の基底をなすものだといえるのであろう。

5

田園詩篇として提案するのは、次の30編である。

「ボランの広場」

\*理想農村

「牛」

\*北海道・苫小牧パルプ工場？

〔賦役〕

〔悍馬〕〔二〕

〔塔中秘事〕

〔雪げの水に涵されし〕

〔市日〕

〔祭日〕

〔毘沙門の堂は古びて〕

〔退職技手〕

〔臘月〕

〔母〕

〔村道〕、「<sup>霽</sup>雨」、

〔厩肥をになひていくそたび〕

〔秘事念仏の大師匠〕〔二〕

〔電気工夫〕

〔夜〕、「早儉」、「老農」、「副業」、

〔悍馬〕〔二〕、「初七日」、「民間薬」、

〔開墾地落上〕、「林の中の柴小屋に」、

〔うからもて台地の雪に〕、

〔沃土ノニホヒフルヒ来ス〕

〔盆地に白く霧よどみ〕

〔玉蜀黍を播きやめ環にならへ〕

\* 岩手山麓？

\* 滝沢、種馬育成所？

\* 小岩井農場・三階倉庫

\* 盛岡郊外山御料牧場

\* 盛岡郊外米内？、玉山？

\* 谷内丹内山神社

\* 北成島毘沙門堂？

\* 花巻・郡農会？

\* 花巻・高常水車？

\* 花巻・日居城野

\* 根子村？

\* 近隣農村・北上河岸

\* 湯本村？

\* 近隣農村？

\* 遠野上郷？細越？

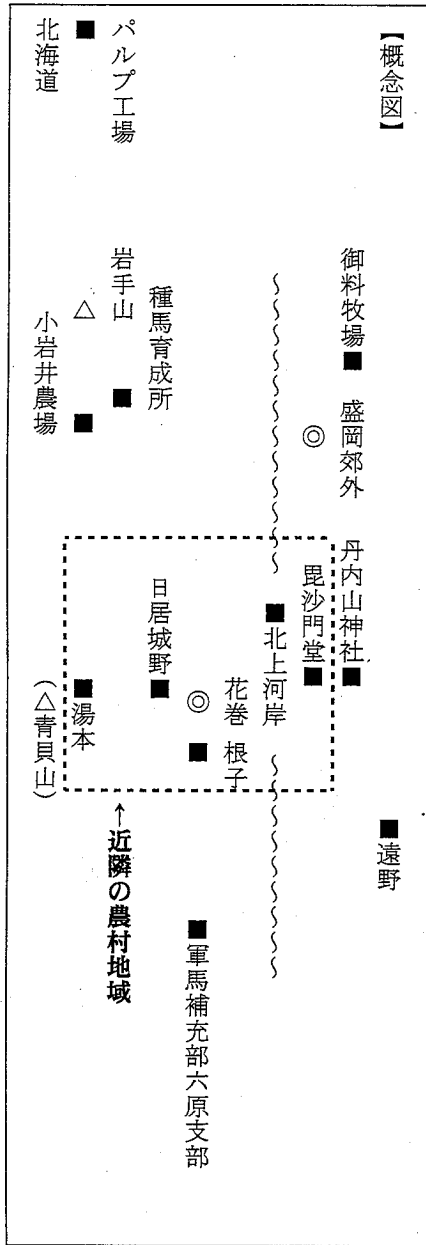
\* 軍馬補充部六原支部

本文の内容がら詩の場の舞台の舞台も推定してみたが、その主たるものの位置を概念的に図示すると、次のとおり、けっこう広がりのある空



間が見えてくる。

ただし、(写稿)段階では「軍馬補充部主事」と命名されていたのに、定稿では題名を消失する(「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」や、「谷権現」(祭日)・「青貝山」(沃土ノニホヒフルヒ来ス))といった架空の場所として提示するなど、詩人は、舞台を現実の場所として特定することを避けているようにもみえる。東北地方の田園の光景として、詩の場を一般化しようという姿勢を感じさせる。あるいは、詩の場の構築に複数の場所における記憶を、その詩層に重ねてゆくという詩の方法をとった場合、特定の場所を指示することは避けねばならなかったのかもしれない。



こうした田園詩篇の詩の場は、農作業を主に、賦役や里山の手入れへの参加、兎の飼育や祭日の出店といった副業、春には開墾地の落成を迎えたり冬もお働きつづけている水車の光景なども含めて、たとえば次のように(いずれも定稿から)、若き農民が闊歩する四月の村道から戸外での農事も休眠に入る臘月(一二月)に至る農村の動きを描きだしている。

- ・朝日かゞやく水仙を、
- ・しばしましろの露置ける、
- ・厩肥をばらひてその馬の、
- ・靱緑金に生えそめし、
- ・川水はすべりてくらく、

- になひてくるは詮之助、
- すぎなの畔にまどろめば、
- まなこは変る紅の龍、
- 代にひたりて田螺ひろへり。
- 草火のみほのに燃えたれ。

- (「村道」)
- (「民間菜」)
- (「悍馬」(二))
- (「退職技手」)
- (「昆沙門の堂は古びて」)

- ・北上ぎしの南風、  
けふぞ陸稻を播きつくる。  
〔秘事念仏の大師匠〕(二二)
- ・モロピト山ニ入ラントテ、  
朝明ヲココニ待チツドヒ、  
放牧の柵をつくるひぬ。  
〔沃土ノニホヒフルヒ来ス〕
- ・ひねもす白き眼して、  
焦げ木はかつとにほふなり。  
〔賦役〕
- ・ゲメンゲラーゲさながらを、  
いっさんあぐるつちけむり。  
〔開墾地落上〕
- ・霽雨そゞげば新墾の、  
麦の束遠くたゞずむ。  
〔霽雨〕
- ・火雲あつまり去れば、  
銀毛兎に餌すなり。  
〔老農〕
- ・巨利を獲るてふ副業の、  
まなつをけぶる沖積層、  
〔副業〕
- ・厩肥をになひていくそたび、  
水路のへりにたゞずみて、  
〔厩肥をになひていくそたび〕
- ・穎花青じろき稻むしろ、  
ひとびと木炭を積み出づる。  
〔祭日〕
- ・藻を装へる馬ひきて、  
白き空穂のなかにして、  
〔盆地に白く霧よどみ〕
- ・野を野のかぎり早割れ田の、  
かうかうと水車はめぐる。  
〔早儉〕
- ・千キロの水をになひ、  
〔臘月〕

そこにはまた、無人称から固有名を有するもので、さまざまな人たちが登場している。

水仙を市場に担う農民としては未熟な若き「詮之介」や落ち着きはらった「村老ヤコブ」(村道)、残生を信仰に託して揺らぎのない毘沙門の堂守(毘沙門の堂は古びて)、集落の里山の手入れに総出で入り仲間を気遣う男たち(沃土ノニホヒフルヒ来ス)、自らもその立案にかかわったのである。開墾地の完成を祝う村会議員「高清」(開墾地落上)、などといった肯定的な態度で登場する人物がある。

それに対して、田園詩篇の柱である農作業にかかわる詩の場では、春から夏にわたる現場を描いた「民間菓」、「悍馬」(二二)、「霽雨」、「厩肥をになひていくそたび」などでは、長期間にわたる重く苦しい作業に疲弊し苛立つ農民像が顕わにされている。そのうえ、小作農には地主に命じられた賦役があつて、放牧場の手入れや修繕に時間を奪われる農民も多い(賦役)。夏から秋に至っては、ひでり雲も暗示する「火雲」(老農)の襲来があり、「穎花青じろき稻むしろ」(祭日)のままに夏を終えると、稲田の作業はそっちのけに現金収入を求めて「ひとびと木炭を積み出づる」(盆地に白く霧よどみ)という状況もあり、この秋は「早割れ田の、白き空穂のなかにして」(早儉)ただ立ちつくす家長たちの姿があるともいう。

ここに現われている農民像は、否定的といわざるをえない。さらには、たぶん農会で技術指導にあたっていた熱心な技手の解雇があり(退職技手)、あてにしていた兎の飼育も利益は出ず借金だけが残った青年農民(副業)の姿がとらえられており、地方農村をとりまく社会的経済的状況の不安定さもうかがわせるのである。

農作業の現場以外にも、田園の暮らしの一端を詩人は添えている。登場する人物もさらに多様である(いずれも定稿から)。

- ・さはあれ攀ぢる電塔の、  
四方に辛夷の花深き。
  - ・はたらきまたはいたつきて、  
もろ手ほてりに耐えざるは、
  - ・縞の粗麻布の胸しぼり、  
鏡欲りするその姉と。
  - ・その身こそ瓜も欲りせん  
齢弱き母にしあれば
  - ・木綿つけし白き骨箱、  
哭き喚ぶもけはひあらしを。
  - ・いかさまさいをぞ手にとりにける。
- (一)電氣工夫(一)  
(一)夜(一)  
(一)市日(一)  
(一)母(一)  
(一)初七日(一)  
(一)林の中の柴小屋に(一)

田園地帯に出現した電塔をよじのぼる「電氣工夫」の姿が見える、そのような近代化の余波とはまるで無縁に、日々の労働で疲労困憊した農民たちの「夜」があり、「市日」には童を連れ姉娘が鏡を売る出店で足を停める姿がみえ、幼子には瓜の漬け物を与えて餓えを紛らわすために野原に遊ぶ「母」もいる。また、貧しさゆえに幼児を病気で亡くした家族の「初七日」の嘆きや、酒と博打に溺れる富農の落魄ぶり（「林の中の柴小屋に」）なども描かれるのである、

ここに現われた人たちの、鬨りや苦悩の表情に読む者の思いはとどまりがちになるが、そこには、農民魂を連綿と受け継いだ児らが光に包まれてゆく姿も見据えられていることを、見落としてはならないだろう。

- ・曙人、馮りくる児らを、  
穹窿ぞ光りて覆ふ。
- (一)つからもて台地の雪(一)

こうした次代を担う者たちの絶え間ない出現によってこそ、農村の改革が地道につづけられ、理想農村の実現に少しずつ近づいてゆくにちがいないことを詩人は期待し、願っているように思える。けれども、理想農村の実現までには、多くの難事、紆余曲折があるだろうことを、次の詩稿が暗示している。

- つめくさ灯ともす宵の広場
- むかしのラルゴを唄ひかはし
- 雲をもどよもし 夜風にわすれて
- とりいれまじかに歳よ熟れぬ

組合理事らは 藁のマント

山猫博士は　　かはこのころも  
醸せぬさかづき　その数しらねば  
はるかにめぐりぬ射手や蠅

〔ポランの広場〕定稿

豊作に集い喜びを交わし合う農民の姿を見守る産業組合の理事たちや、どこか怪しい「山猫博士」が手にしているのは、「醸せぬさかづき」(この意味は次節で言及する)という不可解なものなのである。どうやらならかの企みがひそむこの広場は、まだほんとうの理想農村のものではない。実現への道程の遙かさを、詩人は知っている。

ところで、この田園詩篇には、舞台としてこれはけつしてムラではないけれども、工場が近接する放牧場(「牛」)など、明治以来の近代化に向かう空間も含まれている。他に、御料牧場(「雪げの水に涵されし」)、軍馬補充部(「玉蜀黍を播きやめ環にならへ」)、種馬育成所(「悍馬」(「一」)、小岩井農場(「塔中秘事」)といったところである。

その舞台にもまた、農民や牧夫の姿が認められるのではある(いずれも定稿から)。

・ 窒素工場の火の映えは、  
層雲列を赤く焦き、

(中略)

こたびは牛は角をもて、  
柵を叩きてたはむる。

(「牛」)

・ 御料草地のどての上を、  
犬の皮着てたどひとり、

(「雪げの水に涵されし」)

・ 玉蜀黍を播きやめ環にならへ、

(「玉蜀黍を播きやめ環にならへ」)

・ おとしけおとしいよいよに、  
馬を血馬となしにけり。

(「悍馬」(「一」)

・ 玉蜀黍畑漂雪は奔りて、  
丘裾の脱穀塔を、

(「塔中秘事」)

こうした施設が、農村生活の現実的な改革を促したことはほとんどなかったといえようから、結果的に近代化は、農村と農民を旧態依然のままに置いて、開発をすすめているという現実の一端が、ここにはみえていよう。

#### 4 生活詩篇の詩の場から

いわゆるマチ場の生活、あるいはマチ場の生活者を主たる題材にしているとみる生活詩篇は、次のとおり、50編を数える。(定稿・百編)のほぼ半数を占める。(集)としてみれば、その中核をなす詩稿群といわなければならぬ。

（こ）でも詩の場の舞台を推定したところと併せて示せば、次のようである。

〔廢植土のぬかるみよりの照り返し〕

〔氷上〕、〔岩手公園〕

〔血のいろにゆがめる月は〕

〔著者〕、〔紀念写真〕

〔僧の妻面膨れたる〕

〔雪の宿〕、〔夜をま青き藺むしろに〕

〔砲兵觀測隊〕

〔殘 丘の雪の上に〕

〔病技師 〔一〕〕

〔来々軒〕

〔萎花〕

〔軍事連鎖劇〕

〔晝眠〕

〔來賓〕

〔嘆願隊〕

〔酸虹〕、〔燈を紅き町の家より〕

〔日本球根商會が〕

〔四時〕、〔卒業式〕、〔氷雨虹すれば〕

〔式場〕

〔塀のあなたに嘉菟治かも〕

〔ほのあかり秋のあぎとは〕

〔小きメリヤス塩の魚〕

〔あな雪か屠者のひとりは〕

\* 雫石・春木場？

\* 盛岡・岩手公園？

\* 盛岡・岩手病院

\* 盛岡・盛岡高等農林学校？

\* 盛岡・教浄寺？

\* 大迫・石川旅館？

\* 宮野目・葛？

\* 花巻・市街から早池峯山上空

\* 花巻・松庵寺

\* 花巻・林ラーメン店

\* 花巻・精養軒？

\* 花巻・花陽館？朝日座？

\* 花巻・齋藤宗次郎宅？

\* 花巻・小学校？

\* 花巻・警察署？

\* 花巻・郡役所

\* 花巻・花巻共立病院？

\* 花巻・稗貫（花巻）農学校

\* 花巻・岩手国民高等学校

\* 花巻・女学校附近

\* 花巻・鮎幣稻荷神社？

\* 花巻・歳末市

\* 花巻・豊沢橋

「水植松にまじらふは」、「商人らやみていぶせきわれをあざみ」、「いたつきてゆめみなやみし」

「齒科医院」、「崖下の床屋」、「医院」、「巡業隊」、「羅沙売」、「古き勾当貞齋が」、「白金環の天末を」

\*花巻・生家？

\*花巻・市街？

「短夜」

「さき立つ名誉村長は」

「天狗草けとばし了へば」、「老いては冬の孔雀守る」、「林館開業」、「あかつき眠るみどりごを」

\*根子・同心町

\*花巻・湯本村？

\*花巻温泉？

「早春」、「廃坑」

「中尊寺」

「車中」<sup>(1)</sup>、「保線工事」

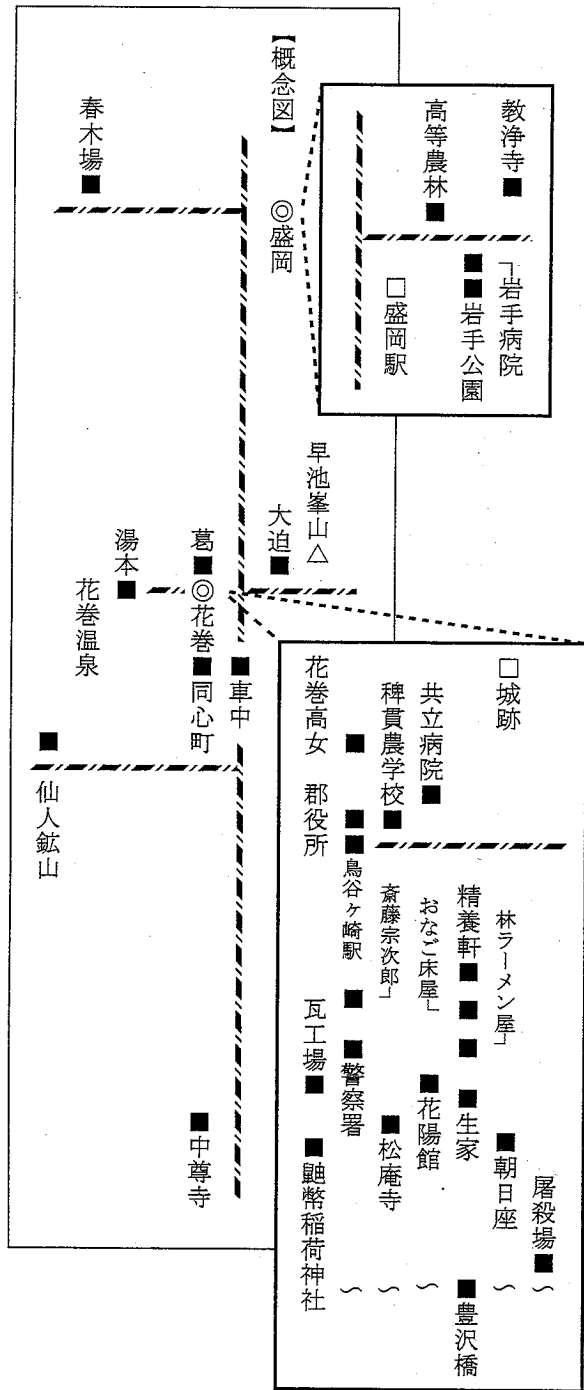
\*和賀・仙人鉦山？

\*平泉・中尊寺金堂

\*車中

かなり広がりのある空間を有しながら、実際には、その舞台が花巻市街であろうとみられるものと、花巻郊外や近隣農村とみられるものとを加えると40編の多数に及んで、詩人が、花巻を中心とした時空を基盤に生活詩篇の題材を得ている、ということが知られる。つまり、詩人宮沢賢治の生活圏内なのである。これは、『文語詩稿』の初期段階が自分史・自伝の構想を示した『文語詩篇ノート』をもって出発した、その延長線上にあるかのようにもみえるが、そうではなく、ついに病牀を離れ得なかつた再編ならびに定稿段階の詩人にとって、東北・岩手の生活をとりえるのに、単に想像力の駆使によるうとするのでなく、まさにこの地に足を着けた態勢で構え、幻想ではなく、現実に根ざした詩の場を築きあげようとしたもの、とみるべきであろう。

やはり概念的に略図でもってその主たるものの位置を示してみると、<sup>(1)</sup>次のとおりである。



ここに

車中、路上、橋上、井戸端、駅前、役所、病院、社寺、学校、旅館、劇場、理容店、ラーメン屋、宴会場、品評会場、公園、遊園地、花街、造成地、原っぱ、廃鉱山、……

などといった、マチ場の多彩な生活空間がとらえられている。そこには「岩手公園」や「氷上」、「記念写真」、「医院」や「四時」、「卒業式」などといった一見すれば快適なあるいはごく普通の、マチの光景もつかまえられるが、傾向としていえば、そうした光の部分よりも影の部分をとらえがちである。たとえば、ある鉱山の現在をとらえた詩稿「廃坑」では、

春ちかけれど坑々の、  
事務所飯場もおしなべて、  
祠は荒れて天霧し、  
鳥の宿りとかはりけり。

みちをながるゝ雪代に、  
錆びしナイフをとりいでつ、

しばし閑してまもりびと、

さびしく水をはねこゆる。

(定稿)

とあって、かつては技師や鉦夫など多くの人々が集い栄えていた鉦山の荒廃と零落を見つめるのである。「春ちかけれど」として、「春」という季節の訪れを明示するところから導くことよって、ここがもう再生の途を閉ざされてしまっていることを暗示し、さらには「まもりびと」が雪解け水のなかから取り出した「錆びしナイフ」には、崩落し潰えてゆくしかないこの鉦山のゆくえまでも見とおしているのではないか。また、マチの見せかけの繁栄を問いただす、無題の詩稿もある。

白金環の天末を、

みなかみ遠くめぐらしつ、

大煙突はひさびさに、

くらきけむりをあげにけり。

けむり停まるみぞれ雲、

峽を覆ひてひくければ、

大工業の光景なりと、

技師も出でたち仰ぎけり。

(定稿)

草稿段階で、「インチキ↓擬似」工業（下書稿二）から「近似工業↓・」(下書稿三)という命名の過程を経ている。「大煙突」というのが、実は煉瓦工場の「宣伝用に築きける」(下書稿一)ものだったのである。定稿ではそのことが隠されてしまうが、「大工業の光景なりと、技師も出でたち仰ぎけり」という詩句に、見せかけのものに翻弄される危うさをこめられていよう。

あるいは、登場する人物にしても、「歯科医院」と題した詩稿では、

ま夏は梅の枝青く、

風なき窓を往く蟻や、

碧空の反射のなかにして、

うつつにめぐる鑿ぐるま。

浄き衣せしたはれめの、

ソーフアによりてまどろめる、

はてもしらねば磁気嵐、

かぼそき肩ををのかす。

(定稿)

と、ひとりの「たはれめ」に眼を向ける。『言海』が「遊女」の字をあて「淫女ノ義」と注していたように、蔑視しがちな対象としてあろうが、詩人がそこにみとめたのは、「浄き衣」をまとい「をの」く娘のすがたである。それは排除の視線ではない。詩人は、屠殺業者の倦怠と孤独とを見つめ（「あな雪か屠者のひとりは」）、理容店に弟子入りした髻の児のけなげさも見のがすことはなかった（「崖下の



床屋)。

生活詩篇には、マチのさまざまな職業に就いている人々が、おびただしく登場してくる(資料篇Vを参照されたい)。

内務部長、郡長、郡会議員、県庶務課長、町助役、町書記、弁護士、僧侶、盗人、病者、看護師、写真師、理髪師、宣教師、駅助役、  
駅夫、学長、教授、助教授、校長、訓導、児童、女学生、農学生、屋台引き、牛飼、料理人、鮎売り、羅沙売り、洗濯屋、園丁、  
商人、工夫、兵士、社司、……

まるで、人物図鑑や職業図鑑のごとく網羅的なのである。

5

自然詩篇という土台のうえに田園詩篇を置いて、それを生活詩篇によって厚く取り囲む。そのようなイメージを描いてしまうこの原詩集、〈定稿・百編〉の大きな枠組みは、どうやら岩手という風土と生活とを視座に立つことであつた、といえそうである。それは、

社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ

『雨ニモマケズ手帳』

という覚悟のもとに再編に向かつた《文語詩稿》が、いわゆる農民／農村詩集に特化されて成立するものでないことを示唆している。農村改革の志をついに手放すことがなかつた宮沢賢治であるが、有力な地方商人の家に生まれ育ち、ついにそこから自立できずにマチの間としてありつづけ、その視座を揺籃してきたという事実を生活詩篇の豊かさに見るとともに、詩集構築の要もそこにあつた、と考えるべきなのであろうか。

それにしても、群像の詩集というる、これほどの数の人物をとらえているのは、少し異様にもみえる。ひとつには、それほどに〈定稿・百編〉において、詩人の関心のありどころが、東北・岩手の様々な階層にわたる人々、そのひとりひとりのありようをみつめることであつた、ということなのであろう。もちろん、そのありようは、遭遇している事件とともにとらえられる。すると、事件もまた人の数だけ多様なのである。さらには、そうした事態の背後に、東北・岩手の季節や自然、産物、あるいは歴史なり生活なりが、さまざまなかたちで詩の場に組みこまれている。ひとつひとつの詩の場には、この風土に生きる人々の生活の一端がそれぞれにとらえられ、実に多彩なのである。

また、人々のいる場所(詩の舞台)について、〈定稿・百編〉段階から、増補・分立の段階までも踏まえて、詩稿単位で整理してみると(作品理解の深まりによって、その分別は揺れてくる。ここには現段階の私による分別を示した)。

場所	過程				
	定稿・百編の形成	藍(写稿)の定稿化	五十篇の補充定稿	青(写稿)の定稿化	百篇の補充定稿
マチ	48編	1編	5編	4編	5編
ムラ	22編	7編	5編	6編	6編
その他	25編	・編	・編	3編	1編
					29編
					計

という実態が現われる。やはりマチ場が首位にあるが、増補の過程で、詩人はムラという場の比重を増してゆく態度にある。そもそも、マチとムラとの境界は実に曖昧であり、マチの事態はムラに重なり、ムラの事態もマチなくしては成り立たない。「その他」に分別したなかで、鉱山や牧場など、その境界をさらに超えた場も押さえている。そこを人々は交流している。これに、自然詩篇も加わっているから、盛岡・花巻地域を主軸にして、集を構成している詩の場はそれぞれに交錯し交響して、その総体はひとつの世界を現出しているようにみえる。(定稿・百編)という原詩集は、岩手という、その風土性を提出しようとしている、ともいえるだろう。

(注)

- 1 およそ100編としているのは、「水柱かゞやく窓のべに」・「旱害地帯」・「眺望」・「風底」の4編について、その下書稿が現存しないために、〈写〉などの符号の有無が確認できないからである。
- 2 『宮澤賢治研究』(十字屋書店一九三九)所収。ただし本文は、統橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成』(日本図書センター一九九〇)第2巻収録による。
- 3 残されている『「百篇」の和紙表紙には、「文語詩」[篇↓稿]「百篇」という訂正があった。ここには、詩人が『文語詩篇ノト』以来の、文語詩制作の認識基盤として「文語詩篇」があったろうことを思わせるものである。
- 4 「語句」規模の「変更」手入れとしては、ほかに、
  - ・品は四請を了へ「しな↓」にけり。(「たそがれ思量感くして」)
  - ・「凍↓沍↓」沍たる泥をほとほと。(「崖下の床屋」)
  - ・寫「眞↓樂」が雲母を採み削げ、。(「暁眠」)
  - ・「そばだ↓額青」き林光文は、。(「来々軒」)
  - ・掃除せしラムプをもちてコークスの、廣場を駅「前↓」夫大股に行く。(「腐植土のぬかるみよりの」)

などがある。これらの変更は、具体性や強調性をもって場の雰囲気を変えてしまったというほどではないが、その場面を鮮明にしてゆくものとみられるが、詩想の変化が露わにうかがえ詩の場を大きく転換させるほどの変容をもたらした手入れであったとはいえないであろう。

5 杉浦静「春と修羅」の行方」(『宮沢賢治 明滅する春と修羅』蒼丘書林一九九三)が黒クロス表紙の読解を試みているが、氏は第二集について、「昭和五年秋から昭和七年十一月までの間に」整理され、黒クロス表紙を用いた草稿の振り分けがあったとみている。

6 杉浦静「春と修羅第三集」の生成」(注5の同書)、木村東吉「春と修羅第三集」一九三二年構想「生活・社会詩篇」試論」(『島大國文』22号一九九四・二)。

7 島田「文語詩稿叙説」2章再編論において、すでに詩篇分野という観点を導入し、再編稿群と鉛筆・赤インクによる(写稿)群に対して詩稿の分別を試みている。本研究でも基本的にその試みを引き継ぐが、その結果には必ずしも『叙説』に一致しないところが生じている。『叙説』では、

風土 自然、地理、気候、環境

田園 ムラとマチ、その境界

社会 都市的な場面や政策的な施設など。また風土・田園を舞台にしても社会的な問題を強くはむ場面も含む

という三つの場面に、私なりの分別を試みる。もちろん、個々の作品理解が深まれば、分別の実態は変わりうる。(略)したがって、これは、あくまでもひとつの傾向として把握する。

と考えていたものを、本研究では、「自然詩篇」をはじめとする五分野に部立て概念を精密化したことがあり、次に『叙説』段階における作品の理解が、いまま少し深まりつつある現段階で、分別の判断が『叙説』段階に異なる場合もでてきていることがある。したがって、最後の判断に矛盾があるというよりも、より精確な判断に向かって改訂しているものと、受けとめていただきたい。本研究の判断も、「文語詩稿」研究の進展にともなうて、さらなる変更を迫られるにちがいない。

8 (写稿)の形成段階で、「村会議員高清は」とあった。

9 筑摩書房版第一次『宮澤賢治全集』(一九五六〜五七)の「月報の語注では「ひでりぐも。夏のくも。」とされている」ことを、大沢正喜「老農」(『宮沢賢治文語詩の森第三集』所収、柏ブラーノ二〇〇二)が指摘している。

10 一八九九(明治三二)年「農会法」公布、「一条 農会は農事の改良発達を計るために設立するものとす」。市町村や郡単位、都道府県単位に設置され、その上部に帝国農会があった。

11 略図の作成に『宮沢賢治生誕百年記念特別企画展図録 拡がりゆく賢治宇宙』(宮沢賢治イーハトーブ館一九九六)に所載の「花巻付近図(大正時代)」を参考にした。

「社余農村を最後の目標として只猛進せよ」(『雨ニモマケズ手帳』)という覚悟のもとに再編され、たどりついてきた(定稿・百編)において、およそ半数ほどを生活詩篇が占めて、ムラにおける農民たちの生活でなく、主にマチ場の人々の光景をもって構成されるということは、なを意図しているのであるうか。

詩人が、どのような意識において「社余農村」と名指したのか、ということでもあろう。そのことについては、柳田国男が、一九二五(大正一四)年から二年間、早稲田大学でおこなった講義録によるものという『日本農民史』<sup>1)</sup>で、「農村」について、

農村と云ふ語は古くは用ゐられなかつた。近年農事の改良が一段と根本に及ぶ必要があることを感ずるやうになつて、始めて農村の改良を説くに至つたのである。従つて其語の範圍も、まだ精確にはきまつて居らぬ。といふ、興味深い指摘をしている。さらに続けて、

市町村の制度が始まつてから、広大なる田舎が市の行政区劃の中に入つて来た。大東京大阪の中にも沢山の田舎がある。況や二三流の市の如きは、表通りは軒並の町屋であつても、裏に出て見れば蛙が鳴き蝻が飛んで居た。以前無理に作つた市の中には、遠い山の裾の在所までも含み、市に市農会があつて活動する有様であつた。町に至つては殊に甚だしく、幾つかの大字の中、役場のある附近だけに若干の町屋があれば即ち町であつて、構造に於ては村と格別の差は無かつた。(島田注、<sup>きりぎりす</sup>蝻)

と記し、また「元来マチと謂ふのは区劃のことで、村の一部分の宅地に区劃せられた処を意味して居たのである」として、

さうかと謂つて町と村とを対立させることも出来ぬから、結局此二種の部落の結合を期する他は無。兎に角に現在の所謂農村が、町村の村ばかりを意味するもので無いことは明かである。

と、近代農村の集落形態の現状に関して、おそらく当時の一般的な形態認識を示している。

詩人が「社余農村」として、昭和初年の当時にあつてはもつとも過激なことばのひとつであつた「社余」という語を消して、「農村」を提示したのも、社会⇨農村という近代岩手の現状を踏まえたことば遣いであつたろうという仮説をもつて、以下の分析をすすめてゆくが、その核心に、農民の生活を厳然と据えていようことは、《文語詩稿》の作業に入り、その定稿化に至るまでの詩人官沢賢治の、

稗貫郡土性調査⇨農学校教師⇨羅須地人協会⇨東北砕石工場技師

という実践的あゆみをたどつてみれば、当然のことだといえるはずである。農村改革を自覺的にとりあげた「農民芸術概論綱要」にして、その主体は農民であつた。

当時の日本の「地方」に共通していようが、東北・岩手が殊に農林漁業によつて成り立っていた地域であり、「農村」地帯のなかにマ

千場が点々と出現している、というのが実状で、それは確かに、分離されうる状態ではなく、重なり合う状況だったといえる。ムラがあつてはじめてマチの生活が成立していたというのが、まさしく東北・岩手における現状でもあつた。もちろん、そのような状況は、当時の日本の「地方」ではあたりまえのありようであつた。ただ、東北がいまだとりのこされてきた辺境であり、他の「地方」よりもその比重が高い、というのが実情であつたろう。

そのことは、ふたつの側面から実感できる。ひとつは、人口形成である。

ちようど《文語詩稿》の制作が開始された頃である『昭和五年国勢調査報告府県編 岩手県』における「結果の概要」に示された人口千人中の職業別人数をみても、納得できるのではなからうか。私にグラフ化したものも併せ掲げる。

農業	六九六	三三五	四	九四	七八	二四	四一	一五	一四
水産業									
鉱業									
工業									
商業									
交通業									
公務員									
家庭用									
その他									

農・水産 73・1

鉱・工・商・交

その約七割が農林業に従事している人々だった。つまり、マチは「農村」の一部にすぎないのである。もうひとつは、経済構成である。

マチ場の人たちとみられるものとして、比較的突出している工業従事者も、実は第一次産業を基盤とした業種である。昭和恐慌という異常な事態におちいるのが三〇（昭和五）年であるが、それ以前の工業生産物についてみれば、たとえば、二七（昭和二）年の『岩手県案内』によって生産額統計をみると、蠶糸・酒類・金属製品・醤油・織物・漁網地というのが主要なものであつて、工業という生産活動もまた農山漁村に依存して成り立っている、ということが明らかである。

また、同じく生産価額百万円以上をあげた主要な物産を列举すると、

農産物	米	三九、九七二、三〇七	錫	二、八一五、九二九
	蕎麥	一〇、八七四、七四八	鯉	一、七一八、〇二四
	麦	八、九三一、〇〇〇	柔魚	一、六〇〇、〇〇〇
	大豆	五、六八五、八一九	蠶糸	一、三三六、七三三
	種	二、三五八、七二〇	工産物	八、七二二、八六二
	蘿蔔	一、一六四、九三九	酒類	七、二六六、〇九〇
林産物	木炭	六、七二四、一六四	金属製品	一、二四五、二九三
	薪炭材	三、八七〇、〇一五	醤油	一、一五八、二二七
	用材	三、一一四、五一二	鉄	六、〇六三、七〇三
水産物	鯉節	二、八一六、一四四	鉱産物	

という状況であつて、その種目や金額から、かろうじて動いていた当時の東北・岩手の経済が具体的にみえてこようが、要するに、農林水産業（他に馬産も重要な生業であつた）によつて立つ「農村」という存在が岩手の実体を支えている、そのことがこれによつても明らかであらう。

「農村」の基盤にはムラがあり、マチはそのうえに立ちあがつている。本来ならば、ムラとマチとは共存し共榮すべきであらうが、実際には、マチが繁榮に向かおうとしているのに比べると、ムラは旧態依然である。そのような構図を想うとき、さらに大きな構図のなかに、東北・岩手が組みこまれていることにも気づかせられよう。日本の近代化が、中央・国の繁榮のために地方・東北がいわば踏みつけにしてすめられてきた、という歴史的事実があつた。そこに詩人は気づいていたと私は考えているが、少なくとも、ムラとマチとが不均衡にしかありえていないこの「農村」の現状をまずとらえることは、農村改革の基本的な仕事であつたにちがいない。

2

ムラとマチとの共存性を問うことは、「農村」の現状をはつきりと見据えることにほかならない。とすれば、「猛進」としてのこの〈詩的实践〉で、その定稿群が〈集〉を構成するうえで、マチを主とする多様な光景をとらえる生活詩篇が、ムラを主とする田園詩篇を圧倒すること自体、「農村」の現状を反映したもので、というふうにみえてこよう。圧倒的な生活詩篇が田園詩篇を相対化し、そこに現われるさまざまな対照性のなかに、この「農村」がはらんでゐる問題群が提示されようとしているのではないか。

もちろん問題群は、その対照性によつて浮かびあがつてくるだけではない。ムラとマチとの重なり、連なりが「農村」という現場であるとするならば、マチ場にみえる生活ぶりの背後にも、あるいはその下層に、ムラの生活の実質が透けている、そのような詩の場も構築されているにちがいない。

たとえば、「葵花」という詩篇が、

酒精のかけり硝銀の、  
大展覽の花むらば、

肌膚灼くにほひしかもあれ、  
夏夜さやかに息づきぬ。

そは牛飼ひつ商ひつ、  
さこそつちかひはぐくみし、

はた鉄うてるもろ人の、  
四百の花のラムプなり。

声さやかなるをとめらは、

おのおのよきに票を投げ、

団弁護士もホツプ嘔む、

にがきわらひを頬になしき。

卓をめぐりて会長が、

メダルを懸くる午前二時、

カクタスシヨウをおしなべて、

花はうつゝもあらざりき。

(定稿)

という詩の場を提出している。これはダリア品評会の光景で、畜産や商工業を営む町内の人々が育てた力作の花々に、来場者がそれぞれ票を投じて、それを審査員が決するもので、ついに会長が褒賞のメダルを受賞作にかけたのが深夜だった、というのである。

ここに農民の姿はない。ひとつの見方として、ダリアを趣味に育てる余裕などムラにはあり得ない、ということの裏返しとしてこの詩の場があるとはいえないか。そういう立場からみると、「声さやかなるをとめら」という存在が気にかかる。深夜にまで及ぶ、男性中心の催しに現われる彼女たちも、ムラの負の影を背負っているのではないのか。

そこには、生活苦から娘たちの身売りが横行していた農村の現実が浮かびあがってくるのである。花街に堕ちて生きざるを得ない女性の姿は、この生活詩篇では、

・夏のうたげにはべる身の、

声をちぢれの髪を恥ぢ、

(夜をま青き蘭むしろに)

・うなじはかなく瓶とるは、

映には一のうためなり。

(雪の宿)

・浄き衣せしたはれめの、

ソーフアによりてまじろめる、

(齒科医院)

・凝灰岩もて畳み杉植ゑて、

青娥六七なまめかし、

(「林館開業」、青娥は粧った女の比喩)

・いつはりの電話来れば、

(うみべより賣られしその子)

(燈を紅き町の家より)

というふうに見られてもいた。

そして、とどめを刺すのは、「葵花」という題名が暗示するところだ。夏の夜にぐつたりと萎れた花は、異常気象の夏のために立ち枯れてゆく稲の姿にもかよってくる。その背後には、凶作の不安に怯えるムラの存在が見え隠れする。事実、この詩層の底部にある、素材段階の『詩ノート』稿には、

西暦一千九百二十七年に於る

当イーハトーボ地方の夏は

この世紀に入ってから會つて見ないほどの

恐ろしい石竹いろと湿潤さを示しました

為に当地方での主作物 *oryza sativa*

稲、あの青い槍の穂は

常年に比し既に四割も徒長を来し

そのあるものは既に倒れてまた起きず

あるものは花なく白き空穂を得ました

またかの六角シエバリ、

芒うつくしい *Horadum* 大麦の類の穂は

畑地のなかで或は脱落或は穂のまゝ発芽を来し

そのとりいれはげにも心せはしくあはたゞしいかぎりでありました

これらのすき間を埋めるために

諸氏は同じく湿潤にして高温な

気層のなかから、四百の異なるラムプの種類、

*Dhila variavris* の花を集めて (以下略)

(一〇八六「ダリヤ品評会に於けるスピーチ」一九二七、八、十六、最終形)

とあり、「そのとりいれはげにも心せはしくあはたゞしいかぎり」であった農民たちをよそに、マチの「諸氏」によって催されたダリア展なのだという。マチのけだるくむせかえるような明るさを放つこの詩の場の向こうに、焦りのなかで慌ただしく暗いムラがひそんでい

る可能性がある。

こうしたマチとムラの関係に、近代化という視点を具えたものに、3章でとりあげた「岩手公園」があった。明治の大凶作から窮民を救う事業として成った近代公園を舞台とした詩稿である。そこに憩うのは、辺境の地に西洋近代の文化をもたらしたタピング家族で、彼らが近代公園から遙かに望むのが、「なみなす丘はほうぼうと、青きりんごの色に暮れ」てゆく風景だった。それは、近代化から取り残されたままの農山村集落がつつましく散在している場所だったのである。

明治以後、日本の近代化にかかわって、しだいに東北の開発振興についても関心が向けられていた。凶作の相次ぐ東北の貧しさに対して、たとえば、〇二(明治三五)年に盛岡高等農林学校が設立されたのも、そのような関心の現われのひとつで、東北農業を近代化して



ゆくべく、その拠点としてあつたらう。<sup>5)</sup> その初代校長玉利喜造が海外移住を前提とした『東北振興策』(〇四(明治三七)年)を発表しているが、この前後から大正期をとおして東北振興論は高まり、昭和に入るとそのピークを迎え、具体的な政策も現われてくる。<sup>6)</sup> それはしかし、近代日本がたどつてゆく、日清戦争・日露戦争・第一次大戦・日中戦争という軍国化、帝国主義化への道程に重なっていることに注意しなければならぬ。明治維新以来、長く東北の近代化を後らせて、いま進出のための人材と資材の大供給源のひとつとして、統制のもとに東北開発を推進してゆこうとしている。詩人宮沢賢治の半生もまた、そうした国家主義のまさに増長してゆく時代に重なつていたのである。

こうした近代化が、これまでも、そしてこれから、東北・岩手の人々のために果たされてゆくものとは思えない。農村の改革に実際の行動をおこしてきた詩人の眼には、さまざまな面で農村が空洞化してゆく事態が見えていたはずだろう。近代化の恩恵を受ける点が一方では確かにありながら、面としてみればこの「農村」は、ぜんたいほの暗く存在している。そうした東北・岩手の貧しさがその背後にひかえていると思われる詩稿に、「羅沙売」があろう。

バビロニ柳掃ひしと、  
あゆみをとめし羅沙売りは、  
つるべをとりてやゝしばし、  
みなみの風に息つきぬ。

しらしら醸す天の川、  
はてなく翔ける夜の鳥、  
かすかに錢を鳴らしつゝ、  
ひとは水繩を操りあぐる。

(定稿)

いま佇んでいるのは、ひと日近郷をまわり終えて、いつもの定宿へと向かおうとたどりついたマチはずれであろうか。こうした行商人は、マチといわずムラといわず、その境界を行きつ戻りつ越えわたる存在である。その意味で、この羅沙売りには、現在地にかかわらず、マチとムラとが折り重なり合った「農村」という時空が背負わされている、とみてもよからう。

先にみた『昭和五年国勢調査報告』によって、岩手県における「露店(屋台店ヲ含ム) 商人 行商人 呼売商人」で、その数が百人を上まわっているものを掲げると(其ノ他ノ物品販売)者を除く、

魚介藻類	五九八 (男三六八・女二三〇)
薬品染料顔料化粧品類	二九七 (男二八七・女 一〇)
織物被服類	二五一 (男二〇三・女 四八)
蔬菜果物類	一七〇 (男 八四・女 八六)
小間物洋品類	一一一 (男 九〇・女 二一)

という実態がみえ、すべてが行商に携わってはいないにしても、農村では、たぶん三陸からの海産物の行商人の姿がよくみかけられたであろうし、売薬や衣類の行商人の姿をそれに次いでみかけることが多かった、ということであろう。なお、童話「山男の四月」(注文の多い料理店)に「支那人の陳」氏なる怪しい六神丸と反物を売る人物が登場していたところから、まず「外国人」の県内在住者数を見ると、釜石町79人(うち女性19)・盛岡市63人(うち女性21)・宮古町11人(うち女性なし)など、217人(うち女性54)に及ぶ。

次に、「外地人外国人ノ職業」中の「露店(屋台店ヲ含ム) 商人行商人 呼売商人」をもみてみると、

朝鮮人 六五(男) 六五・女(なし)

中華民国人 六四(男) 六四・女(なし)

露西亞人 一〇(男) 九・女(一)

という状況であった。ロシア人がみえるが、23人(うち女性8)が岩手に在住していた。一七(大正六)年のロシア革命以後、白系ロシア人が日本に亡命してくるという状況が生じていた。二三(大正一二)年から後の亡命者は庶民階級の人々で、日本に定住しようとした人が多いという。また日本に住んで、その生業に羅沙売りを経験した人も多かったという。すると、この「羅沙売り」が、詩稿の生成過程からいえば、三〇年からの使用開始かと推定される26系用紙上に起稿した下書稿二の手入れ段階で登場してきたことを考え併せると、ロシア人であった可能性もある。ハルビンで出されていた週刊誌『ルベージュ』の三〇年発行のものにも、「日本にいるロシアの行商人」と見出しをつけた、次のような小記事が載っていた。

日本にいるロシア人の多くは、一着分にカットされたラシヤ生地や時には金具類を商う行商人として才覚を發揮している。

(中略) 行商人の中には、都市で銀行、商品取引所、様々な機関や学校などを回って商品を売る者もいれば、品物を背負って村から村へと日本中を歩いて商売する者、さらに自転車を買って、それに商品の大きな包みをくくり付けて、時間を大いに節約している者もいる。「このところ、」と、これら日本にいる行商人達がこぼしている。「商売が下向きになってきた。だが、これは一時的な現象だ」。

(翻訳は山田容子による)

大正から昭和にかけてすすんだ日本人の洋服化に、彼らの精力的な行商が果たした役割は決して小さくはなかったようだが、昭和に入ると、東北にも羅沙売りの姿が確かにみられていたのである。

ところで、三〇年発行の『ルベージュ』のこの記事が、行商人たちの「商売が下向きになってきた。だが、これは一時的な現象だ」、ということばによって締めくくられているのは暗示的である。昭和恐慌がおこり、農村は豊作飢饉に喘いだ年なのだ。三一(昭和六)年には凶作が襲い、三二(昭和七)年には欠食児童の増大、小作争議の急増があり、三三(昭和八)年三陸大地震が発生し、三四(昭和九)年の東北大凶作によって岩手の農村も壊滅的状况に至る。そうして、日中戦線は世界戦争の渦にのまれてゆくことになる。人々をとりまく下降の生活状況は、一時的な現象ではすまなくなっていたのである。

三七（昭和一二）年以後のことになるが、亡命ロシア人一家と親交のあった佐伯嘉彦の回想に、

パナチヨフ一家は当時どうやって生計をたてていたのか、子供だった私にはよくわからないが、何でも衣類の行商で古着等を扱っていたと聞く。戦時中のそれはなかなか大変だったと思う。一度青森駅で大きな包みを背負っている父親を見かけたことがあったが、地方を行商して歩いていたらしく、疲れていたのか商いがうまくいかなかったのか、暗い表情をしていたのを覚えている。

という場面がある。この「羅沙売」という詩稿の生成は、三一年の満州事変前後にかけてのことではあるが、詩の場においてすでに、商人の所作に哀愁がまとわりついているようにみえる。地方での商売が徐々に難しくなってきた、ということがあったのである。

終日、村村を歩きまわり、宿りを求めてやっとマチ場に入るかというあたりまで戻り着いてきたのである。商売のほうは、「かすかに錢を鳴らしつゝ、ひとは水繩を操りあぐる」とあるから、空振りであったにちがいない。詩の場に現われてはいないが、彼がムラで眼にしてきたのは、麻や綿の古着をいよいよつぎはぎしながらなんとか装っている、そのような農民の姿であったかもしれない。深い溜息をついて夜空を見あげると、しろくげぶる天の川に向かつて、どこまでもたかく翔けてゆく夜の鳥が眼にとまるとき、立ちつくす不如意の羅沙売りを孤独と郷愁とがつつみむ。

そこには、この異国の、行商にまでももう応えることのできぬ疲弊しきった農村の深い闇がひろがっている。昭和という時代における、これが東北・岩手の農村の現実なのだ、と、その〈現在性〉を示唆しているものと考えられてもいいだろう。

4

つまり、この〈集〉において、マチ場を舞台とした生活詩篇を配置することで、ムラをとらえる田園詩篇を相対化しながら、「農村」の現在を見つめようとしているもの、と考えられるのである。少なくとも、生活詩篇の性格のひとつとして、それは指摘しうるものである。たとえば、次の無題の詩稿には、まさに「農村」の現実がつかまえられている。

小きメリヤス塩の魚、  
雲のちどれの重りきて、

藻草花菓子鳥賊の脳、  
風すさまじく歳暮るゝ。

はかなきかなや暮れそめて、  
街をうづめて行きまどふ、

なほふかぶか物おもひ、  
みのらぬ村の家長たち。

（定稿）

舞台そのものは年の瀬の市が立ったマチ、たぶん花巻である。つつましくも新年を迎えるはなやかな品々を並べた露店の長い通りを、

「うづめて行きまど」「い、「ふかぶかと物おも」う「みのらぬ村の家長たち」のすがたがとらえられる。ただそれは、「小きメリヤス塩の魚、藻草花菓子鳥賊の脳」と豊富に並びたつ品々の陰に、それらを売りさばこうとするマチの旺盛な商人たちの存在が暗示されているのであり、そのみのらぬ村の人々でさえ「街をうづめ」るほどにやってくる、という状況からすると、では、みのれる村の人々はすでもうやうやきてきて買物物を済ませているというのである。つまり、冷害によってこの地方一帯が大凶作に襲われたような年の、歳末市ではない。「みのらぬ村の」という提示の仕方は、それにかぎられている、という意図による。

それは、草稿の段階をみるとはつきり了解できる。新校本全集校異が定稿の直前に位置づけている下書稿四鉛筆手入れ形を引く。

歪める陶器鳥賊の脳

小きシヤツや赤き足袋

露店はならぶ雪の雲

ひでりつゞける村人は

いくたび町を行きかへて

罪あるもののがたなり

さびしかなやたそがれて

このすがたを胸にして

なほ行きまどふ戸主の群

みのれる村のをのころは

魚こもづつみ一つきの

酒にほこりてみな去りぬ

楽隊の音がたびしに

はるか町の角行きて

おもむろに来る青のバス

確かに飢饉の風土に生きる岩手の人々であるが、当然それぞれのマチやムラの置かれている条件、状況は様でない。マチで「楽隊の音」が鳴り響いていた時分に、「みのれる村のをのころ」は買物や酒食を楽しみ、ほろ酔いでもう帰ってしまったあと、「暮れそめて」きた時分の光景に、定稿はしぼられたものだったのである。すると、この詩の場は、歳末市という町の賑わいに、「みのらぬ村」の窮乏を対比するとともに、「みのれる村」との明暗も詩層の内部に埋めている。「農村」の、いわば三重構造をこゝではとらえている、ということになる。

〈定稿・百編〉の半ばを占める生活詩篇が、マチの光景やマチにかかわる問題群に必ずしもかぎられることなく、こうした「農村」の複合性を具現する場合も可能にしている、ということを見過ごすべきではない。有力な地方商人の家に生まれ育ち、ついにそこから自立できなかった宮沢賢治がマチの人間としてありつづけ、その視座を揺籃してきたという事実がある。そこからいうならば、生活詩篇は、詩人の揺らぎない現実認識にもとづき、その把握をその意味では自信をもっておこないうる分野だったにちがいない。そこに現出する詩の場は、農村改革を志したマチの人間として、「農村」の課題にまちがいがなく、——一方的な感傷でも一方的な熱情でもなく、その立ち位置を踏みしめて迫りえたものだったのではないか。

赤田秀子に指摘があった三三三年三月の『詩人時代』(三巻二号)発表の口語稿「詩への愛憎」に、

やつぱりあなたは心臓を、三つももつてゐたんですねと、技手がかなしく叩つて言へば、佳人はりうと胸を張る、どうして三つか四つもなくて、脚本ひとつ書けるでせう、技手は思はず憤る、なにがいつたい脚本です、あなたの雑多な教養と、愚にもつかない虚名のために、そこらの野原のこどもらが、小さな赤いもも引や、足袋をもたずに居るのです、旧年末に家長らが、魚や菓の市へ来て、溜息しながら夕方まで、行つたり来たりするのです、さういふ犠牲に値する、巨匠はいつたい何者ですか、さういふ犠牲に対立し得る、作品こそはどれなのですか、もし芸術といふものが、蒸し返したりごまかしたり、いつまで経つてもいつまで経つても、無能卑怯の逃げ場所なら、そんなものこそ叩きつぶせ、言ひ過ぎたなと思つたときは、令嬢の全身は、いささかピサの斜塔のかたち、(略)お、傾角の増大は、の自乗に比例する、ぼくのいまがた云つたのは、みな円本にあるんです、しつかりなさいと叫んだときは、ひとはあをあを昏倒して、ちやらんばちやんと壊れてしまふ、

とあつて(傍線は島田)、無野用紙に鉛筆で三〇年頃から書き継がれてきたこの「小きメリヤス塩の魚」の詩稿世界の、最終地点がおよそみえている。この口語稿は、花巻輕便鉄道岩根橋駅に近い発電所を訪問したときのスケッチ(五〇八「発電所」一九二五、四、二)から発展してきたものである。これをこんなふうにも読んでみよう。

近代化の象徴である発電所という存在を擬した「佳人、令嬢」から「三つ四つ心臓(近代化)が脚本(理想)を實現する」と言つたのに対して、それに仕える技手が「野原のこどもら、家長ら」の窮乏という現実に対して、「脚本、芸術」の無能さを論う。近代化や芸術(理想)がムラを救うには及んでいないことを指弾しながらも、「言ひ過ぎたな」「いまがた云つたのは、みな円本にあるんです」と、近代化の恩恵にただ浴している技手は自らの無力のほうにあらためて眼を向ける、というふうである。

この口語稿は、文語稿に併走して定稿用紙に至っている。そうした技手の自覚を傍らにして、詩人が、「旧年末に家長らが、魚や菓の市へ来て、溜息しながら夕方まで、行つたり来たりする」のを焦点として「作品」化したものが、文語詩稿としての「小きメリヤス塩の魚」だったのである。それは、「さういふ犠牲に対立し得る」ものを立ちあげようとする試みだったといえる。そこには、「無能卑怯の逃げ場所」でない「芸術」の成立が志されているであらう。

ここに現われている「家長たち」とは、中村稔がいう「農村社会の支配層である地主」「家長制の支配者」ではない。少なくとも、支配層である地主に限定してはならない。もしそうならば「街をうづめ」るほど集う地主たち、ということになつて、大凶作ならばありえなくても、早魘による地域的な不作を背景としたこの場では、異様な光景にみえるだろう。

ここでは、冒頭に「小きメリヤス」とあつて、子どもたちの存在を念頭に置かざるをえないように導かれ、それに応じているのが「家長」なのである。口語稿「詩への愛憎」でも「そこらの野原のこどもらが、小さな赤いもも引や、足袋をもたずに居るのです」という状況を受けて、「旧年末に家長らが」とあつた。それは普通に一家の主人の意なのであり、いまこそ、子どもをはじめとする家族たちを護

るべき存在であるゆえに、重々しい語を与えたのだと考えられる。実景の「家長たち」とは、一部の自作農も含められようが、農家戸数の4割を占めていた小作自作農など、村の中層にある人々のすがたを主に想起すべきである。

その内容から定稿にもっとも近い、直前の草稿にも位置づけるべき本文をみてみよう（『新校本全集』第七巻校異では下書稿二とする下書稿一の余白にある草稿）。

みのらぬ村の家長たち

雪あえかなる臘月の

まちをうづめて行きまどふ

雪のちぢれの重りきて

風すさまじく歳くるゝ

裏町あたりめぐらし

小きメリヤス塩の魚

藻草花菓子鳥賊の脳

露店ははるにならびたり

あはればかなし暮れそめて  
なほふかぶか行きまどふ

みのらぬ村の家長たち

（鉛筆手入れ最終形）

「みのらぬ村の家長たち」で始まり「みのらぬ村の家長たち」で閉じる、この草稿に、定稿を支えている詩想の核心がまさに「家長たち」というその呼称にこめられてくる、その過程をみるのである。「みのらぬ」ときだからこそ、彼は「家長」たるべく存在しなければならぬ。この段階で、露店の商品が、「歪める陶器」から「藻草花菓子」に入れ替わる。使い古したものから買い替えようという陶器が「歪める」ものだとする、その形容には貧しい日常が切なくしかも露わに浮かびあがつてくるであろう。詩人はそれを、藻草・花・菓子（あるいは花菓子）・鳥賊の脳（塩辛などか）に替えて、なんの修飾もなくただ提示する。これらの品々は、正月のためのいわばささやかな贅沢といえるものであろう。だがそれは、いつの正月にも欠かしがらったのではないか。

新しい年のはじめに、これらささやかな品物をせめて少しでも、子どもたちや妻、年寄りのために用意してやりたかったのに、「なほふかぶか」と行きまどふ「家長」の「物おもひ」（定稿）なのである。無念さがにじむ。

同じ飢饉の風土に生きる人々のなかに生じてくる厳然たる暗。それを語り手は、草稿では「あはればかなし」と、定稿では「はかなきかなや」と詠嘆する。「はかなし」は、取りトメタル事ナシ（言海、ちくま学芸文庫版）の意だという。確かなあてがないとするのも、けつして同情からいうのではない。それは、連続と繰り返されてきた、そして繰り返されてゆく事態だ、という詩人の痛切な言あげなのではないか。しかし、その「家長たち」を感わせたまま、マチは暮れゆくばかりである。

これを、詩人の感傷的な諦念と読むのか、それとも、ほんとうにこのままでよいのかという、黙過するマチの人々への問いかけと読むのか。「無能卑怯の逃げ場所なら、そんなものこそ叩きつぶせ」というもうひとつの信念からすれば、詩人の立場は後者であるにちがいない。

ない。けれどもそれは、読む者に突きつけられてもいる課題なのである。

5

二七年の『岩手県案内』の「六 都市」の項に22市・町が紹介されているが、市は盛岡のみである。そのなかで「花巻町及び花巻川口町」に関して、次のような記述がみえる。

稗貫郡の主邑にして花巻川口町と相連り両町の人口一万三千八百余に及び（中略）県立農学校及高等女学校、小学校、警察署、税務署、区裁判所、営林署、岩手軽便鉄道会社、煉瓦会社、製糸会社等の諸会社及び花巻銀行其他銀行支店等あり貨物の集散旅客の旁午県下有数の地歩を占む米木材、首人形、和傘、菓子種其他の産出も年々増大の傾あり西方数里の間には花巻温泉、台、志戸平、大沢、鉛、西鉛等の温泉あるを以て浴客の此地を過ぐるもの多く商業盛にして殊に東海岸と相通ずる軽便鉄道の基点となり又電気事業をも行はれて当地より花巻温泉及志戸平、大沢温泉間の電車を通じ特設電話の設ありて最も将来の発展地たり

学校、役所、鉄道、工場、銀行、電気、電話……、昭和期にかけてインフラの整備、近代化が確かにすすんできた花巻だが、それはむしろ、地元の豪農や経済人、篤志家たちが支えていたという側面ももちろんあった。国のなしえぬことを、そこに根づいてきた有力な人たちが実現するのも当然のことであり、そのようにして地方における近代化は築かれてきた。にもかかわらず、ムラとの不均衡のうえにマチ場のいわば繁栄が存立しているさまは、「農村」にかかわる問題群を如実に示している。ただしそれが、問題群として取りあげられたとしても、ムラに横たわるさまざまな課題に、ムラのがわに立って手をさしのべ取り組まれることがない。もちろん、発展するマチ場のなかにもさまざまな課題が残存しつづけていた（昭和恐慌はマチもまた疲弊させてゆく）。

こうした「農村」の近代史において、マチ場の発展がムラをもつつみこみ、やがては理想農村の建設につながってゆく、そのような針路をもちえていなかったし、いまもなお、国もこの地域の指導的立場にある人たちも、ムラのためにほんとうに必要なことを、あとまわしにしつづけている。それは、いつの時代にもどこの地域にもあることだろうが、だからこそ普遍的な課題なのであって、詩人が、死病の床にありながらもなお躍起となつて立ち向かおうとするのに、充分なものだといえる。

詩人は、いまもなお眼前に広がっている、この「農村」のさまざまな負の現実を、その詩の場に現出させてゆく。それはしかし、一方的、独善的な近代化批判としてあるのではない。詩人宮沢賢治には、農業教師／技師として、農学校・羅須地人協会・東北碎石工場に身を置いてこの農村にかかわりながら、結果的に重ねかさねてきた挫折とそれに対する自責の念があり、また、いよいよ深く参入してきた法華経護持者としての信念があったはずだ。それらを踏まえて、たとえば詩人自身が最晩年に吐露した、

本気に観察した世界の実際

（書簡488 柳原昌悦宛三三年九月一日付）

といった認識、その「世界」とは間違いなく宮沢賢治が歩んできたこのマチとムラとのさまざまな側面が折り重なりあっている「農村」であり、その「実際」にある問題群に対して、深く強い、反省と祈りをもつて対峙しようとする。そのような〈詩的実践〉としての側面が、生活詩篇のけして少なくはない詩稿に、見いだすことができそうなのである。

(注)

- 1 本文は『柳田國男全集3』（筑摩書房一九九七）。講義録として二五年以降に早稲田大学出版部によって頒布された。改版本として出版されたのが三年の刀江書院版である。
- 2 本の友社復刻版一九九九による。
- 3 岩手県内務部編一九二七。ほぼ新書サイズで237頁、沿革・地勢・気候・戸口・交通・都市・産業・教育・名所旧蹟によって構成する岩手県の簡易総合案内書である。
- 4 歌妓・娼妓の可能性については、平山英子「文語詩「葵花」論一・漢詩の手法の意味」、『論攷宮沢賢治』8号二〇〇七・一一）、信時哲郎「宮澤賢治「文語詩稿五十篇」評釈八」、『甲南女子大研究紀要』43号二〇〇七・三）も指摘している。
- 5 『回顧六十年』（岩手大学農学部一九六二）の「第一章創設前史」中の記述に、明治三〇年代に高等教育諸学校の建議案が盛んに提出されるなか「九州高等農林学校設置、建議案」（明治三十三年一月）があつたことを示し、「岩手二高等農林学校ヲ興スコトニナツテイマス」（明治三四年二月帝國議會衆議予算委員会）という菊地大麓文部大臣の答弁の一部を載せる。九州から東北・岩手に取って代わつたその経緯は不明であるが、この間に岩手県議会の請願があつたらしいことは田口昭典がしている（『盛岡高等農林』、『宮沢賢治大事典』勉誠出版二〇〇七）。
- 6 東北振興論議のながれは、河西英通『東北―つくられた異境』（中公新書二〇〇一）・『続・東北―異境と原境』（中公新書二〇〇七）に詳しい。昭和に入ってから国家的政策として、三四年東北振興調査会設置、三六（昭和一一）年五月には東北振興電力会社法・東北興業株式会社法が公布され、それぞれ一〇月に設立、三七（昭和一二）年東北振興第一期総合計画要綱が発表されて、東北救済がおしすすめられてゆく。だが、『岩手県の百年』（山川出版社一九九五）に「東北振興は東北開発というよりも資源開発に重点がおかれ、本来の開発をもとめる東北地方の思惑との溝を深めた」とさりげなく指摘しているように、この東北振興という国策の射程は、中国大陸における軍事的活動にまで延びていった。
- 7 ボダルコ・ピョートル「ロシア人はいかに来日したか」、『異郷に生きるII・来日ロシア人の足跡』所収、成文社二〇〇三）は、境界は、1923年9月1日の関東大震災である。大震災にあい、国際的な援助を受けたことをきっかけにして日本を去った亡命ロシア人が多かった。他方、関東大震災以降来日した白系ロシア人のほとんどは日本に根を下ろした。人数の面から見れば、



〔第二波〕が数も多く、…日露文化交流の面でもっとも貢献した。彼らの半数以上は、来日前に中国などの他国での亡命生活の経験があったので、異郷への適応やそれにとまなう諸問題についてもある程度予備知識をもっていた。そのため彼らは、〈新入りのよそ者〉と〈土地の人間〉との間にある壁をあまり感じなかった。

8 沢田和彦『白系ロシア人と日本文化』（成文社二〇〇七）に、

日本在留の白系ロシア人がよく従事した職業のひとつがラシャ売りである。1920年代後半にはその三分の一から半分以上がこの職業に従事した。…1924年（大正13年）9月9日付けの『函館日日新聞』によると、函館市内に50人のロシア人が在住していたが、そのうち30人あまりがラシャの行商をしていたという。

9 記事の複写を沢田和彦氏より提供いただいた。感謝申しあげる。なお、発行月日は不明だが、三〇年の第七号である。

10 『カチャ！ 青森・旧新町小に学んだロシア人兄妹の物語』（佐伯嘉彦、エスジーエヌ二〇〇三）によると、「ベリコフ商店」で、「昭和十二年ごろ、青森市に移住してきた」ミハイル・パナチョフが働いていたが、白軍の軍人だった彼はまずハルビンへ亡命し、ハルビンに住んで6年めに日本に移ったという。青森に来るまでには盛岡にも住んでおり、そこで二人の子を授かった。娘のカチャが生まれたのが三〇年前後のようだ。盛岡のハリストス正教会には兄の洗礼記録も残っているというので、昭和初年あたりからパナチョフが盛岡で行商を営んでいた可能性がある。行商は岩手県内の各地域に及んだはずである。

11 「〔小きメリヤス塩の魚〕」〔宮沢賢治文語詩の森〕所収、柏プラーノ一九九九。口語・文語ともに、その用紙から「昭和五年」以降並行して展開してきたことを指摘し、「作品のもとになった体験を昭和四年以前の年末と想定」している。なお、口語稿も発表形をほぼ踏まえて定稿用紙に至っている。

12 『日本の詩歌18宮沢賢治』（中公文庫新訂版一九九四）における「小きメリヤス塩の魚」鑑賞。

13 『岩手県農業史』（岩手県編一九七九）の第3章「大正・昭和期（戦前）の農業の変せん」第2項「土地所有の動き」。

14 島田『文語詩稿叙説』附章5節で「小きメリヤス塩の魚」の本文生成を論じて、下書稿二が最終草稿に位置づけるべきことを提案している。参照されたい。

15 深澤あかね「近代化過程における地方都市商業者の関わり―岩手県花巻地方のインフラ整備を中心に―」（『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集第1号二〇〇五）に、鉄道・電気・電鉄・病院などの整備に花巻地方の商業者がどうかかわっていたかが分析され、「かつて南部藩の支城が置かれ城下町として発展していた花巻の町は、…人々の集積を支えてきた江戸期における立場と、明治期の岩手県内で置かれた地位との格差が、後に花巻町人をして、私費を投じてまでの近代化事業に固執せしめたという捉え方」が示されている。その商業者のひとりに、宮沢賢治の父、政次郎がいる。

16 三二年六月二一日付母木光宛書簡421に、

何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつてゐるので、目立ったことがあるといつても反感の方が多く、実にいやなのです。

とある。『岩手日報』紙上に母木が寄稿した宮沢訪問記に於いても「この郷里では財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつてゐる」という認識に、地元有力者たちの事績に対する宮沢賢治自身の歴史的評価がにじんでいるとはいえないだろうか。

17 注6の『岩手県の百年』の概説によると、

岩手県の戦前の農業は、他の府県と同様、半封建的地主制度の支配する農業であった。同様というよりは、他府県にくらべて、地主の支配力はより強かった。それは、米がとれない山間部が広域的にあり、ここでは零細な畑地を耕作し、山林労働に依存する無地・無産の小作農村がほとんどであったからである。一方地主は、農地のほか大面責の山林を所有し、生産手段を独占し、さらに住居をふくむ生活手段のすべてについても小作人に貸しあたえることをつうじて小作人を支配・従属させる名子制度が強固に存続していたからである。

とある。

3節 〈集〉の性格・風土性と時代性

1

たとえばこの地方には、厩をともなった「曲屋<sup>まがりや</sup>」という特有の家屋形態がみられたように、「馬」という格別な存在があった。岩手で馬産が本格化したのは江戸時代、南部藩の政策による。牧を整え、野馬（官有馬）と里馬（民有馬）に区分して管理し、馬匹改良を奨励してきた。戦乱の時代が去っても兵馬は武家の象徴であり、運輸の手段としても荷役馬は重宝されたが、もともと馬を必要としていたのが藩を経済的に支えていた農民であったはずだ。鎖国を解いて近代化をはかる明治以降も、基盤産業であった農業に馬が必需であったことに変わりはないが、富国強兵を担う帝国陸軍が実質的で優良な軍馬を執拗に求める、という新たな状況を迎えることになる。そのなりゆきを、宮沢賢治の歩みも併せてみると、

時代	岩手の動き	宮沢賢治	国内情勢	対外情勢
明治一九年	・外山御料牧場（↓大一県へ移管） ・軍馬育成所三本木支部中山派出所	▼宮沢賢治	○陸軍省軍馬補充部条例 ○馬匹調査会↓勅令種馬牧場及び種馬所官制 〔馬匹改良〕	○二七年↓日清戦争終わる
二四年	・岩手種馬所（滝沢↓厨川） ・岩手県種馬厩（内丸↓種畜場へ）			
二六年				
二九年				
三一年	・軍馬補充部六原支部（三二年種山・田代出張所）			
三四年	・岩手県種畜場（滝沢↓外山）			
三五年	★凶作			
三八年	★凶作			
三九年	★凶作			
四〇年	・種馬育成所（滝沢）			
四二年	▼盛岡中学校入学			
大正 二年	★凶作			
			○馬政第一次計画第1期 〔血液更新〕	○三七年↓日露戦争終わる



放牧馬

・悍馬(一) [五]

・そのとき酒代 [五]

・柳沢野 [百]

・西のあをじろ [百]

馬詩篇は、詩集の構築段階ごとに、ひっそりとはあるが、増補されていることが分かる。農耕馬が多数をしめるが、それも、農村改革・農業改良を志して彼なりに農村に対した宮沢賢治の記憶のなかで、馬と農民との交感のさまが、日常的な光景として蓄積されていたからにちがいない。それはまた、近代岩手の風土と生活とを象徴する、いまなお代表的なものひとつだったということであろう。そこには、農民生活を支える実質的な存在として、家族のようにとけこんでいる馬がいる。

2

具体例を2編、次に示す。はじめに〈定稿・百編〉段階に成った「悍馬」(二)の場合。

厩肥をはらひてその馬の、  
けいけい碧きびいどろの、

まなこは変る紅の龍、  
天をあがきてとらんとす。

黝き菅藻の袍はねて、  
雲ののろしはとゞろきて、

叩きそだたく封介に、  
こぶしの花もけむるなり。

辛夷の花も咲きけむり、田畑を耕耘して肥料を入れる時季、農作業としてはもともともきつい。じつとり重い厩肥を担って往き来を重ね、馬だつてもうくたびれはてて暴れたくもなる。血走った眼で前脚を跳ねあげ後ろ脚立ちする馬を、封介は叩いたり撫でたり、「黝き菅藻の袍はねて」なだめている。馬の苦しさは同行の封介には身にしみて分かっているのだ。菅藻(すがも)は、虹除けのため馬に掛ける海藻をいうが、ここでは封介の身なりの比喻に重ねられているようにもみえるが、厩肥を下ろした馬に掛けてやるために、封介が負うていたのかもしれない。天上にたちのぼるまっ白な大きな雲と周囲にけぶり立つ辛夷の白い花群とが、この馬と封介とをひとしく包みこんでゆく。

あるいは、ひとりの逃亡者が逃走途中の山峡でかいま見たのが、痩せた畑へのやはり厩肥入れ作業に明け暮れて、いまやつとひとつ家に共寝する馬と農民の、あまりに疲労困憊したありさまがみえる。無題の定稿「月のほのほをかたむけて」である。これは『五十篇』を

分離・独立編集する際に補充されたもの。

月のほのほをかたむけて、  
掲げるはまこと喰みも得ぬ、  
水杵はひとりありしかど、  
渋きこならの実なりけり。

さらばとみちを横ぎりて、  
祈るがごとき月しろに、  
東せし厩肥の幾十つら、  
朽ちしとぼそをうかどひぬ。

まどろむ馬の胸にして、  
山の焼畑 石の畑、  
おぼろに鈴は音をふるひ、  
人もはかなくうまるしき。

人なき山麓の二日路を、  
塩のうるひの茎噛みて、  
夜ざりはせ来し酉蔵は、  
ふたゝび遠く遁れけり。

岩手は北上川流域の平野部をのぞけば、典型的な畑作地帯でしかも山村地帯であつて、この山家の光景は特異なものではない。詩稿は草稿で「兇賊」と題される段階を経ているが、彼はしかしなにも盗ることなく、再び遁走する。ここまでの逃走の日々、ひもじくてならなかつたはずの盗賊でさえ、この一家を見限ってしまう、それほどの生活がそこにあつた。あるいは、逃亡者自身、かつてそこにあり、ついに棄てさつてきたものだ。

3

そうした馬とともにある農民の生活の、ひとつの極限が、飢饉の風土を主題とした「盆地に白く霧よどみ」にうかがえるのではないだろうか。

次に示す本文の、「白く霧よどみ」「稻田の」「花はいまだにをさまらぬ」という光景は、いわゆるヤマセによる冷害の凶作が到来しようとしているのを暗示している。

盆地に白く霧よどみ、

めぐれる山のうら青を、

稲田の水は冽くして、

花はいまだにをさまらぬ。

窓五つなる学校に、

さびしく学童らをわが待てば、

藻を装へる馬ひきて、

ひとびと木炭を積み出づる。

夏のオホーツク海高気圧が停滞して吹き出す冷たい風が、親潮の海上で霧や層雲をとまなつて、東北の太平洋沿岸から内陸に吹きこんでくるのである。この地方の凶作は、早害よりも冷害によるほうが甚大だったという。「学童ら」が登校してこないのも、たとえば、一九〇二（明治三五）年の大凶作の際には、

夏になつてからも、毎日毎日赤羽根山から平野前原山にかけて濃霧に被われ二十日になつても稲の出穂を見ず、二百二十日に至り点々と出穂を初め、二百三十日頃やつと出揃つたが開花せず、その後開花せるも結実しないで、遂に種もないような大凶作になつた。秋になつてから村民皆山野に出て蕨の根を掘り澱粉を取つて食料にした。また檜の木の実も拾い集めて食つた。

（菊池万重郎記録、遠野市立上郷小開校100周年・120周年記念誌『希望』）  
という情況があつたように、飢えをしのぐ家族総出の手伝いをして、それどころではないからである。米の収穫が見込めぬのならわずかも現金収入を得ておきたい、人々は馬に炭俵を積んで町に向かつて売りに出る。こんな非常事態にもかかわらず、例の藻をかけてやる配慮を失わない。「藻を装へる馬」のすがたには、農民の、馬に対するこまやかな心のありようがみえる。飢饉の風土とともに生きる、そのすがたが切々ととらえられていよう。

しかしこの凶作詩篇の始発は送別の詩であつた。題材をメモした『文語詩篇ノート』の二九（昭和四）年の項には、

四月、ナガ眼空シク果ツベキ眼力、高橋武治ニ送ル

とあるが、それを踏まえ、農学校時代の教え子が遠野へ教師として赴く、その激励を主題に下書稿一は起稿されていたのである。それが次のように、下書稿二の手入れから「なれ」を喪つて激励は影をひそめ、下書稿三段階で詩の場が一変して、題名は失うもその本文が定稿に至る。

過程	稿一・三〇年	無題	稿二・三〇・二一、二年	稿三・三二・三三年	定稿・三三年八月
題名	なれ		↓凶作地	凶作地↓↓二期	
人物	なれ		なれ↓	わが	わが

そこには、三一（昭和六）年九月の遠野訪問が契機としてあった。そのとき案内役を務めてくれた高橋（沢里）武治に、「その後加減はいかゞですか。一二日天氣が続いてよるこんでゐたら今日また曇りだして稲作は実に心配です」（九月九日付書簡386）と、詩人はいいやっております、また当時使用していた『兄妹像手帳』にも、

◎盆地をめぐる山くらく／わずかに削ぐ青ぞらや／稲は青穂をうちなめて／露もおとさぬあしたかぬ（29・30頁）

◎topazのそらはうごかず／峽はいま秋風なくて／互の目なる小き苗代／ましろなる水を湛えて／をちこちに稲はうち伏し／その穂並あるひはしろき／またブリキのいろなせる…（31・32頁）

という凶作の光景を写したスケッチが記されるとともに、頁は前後するのだが、

西曆一千九百三十一年の秋のこのすさまじき風景を恐らく私は忘れることができないであろう（7頁）

ともあって、この年の凶荒に対して、敗北の宣言とみえようことばを書きつけている。この年、盛岡高等農林学校の恩師関豊太郎博士に学んだ、

廉価を以て農家に石灰肥料を供給し病土を改良して健康地となし耕地の拡張延ては農事の振興の一助とならん

（一七（大正六）年一月二日付『岩手日報』）

というかつての主張を、病軀のまだ癒えぬまま、まさに実行し実現しようとして、東北碎石工場技師となり、岩手はもとより秋田・宮城まで奔走していたからである。なまなましいこの遠野体験は、凶作地帯という風土性をモチーフとした詩の場への転換に即時に向かっている。いわば詩層の突端に、同時代の現実というものを据えてゆくのである。

4

異常気象の到来なども含めて、その風土をその時代の動きが重く圧している。それも、『文語詩稿』の性格のひとつとしてあるのではないだろうか。

農耕馬でなく放牧馬が現われる「悍馬」（一）に注目してみよう。そこには、岩手山麓の種馬育成所で、牧人たちの呪文のごとき掛声とまるで蛞蝓の角のように山上から麓へと次から次へと迫ってくる藍色の雲影に追いつてられて、いよいよ追運動に駆られるアラブ馬の



さまがとらえている。

アラブ種の原因地はアラビア半島とされ、

東洋種の代表であり、外貌の機微、能力の秀逸において世界で比肩するものがない。容姿の美しき、稟性の佳良、遺伝力の強さはこれに及ぶものがない。したがって欧州の馬匹を貴化するのにとごとく本種が用いられた。というもので、日本でも、日清・日露の戦争体験を踏まえて策定された馬政計画による馬匹改良が同様であった。輸入したアラブ種による純血種の内国産アラブを、種馬牧場が生産し種馬育成所が調教、各地の種馬所に配布して、血液更新に供するというシステムが組み立てられている。

稿三・三〇・三一年

牧人

火山の雪を雲滂の  
青きなめくじいくたびか  
角うちのべておろくれば  
毛布の赤に頭を縛むすび  
陀羅尼をまがふことばもて  
ののしり交はし枯枯れの  
かしはのはらをよぎり行なれ  
(最終形)

稿四・三一・三一年

牧人

火山の雪を雲滂の  
青きなめくじいくたびか  
角うちのべてすべりくる  
柏ばやしの枯れはらを  
毛布の赤に頭を縛むすび  
陀羅尼をまがふことばもて  
ののしりかはしまき人ら  
貴きアラブの種馬を  
うちかこみつゝ過ぎにけり  
(開始形)

稿五・三二・三三年

牧人

火山の雪を雲かげの  
青きなめくじいくたびか  
角うちのべてすべりくる  
柏ばやしの枯れはらを  
毛布の赤に頭を縛むすび  
陀羅尼をまがふことばもて  
罵りかひつ牧人ら  
貴きアラブの種馬の  
息熱くしていばゆるを  
まもりかこみて過ぎ行きにけり  
(開始形)

定稿・三三年八月

悍馬

毛布の赤に頭を縛むすび、  
陀羅尼をまがふことばもて、  
罵りかはし牧人ら、  
貴きアラブの種馬の、  
息あつくしていばゆるを、  
まもりかこみてもるともに、  
雪の火山の裾野原、  
赭き柏を過ぎくれば、  
山はいくたび雲滂の、  
藍のなめくじ角のべて、  
おとしけおとしいよいよに、  
馬を血馬となしにけり。

この詩稿にその貴種アラブが現われるのは、三一年以降に展開したと推定される下書稿四からである。

それでも、三二(昭和七)年からの展開とみられる下書稿五の開始形までは、その詩想の重心は、題名にも示されているように、牧人たちの存在にまだかかっていたとみてよいだろう。けれども、その開始形に対し、詩人は別の鉛筆によって、たぶん三三(昭和八)年にかけて次のようなさらなる手を入れて、貴種アラブの存在のほうに重心を移してゆく。

過程	稿四	鉛筆開始形	稿五	鉛筆開始形	別の鉛筆手入れ
題名	牧人		牧人		↓「血↓悍」馬図
本文	貴きアラブの種馬		貴きアラブの種馬		貴きアラブの種馬 ↓馬を血馬となしにけり。

「悍馬」と題を改め、本文に「馬を血馬となし」てゆくという追加をおこなうのである。そこには、アラブが舞台に登場してきた三年の下書稿四以来、「牧人」の背後にあるものにも、その視線を漸次おしすすめる詩想の深まりがあった、とみてはならないか。

そう推理するてがかりに、その三年にはふたりの軍人が視察にやってくる、という『岩手日報』の新聞報道があったことを指摘しておきたい。四月一日付では「軍馬補充部本部長梅崎延太郎少将」が、五月二日付では「陸軍省軍務局馬政課長高波祐治大佐」が来盛して、ともに太田村（当時、現在の盛岡市の太田地区）にあったアラブ牧場を、また滝沢の種馬育成所（梅崎少将の場合はこのとき訪問したかは不明だが「従来滝沢の育成所等は数回視察して居りますが」との談話が載る）も訪れるのである。目的は、「陸軍ではアラブ種の馬を欲してゐる」とした『岩手日報』四月一日付の見出しに明らかである。五月二日付に載った高波大佐の談話にも、「何れにせよサラブレッドにはあまり用がないアラブが最も僕らの興味を引く」とある。

このことが、詩想の深化に向かう契機を与えたのではないか。報道後の六月に、

種馬所と育成所とを訪ひ申候

(書簡358)

と、詩人もまた東北砕石工場技師として種馬育成所に向かつていたのである。陸軍省は、その年の六月に「滿蒙問題解決方策の大綱」をまとめ、七月には軍制改革案を提出。その先にあるのは、九月の満州事変から三二年三月の満州国建国宣言を経て三三年三月国際連盟脱退に至る、中国大陸侵略の途をひたあゆむ戦争突入への時代の動きである。アラブ馬の視察から、程なくまのあたりにしてゆく戦時への事態が、詩人の詩想に反映されていったのではなからうか。

この詩稿がたどりついた定稿段階の「貴きアラブの種馬」を、作品論としては、たとえば、

核心は、この血馬に「宇宙意志」のエネルギーが降り注ぐ、その描写にあるだろう。(中略) 牧夫が発する陀羅尼のような声に、宇宙の根源力がよび覚まされ、雲の影となつて降り注ぐ、そしてそのエネルギーが、悍馬の持つ優れた特性を目覚めさせるのである。とするような読みときも、もちろん成立しうるのであろう。

けれども、その登場が、詩句の訂正や変更といった程度の推敲によつてきたのではない点や、『文語詩稿』のなかで馬種名としてあえてこれだけが指名されている点からも、単なる追加の詩句だったと見過ごすべきでないだろう。また、口語稿において、

サラブレッド	・ 白い鳥 (春と修羅)	・ 七五北上山地の春 (↓種馬検査日)	・ 一〇七三鉢山駅 (詩ノート)
アングロアラブ	・ 小岩井農場、第四梯形、旭	・ 七五北上山地の春	・ 牧場地方の春の歌 (口語詩稿、歌曲)
ハックニー	・ 川 (補遺)	・ 七五北上山地の春	・ 一〇〇一 番稿 (下書稿二)、一〇八九 番稿、 倒れかかった稲のあひだで (下書稿)
トロッター		・ 七五北上山地の春	

などと、その馬種を見分けている詩人が、アラブ種の特質を知らなかったはずもない。その特質が活かされた結果として、将校乗馬や騎兵用馬としてアラブ馬が多用されてきたことは、戦争の歴史が示すところである。

という。歴史的にこの馬種は、戦闘を引き受けなければならぬ存在なのであって、精悍なる駿馬しゅんまにいま与えられようとしているのが、まさに血にまみれねばならぬ、軍馬としての役割である。軍国化の象徴的存在として、この詩の場では意識化されている可能性も考えられるのである。

推理は、人々の生活に密接にかかわっているこの馬産の地が軍事政策のなかからめとられてゆくそのゆくえを、種馬育成所の牧人たちの異様なありさまに重ねて問おうとした詩想から、血馬と化してゆく貴種アラブの発見によって、迫りくる「戦争の時代」のゆくえを問う詩想へと深められているのではないか、というところまでたどりつくのである。

5

ここでは「馬」詩群をおして、その風土性と時代性についてその一端を明らかにすることを試みながら、この馬産の地にいま重くのしかかっている、戦時に向かう同時代性を読みとろうとするところまでたどりついた。詩人の、この「戦争」に対する関心は確かにあり、「馬」詩群から眼を転じると、たとえば、三三年八月前後に成った定稿「上流」五にみえる、次のような、大規模な手入れに、よく現われていると思える(傍線部が最終形、島田による)。

秋立つけふをくちなはの、  
沼面はるかに泳ぎ居て、

水ぎぼうしはむらさきの、  
花穂ひとしくつらねけり。

「蘆刈りびとはいまさらには、↓いくさの噂しげければ、」 「赤くたられし眼あげて、↓蘆刈りびとは(は↓も) いまさらには、」  
暗き岩頸風の雲、  
天のけはひをうかどひぬ。

連日の農事の過労から眼を血走らせた農夫の像を、詩人は突然、戦時を案ずるふうに造形しかえるのである。七月には、満州事変以来の戦死者がすでに2500名を超えたという状況である(陸軍省発表)。詩人にも、実際、報道以外に、町や村の人々の間でかわされてきた戦地の噂がさまざまなかたちでもたらされていた。八月には、満州に出征していた羅須地人協会時代の会員伊藤与蔵から病気の見舞いと近況報告を認めた手紙を受けると、詩人はその返信で、

弟への度々のお手紙また日報等に於る通信記事、殊に東京発刊の諸雑誌が載せた第二師団幹部とか、従軍記者達とかの座談会記録に仍て読んで居りますが、実に病弱私のごときただ身顛ひ声を呑んで出征の各位に濟まないと思ふばかりです。(書簡484a)

と記している。<sup>11</sup>

当時の検閲や報道統制のなかで得られる情報から、どこまで戦争の真実を洞察することができたか、といえは、疑問符もつけなければならぬが、少なくともこの時期の詩人が、さまざまメディアをとおし、戦争の現状について、あるいはこの「蘆刈りびと」のすがたにも重なり、そのゆくえを不安なまなざしをもって注視していたことを、うかがわせるものである。<sup>12</sup>

(注)

1 定稿には、馬の姿は見えないが、伯楽(車中<sup>二</sup>)<sup>四</sup>や馬喰(社会主事佐伯正氏<sup>四</sup>・かれ草の雪とけたれば<sup>四</sup>、あるいは放牧地(賦役<sup>四</sup>・塔中秘事<sup>四</sup>・雪げの水に涵されし<sup>四</sup>)や軍馬補充部(玉蜀黍を播き<sup>五</sup>、また廐(こらはみな手を引き交へて<sup>五</sup>)など、かわかる場所を場面にとらえているものがある。それも含めれば「馬」詩群は20編近くに及ぶことになる。また未定稿にも「ま青きそらの風をふるはし」(うなじをあぐる二疋の馬)、「馬行き人行き自転車行きて」(馬が一疋東へ行く)、「あくたうかべる朝の水」(苗つけ馬)がみえる。

2 早害による凶作は、「早儉」<sup>四</sup>・「早害地帯」<sup>四</sup>・「遊園地工作」<sup>四</sup>・「鉛のいろの冬海の」<sup>四</sup>などにとらえている(未は未定稿)。

3 島田「文語詩稿(盆地に白く霧よどみ)の生成」(『国語教育論叢』第16号二〇〇七・三)を参照されたい。

草稿の段階に対して具体的な時期(年)を想定しているのは、詩稿用紙の使用開始時期が、『新校本宮澤賢治全集』第十六巻草

稿通観篇の記述によれば、次のようにも推定されるからである。

・無 野用紙 二八、九（昭和三、四）年の「疾中」詩篇に使用。書簡には三〇（昭和五）年九月に用いられる。《文語詩稿》には三〇年前後からと推定。

・26系用紙 26行罫。書簡使用例がない。22系用紙に先行して用いられている点から、三〇年からと推定。

・22系用紙 22行罫。日付が明確な書簡で三二年二月以降の使用例がある。三二年に入る前後から使用と推定。

・定 稿用紙 三三年六月にあつらえられたもの（宮沢清六「兄賢治の生涯」、『兄のトランク』所収、筑摩書房一九八七）。

なお、ヤマセの侵入を予告する雲や霧の出没に、詩人は相当敏感である。たとえば次の2編の詩稿（定稿本文も行形式で示した）、

柳沢野

盛岡中学校

① 焼けのなだらを雲はせて、

海鼠のほひいちじるき。

② うれひて蒼き柏ゆゑ、

馬は黒藻に飾らるゝ。

（定稿）

木柵に注ぐさ霧と

一鐘のラツパが鳴りて

（未定稿）

幹彫れる桐のいくもと

急ぎ行く港先生

白聖城秋のガラスは

気乗りせぬフットボールを

における、「柳沢野」の「海鼠のほひいちじるき」雲、「盛岡中学校」の「木柵に注ぐさ霧」とは、ヤマセの雲であり霧であると読みうる余地をもっている。やはり「藻に飾ら」れた馬をつつみこんでいる「海鼠のほひ」というのも、三陸沖から冷たい風が運んできたかすかな潮の匂いではなかつたらうか。「さ霧」もまたさわやかな朝霧にはみえにくい。「うれひ」あるいは「うつろ」というその詩の場を支配している調子が、けつしてかろやかなものでないからだ。前者は、『歌稿〔B〕』で「明治四十四年一月より」と示された歌群のなかの一首をもとに文語詩化され、その過程で現われてきたもの。後者は、『文語詩篇ノート』に記入されている一三（大正二）年九月の「桐下ニテ霧ノ朝／村井、高橋、佐光」という素材メモを踏まえたもの。いずれも、中学五年の宮沢賢治がまのあたりにした凶作という事態をその背景にしている可能性も考えられる。とすれば、雲も霧も、やはりあのときのものであり、それを詩層に埋めて詩の場は構築されている。

4 武市銀治郎『富国強馬』（講談社選書メチエ一九九九）。

5 詳しくは、島田「貴きアラヴの種馬／文語詩稿五十篇」悍馬「試注」『国語教育論叢』第14号二〇〇五・三、「貴きアラヴの種馬を追う／文語詩稿」悍馬「二」の詩層『賢治研究』96号、二〇〇六・二を参照されたい。

6 長沼士朗「宮沢賢治の宗教的世界観」その「宇宙意志」をめぐって『風船』第10号二〇〇七・五。

7 注4に同じ。

8 「血馬」については、『漢書』にみえる「汗血馬」（伝説の駿馬）のこと（原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍一九九九）とする理解が一般的であったが、宮沢賢治学会福山セミナー二〇〇九における発表者の事前勉強会で、磯貝英夫氏から、この造語が

9 「血税」(『言海』)によれば、命ヲ税トスル意、徴兵ノ異称)からきていることも考えられるのではないか、との助言をいただいた。詩稿用紙上に起稿した最初である下書稿二(了稿)、三(〇年)の本文は無題で、

ひかりまばゆき雲のふさ、

雪あえかなるこのみちを

わづかにゆるく栗のうれ、

牧人たちのい行くなれ

赤き毛布にぬか結び

松のみどりはあせたれど

陀羅尼をまがふことばして

針つややかに波立たす

(最終形)

というもの。「牧人ら」は「赤き毛布にぬか結び陀羅尼をまがふことばして」とすでにその妖しさがとらえられているが、輝く天上とوراさびしい地上との間にあって、焦点は妖しい牧人にあつて馬は姿を現わしていない。用紙が26系で「冬のスケッチ」を素材としたものが多く、これもその散佚稿の可能性がある。とすれば、二二、三(大正一一、一二)年の農学校教師時代の体験のうえに成り立っていったことになる。

10 『近代日本総合年表第四版』(岩波書店二〇〇一)による。

11 この書簡に、「戦争支持思想」を読むものもあるが(鈴木敏子など)、栗原敦「手紙の読み方・伊藤与蔵あて宮沢賢治書簡について」(『実践國文学』第53号一九九八・三)が、当時の検閲の状況や、報道事実を伝聞のことに踏みとどまっている点、戦地から見舞い状をくれた伊藤に対してとるべき態度などを指摘し、反論している。

12 「馬」詩群の関連作品に、開所祭に向けた農婦たちの手踊りの稽古を所長に見とがめられそうになって技手が慌てて中止させるという、軍馬補充部六原支部を舞台とした「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」<sup>五</sup>がある。三二年以降の再編段階に口語稿をもとに《文語詩稿》化され、鉛筆の(写稿)に撰ばれ定稿化されたが、六原支部は二五(大正一四)年に廃止されている。同時代性の観点からすれば、ずれていることになるが、このずれにも意味を見いだすことができる。六原支部跡地は民間払い下げの嘆願や飛行場誘致など紆余曲折を経て、満州国が建国された三二年九月に石黒英彦知事の肝いりで六原青年道場が設立されることになり、「風教の作興並に産業の開発に尽くし進んで新領土及び海外に発展し、以て本県の振興と皇国の隆興とに貢献する地方中堅人物を養成する」(傍線は島田)。『岩手県大鑑紀元二千六百年記念』新岩手日報社一九四〇)という施設として再生する。その訓練部から早速一〇月には満蒙武装移民団が巣立った。かつての軍馬補充部が軍国主義の一翼を担う人材育成の場に転じる年から、この詩稿は《文語詩稿》化されたのである。軍馬補充部六原支部の記憶を再現するこの詩の場には、その上層に、農兵養成の六原道場という、現在進行形が積みあげられるはずだ。それを、あえて下層部分の再現に踏みとどまっている。目をそむけているのではなく、生活の身近にいままさに動いている戦争という時代の現場について、その裏づけをしているのではなからうか。たとえば、

③さあれひんがし一つらの、  
うこんざくらをせなにしてい、

所長中佐は胸高く、

野面はるかにのぞみある。

④「いそぎひれふせ、ひぎまづけ。

みじろがざれ。」と技手云へば、

種子やまくらんいこふらん、

ひとちかすみにうごくともなし。

という場面には、軍国主義がすでに着々と人々の間に浸透して、それは精神を教化し、肉体化さえされているありさまを読みとることもできそうである。そのような基盤のうえに現われてきたものを、詩人はこの詩の場の虚空に凝視していると考えてはならないだろうか。

4 節 〈集〉の針路・社会詩篇の存在

1

定稿・百編について、場所や人物の存在などその舞台空間を基軸にして、自然・田園・生活という三分野をまず設定し、各詩稿を分別して、その詩群の実態分析を試みることによつて、この〈集〉の輪郭をなぞつてきたが、そこに起こっている事件／事態のほうに視点をあててみると、空間世界を基盤としたうえに、もうひとつの世界が重ねられていることが、明白である。

すでに田園詩篇・生活詩篇の分析においてその傾向に言及しているが、「農村」の近代化という視座から、たとえば田園におけるその後進性を如実にしたもの、あるいは生活詩篇におけるマチとムラとの生活格差を背景としたものなど、詩の場に社会的課題がひそんでい、またはそれが色濃く現われている詩稿が、この〈集〉において印象的である。そのような詩稿を、

社会詩篇 社会的課題を見据えまたはひそめており、あるいは批判的・告発的な態度さえもがうかがえるとみられるものと位置づけてみると、自然・田園・生活の各詩篇群で、現時点での作品理解を踏まえて、この社会詩篇としての相貌も濃く併せもつていと認められようものをおおよそ数えあげれば、次のように指摘できる。

社会詩篇	
5 編	詩篇分野 自然詩篇 10 編
2 5 編	田園詩篇 3 1 編
3 2 編	生活詩篇 4 9 編

90編のうち、その半数以上に社会詩篇としての性格を明らかに、あるいは密かに認めることができるように思う。自然詩篇への分布が少ないが、社会的な視座の存在をうかがわせる詩稿が他にないわけではない。作品の理解がすすめば、社会詩篇としての自然詩篇の認定は増える可能性がある。それに対して、人が主体となつている田園・生活詩篇には、明らかに集中的である。特に田園詩篇では、70割に及ぶ詩稿に、主として「農村」の近代化を視座とした〈社会性〉が色濃く現われている。その点で、生活詩篇における社会詩篇の重なりは厚くないようにみえる。ただし、その詩句に〈社会性〉をひそめていると考えられる詩稿が少なくとも10編程度はみえており、やはり作品の理解が深まれば、それも社会詩篇として認めなければならないと思える。



以下、社会詩篇としての性格を見いだしうる詩稿について、いくつかの詩句を具体的に引きつつ、そこにみられる事態／題材の（社会性）の内容を整理しながら、そこに醸されてゆく詩の世界のありようを確かめておきたい。

2

自然詩篇で、その（社会性）を比較的判然と指摘できるのが、箱ヶ森、毒ヶ森、大石山、南昌山、東根山の容姿をとらえた「岩頸列」、北上川流域峡野の早春光景を描く「峡野早春」であろう。そこには、

・ 山よほのぼのひらめきて、  
その雪尾根をかざやかし、  
・ 稔らぬなげきいまさらに、  
春をのぞみて深めるを。

わびしき雲をふりはらへ、  
野面のうれひを燃し了せ。

（「岩頸列」第三連）  
（「峡野早春」第三連）

などとあって、この山河にはぐくまれていく「野」は、しかし「稔らぬ」「うれひ」に覆われている、という認識がある。人々の糧をもたらすはずの自然が、必ずしも人々を幸いに導かぬこの地方風土の問題意識を、詩人は叙景のなかに組みこんでいる。豊かな自然をいただきその恩恵に浴しながらも、他方では飢饉の風土という悲痛の課題と常に苦闘しつづけてきた東北・岩手、農村がそのような時空間のなかにありつづけていることを、詩人は見つけている。（定稿・百編）に向かう詩人の内部には、そうした視座が確固としてあったのではないか。

したがって、自然詩篇は自然讃歌としてただ読み過ぎすわけにはいかない、と思える。たとえば、

柳沢野

焼けのなだらを雲はせて、  
うれひて蒼き柏ゆる、  
海鼠のほひいちじるき。  
馬は黒藻に飾らるゝ。

という、岩手山麓の放牧光景をとらえたこの詩稿に、（社会性）はその影を落としていないのだろうか。

馬刺しの虹を払うために人が「黒藻」（黒い海藻）を編んで首や肩尻に掛けた馬の姿から、舞台はいま夏であろうことが知られる。しかし、「焼けのなだらを雲はせて、海鼠のほひいちじるき」とあって、岩手山の焼け走りのうえを雲が飛ぶようにながれ、この高原牧場に海鼠の匂いが著しくただよっている、というのである。

山岳地帯に「海鼠のほひ」が濃くただようとは、どういうことなのか。

これについては、吉田敬二が「しかし、実際にナマコの匂いを嗅いでみると臭わないのである。ナマコの匂いは、湿気を含む草原の太気を視覚から嗅覚へと、より体感的に表現した詩的レトリックである」としたうえで、中学時代の松島方面修学旅行の記憶を前提に、「ナマコの匂いとはおそらく海の潮の匂いであるまいか。あるいは、海岸の浅瀬で海の中のをのぞいたような感じと、柳沢野とに共通する雰囲気があったのかもしれない」と指摘している。

岩手の内陸部に生まれ育ち、生活の拠点もそこに定めていた詩人宮沢賢治にとつて、海鼠は必ずしも親しいものではなかつたろうから、匂いや味わいに無頓着で、「なまこ雲」や「なまこ山」などその色や形状にかかわって、現われることが多い。それからすると、この「海鼠のほひ」という表現は特異な例ではあるが、海／潮にかような場の「雰囲気」を示す詩的レトリックであろうという吉田論は説得的である。けれどもこの表現は、心象スケッチ集『春と修羅』の「真空溶媒」にすでにみえていた。

いてふの葉ならみんな青い

冴えかへつてふるへてゐる

いまやそこらは alcohol 瓶のなかのけしき

白い輝雲のあちこちが切れて

あの永久の海蒼がのぞきでてゐる

それから新鮮なそのらの海鼠の匂

(一九二二、五、一八)

この海鼠に出合った恩田逸夫は、

空の色を海の蒼で表現したのに続けて、その連想から、潮で洗われた新鮮なナマコの匂いを空の匂いとしている。歌稿「明治四四年一月より」の冒頭にした文語詩でも、次のようにナマコの匂いをとりあげている。「柳沢／こゆれば山の裾野にて／けはしき雲の流るるを／海鼠のほひいちぢるく／きみかげさうの花さけば／馬は黒藻を飾られぬ」。

と注をつけている。やはり「連想」からきた比喩、詩的レトリックとしてとらえているようだ。その同例として「歌稿」に記された「文語詩」を引くが、これが、新校本全集校異で「柳沢野」の下書稿一に位置づけられたものである(ただし、歌稿の赤インクによる文語詩化は相当後年の、三〇年前後にも推定すべきもの。恩田の引用はその手入れ形で、自筆稿では「越ゆれば」「咲けば」と漢字表記である)。しかし、ふたつは果たして同質なのか。

「真空溶媒」には、「(Eine Phantasia im Morgen)」という副題があった。これに対しては「ドイツ語、朝の幻想。冒は *am* が正しい用法」と恩田逸夫の注がある。つまり詩人は、五月の朝の幻想のひとつとして、雲の切れ間からのぞく空に深海の色を見、そこに「海鼠の

句」を想像している、といえようから、これは確かに詩的レトリックといっている場合なのである。「柳沢野」の「海鼠のにほひ」の場合も、同様に幻想的な詩的レトリックであるのか。同じく心象スケッチ集『春と修羅第三集』の「二〇七二 県技師の雲に対するステートメント 一九二七、六、一」に、すでに次のような「海鼠」が現われていた。

第一おまへがここより東

鶯いろに装ほひて

連亘遠き地塊を覆ひ

はては渺茫視界のきはみ

大洋をさへ犯すこと

第二にはかの層巻雲や

青い虚空に逆つて

おまへの北へ馳けること

第三 暗い気層の海鼠

五葉の山の上部に於て

あらゆる淫卑なひかりとかたち

その変幻と出沒を

おまへがやゝもはゞからぬ

これらを綜合して見るに

あやしくやはらかな雨雲よ

(定稿)

この口語稿に「句／＼にほひ」は現われてこないが、「黒く淫らな雨雲」の到来に、「異常な不安を持ち来し」<sup>(3)</sup>ている県技師が異議申し立てをおこなう、というもので、その「雨雲」をもたらししているのが「暗い気層の海鼠」である。情景描写にはさまざまな形容、修飾がほどこされて幻想風なおもむきもあるけれども、「幻想」そのものではない。その「暗い気層の海鼠」が、遠野の東南にあつて、三陸海岸とを隔てている「五葉の山の上部に於て」、「その変幻と出沒を」<sup>(4)</sup>「やゝもはゞからぬ」というのである。

その状況は、岩手山麓「柳沢野」における、山腹の「焼けのなだらを雲はせて」いる状態にも重ねられるものではないのか、岩手山上の雲も「暗い気層の海鼠」の具体的な動きであるとはいえないだろうか。たとえば、定稿に向かう（写稿）成立以前の下書稿<sup>(1)</sup>には、

雲「ひくく垂れ↓の流れのいとひくく」

「・↓夏の↓・」海鼠のにほひ「雲垂れて↓風にみち」

という最終の手入れがみえている。低く垂れた重い夏の雨雲とともに吹き来たる「風にみち」ているのが、「海鼠のにほひ」だということである。すると、「海鼠のにほひいちじるき」という状況は、「暗い気層の海鼠」が「にほひ」をもたらし「いちじるき」もの、というふうなうけとられてくる。

つまり、低く重い雲をつれてきた風に、「海鼠のにほひ」が満ちているというのだ。

この生成過程を見ると、確かに海鼠の匂いがしていた、と受けとったほうがいいのではないか。海鼠に匂いがないとすれば、恩田論や吉田論のいうとおり「海の潮の匂い」であつたらう。それは、海上をわたつてしるびよる、この地方特有の初夏から秋にかけての季節風、ヤマセがもたらした潮の匂いだ、と考えられる。オホーツク海高気圧の停滞による寒冷気流が海面から熱や水蒸気を補給しながら移流してきて、東北の太平洋沿岸から内陸部に霧や層雲を伴って吹きこんでくる低温の風をヤマセと呼び、それは明治以降も大きな冷害をもたらしてきた。ここでも、それがヤマセであれば、定稿段階で、「うれひて蒼き柏ゆゑ、馬は黒藻に飾らる」とある「うれひて蒼き柏」の、その不安げなさまの意味もまた了解できよう。これも単なる擬人法でなく、潮風による塩害などの予兆のさまであるのかもしれない。さらに、放牧の野馬が「黒藻に飾ら」れているありさまは、ヤマセのために凶作の秋を迎えようとしている遠野の村で、人々が「藻を装へる馬」に炭を積んで引いてゆく、その馬のありようにも重ねるのである。寒い夏の高地であれば、蛇刺し除けのためだけに、馬を藻で装わせたわけでもなからう。羅須地人協会時代以来、凶作を招かないまでも「サムサノナツハ／オロオロアルキ」(『雨ニモマケズ手帳』)ながら、農業技師としての後半生を生きた詩人宮沢賢治にとつて、ヤマセの到来には敏感なのであり、その予兆さえ見逃すことはできなかったはずだ。

太平洋岸から直線距離でおよそ80kmほどもある岩手山麓に、その当時の環境ならば、実際に潮の匂いが濃くただようことがありえたかどうか。ただ、そのことはさほど重要でなく、それよりもむしろ、その雲と風とが海から襲来していることを、詩人が認識したゆえの表現であつたかが、大事なのだ。一〇七二番稿は、田植え時期の六月に仙人峠あたりから太平洋を望み、五葉山のほうまで視野に入れて、海と陸とを往き来する「黒い雨雲」の背後にる実体を「暗い気層の海鼠」ととらえたのは、そのような気象認識による確信的な表現であつた。「柳沢野」に現われた「海鼠のにほひ」もまた「幻想」による産物でなく、現実そのものをとらえようとした詩的レトリックである可能性があるわけではない。ヤマセの到来を織りこんだ自然詩篇とすれば、それは社会詩篇としての性格も帯びてくる。

「柳沢野」のほかにも、社会詩篇としての性格を探りうる余地のあるものに、

・海浸す日より棲みあて、

たゝかひにやぶれし神の、

二面の猛きすがたを、

げにもひかりの群青や、

鳥はその巢やつくるはん、

ああきみがまなざしのはて、

もろともにあらんと云ひし、

七つ森の二つがなかのひとつなり、

一石一字をろがみて、

寿量の品は神さびて、

青々と行衛しらずも。

山のけむりのこなたにも、

ちぎれの艸をついばみぬ。

うら青く天盤は澄み、

そのまちのけぶりは遠き。

そのかみひそにうづめけん、

みねにそのをに鎮まりぬ。

(「水と濃きなだれの風や」)

(「きみにならびて野にたてば」)

(「流水」)

(「鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし」)

(「国土」)

などの詩稿をあげることができるともいえない。ここでそのひとつひとつを追究する余裕はないが、このことは、自然詩篇には、濃淡はあるにしても、その背後に田園や生活といった人々のありようがひかえている、と考えられてよいのではなからうか。要するに、〈集〉の構造として、自然詩篇が他の詩篇分野と分離的にあるのではなく、東北／岩手の風土の構成要素として成立しているといえるようである。

3

その視座に〈社会性〉を見いだした田園／社会詩篇の、その詩の場がつかんでいるもとも暗い現実が、凶作を怖れ、凶作になすべも知らぬ農民たちの存在である。

・火雲むらがり翔べば、

火雲あつまり去れば、

・穎花青じろき稲むしろ、

朝の曇りのこんにやくを、

・稲田の水は冽くして、

・野を野のかぎり早割れ田の、

術をもしらに家長たち、

・はかなきかなや暮れそめて、

街をうづめて行きまどふ、

そのまなこはばみてうつる。

麦の束遠くたどずむ。

水路のへりにたどずみて、

さくさくさくと切りけり。

花はいまだにをさまらぬ。

白き空穂のなかにして、

むなしく風をみまもりぬ。

なほふかぶかと物おもひ、

みのらぬ村の家長たち。

(「老農」)

(「祭日」)

(「盆地に白く霧よどみ」)

(「早儉」)

(「小きメリヤス塩の魚」)

「老農」の「火雲」は夏の夕焼け雲にみることもできようが、ここでは「ひでり雲」ととらえられる余地もあつて、そうみると、老農の「そのまなこははみてうつろ」な表情は、異常気象の到来を察知し、凶作を予感したものではいえないだろうか。麦の収穫を急ぐしかないのである。「祭日」や「盆地に白く霧よどみ」には明らかな凶作の予兆が稲田に現われている。秋を迎えようと謂うのに、「穎花青じろき稲むしろ」といい「花はいまだにをさまらぬ」という。稲が結実しないのである。「祭日」の農婦は、産土神を祀るわがお社の例祭に出店をして、わずかでも現金を得ようと黙々と煮物作りにいそしみ、また「盆地に白く霧よどみ」の農夫たちも、飢饉に備える換金のために「藻を装へる馬ひきて、ひとびと木炭を積み出づる」のだが、その思惑も炭の買いたたきにあつて潰えてしまうことが多かった。そうして収穫のときは予感どおり、「早儉」（ひでりで作物が実らぬこと）の田を眼前にした、家長たる農民の呆然とした姿があり、年越しをひかえた「小きメリヤス塩の魚」では、「みのらぬ」ムラの家長たちが、歳末の市場をむなしく行き惑う姿がとらえられる。そのさきには、飢饉の風土に生きることの惨劇があるばかりである。

こうした農村の、恒常的な過労と飢えとは、次のようにもみつまられている。

・やがては古き巨人の、

ネプウメリてふ草の葉を、

・はたらきまたはいたつきて、

おほかた黒の硅板岩礫を、

・その身こそ瓜も欲りせん

手すさびに紅き萱穂を

・木綿つけし白き骨箱、

日のひかり煙を青み、

・地藏菩薩のすがたして、

縞の粗麻布の胸しほり、

石の匙もて出できたり、

薬に食めとをしへけり。

もろ手はてりに耐えざるは、

にぎりてこそはまどろみき。

齢弱き母にしあれば

つみつどへ野をよぎるなれ

哭き喚ぶもけはひあらじを。

秋風に児らは呼び交ふ。

栗を食うぶる童と、

鏡欲りするその姉と。

(「民間薬」)

(「夜」)

(「母」)

(「初七日」)

(「市日」)

春の耕耘作業を舞台にした「民間薬」の農夫は、「たけしき耕の具を帯びて、羆熊の皮は着たれども、夜に日をつげる一月の、水田のわざに身をわびて」、ついに畔にへたりこんで微睡んだとき、「古き巨人」から薬草の存在を教示される。また、「はたらきまたはいたつきて、もろ手はてりに耐えざる」農民に、近代医学の手厚いほどこしを受ける機会はない。せめて「黒の硅板岩礫を、にぎ」るがよいという古来の智慧にすがるとは出来ないのである。貧しさは、飢えというかたちでも現われている。それは、子どももその親をも日常的に襲っ

ている。「母」における若齡の母に対する「その身こそ瓜も欲りせん」と語る、その瓜とは、あの甘い味瓜ではなく、糠や味噌で漬けたしろりりであつたらう。だから「うなぬの子瓜食み来れば」と、歩行の時間に耐ええた。

欠食農村における児童の増加が、社会的に問題視されはじめたのは三二年頃からだ、そうした地方農村の飢えは、実は近代以前からの課題だつたはずである。乳幼児の死亡率がけて低くはなかつた時代で、わけても東北地方は高率であつた。この亡児の「初七日」を迎えた家族の悲痛な叫びの背後には、この地方のどうしようもない貧困の重篤さ、ということがあつたらう。生者がわにあつていま、亡き魂を一心に喚び招いている「児ら」もまた、死の接近から逃れようもないのである。「市日」の姉弟の姿にも、それはみえる。栗をほおばつて満ち足りている弟、それに対して、栗をがまんしても鏡はほしくてならなかつた姉。この娘には、やがて身売りという危機が迫ってくるのではないか。そんなことさえ、想起させる一連の詩群である。

・ 売り酒のみて熊之進、

赤眼に店をばあくるなり。

(「村道」)

・ 筒のなかばを傾けて、しばしをしんとものおもひ、夜に日をかけて工みへ。来し、  
いかさまさいをぞ手にとりにける。

(「林の中の柴小屋」)

雑貨を商う小店であるうか、売り物の酒で酔つた「熊之進」が、赤い眼をして「村道」の爽やかな朝に現われてくる。そして、「林の中の柴小屋」では濁酒と賭博に溺れる男が登場する。「熊之進」はたぶん店の主であらう。さいころを手にした男は、門前には放置されてはいるが苗代があり門内に土蔵をも有する屋敷に住まう人物であり、地主農民にちがいない。そうした階層のなかにみられる、墮落、落魄の姿なのである。このままでは遠からず産を破るだらうけれども、彼らは商主としてまた地主として、いまここにあることが猶予されている。

こうした窮乏と腐敗とが同時進行している農村に、しかし、それをよく知っているはずの地方行政が、ちぐはぐな対応をするばかりである、ということを次の詩稿は突きつけている。

・ こぞりてひとを貶しつゝ、

わかれうたげもすさまじき、

(「退職技手」)

・ おのれこよひは暴れんぞと、

青き瓶袴も惜しげなく、

・ 兎はついにつくのはね、

ひとは頬あかく美しければ、

へっ甲ゴムの長靴や、

緑のシャツも着くるなり。

(「副業」)

「退職技手」は、地域にあつて農業技術の改善とその普及を担う技手である。この詩の場の背後にある事情はまだ解明できていないが、仲間が集つてくれた送別の席で荒れるこの技手の解雇は、懲戒や本人の意思によるのではないことが察せられ、その挙げ句にみせた「おのれこよひは暴れんぞと、青き瓶袴も惜しげなく、初緑金に生えそめし、代にひたりて田螺ひろへり」という、苗代の田螺をひとつひとつ拾いあげてゆく所行には、これまでの自分の仕事に対する深い愛着がうかがえ、それは使命を果たしてきた自負の現われであるとともに、農業改良への熱情をいままお棄てきれぬひとのせつない未練がこめられている。そのような人物を農村から去らしめる。そして「副業」の収入をあてにした生活の悲惨。大正から昭和にかけて、農村の副業奨励は重要な政策であり、現金収入を求めてさまざまな副業が農村では展開していたが、二七（昭和二）年、陸軍被服廠が内地産兔毛皮の買い上げを決定し米国向けの輸出も開始されて、副業としてもしだいに全国的なブームにもなるほどだった。けれども、この若い農夫を決定的に襲うのは、たぶん昭和恐慌以後の農村不況であろうが、田畑の生業をおろそかにして力を注いだ副業の兎は、彼を救うことができなかつたのである。

また、農地の問題もある。近代化を急いだ明治政府は、とりこぼしてきた農業生産力の増強のために一八九九（明治三二）年耕地整理法を公布して農地確保をうながし、一九（大正八）年には開墾助成法を公布して、土地の農業利用を増進させる施策をうちだしている。岩手でも、

事業の施行は大正一一年から活発となり、昭和三年から激増している。これを郡別にみると平坦部では岩手・紫波・稗貫・和賀郡に多く、山間地帯では上閉伊が多い。<sup>110</sup>  
という状況であつた。そうした事業のひとつが、

・ゲメンゲラーゲさながらを、 焦げ木はかつとにほふなり。  
額を拍ちて高きは、 また鶯を聴けるなり。

（「開墾地落上」）

という「開墾地落上」の詩の場を生んだのではなかつたらうか。「ゲメンゲラーゲ」とは Gemenge-lage で、一地主の田畑が散在することだが、その散在耕圃とは「持ち分をわけし荒畑」（下書き）が多く、この開墾地がけて上質なものでなかつたことを暗示している。この完工を喜んでゐるのは「村会議員」（下書き）の「高き」だけのようである。実は下書きの開始形には「百姓たち」の姿もみえていた。詩人はそれを抹消して定稿化に向かうと、舞台では「高き」ただひとりのご満悦なのである。開墾は既存耕地の整理をとまなうことが多くあり、小地主（自作農の一部や小作自作農）たちのなかには、この開墾によつてかえつて不利益を被つた者もいたであろう。この時代はもとより、村会議員に代々の有力地主が名を連ねることは、民主主義による農地解放後の選挙制度によつても、長く変わることがなかつた。政治家が必ずしも国民のために献身しない、というのは、地方政治でも同じことだ。



このような現実を前に、理想農村の建設を実現することの困難さを、映しだしてもいるのが次の詩稿「ポランの広場」であろう。

組合理事らは 藁のマント

山猫博士は かはのころも

醸せぬさかづき その数しらねば

はるかにめぐりぬ 射手や蠅

童話「ポラーノの広場」を想起させるこの詩稿は、ほぼ同文の（写稿）（下書稿四）による定稿化である。この詩稿に対して、産業組合の導入によって理想農村の建設を実現するに至るその童話の結末でも、「ポラーノの広場のうた」と題した歌詞が楽譜とともに、語り手「レオーノキユースト」のもとに送られている。ほとんど同題とといってもよいその歌詞の第一連は詩稿「ポランの広場」の第一連にほぼ重なるが、その第二連は、

まさしきねがひに いさかふとも

銀河のかなたに ともにわらひ

なべてのなやみを たきぐともしつゝ、

はえある世界を ともにつくらん

とあって、理想農村の建設に立ち向かう意思を高らかに歌いあげて、その様相をまったく異にするのである。詩稿のほうは、ポランの広場を「選挙につかふ酒盛り」に利用しよう、あるいは「株主の反感は非常だった」のを接待しようという、毛皮のベストを着けた山猫博士に、藁の産業組合理事たちを対置するあたりで、しかもそこでは、政治家であり商人である山猫博士が画策していた「醸せぬ」（まだ醸していない、手抜き）密造酒によって盃が満たされており、「その数しら」れぬほど振る舞われている。理想農村の建設現場が実は汚染されている、というのだ。

こうした詩稿「ポランの広場」の到達は、実のところ、ひとつの屈折を経ているのである。それは、三〇年に展開した下書稿二段階をみれば明らかだ。詩稿「ポランの広場」は、当初、

たがひのねがひにたゞかふとも  
銀河のかなたにともをわらひ

なべてのなやみをたきぎと燃しつ  
はえある世界をともにつくらん

(下書稿二最終形)

と、理想実現への讃歌として形成されていたのだ。それが、三二年以降の再編段階で、山猫博士に暗喩される理想を阻むものの存在が組みこまれつつ、(写稿)が成立し、そして定稿化されたのである。その詩想の底流には、詩人宮沢賢治自身は理想農村の建設に挫折しつづけてきたものの、なおその実現に向かう祈りがこめられているにちがいないが、そうした理想の実現を穿つものの存在、それが立ちだかっているという現実認識が現われている、とも読みうるのである。

つまり、そうした認識を持ち得た詩人は、理想の希求と現実の障壁と、そのはざままでこの(詩的実践)をすすめている。その眼は、なお近代化から疎外されつづけようとしている農村の、たとえば次のようなありようにも向けられている。

・青蠅ひかりめぐらしつ、  
練肥ゲツを捧まげてその妻は、

たゞ恩人ぞ導師ぞと、  
おのが夫つまをば拜まむなり。

(「秘事念仏の大師匠」(二))

・おのれと影とたゞふたり、  
あれと云はれし業わざなれば、

(「賦役」)

ひねもす白き眼して、  
放牧のがひの柵かきをつくるひぬ。

温存されつづける信仰の秘密結社、江戸時代以来の小作人への賦役。こうした反近代性をとらえて、後れた田園を否定することもいとわれない。ここでもやはり、詩人の農業技師としての原点を確立した「農民芸術概論綱要」の、

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

(序論)

という一節に思い至る。全体の幸福という視点からなされる、非近代的、反近代的な権威がいまなお継承されていることへの批判は、現にすめられていた近代化というものの、ひとつの欺瞞を突くことにほかならない。そのとき、ほんとうの近代化——理想の実現に向かうのを穿ち阻むものは、農村の外から押し来て奪い去ろうとするものばかりでなく、腐敗地主やそれに連なる村会議員、あるいは商人など、その内部に巣くって甘い汁を吸いつづけようとしているものがあるということ。

ただし、実は、そうした権威のがわに、宮沢賢治自身が生まれ育ち、そして護られてきたという自覚と自省とが、そうした詩想の最低

部に横たわっていることも、見落としてはならない。いわば二重の「搾取」によつて、この田園がからみとられている現実を直視し、それに忍従するほかない人々のありようを明視するとき、詩人は「この郷里では財はつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつてゐる」(書簡421、三二年六月二一日付) 自らの立ち位置も含めて、正すべきものの存在を見つめざるをえない。

すなわち、「社倉農村を最後の目標として只猛進せよ」という覚悟は、「ぜんたい」の幸福を求めて、農村内部の批判にも当然及ばねばならない。「搾取」するがわと、されるがわと、双方にひそむそれぞれの暗部を照らしたすのでなければならぬ。《文語詩稿》の定稿に与えられた社会詩篇としての性格は、詩人に孤独／孤立というものを強いるうえに果たされた、悲痛な作業だったといえるのではないだろうか。その結果、そこに現われてくる東北／岩手の農民群像には、そこをさらに超えた、この時代の非近代を生きる人間性の、ひとつの典型がみえてくるのである。

田園／社会詩篇としては他にも、牧場にほぼ隣接して建つ塗素工場という構図をもつ「牛」、農民の血脈を連綿とつづける集落を「その杜黝し」という「うからもて台地の雪に」、田園に現われた近代労働者を描く「電気工夫」、かつて存在した軍馬補充部六原支部の記憶をつづる「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」、軍馬として重用される「貴きアラヴの種馬」を育成している場面をとらえた「悍馬(一)」などが指摘できる。

また、「塔中秘事」が小岩井という近代農場を詩の場の枠組みとしてもっていること、「雪げの水に涵されし」が外山にあった御料牧場を舞台に人物として「兎のごとく跳ねたるは、かの耳しひの牧夫なるらん」という配置をしているあたりに、社会詩篇としての性格を見いだせそうである。

5

生活詩篇が、マチ場の出来事を主にした詩群であるけれども、ムラがあつてはじめてマチの生活が成立していた、ということ的前提しているのは、すでに前節で述べた。そこでもみたように、

・西根よりみめよき女きたりしと、角の宿屋に眼がひかるなり。

・かつきりと顔を削りしすがめの子、しきりに立ちて栗をたべたり。

・凝灰岩もて壘み杉植ゑて、

南銀河と野の黒に、

・声さやかなるをとめらは、

団弁護士もホップ嘯む、

(「腐植土のぬかるみよりの」)

(「林館開業」)

(「林館開業」)

(「林館開業」)

(「菱花」)

・夏のうたげにはべる身の、  
南かたぶく天の川、

声をぢれの髪を恥ぢ、

(「夜をま青き藺むしろに」)

・淨き衣せしたはれめの、  
はてもしらねば磁氣嵐、

ひとりたよりとすかし見る。  
ソフアによりてまどろめる、  
かぼそき肩ををのかす。

(「齒科医院」)

・燈を紅き町の家より、  
(うみべより売られしその子)

いつはりの電話来れば、  
あはたゞし白木のひのき。

(「燈を紅き町の家より」)

などといった、身売りによつてムラからマテへながれる娘たちの悲惨な姿があつた。農民がこれまでに背負つてきた負債は、昭和恐慌がもたらした農村不況によつてますます膨らんでゆく。そういうなかで、借金の返済に人身があてられたのである。そうするよりほかない状況があつたこともある。たとえば、労働力として娘たちを必要としてきた製糸業も、昭和恐慌による大打撃を受けており、岩手の場合も製紙工場は三〇年には全員解雇に近い人員整理をおこなつてい<sup>13</sup>る。

娘たちをねらう悪辣な性産業こそ、前時代からの負の遺産であつたはずだが、明治以降の近代日本は、そのような反近代的な場所の残存に気づいていても、国家が根本からそれに応ずることはなかつた。随ちてゆく娘たちの不幸の背後にはムラの悲劇があり、近代日本はそのムラに生きる農民層から物と人とを「搾取」することによつて、<sup>14</sup>経済基盤をととのえるという、前時代以来の構造をたやすく引きずつていたから、そのたやすさのほうに甘んじていた、といえるのである。わけはあつた。「こ維新」の眼の前には欧米の列強が迫り、その植民地主義に即応、対峙するためには、社会や経済の構造改革をじつくりと画策している時間はない。むしろ、農村を「搾取」する基盤構造を強化せねばならなかつた。東北は、富国強兵を支える、人も含めた物資の供給地として位置づけられ、処遇されつづけてきた、というのが日本近代史の事実である。

農村不況によつて流出する人々(労働力)を受けとめる場も、岩手の場合、脆弱だつた。

・春ちかけれど坑々の、

祠は荒れて天霧し、

(「廃坑」)

・事務所飯場もおしなべて、

鳥の宿りとかはりけり。  
峽を覆ひてひくければ、

(「白金環の天末を」)

・けむり停まるみぞれ雲、  
大工業の光景なりと、

技師も出でたち仰ぎけり。  
妻がけはひのしるければ、

(「保線工手」)

・雪をおとして立つ鳥に、  
ほのかに笑まふたまゆらを、

松は豊めり風のそら。

資源の比較的豊富な岩手には鉱山が多いのだが、前近代的な小規模経営であった。そのなかでとりあげられた「廃坑」の舞台は、その草稿段階に「旧式鉱炉／古き鉱炉」(下書稿一・二)がみえ「鑄物工場」(下書稿二・三)も設備しているところから、相当規模の鉱山とみえる。宮沢賢治が確實に訪れていたところでは、和賀の仙人鉄山が題材のひとつになったと想定される。日清戦争時、海軍大臣西郷従道の視察によって注目され、日露戦争・第一次大戦による特需で発展したが、戦後不況で二〇(大正九)年末からは休山したままであった。本格的に操業が再開されるのは、日中戦争さなかの四〇(昭和一五)年である。したがって詩人には、閉じられたままの鉄山の記憶しかない。この「廃坑」は、軍部や資本家のそのときの道具として活用されただけで、この地方の近代化をすすめるでたとして位置づけられたものではなかった。これは、非近代空間に放置された近代化の残滓なのだ、訪れた詩人に、そのような感慨を与えることはなかつたろうか。

また「白金環の天末を」で、「大工業の光景なり」とみえたのは、煉瓦工場が所有する「宣伝用に築きける／大煙突」(下書稿一開始形)である。それが「ひさびさに、くろきけむりをあげ」たのだという。その舞台は、「川上の／煉瓦工場の煙突から／けむりが雲につゞいてゐる」と書きだす口語稿「七四一 煙 一九二六、一〇、九、」を素材のひとつに認めれば、花巻のことと推定される。煉瓦は近代都市の建築土木には欠かせぬ資材であったが、鉄道や数少ない公共建物などのインフラ整備以外には、近代化のすすまぬ農村部に煉瓦の需要が低迷することは、容易に察せられる。せいぜい瓦などが需要としては多かつたろう。この煉瓦工場については、七四一番稿の開始形段階に「何をたいてゐる「ともわからず」のか」といい、その最終形では「ペンすつかり破産した」ともいう。地場の手工業以上に発展しえなかつた。そこから、「白金環の天末を」がたどりついた「ひさびさに、くろきけむりをあげにけり」(傍点は島田)という感覚を承けて、「大工業の光景なりと、技師も出でたち仰ぎけり」の結句がある。実は草稿段階で、その詩の場には、

「インチキ↓擬似」工業(下書稿二) ↓ 「近似工業↓」(下書稿三)

という命名の過程があった。その直截的な命名は採られなかったが、定稿もまた、この「大工業」の虚偽をいつている。近代化の遅々としてすすまぬ蔭がそこに佇立してむなしく煙をあげている、そういうことではないのか。

農民が、それでもムラを棄てずに家族を養うために農業をつづけるには、出稼ぎにゆくしかない。「保線工手」に描かれているのは、そのような出稼ぎ農民の姿として理解できさうである。というのも、『詩ノート』一〇三頁の一〇八八番稿(一九二七、八、二〇)に、

一冬鉄道工夫に出たり

身を切るやうな利金を借りて

やうやく肥料ネした稲を

まだくしゃくしゃに潰さなければならぬのか

(書きながら手入れ形)

などとあつたように、農作業のない冬場だけ鉄道や鉱山などの工夫や人夫として、現金収入をなんとか得ていたという場合が少なくはなかつたからである。この保線工夫は単身家を離れて長期間に及んでいるようだ。

6

このようにみてくると、生活／社会詩篇における詩の場は、昭和初年という〈現在性〉を秘めているものが多い、という印象を強くする。たとえば、

・官の手からくのがれし、

社司の子のありかを知らず。

社殿にはゆふべののりと、

ほのかなる泉の声や

・その線の工事了りて、

あるものはみちにさらばひ、

あるものは火をはなつてふ、

かくてまた冬はきたりぬ。

・しばしむなく風ふきて、

声はさびしく吐息しぬ。

「こたび縣の負債せる、

われがとがにはあらざるを。」

(「水楢松にまじらふは」)

などといった事態の出現は、いずれも三一年から三二年にかけて起きた、岩手医学専門学校(18)の学生赤化事件(19)「ほのあかり秋のあぎとは」(20)、大船渡線の工事現場における朝鮮人と日本人の対立によって死傷者を出した矢作騒擾事件(21)「いたつきてゆめみなやみし」(22)、岩手の地元銀行の整理にかかわる県の負債問題(23)「水楢松にまじらふは」(24)などを連想させるものである。社会主義運動の弾圧、朝鮮人への差別、金融の統制など、大正期からしだいに強まってきた国家主義への歩みをもたらした地方社会の混乱が、これらの詩の場の背景にはあると見える。

国家主義はいよいよ帝国化・軍国化をすすめたとのえてゆく。それが生活のなかに浸透していった、その一端が次の詩稿群にうかがえるのではないか。

・大礼服にかくばかり、  
いづちの邦の文献か、

美しき効果をなさんこと、  
よく録しつるものあらん…

(「記念写真」)

- ・狩衣黄なる別当は、  
袴羽織のお百姓、  
窓をみつめて校長も、  
（いな見よ東かれらこそ、  
うかべる雲をあざけりて、  
氷の雫のいばらを、  
鐘を鳴らせばたちまちに、
- 眉をけはしく茶をのみつ。  
ふたり齊しく茶をのみつ。  
たゞひたすらに茶をのみつ。  
古き火薬を燃し了へぬ）  
ひとびと丘を奔せくだりけり。  
液量計の雪に盛り、  
部長訓辞をなせるなり。
- （「来賓」）  
（「砲兵観測隊」）  
（「式場」）

盛岡高等農林学校時代の記憶による「記念写真」は、毎年恒例の紀元節の行事としてか、あるいは大正天皇の即位の礼があった年の教官と学生全員による特別な記念撮影であったか。きらきらしい大礼服に身をつつんで「さんとして、身を頼はする」学長の権威を支えているのは、学識の高さばかりではなかつたらう。そして、新年の拝賀式を峻しい表情でもって待ち受ける「来賓」の「狩衣黄なる別当」は、国家神道の一員としての栄光を背負っているかのように見える。また、「砲兵観測隊」は、大正期以来、陸軍の軍事演習が岩手県内でも皇族の統監を得てたびたびおこなわれていた（二八年には昭和天皇が統監した）、そうした記憶をもとに現われた詩の場であらうし、「式場」が、二六年に開設された岩手国民高等学校の開式か閉式かを舞台としたものと推定されるが、県下の農村青年を集めたそのねらいは、疲弊した農村の再生を託すべき人材の育成にあったが、そこには「天皇中心の皇国臣民育成への過渡的な性格」も見いだせる運営が、加藤完治の薫陶を受けた高野一司県社会教育主事の監督のもとにおこなわれたのである。

こうして国家統制が強まる時代のなかで、東北地方の近代化は、地方のなかの格差をますます増大させていた。

- ・東はるかに散乱の、  
なみなす丘はぼうぼうと、  
さびしき銀は声もなし。  
青きりんごの色に暮れ、  
こぼと鳴り行く水のはた、  
（「岩手公園」）
- ・蝕む胸をまぎらひて、  
蝕む胸をまぎらひて、  
（「病技師」）
- ・蝕む胸をまぎらひて、  
蝕む胸をまぎらひて、  
（「病技師」）

「岩手公園」という近代公園から望むはるかな山並みには、農山村が暗く沈んでいるのである。「病技師」の眼前に浮かびあがった江戸時代からの「飢饉供養の巨石」の列は、過去を追憶するものというよりも、今もなお飢饉の襲来に怯えるこの地方の民にとっては、なまなましい傷痕としてあつたらう。

そして、このマチ場では、

- ・やがて四時ともなりなんを、  
外の外の面は冬のむらがらす、  
「あな雪か。」屠者のひとりは、  
車押のすみたりはうみ、  
・屋台を引きて帰ってくる、  
うつは数ふるそのひまに、
- 営主いまだに放たれず、  
山の片面のかゞやける。  
みなかみの闇をすかしぬ。  
えらひなく橋板ふみぬ。  
目あかし町の夜なかさぎ、  
もやは淺葱とかはりけり。
- (「嘆願隊」)
- (「あな雪か屠者のひとり」)
- (「短夜」)

といった人々の姿を詩人は注視する。嫌疑を受けて拘引されたままのある当主の存在(「嘆願隊」、人目を避けて荷を運んでゆく屠殺士の一群(「あな雪か屠者のひとり」)、夜中の商いを終え片づけに夜明けを迎えた屋台店の主の姿(「短夜」、これらの詩の場にたまたまいるのは、当主を待ちつづける「嘆願隊」の人々の苛立ちであり、会話を厭う屠者たちの倦怠感であり、屋台を引きつづけてやると帰宅した主の疲労感であるだろう。

人々にただよう焦燥・倦怠・疲労、そういった状況は、この農村全体を襲い、たれこめている重い閉塞感のもたらした一端ではなかつたろうか。そこでは、行商や巡業の異邦人たちも、途方にくれるばかりである。

- ・しらしら醸す天の川、  
かすかに錢を鳴らしつゝ、  
・霜のまひるのはたごやに、  
酒の黄なるをわかちつゝ、  
すがれし大豆まめをつみ累げ、  
風はのぼりをはためかし、
- はてなく翔ける夜の鳥、  
ひとは水繩みづなを操りあぐる。  
がらすぞうるむ一瓶の、  
そらろに錫の笛吹ける。  
よぼよぼ馬の過ぎ行くや、  
障子の紙に影刷きぬ。
- (「羅沙売」)
- (「巡業隊」)

これらは社会詩篇としての可能性をひそめているものと考えられるが、ほかに、理髪店の鏡の前で散髪のイメージトレーニングをしている唾の子(「崖下の床屋」)や、視察の案件を可決して一斉に拍手する郡役所の議員たち(「四時」、寺への寄進のほうに関心を示している僧の妻(「僧の妻面膨れたる」)などという、意味ありげなふるまいをする人々。

あるいは、宴席で神楽の荒舞いを演じ土壌学博士や郡長の響燈をかつたあげく歌妓を連れ去る無頼の書記(「雪の宿」)や、連鎖劇で映しだしている風雲急な空模様を背景に煙草を投げ捨てる陸軍上等兵を演じる者(「軍事連鎖劇」、寒々とした夕光のなか明治の漢詩人森



槐南を論じて得意げな開化郷士の傍らで眠ったふりをしている人（「車中（一）」）などといった、どことなく思わせぶりな人々。こうした人物をいたたく詩の場には、批判的な詩人の視線がからみついていていると思えるところがある。たとえば、「崖下の床屋」の場合である。

理髪師の卵である「唾の子」は、「あかりを外れし古かゞみ、客あるさまにみまもりて」、「空鉢」でもって練習をしていたところに、客が入ってくると、「のれんをあげて」店の奥から出てきた師匠の「理髪技士、白き衣をつくるひ」、その「弟子の鉢をとりあ」げてしまふというのである。それが職人の世界だから当然といえれば当然の対応であろうが、喋ることのならぬこの子に、師匠として一番に与えなければならぬのは、接客の仕方と理髪技術の伝授しかない。けれども、客のいないときこそ教えこまねばならないはずなのに、この「理髪技士」は弟子を放りだして休息していたのだろう。草稿をさかのぼると、水汲みに店を出て崖下まで走らされる「唾の子」の姿もあった。深読みにすぎるともかもしれないが、ここにはこの時代の徒弟制度の悪弊がとらえられているのではなかったか。障害のある人を雑用で飼育しにする典型である。

なお、土地造成のためにおこなった測量中の出来事とみられる愉快な一コマを描いた「天狗葺けとぼし了へば」や、客の姿がすっかり途絶えて「湯管のむせびたゞほのか」な広場の深閑とした真昼の光景をとらえた「老いては冬の孔雀守る」などについても、それが花巻温泉遊園地という時空をとらえているところに、社会詩篇としての視座を指摘できるのかもしれない。

(注)

- 1 「柳沢野」(『宮沢賢治文語詩の森第二集』所収、柏プラーノ二〇〇〇)。
- 2 『高村光太郎／宮澤賢治集』(日本近代文学大系36、角川書店一九七二)。
- 3 同じ二七年の使用と推定される『方眼野手帳』に、「本年モ俗伝ノ如ク／海温低ク不順ナル七月下旬ト／八月トラ／迎フベキヤ否ヤト」と詩人は記しており、太平洋沿岸に吹き込む寒冷気流への不安を吐露している。
- 4 ト藏建治 『ヤマセと冷害』(成山堂書店二〇〇一)の指摘によると、冷害による大凶作の年は、次のとおり。  
○二(明治三五)年・一三(大正二)年・三一(昭和六)年  
○五(明治三八)年  
○六(明治三九)年  
三四(昭和九)年
- 5 木村東吉『春と修羅第三集』『詩ノート』創作日付の日の気象状況(『近代文学の形成と展開 継承と展開8』所収、和泉書院一九九八)に、一〇七二番稿に次ぐ「一〇七三 鉦山駅 一九二七、六、一、一」(『詩ノート』に留まる)の鉦山駅が「仙人峠の麓の駅」との指摘がある。

6 本研究第2章2節参照。

7 『岩手県の百年』（山川出版社一九九五）は、昭和に入って「無産運動者たちの実費診療所開設運動とならんで、産業組合による医療利用組合運動が展開された」（二八八頁）ことを指摘している。それによれば、

三〇（昭和五）年 矢作信用販売購買組合による診療所開設（当時気仙郡矢作村、現陸前高田市）。  
三一（昭和六）年 奥玉信用購買販売利用組合による診療所開設（当時東磐井郡奥玉村、旧千厩町）。  
という2か所が最初で、その後産業組合病院は広域医療組合方式で拡充されていったという。

8 吉長真子「一九三〇年代における農村の産育への関心と施策」（『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室 研究室紀要』第29号二〇〇三・六）に引用されている「昭和十年乳児死亡率率府県別順位表」（恩賜財団愛育会『昭和十年道府県別原因・月及日齢月齢別乳児死亡統計記述篇』一九四〇）によると、乳児死亡率は全国平均で10・7割（出生100に付き）、最高は富山の15・2割で、14割台に石川・福井・青森、そして13・5割までのところに秋田・奈良・岩手が順に並んでおり、北陸・北東北地方の生育環境が特に悪化している。なお、列国との同年の比較もみえ、アメリカ5・6割、イギリス6・2割、ドイツ6・8割、フランス6・9割、イタリー10・1割となっている。

9 『岩手県農業史』（岩手県一九七九）、一一〇一頁。

10 注9同書、六六一・六六二頁。

11 一九〇〇（明治三三）年の産業組合法の制定以来、信用・販売・購買・生産（利用）をおこなう組合が、全国的に農村で発達した。産業組合法は、独立自助・団結・協働という理念を基盤にしていたが、詩人にも、

部落部落の小組合が／ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち／その聯合の大きなものが／山地の肩のひととこ砕いて／石灰末の幾千車を／荒れた野原にそゝいだり／ゴムから靴を铸たりする（三一三「産業組合青年会」一九二四、一〇、五）

という想念があった。それは、主として融資の受け皿である信用組合として全国組織化されてゆく産業組合の現代的展開とは重なりにくいところがある。

12 「醸せぬさかづき」という詩句について、『新校本全集』校異が「醸せぬ」として「醸せる」の誤記ともみられるとするが、童話「ポラーノの広場」で山猫博士が密造していたのは「みんな立派な混成酒」であり、「悪いのには木精もまぜた」ものさえあり、原料を純粹に醸したものはなかった。「醸せぬ」とは、純良でない、というほどの意なのかもしれない。その博士の企みへのりこえて理想農村の実現を果たした讃歌「ポラーノの広場のうた」に「醸せぬ盆」は不要なものであるが、まだ建設の途上にある「ポラーノの広場」では、「醸せぬ盆」とのせめぎ合いが絶えないのである。

13 『岩手県の百年』一七一頁。

14 一八七二（明治五）年「人身の権利」という観点から「芸娼妓解放令」が通達されたが、売買春そのものを禁止したものはなかった。翌年、自由意思で営業を希望する娼妓に座敷を貸す（貸座敷）というかたちで、遊郭は温存される。それに対し、群馬県

では七八（明治一五）年に公娼廃止の建議が可決されて九三（明治二六）年から実施するが、九五（明治二八）年には再設置を議決している。名古屋の米国人宣教師ユリシーズ・グラント・モルフィが駆けこんできた娼妓たちの自由廃業を訴訟によって勝ちとったのが九九（明治三二）年である。以後、キリスト者や婦人団体による娼妓運動が拡がりをみせてくる。その間、公娼制度の是非は主に人権論・道徳論の観点から大いに議論されてきたが、そのなかで一九三二（昭和七）年、多くの娼妓を供給してきた農村に視点を定める『農村疲弊と子女売買問題』（松宮一也・橋本成之著、廓清会婦人矯風会娼妓連盟）が、やつと農村の貧困を主題に問題提起したのである（以上、国立国会図書館第84回常設展示「娼妓運動の歴史」一九九六・一一・二六～一二・二五の展示記録を参考にした）。けれどもこの論議が広く展開されることはなかった。そこには、日中戦争から太平洋戦争へと日本軍国主義の戦線が拡大してゆくとき、思想や言論も統制され、この世界戦争に勝利するために、すべてが犠牲にされるといふ歴史的事実がある。社会構造・経済構造の変革が、農村のためにおこなわれることはなかったのである。

15 『和賀町史』（和賀町一九七七）、七一五～七一七が。

16 『岩手県案内』（岩手県内務部編一九二七）一二四頁に、焼成する前の平瓦であろうか、百枚あまりも立て並べた向こうがわに座りこんで作業をしている二人の男性職人の姿が、「花巻高瀬製煉場」の作業場光景として、その写真が掲げられている。

17 鉱山人夫として出稼ぎにゆく場合が、一〇二番稿（一九二八、三、三）の下書稿五・六にみえる。

18 甲助なら／今朝くらいうち綱取へ行った／（略）／向ふへ着けば撰鉱だか運搬だか／たゞの雑役人夫だからな（下書稿六）

19 本研究第3章3節の1項を参照されたい。

20 矢作騒擾事件は、三二年五月、大船渡線の工事が進んできたことによって工夫に余剰を生じたため、朝鮮人労働者の解雇に及んだ際、発生した争乱である。

21 三一年、信用不安による取り付け騒ぎが発生したとき、盛岡・岩手・第九十・第八十八の四行合同によって收拾し、地方金融の安定を画策していた岩手県に対し、三二年に大蔵省が新銀行の設立案を提示、県は五百万円を起債して岩手殖産銀行を設立開業させて、旧銀行は姿を消した（『岩手県の百年』の記述の再構成による）。

22 菊池忠二「岩手国民高等学校と「農民芸術」論」（『私の賢治散歩 上巻』所収、二〇〇六）参照。

5 節 〈集〉の基盤・信仰詩篇の存在

1

もうひとつ、定稿・百編には「近代人」の精神的な課題として、その〈信仰性〉を問うかのような詩稿も存在していることを、1 節で指摘してきた。仮に信仰詩篇と呼称し、その謂いを、

信仰的な態度がうかがえ、あるいはその希求・煩悶・懺悔などを露わにまた密かに示しているとみられるもの。  
としたけれども、該当するとみる詩稿の数はそう多くはない。

信仰詩篇		詩篇分野
10 編	詩篇として自立	
5 編	自然詩篇 10 編	
3 編	田園詩篇 3 1 編	
6 編	生活詩篇 4 9 編	

作品理解がすすめば思いがけぬ詩稿に〈信仰性〉が指摘される、という可能性は強いが、現段階では右のとおり 20 編あまりを認めて、自然・田園・生活詩篇のなかに、信仰的な態度がうかがえるとするものがその半ばを超え、自立した信仰詩篇としてとらえられるのが、10 編ほどとみている。先に他の詩篇分野に重なっている信仰詩篇群について概観したうえで、独立していると考える詩稿について迫ってゆきたい。

まずここで、自然詩篇に重なりとみるのは、

- ・ 燃ゆる吹雪のさなかとて、  
妖しき<sup>あや</sup>目をなせるものかな。  
(吹雪かどやくなかにして)
- ・ 海漫す日より棲みあて、  
たゝかひにやぶれし神の、  
青々と行衛しらずも。  
(水と濃きなだれの風や)
- ・ 二面の猛きすがたを、  
山のけむりのこなたにも、
- ・ げにもひかりの群青や、

鳥はその巢やつくろはん、

ちぎれの艸をついばみぬ。

(「きみにならびて野にたてば」)

・稔らぬなげきいまさらに、

春をのぞみて深めるを。

雲はまばゆき墨と銀、

波羅密山の松を越す。

(「峡野早春」)

・一石一字をろがみて、

そのかみひそにうづめけん、

寿量の品は神さびて、

みねにそのをに鎮まりぬ。

(「国土」)

という5編である。鬼神の妖しい眼光に射すくめられた「吹雪かゞやくなかにして」や原初の神話的世界に想いを馳せている「水と濃きなだれの風や」の場合をのぞけば、「ひかりの群青」に輝く天上世界とささやかな生が営なまれている地上世界との対比に詩人の信仰感がにじんで見える「きみにならびて野にたてば」、しのび寄る暗雲が越えてきたのは彼岸に到るというあの「波羅密」の山だとする「峡野早春」、折りをこめて法華経の「寿量の品」を埋納してきた山上を望む「国土」など、その信仰が仏教にあることが暗示されるところに、人々が法華経をいただいてきたという具体的な認識も示されている。

田園詩篇に重なるのとみるのが、次の3編である。

・中ぞらにうかべる雲の、

蓋やまた椀わんのさまなる、

・川水はすべりてくらく、

草火のみほのに燃えたれ。

(「毘沙門の堂は古びて」)

・歓喜天そらやよぎりし、

そが青き天あまの窓より、

・なにごとか女のわらひ、

栗鼠栗鼠のごとふるひ漏れくる。

(「塔中秘事」)

・青蠅アブひかりめぐらしつ、

練肥ダラを捧たげてその妻は、

たゞ恩人ぞ導師ぞと、

おのが夫つまをば拝むなり。

(「秘事念仏の大師匠」(二))

「毘沙門の堂は古びて」には、静謐な堂守も登場して、お堂のうえには仏具の天蓋にもみえる、あるいは祭祀の椀を伏せたかのような雲も浮かんで、そこが信仰の聖域であることを示している。そこには、人々の毘沙門天信仰の揺るぎなき背景としてあろう。「塔中秘事」の場合は、漂雪のなかにたえず脱穀塔のなかの、秘かな男女の情交を、歓喜天の飛翔する天上世界にひらかれてゆくものとらえて、性愛を含めたエロスの昇華されてゆく場の構築が試みられているように思える。「秘事念仏の大師匠」(二)では、この地方に根深く息づいている浄土真宗の一派で江戸時代以来異端として弾圧を受けてきた、隠し念仏の大導師を、ただひたすらに崇めたてまつる妻の姿が、揶揄的にとらえられているようにみえる。邪宗であるか否かは常にその時の権力が一方的に定めるところではあるが、秘事念仏の主導者とその信者をやはり批判的にみていると考えられるものである。

生活詩篇には、

・信をだになほ装へる、  
なにとてきみはさとり得ぬと、  
よりよき生のこのねがひを、  
しばしうらみて消えにけり。

(〔残〕<sup>モナドノツク</sup> 丘の雪の上に)

・次なる沙弥は願を円き、  
その身は信にゆだねたり。

猫毛の帽に護りつゝ、

三なる技師は徳薄く、

すでに過冷のシロツコに、

なかば氣管をやぶりたれ。

(〔さき立つ名譽村長は〕)

・そは瞳<sup>まき</sup>ゆらぐ翁<sup>おきな</sup>一面、  
かのうらぶれの贖<sup>い</sup>物師、

おもてとなして世をわたる、  
木藤<sup>とう</sup>がかりの門<sup>かど</sup>なれや。

(〔暁眠〕)

・わが索<sup>もと</sup>むるはまことのことば

雨の中なる真言なり

おろがむとまづ膝<sup>ひざ</sup>だてば、

(〔早春〕)

・大盗は銀のかたびら、  
緒<sup>いと</sup>のまなこたぐつぐらにて、

もろの肱<sup>うで</sup>映えかゞやけり。

(〔中尊寺〕)

などに、信仰詩篇としての影が落ちているように思える。自らの信ずるところを偽つても生きてゆかなければならない人たちの苦惱(〔残〕<sup>モナドノツク</sup> 丘の雪の上に)や、殺生戒を破つて「猫毛の帽に」身を護る沙弥と信仰心の薄さに身体を損なってしまった技師の姿(〔さき立つ名譽村長は])、そして「贖物師」(いかものは、「如何ハシキ物、マガヒモノ、ニセモノ」(言海)の意)と迫害されうらぶれた信仰の人の存在(〔暁眠])などがある。また、「ひとびと崇むるは青き Gosse 銅の脈」であるのに対して「まことのことば」を索める人物や、金色堂で礼拝する「大盗」のありようがとらえられている。

これらは、信仰そのものが必ずしも大主題になつてゐるものではないが、(信仰性)がさまざまなかたちでうかがわれる詩群といえるのではなからうか。宮沢賢治は、そもそも、浄土真宗に非常に熱心な家に生育しながら、法華經に出合い、法華經に身を委ねてゆく生涯を生きている。それは、いうならば家宗に背く、破格な出来事であつたらう。

2

法華經との出合いについては、新校本全集第十六卷年譜篇、一四(大正三)年九月の項に、「推定」として(傍線は島田)、

家業への嫌悪とともにますます進学の念強く、ノイローゼ状態となる。ここによって父も賢治の前途を憂え、家業そのものの転向も考慮し、希望した盛岡高等農林学校の受験を許す。／＼(中略)／＼また当時出版されて政次郎の法友高橋勘太郎から贈られてきた島地大等編『漢和対照 妙法蓮華経』を読んで異常な感動を受ける。／＼この本はのち(大正七年)に友人保阪嘉内へ送ったが、生涯の信仰をここに定めることとなる。以来、生まれ変わったように元気になり、店番もいとわず受験勉強にはげむ。

とあって、盛岡中学卒業後、鬱々と質屋の店番をしていた官沢賢治にもたらされた、「異常な感動を受ける」契機として指摘されている。この伝説的記述の始発は、没後からそう隔たらぬ三九(昭和一四)に十字屋書店から出た『官沢賢治研究』に収められた年譜の、次のような記述にあったろう。

大正四年 二十歳(一九一五)

・△四月、盛岡高等農林学校農科第二部(農芸化学科)に首席入学、同校寄宿舎に入る。

△九月、初めて妙法蓮華経を読む。爾後同経典を座右に置き読誦す。当時の感想を「只驚喜し身顛ひ戦けり」と語る。

こう記した人物の名はみえないが、太平洋戦争も末期に近づいてきた四四(昭和一九)年の刊行になる十字屋書店版『官沢賢治全集』の別巻に、その記述と形式をほぼ踏襲したかにもみえる年譜が「官沢清六編」として付載されている。ここでは、

大正二年 十八歳(二五七三)：島田注、紀元暦によるもの

九月頃初めて妙法蓮華経を読み感激す。爾後同経典を座右に置き読誦す。

としており、「大正四年」から「大正二年」に時期を改めるとともに、「只驚喜し身顛ひ戦けり」という官沢賢治自身のことばとされたものを削除している。ただその後、この「妙法蓮華経」が島地大等編の『漢和対照妙法蓮華経』とみなされて、それが明治書院から発刊されたのが一四年八月であることをふまえて、「大正二年」は過ちで、大正三年のこととする見方が、ほぼ定着してきている。いずれにせよ、中学卒業間もない少年に訪れた劇的な信仰体験として演出されようとしているのは、そのような法華経との遭遇の果てに、親しい友人たちの手で配布された死亡告知状に披露される官沢賢治の遺言が、年譜編者の射程にあったからではなかつたらうか。その遺言とは、

私の全生涯の仕事は此の法華経をあなたの御手許に届け、そして其の中にある仏意に触れてあなたが無上道に入られる事をお願いするの外何ありません

という、いかにも悟達したかのような内容で、それは、遺族が千部の『国訳妙法蓮華経』を知己に配布することによって、確かに実現されるのである。

けれども、たとえば新校本全集年譜の一四年の記述については、たとえば、

家業への嫌悪とともにますます進学の念強く、ノイローゼ状態となる。ここによって父も賢治の前途を憂え、家業そのものの 転

向も考慮し、希望した盛岡高等農林学校の受験を許す。以来、生まれ変わったように元気になり、店番もいとわず受験勉強にはげむ。と読んで、なんの不都合もなく、法華経との出会いというのを、ここに組みこまねばならぬ必然を前後の文脈(伝記的事実)は要しない。むしろ、盛岡高等農林学校に入学したあとのほうに、聖書講義を聴き、参禅し、島地大等の講話を聴くといった、なにか精神的なたよりを求めて彷徨する青年の姿がうかがえるのである。だから、『宮澤賢治研究』の一五(大正四)年の記述に、

九月、初めて妙法蓮華経を読む。爾後同経典を座右に置き読誦す。当時の感想を「只驚喜し身顛ひ戦けり」と語る。生涯の信仰をここに定めることとなる。この本は大正七年に心友保阪嘉内に送った。

という事態が実はあつたとしても、不思議でない。むしろふさわしい。

3

宮澤賢治没後すぐの関徳弥の回想にも、

宮澤さんは法華経に安住し、ここに立ち場をもとめて只管に信仰に励んだのは、たしか高等農林を卒業される前後からではなかったらうか。(中略)私が十八九歳の頃、無暗と生きてゐることが不可思議にみえ果ては憂鬱になり、どうかしてこれを解決したいと思つて、盛岡辺りをうろついて居たことがあつた。その時ふと宮澤さんに会つたら

そんなら報恩寺へ行きませう、あそこの和尚はさう嘘は言はない筈です

といつて私を励ましてくれるのであつたのであつた。早い宮澤さんの後から、こそそそついて行つたことはまざままさと記憶に新しい。

(「信仰の人宮澤さん」、『岩手日報』三三三・一〇・六付)

とあり、新校本全集年譜も報恩寺に関徳弥を伴つたのを、一七(大正六)年のこととしている。関徳弥のこの文章は、宮澤賢治の信仰を賛美する方向にあるもののだが、その関が「法華経に安住し、ここに立ち場をもとめて只管に信仰に励んだのは、たしか高等農林を卒業される前後から」とみている。

あの遺言にしても、遺族によつて果たされたことで、宮澤賢治自身の、その信仰の途が全うされたのかというと、そうではない、そのように美化されて終わるような内実ではなかつた、というべきである。晩年の宮澤賢治は、確かに法華経との出会い以来、その信仰の確立に向かつて迷うことがなかつたが、その信仰が撰びとつた農村の改革という実践は、その実をあげるところか、農学校教師としても、羅須地人協会の活動としても、東北砕石工場技師としても、中途半端な、挫折といつてよい途絶に至つてゐる。宮澤賢治の信仰は、悟達などとはほど遠く、途絶したままなのである。

信仰がその背後にひかえていた志を、ことごとく挫折させてしまったという現実のなかで、宮澤賢治は、まず前二者の原因が自らにあると自覚するようになっていた。二八(昭和三)年来の疾中からやつと小康を得た、三〇年の書簡を引く。



殆んどあすこ（羅須地人協会 島田注）でははじめからおしまひまで病氣（こころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした。どうかあれらの中から捨てるべきははっきり捨て再三お考になつてとるべきはとつて：

人はまはりへの義理さへきちんと立つなら一番幸福です。私は今まで少し行き過ぎてゐたと思ひます。  
（書簡258、伊藤忠一宛三月一日付け）

私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になつてしまつたこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあつたのです。  
（書簡259、菊池信一宛三月三〇日付）

農学校教師時代の教え子である沢里武治と菊池信一、羅須地人協会活動の同行である菊池信一と伊藤忠一。こうした過去への自省のなかで、『文語詩稿』という過去を精査する作業が開始されたのであり、ほどなく、起死回生の実践として、土壌改良のための石灰肥料を普及させようという、東北碎石工場の農業技師の仕事に立ち向かうのである。三二年二月に決した起死回生のその仕事は、秋には再び病によつて閉ざされ、しかも死病を背負うこととなる。

このとき、父母に宛てた遺書（書簡393、九月二一日付）がある。

いつも我慢でお心に背きたうたうこんなことになりました。今生で万分一もついにお返しできませんでした。ご恩はきつと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。

どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします。

ここで、「次の生又その次の生」をかけなければご恩に報いられないというのは、父母の恩愛の深さをいうこの時代の常套的な措辞にすぎない。そのことにあらためて深く思ひ至つた、というよりも、ここは、長男としての責務も抛擲して向かつてきた志が今断絶することの無念さのなかで、永劫のときを費やさねばならぬほど、我が信仰の未熟であることを自覚している、と読むことはできないだろうか。信仰の未熟さが、志の破綻を招き、逆縁を招くことになつてしまつた、というのである。

「ご信仰といふのではなくても」というのも、家を支えてきた父母の厚い信仰に対する敬意と認容であり、それはひるがえつて、人を折伏するほどの信仰の深さをいまだに体していない、その自覚の現われともみえるだろう。「お題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします」とある、「お答へいたします」とは、今生を去つてもなお、自らの信仰の未熟さのほうに立ち向かいたいという意志表明にも読める。

それが、かろうじて生のがわにとどまったとき、向かう先は、ひたすら法華経信仰への再確認であり、徹底した自責の打擲である。『雨ニモマケズ手帳』には、そうした現場の一端がなまなましく書きとめられている。

4

『雨ニモマケズ手帳』は、「昭和六年九月廿日再び東京ニテ発熱（濃い鉛筆）」と書き出されて、のちに「十一月十六日就全癒」（赤鉛筆）と追記しているように、病に倒れたときからおよそ2か月ほどにわたる、床中の想念を記録したものである。ただし、「就全癒」というのは、もちろん身体の医学的な治癒をいうのでない。

2か月たらずで快復するはずもない、それは確かに死病であったからだ。その85頁には「病／去恐怖時／半癒／離憂愁時／全治」とあって、死の恐怖を去ったときを「半癒」とし、世俗的な名利を離れえたときを「全治」として、詩人は考えている。その境地に至るには、病苦すら「これ格好の道場なり」（9頁）と考えていた。「就全癒」と追い書きしたところに、信仰の途にあらためて立ちかえり、歩みに就くことを宣言している、ということだっだろう（資料篇iも参照）。

『雨ニモマケズ手帳』の内容をたどってみると、

手帳頁	文体
表見返し	外語
1	漢語
2	文語
3	漢語
4	漢語
5	文語
12	文語
13	文語
15	文語
17	口語
25	文語
27	漢語

内容
落書きか・「Schelkowsky」などの散らし書き。
経文書写・法華経如来神力品。
自省自戒・「父母ノ意ニ僅ニ充タンヲ翼フ」。
経文書写・法華経如来神力品。
法華題目・略式十界曼陀羅。
自省自戒・「修羅の中をさまよふに非ずや」「さらばこれ格好の道場なり」。
俳句書写・「一茶「葛飾や南無廿日月草の花」によるが「二日月」とする。
補遺詩篇・「他の非を忿りて数あるときは」
補遺詩篇・「ロマンツェロ」
補遺詩篇・「十月廿日この夜半おどろきさめ」
短歌再掲・歌稿B784。
経文書写・法華経各品からの一句。

29	31	文語
32	35	文語
36		・
37	40	文語
41	46	文語
47	49	文語
50		・
51	59	文語
60		漢語
61	62	文語
63	64	文語
65	66	文語
67	70	文語
71	74	口語
75	76	文語
77	78	漢語
79	80	口語
81	82	漢語
83	84	漢語
85	86	漢語
87	88	文語
89	95	文語
96		文語
97	100	文語
101	104	文語
105	112	口語
113		漢語

補遺詩篇・「10・24 聖女のさましてちかづけるもの」  
 自省自戒・法華經觀世音如來普門品「衆怨悉退散」をふまえるか。35頁に「10・25」。  
 自省自戒・「28」「法華經に捧げ」「父母の下僕となり」。  
 自省自戒・「10・29」「再び貴重な健康を得ん日」「社余農村を最後の目標として只猛進せよ」。  
 自戒メモ・四苦、八苦に対する「法」「医」「技(抜?)」の対応図と警句。  
 問取り図(仏間・居間)、「病」「Q」。  
 補遺詩篇・「11・3 雨ニモマケズ」  
 法華題目・略式十界曼陀羅。  
 自省自戒・「榮譽ノアルトコロ」「苦禍ノ因アリ」。  
 自省自戒・「天来ト病苦トハ」「陰陽ノ電氣」「夏冬ノ二候ノ如シ」。  
 自省自戒・「妄リニ天来ニ身ヲ委スル」「百スル病苦後ヘニ随フ」。  
 自省自戒・「11・6」「疾ミテ食摂ルニ難キトキ」「オン舍利ナレバ」「オロガミマツルナリ」。  
 演劇構想・「土偶坊」全十景。  
 自省自戒・「肺炎ノ虫ノ息」「汝ニ恰モ相当」「他ハミナ過分ノ恩恵」。  
 法華題目・伯母追善。  
 補遺詩篇・「くらかけ山の雪」  
 經文書写・「調息秘術」、法華經如來神力品、見宝塔品。  
 經文書写・法華經安樂行品などによるか。  
 自戒メモ・「病ノ去恐怖時ノ半癒ノ離憂愁時ノ全治」「無我ノ如來神力ノ大信」。  
 自省自戒・「わが胸のいたつき」「なべての」「もの之苦に透入するの門」。  
 補遺詩篇・「仰臥し右のあしうらを」  
 和歌書写・伊勢七段「いとどしく過ぎにしかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな」によるか。  
 自省自戒・「熱惱に耐えよかつ記せよ」「快樂と安穩」「身燃ゆる」「護法の故に一身を焼かれん」。  
 自省自戒・「かなしいかな前障いまだ去らざれば」「人を癒やさんすべもなし」。  
 補遺詩篇・「月天子」  
 自省自戒・「恐怖之在処」「過去悪行」、三世因果の悪業観。

1 1 4	漢語
1 1 5	漢語
1 1 7	口語
1 1 9	文語
1 2 1	文語
1 2 5	文語
1 2 7	文語
1 2 8	文語
1 2 9	文語
1 3 1	文語
1 3 3	文語
1 3 5	文語
1 3 6	漢語
1 3 7	文語
1 3 8	漢語
1 3 9	文語
1 4 1	文語
1 4 2	文語
1 4 3	文語
1 4 5	文語
1 4 5	文語
1 4 5	文語
1 4 9	漢語
1 5 1	文語
1 5 3	漢語
1 5 5	漢語
1 5 7	文語

・ 經文書写・83・84に同様。

詩句メモ・三六九番稿「岩手輕便鉄道 七月(ジヤズ)」の断片草稿。

文語詩稿・「中尊寺」(一)の下書稿二に位置づけられ、下書稿三が(写稿)。

文語詩稿・未定稿「不輕菩薩」の下書稿一に位置づけられる。法華經常不輕菩薩品。

自戒メモ・「心を整ふるによりてのみ完全にその逆境を脱す」(夢の記憶)。

・ 自戒メモ・「難信難解、科学ヲ習ヘル青年ノ」「法華經入門ニ際シ高等数学ニヨル解釈ノ可否」。

文語詩稿・「たそがれ思量惑くして」の下書稿一に位置づけられる。法華經如来寿量品。

文語詩稿・「涅槃堂」の下書稿一に位置づけられている。

文語詩稿・「きみにならびて野にたてば」の下書稿一に位置づけられ、下書稿二が(写稿)。

自戒メモ・「法華文学ノ創作」「名ヲアラハサズ、報ヲウケズ、貢高ノ心ヲ離レ」。

法華題目・法華經埋納の発願、経筒の図とともに。

和歌書写・元政上人「何故に碎きし骨のなごりぞとおもへば袖に玉ぞ散りける」。

自戒メモ・「礼拝法界」「住忍辱地」。

自戒メモ・法華文学創作に關して「筆ヲトルヤマツ道場観」「断ジテ教化ノ考タルベカラズ!」。

自戒メモ・125・126に同様、菊花名を追い書き。

俳句書写・12に同様、「二日月」「三日月」とする。

埋経メモ・前句の想像画に「経埋ムベキ山」として32に及ぶ山名を追い書き。

自戒メモ・「玄氏」の住居図に「玄氏之伝」。

菊花メモ・菊花名、洋菊の名も。

文語詩稿・逆さ書きで「悍馬」(一)断片稿。新校本全集校異に下書稿一とするが、稿三・四間に位置

法華題目・略式十界曼陀羅。

法華題目・埋経の発願、筒の図。

法華題目・略式十界曼陀羅。

法華題目・略式十界曼陀羅。

病況メモ・「賢治九分治不七甲 最早逆行スルコトナシ」。

158・159	破損
160	漢語
161・162	漢語
163・164	図画
165・166	文語
166	口語
裏見返し	漢語

- ・ 菊花メモ・「洋ノ懸ノ和」・「貢高」・家屋の絵。
- ・ 自戒メモ・「平ノ邪見ノ鬪浄ノ貪ノ痴」・「五常ノ慈悲ノ声聞ノ縁覚ノ善悪不二」・「痴ノ貪ノ瞋」。
- ・ 信仰メモ・林中石碑図と「羽黒山」、丘上石碑図と「劍舞供養」。
- ・ 信仰メモ・「早池峰山ノ湯殿山ノ月山ノ羽黒山ノ巖鷲山」・「七庚申ノ五庚申」。
- ・ 詩句メモ・三七〇番稿の下書稿三との関連が指摘できるか。
- ・ 自戒メモ・「警 貢高心」・「警 散乱心」。

というふうに分別できそうである。

68に及ぶ項目のいちいちの内容については、注9に掲げた小倉豊文の『「雨ニモマケズ手帳」新考』に詳しい分析があり、それを超える新見を本稿はもちえていない。したがって、小倉論を踏まえながら、新校本全集による「補遺詩篇」の認定をも加えて、私に内容の性格を分類している。その実態のおおよそを整理してみれば、

自戒等	25	自省と自戒の文章・自戒メモなど。
経文等	17	お題目や法華経ほか経文の書写など。
創作等	18	補遺詩篇と認められるもの・文語詩稿草稿など。
その他	9	歌句引用・菊花メモなど。

となつて、自戒の記録が三分の一を超え、しかも「補遺詩篇」とされたものにも自省自戒を主題としたものが多くみえている。つまり、この手帳の半ば以上を自省・自戒の現場記録が占めているのである。それに加えて、法華経を主に、題目や経文の復誦現場の記録が繰り返し現われてくる。たとえば、75・76<sup>頁</sup>には、

◎カノ肺炎ノ虫ノ息ヲオモヘ汝ニ恰モ相当スルハタダカノ状態ノミ。他ハミナ過分ノ恩恵ト知レ。

という自省、自戒のメモが刻みつけられ、81<sup>頁</sup>では「調息秘術」として、肺炎から来る「咳喘」を治めて「悪しき幻想妄想」を去るために唱文による呼吸法を記しており、一種の修行を課しているともみえる。また、128<sup>頁</sup>に「法華経入門ニ際シ高等数学ニヨル解釈ノ可否」とあるのも、法華経に入門しなおそうとする者の、あらたまつた態度が示されているとも思える。

そこは、信仰の未熟に立ち向かう「道場」そのものなのであり、『雨ニモマケズ手帳』とは、信仰再生に向かう現場記録集であると思えてまちがいない。つまり、この手帳の到達したところは、信仰の途にあらためて就こうという、実は再出発の地点だった、といえるのである。

5

その記録のなかに、〈写稿〉に撰びとられて定稿化で信仰詩篇として独立してゆく草稿、「たそがれ思量感くして」(129・130頁)題名的メモ「報恩寺訂正」と「涅槃堂」(131・132頁)題名的メモ「涅槃堂中／羅漢堂看経」とが並んで、ある。信仰詩篇として独立を認めた詩稿は、次の10編である。その本文が草稿として現われた時点、題材となった時代の推定(古い順に番号を振った)についても併せ掲げておこう。

うたがふをやめよ	二三か	『(冬のスケッチ)』	3 農学校教師時代。
心相	三〇前後	(新規26系・了あり)	2 「駅を出でしとき」とみえ農学校教師時代前後か。
川しろじろとまじはりて	三一	〃(新規22系・了あり)	6 東北砕石工場技師時代。
病技師(二)	三一	〃『GERIEF手帳』	7 東北砕石工場技師時代。
たそがれ思量感くして	三一秋	〃『雨ニモマケズ手帳』	1 高農時代の「報恩寺訂正」。
涅槃堂	三一秋	〃『雨ニモマケズ手帳』	8 高農時代報恩寺体験に東京／花巻の闘病体験が複合か。
けむりは時に丘丘の	三二前後	(22系重ね・了なし)	4 文語詩篇『一三年「仙台二行ク車中やどり木／MissGifford」。
みちべの苔にまどろめば	三二	〃(流用24系・了なし)	5 文語詩篇『一二年「林中苔」。
われのみみちにたゞしきと	三二	〃(流用26系・了なし)	9 現在の情況。
翁面おもてとなして	三二	〃(流用22系・了なし)	10 現在の情況。

『雨ニモマケズ手帳』に信仰詩篇草稿として現われた2編は、信仰詩篇の草稿出現時期からいえば、ちょうど群の中間に位置する。けれども、それぞれの草稿が現われた時点と、そこに取り扱われている出来事があったと思われる時代とは必ずしも一致しないから、題材の時系列にしたがって、その定稿本文の一部を示して、仮に並び換えてみると、

**高農**・時しもあれや松の雪、

をちこちどどと落ちたれば、

← 室ぬちとみに明るくて、品は四請を了へにけり。(「たそがれ思量惑くして」)

← **教師**・こゝろの師とはならんとも、こゝろを師とはなさざれと、  
いましめ古りしきながらに、たよりなきこそこゝろなれ。

・うたがふをやめよ、林はさむくして、(「心相」)

← いさゝかの雪凍りしき、根まがり杉ものびてゆるゝを。(「うたがふをやめよ」)

・(浮屠らも天を云ひ伝へ、三十三を数ふなり、(「けむりは時に丘丘の」)

← **協会**・まがつびここに塚ありと、呼ばはる声のおどろしき、(「けむりは時に丘丘の」)

← **技師**・宿世のくるみはんの毬、山なみ雪にたゞあえかなる。(「みちべの苔にまどろめば」)

← はかなきかなやわが影の、干割れて青き泥岩を、(「みちべの苔にまどろめば」)

← 大寺のみちをこととへど、いらへず肩をすくむるは、(「川しろじろとまじはりて」)

← **病床**・黒鳥か羽音重げに、雪はなほ降りやまぬらし。(「病技師」)

← わが命なほ今朝燃えて、しんしんと堂はうもるゝ。(「病技師」)

← われのみみちにたゞしきと、ちちのいかりをあざわらひ。(「涅槃堂」)

← ははのなげきをさげすみて、さこそは得つるやまひゆゑ、(「われのみみちにたゞしきと」)

← やみほゝけたれつかれたれ、われは三十ちをなかばにて、(「翁面おもてとなして」)

← 緊那羅面とはなりにけらしな。

というありようになる。当然のこととしてここには、官沢賢治の自伝的展開が、相当な密度でもって重ねられることになる。すでにみてきた、法華経への幸福な参入にはじまった盛岡高等農林学校時代から、

- 農学校教師時代
- とし子の死、学校演劇の禁止
- 羅須地人協会時代
- 農民芸術の実践の停滞
- 東北碎石工場時代
- 技師活動の不調

という、信仰に支えられた活動がいずれも途絶し、ついにすべてを阻む病疾の再来に倒れてしまった現在に至る。

宮沢賢治自身が、農学校・羅須地人協会の時期を反省し自責する書簡はすでに引いたけれども、その自責のゆきつく先にあるのが、信仰の未熟という課題であろうことは、『雨ニモマケズ手帳』という「道場」の存在によってはっきりと示されている。したがって、この信仰詩篇の前半では、法華経を護持するある人物の、確信から揺れては戻るありさまがとらえられている。

冒頭に位置するのは、盛岡高等農林学校時代の記憶にもとづく「たそがれ思量感くして」であったと思える。「品は四請を了へにけり」というのは、久遠に成仏して今に至り、そして未来にわたる仏の永遠性について明かすという、法華経二八品中もつとも重要な「如来寿量品第十六」の序段にあたるところ。思量に感うこの人物が、「寿量品」の深奥にいよいよ参入しよう、というところで余韻をのこしたこの詩稿は、法華経信仰の核心に向かう、その序詩にも位置づけうると考えられる。詩人は、法華経信仰の高みの前にまさに立っている人物を、ここでとらえるのである。

次に位置するのが、農学校教師時代を主とした記憶にもとづく詩稿群である。疑いや心のたよりなきに惑い（「うたがふをやめよ」・「心相」）、あえて經典の教えをつぶやきながらも（「けむりは時に丘丘の」）、ときに鬼神への畏れにとまどう（「みちへの苔にまどろめば」）といった、信仰の揺らぎのなかにある人物が現われてくる。

その核にあるのが法華経であったことは、車中におけるある男性と異国の女性との語らいを舞台とした「けむりは時に丘丘の」に認められる。男性の「浮屠ちも天を云ひ伝へ、三十三を数ふなり」といった、その「三十三を数ふ」とは、法華経の「觀世音菩薩普門品第二十五」に、衆生の苦難に対して觀音菩薩がそれぞれ三十三の身に変化して法を説き救済するという、それを踏まえているとみえるからである。「浮屠」とは、仏陀と同じ語ニテ即チ仏、僧（『言海』、ちくま学芸文庫版）の意。そして、「上の無色にいたりては、光、思想を食めるのみ」という確たるものにみえる発言も、「普門品」の後段、世尊の詩頌の終わり近く、

無垢清淨光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間

とある經文を念頭に置いていると考えられる。

法華経の周辺で躓いては起ちあがろうとする、この人物に立ちはだかつてきたのが、二八年以来の病魔である。

6

信仰詩篇の後半に、まず加えられてくるのが、東北砕石工場技師時代の手帳に書きつけられた、その活動が進展しないまま病に潰えてゆく「われ」の姿にもとづいた詩稿である。

ここでは、それまでの信仰詩篇に異なつて、詩の場に現われた人物に「われ」という眩きが認められる点である。たとえば、冒頭の「たそがれ思量感くして」が、手帳稿では「われもまたこゝに誦しなん」とあつて、その場の主体が語り手に重なり、作者にさえも重なる



りうることを露わにしていたのだった。それが、定稿化の過程で隠蔽されていったのである。《文語詩稿》が「私的体験を非私的に表現」（小沢俊郎）する傾向を示すなかで、この信仰詩篇も、その前半部においては「非私的」時空を保つことが可能な、すなわち自らを相對化する詩人の立場が守られていた、とみえる。

けれども、技師時代の人物には、どうにも宿願を果たせぬ「われ」の内部に巣くう「卑しき鬼」への自覚（「川しろじろと年じはりて」）があり（本研究序章を参照）、迫りくる「死相」を教えられた「われ」の肅然とした寂しさ（「病技師」二二）がただよう。それぞれの詩の場の低音部を奏でているのは、自分を支えてきた信仰のありように対するもどかしさ、信仰の未熟に気づいた者のやりきれなさであるようにみえる。そうしたもどかしさややりきれなさは、前半に置かれた揺らぎの信仰詩篇群にはうかがえない感じである。揺らぎのほうは、観念的抽象的な信仰態度にまだ立っている。

それが、しだいに具体的な自己批判へ向かってゆくとき、〈自伝性〉を露わにするとみられても仕方のない「われ」の登場を要求し、定稿本文に定着させてくるのである。そこには、信仰に拠った農学校や羅須地人協会における農村改革の実践に、挫折してしまった宮沢賢治が、病の根をその身体にまだ残しながら、技師として土壌改良肥料の普及という起死回生の実践にも、死病を再発症してみたび挫折してしまう、そのことの予覚があったからにちがいない。

『GERIEF手帳』に先立つ『王冠印手帳』には、すでに、

あらたなるよきみちを得しといふことは  
たゞあらたなる

なやみのみちを得しといふのみ

このことむしろ正しくて

あかるからんと思ひしに

はやくもこゝにあらたなる

なやみぞつもりそめにけり

あゝいつの日か弱なる

わが身恥なく生くるを得んや

野の雪はいまかゞやきて

遠の山藍のいろせり

肥料屋の用事をもつて

組合にさこそは行くと

病めるがゆゑにうらぎりしと

さこそはひと唱へしか

(43~45頁)

と、春の山野を望みながら、この実践の難しさを自らの病質にも重ねて案じていた、という事実がある。末尾の「病めるがゆゑにうらぎりしと」さこそはひと唱へしか」という回想は、羅須地人協会の活動挫折がまざまざとよみがえった、ということであろう。それがまさしく、またもや現実となったとき、宮沢賢治は『雨ニモマケズ手帳』という「道場」において、自らの信仰の未熟と痛切に向き合うことになったのである。

手帳には、法華経との幸福な出会いを示した定稿〔たそがれ思量感くして〕に至る「報恩寺訂正」の詩句につづけて、「涅槃堂中／羅漢堂看経」としたうえに詩句が刻みつけられている。盛岡高等農林学校時代の参禅の記憶に重ねて、「われはしも疾みて得立たね／むなしくも冬に喘げり」と現在のありようを記したものである。それが、まだ死なずにいる病床の「われ」が登場する定稿「涅槃堂」に至る。これは、川辺を彷徨する姿を「生きんに生きず死になんに、得こそ死なれぬわが影を」ともとらえる「川しろじろとまじはりて」にみえていた「われ」の成れの果て、ついの姿だといえよう。そうした「涅槃堂」への過程で、

定省を父母に欠き／養ひを弟になさで／ひたすらに求むる道の／疾みてなほ現前し来ず

(下書稿二、第二連)

という想念も、詩人はつかんでいた。「定省」とは、子たる者が親に対して晩にはその寝具を定め朝には其安否を省みること(修訂増補詳解漢和大事典)で、これもこの時代の通念ではあった。ただそれが、父母に対する報恩への悲願をいうあの遺書にみえる立ち位置からさらにさかのぼった、より根源的な自責のことばである点に注意したい。あまりにも自己本位な生き方が「疾」を誘い、「ひたすらに求むる道」の「なほ現前し来」ざる事態を招いたとする、その因縁を今更のように思い知る。これは三二年に入ってからの起稿とみられるもので、『雨ニモマケズ手帳』によって自省自戒の「道場」が閉じられたわけではないことを教えている。そしてここから、父母への恩愛を亡失した者の苛酷な現実が見つめられた信仰詩篇が現われ、加えられる。やはり三二年以降の起稿とみられる「われのみみちにたどしきと」につながってゆくのである。

われのみみちにたどしきと、

ちちのいかりをあざわらひ、

ははのなげきをさげすみて、

さこそは得つるやまひゆゑ、

「急はむなしく息めえぬ、

春は来れども日に三たび、

あせうちながしのたうてば、  
すがたばかりは録されし、  
下品さんげのさまなせり。

「すがたばかりは録されし」——病床にのたうちまわっているその姿にだけは現われている、とあるのは、「さんげ」がその外面には明らかにみえようが、それが本心にまでは到底達してはいないのだ、ということであろう。彼の懺悔は、果てなくつづく自責・自戒の業として暗示されている。それほどに不熟な自分なのだ、という痛烈な自己批判がここにはある。けれども、懺悔が果てしないものであると認識しているかぎり、詩人は、「われ」の存在を必ずしも全否定しているわけではない。つまり、うちひしがれているわけではない。病苦を「道場」とした、信仰の再生にここで諦めたわけではない。

7

この信仰詩篇をしめくくっていると考えられるのが、「われのみみちにたゞしきと」に連なる（翁面おもてとなして世経るなど」という詩稿である。ともに『雨ニモマケズ手帳』を承けた三二年以降の起稿で、草稿には、連構成をはずしたその詩形に、前者が「病相」、後者が「自嘲」と命名されていた段階もあった。病相から自嘲に至る過程は連作稿、兄弟稿ともよい。「自嘲」の題名を喪った定稿は、

翁面、おもてとなして世経るなど、ひとをあざみしそのひまに、

やみほゝけたれつかれたれ、  
われは三十ちをなかばにて、

緊那羅面とはなりにけらしな。

とあつて、まず、人々の幸福を表現しようという思いを湛えた「翁面」でもって、さまざまな実践に立ち向かってきたはずなのに、それが結局「ひとをあざみ」、自らをも損なう行為であったという。そのうえで、いまや「翁面」という偽善の仮面を棄てた「われ」のありさまを、詩人は「緊那羅面とはなりにけらしな」と見定める。ここにもやはり、自己批判という視座が貫かれているとみてまちがいないであろう。「三十ちをなかば」で「やみほゝけ」「つかれ」ているこの「われ」とは、『雨ニモマケズ手帳』に指弾されてきた、三五歳の宮沢賢治自身の現在にはかならない。「非私的」な時空を詩の場に構築してきた《文語詩稿》という過程にあえて逆らうかのように、「われ」に向かう信仰詩篇を提出してきたなかでも、そう読まれてもよい、という確信的な、これは自伝稿であるといえる。ただし、過去の題材や素材を集積する、本文上の詩層をもたないといつてよいこの詩稿は、現在性に徹したものである。

くり返しになるが、「われ」に向かう信仰詩篇は、その信仰の未熟さに気づき、不熟な自分を批判的にとらえてゆく。ただそれは、自己を全否定するということではない。あの『雨ニモマケズ手帳』には、次の一文も刻みつけられていた(10・29、44〜46頁)。

厳に日課を定め／法を先とし／父母を次とし／近縁を三とし／社倉農村を最後の目標として／只猛進せよ

これまでも何度もとりあげてきた一文だが、ここであらためて読み直しておこう。

「厳に日課を定め／法を先とし」て、あらためて法華經の厳修を課しつつ、「父母を次とし／近縁を三とし」て、報恩の生活を実践することによって、信仰の未熟さという課題に立ち向かいながら、信仰の志である「社倉農村」の改革を「最後の目標として」奮闘すること。

信仰の未熟さを克服してゆくことと、農村改革のためになにかをしつづけてゆくこととは、不熟な自らに課した業なのであり、信仰に没入することだけが求められていたのではない。「猛進せよ」と病床の身に命じたもののひとつとして、『文語詩稿』の再編と定稿化という〈詩的実践〉もあった。それが「猛進」であるのなら、信仰詩篇は「さんげ」にとどまるものであるはずがない。そのように考えられるのがかりは、信仰詩篇をしめくくる詩稿〔翁面おもてとなして世経るなど〕がたどりついた、

緊那羅面とはなりにけらしな。

という詩句にあるのではないか。偽善の仮面「翁面」から変じた、この「緊那羅面」とはなにを意味しているのか、ということである。

忘恩、偽善の徒として「われ」をとらえる姿には、二〇代半ばの自覚として「はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」(『春と修羅』)と叫んだ、あの「修羅」のありようを思い起さないとはいられない。(まこと)を見失って彷徨しているもの、それが「修羅」であつたらう。法華經の「序品第一」には、「四阿脩羅王あり」として、

娑稚阿脩羅王・佉羅蹇駄阿脩羅王・摩質多羅阿脩羅王・羅睺阿脩羅王にして、各、若干の百千の眷属と俱なり。

とみえ、「阿脩羅」阿脩羅については、たとえば、高地大等編『漢和对照妙法蓮華經』の「法華字解」、また国柱会の山川智応『和訳法華經』の脚注には、それぞれ、

・略して修羅ともいふ。非天、非類、不端正と訳す。十界、六道の一。衆相山中、又は大海の底に居り、鬪諍を好み常に諸天と戦ふ悪神なりといふ。

・不端正とも非天とも訳す、嫉妬詭曲なる故に果報は天に次げど天に撞せず、帝釈の戦敵たり。とあつた(「詔曲」は、意志を曲げて媚びへつらう意の仏教語「詔曲」の誤植か)。

けれども詩人は、この「われ」の様相に対していま「修羅」とはいわず、「緊那羅」の面という。その「緊那羅王」は、「序品第一」では「阿修羅王」に先だって登場し、

四緊那羅王あり、法緊那羅王・妙法緊那羅王・大法緊那羅王・持法緊那羅王にして、各、若干の百千の眷属と俱なり。と記述されている。

この「緊那羅(王)」に対する島地大等と山川智応と、それぞれの注解をみると、

・疑人、人非人、疑神と訳す。八部衆の一。帝釈に奉仕して法樂を奏する神。

・疑神と訳す、人に似て一角ある故に人非人と号く、帝釈に奉仕し法樂を奏する神。

としている。いずれにしてもそれぞれの注は簡潔にしてほぼ同内容なのであるが、そこには重要な指摘がある。

それは、両者がいずれも鬼神でありながらも、「即ち天帝ナリ、三十三天尊ト号ス」(言海、ちくま学芸文庫版)とされた、仏法の守護神である帝釈に対して対極的な位置にいる、ということだ。具体的にいえば、「緊那羅」が法樂をもって帝釈に奉仕するものであるのに、詔曲の「阿修羅」は常に帝釈に鬪諍するものである。

信仰詩篇の前半にみられた、法華経との幸福な出会いののち、信仰の深い揺らぎと実践の停滞のなかに身を置いて、「卑しき鬼」(川しるじろとまじはりて)として自覚していた段階は、「修羅」以上のことに相当するものだったのである。それに対して、信仰詩篇後半、その病苦さえも「道場」として、あらためて信仰の未熟を克服しようという段階で、「われ」を「緊那羅面とはなりにけらしな」ととらえたのは、「下賤の魔軀を法華経に捧げ」・「法を先とし」(『雨ニモマケズ手帳』38・44頁)たいという念の現われであったとみえる。

その意味で、詩句は「や、つと緊那羅の面を帯びるところまでになったようだなあ」と解釈すべきなのではなからうか。信仰の未熟と、未達の志とに立ち向かうことを、これからは残生のすべてとしようとした、その覚悟の一端であったと考えられる。法華経の「緊那羅王」には、それぞれ法・妙法・大法・持法が冠せられている。法(ダルマ)を戴こうとするものがわに、詩人は「われ」を認めているというところでもある。それは、かつて抱いた幻想に「天の鼓手、緊那羅のこどもら」(「小岩井農場」パート四)の姿があったが、そのような外部の存在ではなく、いま「われ」のこととして、信仰の未熟さに対する批判のうちに、一心に法に仕えようと地に喘ぐ不熟者の姿をいうのである。

到達などではけしてなく、いまやつと再出発の地点に立ち、信仰による自己再生の途に就いた、そのことをいうのである。

とあの社会詩篇とに尖鋭に現われているといえるように思う。特に、自然・田園・生活というそれぞれの詩篇分野にわたって、近代化の偏向や農村の因襲などの問題提起を秘めた社会詩篇群は、農村の改革を志してきた宮沢賢治にとっては、〈詩的実践〉たるこの詩集の針路を指し示して、重要な位置を占めているといつていいだろう。

「非私的」な場の構築に向かっているこの社会詩篇にもまた、その根底に発信者あるいは立会人として、見えない「われ」が絡んでみるとみるのは、不自然なことではない。むしろ、定稿群を挟んだ和紙表紙には「想は定りて表現未だ足らざれども／想は定まりて表現未だ定まらず」と記してあつて、詩想と表現への全面的な関与、また将来的な関与をも認めようとする言いが確かにあつて、《文語詩稿》の定稿化への過程では、見えざる「われ」に、詩人自身の現在が主體的にかかわっていることは明らかである。

そのとき、一方では信仰詩篇として、自伝性の濃い「われ」を、それも批判的なたちで如実に差し出している。つまり、社会詩篇において問題提起を支える見えざる「われ」と、信仰詩篇において批判される「われ」とが、〈定稿・百編〉というひとつの集に混在している。それはしかし、対立的にというのではなく、実はつながっているのではないかと考えられる。

前者は社会批判の過程を、後者は自己批判の過程を、それぞれに示しているらしいのは、これまでにみてきたとおりである。それぞれの詩群を立てて、外部批判にも内部批判にも向かっている、ということになる。そのかなめに、「法を先とし、(中略) 社余農村を最後の目標とし」た詩人宮沢賢治がある。社会詩篇というものが詩人の誠実な仕事であつて、もとより、砂上の楼閣として構築されたはずもない。そこに現出している不幸な事態をやがてはのりこえてゆく、その契機となることがこの〈詩的実践〉の目論見、あるいは、ひとつひとつの詩稿に託されている祈りであつた、とひとまず考えておきたい。そうした社会詩篇群を支えるためにも、「われ」に向かう信仰詩篇が用意される必要があつたとみられるのである。

そこでは、不熟な「われ」の存在がさらけだされている。こんなつまらぬものが大仰にも農村の改革を希っているのです、と、まるでその偽善性を暴露するが如くに、である。それは一見、〈詩的実践〉の無化にもつながってゆくともみえる。不熟な「われ」を認めることが、どうして社会詩篇群の支えともなりうるのか。

それは、こう言い換えてみるのがよいのかも知れない。

不熟な「われ」であるからこそ、信仰の未熟にあらためて立ち向かいながら、信仰の志である農村改革のために、最後までなにごとかを果たしたい。「われ」をきびしく直視することが、社会や世界のありかたをただしくつかまえる足場になつている。外部とのたたかいを、内部とのたたかひをもつて支えることが、しのびこんでくる偽善や欺瞞をかるうじて排除する。そういうことではないのか。

死にゆくときが近づいていた詩人宮沢賢治に、「慢」の思想がとらえられていた。三三年九月一日付の、農学校の教え子である柳原昌悦に宛てた書簡である。長くなるが引用したい。

あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうもありませんがそれに代ることはきつとやる積りで毎日やっ

きとなつて居ります。しかも心持ばかり焦つてつまづいてばかりあるやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだに付いたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲り、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた屋敷の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといつたやうな順序です。(中略) 風のなかを自由に歩けるとか、はっきりした声で何時間も話ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝へるとかいふことはできないものから見れば神の業にも均しいものです。そんなことはもう人間の当然の権利だなどといふやうな考では、本気に観察した世界の実際と余り遠いものです。

「慢」は慢心。『法華経』でも、増上慢をきびしく戒めている。増上慢の意は、やはり『和訳法華経』の脚注によれば(2か所あるのを摘記、句読点は島田)、

最高の慢心。劣等の法を得たるを、最上法を得たりと慢するを云ふ。増上殊勝の法を得たりと自ら誤認し、驕慢の心を抱くこと。要するに仏の説に依らずして勝手に考へを以てこれにて到れるものとおもへるもの。ということである。

書簡にいう「しかも心持ばかり焦つてつまづいてばかりあるやうな訳です」とは、「慢」からいまだ逃れきつてはいないことを自覚したことばであろう。もう昔のようにはいかないが、「それに代ることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居」る、その思いにときとして兆してくる慢心を、詩人官沢賢治は警戒している。それは、つい先月に、ひととおりとめ終えた『文語詩稿』定稿化の過程にあつても、すでに自制的に果たされてきたことであつたにちがいない。

というのも、『文語詩稿』の再編につながる『雨ニモマケズ手帳』の裏表紙の見返しに、「警貢高心／警戒乱心」の語が書きつけられており、その「貢高心」が慢心と同意のことばだつた。「警貢高心」から、「慢」への警戒に至る過程が、『文語詩稿』の定稿化の過程に重なつて居る。

誰しも、さまざまな社会的な課題に迫らうとして、その批判の規準をまずは社会正義に置くであろうが、それをつきつめてゆくと、程度度の差はあれ、知らず知らずに陥りがちなのが「慢」の状態ではないだろうか。詩人の、『文語詩稿』定稿化の過程にあつても、事態は同じことだつたはずだ。詩人は、これまでの幾度もの失敗をとおして、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたこと」を痛感してきていた。その社会詩篇が過つて「慢」の思想にはまりこんでしまふのを、信仰詩篇という自戒の眼をもつて制御していたのではなからうか。その制御のなかで、社会詩篇の詩想と表現をととのえてゆくことが、詩人自身の、信仰の志の如何を問いかえしてはなからう要するに、信仰詩篇は、『文語詩稿』のゆくえを暴走させないための、制御盤としての役割を担つていた、と考へてはならないだろう。

か。

(注)

- 1 本研究3章2節その1を参照されたい。
- 2 『新校本全集』第七巻校異で、この詩稿の素材に認定される『「冬のスケッチ」』一九葉の「朝」に、「贗物師、加藤宗次郎」が登場する。そのモデルと想定されるのが、無教会派キリスト者齋藤宗次郎（一八七七一—一九六八）である。彼の著作『二荊自叙伝下』（岩波書店二〇〇五）の栗原敦が担当した改題のなかに、その想定根拠が記されている。その「朝」の展開稿としてある「晝眠」の人物を信仰の人齋藤宗次郎に短絡的に結びつけてはならないが、「翁面、おもてとなして世」をわたる人物は、信仰詩篇に独立させたなかの1編にもみえ、「晝眠」の背景にもなんらかの信仰にかかわる事態があると考えている。

- 3 『新校本全集』第十六巻年譜篇によると、  
政次郎は理財家ではあるが、求道の人である。宮沢家は日常生活が仏壇で規制されているといつてよいほどとつぷりと仏教（浄土真宗）的環境の中にある。（略）政次郎の姉ヤギは賢治に「正信偈」や「白骨の御文章」を子守唄とした。朝夕の勤行は欠かさない。

- 4 政次郎の信仰は浄土真宗であるのに、正に青天の霹靂というべきか、賢治の法華経への帰依による改宗申入れが行われ、連夜の争論に家内中まっ暗になったのは、一九二〇（大正九）年、賢治が盛岡高等農林学校研究生を終えて、家に戻ったときである。（中略）信仰上の対立は賢治の死までつづき、一九五一（昭和二六）年の改宗によって父は子に従うことになる。

- 4 続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』（日本図書センター一九九〇）の第2巻収録の本文による。
- 5 注4の第3巻収録の本文による。
- 6 『新校本全集』第十六巻年譜篇が引用するところによる。

- 7 注4の第1巻収録の本文による。

- 8 三一年二月二五日付で、関豊太郎に対して、東北砕石工場からの申し入れがあったことを告げて、

就てこの際私に囑託として製品の改善と調査、広告文の起草、照会の回答を仕事とし、場所はどこに居てもいゝし給年六百元を岩末で払ふとのごとでございます。それで右に応じてよろしうございませうか、（略）

と、伺いを立てる手紙を出している。関豊太郎は、その回想で、

先生（私）が盛岡に居られた際、頻りに勧誘された石灰岩末を作製し売り出さうと思ふが、さうして良からうかとの問合せに接した。私は私の宿望が遂げられることになるので、これほど嬉しいことはないから、遠慮なく着々実行されよと返事して置いた。

（「宮澤賢治氏に対する追想」、『宮澤賢治研究』所収、十字屋書店一九三九）



という。

9 これはその2<sup>つ</sup>に記されたもの。1<sup>つ</sup>には法華經の「如来神力品第二十一」の經文の一部が書写されているが、これを小倉豊文は「第一頁の「当知是処……」の四句十六文字は、第三頁の「諸仏於此……」とつづく言葉であり、かつ、第二頁を書いた後に書かれたものと考えられる」（『雨ニモマケズ手帳』新考』東京創元社一九七八）という。したがりたい。

10 島田「貴きアラヴの種馬／文語詩稿五十篇」悍馬」試注」（『国語教育論叢』第14号二〇〇五・三）、及び「貴きアラヴの種馬を追う／文語詩稿「悍馬」（二）の詩層」（『賢治研究98』二〇〇六・二）。

11 島田「欠文はなぜ成立したか—宮沢賢治・文語詩稿（たそがれ思量感くして）覚え書き」（『論攷宮沢賢治』第8号二〇〇七・一二）において生成過程を読み解きを試み、序詩に位置づけることを提案している。

12 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経（下）』（岩波文庫改版一九七六）、植木雅俊訳『法華経下』（岩波書店二〇〇八）を参考とした。

13 植木雅俊訳『法華経下』では、「無垢清浄の光あつて、慧日、諸の闇を破し、能く災いの風火を伏して、普く明らかに世間を照らす」と訓じて、その意味を「純粹無垢にして清浄な輝きを持つ人よ、智慧と知によつて卓越した眼を持つ人よ、太陽の輝きを持つ人よ、吹き消されることのない火焰の光を持つ人よ、あなた（シャーキヤムニ：島田注、釈迦牟尼）は自ら輝きながら、世界を照らしておられます」としている。

14 『新校本全集』第十三巻上校異は、『王冠印手帳』の使用を三二年二月から五月に推定し、『G E R I E F手帳』は三月末から七月の使用と推定している。

15 この本文を始発にして詩稿用紙に展開し、鉛筆による〈写〉印が与えられて定稿に至ったのが、「商人らやみていぶせきわれをあざみ」である。生活詩篇に位置づけているけれども、その由来から、これも信仰詩篇としての性質を秘めている可能性がある。

島田『文語詩稿叙説』で、信仰詩篇として分析を試みている。

16 父母へ遺書を認めたときに、弟清六に宛てたものもあつた。「たうたう一生何ひとつお役に立たずご心配ご迷惑ばかり掛けてしまひました。／どうかこの我儘者をお赦しく下さい」という簡明なものである。「養ひを弟になさで」の句の背景に置くべきものであろう。

17 長沼士朗「われのみみちにたゞしきと」（『宮沢賢治文語詩の森』所収、柏プラノ一九九九）は、この詩稿を二九年の疾中時代の記憶にもとづくものとみる立場にあり、

この「すがたばかりは」の「ばかり」という語句には、当然「外見的には懺悔をしている姿になっているが、胸の内には懺悔をしてもすつきりしない想いが残る」というような意味が込められていると考えたい。

とする。本稿は疾中時代を越えて再び自己凝視をしなければならなくなつた『雨ニモマケズ手帳』の体験を踏まえたいことととらえるので、「胸の内には懺悔をしてもすつきりしない想いが残る」程度では納まらぬ内省に向かつているとみる。

18 恩田逸夫「宮沢賢治文学における「まこと」の意義」「宮沢賢治における「修羅」」(『宮沢賢治論1』所収、東京書籍一九八一)を参照。

19 注12の岩波文庫版『法華経(上)』における読み下しによる。以下、同。

20 国書刊行会による再刊一九八七による。なお、「法華歌集」というものも巻末にまとめてあるが、そこに元政上人の和歌も3首採用されているが、『雨ニモマケズ手帳』に引用したものではない。

21 引用は新潮社版(第十六版一九二八)による。国柱会講師山川智応については、『文語詩篇ノート』1921年の項、四月の記述に「山川智応氏のをいたはり行き来してある」とあった。書簡258には、「法華経の本は／山川智応 和訳法華経／島地大等 和漢对照妙法蓮華経／等ありますが発行所がちよつとわかりません。国柱会からパンフレットでも来たらお送りして参考に供しませう」(伊藤忠一宛三〇・三・一〇付)とある。

宮沢賢治研究

文語詩集の成立 — 鉛筆・赤インク（写稿）による過程

Ⅱ

終章

原詩集の発展

1節 保守される（定稿・百編）

2節 空白の連指定の意味  
— 定稿「たそがれ思量感くして」試論

3節 『文語詩稿』への転機  
— ブルーブラックインク（写稿）による定稿の形成

4節 本研究の到達と今後の課題

6

1

21

43

60

【資料篇】

i 自筆原稿（複写）一覧

ii 写稿定稿本文対照一覧1〔鉛筆・赤インク（写稿）〕

iii 定稿起稿時手入れ一覧

iv 定稿起稿後手入れ一覧

v 文語詩稿定稿群像一覧

vi 写稿定稿本文対照一覧2〔ブルーブラックインク（写稿）〕

vii 写稿定稿本文対照一覧3〔青インク（写稿）〕

20

85

48

15

11

8

14

Ⅰ

【本論篇】序章

《文語詩稿》生成

複写〔盆地に白く霧よどみ〕自筆稿下書稿一・二、三・四、定稿

1節 《文語詩稿》研究の現状

2節 「川しろじろとまじはりて」を読む

1

11

32

第1章

初期稿の形成

- 1 節 《文語詩稿》の発生と、その形成
- 2 節 『文語詩篇ノート』による針路
- 3 節 定型強化の過程
- 4 節 《文語詩稿》の途絶へ

2

・ 1  
 ・ 2 3  
 ・ 3 4  
 ・ 4 7  
 }  
 5 3  
 }  
 6 1

第2章

再編稿の展開

- 1 節 《文語詩稿》の再編へ
- 2 節 再編稿の熟成
- 3 節 草稿の手入れ階層と《写稿》の位置づけと
- 4 節 《写稿》の成立

3

・ 1  
 ・ 2 2  
 ・ 4 5  
 ・ 6 7  
 }  
 8 8  
 }  
 9 6  
 }  
 10 1

第3章

定稿化の実態

- 1 節 《写稿》本文の想定と定稿本文との異同
- 2 節 題名のゆくえと詩の場
- 3 節 詩の場の変容と詩想の変質
- 4 節 定稿化と詩想の定立と

4

・ 1  
 ・ 2 8  
 ・ 4 8  
 }  
 1 4  
 }  
 2 3  
 }  
 3 1

第4章

原詩集の輪郭

- 1 節 《定稿・百編》の成立
- 2 節 《集》の構造・生活詩篇の位置
- 3 節 《集》の性格・風土性と時代性
- 4 節 《集》の針路・社会詩篇の存在
- 5 節 《集》の基盤・信仰詩篇の存在

5

・ 1  
 ・ 2 6  
 ・ 4 1  
 ・ 5 4  
 ・ 7 4  
 }  
 9 6  
 }  
 10 1

終章 原詩集の発展

## はじめに

成立に向けて定稿化がすすめられていた〈定稿・百編〉が、増補され分立してゆく、その発展過程を見とおして、本研究をひとまず閉じる章である。

1節は、〈定稿・百編〉の開始形に対する手入れの実態を分析して、その規模も内容も詩の場に変容をもたらすものでなく、概して詩想の強化と表現の整備とに向かっていることを明らかにし、解体に向かう要因が〈定稿・百編〉の内部には見いだせないことを提起する。2節では、開始形の手入れとしては唯一、連の追加を指定するものの本文を空白のままとした「たそがれ思量惑くして」について、そうした推敲の異様さにこめられている意図に迫ることを試みる。

3節で、〈定稿・百編〉の増補・分立の契機として、ブルーブラックインクによる〈写稿〉の形成とその定稿化に着目し、〈定稿・百編〉解体の動因を探るとともに、増補から分集へという発展過程を概説する。

4節は、本研究によってたどりついたところをまとめ、今後の課題を展望する。

清書起稿時の書きながらの手入れを含めた結果本文である定稿開始形に対して、詩人はさらなる手入れをおこなう。

その手入れの実状については、資料篇ivとして「起稿後手入れ一覧」に示しているが、手入れの作業には、ブルーブラックインクによるものと青インクによるものがある。それらの競合する場合がないため、その先後を確定できないが、本研究1章2節においても言及したとおり、

ブルーブラックインク→青インク

という過程を経たものと想定して、分析をおこなってゆく。

ところで、後発のものとする青インク手入れは、〈定稿・百編〉が解体され、さらなる定稿の追加と増補によってふたつの詩集に分集されてゆく過程で現われたとみられるふしがある。4章1節で〈定稿・百編〉の発展について、そのあらましをみたけれども、その過程で具体的には、14編の青インクによる〈写稿〉が現われ、それがすべて定稿化されて『文語詩稿一百篇』に追加稿として収められるという事実である。そうしたさらなる定稿化候補稿の選択が、青インクによってなされなければならない時点とは、ブルーブラックインクを主たる筆具として『文語詩稿五十篇』の編集作業がおこなわれているときと考えられてよい。つまり、『五十篇』の補充稿を草稿群から選びだしているとき、『一百篇』に追加稿として入れるべき草稿もまた見いだされて、それが他に紛れないように区別するために、新たな筆具による〈写〉印を与えたとみられるのである。この青インク使用は、数は少ないが、定稿・百編の本文手入れや推敲メモにも現われている。少なくとも、定稿のブルーブラックインク起稿とその手入れの過程で、青インクによる〈写稿〉の選択にともなった割り込み的な、集中的使用の段階がおそらくあったのであろう。

なお、『五十篇』のちになる『一百篇』の編集でも、その追加・増補の定稿がブルーブラックインクで起稿され、かつ手入れを受けている場合がほとんどである（例外は「腐植土のぬかるみよりの照り返し」の1編のみ<sup>1)</sup>）。すると、〈定稿・百編〉にあったものも、『五十篇』や『一百篇』の編集段階において、ブルーブラックインクによって手入れを重ねた可能性がある。したがって、ブルーブラックインク手入れのなかには、青インク手入れ段階以後のものも含まれているとみななければならないであろうが、その峻別は現段階の作業では果たすことができない。

要するに、ブルーブラックインク手入れを先発とし、青インク手入れを後発とする見方は、おおよそのながれとして成り立つもの、ということになる。この〈定稿・百編〉における本文形成の分析では、『五十篇』や『一百篇』の編集段階における手入れという分節化の試みを導入しないで、すすめてゆくほかない立場にある点をあらためて明記しておく。



さて、そのような起稿後の手入れを受けた詩稿の数は、次のとおりである。

ブルーブラックインク手入れ …… 35編

青インク手入れ …… 5編 (ブルーブラックインク手入れとの重複あり3編)

起稿時(書きながら)手入れ稿が32編であったのに比べると、やや増加しているという程度といえる。起稿時(書きながら)手入れ稿と重複しないものが、21編である。つまり、(定稿・百編)のうち47編は定稿として起稿以来本文に手入れがなく、その意味においては定稿性の強い詩稿だった、ということになる。

起稿後手入れのいちいちの箇所について、その規模と内容を見ると、

連句	ブルーブラックインク手入れ		青インク手入れ	
	変更	追加	変更	追加
連	1	1	0	0
詩句	7	1	1	0
語句	2	2	0	0
表記	0	2	0	0
割合	60・3	39・7	90・0	0

▲連との重複1編、句との重複7編。

というもので、ブルーブラックインクの場合を主に、その手入れ傾向の第一を指摘するならば、

・まがつびここに塚ありと、

「呼ばはる声のおどろしき、↓誰ぞおどろしく喚びたるを、↓おどろき離るこの森や、」**句変更**

風はみそらに遠くして、

山なみ雪にたゞあえかなる。

・梨の葉かざす窓べにて、

筒のなかばを傾けて、

「・↓その齒(を↓に)風を吸ひつゝも」**句追加**

しばしをしんとものおもひ、

(一)みちへの苔にまどろめば

(二)林の中の柴小屋に

・夜に日をつげる一月の、  
 「水田Ⅱ干泥」のわざに身をわびて、**語併存**  
 しばしましるの露置ける、  
 すぎなの畔にまどろめば、

(「民間薬」)

といった「変更・追加・併存」の内容が6割を占めている点であろう。起稿時(書きながら)の「変更」が2割に満たなかったのに比べると、起稿後手入れはけつして軽微なことではなかった、といえる。けれども、

・あるひはくらみまた燃えて、  
 降りくる雪の綿なすは、  
 さは遠からぬ雲影の、

(「老いては冬の孔雀守る」)

「日や越え行くと仰ぎ見る↓日を越(え↓し)行くに外ならず」**句調整**  
 ・二羽の鳥の争ひて、  
 さつと落ち入る「林↓杉」ばやし、**語訂正**  
 このとき大氣飽和して、  
 霧は氷と結びけり。

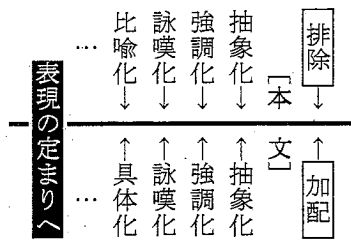
(「嘆願隊」)

というような、表現的な整理・整頓ともいえる「調整・訂正」といった軽微な内容も4割近くに及んでいる、ということを見過すべきではない(起稿時手入れでは6割を占めていた)。

連	詩句	語句	表記	割合	詩稿数				
					1	2	3	4	5
1	7	9	2	・	1	8	4	・	1
2	7	9	2	・	1	8	4	・	1
3	7	9	2	・	1	8	4	・	1
4	7	9	2	・	1	8	4	・	1
5	7	9	2	・	1	8	4	・	1
6	7	9	2	・	1	8	4	・	1
7	7	9	2	・	1	8	4	・	1
8	7	9	2	・	1	8	4	・	1
9	7	9	2	・	1	8	4	・	1
10	7	9	2	・	1	8	4	・	1
11	7	9	2	・	1	8	4	・	1
12	7	9	2	・	1	8	4	・	1
13	7	9	2	・	1	8	4	・	1
14	7	9	2	・	1	8	4	・	1
15	7	9	2	・	1	8	4	・	1
16	7	9	2	・	1	8	4	・	1
17	7	9	2	・	1	8	4	・	1
18	7	9	2	・	1	8	4	・	1
19	7	9	2	・	1	8	4	・	1
20	7	9	2	・	1	8	4	・	1
21	7	9	2	・	1	8	4	・	1
22	7	9	2	・	1	8	4	・	1
23	7	9	2	・	1	8	4	・	1
24	7	9	2	・	1	8	4	・	1
25	7	9	2	・	1	8	4	・	1
26	7	9	2	・	1	8	4	・	1
27	7	9	2	・	1	8	4	・	1
28	7	9	2	・	1	8	4	・	1
29	7	9	2	・	1	8	4	・	1
30	7	9	2	・	1	8	4	・	1
31	7	9	2	・	1	8	4	・	1
32	7	9	2	・	1	8	4	・	1
33	7	9	2	・	1	8	4	・	1
34	7	9	2	・	1	8	4	・	1
35	7	9	2	・	1	8	4	・	1
36	7	9	2	・	1	8	4	・	1
37	7	9	2	・	1	8	4	・	1
38	7	9	2	・	1	8	4	・	1
39	7	9	2	・	1	8	4	・	1
40	7	9	2	・	1	8	4	・	1
41	7	9	2	・	1	8	4	・	1
42	7	9	2	・	1	8	4	・	1
43	7	9	2	・	1	8	4	・	1
44	7	9	2	・	1	8	4	・	1
45	7	9	2	・	1	8	4	・	1
46	7	9	2	・	1	8	4	・	1
47	7	9	2	・	1	8	4	・	1
48	7	9	2	・	1	8	4	・	1
49	7	9	2	・	1	8	4	・	1
50	7	9	2	・	1	8	4	・	1

▲句との重複4編。

というのも、詩の場の変容に影響を相当程度及ぼしうる手入れとしてある「変更・追加・併存」という内容の場合について、右に掲げた詩稿1編あたりの手入れの数をみると、1編の詩稿に対する手入れが1か所程度にすぎない場合が、実に7割近くに及んでいることもまた対応するところであるからだ。結論を先にするならば、起稿後手入れは、詩想をより具現する詩の場へととのえてゆくために、いわば本文を保守する方向にある、とみられる。概念的に示せば、



というふうには、手入れの手法をさまざまにとりながらも、その本文は表現の定まりに向かおうとしている。詩想に見合う詩の場をととのえてゆくのである。

詩の場を変容させるかもしれない規模であろう「連」に対して、手入れがあったのは「たそがれ思量感くして」の場合だけである。それも、連の追加が指示されながら、そこに本文が加えられない、という一見すると未完状態のままにあって、詩の場に変容が現われてはいないという、問題をはらんだ詩稿だった（次節においてとりあげる）。それ以外の手入れは、それが「変更」であつてもおおむね詩の場をととのえてゆく方向にある。以下、具体的に推敲現場のいくつかをみてゆくこととする。

なお、青インク手入れについては、その「変更・追加・併存」9例のうち6例が「腐植土のぬかるみよりの照り返し」のもので、この詩稿が定稿では唯一青インクで起稿、手入れされているという特別な出自を踏まえてみれば例外的であり、総体としてはブルーブラックインクの場合と同様の傾向を示しているといつてよい。

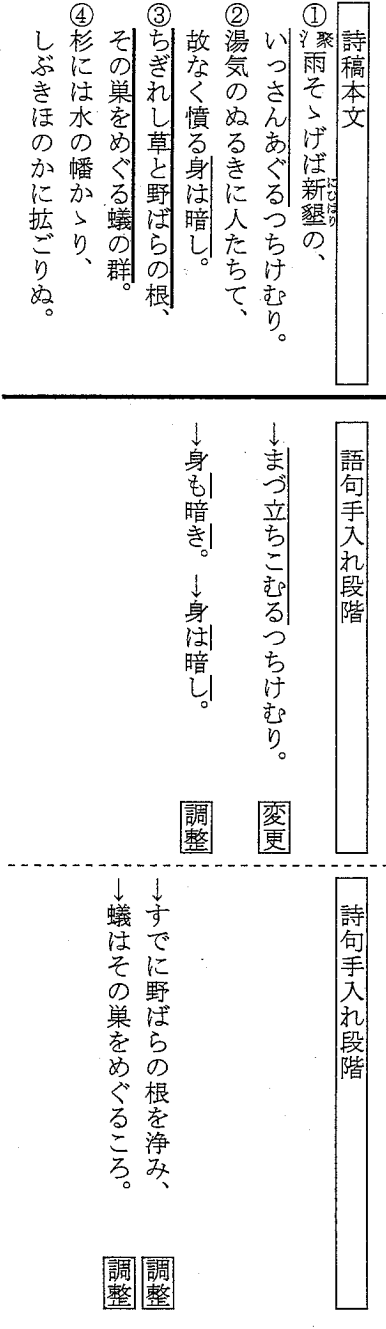
藍インク					
2	注意	再考	文法	接続	小計
3					
2					
1					

ところで、手入れとして実際に本文を動かしてはいないが、用紙余白に遺されている推敲にかかわるとみられるメモがある。その実態は、右に掲げたとおりであった。余白メモによるそれぞれの指示は、いずれも本文上では試行されていない。まさに「現在の推敲／推敲の現状」といった、その状況を如実に示している。このメモについても、最後にまとめて概観することとしたい。

2

その手入れが、規模としては「詩句」も「語句」も、内容としては「変更」も「調整」も、複合して現われている場合がある。なかでも、「霖雨」と「病技師」「二」が、推敲の現場としては、激しいといえよう。これをとりあげて、先に結論した、本文を保守する方向にあることを、具体的に検証する。

まず「霖雨」の場合。起稿後手入れを語句と詩句とに分別してその現場を掲げる（便宜上、行形式で示す）。



まず、①連で、「まつ立ちこむる」とした語句手入れによって、この開始を示したのに呼応して、③連の第一句は「ちぎれし草」を捨てて、「すでに…を淨み」という表現を補充し、霖雨によってすでに根っこまで洗われつくした野苳を提示しつつ、第二句では詩語の順を入れ換えたうえで（その結果主語に位置した「蟻の群」は「の群」が音数をととのえるために捨てられる）、「…ころ」という時間を補充し、霖雨の中心がもう去ったことを暗示するのである。おぼろだった時間の経過を鮮明にすることで、起承転結という構成の効

果も極まったといえるだろう。  
すると、転にあたる③連の、

ちぎれし草と野ばらの根、↓すでに野ばらの根を淨み、

とした変化に、注目しなければならぬ。開始形におけるこの連冒頭の「ちぎれし草」という詩句は、①連の「いっさんあぐるつちけむり」や②連「故なく憤る身は暗し」という詩句によって誘導されるイメージに連なるもので、これまで積みあげてきたものが散々になつたかのような否定的なひとつの状況を醸しだしていたといえよう。それが手入れによって、詩の場に時のながれが現われ、それがいまは「根を淨み」、むしろ清浄さをもたらしめていることに気づくという、それまでの否定的な状況を一変させる兆しが設定されたのである。この間、「身は暗し」を「身も暗き」とさらに強調する方向を模索しつつも初案に戻つた詩句手入れも、③連の転換を際立たせるための模索であつたとみることもできよう。

このことによつて、結びの④連がたどりついていた「しづきほのかに拵りぬ」という状況も、あらためてつかめてくるのではなからうか。たとえば「ほのかに拵りぬ」ゆく「しづき」とは、カーテンが周囲を閉ざすごとく不可視な状況をもたらすものなのか、それとも一帯をさららかにつつみこんでむしろ清爽なるものをもたらすものなのか、ということである。

④連だけをとってみれば、それは水滴の群れが躍動しつつも、静かにあたりを覆つてくるさまにとつてもよからう。だが、開始形では、③連までの否定的状況に加わるかたちで④連は位置づけられた展開なので、その水しづきによつて詩の舞台が不可視のなかに閉ざされてゆくようにも読める。しかし、③連が、否定的状況から、肯定的状況に向かう転の連としてきつちりと機能するかたちになつてくると、結連としての④連は、「故なく憤る身」も、ついには「霽雨」（自然）そのものによつて、その「暗」さから抜けだしてゆく、そのような結末として読むことも許されてくる。

推敲によつて、農作業が憤懣のままにただとどまるのではなく、労働のはてにふっと現われる一種の充実感、あるいは苦勞からの一瞬の解放感といったものもまた、自然とともに生きることによつて与えられるのだ、という農事の苦樂が率直にみつめられてくる。結に位置する④連に推敲の手が入っていないところからも、この詩の場を支えている詩想そのものに変質はなかつたとみるべきであろう。むしろ、その精細な具現のために、語句・詩句手入れが加えられ、詩の場がととのえられていったと考えられる。

それに対して、「病技師」「一」の場合は、詩の場にそれなりの変化がみられるものである。その場を支えていた詩想に、変質があつたことを感じさせるもので、その手入れは、引用の格助詞「と」に係助詞「ぞ」を連ねた強意の語法を、「余事アルヲ示ス」（言海、ちくま学芸文庫版）働きをもつた「など」に変えて婉曲化をはかることから始まっている。

定稿開始形は、①連で、「二重のマント蔽めしく、にせのステッキつきいでぬ」と、強面な人物を装うことによつて、②連では「飢饉

供養の「碑の群れを傍らに死生の境をじつとりと歩む病者の姿を際立たせる。それを手入れでは、人物の態勢がみせる強↓弱という落差の効果、それを詩人は棄てて、①連の人物造形を、「ステッキひけりにせものの、黒のステッキまたひけり」と、ステッキに身をあずけ引きずるように歩みゆく人物のさまを示して、②連の「蝕む胸をまぎらひて」あることの伏線を敷く。弱・弱の呼応である。要するに①連の手入れは、ものものしく強者のさました人物を、顔を隠すようにしてステッキをひきずってゆく弱者のさまへと造形しなおしてい

詩稿本文

①こよひの闇はあたたかし、

風のなかにて泣かんどぞ、

二重のマント厳めしく、

にせのステッキつきいでぬ。

②蝕む胸をまぎらひて、

こぼと鳴り行く水のはた、

飢饉供養の燈に照りて、

飢饉供養の巨石並めり。

語句手入れ段階

↓風のなかにて泣かんなど、

↓二重のマント面づつみ、

↓にせのステッキひきいでぬ。

↓くらき炭素の燈に照りて、

詩句手入れ段階

↓ステッキひけりにせものの、

↓黒のステッキまたひけり。

る、とみえる。その正体を暴露する「蝕む胸……」以下の②連との関係からいえば、①連は強者↓②連は弱者という落差の構造による効果が見られる。果が失われてしまうものである。

けれども、病者を病者として率直にとらえようとする態度は、この「病技師」の背後にある、累々たる肺病者の歴史とその風土を直視する、ということの現われといえるのかもしれない。「飢饉供養」の反復による詠嘆をひかえたのも、この地方の、この病に特に深くかわつている飢饉の風土という課題の深刻さを、浮き足だたぬように見定めてゆくものだったといえる。さらには、その身をあずけてきたステッキが、「にせもの」のであるというのは、その弱体をさらに脆くさせさせてしまっている。そのことは、「風のなかにて泣かん」としたわけが、その死病を負うたことだけを理由としたものでない、ということを示しているのではなからうか。

あらためて題名が気にかかってくる。「病技師」とは病を負うた技師の意であろうが、それは詩人宮沢賢治自身のいまの姿を髣髴とさせる。技師としてこれまでにその身をあずけ、なしてきたことが、結局「にせもの」であったことを、ステッキというものに託して示唆しているのではないか。東北砕石工場技師として最後に追いかけた土壌改良という理想を、羅須地人協会の活動がそうであったように、病によってまたも途絶させてしまった宮沢賢治自身の現在の現在が重ねられている、ともいえるのである。

そうならば、病者の視界に現われてくる「飢饉供養の」碑も、この地方の風土の象徴であるとともに、技師として立ち向かってきたと

ころのそれでもあったとみえる。虚勢の意匠を棄て、「にせもの」を引きずる人物が、飢饉供養の碑の群れの前にたたずむ場を、詩人は手入れによって現出させる。それはつまり、自己の半生を客観的に批判する過程も内蔵していた、と考えられてもよいかもしれない。そうとらえると、この詩想の変質とは、むしろ詩想の深化といふべきなのである。

さらに、「塔中秘事」の場合もみておこう。

ここでは②連に集中して、「天・窓・女・声」という骨格はそのままに、天上に向かう視線を確保する手入れに向かっている。それは、題名中の「塔中秘事」が一方的に呼びこんでしまうところを克服しようというふうである。その命名は、〈写稿〉段階にたどりついた本文を1句違えたものの(②連第四句)「りりとしてふるひもれくる」、ほぼ同文のかたちで定稿開始形が成立した、その段階で初めておこなわれたものである。

詩稿本文

塔中秘事

①雪ふかきまぐさのはたけ、

玉蜀黍畑漂雪は奔りて、

丘裾の脱穀塔を、

ほうぼうとひらめき被ふ。

②歎喜天そらやよぎりし、

なめらけき窓ガラスより、

ひそかなる女のわらひ、

何ごとかりりと漏れくる。

語句手入れ段階

↓なにごとか女のわらひ、

変更

詩句手入れ段階

↓そが青き天の窓より、

変更

↓栗鼠のごと「ふるひ漏れくる。↓ききとふるへる。

↓軋りふるへる。]

このとき、詩稿本文だけが詩の場を構築しているのではなく、やはり詩稿題名もまた「表現」として詩の場の構築に与るものであることに思いいたる。この題名によって詩の場には、たとえば「塔中」が誘導する閉鎖性、「秘事」に即応する「ひそかなる女のわらひ」の隠微さ、などが否応なく惹起されてくるだろう。

それに対して詩人は、塔中の窓を「青き天の窓」とすることで、塔中に閉ざされていた秘事を、「歎喜天」の飛翔する天上に向かつてひらくのである。そして「ひそかなる」を棄てて「なにごとか女のわらひ」(傍点は島田)としたうえで、それが「栗鼠のごと軋りふるへる」という声音を導き入れる。この「栗鼠のごと」とした比喩は、初期稿段階にすでに見えていた、その復活だった。そうした詩人の

執着には意味があつたはずである。そう考えるのは、たとえば、『春と修羅』で亡き妹のゆくえをいまさらに問う詩章「オホーツク挽歌」中の「噴火湾（ノクターン）」のなかに、

Funeral march があやしくいままたはじまり出す

（車室の軋りはかなしみの二疋の栗鼠）

（栗鼠お魚たべあんすのすか）

（二等室のガラスは霜のもやう）

もう明けがたに遠くない

崖の木や草も明らかに見え

車室の軋りもいつかかすれ

一ぴきのちいさなちいさな白い蛾が

天井のあかしのあたりを這つてゐる

（車室の軋りは天の楽音）

とあつて、栗鼠に妹を重ねる詩人が、葬送曲にも聞こえる車室の軋りを栗鼠の鳴き声と聴き、生前の姿を哀しく追想しながら、車窓外の光景に夜明けを認めたとき、軋りもいつかかすれて「天の楽音」に変じた、という詩人自身の体験と記憶があつた。

ここでも、栗鼠の軋りがいつか天の楽音に転ずる、その可能性をこの手入れは想起させるのである。岡澤敏男も説くように、詩人にとってこの栗鼠の軋りは「天の楽音」に通じ、「塔中」の「秘事」を浄化させるものだ、と思える。また、栗原敦が「現実的な描出をやや象徴的、天上的なものに移し」てゆくと指摘したように、あえて「塔中秘事」という閉鎖性の強い語をもつて命名された場が、実は天上世界にひらかれ、通じうるものへと整備されていったということである。

つまり、性愛を含めたエロスの昇華が図られ、信仰詩篇としての要素を濃くにじませてゆく手入れだったといえる。この場合は、「病技師」「一」同様、詩想の深化がもたらした手入れともみえるし、あるいは「霖雨」の場合と同じく、その詩想をさらに鮮明に具現しようとした詩の場のどのえの過程で、導かれてきた深まりであつたともみえるのである。

3

右に掲げた3例は、比較的に入手規模の大きいもので、詩の場に与えるその手入れの影響は小さくないと考えられてもよいだろう。



けれどももちろん、詩の場に変容をもたらすかもしれないのは、詩句レベルを主とした比較的規模の大きな、しかも手入れが複合する場合だけではない。語句レベルの手入れだけでも、相当な衝撃を詩の場に与える場合もみえている。たとえば、「葵花」・「崖下の床屋」・「軍事連鎖劇」の場合である。だがそれが、本文を保守する方向にある、ものであるのかどうか、なお検討をしてみたい。まず、「葵花」の場合からみよう（手入れ部分に傍線を付すが、詩の場に衝撃を与えたとみる部分は中太の傍線を付した）。

詩稿本文

① 酒精のかほり硝銀の、

肌膚灼くにほひしかもあれ、

大展覽の花むらは、

夏夜さやかに息づきぬ。

② そは牛飼ひつゝ商ひつゝ、

はた鉄うてるもろ人の、

さこそつちかひはぐくみし、

四百の花のラムプなり。

③ 声さやかなるをとめらは、

おのおのよきに票を投げ、

団弁護士もホップ噛む、

にがきわらひを頬になしき。

④ 卓をめぐりて會長が、

メダルを懸くる午前二時、

カクタスシヨウをおしなべて、

花はうつゝもあらざりき。

語句手入れ段階

↓ 夏夜あざらに息づきぬ。

変更

↓ そは牛飼ひの商ひの、

調整

調整

↓ 高木検事もホップ噛む、

変更

ここには、「変更」手入れと「調整」手入れが、それぞれ2か所ずつある。

そのなかで、詩の場に相当の変化を与えたと考えられるのは、人物を変更した手入れで、当初の「団弁護士」は、町の愛好家団体が主催したこのダリア品評会に招待された来賓か、あるいは審査員ということであろうか。花に対する邪な評価に異議をとなえて、その真価を訴える立場にあるとみれば、不当な力からこの会を護る人物のようにも考えられる。それが「高木検事」に替わるのである。検事とは、

「人民ノ罪ヲ裁判所へ訴へ出ヅル職」(言海)であり、権力ががわに立つものだった。すると、乙女たちがてんでに振る舞う投票行動に、「にがきわらひを頼にな」す人物が醸し出す情況は、少し異なつてこよう。人民のがわにいる者の微笑と、権力ががわにある者の冷笑と。そのようにも考えられてくる。

ところで、この品評会の決着は午前二時につくという異様な会合になつてゐる。そんな深夜にも及ぼうとする会場に登場してきた「をとめら」は、ただの者ではなからう。農民の姿がまったく現われぬこの舞台に、農村の闇を背負つて町に出てきたのが、この娘たちであつたのではないか。身売つてかろうじて生活を支えた農村を踏み台に、町びとは趣味に集うてゐる。そこに現われた「をとめら」に対して、「にがきわらひ」をなすにとどまるこの二人とは、その意味でこの時代の保守派・守旧派であり、男の態度としてはほとんど同列にある。それにもかかわらず、検事のほうに詩人がこだわつたのは、町びとまでも見おろす権力ががわにいる存在をこの場に組みこむことだつたと考えられよう。それは、ついには「うつつもあらざりき」として閉じられた「萎花」というこの詩の場に、この時代の社会構造を持ちこむことになる。「萎花」の詩想は強化されてみるとよいであらう。

そのとき、「萎花」には、ふたつのありさまが暗示的に映しだされてくる。ひとつは、この催しの主役たるダリアの花のうつろいに、マチビとの生活も実は脆弱なものをはらんでゐること。もうひとつは、品評会でいわばもてあそばされてゐるその花の結末に、農村からマチにながれてきた娘たちの悲痛な思いが重ねられてゐること。そうした場にあつて、国家権力ががわにいる「高木検事」は、傍観し冷笑してゐる。この時代の一端を、集約的に指し示して、この詩稿の社会詩篇としての性格をますます強くしてゐるのである。

もうひとつの「変更」の手入れは、①連の展覧されてゐるダリアの状況を、「さやか」から「あざら」に息づきぬ、とした点である。これは、④連の「花はうつつもあらざりき」という状況にはつきりと対照させる意図からきたものである。ダリア展の顛末、その明から暗に至る落差を鮮明にするもので、詩の場をととのえるものといえる。

「調整」の手入れは、「そは牛飼ひつ商ひつ、はた鉄うてるもろ人の」とある、継起・継続の助動詞「つ」による表現に推敲を加へてゐる。実はこのままでも、やや破格的な音調と「それは牛を飼つていたり商ひをしていたり、はたまた鉄を打つてゐるそのようなさまざまな人が」という意味とで、詩的表現としては充分な存在感があると思える。しかしそれを、準体言の「の」に換えてしまふのである。意味も「それは牛飼ひの人や商ひの人、はたまた鉄を打つてゐる人などさまざまな人が」と、説明的なことに落ちついてしまふ。ここでは、「そは牛飼ひの商ひの、はた鉄うてるもろ人の、さこそつちかひはぐくみし、四百の花のラムプなり。」という、たたみかけてくるように展開する「の」音によつて醸しだされる、音律の心地よさと安定感とに表現の充足を求めようとしたのであらう。

「崖下の床屋」の場合も、やはり人物に「変更」の手が入つてゐる。

まず「冪たる」を「冪たつ」と動詞化する手入れをして、凍りつくほど寒い冬の夜の状態を強調しつつ、そうしたなかやつと店に訪れてきた客の姿を、町政のナンバー2としてこれまでも町を牛耳つてきたであらう立場にある「町助役」から、「支店長」に変えるのである。ただ、「支店長」は、草稿段階の推敲も踏まえると、実はその最後にたどりついていた人物だつた。定稿開始形が、それを「町助役」

にいきなり替えて起稿していたのだった。それを、あらためて「支店長」を復活させたということになる。  
 この「支店長」は、全国規模の大企業とも、あるいは盛岡あたりに本店を置く銀行あるいは電力会社といった地方の有力な企業とも考  
 えられるが、いずれにしても、本店から派遣された、この地域を先導する近代的経営者であり、ある意味では異邦人という位置づけがで  
 きそうである。そのような人物を、なぜ復活させたのか。

詩稿本文

- ① あかりを外れし古かゞみ、  
客あるさまにみまもりて、  
唾の子鳴らす空缺。
- ② かゞみは映す崖のはな、  
ちさき祠に蔓垂れて、  
三月月凍る銀斜子。
- ③ 沍たる泥をほとほとと、  
かまちにけりて町助役、  
玻璃戸の冬を入り来る。
- ④ のれんをあげて理髪技士、  
白き衣をつくるひつ、  
弟子の缺をとりあぐる。

語句手入れ段階

- ↓沍たつ泥をほとほとと、
- ↓かまちにけりて支店長、

題名と登場人物の造形について、草稿段階を見とおしてみると、

下書	題名	主人	奉公人	客 (職業)
稿一	・	・ ↓親方 ↓アーティスト	唾 / ・ ↓唾の子	棟梁 ↓郡書記 ↓教師 ↓郡書記
稿二	床屋の弟子	アーティスト	唾の子 / 唾 ↓弟子	郡書記 ↓ とんび (慮)
稿三	崖下の床屋	アーティスト ↓ 理髪士 ↓ 理髪技士	唾の子 / 弟子	・ ↓支店長

という過程があつて、詩の舞台を指示する「床屋」が題名として採用される以前の下書稿一では、「理髪技士」とはまず「親方」なのであり、「弟子」はただ「唾／唾の子」と指し示されていた（唾という用語は、偏見による卑称語として批判すべきだが、そうした差別と偏見の横溢した時代を、宮沢賢治は表現者として結果的に無自覚に生きていた、ということか。あるいはあえて用いることで差別の存在

を提示しようとしたのか)。そこは、旧来の徒弟制度が息づく場だったのである。「親方」はやがて「アーティスト」へと戯画化ともれる呼称に代わるけれども、訪れてくる客は、町の職人や官吏、教員という土着の生活人たちだった。つまり、そこに現われる最終人物が結局「町助役」であれば、詩の場は、いわば土着性も露わな日常生活空間のままだったのである。

それが、下書稿二では、「床屋の弟子」と命名される。そのように「唾の子」にもうひとつの呼び名を与えながら、

凍そめし泥にふみなづみ／手桶をさげし唾の子の／影こそ過ぎれさびかゞみ

と、「アーティスト」の「弟子」といいながらも、新たに、丁稚としての奉公の実態を哀感をもって写しとる連を加えてゆく。

さらには、用紙も改め題名も「崖下の床屋」とした下書稿三において、その「アーティスト」は、近代風で堅実な技術者の呼称にもみえる「理髪技士」と言い換えられるとともに、その客として「支店長」が登場するのである。そして奉公の実態を如実に写した詩句は、これを削除してしまう。そのうえで、定稿は、客の来ない店内で、「唾の子」がひとり、徒弟とした親方から教えを受けるでもなく、古鏡に映してみてもは空鉢を鳴らし、鏡を真似ている光景を冒頭に置いて、その鉢を、耳さとく客の靴音を聞いて奥の部屋から慌てて店に出てきた「理髪技士」に取りあげられるという結末をもって閉じる、という展開に定まる。このとき、旧来の客すじである「町助役」がまず現われたけれども、そこにはやはり、近代化を背負う新来の「支店長」が現われるべきだという、手入れがおこなわれるのである。いずれにしても、この「唾の子」のけなげさは踏みにじられている。

障害児・者に対する人権認識が社会的に未熟であった当時、理髪業に丁稚奉公するのは、ろうの障害を負った子どもにとつては、生きてゆくため手に職をつけるのに、そう進むしかない道のひとつだった。つまり、「理髪技士」とその「弟子」と、一見新しい人間関係が成立しているかのように装いながらも、その実態は、親方と丁稚という旧態依然の、あるいは旧弊な内実をもっていたのである。詩人は、そうした現実をみつめている。

要するに、舞台は、「支店長—理髪技士—弟子」と人物たちをモダンな呼称に装いながら、その内部には「親方—丁稚」という非近代的な要素を蔵していた、小さな祠さえある「崖下の」昔ながらの「床屋」だった。「弟子」と言いそえられてはいるが、この「唾の子」の置かれた状況にはなんの変わりもない。「支店長」という選択は、その落差を鮮明にするものと考えられるのである。詩の場は、近代を標榜するこの時代にあつても、とりのこされつづけている非近代的な世界をみつめようとしている詩想に支えられているのではないか。推敲はその詩想をより深く現出させるものであるといえる。

そうした時代のもうひとつの動きを、大胆かつ巧妙に言いつつあてようとしたのが、手入れの結果「軍事連鎖劇」と命名されることとなった詩稿ではなかったか（3章2節にも言及している）。

再編段階に起稿したこの詩稿は「連鎖劇」と命名されて、定稿化に際してもそれは継承された。定稿は、役者が扮しているのであらう

「上等兵」が登場し、その演技に観客の「角のせんたく屋」が感を極めるといふ場面をしつらえている。そして手入れて、演劇形態である「連鎖劇」に「軍事」を冠して「軍事連鎖劇」とし、連鎖劇の内容を戦争ものと明らかにしたのである。けれども、新たな題名とした「軍事連鎖劇」によって、詩の舞台をはっきりと示すことにとどまらず、軍事連鎖という、この国が実際これまでにとってきた戦争体験もまた、暗示されてくるはずだ。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、そして満州事変。定稿化をすすめている三三（昭和八）年の夏は、中国本土への派兵を増強し、日中戦争のただなかに向かおうとしていた時期である。この題名手入れの意図するところは、近代日本の軍国化がたどってきたところを、詩の場の背景として誘導しつつ、この場に重ねられるべきいまのありようをせめて問いかけることだったと思えるのである。

詩稿本文

連鎖劇

①キネオラマ、

寒天光のそがゆゑに、

びたと煙草をなげうちし、

上等兵の袖の上、

また背景の紺の上を、

雲どしどしとびにけり。

②そのとき角のせんたくや、

まったくもって涙をながし、

やがてほそぼそなみだかわき、

すがめひからせ、

トンビのえりを直したりけり。

語句手入れ段階

↓軍事連鎖劇

追加

↓また背景の暁あけぞらを、

変更

日露戦争後に流行した「連鎖劇」は、映画の発達・発展もあって、すでに衰退の一途をたどっていた。けれども、「軍事連鎖劇」という名称は、軍国化と思想統制を押しすすめていたこの時代、日露戦争や第一次世界大戦の記憶を単に呼びさすだけでなく、それはかつての勝利の記憶を呼びもどすことにもつながる。つまり、舞台上の「上等兵」と観客席の「せんたくや」の、それぞれの所作は、戦争という事態に際した感嘆とも悲嘆とも、いかようにも受けとることができるものとして、しつらえてある。詩人の問いかけは、その是非を曖昧なものにしていよう。「軍事連鎖劇」という命名の大胆さまた巧妙さとは、そのことである。

そうした時代への配慮の一端は、「併存」手入れにもうかがえそうである。たとえば、「記念写真」の場合で、

・学生壇を並び立ち、

教授助教授みな座して、

つめたき風の聖餐を、

かしこみ「待つ」呼ぶ」と見えにけり。

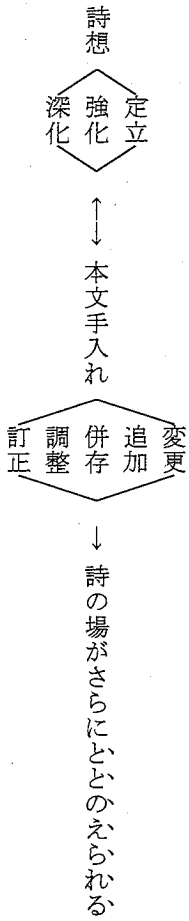
(「記念写真」)

という手入れがみえる。「つめたき風の聖餐」とある「聖餐」は、キリスト最後の聖なる晩餐、すなわちキリストからその血肉を信徒が受ける象徴的場面に、イメージを得たものだろうが、とりもなおさずそれは、現人神である天皇とその赤子たる人民の関係をなぞらえてある、と読みうる余地があるのではないか。この記念写真は、そうした行事の一環だったとも考えられるのである。すると、そこにさらに、

かしこみ待つと見えにけり。 ↓ かしこみ呼ぶと見えにけり。

という推敲がもしも実現すれば、積極的にそれを呼びこもうという人民の感応ぶりが露わになって、この国の企てがまさにあからさまに見えてくる。国策にそった讚美の詩と読まれることも、逆説的に反動を秘めた詩として読みこまれることも、詩人には気がかりなことであつたらう。国家による統制がさまざまにすすめられていたこの時代にあつて、社会的問題をことさらに論うことに対して、決断がつかずにいた、それが「併存」というかたちをとつたと考えられてもよい。

以上、みてきたとおり、いずれの詩の場も結果的に、別物に改変する方向にはなく、その枠組みも維持しつつ進展または深展して大きく変容することがない。詩想の強化や深化にかかわるありようも含めて、起稿後の手入れが、本文を保守する方向にある、ということの実態である。たとえば、次のような概念図でもって、その過程を示しうるであろうか。



他の起稿後手入れについても、資料篇Ⅲに示しているように、おおむね右の過程に位置づけられる。

4

最後に、余白に書きつけてある推敲にかかわるメモについて、みておきたい。

その内容は次のとおりであるが、本文を変化させるところまではいっていない段階なのであって、詩の場は不変である（▲として示したのはブルーブラックインクによるもの、△は青インクによるもの）。

まず「注意」と「再考」の指示メモが同居している詩稿を引く。

①青き草山雑木山、

はた松森と岩の鐘、

ありともわかぬ「皴↓巖」ごとに、

白雲よどみかゞやきぬ。

▲欄外「積？」（積はセキ、ひだの意。島田注）

②一石一字をろがみて、

そのかみひそにうづめけん、

寿量の品は神さびて、

みねにそのをに鎮まりぬ。

▲欄外「ひそに重出」

▲欄外「てーて」

（「国土」）

「青き屢出」という注意は、この詩集全体に目配りしている詩人のありようがまざまざと浮かんでくるものである。青にかかわる用語は、『文語詩稿』定稿群に40例以上も見いだせるのである。だからこそ、詩人自身、これを軽々に使ってはならぬという縛りをかけたものとみえる。

また、「ひそに重出」という注意も、他の詩稿を意識したものといえるが、実はこの「国土」の前に位置する「ひかりものすとうなるこが」の2句めに、「ひそにすがりてゆびさせる」とあり、これを指して「重出」といつているのではないか。「ひかりものすとうなるこが」は、〈定稿・百編〉が分集されて以後、それも「国土」を『一百篇』を構成する基本稿として組みこんで再編集にかかっている段階に、その補充稿として定稿化されたと思定されるものである。

とすれば、「国土」のメモはふたつの示唆をわれわれに与える。ひとつは、そのブルーブラックインクによるメモが、『一百篇』に収容されたのちに書きつけられたものと推定されて、メモにも、起稿後手入れ同様、

ブルーブラックインク↓青インク↓ブルーブラックインク

という過程が考えられること。いまひとつは、「ひかりものすとうなる」が「国土」という順序が前提となってくるので、少なくともその排列はまさしく詩人自身の手によるものであることを確認できて、『「百篇」の現状の詩稿排列も詩人自身の手によるものである可能性が、そこには見いだせることである。

さて、表現の注意にとどまるメモに対して、表現の再考を指示しているのが、「積？」と「てーて」である。前者は、「皴↓巖」とした本文の手入れ結果に、「積」(セキ)ひだ、衣服の折りこみ、たゞみ作つたしわ。修訂増補詳解漢和大字典による)の字を提案している。「巖積」の熟語があるようにほほ同意であり、決着はつきにくいと思える。「てーて」の場合は、その文構成が「一石二字をろがみて」、「そのかみひそにうづめけん寿量の品は神さびて」とたたみかけてゆくもので、そこに冗長さを意識したのかもしれない。ただ、その句読点を用いた表記法によって、冗漫な調子は避けられているとみえる。「てーて」の構成をもっといかす工夫すること、それを課題としたのかもしれない。

再考をうながしているものには、他に、

・②「わが命なほ今朝↓みぬち火はなほ」燃えて、

しんしんと堂はうもるゝ。

▲②上「？」

(「涅槃堂」)

・③「ちぎれし草と野ばらの根、↓すでに野ばらの根を淨み、」▲③上「？」

「その巢をめぐる蟻の群。↓蟻はその巢をめぐるころ。」

(「聚雨」)

・売り酒のみて熊之進、

赤眼に店をばあくるなり。

△欄外「？」

(「村道」)

・艸火のなかにまじらひて、

蹄のたぐひけぶるらし。

▲欄外「けぶる？」

(「電気工夫」)

・アムステンジュンいろ紅き、

ほのかに映えて熟るるらし。

▲欄外「熟る？」

(「あかつき眠るみどり」を)

・碧空の反射のなかにして、

うつつにめぐる鑿ぐるま。

△欄外「うつつに？」

(「歯科医院」)

などがある。「涅槃堂」・「聚雨」・「村道」の「？」は、その連あるいは句に対する表現上の物足りなさを、「電気工夫」・「あかつき眠るみどり」を「歯科医院」では、具体的な語を指示して検討課題とすることを、それぞれ示しているように思える。いずれも、代案もまだ



提示しうる段階でなく、長考が必至であろう。  
文法上の課題をとらえたものが、次の2か所である。

・(あな虹立てり降るべしや)

(さなりかしこはしぐるらし)

・がらすぞうるむ一瓶の、

酒の黄なるをわかちつゝ、

▲欄外「終止連体らし」・文法  
(「記念写真」)

▲欄外「…ぞ…体」・文法

(「巡業隊」)

「記念写真」の指摘は、ラ行変格活用の語には連体形に付く「らし」に関する確認で、「しぐる」は下二段活用であり、この場合の文法上の接続は正しい。ラ行の語尾変化をラ変活用と混同して、「しぐるらし」という表現をふつと想い起こしていたのであつたらうか。「巡業隊」も、文法的な確認とみえる。強調の係り結びをそこで結ばず、連体修飾節として体言(名詞)に係ってゆく、というその構造を示していると読める。「うるむ」さまを強調して冠した「一瓶の、黄なる酒」という描写には、詠嘆性が濃くにじんている。メモの指摘がそうした効果にかかわる詩句の構造分析であるとすれば、この句について再考しようとしていたのかもしれない。だが、この定稿句は、すでに(写稿)上で、

か「そけく澱む↓すかにうるむ」一びんの↓・

・↓がらすの徳利うるみたる↓うるめるがらす一びんの↓がらす「の徳利うるみたる↓ぞうる(む↓め)」一びんの

という、一進一退の工夫を重ねる推敲の結果なのである。さらなる再考を経て定案に至るのは、そう簡単なことではないと思える。さらに、2か所の接続に関する検討を指示したものをみよう。

・写楽が雲母を揉み削げ、

芭蕉の像にけぶりしつ、

春はちかしとしかすがに、

雪の雲こそかくろなれ。

・みちをながるゝ雪代に

錆びしナイフをとりいでつ、

△欄外「つ?」・接続

(「晝眠」)

△欄外「つ?」・接続

しばし閲してまもりびと、  
さびしく水をはねこゆる。

(「癡坑」)

いずれも、助動詞「つ」の終止形を連用形に変えて、接続助詞化する提案で、次句へ穏やかにつながってゆく手入れであろうと思える。しかし、詩人はそれに「？」を与えて要検討としたのである。たぶん終止形「つ」によつて詩脈に一瞬の断絶をつくることで生ずる、次句との緊張関係、おそらくその効果をなかなか手放せないからではないのか。定稿用紙上では、これも決着をつけることができず、課題としたのである。

このように、メモには、「表現」に対する詩人の執拗な推敲態度が現われている。ただし、メモの指摘にしたがって、実際に定稿本文に手が入っている事例はない。メモの多くは、今後の検討課題として指示されているとみると、これも「現在の推敲／現状の推敲」を如実に示している現場だ、といえるのだろう。けれども、メモの指示内容は、表現上の調整的なことがほとんどである。つまり、推敲メモは、その詩稿の「表現」について未完了を刻印するものではあるが、定稿における本文を保守する方向のうえに現われているもの、とやはり理解されるものである。

(注)

1 資料篇Ⅱにも示しているが、定稿には2種あり、ひとつは冒頭句のみの断片としてある。つまり、この詩稿には、次のような過程があるか。

写

「下書稿三(鉛↓鉛) ↓定稿(青↓青)

下書稿二(鉛↓藍) ↓定稿断片(藍)

下書稿三は「下書稿二よりも定稿に近い」(『新校本全集』第七巻校異)ものだが、〈写〉印はない。つまり下書稿三は、〈写稿〉後のもので、しかも定稿段階に位置することになる。すると、下書稿二の〈写〉印は「定稿に写すべきもの」の意であるとみうる場合か。また、定稿が青インクによる起稿であるのは、青インクによる〈写稿〉の追加及び定稿への青インク手入れ段階に重なるものと考えられることもできる。そう仮定すれば、この詩稿の定稿成立は、鉛筆・赤インク〈写稿〉のなかでは、もっとも遅いものということになる。

2 三谷弘美「病技師(一)」「(『宮沢賢治文語詩の森』所収、柏プラーノ一九九九)では、「など」について、「ある物事を否定的・あるいはつまらぬものとみなして取り立てる意の副助詞」と注している。

3 「にせ」という語を、詩人は次のような使い方もしていた。

じぶんだけで面白いことをしつつして

人生が砂つ原だなんていふにせ教師も

『詩ノート』一〇五六)

「叩きつけて」「追ひ払」う相手のひとつである。この草稿に日付はないが、『詩ノート』の題材は「一九二七」年が主で、それは宮沢賢治自身が花巻農学校を辞職した翌年（昭和二年）である。「にせ教師」には彼の反省も投影されていよう。

4 「塔中秘事」——現場からの考察」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇一・八）を参照。

5 「文語詩稿」試論」〔宮沢賢治透明な軌道の上から〕所収、新宿書房一九九二）。

6 信時哲郎「宮澤賢治「文語詩稿五十篇」評釈八」〔甲南女子大学紀要〕42号文学・文化編二〇〇六・三）が「花と女性をアレゴリカルに見る意識」のもと「男たちの視線にさらされ、品定めされた挙げ句、萎れていくしかない芸娼妓たちであった可能性」に言及、さらに平山英子「文語詩「萎花」論——漢詩の手法の意味」〔論攷宮沢賢治〕8号二〇〇七・一二）は「三連の【転】だけ「花」の代わりに「をとめら」と「高木検事」が登場する」ところに「花」が「をとめら」を暗に示す象徴として使われていると指摘する。

7 定稿開始形までに次のように人物が入れかわり立ちかわりしていたのである。

○棟梁五吉↓郡書記菊田↓郡書記照井↓郡書記村井↓教師猫村↓郡書記村井（下書稿一）

○郡書記村井↓湯上がりとんび万清（下書稿二）

○↓支店長（下書稿三）

草稿では、床屋に出入りする職人や吏員、教師といったこの町の庶人を逡巡したあげく、たどりついたのが、これまでに現われてきた人物群とは次元を異にした「支店長」という存在だったが、それを、定稿開始形はさらに変更して、これまでの「郡書記」の系譜にかかわる「町助役」を登場させたのである。

8 ろう者は旧民法では準禁治産者とされていた。その就業も、洋裁・木工・理容などの技能職にかぎられがちであった。明治三〇年代に私立学校による盲・聾啞教育の普及が進展し、一九二三（大正一二）年「盲学校及聾啞学校令」が制定されて以後、公立化が全国的に実現された。ここでは、普通科教育とともにすすめられた職業教育として、裁縫科・工芸科・理髪科などが設置される傾向がみえている。岩手県における専門教育機関としては、一一（明治四四）年八月に設立された私立岩手盲啞学校があった。それが、二三（大正一二）年の「盲学校及聾啞学校令」公布をうけて、二五（大正一四）年に県立に移管されている。その中等部に開設されたのはやはり裁縫科・工芸科であり、四四（昭和一九）年になって理容科が設置されることになるという（『岩手の障害児教育史』岩手県障害児教育史研究会一九九六）。とすれば、「崖下の床屋」の弟子は、理容の基礎教育を受けることなく、理髪店にいきなりに弟子入りしているということであろう。

9 たとえば宮沢賢治が盛岡高農に学んでいた二六（大正一五）年一月に、裕仁の立太子礼挙行があった。

2節 空白の連指定の意味

— 定稿「たそがれ思量惑くして」 試論

1

一九三二（昭和七）年以降、再編に向かって動きだし、その草稿群のなかから鉛筆・赤インクによる（写稿）をウル定稿としておよそ100編を撰び出していった。そして、三三（昭和八）年六月あたりから、その定稿化がはじまり、仮に（定稿・百編）と呼ぶ文語詩集の形成に向かう、この原詩集を構成する定稿群については、前節において、定稿起稿後の手入れは、多く本文を保守して表現の充足をはかる傾向にあつて、詩の場をととのえてゆく方向にある、というべき実態を指摘してきた。そのなかで、問題をはらむ1編が、無題の定稿「たそがれ思量惑くして」である。

その最終本文は次のとおり。

① たそがれ思量惑くして、  
堂は別時の供養とて、  
銀屏流沙とも見ゆるころ、  
盤証木鼓しめやかなり。

② 頬青き僧ら清らなるテノールなし、  
バスなすことはさながらに、  
老いし請僧時々に、  
風葱嶺に鳴るがごとし。

③  
④ 時しもあれや松の雪、  
室ぬちとみに明るくて、  
をちこちどどと落ちたれば、  
品は四請を了へにけり。

しかし、これは、まるで未完の定稿本文ではないのか。

命名が保留されたままの定稿は、まだ他にもある。だが、起稿後の手入れによって連構成の変更を指示しながら、新たに設けた「③」連に本文詩句がまったく与えられていないのである。（定稿・百編）が、八月には『文語詩稿五十篇』・『文語詩稿一百篇』というふたつの文語詩集に増補・分立されてゆく、その過程で、この手入れがどの段階におこなわれたのか、特定はできない。（定稿・百編）の形成段階か、この詩稿も収容してゆく『五十篇』の分離・独立の編集段階か、または『一百篇』の再構築も果たした最終段階か。ただ、い

れにせよ、未完にもみえる手入れがあつたとしても、それは詩人にとって、必ずしも不用意なことではなかつたらしい。『五十篇』の定稿を挟んだ白い和紙表紙に、

文語詩稿五十篇／本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども／も現在は現在の推敲を以て定稿とす。／昭和八年八月十五日

という書きつけがあつたからである。すでに見てきたように、本文詩句に未着手のままに推敲意図を示すようなメモを余白に遺すといったことも少なからずあつたわけだが、ここでは本文上に連の追加を指示したまま、そっくり本文を空白にして、「表現未だ足らざれども」、これを現在の定稿として提出したのだつた。こうした事態を、

この「五十篇」については当面新たな推敲を重ねる予定を持たなかつた。というのも、ひきつづいて「一百篇」の推敲、清書にうち込んでいったから……

として、そのときの詩人の情況のなかに吸収させてみることもできよう。『一百篇』の編集作業を終えた一月後に、彼は亡くなつてしまふのであり、『五十篇』を分離・独立させる作業に入つていた頃からたぶん、みずからの病質をよく承知していた詩人には、時間との闘いがあつた、と思えるからである。

ただし、「霖雨」(↓『五十篇』へ)や「塔中秘事」(↓『一百篇』へ)など、1連分そっくり手を入れる事態もあつたし、「病技師」「二」(↓『一百篇』へ)では、手入れによつて相当の「変化」をもたらしている、という事態もあつた。ある意味では「新たな推敲」に、詩人は時間を割いているのである。けれども、それ以上に見過ごせないのが、宣言の冒頭に「本稿集むる所、想は定りて」とあることだ。それは、この空白の連を抱えた定稿についてもまた、その詩想はもう定まつている、という詩人の認識があつたとも考えられることである。たとえば、この「たそがれ思量感くして」の開始形、その起稿時の本文は、

① たそがれ思量感くして、  
銀屏流沙とも見ゆるころ、

堂は別時の供養とて、  
盤証木鼓しめやかなり。

② 頬青き僧ら清らなるテノールなし、  
寄寓の老僧時々に、

バスなすことはさながらに、  
風葱嶺に鳴るがごとし。

③ 時しもあれや松の雪、  
をちこちどと落ちたれば、

室ぬちとみに明るくて、  
品は四請を了へしなり。

というものであつた。この③連をそのまま新④連に置いて、空白の新③連を加えた最終形に比べても、眼にみえる本文内容はほとんど変

わからない。つまり、その枠組みに変化はないのである。新③連もそのうちにおいてとらえるべきではないのか。とすれば、あるいは、この欠文はもうこのまま（本文）そのものであった、というふうにも考えられる。完全なる欠文、欠文を欠文のままに認めよう、という「現在の推敲」を許容してゆく詩想が、この定稿段階で芽生えそして定まっていた。そうした過程が秘められているのではないか。

しばらく、その生成現場を探索してみよう。

定稿の開始形は、4句／3連の構成で、行あけに破格もなく配置され、1か所書きながらの手入れをして清書を終えている。それが、未完となったのは、清書後で、「同じインク」（『新校本全集』第七巻校異）による手入れ段階である。手入れ現場を再現してみれば、

③…、品は四請を了へし本にけり。

←

老いし請僧

②…、審黨の老備時々、

←

③↑・

④↑③「時しもあれや松の雪、…」

【起稿時（書きながら）】

【起稿後】

という具合だ。元③連へ書きながらの語句変更の手入れ間もなく、成立した開始形の②連詩句の変更手入れがあった。この手入れには、二重棒線による削除が共通している。それから、新③連の指定、元③連の新④連への変更があった、と推定できるものである。新たな「③」は、新たな「④」の直前行の冒頭あたりに位置している。それは、「第三連を加筆の意図があったのだろう」（校異）とみて、しかるべきところだといえる。

ただこうした一連の動きは、

品は四請を了へし本にけり。

と、「了へしな（り）」と書きかけたのを、「了へにけり」ともってきた、書きながらの手入れから始まった、と私はみる。そこには、誤

記しかけたものをただ正すというのではなく、この詩稿における結句表現に対する「ここは「く」にけり」とするほうがよい、という詩人の再認識があった、とみてはならないか。助動詞の変更にすぎない、といえはいえようが、

「・し（過去の助動詞）・なり（説明・断定の助動詞）」

了へ上 ←

「・に（完了の助動詞）・けり（気づきの助動詞）」

という推敲にうかがえるのは、「寿量品は四請が終わったのである」という解説から、「寿量品は四請がいま終わったのだな」という詠嘆をも含んだ発見へ、その自覚を変更したといえるからである。

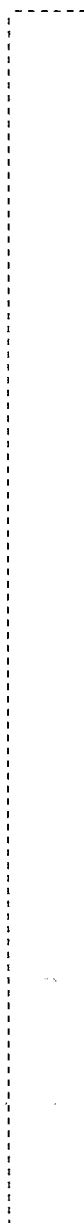
では、いったいなにを自覚し直したというのか。寿量品の四請にかかわって、なにに気づき、新たに③連を追加しながら空白のままに置く、ということと、どうつながってゆくのだろうか。

その追究に向かうまえに、定稿手入れ形の現状をみておく必要がある。口語訳を試みれば、

①薄闇の座禅も思量の昏惑ばかりで、銀屏風がタクラマカンの流沙のようにも見えてくる頃、本堂では特別の法要というので、鉦と木魚とがしめやかに鳴りはじめるのだ。

②剃りあと青い頬の若い僧たちが清澄なるテノールで読経をし、年老いた招請僧が折々、バスで読経を入れるのはまるで、風がパミール高原を響きわたるかのようである。

③



④まさに心奪われていたその時松の枝に積む雪が、ここかしこどどと落ちたので、室内が急に明るくなって、気づけば寿量品は四請のところをいま読誦し了えたのだな。

ということになるだろうか。

これにしたがって、①・②・④を結んだ当初の3連構成としての内容をとってみると、むしろ無難に序破急の展開をみせている、といつてよい。思量に惑うとき、本堂の供養に出合う①連から、②連で、寿量品の読誦が始まり、聴き入るほどに遙かな連想さえ抱いて、聴聞への態勢に入ったところへ、④連の音と光とによって、「四請」を終えたことにはっと気づく。

さほどの欠落もなく、②・④の連絡に不自然さもない、といえるのだけれども、詩人は、なおその間に、③連を設けねばならぬ、という。そこに割りこんで、しかも空白のままに置かれたその存在は、その意図の必然性も分かりにくく、少し異様にもみえるのである。

下書稿二	「書院」	既使用22系用紙	三三年春以降か
下書稿三	「書院」	同ウラ「写」付与	三三年前後か
定稿	「・」	定稿用紙	三三年六月以降か

もしかすると、下書稿にあった題材で、定稿化に際して、とり残した、あるいは隠されてしまったものがあるのかもしれない。『新校本全集』校異は、この詩稿の形成過程を、右に示したように整理している（形成時期は、島田による推定）。またさらに、『文語詩篇ノート』（1916年）の、

一月／報恩寺／◎寒行に出でんとして。／銀のふすま、◎晝の一燈。◎警策／◎接心居士、

という記述の存在も付記している。「銀のふすま」とあるあたりにこの詩稿との親近性をみるが、一六（大正五）年の記述にいう出来事に基づくかという点、「寒行に出でんとして」「晝の一燈」などある状況から、そう考えるのは少し難しいようだ。もちろん、詩稿の始発に「報恩寺」を指定するともみえる題目をいただく手帳稿があるのだから、宮沢賢治が積んだ報恩寺体験のひとつが下敷きとしてあった、ということではあろう。

3

まず、下書稿一（手帳稿）を読む。

三一年（昭和六）秋以降の闘病日記ともいえる『雨ニモマケズ手帳』（129・130頁）に、それは記されていた。棒線で略記された部分もあれば、手入れも相当に著しく、小倉豊文は「甚だしい未定稿であることは間違いない」とみている。見方を変えれば、詩人がそのときの体験に執着もし重視もしていた、ということでもある。

本文は、3段階に展開する。如来寿命品第十六の読経から始まり（第1段）、聴き手がその読誦に感激して聴き入ってくると（第2段）、やがて、

み経はも三請に入る

（第3段）

というものだ。要するに、読経に対する「われ」のありようが、書きとめられている。本文の展開と読経の進行とを併せて、次に示して



みよう（進行の白抜きは本文にみえている段階、囲みのみは推定、以下同）。

しめやかに木魚とらるき

衆（5字分空白）いま誦し出づる

寿量品第十六や

清らなる——きて

第1段

三誠 ←

さらばいざ「えりをととのへ

↓座を解きて跪し」

「われもまたこゝに誦しなん

↓双手しておろがみ聴かん」

わが不会と会「はさもあれや

↓とのかなたに」

み仏「は↓の」とはにゐますを

どと落ちし——

第2段

第3段

三請 ←

木魚いまやゝ急にして

み経はも三請に入る

第1段で寿量品の誦経がはじまる。誦誦は、

その時、仏は諸の菩薩及び一切の大衆に告げたまう「諸の善男子よ。汝等は、当に如来の誠諦まことの語ことばを信解すべし」と。また大衆に告げたまう「汝等よ、当に如来の誠諦まことの語ことばを信解すべし」と。又復また諸の大衆に告げたまう「汝等よ、当に如来の誠諦まことの語ことばを信解すべし」と。

とあつて、仏の「三誠」からいきなり入る。これに聴き入るや、

さらばいざ「えりをととのへ↓座を解きて跪し」／「われもまたこゝに誦しなん↓双手しておろがみ聴かん」

と、第2段でまず感激的な反応しているのも、だからなのだ。三度も繰り返されるその真言に対して、

わが不会と会「はさもあれや↓とのかなたに」／み仏「は↓の」とはにゐますを

という「賢治の敬虔な姿」（小倉豊文）がそこにある。そして第3段で、「どと落ちし」たぶん雪の音とともに、しだいに木魚の叩々コウコウと急なるをとらえて、読経とそれに聴き入る者の信仰心とが、昂揚するさまを暗示して、

この時、菩薩の大衆は、弥勒を首となして、合掌して仏に白して言わく「世尊よ、唯、願わくはこれを説きたまえ。われ等は当に仏の語を信受したてまつるべし」と。かくの如く、三たび白し已りて…

とある「三請」に、読誦がもう入ったことを報告する。参考までに注記すると、「三誠」の経文は漢訳で59字ほど（岩波文庫により、句点は含まない）にすぎない。ゆつたりした読誦であったろうが、手帳稿の場にながれているのは、寿量品のまさに冒頭のみ。しかし、仏自身のことばから入る、感動的な幕開けの場をとらえたものだった。

宮沢賢治は、一四（大正三）年に島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』と出会って（『新校本全集』第十六卷年譜篇）、以来、厚く法華経を受持しつづけていた。盛岡高農時代によく参禅した報恩寺で、たまたま法華経如来寿量品第十六の読誦の声にめぐりあった、ある冬の日の体験を、この手帳稿は印象深く想い起こしているのである。

4

たぶん、三二年に入ってから、《文語詩稿》の再編に着手した詩人は、この手帳稿を題材に、《文語詩稿》の初期稿である「くもにつらなるでこぼこがらす」を既に書きつけていた詩稿用紙を流用して起稿、再編稿の1編に加えようとする。その詩稿用紙開始稿を、新校本全集校異は、「くもにつらなるでこぼこがらす」の余白に記された2連構成の本文を、下書稿二に位置つけている。

この草稿では、手帳稿で「三請」とあったのが、

品すでに四請を了へて

(第2連)

に変更されている。「四請」とは、「三請」につづけて、

また言わく「唯、願わくはこれを説きたまえ。われ等は当に仏の語を信受したてまつるべし」と。

と四度めの請願をなす、そのことをいう。ただこの詩の場にもまた、寿量品を読経する声がながれつつづけているのである。その進行状況も併せて、次に掲げる。

書院

きよらなるテノールなすは

頬青き雲水ならん

巨いなる絃器のごとく

となふるは主座の老僧

こんこんと雪のしきりて

銀障のたそがるゝころ

品すでに四請を了へて

木鼓の音いましきりなり

手帳稿が4行／3連といえる規模だったけれども、これは4行／2連と圧縮されたかたちだ。そこには、手帳稿との大きな違いが、4点生じている。

一つが、手帳稿の「報恩字訂正」とあつた場所の指定が、「書院」と一般化されたことで、それは、報恩寺体験という自伝性の曖昧化であり、いわば、詩の場の相対化あるいは普遍化をはかることだった、とも考えられる。「われ」の消失にも、それは現われていよう。

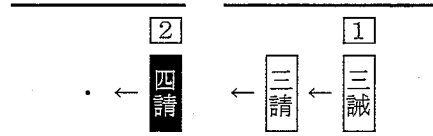
二つに、手帳稿で「清らなる——きて」また「どと落ちし——」などと略してあつたものが、複数の僧によって重唱的に読誦が展開されている状態として、また、降りしきる雪のために室内がうす暗くなっている状況として、詳細化していることがある。

そして、三つめは、手帳稿第2段の寿量品を信受しようとする「われ」のありさまがそっくり落ちていくことで、そこに手帳稿の主題が詰めこまれていた、といつてよいだろうのに、それを表舞台から外したのは、詩の場の主体を「われ」に限定することを避けて、詩想の変容にも向かおうという、詩人の意図か、とみることもできる。

四つめとして、読経の段階がいきなり「四請を了へ」る、という変更がある。それは、前提として、

三誠↓三請↓四請

と、詩の場の内部において読誦が粛々と進行してきたことも示唆しているはずだ。この変質から、定稿化に際して、「われ」の消失と「三誠三請」の消失が、隠されてしまった題材であるかもしれない、ということが浮上してくるのである。



このゆくえをさらに見定めてゆこう。

5

「われ」と「三誠三請」とを喪った下書稿二は、喪ったまま、下書稿三として2連構成から4連構成へと拡充されてゆくことになる。ただし、これもまた「書院」と命名され、

品すでに四請を了へて

(第4連)

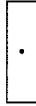
と、読経の進行具合も同じところから、詩想の枠組みが大きく変容した、とはいえないだろう。定稿にもっとも近い(写稿)本文(起稿と同じ鉛筆による2か所の手入れを終えた形)によって、その拡充ぶりをみよう。やはり読経の進行状況に加えて、手帳稿・下書稿二との本文関係も併せ指摘して、掲げる。

書院

いく<sup>そ</sup>十たびうちくだけつゝ  
たそがれの思量は惑く  
こんこんと雪のしきれば  
銀屏の流沙とも観ゆる

・ ②前半  
↓分離し  
増補による  
新設

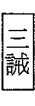
1



堂はいま別時の供養  
しめやかに盤証は鳴り  
もろともに誦しぞいでぬる  
寿量品第十六や

・ 1  
↓復活し  
詩語変換  
して新設

2



清らなるテノールなすは  
頬青きかの僧ならん  
巨いなる絃器のごとく

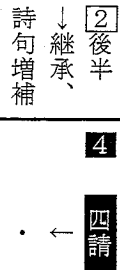
・ ①  
↓継承、  
詩語変換

3



バスなすはかの寄寓僧

松の雪どと落ちたれば  
室ぬちのとみに明るき  
品すでに四請を了へて  
木鼓の音やゝに急なり



これを見ると、4連という詩の場の分節を企てながら、どうもその構成は、起承転結をとっていない。拡充の要点は、1・2連新設による詩の場の詳細化にあったようだ。下書稿二の2連前半を分離・増補した1連が、詩の場への導入をはかるものとして、禪を組む人物を登場させ、それを承けて、手帳稿1段を復活・増補した2連が、別時供養で寿量品の読経が始まったことを告げる。けれども、転連であるべき3連（下書稿二1連の継承、詩語一部変換）は、2連を直接受けて、読誦の高まりをなお醸そうというふうで、変転の妙もなく「四請を了へ」る4連（下書稿二2連後半部の継承・増補）へと結んでゆく程度なのである。

1 + 2 ↓ 3 ↓ 4 (下書稿三)

① ↓ ② ↓ ③ (定稿)

それは実質的に、1 ↓ 2 ↓ 3 ↓ 4、という3段階の構成だった。だから定稿も、下書稿三の実質を受けとって組みかえたのを土台としながらも、右に示したような3連構成で、その開始形をまずは立ち上げたのであつたらう。そこで気にかかるのが、寿量品の読経を聴く、という手帳稿以来の詩の場に、圧縮されたかたちながらも定稿に継承されてゆく、1連を新設して、読経がはじまるまえの、ある人の情況が付け加えられたことである。ある人は、この詩の場を語る人物に等身大で重なる、とみえるが、官沢賢治に特定することはできない。このことを、詩稿の展開上どう位置づけて、その意味をどう理解すればよいか。

1連の内容を確認するために、やはり口語訳を試みておこう。

理解しようとしては碎け散るそんなことを何十回も繰り返しても、夕暮れどきのように思索はいよいよ昏感し、尽きることなく雪が降りしきると、銀屏風がタクラマカンの流沙のようにも観じられてくる。

これによれば、坐禅によってもいよいよ迷いは解けない、そういう散乱の状態に自分はある、というのだ。そのとき、寿量品の読誦が聞こえてくる、2連へはそのようにつながってゆく位置にある。明らかに2連以下への導入部だが、そうした「散乱心」のありようを導

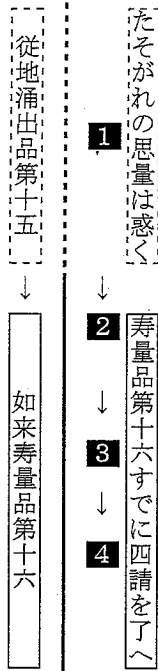
入とした意図を考えようとすると、導入されたのちにきているのが、寿量品であることに留意する必要がある。

この詩稿の始発（手帳稿）から、寺院における寿量品の拝受ということが、この詩の場の枠組みとして不動だった。それは、〈寿量品に対する帰依〉が、少なくともその詩想のなかに成分としてあったであろう。その寿量品とは、「久遠実成の釈迦仏、永遠の生命としての仏陀を説き、本門の中心をなす」（広辞苑第三版）というもので、法華経の最重要経文である。だが、寿量品が「永遠の生命としての仏陀を説く」くには、もちろん契機があった。その直前に置かれ、本門の序分としてある從地涌出品第十五の存在だ。その涌出品は、釈迦牟尼世尊を慕って集まった大衆の目の前で、突如、地から無数の菩薩たちが湧き出ると、世尊が「われは久遠より来（こゝろ）これを教化せしなり」といったところ、

その時、弥勒菩薩・摩訶薩と及び無種の諸の菩薩等は、心に疑惑を生じ、未曾有なりと恠みて、（略）若しこの經において、疑を生じて信ぜざるもの有らば、即ち当に惡道に墮つべし、願わくは今、ために解説したまへこの無量の菩薩をば云何にして少の時に於いて教化し發心せしめて不退の地に住せしめたまへるやを

と、心に疑惑を抱いた弥勒菩薩たちが、世尊に対して、疑問を提出する、そこで終わるのである（傍点、島田）。その疑惑に込めるのが、寿量品なのだ。

つまり、寿量品の前提に涌出品がある。



とするならば、1連の「たそがれの思量は惑く」という情況は、坐禪によっても禪定を得られずにいる、信仰者の昏惑の事態に、やがて寿量品を招き寄せる涌出品における困惑の場が重なるのであり、それは、法華経本門の序列がほぼ示唆されている、と考えられないか。そうみるならば、その本門が開かれ（涌出品）、その眼目に向かつてゆく（寿量品）、という法華経の真髓そのものが、この詩の場の内部では進展してゆくことになる。そのことを、連構成を軸に対照して示したのが、右の図である。

この〈写稿〉はさらに、その1・2連に取捨がおこなわれて、次のように合体し、定稿へと向かってゆくのである。

いく十たびうちくだけつゝ  
 たそがれの思量は惑く  
 こんこんと雪のしきれば  
 銀屏の流沙とも観ゆる  
 堂はいま別時の供養  
 しめやかに盤証は鳴り  
 もろともに誦しぞいでぬる  
 寿量品第十六や

從地涌出品第十五  
 ←  
 たそがれの思量は惑く  
 銀屏の流沙とも観ゆる  
 +  
 堂はいま別時の供養  
 しめやかに盤証は鳴り  
 ←  
 如来寿量品第十六  
 定稿

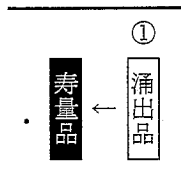
6

この詩稿が、信仰者のありようと、法華經（本門）の誦誦とを重ね合わせながら、その詩の場を再構築してきたとすると、1節で課題とした、定稿段階における、

品は四請を了へし本にけり。

という、書きながらの手入れの意図についても、ひとつの答えが見えてくるように思う。助動詞「けり」に向かう訂正が、気づき・発見の意味を添えるところから推理できるのは、「品は四請を了へ」たことに気づくことが、同時に、「四請」に応える経文が次につづいてくるだろうことにもまた気づく、ということである。したがって、定稿における誦經の進行は、次のように示すことができるだろう（便宜に行形式で掲げる）。

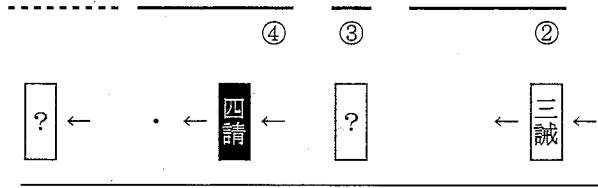
たそがれ思量惑くして、  
 銀屏流沙とも見ゆるころ、  
 堂は別時の供養とて、  
 盤証木鼓しめやかなり。



頬青き僧ら清らなるテノールなし、  
 老いし請僧時々に、  
 バスなすことはさながらに、  
 風葱嶺に鳴るごとし。

時しもあれや松の雪、  
 をちごちどどと落ちたれば、  
 室ぬちとみに明るくて、  
 品は四請を了へにけり。

………(次に来るべきもの)



この詩稿は、「四請を了へ」たところでどどまっているが、「くにけり」による気づき・発見が明示されたかぎり、事態は終結／収束を告げるのでなく、余韻として引きずられている。停止でなく、その延長線上にも、読経はさらにつづいてゆく、ということを用意させるのだ。

では、次にくる読経のステージとは、なにか。

それは、寿量品の核心へと向かう、「四請」に応じた「四誠」が展開されてゆく場である。そこでは、

汝等よ、諦あきらかに聴け、如来の秘密・神通の力を。一切世間の天・人及び阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は、釈氏の宮を出でて、伽耶城がやを去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提あうたらかみやくを得たりと謂えり。然るに善男子よ、われは実に成仏してより已来このま、無量無辺百千万億那由他劫なむたなり。

と、仏の本体を明らかにする、驚くべき開示の始まりであり、それをこの詩稿の結句が予告しているのである。だからこそこの「けり」には、—ああ、これからいよいよそれが始まるのだ—、という深い詠嘆もまたこめられているのであつたらう。

こう考えてくると、法華経本門の入り口である涌出品から、本門の眼目である寿量品の核心へ迫ろうとする、実に壮大／荘重な（法華



経帰依・護」という構想が、詩人に意図されるようになって、その端緒として「たそがれ思量感くして」の詩稿を位置づけようと、詩の場を再構築していった、ということだった、とみることはできないか。「書院」という限定された題名を失ったこの詩稿は、〈序詩〉なのである。〈序詩〉として、後にひかえる詩世界にもつながってゆくものであれば、それをも踏まえた新たな題名というものが、また別に考えられてよい。

7

こうした見方に立って、欠文の③連を問いつめてみよう。〈序詩〉にふさわしい題名が予定されるように、③連にも盛り込まれるべき内実がある。とすれば、それはなにか。

先に、「われ」の消失を、詩想の主体の交換として指摘したが、詩稿用紙上に展開してからそっくり落とされてしまった手帳稿の第2段、寿量品に帰依しようとする「われ」のありさまが、あるいは隠された題材として、③連に復活する予定であったとみるのも、可能性がないわけでもない。たとえば、手帳稿第2段を、仮にそのまま③連の本文に想定してみると、

③さらばいざ座を解きて跪し、  
わが不<sub>フ</sub>会<sub>エ</sub>と会<sub>エ</sub>とのかなたに、

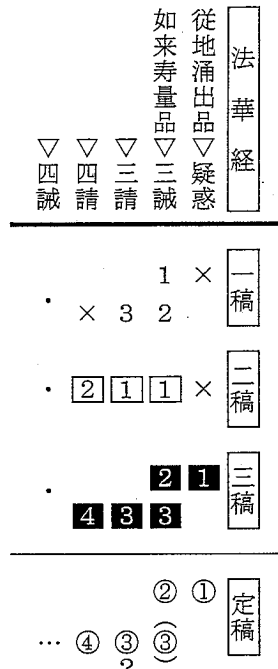
双<sub>も</sub>手<sub>て</sub>しておろがみ聴かん、  
み仏のとはにぬますを。

ということになるのだろう。しかし、定稿の清書、推敲に向かった詩人は、たぶん手帳も身近には置いていただろうけれど、これを採用することはなかった。坐禅を解いて跪坐し合掌拝受しようとする「わが」姿は、寿量品の読経が始まった、その聴聞の態勢なのであって、それは、左に示すように、定稿では①・②連の間に相当する、ということもあつたはずだ。草稿における読経の進展と連構成との対応を整理してみると、定稿③連に想定される場面は、単純にあてはめてしまえば、「三誠三請」の後半に位置づけられるように思える。

詩句の転用はもちろん可能だ。ただ、「われ」の復活は、自伝性の復活をも誘引して、真言の普遍性に迫ろうとする詩想の後戻りにもつながってしまうから、たとえば手帳稿第2段の、

不<sub>フ</sub>会<sub>エ</sub>と会<sub>エ</sub>とのかなたに／み仏のとはにぬますを。

とあつた感嘆の思いを下敷きに、「思量感く」する人物が「三誠三請」に聴き入る姿にあらためて造形し直して、盛り込もうと企図したのかもしれない。だが、それは読経がすでに進んでいる段階では、どうしても一種陶酔の態度へと傾きがちにならうから、核心である「四



「誠」の読誦に入る前に、すでに法悦境に入り込んでしまった人物を配置することにもなり、しかも、④連で「時しもあれや」、その陶酔から覚醒するというのでは、どうにもちぐはくの感を免れぬ。やはり転用によるのではなく、如来寿量品の進行に見合う新たな場を創って盛り込むことしかなかった、と思える。

そもそも、「三誠三請」という形式は、「以下説かんとする所が如何に重大な意義をもつものであるかを暗示するもの」である。「四誠」を引きだす「四請」に至るためには必然の場である。すると、「三誠」からいきなり始まる寿量品の読誦を承けて、③連があり、そして「四請」の④連につながってゆく構成からしても、③連には、まさに思量に昏惑した菩薩たちが、どうぞ我らに説き明かしてください、と懇請する「三請」の場が相当するのではないか。もちろん、

是時菩薩大衆。弥勒為首。合掌白仏言。世尊。唯願説之。我等当信受仏語。如是三白已。復言。唯願説之。我等当信受仏語。

という、「三請」の経文そのものを引用しようなどと、詩人が企むはずもない。たとえば、読誦の声を写すにしても、梵語へ読みかえるにしても、文語定型の本文にそれを収めることの難しさを、詩人はすでにもう知っている。この詩稿自体、その形成過程で「三請」とい「四請」といながら、けして経文の引用はしなかった。

8

このとき、題名の場合に考えられるような、消失・保留の可能性を問うのではなくて、はじめに記したように、欠文は欠文のままに（本文）そのものであった、とみようとすれば、空白のままの③連に、詩人が与えようとしているのは、

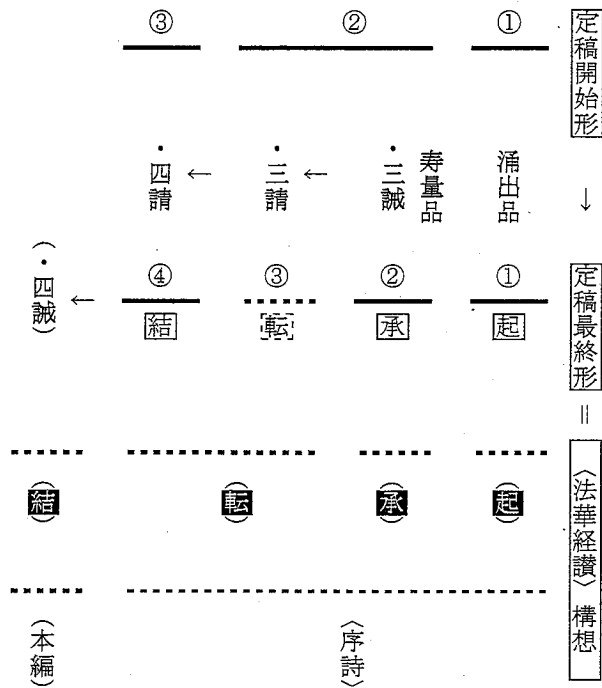
（ともに三請する、いわば純白な時間がながれている）

という場、そのものであったのではないか、という考えが、私を突き動かしてくるのだ。そこは、惑う大衆の、すでに三請を口にした菩薩たちだけでなく、坐禅の人をもこの語り手をも含めた、多くの人々、そのひとりひとりの、真言を希求する無言の祈りの場にほかな

らない。

それが、無言の祈り／希求を充たす時空としてあるならば、②連の展開としてもあり得、④連「品は四請を了へにけり」とした気づきにも直結するものとして、その空白を位置づけられる。と同時に、空白を有するがゆえに詩の場そのもの未完結なのであり、この詩稿自体が結をいまだ持ち得ぬ〈序詩〉として現われ、その③連も、転の連としての機能を果たしうるように思える。この〈序詩〉の向こうには、「四誠」という久遠の教えが展開する場（いうならば本編）がひかえているのであり、その〈序詩〉のなかに、真言を希求する無言の祈りを充たす③連があればこそ、「四請」の招来を必然ともし、それを踏まえることで、未到の真言（四誠）へとまっすぐにつながってゆく。

次に図示するように、本詩稿の手入れ形の先には、結びとして、いわば本編たる「四誠」の場が隠されており、その全体が〈法華経讃〉



の構想のもとにあつて、空白の③連は、①・②連の展開に対し、④連を呑みこんで転化（変転推移）に向かう契機を秘めている、とみる（ことばできょうからだ。そして、本編自体は、たとえば、「早春」→『「百篇」』に、

わが索むるはまことのことば／雨の中なる真言なり

とあつたように、それは永遠に索めつづけられるものなのであつて、たぶん露わなかたちでついに現われることがない。つまり、この定稿には、法華経に真言を索めようとする者の、いうならば禮拜の場が設営されている。またそれが、空としてあるがゆえなおさら、すべてのひとにいつでも開かれている、といえる。

こうした定稿手入れは、詩想の改変によるものでも、詩想の改変に導くものでもなく、詩想のさらなる深化という動きによつてもたらされたのである。

9

ただ、それは、たとえば詩人がいま信仰上のある高みにあつて、人々を教導しようという地点に立っている、ということではない。そのことは本研究4章5節に、『雨ニモマケズ手帳』の分析をとおして指摘したところである。その内実は、病苦を道場として信仰の不熟を徹底的に暴き、自らを打擲する状況にあつた。詩人がいまいるのは、高みどころか、死病を踏み台にして、信仰の再生に向かう途にやつと立ちあがつてきた、という地点である。そこには、「社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ」(『雨ニモマケズ手帳』45・46頁)という自覚をなおあらたにした詩人のすがたがあるはずだ。自らの不熟さによつて招いた信仰とその実践との不意のなかで、詩人自身課題を背負い、その残生のすべてをにかけて執心しようとしている。その向かうところに現われたひとつが、『文語詩稿』の再編であり、その定稿化だつたと考えられるのである。

「猛進」のでだてのなかには、

◎高知尾師ノ奨メニヨリ

1、法華文学ノ創作

名ヲアラハサズ、報ヲウケズ、貢高ノ心ヲ離レ、

2、(以下に記述はない。島田注)

(『雨ニモマケズ手帳』135頁)

とやはり手帳段階で想起されていた、「法華文学ノ創作」ということもあつたにちがいない。だがそれは、

筆ヲトルヤマツ道場観

奉請ヲ行ヒ必才所縁

諸仏意ニ契フヲ念ジ

然ル後ニ才ヲ全力之

ニ従フベシ

『雨ニモマケズ手帳』140頁

という態度を必要とする、信仰の実践そのものなのであって、さらに（ここは見開きの頁で左から右に縦書きされている）、

断ジテ教化ノ考タルベカラズ！

『雨ニモマケズ手帳』139頁

とたたみかけて、人を教え導こうという思いあがりを感じて戒めている。自らがかつてそこに落ちなおも陥りがちな、あの慢心というものに対して、きわめて自覚的なのである。詩人のいう「猛進」とは、そうした自警自戒によって強く規制もされているのである。

空白の連を出現させたこの詩稿の場合も、言説を放棄したところに、教化などといった程度を超えようとしている詩人の態度がうかがえよう。そこに意図されたとみる、誰もがともに祈りうる場とは、実は、ともに受容されうる場だということでもある。それは、〈定稿・百編〉に登場する多くの人々と詩人とが結節しうる地点ということであろう。言い換えれば、実に多様多彩な〈定稿・百編〉のひとつひとつが、「たそがれ思慮感くして」という詩の場につながりうるということになる。その意味で、その中心にこの詩稿が位置づけられて、他の詩稿それぞれが求心的に重なりあつてくるという詩集構造を立ちあげている、とみてもよいのではないか。

要するに、この詩集が総体として現前しようとしている、その〈場〉さえもどこのえる、いわばより大きな手入れが、この詩稿の定稿手入れによって果たされているのである。それは、この詩集がその基盤に信仰を置く、ということになる。そうした針路が、〈定稿・百編〉の形成から分集への過程のなかで醸成され、先に分離・独立した『五十篇』のほうに位置づけて示された、ということである。針路は『五十篇』に限定されてはいない。やがて成る『一百篇』も含めた『文語詩稿』という詩集構想の、その展開を支えるものとして理解すべきである。

(注)

1 この表紙は現存しない。失われる以前に写しとられ、文圃堂版全集第二巻中扉に収められたところによる（『新校本全集』第七巻校異参照）。

2 やはり『五十篇』に、欠文を持っている定稿に、無題稿（「水霜繁く霧たちて」）がある。

① 水霜繁く霧たちて、  
馬はこむらをふるはしぬ。

すすきは濡ぢ幾そたび、

② (荷繩を投げよはや荷繩)

10行分空き

③ 雉子鳴くなりその雉子、  
歩み漁りて叫ぶらし。

人なき家の暁を、

たとえば、3連形の定稿に、「市日」が次のようにある、

① 丹藤に越ゆるみかけ尾根、

うつろひかればいと近し。

② 地藏菩薩のすがたして、

栗を食うぶる童と、

縞の粗麻布の胸しぼり、

鏡欲りするその姉と。

③ 丹藤に越ゆるみかけ尾根、

なまこの雲ぞうかぶなり。

また「岩頸列」の場合は、

① 西は箱ヶと毒ヶ森、

椀コ、南昌、東根の、

古き岩頸の一行に、

水霧あえかのまひるかな。

② からくみやこにたどりける、

芝雀は旅をものがたり、

「その小屋賭けのうしろには、

寒げなる山によきによきと、

立ちし」とばかり口つぐみ、

とみにわらひにまぎらして、

渋茶をしげにのみしてふ、

そのことまことうべなれや。

③ 山よほのほのひらめきて、

わびしき雲をふりはらへ、

その雪尾根をかゞやかし、

野面のうれひを燃し了せ。

という本文をもっている。つまり、3連形における、

2句・4句・2句 あるいは 4句・8句・4句

とある詩句構成からすると、①・③連を3句とする「水霜繁く霧たちて」の②連は、示された1句を冒頭句として、

② (荷縄を投げよはや荷縄) ○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○

という本文構成が想定され、それに見合う空行もまた用意しているのである。推敲がすすめば、加筆されうる定稿本文だとみえる。なお、『春と修羅』の「小岩井農場」における「パート五 パート六」という章題だけを指示している場合がある。これは、第五綴・第六綴とある原稿が遺されているが、詩集の初版時に削除されたとみられ、天沢退二郎はこの操作に「リ折り返し点リの通過隠蔽による現実性の奇怪な顛倒効果」（「小岩井から：小岩井へ」、『宮沢賢治の彼方へ』所収、ちくま学芸文庫版一九九三）をみている。また、原稿も遺されておらず章題さえ詩集本文に示されていない（パート八）があるが、天沢論は、パート七でたどりついた「異次空間の辺境」を承けて「宮沢賢治がその方法の先天的欠陥（その記録性というぬきがたい前文学的偏執）をいうか、島田注）のゆえに：異空間—いまさつきその辺境へたどりついた異次空間—へそれ以上踏みこむことができなかったこと、おそらくその失敗がパート八を削除させた原因である」と推測する。とすれば、欠文あるいは空白そのものがその〈意味〉を追究しうる場合があるのであり、本詩稿の空白の③連も、詩人の企図したことである可能性を支援する。

3 栗原敦「『文語詩稿』試論」、『宮沢賢治 透明な軌道の上から』所収、新宿書房一九九二。

4 事実としては存在していたにもかかわらず、それまで気づかれていなかったことに気づくことを表わす。発見を表わす（日本国語大辞典第二版）。

5 『「雨ニモマケズ手帳」新考』、東京創元社一九七八。

6 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』（岩波文庫）による。以下、法華経の本文・読み下しの引用は同書。

7 『文語詩稿』の大まかな傾向に、詳細化↓凝集化、多連↓2連、というものがあるところから、下書稿の序列は、次のようにも想定しうる。

□→□→□↓□→□→□に返って「写」を付与。

8 最終草稿に与えたとみられる詩人による符号で、私は「定稿用紙に写す」意とみる。この符号が与えられたものはすべて定稿化されている。

9 「たそがれ思量感くして」について、「たそがれ」は実際の黄昏どきをいつているのではない、とみたい。4連に「松の雪、をちこちどどと落ちたれば、室ぬちとみに明るくて」とあるとおり、松に積む雪が崩れ落ちた程度で、時間も経ているのに室内が明

るくなるというところに違和感がある。室内が夕方のように薄暗いさまをいうとともに、思量の薄闇も暗示しているか、とみるのである。となれば、「とみに明るくて」というのも、暗示を秘めてゐると解することとすべきだろうか。

「たそがれ・暗」↓「思量」↓「明るくて・明」

というながれが、室内の光量の変化を示しているとともに、惑乱していた思量がしだいに定まってゆく、その変転の兆しを示唆しているともみえるのである。

また「惑くして」の訓みについて、入沢康夫が「昏惑」「昏迷」「惑乱」「幻惑」などの語と根を同じくするそういう「クラク」、そういう「クラミ」などではあるまいか（「惑」の読み方に惑う）、『賢治研究』99（二〇〇六・六）と提案するが、丹治昭義が『宗教詩人宮澤賢治』（中公新書一九九六）のなかで、「思量惑くして」と、昏惑の意で訓みを試み示していたことを追記しておきたい。

10 文語詩稿に「けり」の用例は多いが、気づき・発見の場合ばかりではもちろんないけれど、「く」にけり」の型でみると、たとえば「退耕」『一百篇』が、

①ものなべてうち訝しみ、  
こゑ粗き朋らとありて、

黄の上着ちぎるゝまゝに、  
栗の花降りそめにけり。

②演奏会せんとのしらせ、  
いでなんにはや身ふさはず、

豚はも金毛となりて、  
はてしらず西日に駆ける。

とあって、気づき・発見に解釈できようか。「春に退耕してから、もう栗の花が散る頃になっていた」と気づいたとき、演奏会などというお上品な場所にはもうふさわしくない地人になりきっている自分を発見した、というように。この詩の場は、地人たることをよしとした詩想に支えられていると私はみるので、この詩稿は完結していると思える。同様の事例とみられるものに、「塵坑」・「厩肥をになひていくそたび」『一百篇』がある。

さらに「たそがれ思量惑くして」の場合のように、それが結句に位置して、単に余韻を残すというふうでなく、後に書かれざる本編をも想定しうるような事例も、いくつかみえる。たとえば、「悍馬（二）」の場合である。

毛布の赤に頭を縛び、  
陀羅尼をまがふことばもて、

罵りかはし牧人ら、  
貴きアラウの種馬の、

息あつくしていばゆるを、  
まもりかこみてもろともに、

雪の火山の裾野原、  
蒨き柏を過ぎくれば、

山はいくたび雲翁の、  
藍のなめくじ角のへて、

おとしけおとしいよいよ、  
馬を血馬となしにけり。



この詩稿の詩層に、種馬育成所の記憶を見いだすならば、アラブの「血馬」には次のステージとして、軍馬としての出来事が予定されるもの、という理解も成り立つと思われる（島田「貴きアラブの種馬／文語詩稿五十篇「悍馬」試注」『国語教育論叢』14、二〇〇五・三）。「貴きアラブの種馬を追う／文語詩稿「悍馬」〔一〕」の詩層『賢治研究』98、二〇〇六・二を参照されたい）。他にも、「残丘の雪の上に」（『五十篇』）や「すゝきすがると丘なみを」（『一百篇』）に、詩稿がいったん閉じても、その後にも次なる詩の場が予定されていると理解しうる余地を見いだせるのではないか。ただし、いずれも詩稿自体が〈序詩〉として位置づけられるかどうかは、精密な考察が必要である。

1 1 『法華経』（岩波文庫）の下巻解説、454頁。

1 2 法華経の梵語の音による呪文の本文化を、「祭日〔二〕」と「うたがふをやめよ」とで、試みている。前者は未定稿に置かれ、後者は呪文を削除した本文に推敲して定稿としている。

1 3 高知尾智燿「宮沢賢治の想い出」（『真世界』二月号・三月号一九五九・二、三）。宮沢賢治が二一（大正一〇）年に出京したとき、国柱会理事であった高知尾は「たびたび会って信仰上の意見を交換した」が、「法華文学」を奨めた記憶はないという。それ以後は「時折文通があった程度」である。宮沢賢治が出した三三年の年賀状（書簡441）には、

客年中は色々とお心配を賜り難有奉存候 お蔭様にて此の度も病漸くに快癒に近く孰れは心身を整へて改めて御挨拶申上候  
という追記があり、高知尾の存在感はけっして軽くない。

3節 宮沢賢治／『文語詩稿』への転機 — ブルーブラックインク（写稿）による定稿の形成

はじめに

一九三三（昭和八）年八月、宮沢賢治は、定稿を集成したふたつの詩集を、『文語詩稿五十篇』（八月一五日）、『文語詩稿一百篇』（八月二二日）と命名してまとめあげる。

けれども、三〇（昭和五）年前後からと推定されるその文語詩制作がたどってきたのは、ひとつの文語詩集の構築であったとみられる。それは、三一（昭和六）年の闘病でいったん途絶した文語詩制作が、三二（昭和七）年から再編に向かうと、三三年にかけて草群のなかから、およそ100編の本文に対して鉛筆や赤インクの（写）の符号（「定稿用紙に写す」意とみる）と横線とを与えながらウル定稿を蓄積し、六月以降にはまずそれをことごとく定稿化しようという作業に入っていたと推定されるからである。

この前段の詩集構築を仮に〈定稿・百編〉の形成と呼ぶならば、その作業から2か月ほどで、定稿の増補・分集という針路に転じたということになる。次のように、〈定稿・百編〉は分立してゆき、その過程で50編（実際には51編、『一百篇』は101編を収める）の増補がおこなわれていったことである（鉛筆・赤インクを鉛赤、〈写〉印付与草稿を〈写稿〉、・は分集時点）。

図①

鉛赤（写稿）↓〈定稿・百編〉↓・↑

↓67編↓『一百篇』

ではなぜ〈定稿・百編〉は、その自律あるいは自立の針路を失ったのか。

数年来の死病に追われていた状況からすれば、詩集の拡大は苦痛であったろう。にもかかわらず、詩人は針路変更に着手したかにもみえる。なにが起きたのか。実は、ふたつの詩集に分立したのは、〈定稿・百編〉だけでなく、ブルーブラックインクによる〈写〉印と横線とをもった草稿による定稿が、やはり同じ経路をたどっている。つまり、先の図でいえば定稿が分立する前にさらにもう一段階、新たな定稿を追加することがあったのである。

その事態を白抜きで加えて示せば（ここでは鉛赤（写稿）段階は省略し、ブルーブラックインクの〈写〉印をもった草稿を藍（写稿）と表示、**定**は定稿化、**5**などの数字は詩稿数）。

図②

〈定稿・百編〉

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓33+5編↓『五十篇』

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓・↑

↓67+4編↓『一百篇』

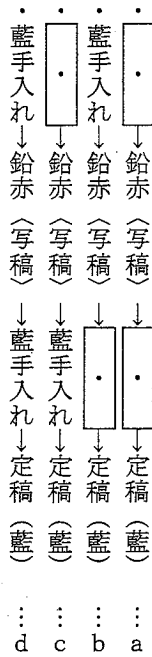
ということになるだろう。この事態について、以下、考察を試みる。

### 1 ブルーブラックインク（写稿）の成立

図②のように、ブルーブラックインクによる（写稿）の撰びだしとその定稿化という事態は、（定稿・百編）という集の構築が定稿用紙上にブルーブラックインクによって着々とすすめられていた、その過程で発生していたのであり、すでに集の膨脹ということが兆してきつつあったことである。ただし、それは9編という数にとどまっている。

このことが（定稿・百編）の構築に併走していた、とみるのは、ひとつに（定稿・百編）が『五十篇』・『一百篇』に分配されていたとき、これもまたふたつの定稿集に振り分けられてゆくことがあり、いまひとつに、追加の定稿をもたらしたブルーブラックインクの（写稿）がまさしく定稿用紙を眼前にして成立し、ほぼ間断なく定稿化に向かったと考えられる点がある。

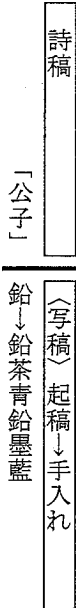
1編だけをのぞき定稿はブルーブラックインクで起稿し、第一段階の手入れにも用いられるという実態がある。先行していた鉛筆・赤インクの（写稿）段階のほうでは、その最終にブルーブラックインクの手入れの見られないものが三分の一に及んでいる。それは次のような手入れ過程を推定させるものだ（ブルーブラックインクを藍、ブルーブラックインクの手入れのなかった場合□↓と示す）。



ブルーブラックインクの最終手入れが無い場合には、aのように鉛筆・赤インク（写稿）と定稿の間に相当の時差を想定しうるが、有る場合は、bのように時差を想定しうる場合もあるが、c・dの場合にはそれを定稿清書直前に位置づけることが可能で、そのうえに本文の親密性が明らかならば両者の間に即時性を認めてよい。

そこで、9編のブルーブラックインクの（写稿）をみると次のとおりで、そのすべてにブルーブラックインクによる最終手入れが認められる（「」題名、「」無題で冒頭詩句。起稿筆具に鉛筆とインクの別があるが、着手時期のずれを想定する以外差異は明確でない。手入れは階層化して示した、鉛は鉛筆、茶は茶色鉛筆、青は青インク、墨は毛筆による、藍はブルーブラックインク。なお、「麻打」の（写稿）段階が特定できないので、定稿直前稿と推定しうる親密な本文に藍による手を入れた余白稿を（写稿）本文と仮定する<sup>2)</sup>）。

図表③



「秘事念仏の大師匠」〔一〕	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「麻打」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍▲余白稿
「早池峯山巔」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「社会主事佐伯正氏」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「そのときに酒代つくと」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「退耕」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「上流」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「曉」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍
「上流」	鉛↓鉛・鉛・鉛・鉛・鉛	藍

次節に表④として掲げるが、ブルーブラックインク（写稿）・定稿間の異同も比較的小規模なので、定稿用紙上で（定稿・百編）の形をすすめていたブルーブラックインク筆具をそのまま、新たな（写稿）の撰び出しに用いたもので、それ自体が定稿への起稿直前の作業だったと考えて不合理はない。

また、表④には、定稿起稿後の手入れのほうが定稿化の異同より多いという実態がみえる。これも（写稿）の成立にかけた時間が短かったために、それをほぼ受容した定稿開始形の表現に不満を見い出して、その後の手入れを必要としたとみれば納得できることで、やはり本文間には即時性が想定されてくるのである。そして、ブルーブラックインクで（写）印を与えたのは、鉛筆・赤インクによる（写稿）や、符号を与えていない草稿との紛れを防ぐためであったろう。とすれば、鉛筆・赤インクによる（写）印の場合とは異なり、定稿用紙に起稿したのち、確認を示す「写した」の意味で与えられた場合があることも考えられる。

2 〈写稿〉9編の定稿化

この〈写稿〉による定稿化の過程は、左に掲げるとおりである（題名については、継続が無題の継続、継承が題名の継承、変更が定稿で変更、新設が定稿で命名。異同詩句については、句が詩句レベル、語が語句レベル、表が表記レベル。詩形の○は句読点の付与以外連句の数的構成に変化がなかったもの。定稿段階の藍手入れには起稿時の書きながら手入れを含めている）。

詩形についていえば、9編すべて、句読点なしの詩行による連構成である草稿が、句読点によって詩句を配列する定稿独自の連構成に転じたものの、その数的な構成に変化がない。（写稿）における詩の場の骨組みをそのまま受け容れて、定稿化したのである。



同の背景にあるのは、定稿化によって表現した詩の場を支えている詩想に、より見合う命名もまた詩人の内部で熟した、その結果であるということであろう。

詩稿本文の異同実態については、詩句・語句ともに現われている〔秘事念仏の大師匠（二）〕のその部分をみよう（傍線は島田。定稿本文も句読点をはずさないかたちで草稿同様の行形式で示す。以下同）。

③むしろ帆張りて酒船の

岸べつたひにめぐり来る

ふとあらはるゝまみのまへ

こちを見おろし見すくむる

（写稿）

③むしろ帆張りて酒船の、

ふとあらはるゝまみのまじか、

をのこは三たり舷に、

こちを見おろし見すくむる。

（定稿開始形）

酒船の「岸べつたひにめぐり来る」悠長なさまを捨象して「ふとあらはるゝ」に直結させ、その接近の突然性を強調するとともに、「をのこは三たり舷に」という詩句を補填して「見すくむる」者の正体をかいま見させつつ、それが「まみのまへ↓まみまじか」ともう眼前にまで来ていたことをやはり強調して、この遭遇の緊迫感をより高めている。密造酒を運ぶ者たちと「秘事念仏の大師匠」との、怪しい出合いを演出するこの定稿化に、詩の場を支えてきた詩想の強化はあっても変転があったわけではない。

9編における異同の内実はおおむねその傾向にあるといえる。

3 定稿段階の手入れ

こうして本文異同もゆるやかに、9編は定稿として起稿されたが、起稿後の手入れは表④のとおり異同の場合を越えて、8編に及んでその程度も一様でない。

まず、語句レベルで3か所の異同が生じていた〔そのときに酒代つくと〕の場合を、〈写稿〉との対照も併せて、定稿段階の手入れ過程をみよう（定稿の語句や詩句の消し線部分は詩人によるもの。以下同）。

③柏原風とどろきて

さはしぎは遠くよばひき

③柏原風とどろきて、

さはしぎは~~そ~~↓ら「遠く」鳴ゆしま。 ↓よ（＝喚）ばひき。】

④馬はみな泉を去りて

④馬はみな泉を去りて、

山ちかくつどひてありき

(写稿)

山ちかくつどひてありぬ。↓き。

(定稿開始形)

異同の2か所は、その後の手入れによって(写稿)段階に立ちかえる、というものである。この定稿手入れは詩の場を大きく転じようとしたものではないということがいえる。同様に、5か所の定稿語句への手入れをもつ「早池峯山巔」も、

①石<sup>アスベト</sup>絨脈なまぬるみ、

苔しろきさが巖にして、

いはかゞみまひそかに熟し、

まブリューベル露<sup>ル</sup>を<sup>は</sup>は<sup>ら</sup>ぬ。↓はひかりぬ。」

②八重の雲「ひかり ↓遠く」たゝへて、

という手入れ実態で、これは本文を保守しようという動きである。あるいは、「上流」の定稿詩句への手入れでは、

②「蘆刈りびとはいままもは、 ↓いくさの噂しげければ、」

「赤<sup>あか</sup>またれし眼あげ下 ↓蘆刈りびと(は↓も)いまさらた。」

暗き岩頸風の雲、

天のけはひをうかゞひぬ。

とあって、「蘆刈りびと」の農事から「いくさの噂」という戦時への主題転換があったと考えられようが、詩の場の枠組みには変化がなく、主人公たる農民の立場と視点から、農村青年を軍隊にとられてしまう、この危うい時代をもさらにみつめようとする詩想の拡充、つまり深化がはかられているととらえられるのである。

要するに、その定稿化の過程からうかがえるのは、ブルーブラックインクで撰び出した(写稿)自体が、どうやらその詩想を相当に熟成させていた、ということである。言い換えると、(定稿・百編)に至った以外にも、再編段階に展開した草稿群のなかに、定稿化に耐えうる詩想の熟成を果していたものが置かれたままになっていた、という現状があった。その現状に押されて、新たな(写稿)の成立とその定稿化に、詩人も思わず手をつけたということではなか。なぜなら、定稿化に耐える草稿がけつして少なくはなかつたからである。

それがしかし、わずかに9編にどどまっつてしまふ。というのも、このままでは定稿が際限なく追加され、詩集は膨脹の一途をたどるので

はないか。ならば〈定稿・百編〉の新たな針路をどうとるべきか、そのゆくえを見定めておかなければならない。そうした詩人の一旦停止の状況が、9編という中途半端な数に反映している、とみる。

#### 4 〈定稿・百編〉の枠組み

〈定稿・百編〉の形成はすでに進行しており、それは集としての性格も具現しつつあった。たとえばその特色に、風土性というものがあり、群像性ということがある。実に多彩な事態のもとに、さまざまな階層の多様な人物が登場している。

そこで、そうした人々が現われている場所に注目して、仮に、ムラの時空にたつものを「田園詩篇」、マチの時空にたつものを「生活詩篇」として詩篇分野を立てて分別を試みると（山河を主体とした自然詩篇とみる10編、「わが」信心を主題とした信仰詩篇とみる10編は除く）、次のような実態が現われてきた。

田園詩篇	30編
生活詩篇	50編

これを踏まえると、〈定稿・百編〉はその段階で、マチ場にたつ生活詩篇がムラにたつ田園詩篇を圧倒する構成になっているといえるだろう。大正期以後、地方にも近代制度の導入が盛んになり、岩手も地元有志の努力によつて都市化が進んでいたのは事実だが、現実には、マチとムラとが互いに侵蝕しあつて、まさしくそれは複合していた。詩人が見つけていた岩手という風土もまた、マチとムラとが濃密に交通し、重なりあい連なりあつて緊密に成り立っているのである。

ただ、この分別も有効だとすれば、そこにマチ場の優位性が露わなことを如実にうかがわせた点である。マチがムラをいわば支配的にして存在する、そうした地方の現状を映しだしている。それは前時代が変わらぬありようなのだ（もちろん岩手にかぎるまい）。その理解に立てば、〈定稿・百編〉の世界形成は、生活詩篇が田園詩篇を圧倒しつつ相対化し、そこに現われるさまざまな対照性のなかに、「地方」「時代」というものがはらむ問題群を提示しようとしている、ととらえることもできるのである。

いったん途絶した文語詩制作を再編に向かわせ、いままさに定稿化を果たそうとしている。この作業を支える詩人の自覚に、三一年の秋以降あの死病と対峙していたときの『雨ニモマケズ手帳』に、

社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ



と書きつけた覚悟のひとつが依然としてあった。その地点に立ち戻ってみると、「社舎」(消し線は詩人)という認識を抱きながら、そのうえにあえて置き換えたとも読めるその「農村」とは、ムラの時空に限定されぬこの地域社会の現象として提示してあるのではないか、ということにあらためて想到する。「農村」は岩手という社会風土そのものとしてとらえられている。(定稿・百編)という集の構想も、その視座から立ちあがったとみれば、田園詩篇と生活詩篇の不均衡は、むしろ意図的に構築されたもの、ともいえるのである。

その傍らで、けれども詩人は新たな定稿の追加にも向かってしまっていたということだ。それはなぜか。詩人にそれにかかわる指示も示唆もない。ただ、(定稿・百編)自体、再編段階の草稿群から撰びだした二種の(写稿)の合流によって、その定稿化がすすめられてきたという過程も、振り返ってみれば、97編の鉛筆(写稿)の撰びだしに対して、「その追加稿として3編ほどの赤インク(写稿)が撰びとられた」とする先後関係を想定して、充分に説明しうるところがある。

その延長線上にあって、質的にも量的にも何らかの不足を補いたいという追加への衝動は当然あり、それが、はっきりとした見とおしをまだもたぬままに発現することもある。この場合も、そのような出来事であったといえるのではないか。

### 5 定稿9編の追加

では、(定稿・百編)に対する不足とは、どういうことであったのか。追加された定稿9編の詩の場をみよう。

「思わず手をつけた」草稿によって、たどりついたこの定稿の多くは、左に掲げるとおり、その場や人物から田園詩篇に分別されるだろう。先に指摘した「何らかの不足を補いたい」という追加への衝動」が向かったのは、集のなかで教的には劣勢であったムラの時空を、さらに克明に現出してゆくことだったといつてよい。

表⑤

詩稿	場所	至たる人物	事態	分野
早池峯山巖	早池峯山	・	古層の面影	自然
そのときに酒代	岩手山麓	夫、妻	馬泥棒と不倫愛	田園
秘事念仏の大師	北上川畔	元眞齊	密造酒売買	田園
麻打	中津川畔?	農婦	麻打ち	田園
上流	用水池	蘆刈びと	農事、↓いくさ	田園
暁	稲田	封介	農事との苦闘	田園
退耕	農耕地?	(われ)	演奏会の通知	田園
社会主事佐伯正	花巻近郊	士、馬喰	社会主事来訪	生活?

しかも、ここでは、苛烈ともいふべき事態のなか、馬盗人の夫と不倫にはしる妻（「そのときに」）、密醸にもかかわる邪教の導師（「秘事念仏の」）、苛酷な麻糸作りに黙々と打ちこむ農婦（「麻打」）、疲弊し荒廢する農村とこの国のゆくえを案ずる農夫（「上流」）、連日の農作業の困苦に憤る青年（「暁」）、文化などには無縁な日々をおくるなかば自嘲気味な退耕者（「退耕」）といった人々が登場してくる。ここで詩人が凝視しているのはムラというものの暗部の一面であり、紛れもなく「農村」が抱えていた、これも眼をそむけてはならぬ現実なのである。

たとえば、先に手入れ実態をみた「そのときに酒代つくと」は（ここは定稿表記形式により掲げる）、

①そのときに酒代つくと、 夫はまた裾野に出でし。

②そのときに重瞳の妻は、 はやくまた闇を奔りし。

③柏原風とどろきて、 さはしぎら遠くよばし喚ひき。

④馬はみな泉を去りて、 山ちかくつどひてありき。

という詩の場を現出させている。要約すれば、

酒代欲しさに夫が山麓の放牧馬を盗みに出るや、妻は闇の夜を密男のもとに奔った。胸の高鳴りは柏林の轟きにも重なり、ついに男のもとに到る。夫はいつもの泉に忍び寄るが、すでに馬は山上に去っておりなすべもなく立ちつくすのだった。

ということであろうか。金銭や愛欲という欲望のままに偷盗となり姦淫に溺れる男女の、あまりにも生々しい人間の露出を詩人はあるがままにとらえてしまう。だが、このような地点にまでも降り立ったことよって、かえってその視界は拡がり、その深みにも視線をそらすことがない、そのような態度に、身を置くことができたのではなからうか。

こうした視座の獲得は、〈定稿・百編〉の不均衡に対して、その調整をはかる契機を与ええたであろう。調整とは、題材の量的均衡という軸によるだけでなく、「農村」の抱える課題を選びとる、その質的な均衡という軸からも密度を高めようとすることにほかならない。このとき、当初の詩集構想に揺らぎが生じたとみてもよいのではないか。つまり、〈定稿・百編〉の発展的な再構築を考える、その転機を、ブルーブラックインク（写稿）による定稿の形成がもたらしたと考えるのである。現に、詩人の眼前には、定稿化をじっと待つ熟成

した草稿が累積している（その結果がさらに40編あまりの定稿増補をもたらした）。詩集の発展は可能なのである。ただし、この9編の定稿の形成によって指し示される針路が、その後の増補傾向のすべてを支配していったというわけではない。あくまでも、〈定稿・百編〉から来たる『文語詩稿』へと歩を進める、その転機としてまずあったとみるものである。

6 『五十篇』・『一百篇』という命数

それがきりのいいまとまりある数として、詩人は単純に提示しただけなのかもしれない。しかし、『五十篇』・『一百篇』とわざわざ指しながらも、実際には後続の『一百篇』のほうには101編を収容してしまうあたりに、「50+100」計150編という、数的枠組みのほうがまず分集以前に立てられていた可能性もかいま見える。そこにもやはり、この定稿形成がかかわっているとすれば、ひとつのてがかりが浮上する。それは、〈写稿〉にかかわったその先行作品の実態のなかにみえる。表⑥として、その一覧を掲げる。

表⑥

詩稿		関連・(参考)	
公子	歌稿〔B〕	116・117	
麻打	歌稿〔B〕	153・154、205	
早池峯山巔	(第二集	一八〇「早池峰山巔」	
そのときに酒代	第二集	三三〇「うとうとするとひやり」	
秘事念仏の大師	第三集	一〇二五「燕麦の種子をこぼせば」	
〃	〃	一〇二八「酒買船」	
〃	口語詩稿	「憎むべき」限「弁当を食ふ」	
上流	第三集	一〇八〇「さわやかに刈られる蘆」	
暁	口語詩稿	「鳴いてゐるのはほととぎす」	
社会主事佐伯正	(書簡	315・佐伯正宛、三二・三三)	
退耕	不詳		

両者は、原型として端を発した『歌稿〔B〕』から、それを素材のひとつとして取りこんだ三三〇番稿<sup>9)</sup>・一〇二五番稿<sup>10)</sup>・一〇二八番稿<sup>11)</sup>・「憎むべき」限「弁当を食ふ」、あるいは題材そのものとして文語展開した一〇八〇番稿<sup>12)</sup>・「鳴いてゐるのはほととぎす」など、その受容態度の濃淡についてはさまざまである。そこで注目したいのが、口語稿の採用が多い点で、特に三〇年以降に黄野の詩稿用紙へ一斉に

展開したと推定される『春と修羅第三集』ならびに番号・日付をもたない口語詩稿の文語転換という事態である。

この『第三集』稿と、ほぼ同時代を題材とする口語詩稿とは三〇年から三一年にかけて、次の詩法7のメモが指示する方向に動いたと考えられる。<sup>11)</sup>このとき「文語」は「第四」として別に独立して位置づけられていた。

第三、「田園」——100頁      200日

——社会、——15頁

心象 —— 病気、—— 50頁

スケッチ —— 信仰、—— 15頁

「生活」—— 20頁

第四、文語、

(詩法7)

内容と数量とを明示する詩法7の「第三」にかかわる記述は、「農村」に最初に立ち向かった羅須地人協会時代を主に200日分を題材とするもので、相当する口語稿形成も進捗していた時点と推測される(用紙の使用環境から三二年半ば以後三二年にかけてと想定する。<sup>12)</sup>

「文語」は初期段階から再編へ移行する期間に重なる。

たとえば「病気」には、二八・二九(昭和三・四)年における闘病を題材とした『疾中』詩篇が該当して、<sup>13)</sup>それは協会時代の終焉とその後を物語る位置づけになるのだろう。ただこれには、

II 疾中 8.1928 — 1930

(IIはIIを重ねて4を示すもの)

と集名と番号、時期を指示するラベルを貼った黒クロス表紙が、与えられることになる。それは「第三」構想の部立てから「病気」詩篇が離脱し、4番めの集として独立すべきことを示唆している。<sup>14)</sup>実際「第三」構想は、三二年から三三年の間に崩落してゆくのだった。具体的には、『第三集』稿と口語詩稿を題材あるいは素材に大量の文語詩化が始まる、ということである。離脱する「病気」詩篇以外の、残った部立てについていわば肩代わりするかたちで、文語詩の世界に転生させようとするものである。言い換えれば、<sup>15)</sup>文語詩制作の再編以後は「第三」構想そのものではけっしてないが、それもまた踏まえたいうで成り立っていった、ということである。

つまり、詩法7の「第三」メモの内容は、実質、

第三、「田園」——100頁 (150頁)

—「社会」——15頁

—「信仰」——15頁

—「生活」——20頁

という縮小した部立て構想をもって、「農村」にかかわるなかで生まれた題材に集中することになる。そのなかから文語詩化がすすめられ、次とおり定稿化がはかられたのである(未定稿に置かれたものも他に10編あまりある)。

表⑦

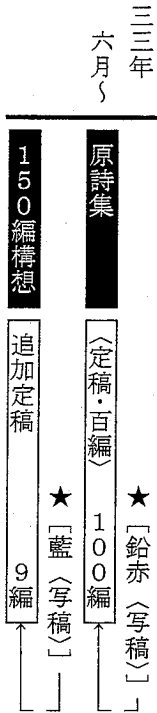
定稿集の編成	100編	第三集稿	11編	定稿化	18編
〈定稿・百編〉	100編	口語詩稿	7編	3編	3編
藍写稿・定稿	9編			7編	
分集増補定稿	42編				

この過程で不意に現われた、「第三」構想からの転生をひとつの柱にした9編の定稿形成には、あらためて文語詩集構想に向かって「第三」構想の残映を刻印しようとする、その意志もまたうかがえるのではないか。

「田園」・「社会」・「信仰」・「生活」といった部立ては、やがて増補されてゆく『文語詩稿』のなかで、田園詩篇・社会詩篇・信仰詩篇・生活詩篇などの性格をさらに豊かにして「農村」を現出させる、そういうかたちで確かに反映している。150編という数的枠組みを設定する詩人の内部で、縮小「第三」構想の(150日)分というボリュームの残響もあつたのではないかということである。

おわりに

ブルーブラックインク(写稿)による定稿の形成が転機となり、〈定稿・百編〉は『文語詩稿』への途に踏みだしてゆくありようをみてきた。最後に、その発展の過程を見とおして、この試論を閉じることとしたい。



八月

詩集分立構想

★草稿の見直し

定稿分離 33+5編

補充定稿 12編

一五日

『五十篇』の成立

定稿分離 67+4編

追加定稿 14編

補充定稿 16編

二二日

『一百篇』の成立

その過程とは、右に掲げたように、(定稿・百編)を発展の礎となる原詩集にも位置づけて始まるものである。それに対し、ブルーブックインクの(写稿)による追加定稿が生まれて、転機をうながすことになる。このとき150編という発展の大枠が与えられたと推定するが、この増補のために、(写)印をもたない草稿群から補充定稿を加えなければならない。そこで、あらためて草稿の見直しにかかった段階に、50編と100編とに分集することが決断されたものと考えられる。それが等分でないわけは、成立した『五十篇』・『一百篇』それぞれの詩集構想を追究するなかで理解できようが、それは今後の課題として担うこととし、現段階では不明というしかない。詩人はまず『五十篇』を分離、独立させる作業から入っている。原詩集と追加定稿から38編を取りだし、これに12編の補充定稿を加えて一集とした。その和紙表紙には(現存せず。三四(昭和九)年から刊行された文圃堂版『宮澤賢治全集』第二巻による)。

文語詩稿五十篇／本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在に現在の推敲を以て定稿とす。／昭和八年八月十五日

と自書されている。「表現未だ足らざれども」といった気がかりなところを抱えつつも「現在は現在の推敲を以て定稿とす」と言い切っているところに、この詩集の相当の到達が詩人自身によつて認められている、とみえる(傍点は島田、以下同)。

この『五十篇』のために補充定稿を形成していたとき、詩人は同時に、青インクによる(写稿)の形成をおこなう。そう推定するのは、鉛筆・赤インク・ブルーブックインクの先行(写稿)に紛れぬよう別の色で(写)印を与えて、これが『一百篇』のための草稿であることを示し、実際に『一百篇』定稿に至るからである。

その『一百篇』は、残された原詩集・追加定稿の分離71編に、青インク(写稿)による追加定稿14編とで85編の土台がすでに

う築かれていた。そこに詩人は15編プラス1という補充定稿を加えてしまう。その101編という納まり具合に、ブルーブラックインク〈写稿〉による追加定稿が出現したときと同じ衝動を、なお抑えがたかった詩人のすがたが浮かぶ。この和紙表紙については次の自書があった。

No. IV (ラベル) / 文語詩「篇↓稿」一百篇、昭和八年八月廿二日 / 本稿集むる所、想は定まりて表現未だ定らず。 / 唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。

貼られたラベルの「No. IV」からは、『五十篇』が「No. III」として成立していたことが推定される(そこにはやはり詩法7の「第三」構想という存在の影が、重なってほの見えないか)。その『五十篇』成立後、わずか一週間ほどで集を終えたのはすでに土台があったからだ、そこで「表現未だ定らず」と断言しつつ「推敲の現状を以てその時々々の定稿となす」と含みを持たせているのは、表現の未定を認めるとともに収容された詩稿の定稿性が必ずしも均質でないことを吐露しているようである。

こうして「表現」の未熟を気につけて、現在 / 現状という着地点にこだわりをみせながらも、『文語詩稿』の編集作業は閉じられた。その一か月の後、詩人は死を迎えることになる。

(注)

1 六月頃弟の清六が新たな詩稿用紙を依頼され調達している(『兄のトランク』筑摩書房一九八七)。島田『文語詩稿叙説』第4章3節に〈文語詩篇・百篇〉構想と仮称してウル定稿・集の展開を想定したが、その定稿化がここにいる〈定稿・百編〉である。

2 島田「ほどほどと麻亭うつ妻 / 麻打」(『叙説』附章所収)を参照されたい。なお本研究でも資料篇iに自筆稿の複写を掲げている。

3 宮沢賢治は、中学卒業の四月から五月にかけて岩手病院で鼻腔の手術後高熱がつづいて入院、その間、付き添いの父親が病んだり、看護婦に恋し退院後も思慕しつづけたりということがあった。その体験を素材に恋愛詩篇として詠嘆的に起稿して、その主観性を削ぎ落としながらたどりついた〈写稿〉をもとに、定稿では挿喩的手法によって詩の場を客体化するのである。

4 定稿化された最終草稿の多くはふたつの〈山〉に振り分けてあったが、その〈山〉のひとつ(遺稿整理時上方番号「4」)には、「エレキに魚をとるのみか」・「ながれたり」(後半部草稿のみ)・「職員室」・「なべてはしけくよそほひて」

などの未定稿に置かれている草稿がある。これらは定稿には採られなかったけれども、最後まで定稿候補稿として「想」の熟成が認められていたものと考えられてよい。

また、そのふたつの〈山〉以外の草稿群からも、たとえば、

・ 無番稿「社会主事佐伯正氏」

- ・ 3 番稿「種山ヶ原」〔こらはみな手を引き交へて〕、〔月のほのほをかたむけて〕
- ・ 10 番稿「庚申」

などが定稿化されてもいる。要するに、詩人の眼前には相当数の置いたままにはできない作品があったのである。

- 5 〈定稿・百編〉における田園詩篇・生活詩篇の分別は次のとおり。

【田園詩篇】(順不同)

- ・「夜」・「<sup>ツル</sup>雨」・「臘月」・「老農」・「賦役」・「市日」・「悍馬二」・「牛」・「母」・「副業」・「祭日」・「早儉」・「村道」・「悍馬一」
- ・「初七日」・「民間薬」・「塔中秘事」・「退職技手」・「開墾地落上」・「電気工夫」・「ボランの広場」
- ・「毘沙門の堂は古びて」・「沃土ノニホヒフルヒ来ス」・「林の中の柴小屋に」・「雪げの水に涵されし」・「秘事念仏の大師匠二」
- ・「うからもて台地の雪に」・「盆地に白く霧どよみ」・「厩肥をになひていくそたび」・「玉蜀黍を播きやめ環にならへ」

【社会詩篇】(順不同)

- ・「廃坑」・「短夜」・「酸缸」・「早春」・「晝眠」・「医院」・「葵花」・「式場」・「水上」・「四時」・「著者」・「来賓」・「雪の宿」
- ・「崖下の床屋」・「嘆願隊」・「巡業隊」・「車中一」・「中尊寺」・「来々軒」・「軍事連鎖劇一」・「紀念写真」・「林館開業」
- ・「歯科医院」・「保線工手」・「砲兵観測隊」・「岩手公園」・「羅沙壳」・「卒業式」・「病技師一」
- ・「残<sup>キツク</sup>丘の雪の上に」・「古き勾当貞齋が」・「氷雨虹すれば」・「白金環の天末を」・「腐植土のぬかるみよりの照り返し」
- ・「いたつきてゆめみなやみし」・「小きメリヤス塩の魚」・「燈を紅き町の家より」・「僧の妻面膨れたる」・「日本球根商会在」
- ・「さき立つ名譽村長は」・「ほのあかり秋のあぎとは」・「塀のかなたに嘉苑治かも」・「あな雪か屠者のひとりは」
- ・「商人らやみていぶせきわれをあざみ」・「水楢松にまじらふは」・「夜をま青き蘭むしろに」・「あかつき眠るみどり」を
- ・「血のいろにゆがめる月は」・「天狗葺けとばし了へば」・「老いては冬の孔雀守る」

- 6 深澤あかね「近代化過程における地方都市商業者の関わり―岩手県花巻地方のインフラ整備を中心に―」(『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集第1号二〇〇五) 参照。鉄道・電気・電鉄・病院などの整備に花巻地方の商業者がかかわっていたことを明らかにしている。

- 7 「秘事念仏」は隠し念仏、江戸時代以来異端として迫害され、明治以後も弾圧がつづいた。

- 8 当時、農村では自家製の麻布で家族の衣類をあつらえることがあった。その工程は、春の麻播きから夏の麻刈り、麻漬け、麻引き(皮剥ぎ)、麻打ち(麻もみ)を経て、麻績みに至る。この糸績みは秋から冬にかけての夜なべである。その後をやっと、染色・織布・縫製などの過程がくる。一年がかりのこの作業は、すべて女性たちの為事とされていた。

- 9 この妻の容貌(重腫)に重なる女性が三三〇番稿にも登場するのだが、口語稿のほうが、その素材を導入したふしもある。両稿の形成過程で時期的に重なるところがあるからである。



10 詩稿用紙は二九年以前に赤野、三〇年前後からは黄野2種(26・24行野)、三一年前後に黄野(22行野)、三三年六月には赤野(いわゆる定稿用紙)があつたらしい。

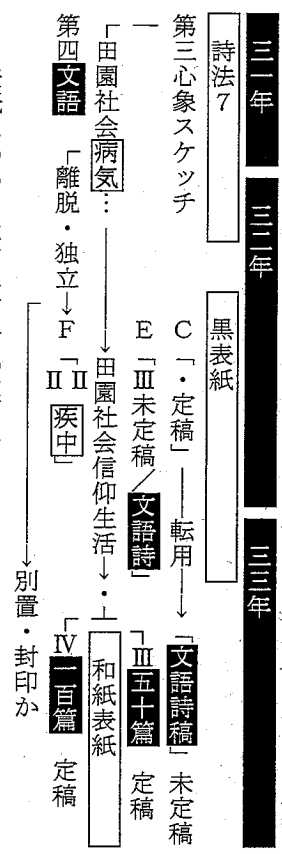
11 木村東吉「作品番号欠落過程と『春と修羅第三集』一九三一年構想」(『島根大学教育学部紀要』27巻1号一九九三・一一)・『春と修羅第三集』一九三一年構想「生活・社会詩篇」試論(『島大国文』22号一九九四・二)・『春と修羅第三集』一九三一年構想「田園詩篇」試論(『島根大学教育学部紀要』27巻2号一九九四・三)に考察がある。

12 三一年前後からの22系用紙の口語詩稿(職員室に、こつちが一足はいるやいなや)(下書稿二)を文語詩「来賓」(下書稿一)に転換しようとしたそのウラ余白に記入。口語稿が文語詩化に向かう時期とすれば三二年前後とみるべきか。とすれば、「文語」は再編の針路をまだ見定めていなかったと考えられる。

13 杉浦静「『春と修羅第三集』の生成」(『宮沢賢治明滅する春と修羅』所収、蒼丘書林一九九三)、及び注10の木村氏第一論文に指摘がある。

14 黒クロス表紙は草稿段階を収容したもの。この時点で「第四、文語」は宙に浮くことになる↓注15。「疾中」に与えられた表紙Fは『春と修羅第二集』(未定稿)からの転用。『第二集』稿は三二年一月以降雑誌発表がつづき、三三年定稿用紙への展開があるので、草稿整理が大きく進んでその表紙を他へ転用するとすれば、三二年以後と想定するのが妥当ではなからうか。

15 『春と修羅第三集』の定稿とすべき草稿に用いた黒クロス表紙Cが最終的には藍により「文語詩稿/想未だ熱せず表現本より定まらざるもの」として未定稿草稿に転用される。藍で「Ⅲ・2」とした『第三集』未定稿草稿への表紙Eラベルにも、鉛で「No.2」「文語詩」(?)(?)「(?)」(?)は不明文字」と書き込みが添えられ「文語詩への改作を示唆する」(新校本全集第三巻校異)とみられる動きがある。つまり「第三」の位置に文語詩制作が重なってきたのである。筆具が異なるので先のFとこのEとの間に時差はあるが、関連があるとみれば、次のような詩集番号のながれもおぼろげにも見えてくる。



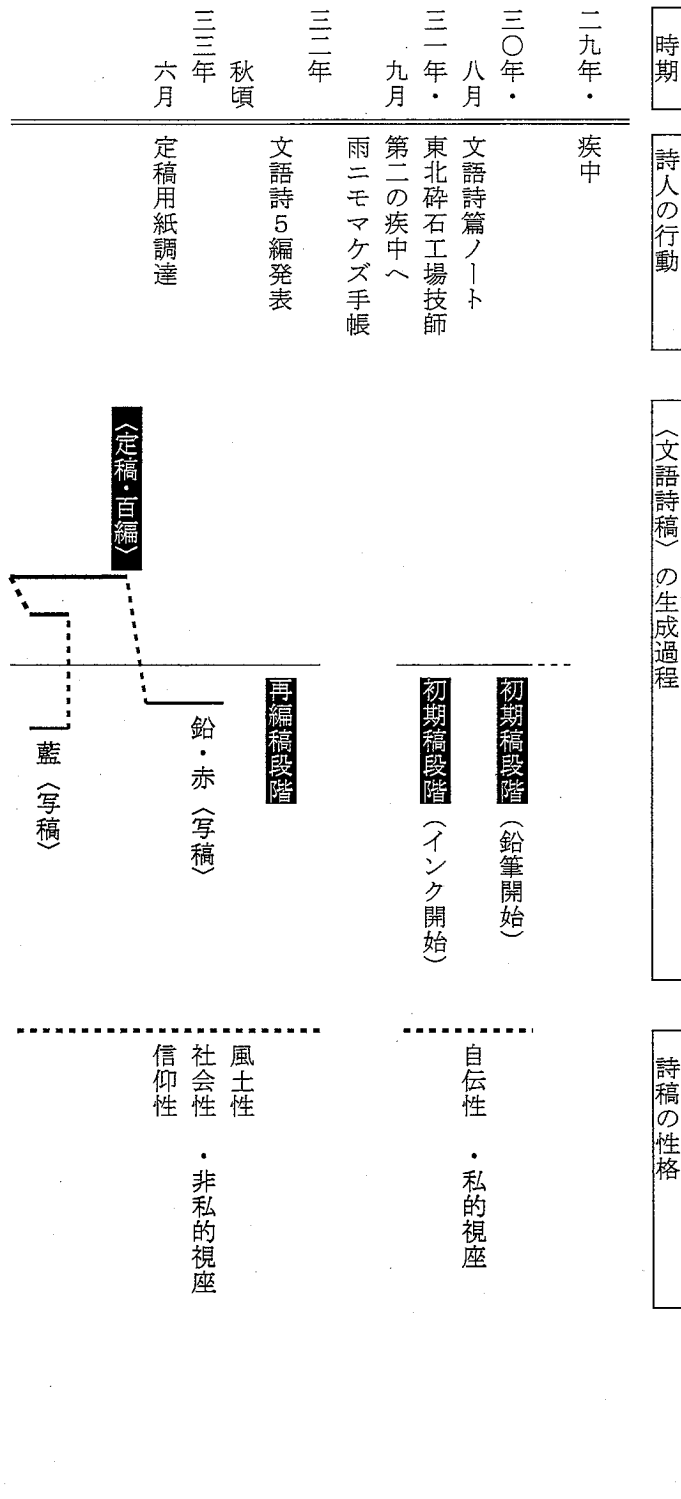
黒クロス表紙については、杉浦静「『春と修羅』の行方」(注13同書所収)とその改訂論「詩稿集」と(山)―宮沢賢治晩年の詩稿整理・再説―(『国語と国文学』74巻5号一九九七・五)、木村東吉「第三章『春と修羅第二集』最終構想の輪郭―黒クロス

表紙のメモと《遺稿整理時番号》の再検討―『宮澤賢治《春と修羅第二集》―その動態の解明―』(溪水社二〇〇〇)に、それぞれ実態解明の試みがある。ここでは《文語詩稿》の集成立の過程に軸をおいて表紙C・E・Fの位置づけを試みた。これは、杉浦氏の改訂論が「文語詩稿の〈定稿〉の成立と相前後し」た黒クロス表紙の動きとそれにとまなう『第三集』の解体過程を見とおしているのに沿っている。文語詩には専用の黒クロス表紙A(定稿とすべき草稿)↓『第二集』(未定稿転用)・B(未定稿草稿)があるが、これには詩集番号と読める記入が確認できない。

4節 本研究の到達と今後の課題

1

本研究は、『文語詩稿』における初期稿段階から、再編、定稿化を経て原詩集の構築に至った段階までを射程にした、成立過程の検証を主たる目的としている。これによって分明になったところを整理して、概略図示すれば、次のとおりである。



本研究においてたどりついたところ、その要点は次の5点である。

(1) 三〇(昭和五)年から三一(昭和六)年にかけて形成された初期稿段階が、病の再発によって途絶したのち、三二(昭和七)年以降、死病の床にありながらも再開される。その契機に、『雨ニモマケズ手帳』があった。

これは闘病を「道場」として、その生き方を支えてきた信仰の問い直しを徹底的な自己批判と法華経への帰依を厳しく課すことによつて、ようやく信仰の再生、再出発の地点に立ち戻つてゆく記録である。ここで、詩人はあらためて「社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ」という志を再確認している。その志のひとつの現われが《文語詩稿》の再開であり、再編稿の展開は志にもとづく《詩的实践》と考えられる。

(2) その結果、過去から現在までのそのときどきの自己凝視の場として機能していた初期稿のありようから、再編稿は、そうした露わな自伝性を詩層のうちに踏みこんで、詩の場は東北・岩手のこの時代と社会とを批判的に見つめる場の構築に向かつてゆく。すでに指摘がなされてきたとおり、私的視座から非私的視座に立つ詩の場の構築に向かうことになる。言い換えるならば、詩の《社会性》の獲得である。

(3) 再編稿の展開は、その秋以降、ウル定稿としての鉛筆・赤インクによる《写稿》の撰び出しをうながしてゆく。三三（昭和八）年にかけてその成立がみられることを推定した。

そのうえで、およそ100編の《写稿》本文の想定をおこない、その《写稿》群によつた定稿本文との対照によつて、その異同実態をつかみだして分析した結果、《写稿》と定稿との間に詩の場の改変的な変容はみられず、詩想レベルでの大きな変質がないという状況を把握した。このことは、鉛筆・赤インクによる《写稿》が、まさしくウル定稿として撰ばれたものであることを証している。また、詩想の熟成が、ほぼ《写稿》の形成段階で果たされていたということである。

それは、詩人がふたつの詩集の成立によつて最終的に宣言することになる、表現よりも詩想の定立のほうを優先する、という詩の方法に対する態度が再編段階から培われてきていたことを証するものである。

(4) 三三年六月以後、鉛筆・赤インク《写稿》による定稿化がはじまり、100編ほどの定稿による原詩集が構築されるという仮説のもとに、それを仮に《定稿・百編》とした。その詩集としての輪郭を、自然詩篇・田園詩篇・生活詩篇・信仰詩篇という設定をおこないとらえてみると、それが東北・岩手の風土性や色濃い社会性を具現するもので、批判的な社会詩篇的な性格を有するものが多くあることがあらためて確認できた。

それに対して、非私的視座に立つ《定稿・百編》が構築されているなかで、「われ」が登場する信仰詩篇の存在は一見矛盾するようにもみえる。しかし、この詩集が信仰の再生からきた志の《詩的实践》であるとみる立場から、信仰性の付与が、「慢」の思想に陥らぬよう、その原点に常に立ち戻る自戒の働きをもつものであるという理解を提案した。

(5) 最終的に、《文語詩稿》はふたつの詩集として結実することになる。この《定稿・百編》は分離・増補されてゆくのである。けれども、《定稿・百編》に対する推敲の実態を分析すると、個々の詩稿本文はその保守、整備に向かう傾向にあることが指摘されるとともに、定稿「たそがれ思量惑くして」にみられた空白の連を指示する手入れに、他の詩稿がそこに求心的に重なりあえる基軸を設けようとしたものと理解した。つまり、《集》としての構造が強化されているのであり、この原詩集自体に解体をうながすような原因がみあた

らないことを指摘した。

そのうえで、ふたつの詩集への転機としては、〈定稿・百編〉と並行して現われてきたブルーブラックインクの〈写稿〉による定稿化がある、とする仮説を提案した。わずか9編ながら、追加された定稿には農村の暗部を浮き彫りにする社会詩篇が比較的多くみられ、〈定稿・百編〉における田園詩篇群の密度を高めるものであることを指摘して、〈文語詩稿〉の性格をさらに豊にしてゆこうとする、詩人の発展への欲求の兆しをみたのである。

## 2

本研究がたどりついたのは、前節に図示したとおり、〈文語詩稿〉における原詩集の成立段階までである。したがって、この後果たしてゆかなければならないのが、『文語詩稿五十篇』・『文語詩稿一百篇』へと発展する過程の探究である。それらの成立過程を明らかにすることは、同時に、それぞれの詩集構想の枠組みにも接近することになる。原詩集の解体による詩稿の振り分けが示す詩群の性格、そして、その場で草稿の群れから新たに引きあげられ、定稿として補充された詩群の性格とが見とおされるはずだからである。

その見とおしには、個々の詩稿の性格を追究することが並行作業として求められよう。すでに『文語詩稿五十篇』については、信時哲郎の全詩稿評釈が提案され、私自身もまたその訳注稿をととのえ終えており、他の研究者とともにさらに読解の深化をすすめてゆく環境ができてつある。しかし、『文語詩稿一百篇』については全詩稿の基礎的な注釈もそろっておらず、その完遂にはこれから本格的に取り組む必要がある。

四年前に信時哲郎、澤田由紀子とともに立ちあげた「宮沢賢治文語詩研究会」に、伊藤眞一郎、奥本淳恵の参入があり、『一百篇』の詩稿研究を共同してすすめる場が生まれている。1編の詩稿に迫るのに数か月を要するとして、100編（実際には101編ある）の注釈をそろえるのに、一人の手では20年にも及ぼう時間がかかるだろう。共同研究が不可欠なのである。

そうした過程で、『五十篇』・『一百篇』の個々の詩稿あるいは詩稿群に対して、さまざまな視点、課題によるアプローチが交流し、それぞれの詩稿の性格が問いつめられてゆかなければならない。そして、成立過程と個々の詩稿との研究成果を踏まえながら、『五十篇』・『一百篇』の詩集論への到達が現われてくる。そのとき、未解明なままの課題、ある、初期稿の成り立ちにかかわる問題や、未定稿に置かれた詩稿群の成り立ちにかかわる問題についてもまた、進展を期する必要がある。詩の発生と詩の排除という事態が意味するところは、詩集の根幹に迫るのに重要な課題となるからだ。

これらをとおして、『文語詩稿』におけると信仰のかかわりが、重要な課題として常に浮上してくるはずである。たとえば、「法華文学ノ創作」を示唆する『雨ニモマケズ手帳』の内実は、小倉豊文の研究（『雨ニモマケズ手帳』新考』東京創元社一九七八）以来、ほとんど停滞したままであるが、この手帳に深くかかわる『文語詩稿』が、詩人のいう法華文学のひとつとして成長していった可能性が高い。

とすれば、《文語詩稿》がはらんでいる文学性の特質とは、本研究が折々抽出してきた〈社会性〉の獲得といった地点をはるかに超えた「世界」に向かつて開かれてゆくことになるだろう。それが明らかになってきたとき、曖昧だった日本近代詩史における宮沢賢治の位置づけも、確たるものとなるにちがいない。

要するに、最晩年に集中された《文語詩稿》という営為の実体をつかんでゆくことは、「宮沢賢治」という〈テキスト〉に確かに迫るための不可欠な要件のひとつなのである。

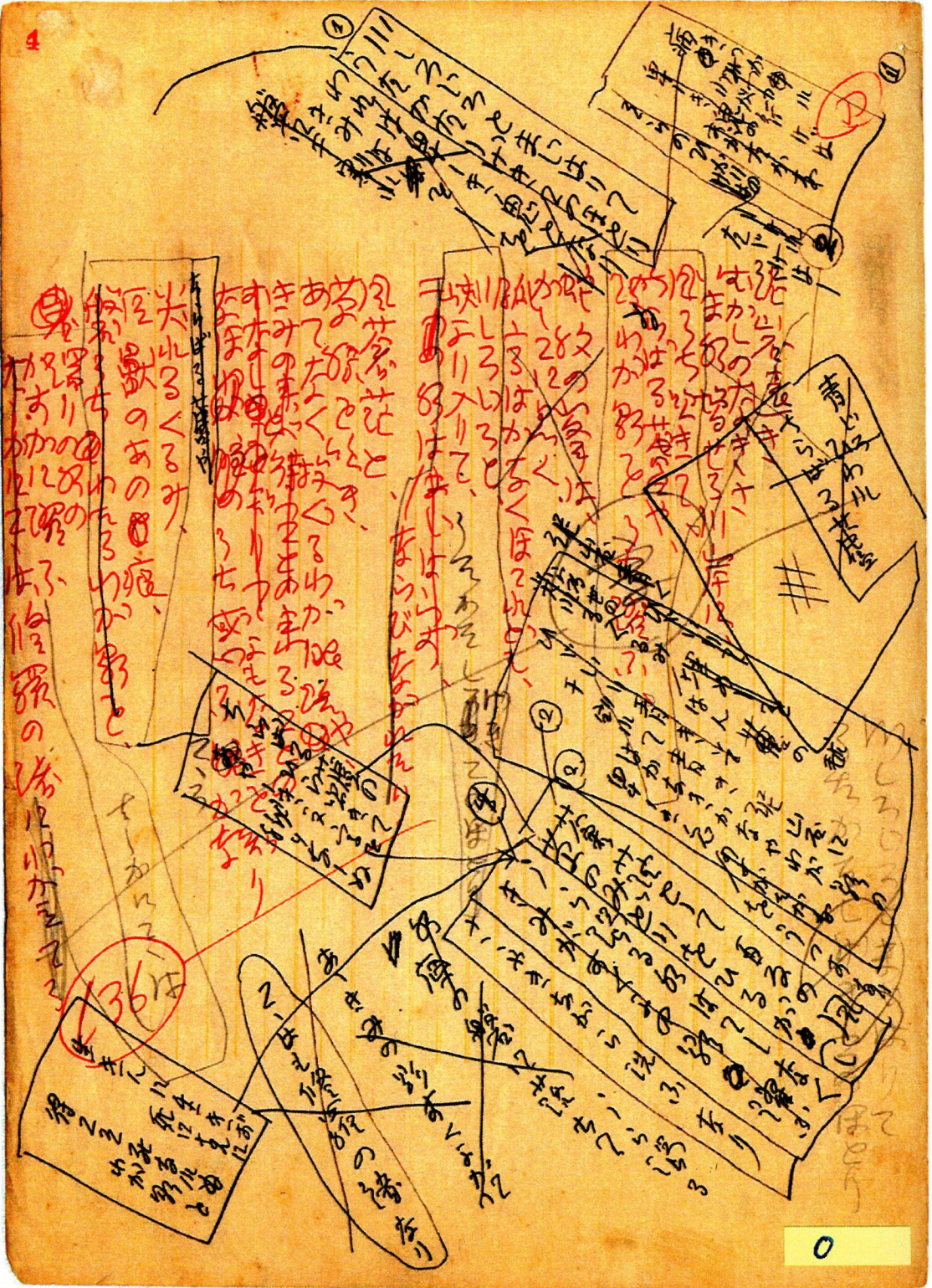
(二〇一〇(平成二二)年五月一日「文語詩集の成立―鉛筆・赤インク〈写稿〉による過程」稿了)

文語詩集の成立・【資料篇】



- |    |              |         |
|----|--------------|---------|
| 0  | 川しろじろとまじはりて  | ・下書稿一、二 |
| 1  | 民間薬          | ・下書稿    |
| 2  | 軍事連鎖劇        | ・下書稿二   |
| 3  | 退職妓手         | ・下書稿    |
| 4  | 砲兵観測隊        | ・下書稿二   |
| 5  | きみにならびて野にたてば | ・下書稿二   |
| 6  | 嘆願隊          | ・下書稿    |
| 7  | 塀のかなた嘉兎治かも   | ・下書稿    |
| 8  | 中尊寺          | ・下書稿三   |
| 9  | うからもて台地の雪に   | ・下書稿三   |
| 10 | 涅槃堂          | ・下書稿三   |
| 11 | 早俣           | ・下書稿二   |
| 12 | 水と濃きなだれの風や   | ・下書稿三   |
| 13 | 林の中の柴小屋に     | ・下書稿二、三 |
| 14 | 岩手公園         | ・下書稿三   |
| 15 | 毘沙門の堂は古びて    | ・下書稿二、三 |
| 16 | 車中(一)        | ・下書稿    |
| 17 | 水雨虹すれば       | ・下書稿二、三 |
| 18 | 電気工夫         | ・下書稿    |

■宮沢賢治記念館蔵自筆原稿の精密複製稿



花巻市







連鏡劇

一巻

このときと田のせんたくや  
まつたくもつて田をたがひし  
やがてほそほそをみわかれま  
すおめひからせ  
この口のえりをあはしりたりけり

49







砲兵観測隊



(は)かしま<sup>ばか</sup>子かの色は  
手ハせせしセガなるを  
まゝろき指はうとふるひ  
銀のモナドはひしめきよ

(い)な見子東かれらこそ  
古き火薬を燃<sup>燃</sup>し<sup>し</sup>へ<sup>へ</sup>ぬ  
うかへる雲をよけおけりつ  
生言ら立を大光せくらけり

110

4



ロマンツエロ

字

きみにならびて 郊野にたてば  
 風まららかに 吹きまきたり  
 相ばやしを ととろかし  
 枯葉を雨よこまらばしぬ  
 けしもひかりの 群青や  
 山のけむりの 乙存在子も  
 鳥はその巢や つくるはん  
 ちかしの 物を ついばみぬ

127



嘆願陵

すがたに時としたりなんを  
 當主いまたは放たれう  
 外の面は冬の玉らからす  
 山のは面のかりやける  
 二羽の鳥の争ひて  
 十つとに落ち入る 初ばやし  
 このとき尤も氣 念和して  
 飛勢は米とむすびけり

89



女学校附遊

客

庭のかたをにきかたをきかたを  
ピアノ、ピアノと弾きこたは

一、あかきくひのきのてをかき

表目のは丸しんあせりいづ

三、あかてしけにかいまりて

鳥はひりの水のめり

あはんつたたまき、ソフロノは

ゆふべの、西云は、ちふふひ

なまきびとま、ひらめきと

相のはをけを山つてきたる

71

7



中尊寺

七重の八重の山塔に  
蓋なるすや 銀の神光

大銀は銀のかたわら

あるがむとまゝ 膝たては

膝のまたをたつふらにて

もろの眩 映えかやナリ

手鏡に得ぬ八重の露の境

文政四は禮して改ゆる

中

88



うからえて其地の雪に  
 部<sup>二</sup>は左せるその杜<sup>一</sup>駒  
 とほ、あや  
 日<sup>一</sup>く 遠<sup>一</sup>りくる旧<sup>一</sup>らを  
 空<sup>一</sup>穴<sup>一</sup>隆<sup>一</sup>ぞ 光<sup>一</sup>りて 西<sup>一</sup>復<sup>一</sup>ふ



望樂堂

黒鳥向か羽立日重げ子  
雁はなほ降りかまめらー

けしきほわが得え死申なす  
人知らははるはる

風鳴ルて松のしめき  
またしはしとびかふ鳥や

雪の山また雪の金  
石一輪塔 数をーらあは

64.

10



旱儉。

雲の鎖やむら立ちや

赤林は左赤林のくろけり

鳥はすなからまか 福津日を

はなるとばかり 群れ去りぬ

野を野のかぎり 早割小田の

白き空穂のなかにて

術まへをもしらに 家長左ち

おなやく風をみまきりぬ

21

11



おと濃きまぢの風や  
から身みのあやちすぢぢ  
つりべルおらめくあと  
ひるかる 温石の門

草草  
海海 暖暖 ち 田田 五五 橋橋 み 尾尾 二  
を、かか ひひ にに やや ぶぶ ぬぬ 神神 の  
雲雲 かか はは をを ここ のの はは ここ か  
青青 とと かか 新新 しし らら ちち も



103



村の中の葉は屋を、  
 磁石成りて  
 一箇の葉をみりて  
 帰る事し  
福者の  
湯り酒

丸かき  
 葉の柳を  
 花

面青  
 能く  
 眼を  
 手

能く  
 かく  
 山  
 と

中  
 風  
 の

由上  
 流  
 へ  
 去  
 る  
 有

者  
 かく  
 土  
 野  
 の  
 有

病  
 かく  
 と  
 主  
 の  
 有

散  
 ち  
 め  
 と  
 有

129

花 卷 市



山手公園

①

山手公園  
 東はるかか  
 ずいし  
 東はるかか  
 ずいし  
 東はるかか  
 ずいし

②

なみち  
 ひと  
 ちの

④

まち  
 の  
 まち  
 の  
 まち  
 の

③

まち  
 の  
 まち  
 の  
 まち  
 の

②







車中

夕陽の colloidal なる様の中にて

狸のごとき大坊主

友は之のけむりサッサイと

本林穂南と論じたり

狸のごとき大坊主

いと清純と尊ぶみしける

寒々天光のうらま青に

おまてをかくしまみはねむれり

ま

143

16



②

きみが眉をくひきみて  
 るまのいとおるに依たる女を  
 今朝もまた氷雨を叩いて  
 舞のかの儂は病をまぬらし

儂又

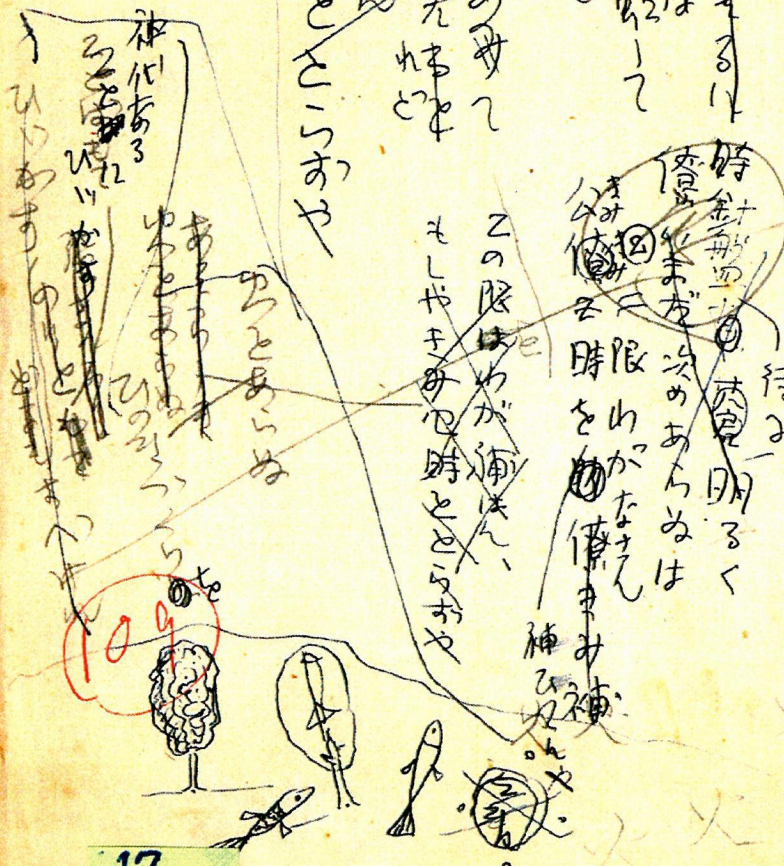
①

氷雨叩くれば  
 時針盤をたいてはる事  
 病の今朝もまた儂の影  
 舞のかの儂は病をまぬらし

あわれはやカ時と寝るは  
 かの儂の改めあらぬは  
 今朝もまた氷雨を叩いて  
 病のうちまよるらし

きみが眉をくひきめて  
 るまのいとおるに依たる女を  
 今朝もまた氷雨を叩いて  
 病のうちまよるらし

火とあらぬ  
 ひのきつくりは  
 こぼれて  
 ぼろぼろけい





電工工夫かけら

② 連耕

① ② ③  
 ④ ⑤  
 ⑥ ⑦ ⑧  
 ⑨ ⑩  
 ⑪ ⑫  
 ⑬ ⑭  
 ⑮ ⑯  
 ⑰ ⑱  
 ⑲ ⑳  
 ㉑ ㉒  
 ㉓ ㉔  
 ㉕ ㉖  
 ㉗ ㉘  
 ㉙ ㉚  
 ㉛ ㉜  
 ㉝ ㉞  
 ㉟ ㊱  
 ㊲ ㊳  
 ㊴ ㊵  
 ㊶ ㊷  
 ㊸ ㊹  
 ㊺ ㊻  
 ㊼ ㊽  
 ㊾ ㊿

④ ⑤  
 ⑥ ⑦ ⑧  
 ⑨ ⑩  
 ⑪ ⑫  
 ⑬ ⑭  
 ⑮ ⑯  
 ⑰ ⑱  
 ⑲ ⑳  
 ㉑ ㉒  
 ㉓ ㉔  
 ㉕ ㉖  
 ㉗ ㉘  
 ㉙ ㉚  
 ㉛ ㉜  
 ㉝ ㉞  
 ㉟ ㊱  
 ㊲ ㊳  
 ㊴ ㊵  
 ㊶ ㊷  
 ㊸ ㊹  
 ㊺ ㊻  
 ㊼ ㊽  
 ㊾ ㊿

正々お計はさるさま程  
 増えに銀一睡は強し

④

18

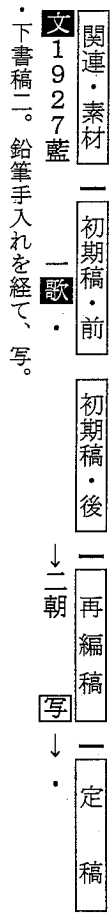
① ② ③  
 ④ ⑤  
 ⑥ ⑦ ⑧  
 ⑨ ⑩  
 ⑪ ⑫  
 ⑬ ⑭  
 ⑮ ⑯  
 ⑰ ⑱  
 ⑲ ⑳  
 ㉑ ㉒  
 ㉓ ㉔  
 ㉕ ㉖  
 ㉗ ㉘  
 ㉙ ㉚  
 ㉛ ㉜  
 ㉝ ㉞  
 ㉟ ㊱  
 ㊲ ㊳  
 ㊴ ㊵  
 ㊶ ㊷  
 ㊸ ㊹  
 ㊺ ㊻  
 ㊼ ㊽  
 ㊾ ㊿

四方辛夷の  
 深淵

④

花巻市

〔写稿〕想定本文と定稿開始形本文との対照については、次のようになう(例示は「あかつき眠るみどりごを」)。



・下書稿二。鉛筆手入れを経て、写。

朝

あかつき眠るみどりごを  
 ひそかに去りて小店さき  
 しとみ上げれば川音や  
 霧は浅黄に明けにけり

黄は旧字

よべの電燈をそのまゝに  
 ひさげのこりし桃の頼の  
 アムステンジュンいろ紅き  
 ほのかに映えて熟るゝらし

①あかつき眠るみどりごを、  
 ひそかに去りて小店さき、  
 しとみ上「げ↓ぐ」れば川音や、  
 霧は「ほのかに↓さやかに」流れたり。

②よべの電燈をそのまゝに、  
 ひさげのこりし桃の頼の、  
 アムステンジュンいろ紅き、  
 ほのかに映えて熟るゝらし。

まず、定稿に至る過程のなかに、新校本全集校異による下書稿やその関係稿などを、私におおよそ位置づけて示した。  
 一三三…とあるのは、新校本全集校異による下書稿番号である。白抜きで示しているのは、それが属しているテキスト群で、それぞれの略号は、

歌・歌稿 (A・Bの別は示す)  
 冬・冬のスケッチ  
 詩・詩ノート

装・装景手記ノート  
 東・東京ノート  
 文・文語詩篇ノート

兄・兄妹像手帳、  
 雨・雨ニモマケズ手帳  
 簡・書簡

一・春と修羅第二集、補は補遺稿  
三・春と修羅第三集、補は補遺稿  
四・口語詩稿

王・王冠印手帳  
G・GERIEF印手帳  
孔・孔雀印手帳

を指している。題名が与えられていない場合には、「一」で示した。了・写は、それぞれ初期稿・再編稿に対して与えられた詩人による符号である。

次に、〈写稿〉の成立時点の推定を解説し、そのうえで、〈写稿〉想定本文と定稿本文とを対照して掲げた。ただし、次のように〈写稿〉と定稿とは形式が異なっている。

〈写稿〉

麻打

- ① 柳葉の銀とみどりと  
はるけきは青らむけぶり
- ② よるべなき水素の川に  
ほと／＼と麻苧うつ妻

定稿

麻打

- ① 柳葉の銀とみどりと、  
はるけきは青らむけぶり。
- ② よるべなき水素の川に、  
ほと／＼と麻苧うつ妻。

「詩行」を列ねることを以て連を構成する〈写稿〉と、原則として句読点を施し「詩句」を整えて2句を上下に配置して連を構成する定稿とは、本質的に異なる詩形式ととらえるべきであるが、いま定稿特有の形式の意味（意図）を問う余裕がない。ただ、定稿本文を句読点ごとに改行してみると、

麻打

- ① 柳葉の銀とみどりと、  
はるけきは青らむけぶり。
- ② よるべなき水素の川に、  
ほと／＼と麻苧うつ妻。

という表記がえられて、〈写稿〉の行形式にほぼ還元できることが分かる。詩の形式を構成する要素として、「詩行」と「詩句」を対応させることができそうである。そこで、便宜上定稿本文を句読点による改行をもって行形式に変換してその詩形を〈写稿〉と対照し、詩形としての異同もまた指摘することを試みたい。

両者は、

鉛筆・赤インク〈写稿〉

定稿

という対置をもつて示し、漢字は旧字体の場合、そのままに示す方針で扱うが、詩人の崩し字や癖字は新字体で掲出した。その際、〈写稿〉本文で、定稿清書前手入れの可能性があるとみられるⅡ類については、〈写稿〉と想定する本文中にその手入れ過程を組みこんで示した。この場合の定稿との異同は、手入れ前段階の本文と対校した。清書前手入れを仮定するⅢ類については、〈写稿〉と想定する本文

をまず示し、清書前と仮定する手入れ過程を後掲した。また、定稿についても、開始形に対する手入れを本文中に組みこんで示している。推敲のありようは、たとえば、

「ほのかに↓さやかに」

などと示しているが、削除（消失）、新設、併存の場合については、それぞれ、

了へ「しな↓」にけり 「・↓片」頬 「水田⇓干泥」

などと表示し、混乱の生じない場合には推敲部分を示す「」をはずした。逆に、同一箇所得手入れに時差がある場合、「ひそやかに↓りりと（こそ↓して）」と、先行するものを（ ）に入れて示した。

■〈写稿〉I類と定稿

〔鉛筆開始（写稿）〕

1 「うからもて台地の雪に」

関連・素材 一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一・↓二・↓三・写 ↓

・下書稿三。手入れなく、〈写〉。

うからもて臺地の雪に  
部落なせるその杜黝し

①うからもて臺地の雪に、  
部落なせるその杜黝し。

曙人憑りくる児らを  
穹窿ぞ光りて覆ふ

②曙人、馮りくる児らを、  
穹窿ぞ光りて覆ふ。

2 中尊寺 〔一〕

関連・素材 一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

冬六・↓一

↓二雨

↓三 中尊寺

写 ↓ 中尊寺

・下書稿三。手入れなく、〈写〉。

中尊寺

中尊寺

七重しちじゆうの舍利せりの小塔こたうに  
蓋かきなすや緑りくの燐光りんこう

大盗たうは銀ぎんのかたびら

おろがむとまづ膝ひざだてば  
蒔まのまなこたゞつづらにて  
もろの眩くら映はえかゞやけり

手た觸ふれ得えね舍利せりの寶塔ほうた  
大盗たうはネ豊とよ(ルビ・らい)して没きゆる

3 退職しやく技手て

関連かん連れん・素材そざい

一 初期しゆ稿こう・前ぜん

二期 初期しゆ稿こう・後ご

三期 再編さい稿こう

四期 定稿てい稿こう

下書稿げ。鉛筆えん手入てれを經へて、(写)。

退職しやく技手て

こぞりてひとを貶おとしつゝ、  
わかれうたげもすさまじき  
おのれこよひは暴あれんぞと  
青あき瓶びん袴はかまも惜おしげなく  
初はつ緑りく金ぎんに生なえそめし  
代しろにひたりて田螺でんひろへり

4 [きみにならびて野のにたてば]

関連かん連れん・素材そざい

一 初期しゆ稿こう・前ぜん

二期 初期しゆ稿こう・後ご

三期 雨あめ

↓二期 再編さい稿こう・後ご

四期 定稿てい稿こう

① 七重しちじゆうの舍利せりの小塔こたうに、  
蓋かきなすや緑りくの燐光りんこう。

△ルビ除外  
△ルビ除外

② 大盗たうは銀ぎんのかたびら、  
おろがむとまづ膝ひざだてば、  
蒔まのまなこたゞつづらにて、  
もろの眩くら映はえかゞやけり。

△ルビ除外  
△ルビ除外

③ 手た觸ふれ得えず十字じゆう燐光りんこう、  
大盗たうはネ豊とよして没きゆる。

△ルビ除外  
△ルビ除外

一 退職しやく技手て写しや ↓ 退職しやく技手て

退職しやく技手て

こぞりてひとを貶おとしつゝ、  
わかれうたげもすさまじき  
おのれこよひは暴あれんぞと、  
青あき瓶びん袴はかまも惜おしげなく、  
初はつ緑りく金ぎんに生なえそめし、  
代しろにひたりて田螺でんひろへり。

△ルビ新設  
△ルビ除去



・下書稿二。書きながら手入れを経て、〈写〉。

ロマンツェロ

きみにならびて野にたてば  
風きらかに吹ききたり  
柏ばやしをとどろかし  
枯葉を雪にまろばしぬ

げにもひかりの群青や  
山のけむりのこなたにも  
鳥はその巢やつくろはん  
ちぎれの艸をついばみぬ

巢は旧字

① きみにならびて野にたてば、  
風きらかに吹ききたり、  
柏ばやしをとどろかし、  
枯葉を雪にまろばしぬ。

② げにもひかりの群青や、  
山のけむりのこなたにも、  
鳥はその巢やつくろはん、  
ちぎれの艸をついばみぬ。

5 砲兵観測隊

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

東・赤↓

下書稿二。書きながら手入れを経て、〈写〉。

↓二砲兵観測隊写

↓砲兵観測隊

砲兵観測隊

砲兵観測隊

(はかばかしきよかの邑は  
よゝ屯せしセガなるを)  
ましろき指はうちふるひ  
銀のモナドはひしめきぬ

① (はかばかしきよかの邑は、  
よゝ屯せしクソなるを)  
[白き鳥毛] ↓ ましろき指「はうちふるひ、  
銀のモナドはひしめきぬ。

(いな見よ東かれらこそ  
古き火薬を燃し了へぬ)  
うかべる雲をあざけりつ

② (いな見よ東かれらこそ、  
古き火薬を燃し了へぬ)  
うかべる雲をあざけりて、

士官の丘を奔せくだりけり

ひとびと丘を奔せくだりけり。

6 軍事連鎖劇

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

冬四

冬四・赤

二連鎖劇

写

「↓軍事」連鎖劇

下書稿一。書きながら手入れを経て、(写)。

連鎖劇

「↓軍事」連鎖劇

①キネオラマ、

寒天光の「そがゆる↓たどなか」に、

ぴたと煙草をなげうちし、

上等兵の袖の上、

また背景の「紺の上↓曉あけぞら」を、

雲どしどしととびにけり。

②そのとき角のせんたくや、

まったくもって泪をながし、

やがてほそぼそなみだかわき、

すがめひからせ、

トンビのえりを直したりけり。

そのとき角のせんたくや

まったくもって泪をながし

やがてほそぼそなみだかわき

すがめひからせ

トンビのえりを直したりけり

7 民間薬

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

下書稿。書きながらの鉛筆手入れのみを経て、(写)。

民間薬

写

民間薬

民間薬

民間薬

民間薬

たけしき耕の具を帯びて  
 羆熊の皮は着たれども  
 夜に日をつげる一月の  
 水田のわざに身をわびて  
 しばしましろの露置ける  
 すぎなの畔にまどろめば  
 はじめは額の雲ぬるみ  
 鳴きかひめぐるむらひばり  
 やがては古き巨人の  
 石の匙もて出できたり  
 ネプウメリてふ草の葉を  
 薬に喰めとをしへけり

8 「塀のかなたに嘉菟治かも」

関連・素材 一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

下書稿。手入れなく、(写)。

女学校附近

塀のかなたに嘉菟治かも  
 ピアノぼろろと弾きたれば  
 一、あかきひのきのさなかより  
 春のはむしらおどりいづ  
 二、あかつちいけにかぐまりて  
 鳥にごりの水のめり

あはれつたなきソプラノは  
 ゆふべの雲にうちふるひ

たけしき耕の具を帯びて、  
 羆熊の皮は着たれども、  
 夜に日をつげる一月の、  
 「水田＝干泥」のわざに身をわびて、  
 しばしましろの露置ける、  
 すぎなの畔にまどろめば、  
 はじめは額の雲ぬるみ、  
 鳴きかひめぐるむらひばり、  
 やがては古き巨人の、  
 石の匙もて出できたり、  
 ネプウメリてふ草の葉を、  
 薬に喰めとをしへけり。

△ルビ除去

△ルビ除去

△ルビ除去

△ルビ除去

△ルビ除去

△ルビ除去

△ルビ除去

一 女学校附近写 ↓

① 塀のかなたに嘉菟治かも、  
 ピアノぼろろと弾きたれば、  
 一、あかきひのきのさなかより、  
 春のはむしらをどりいづ。  
 二、あかつちいけにかぐまりて、  
 鳥にごりの水のめり。

② あはれつたなきソプラノは、  
 ゆふべの雲にうちふるひ、

灰まきびとはひらめきて  
桐のはたけを出できたる

9 嘆願隊

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

嘆願隊

写

↓嘆願隊

・下書稿。書きながらの鉛筆手入れのみを経て、(写)。

嘆願隊 (嘆はが甘の如く、その下に一がある)

やがて四時ともなりなんを  
當主いまだに放たれず  
外の面は冬のむらがらす  
山の片面のかゞやける

嘆願隊 (嘆はが甘の如く、その下に一がある)

①やがて四時ともなりなんを、  
當主いまだに放たれず、  
外の面は冬のむらがらす、  
山の片面のかゞやける。

二羽の鳥の争ひて  
さつと落ち入る杉ばやし  
このとき大氣飽和して  
霧は氷とむすびけり

②二羽の鳥の争ひて、

さつと落ち入る杉ばやし、  
このとき大氣飽和して、  
霧は氷と結びけり。

10 氷上

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌B22 赤

一・了

二・↓三スケート

四・↓五・写

↓氷上

・下書稿五。大幅な鉛筆手入れを経て、(写)。

氷上

①月のたわむれかほるころ  
氷は冴えてをちこちに

①月のたわむれ「靨↓薫ゆ」るころ、  
氷は冴えてをちこちに、

さゞめきしげくなりけり

②をさけびはしるまのころ

高張白くつらねたる

明治女塾の舎生たち

③さてはにはかにあらはれて

もばらにうしろすべりする

黒き毛削の庶(…が丛) 務課長

④死火山の列雪青く

よき貴人の死蠟とも

星の蜘蛛来て網はけり

さゞめきしげくなりけり。

②をさけび走る町のころ、

高張白くつらねたる、

明治女塾の舎生たち。

③さてはにはかに現はれて、

ひたすらうしろすべりする、

黒き毛削の庶(…が丛) 務課長。

④死火山の列雪青く、

よき貴人の死蠟とも、

星の蜘蛛来て網はけり。

△ルビ除去

11 ポランの広場

ウル稿

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

一 田圃の歌(夏) ↓二 イーハト、ウ農民劇団の歌了 ↓三 花巻農学校同級会へ ↓四 ポランの広場のうた了 ↓五 ポランの広場  
・下書稿四。鉛筆手入れを経て、鉛筆の大きな「了」の字と丸囲み、及び横線を付与か。

ポランの広場のうた

つめくさ灯ともす宵の廣場

むかしのラルゴをうたひかはし

雲をもどよもし夜風にわすれて

とりいれまじかに歳よ熟れぬ

組合理事らは藁のマント

山猫博士はかはのころも

醸せぬさかづきその数しらねば

ポランの廣場

つめくさ灯ともす 宵の廣場

むかしのラルゴを 「唄↓うた」ひかはし

雲をもどよもし 夜風にわすれて

とりいれまじかに 歳よ熟れぬ △ルビ新設

組合理事らは 藁のマント

山猫博士は かはのころも

醸せぬさかづき その数しらねば

はるかにめぐりぬ射手や蠅

はるかにめぐりぬ射手や蠅

12 「たそがれ思量感くして」

関連・素材 一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

文1916 赤

一 兩報恩寺訂正

↓ 二書院 ↓ 三書院写

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)。

書院

いく十たびうちくだけつゝ  
たそがれの思量は感く  
こんこんと雪のしきれば  
銀屏の流沙とも観ゆる

① たそがれ思量感くして、  
銀屏流沙とも見ゆるころ、  
堂は別時の供養とて、  
盤証木鼓しめやかなり。

堂はいま別時の供養  
しめやかに盤証は鳴り  
もろともに誦しぞいでぬる  
壽量品第十六や

② 頬青き僧ら清らなるテノールなし、  
「寄寓の老僧」老いし請僧「時々、  
バスなすことはさながらに、  
風葱嶺に鳴るがごとし。

〔・↓③〕

清らなるテノールなすは  
頬青きかの僧ならん  
巨いなる絃器のごとく  
バスなすはかの寄寓僧

松の雪どと落ちたれば  
室ぬちのとみに明るき  
品すでに四請を了へて  
木鼓の音やゝに急なり

〔③↓④〕時しもあれや松の雪、  
をちちちどどと落ちたれば、  
室ぬちとみに明るくて、  
品は四請を了へ「しな↓・」にけり。

13 (さき立つ名譽村長は)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

下書稿一。鉛筆手入れを経て、(写)。

□

一・↓二・写

さき立つ名譽村長は  
寒煙毒をふくめるを  
豪氣によりて受けつけず

次なる沙弥は顛を円き  
猫毛の帽に護りつゝ、  
その身は信にゆだねたり

三なる技師は徳薄き  
零下十度のシロツコに  
なかば氣管をやぶりたれ

最後に女訓導は  
シヨールを面に被ふれば  
アラ一の守りあるごとし

14 (日本球根商会在)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

下書稿一。鉛筆手入れを経て、(写)。

□ 病院の花壇

一・↓二病院の花壇写

↓

定稿

病院の花壇

① さき立つ名譽村長は、  
寒煙毒をふくめるを、  
豪氣によりて受けつけず。

② 次なる沙弥は顛を円き、  
猫毛の帽に護りつゝ、  
その身は信にゆだねたり。

③ 三なる技師は徳薄く、  
すでに過冷のシロツコに、  
なかば氣管をやぶりたれ。

④ 最後に女訓導は、  
シヨールを面に被ふれば、  
アラ一の守りあるごとし。

△ルビ除去

① 日本球根商會が

よきものなりと販りこせば  
いたつきびとは窓ごとに  
春きたらばとねがひけり

② よすがら温あつき春雨に

風信子華の十六は  
黒き葡萄を噴きいでて  
雫しずくひかりてむらがりぬ

③ さもまがつみのすがたして

あまりにくらきいろなれば  
朝焼けうつすいちいちの  
窓はむなしくとざされつ

④ 七面鳥はさまよひて

ゴブルゴブルとあげつらひ  
小き看護は窓に来て  
あなやなにぞといふかりぬ

15 牛

関連・素材

二期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)。

牛

そは一びきのエーシャ牛

① 日本球根商會が、

よきものなりと販りこせば、  
いたつきびとは窓ごとに、  
春きたらばとねがひけり。

② よすがら温あつき春雨に、

風信子華の十六は、  
黒き葡萄を噴きいでて、  
雫しずくがやきむらがりぬ。

③ さもまがつびのすがたして、

あまりにくらきいろなれば、  
朝焼けうつすいちいちの、  
窓はむなしくとざされつ。

④ 七面鳥はさまよひて、

ゴブルゴブルとあげつらひ、  
小き看護は窓に来て、  
あなやなにぞといふかりぬ。

再編稿  
写 ↓ 牛

牛

① そは一びきのエーシャ牛、

△ルビ除去



夜の地靄とかれ草に  
角をこすりてたわむるゝ

窒素工場の火の映えは  
層雲列を赤く焦き  
鈍き砂丘のなたには  
海わりわりとうちふるふ  
さもあらばあれ啜りても  
なほ啜り得ん黄銅の  
月のあかりのそのゆゑに  
こたびは牛は頭をもて  
柵を叩きてたわむるゝ

黄は旧字・

夜の地靄とかれ草に、  
角をこすりてたわむるゝ。

②窒素工場の火の映えは、  
層雲列を赤く焦き、  
鈍き砂丘のなたには、  
海わりわりとうち顛ふ、  
さもあらばあれ啜り「なば」  
なほ啜り得ん黄銅の、  
月のあかりのそのゆゑに、  
こたびは牛は角をもて、  
柵を叩きてたはむるゝ。  
／音高く  
（追加か？ 代替案？）

黄は旧字・

16 「いたつきてゆめみなやみし」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

装飾人鼓して過ぐ

・下書稿一。鉛筆手入れを経て、〈写〉か。

鼓者

一鼓者

了

↓二鼓者

写

↓

いたつきてゆめみなやみし  
(冬なりき) 誰ともしらず  
そのかみの高麗の軍楽  
うち鼓してまちを過ぎりぬ

かの線の工事了りて  
あるものはみちにさらばひ  
あるものは火をはなつてふ

①いたつきてゆめみなやみし、  
(冬なりき) 誰ともしらず、  
そのかみの高麗の軍楽、  
うち鼓して過ぎれるありき。

②その線の工事了りて、  
あるものはみちにさらばひ、  
あるものは火をはなつてふ、

いづちにかひとは去りけん

かくてまた冬はきたりぬ。

17 柳沢野

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌1

歌1・赤鉛

↓

歌1・鉛 ↓ 三裾野 ↓ 柳沢野

↓ 柳沢野

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、〈写〉。

柳沢

柳沢野

焼けのなだらを雲はせて  
海鼠のにほひいちじるき

① 焼けのなだらを雲はせて、  
海鼠のにほひいちじるき。

うれひて蒼き柏ゆゑ、  
馬は黒藻に飾らるゝ

② うれひて蒼き柏ゆゑ、  
馬は黒藻に飾らるゝ。

18 (あかつき眠るみどりごを)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

文1927

歌三

↓ 二期

写

↓

・下書稿二。鉛筆手入れを経て、〈写〉。

朝

あかつき眠るみどりごを  
ひそかに去りて小店さき  
しとみ上げれば川音や  
霧は淺黄に明けにけり

黄は旧字

① あかつき眠るみどりごを、  
ひそかに去りて小店さき、  
しとみ上げれば川音や、  
霧は「ほのかに」↓ さやかに「流れたり」。

語句1とみる

よべの電燈をそのままに  
ひさげのこりし桃の顛の

② よべの電燈をそのままに、  
ひさげのこりし桃の顛の、

アムステルダム ジェンいろ紅き  
ほのかに映えて熟るゝらし

19 峽野早春

関連・素材

二期稿・前

二期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿。鉛筆の手入れを経て、(写)か。

峽野早春

夜見<sup>よみこ</sup>來の川のくらくして  
斑雪<sup>はぐれ</sup>しづかにけむりだつ

二すじ<sup>ふたすぢ</sup>白き日のひかり  
ややになまめく笹のいろ

(稔<sup>と</sup>らぬうらみいよいよに  
春をのぞみて深めるを

↓削除されている)

アムステルダム ジェンいろ紅き、  
ほのかに映えて熟るゝらし。

峽野早春

① 夜見<sup>よみこ</sup>來の川のくらくして、  
斑雪<sup>はぐれ</sup>しづかにけむりだつ。

② 二すじ<sup>ふたすぢ</sup>白き日のひかり、  
ややになまめく笹のいろ。

③ 稔<sup>と</sup>らぬなげきいままさに、  
春をのぞみて深めるを。

④ 雲はまばゆき墨と銀、  
波羅密山の松を越す。

20 流水

関連・素材

二期稿・前後

再編稿

定稿

・歌 710・711bcd、  
・下書稿。鉛筆の手入れを経て、(写)か。

ロマンスエロ

流水<sup>ナニ</sup>

一 ロマンスエロ「冬↓約婚者↓」写 ↓ 流水

①はんのきの高き梢うねより  
きららかに氷華をおとし  
汽車はいまやゝにたゆたひ  
北上のあしたをわたる

②見はるかす段丘の雪  
なめらかに川はうねりて  
青々とかがやく水は  
百千の流水を載せたり

③ああきみがまなざしのはて  
うら青く天盤は澄み  
もろともにあらんと云ひし  
そのまぢのけぶりは遠き

④南はも大野のはてに  
ひとひらの吹雪わたりつ  
日は白くみなそこに燃え  
うららかに氷はすべる

21〔僧の妻面膨れたる〕

関連・素材 初期稿・前  
文1915赤 初期稿・後  
下書稿三。鉛筆1・2手入れを経て、(写)。  
↓二・↓三・写  
再編稿 一定稿

①僧の妻面膨れたる  
飯盛りし佛器さゝぐれば

①はんのきの高き梢うねより、  
きららかに氷華をおとし、  
汽車はいまやゝにたゆたひ、  
北上のあしたをわたる。

②見はるかす段丘の雪、  
なめらかに川はうねりて、  
天青石アマギシまぎらふ水は、  
百千の流水チユウスイを載せたり。

③ああきみがまなざしのはて、  
うら青く天盤は澄み、  
もろともにあらんと云ひし、  
そのまぢのけぶりは遠き。

④南はも大野のはてに、  
ひとひらの吹雪わたりつ、  
日は白くみなそこに燃え、  
うららかに氷はすべる。

①僧の妻面膨れたる、  
飯盛りし佛器さゝぐくる。

△ルビ除去

雪やみて朝日は青く  
かうかうと僧は看経

△ルビ除去

② 寄進札そとろに誦みて  
僧の妻庫裡に帰れば  
いまはとて異の銅鼓うち  
晨光はみどりとかはる

② 「雪やみて朝日は青く、  
かうかうと僧は看経。」  
③ 寄進札そとろに誦みて、  
僧の妻庫裡にしりぞく。

△ルビ除去

22 母

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

文1917赤

一・↓二母↓**翠母**↓二写↓母

・下書稿二。鉛筆手入れを経て、(写)。  
・定稿は現在不明なので、新校本全集による十字屋版全集所収形を掲げる。

母

母

雪袴黒くうがちし  
うなぬのこ瓜食み來れば  
風澄めるよもの山はに  
うづまくや秋のしらくも

雪袴黒くうがちし  
うなぬのこ瓜食みくれば  
風澄めるよもの山はに  
うづまくや秋のしらくも

△ルビ除去

その身こそ瓜も欲りせん  
齡弱き母にしあれば  
手すさびに紅き萱穂を  
つみつどへ野をよぎるなれ

その身こそ瓜も欲りせん  
齡弱き母にしあれば  
手すさびに紅き萱穂を  
つみつどへ野をよぎるなれ

23 「われのみみちにたゞしきと」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後

簡464、488

再編稿 定稿

一・↓二病相写 ↓

・下書稿一。鉛筆手入れを経て、(写)か。

病相

われのみみちにたゞしきと  
ちちのいかりをあざわらひ  
ははのなげきをさげすみて  
さこそは得つるやまひゆゑ  
こゑはむなしく息あえぎ  
春は來れども日に三たび  
あせうちながしのたうては  
すがたばかりは録されし  
下品ざんげのさまなせり

われのみみちにたゞしきと  
ちちのいかりをあざわらひ  
ははのなげきをさげすみて  
さこそは得つるやまひゆゑ  
こゑはむなしく息あえぎ  
春は來れども日に三たび  
あせうちながしのたうては  
すがたばかりは録されし  
下品ざんげのさまなせり。

△ルビ除外  
△ルビ除外

24 四時

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

一・丁 ↓二・ ↓三・写 ↓四時

・下書稿三。鉛筆↓赤鉛筆手入れを経て、(写)。

・定稿用紙に題名「四時」がまず書かれたことが分かる事例。はじめ4行目に記入して3本の棒線で消し2行めに書き直した、それをまた2本の棒線で消して、用紙を天地逆にして、あらためて2行めに書き込んだ、と推定。本文の行あけの取り方にかかわる試行錯誤が、心中でおこなわれたからか。

四時

①時しも岩手軽鉄の  
待合室の古時計  
つまづきながら四時うてば

①時しも岩手軽鉄の  
待合室の古時計、  
つまづきながら四時うてば、

助役たばこを吸ひにけり

②時しも齎きひのきより

農學生ら奔けいでて

雪の紳士のはなづらに

雪のつぶてをなげにけり

③時しも土手のかなたなる

郡役所には議員たち

視察の件を可決して

はたはたと手をうちにけり

④時しも老いし小使は

豚にえさかふバケツして

農学校の窓下を

足なづみつゝ過ぎしなれ

【インク開始（写稿）】

25 「商人らやみていぶせき」

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿一余白稿。青インクで開始し青インク手入れを経て、（写）。

商人ら

やみていぶせきわれをあざけり

川ははるかの峽に鳴る

助役たばこを吸ひやめぬ

②時しも齎きひのきより

農學生ら奔せいでて、

雪の紳士のはなづらに、

雪のつぶてをなげにけり。

③時しも土手のかなたなる、

郡役所には議員たち、

視察の件を可決して、

はたはたと手をうちにけり。

④時しも老いし小使は、

豚にえさかふバケツして、

農学校の窓下を、

足なづみつゝ過ぎしなれ。

①商人ら、やみていぶせきわれをあざ「けり↓み」

川ははるかの峽に鳴る。

ましろきそらの蔓むらに  
 雨をいとなむみそさどる  
 糊に堅めし土いろの  
 かばんをいだく赤髪の子  
 病みに恥■むひるすぎを  
 つめたくすぐる春の風かな

(積、欠字)

② ましろきそらの蔓むらに、  
 雨をいとなむみそさどい、  
 黒き砂糖の樽かげを、  
 ひそかにわたる晝の猫。  
 ③ 病みに恥つむこの郷を、  
 つめたくすぐる春の風かな。

△かなづかい

26 「水と濃きなだれの風や」

関連・素材 初期稿・前  
 補三七五・ 初期稿・後  
 再編稿 一定稿  
 ↓二早池峯中腹了 ↓二藍手入れ ↓三・写 ↓

下書稿三。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

水と濃きなだれの風や  
 むら鳥のあやなすすだき  
 ブリーベルきらめく露と  
 ひるがへる温石の門

① 水と濃きなだれの風や、  
 むら鳥のあやなすすだき、  
 アステイルべきらめく露と、  
 ひるがへる温石の門。

海浸す日より棲み居て  
 たゝかひにやぶれし神の  
 雲かはたこゝろのはてか  
 青々と行衛しらずも

② 海浸す日より棲みゐて、  
 たゝかひにやぶれし神の、  
 二「面の」↓かしら「猛きすがたを、  
 青々と行衛しら」ずも。↓れず。」

27 涅槃堂

関連・素材 初期稿・前  
 初期稿・後  
 再編稿 一定稿  
 二涅槃堂 ↓ 二雨 涅槃堂中 / 羅漢堂看経 ↓ 二鉛手入れ ↓ 三涅槃堂写 ↓ 涅槃堂  
 ・下書稿三。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。



・下書稿二には、(ア)印が与えられていないけれども、無罫用紙に赤インクで起稿するありようは、初期稿「後」段階に展開した(了稿)の要件にあてはまる。符号のつけ忘れ、あるいはひとまずの完了形と認められなかった詩人の態度の現われか、その事情は不明としても、新校本全集校異の草稿順に対して、二→一の順を提案する。

涅槃堂

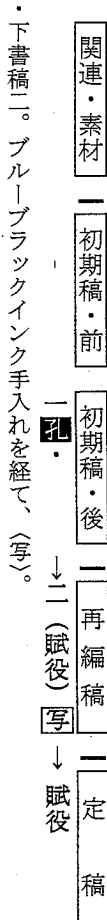
黒鳥か羽音重げに  
雪はなほ降りやまぬらし

けさしなほわが得も死なず  
人知らに堂はうもるゝ

風鳴りて松のさざめき  
またしばしとびかふ鳥や

雪の山また雪の丘  
五輪塔数をしらすも

28 賦役



(賦役) メモのかたちである)

あをあをゆらぐみねの雪  
風は谷より崩れ来て  
萌えし柏をとゞろかし

涅槃堂

①「黒鳥か↓烏らの」羽音重げに、  
雪はなほ降りやまぬらし。

②「わが命なほ今朝↓みぬち火はなほ」燃えて、  
しんしんと堂はうもるゝ。

③風鳴りて松のさざめき、  
またしばし飛びかふ鳥や。

④雪の山また雪の丘、  
五輪塔数をしらすも。

賦役

①「あをあを燃ゆるみねの雪、↓みねの雪よりいくそたび、」  
風は「いくたび↓あをあを」崩れ来て、  
萌えし柏をとゞろかし、

きみかげさうを軋らしむ

おのれと影とたゞふたり  
あれと云はれしわざなれば  
ひねもす白きまなこして  
放牧の柵をつくろひぬ

29〔血のいろにゆがめる月は〕

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

文1914鉛赤

一 文ヨ・抹消 ↓ 二月猪しゴビの砂塵によるといふ ↓ 若手病院了

↓ 三・ ↓ 四・ 写 ↓

下書稿四。大幅なブルーブラックインク手入れを経て、〈写〉。

きみかげさうを軋らしむ。

②おのれと影とたゞふたり、  
あれと云はれし業なれば、  
ひねもす白き眼して、  
放牧の柵をつくろひぬ。

△ルビ新設

①血のいろにゆがめる月は

今宵また櫻をのぼり

患（上の口に一を通して）者たち廊のはづれに

凶事の兆を云へり

②木がくれのあやなき闇を

いくたびぞいゆきかへりて

熱植えし黒き綿羊

聲細り狂ふがごとき

③月しろは鉛糖のごと

柱列の廊をわたれば

コカインの白きかほりを

いそがしくよぎる醫師あり

①血のいろにゆがめる月は、

今宵また櫻をのぼり、

患（上の口に一を通して）者たち廊のはづれに、

凶事の兆を云へり。

②木がくれのあやなき闇を、

「いくそたび ↓ 聲細く」いゆきかへりて、

熱植えし黒き綿羊、

その姿いともあやしき。

③月しろは鉛糖のごと、

柱列の廊をわたれば、

コカインの白きかほりを、

いそがしくよぎる醫師あり。

④ しかもあれ春のをとめら  
 なべて且つ耐えほゝえみて  
 水銀の目盛を数へ  
 玲瓏の氷を割きぬ

④ しかもあれ春のをとめら、  
 なべて且つ耐えほゝえみて、  
 水銀の目盛を数へ、  
 玲瓏の氷を割きぬ。

30 「夜をま青き藺むしろに」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

・下書稿四。同じインクと判断されているブルーブラックインク手入れを経、(写)。

歌妓

夜をま青き藺むしろに  
 ひとびとの影さゆらげば  
 遠き山ばた谷のはた  
 たばこのうねのおもひあり

① 夜をま青き藺むしろに、  
 ひとびとの影さゆらげば、  
 遠き山ばた谷のはた、  
 たばこのうねの想ひあり。

夏のうたげにはべる身の  
 声をちゞれの髪を恥ぢ  
 南かたぶく天の川  
 あはれはかなとすかし見る

② 夏のうたげにはべる身の、  
 声をちゞれの髪を恥ぢ、  
 南かたぶく天の川、  
 ひとりたよりとすかし見る。

31 「あな雪か 屠者のひとりは」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

・下書稿三。ブルーブラックインクの手入れを経て、(写)。

「あな雪か」屠者のひとり  
みなかみのやみをすかしぬ

車押すもろびとはうみ  
えらひなく橋板ふみぬ

「山鳥よ青く流れし」  
屠者の声わぶるがごとき

車押す老いのもろびと  
えらひなくたゞ舌打ちぬ

32 「吹雪かゞやくなかにして」

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

・下書稿三。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

峠

① 吹雪かゞやくさなかに  
燃えて妖しきグリムプス

② 冴ゆれば仰ぐ尾根の上  
片雲プリズムをひるがへす

33 「玉蜀黍を播きやめ環にならへ」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

軍馬補充部主筆

・下書稿二。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

軍馬補充部 ↓ 二 (軍馬補充部) 写 ↓

「あな雪か。」屠者のひとり  
みなかみの鬮をすかしぬ。

車押すみたりはうみ、  
えらひなく橋板ふみぬ。

「雉なりき青く流れし」  
屠者の聲 ↓ 聲またも「わぶるがごとき」。

落合に「鴨 ↓ 水」の聲して、  
老いの屠者たゞ舌打ちぬ。

① 吹雪かゞやくなかにして、  
まことに犬の吠え集りし。

② 燃ゆる吹雪のさなかとて、  
妖しき眼をなせるものかな。

○「玉蜀黍を播きやめ環にならへ  
開所の祭近ければ  
さんさ踊りをさらひせん」  
技手農婦らに令すらく

②野は野のかぎりめくるめく  
青きかすみのなかにして  
まひるをひとらうちをどる  
袖をかざしてうちをどる

③さあれひんがし一つらの  
うこんざくらをせなにして  
所長中佐は胸はりて  
野面はるかにのぞみある

④「いそぎひれふせひさまづけ  
みじろがざれ」と技手云へば  
種子やまくらんいこふらん  
ひとらかすみにうごくともなし

34 「燈を紅き町の家より」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

文1924放蕩書記、赤

一電話↓僚友

↓赤手入れ

↓二・写

↓

・下書稿一。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

①「玉蜀黍を播きやめ環にならへ、  
開所の祭近ければ、  
さんさ踊りをさらひせん。」  
技手農婦らに令しけり。

②野は野のかぎりめくるめく、  
青きかすみのなかにして、  
まひるをひとらうちをどる、  
袖をかざしてうちをどる。

③さあれひんがし一つらの、  
うこんざくらをせなにして、  
所長中佐は胸たかく、  
野面はるかにのぞみある。

④「いそぎひれふせひさまづけ、  
みじろがざれ。」と技手云へば、  
種子やまくらんいこふらん、  
ひとらかすみにうごくともなし。

燈を紅き町の家より  
いつはりの電話來れば  
(うみべより賣られしその子)  
はかなしや白木のひのき

雪の面に低く霧して  
桑の群影ひくなかを  
あゝ鈍びし二重のマント  
そこはかと帰りいく書記

35 「みちべの苔にまどろめば」

関連・素材

文 1926 林中苔 赤

初期稿・前

初期稿・後

再編輯

一定稿

写

下書稿。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

みちべの苔にまどろめば  
日輪そらにさむくして  
わづかによどむ風くまの  
きみが頬ちかくあるごとし

頬は旧字頬

まがつの神の塚ありと  
おどろき離るゝこの森や  
風はみそらに遠くして  
山なみ雪にたゞあえかなる

① 燈を紅き町の家より、  
いつはりの電話來れば、  
(うみべより賣られしその子)  
あはたゞし白木のひのき。

② 雪の面に低く霧して、  
桑の群影ひくなかを、  
あゝ鈍びし二重のマント、  
銅版の紙片をおもふ。

① みちべの苔にまどろめば、  
日輪そらにさむくして、  
わづかによどむ風くまの、  
きみが頬ちかくあるごとし。

頬は旧字頬

② まがつびに塚ありと、  
〔呼ははる声のおどろしき〕 ↓ 誰ぞおどろしく喚びたるを、  
↓ おどろき離るゝこの森や、〔▽ルビ新設〕  
風はみそらに遠くして、  
山なみ雪にたゞあえかなる。

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

■あかるいひるま

・下書稿四。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

けむりは時に丘丘の

栗の赤葉に立ちまどひ

あるとき黄なるやどり木は

ひかりて窓をよぎりけり

黄は旧字・

(あはれ土耳古玉タケスのそらのいろ)

(かしこいづれの天なるや)

(かしこにあらずこゝならず

われらはしかく習ふのみ)

(われらも天を云ひ傳へ

三十三を数ふなり

上の無色にいたりては

光、思想を食めるのみ)

そらのひかりのきはみなく

ひるのたびぢの遠ければ

をとめは餓えてすべもなく

胸なるたまをゆさぶりぬ

一・↓二・↓三・写 ↓

①けむりは時に丘丘の、

栗の赤葉に立ちまどひ、

あるとき黄「金の↓なる」やどり木は、

ひかりて窓をよぎりけり。

黄は旧字・

②(あはれ土耳古玉タケスのそらのいろ、

かしこいづれの天なるや)

(かしこにあらずこゝならず、

われらはしかく習ふのみ。)

③(浮屠ウツらも天を云ひ傳へ、

三十三を数ふなり、

上の無色にいたりては、

光、思想を食めるのみ。)

④そらのひかりのきはみなく、

ひるのたびぢの遠ければ、

をとめは餓えてすべもなく、

胸なる瑠ルをゆさぶりぬ。

37 「厩肥をになひていくそたび」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後

三七三四

・下書稿四。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

再編稿

一・↓二・↓三・↓四・写

定稿

厩肥をになひていくそたび  
まなつをけぶる沖積層  
水の岸なる新墾畑に  
往來もひるとなりにけり

① 厩肥をになひていくそたび、  
まなつをけぶる沖積層、  
水の岸なる新墾畑に、  
往來もひるとなりにけり。

エナメルの雲 鳥の声  
唐黍焼きはみてやすらへば  
熱く苦しきその業に  
遠き情事のおもひあり

② エナメルの雲鳥の声、  
唐黍焼きはみてやすらへば、  
熱く苦しきその業に、  
遠き情事のおもひあり。

△ルビ除去

38 聚雨

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

三七二八

・下書稿。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。

再編稿

写

定稿

聚雨

聚雨かたしゆ  
雨そゞげば新墾の  
すなはちあぐるつちけむり

① 聚雨そゞげば新墾の、  
「いっさんあぐる↓まづ立ちこむる」つちけむり。

△ルビ除去・新設

湯氣のぬるきに人たちて  
故なく怒る身は暗し

② 湯氣のぬるきに人たちて、  
故なく憤る身「は↓も↓は」暗「し↓き↓し」。



ちぎれし草と野ばらの根  
その巢をめぐる蟻の群

杉には水の幡かゝり  
しぶきほのかにあがるなり

39 夜

関連・素材 一 初期稿・前 初期稿・後 一 再編稿 一 定稿

夜 一 夜 写 一 夜 ↓夜

・下書稿。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)。

夜

はたらきまたはいたつきて  
もろ手ほてりに耐えざるは  
おほかた黒の硅板岩礫を  
にぎりてこそはまどろみき

はたらきまたはいたつきて、  
もろ手ほてりに耐えざるは、  
おほかた黒の硅板岩礫を、  
にぎりてこそはまどろみき。

夜

■ (写稿) II 類と定稿

【鉛筆開始 (写稿)】

1 来賓

関連・素材 一 初期稿・前 初期稿・後 一 再編稿 一 定稿

職員室にこつちが一足

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓鉛筆手入れ」には清書前を含む可能性がある。

新年

狩衣黄なる別當は

黄は旧字・

①狩衣黄なる別當は、

黄は旧字・

来賓

③ 「ちぎれし草と野ばらの根、↓すでに野ばらの根を淨み、」  
「その巢をめぐる蟻の群。↓蟻はその巢をめぐるころ。」  
④ 杉には水の幡かゝり、  
しぶきほのかに擴ごりぬ。

眉を「刻みて↓けはしく」茶をの「めり↓み(ぬ↓つ)」

袴羽織のお百姓

ふたり黙して茶をの「めり↓み(ぬ↓つ)」

「いよもだして↓窓をみつめて」校長も

「うすき緑茶を↓たゞひたすらに茶を」の「めるなり

↓み(ぬ↓つ)」

しやうふを塗れるガラス戸を  
学童らこもこものにのぞくなり

眉をけはしく茶をのみつ。

② 袴羽織のお百姓、

ふたり齊しく茶をのみつ。

③ 窓をみつめて校長も、

たゞひたすらに茶をのみつ。

④ しやうふを塗れるガラス戸を、  
学童らこもこものにのぞきたり。

2 廃坑

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

冬 一・二 ↓ 一 ↓ 二・一 ↓ 三 ↓ 三 ↓ 鉛手入れ ↓ 四 廃坑 写 ↓ 廃坑  
下書稿四。鉛筆手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓鉛筆手入れ」は清書前の可能性がある。

廢(了)坑

春ちかけれど坑々の

司は荒れて天霧し

事務所飯場「は↓も」おしなべて

鳥の宿りとかはりけり

みちをながるる雪代に

錆びしナイフをとりいでつ

しばし閱してまもりびと

さびしく水をはねこゆる

廢坑

① 春ちかけれど坑々の、

司は荒れて天霧し、

事務所飯場もおしなべて、

鳥の宿りとかはりけり。

② みちをながるる雪代に

錆びしナイフをとりいでつ、

しばし閱してまもりびと、

さびしく水をはねこゆる。

△ルビ除去

△ルビ除去

3 開墾地落上

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

下書稿。鉛筆手入れを経て、〈写〉か。ただし、次の「↓鉛筆手入れ」には清書前を含む可能性がある。

「・↓開墾地（配分↓落上）」

開墾地落上

白髪「あたまを日にかざし↓かざして」

① 白髪かざして高きは、  
ブロージットと云へるなり。〔1・2行合体、異同1〕

「村会議員↓・」高きは

ブロージットと云へるなり。

ブロージットと云へるなり

「百姓たちのコップには↓・」

② 松の岩頸春の雲、

松の岩頸春の雲

コップに小く映るなり。

「・ばみて遠く↓コップに小く」映「りけり↓るなり」

ゲメンゲラーゲさながら「に↓を」

③ ゲメンゲラーゲさながらを、

「持ち分を分けし荒畑に↓・」

焦げ木はかつとにほふなり。

焦げ木はかつとにほふなり

「双の平手にびたびたと↓・」

④ 額を拍ちて高きは、

額を「叩き↓拍ちて」高きは

また鶯を聴けるなり。

また鶯を聴けるなり

△ルビ除去

4 祭日〔一〕

関連

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一 青田の中の商店了↓祭日了↓二・↓三・ ↓四茶亭↓煮売屋↓五・↓祭日↓五写 ↓煮売？↓祭日  
 ・下書稿五。鉛筆①手入れを経て、〈写〉か。鉛筆②で詩稿題名が付加されたのは、〈写〉付与ののちか。詩稿本文は、題名のみ除いて鉛筆①手入れで成立している。

・②連を凶作の兆候として考えれば、社会詩篇にも位置づけうる。

「・↓煮(…が火) 賣」

①谷権現の祭りとして

麓に白き幟たち

むらがり續く丘丘に

鼓の音の数のしどろなる

②穎花青じろき稻むしろ

水路のへりにただずみて

朝の曇りのこんにやくを

さくさくさくと切りにけり

5〔秘事念仏の大師匠〕二

関連・素材 初期稿・前

二〇五六・

下書稿一。鉛筆手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓鉛筆手入れ」には清書前を含む可能性がある。

初期稿・後

再編稿

一・↓二・写

一定稿

祭日

①谷権現の祭りとして、

麓に白き幟たち、

むらがり續く丘丘に、

鼓の音の数のしどろなる。

②穎花青じろき稻むしろ、

水路のへりにただずみて、

朝の曇りのこんにやくを、

さくさくさくと切りにけり。

秘事念仏の大師匠

元信齊は妻子もて

北上ぎしの南風

けふぞ陸稻を播きつくる

雲紫に日は熟れて

しづに青らむ野いばらや

川は川とてひたすらに

八功德水ながしけり

①秘事念仏の大師匠、

元信齊は妻子もて、

北上ぎしの南風、

けふぞ陸稻を播きつくる。

②雲紫に日は熟れて、

青らみそめし野いばらや、

川は川とてひたすらに、

八功德水ながしけり。

△ルビ除去

「稀には↓時しも↓たまたま」その子口開きて  
 楊の梢「を↓に」「ながむれば||見とるれば」  
 元信齊は齒軋り「つ↓て」  
 石を發止と投げつくる

青「き↓蠅」ひかり「の蠅めぐる↓めぐらしつ」  
 練肥を捧げてその妻は  
 たゞ恩人ぞ導師ぞと  
 おのが夫をば拜むなり

6 酸虹

関連・素材

二期稿・前

二期稿・後

再編稿

一定稿

冬四二・四三光酸 鉛↓二光酸↓三光酸↓四郡衙↓五↓六酸虹写 ↓酸虹

下書稿六。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある。

・↓鶯黄の柳いくそたび

黄は旧字・

・↓窓を掃ふと出でたちて  
 「やゝに硫・の粒噴きて↓」

「窓うち掃ふ柳ゆゑ↓」

「・↓片」頬「は↓・」むなし「き郡長↓くバルコンに↓  
 き郡長」  
 頬は旧字頬

酸えたる虹を「あぎ↓・」わらふ「・↓なり」

「このとき土手のかれ草に  
 青にびマントひるがへし  
 後備大佐の甲齊は

③「たまたま」その子口あきて、  
 楊の梢に見とるれば、  
 元信齊は齒軋りて、  
 石を發止と投げつくる。

④「青↓蒼」蠅ひかりめぐら「しつ↓かし」  
 練肥を捧げてその妻は、  
 たゞ恩人ぞ導師ぞと、  
 おのが夫をば拜むなり。

酸虹

△ルビ除去

◎鶯黄の柳いくそたび、

黄は旧字・

窓を掃ふと出でたちて、  
 片頬むなしき郡長、

頬は旧字頬

酸えたる虹をわらふなり。

さびしく館をめぐりけり↓・

7 「ほのあかり秋のあぎとは」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

歌 B7365737738b 一歌ヨ ↓二訪問 了 ↓三失意 ↓四失意写 ↓家? ↓

下書稿四。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある。

「失意↓家」

「おほいなる秋のあぎとは↓(ほのかなる↓ほのじろく↓

ほのあかり) 秋のあぎとは」

「ほのじろく林をめぐり↓ももどりのねぐらをめぐり」

「頬蒼くまなこひかりて↓官つらの手からくのがれ(て↓し

↓て↓し)」

社司の子「ぞつめたくわらふ↓の」「↓(ありか↓ゆく

あ)を知らず↓知ら(れず↓ずも)」

社殿にはゆふべののりと

「もも鳥のかへりもだすや↓ほのかなる泉の聲や」

そのはははことなきさまに

しらたまのもちひをなせる

8 「うたがふをやめよ」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

冬一七・三八↓一・二・三 ↓三・

下書稿三。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある

(□は(写)印にかかる文字)。

① ほのあかり秋のあぎとは、

ももどりのねぐらをめぐり、

官つらの手からくのがれし、

社司の子のありかを知らず。

② 社殿にはゆふべののりと、

ほのかなる泉の聲や、

そのはははことなきさまに、

しらたまのもちひをなせる。

「ナリトナリアナロ↓いららくをやめよ」林はさむくして

いさゝかの雪凍りしき  
根まがり杉ものび「たつを↓たてるを」

「アナロナビクナビ↓胸張りて立てよ」林の雪の上  
青き杉葉の落ちちりて  
そらにはあまたからすなけるを

「ナビクナビアリナリ↓そらふかく息せよ」杉のうれたかみ  
烏いくむれあらそへば  
「・↓氷」霧「こそ↓ぞ」さつと「さらめき落つれ↓ひかり落つるを」

①うたがふをやめよ、

林はさむくして、

いさゝかの雪凍りしき、

根まがり杉ものびてゆるゝを。

②胸張りて立てよ、

林の雪の上、

青き杉葉の落ちちりて

空にはあまたからすなけるを。

③そらふかく息せよ、

杉のうれたかみ、

烏いくむれあらそへば、

氷霧ぞさつとひかり落つるを。

9 「腐植土のぬかるみよりの照り返し」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一・

了

↓二・

写

↓・(断片稿)

↓三・↓・(青インク起稿)

・下書稿二、鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、その「↓ブルーブラックインク手入れ」に清書前のものを含む可能性がある  
ある(□は写印にかかる文字)。なお、定稿には2種あり、ひとつは冒頭句のみの断片としてある。つまり、この詩稿には、次のような過程があるか。

写

下書稿二(鉛↓藍) ↓定稿断片(藍)

下書稿三(鉛↓鉛) ↓定稿(青↓青)

下書稿三は「下書稿二よりも定稿に近い」(新校本全集校異)ものだが、(写)印はない。つまり下書稿三は、(写稿)後のもので、しかも定稿段階に位置することになる。すると、下書稿二の(写)印は「定稿に写すべきもの」の意であるとみうる場合か。また、定稿が青インクによる起稿である

のは、青インクによる(写稿)の追加及び定稿への青インク手入れ段階に重なるものと考えられることもできる。そう仮定すれば、この詩稿の定稿成立は、鉛筆・赤インク(写稿)のなかでは、もつとも遅いものということになる。

①こは駅前の雪どけの

ぬかるみよりの照り返し

②酸えて積まれし松角に

ちさき露店をひら「くなり↓きたる」

②二銭の鏡数あまた

「泥の反射に↓そらをうつして」なら「ぶなり↓ぶれば」

ひかりを負ひてぬかるみに

すがめのわらべ立「てるなり↓ちてけり」

③やまの方より風ふ「けば↓きて」

水さどめきてゆ「るゝなり↓れゆれつ↓らげるを↓らげ

りと↓らげけり」

よく掃除せしラムプもち

駅夫は南に行「けるなり↓ける」ころ↓あと」

④赤きずぼんに毛皮など

春木ながし「はきたるなり↓のひとの(つら↓列)」

⑤高らかに云ひなめげに見

鳶をかつぎて「すぐるなり↓すぎにけり」

⑤また風吹きてぬかり水

白き西日にそよぐ「なり↓ころ」

みめよき女きたりしと

①「駅前↓腐植土のぬかるみよりの照り返し、  
材木の上のちいさき露店。

②腐植土のぬかるみよりの照り返しに、  
二銭の鏡あまたならべぬ。

③「ぬかるみの光を負ひてすがめの子、↓腐植土のぬか  
るみよりの照り返しに、(額削りし、↓・)」  
すがめの子一人りんと立ちたり。

④「↓よく掃除せし」↓・「ラムプをもちて」コーク

スの、↓腐植土の、」  
「廣場を↓ぬかるみを」駅夫大股に行く。

⑤風ふきて廣場廣場のたまり水、

いちめんゆれてさどめきにけり。

⑥こはいかに赤きずぼんに毛皮など、

春木ながしの人のいちれつ。

⑦なめげに見高らかに云ひ木流しら、

鳶をかつぎて過ぎ行きにけり。

⑧列すぎてまた風ふきてぬかり水、



宿屋に眼ひか「る(なり)↓ころ) ↓りけり」

⑥りん<sup>と</sup>立ちたるすがめの子

ひたすら栗をた「ぶるなり↓うぶれば」

ひかりわづらふぬかるみを

二銭の鏡賣るゝともなし

白き西日にさどめきた「り↓て」た↓・り。

⑨西根よりみめよき女きたりしと、  
角の宿屋に眼がひかるなり。

⑩かつきりと額を削りしすがめの子、  
しきりに立ちて栗をたべたり。

⑪腐植土のぬかるみよりの照り返しに  
二銭の鏡賣るゝともなし。

10 初七日

関連・素材

一 初期稿・前

一 初期稿・後

再編稿

一定稿

・下書稿三。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。鉛筆と競合しないが、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」は清書前の可能性  
がある(□は(写)印にかかる文字)。

「悲歌↓初七日」

初七日

落雁と黒き反り橋  
かの児こそ希ひしものを

①落雁と黒き反り橋、  
かの児こそ希ひしものを。

△ルビ新設

あゝくらき黄泉路の巖に  
その小き掌もて得なんや

②あゝくらき黄泉路の巖に、  
その小き掌もて得なんや。

黄は旧字・

木綿つけし白き骨箱  
哭き喚ぶもけはひあらしを

③木綿つけし白き骨箱、  
哭き喚ぶもけはひあらしを。

△ルビ除去・新設

日のひかり煙を青み

④日のひかり煙を青み、

秋風に児ら「は↓ぞ」呼び交ふ

秋風に児らは呼び交ふ。

△ルビ除去

1 1 コバルト山地

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

コバルト山地？

一・

丁

↓二・↓鉛手入れ↓三コバルト山地写↓晴雪？↓コバルト山地

・下書稿三。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。

「コバルト山地↓晴雪」

コバルト山地。

「ゆきのけぶり||なべてふどき」のたえまより  
はたしらくものきれまより  
コバルト山地山肌の  
ひらめき酸えてまた青き

なべて吹雪のたえまより、  
はたしらくものきれまより、  
コバルト山地山肌の、  
ひらめき酸えてまた青き。

1 2 短夜

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

三〇四二

・下書稿一。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。鉛筆と競合しないが、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」は清書前の可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。

一

「夏↓短」夜↓二短夜写

↓短夜

短夜

短夜

屋臺を引きて帰ってくる  
目あかし町の夜なかなすぎ  
うつは数ふるそのひまに  
もやははなだとかはりけり

①屋臺を引きて帰ってくる、  
目あかし町の夜なかなすぎ、  
うつは数ふるそのひまに、  
もやは浅葱とかはりけり。

みづから塗れるべれんす「伯林青」の

②みづから塗れる伯林青の、

むらをさびしくがわらひ  
胡桃覆へる石屋根に  
いまぞねむれと入り行きぬ

むらをさびしく苦笑ひ、  
胡桃覆へる石屋根に、  
いまぞねむれと入り行きぬ。

13 副業

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

一〇九〇 一 副業 写 ↓ 副業

・下書稿。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。

副業

副業

雨降りしづくひるすぎを  
青きさゞげの籠とりて  
巨利を獲るてふ副業の  
銀毛兔に餌すなり

①雨降りしづくひるすぎを、  
青きさゞげの籠とりて、  
巨利を獲るてふ副業の、  
銀毛兔に餌すなり。

兎はついに「まにあはね↓つくのはね」  
ひとは頬あかく美しければ  
べっ甲ゴムの長靴(へんは甘の下に)や  
緑のシャツも着「たる↓くる」なり

②兎はついに「つくのはね」  
ひとは頬あかく美しければ、  
べっ甲ゴムの長靴(へんは甘の下に)や、  
緑のシャツも着くるなり。  
△ルビ除去

14 国土

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

一 国土 写 ↓ 国土

・下書稿。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。「そのかみひそにうづめけん」のブルーブラックインク手入れは、「書き直し」(新校本全集校異)のもの。

国土

国土

〔雪の↓青き〕草山雑木山

はた松森と岩の鐘

ありともしらぬひだごことに

〔ひかりあざけくわきいでつ↓・〕

白雲「よどみ沈むなれ↓よどみかゞやきぬ」

一石一字をろがみて

〔そのかみひそにうづめけん↓そのかみひそにう

づめけん〕

壽量の品は「玲瓏の↓かゞやきて↓神さびて」

みねにそのをに鎮まりぬ

15 歯科医院

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一 歯科医院了 ↓ 二 歯科医院 ↓ 三 歯科医院写 ↓ 歯科医院

・下書稿三。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある  
(□は(写)印にかかる文字)。

歯科医院

ま夏は梅の枝青く

風なき窓を往く蟻や

碧空の反射のなかにして

うつつにめぐる鑿ぐるま

〔ひるをわびしき↓白き衣せし〕たはれめの

ソーファによりてまどろめ「る↓ば↓る」

磁気の嵐にうちおびへ↓・

①青き草山雑木山、

はた松森と岩の鐘、

ありともわかぬ「鏿↓鑿」ごことに、

・  
白雲よどみかゞやきぬ。

②一石一字をろがみて、

そのかみひそにうづめけん、

壽量の品は神さびて、

みねにそのをに鎮まりぬ。

歯科醫院

①ま夏は梅の枝青く、

風なき窓を往く蟻や、

碧空の反射のなかにして、

うつつにめぐる鑿ぐるま。

②浄き衣せしたはれめの、

ソーファによりてまどろめる、

はてもしらねば磁気嵐、

「・↓はて(し↓を)もしら(ぬ↓ず)↓・」  
 「・↓はて(・↓を)↓(も)し(ねば↓の↓ねば)「磁気」の  
 ↓・↓の↓・」嵐「にうちおびへ↓のはて(・↓も)な  
 き↓・」  
 かほそき肩をおうすのかす

16 紀念写真

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

歌B379、赤メ朝の写真

一・了なし

↓二期念写真

↓紀念写真

・下書稿二。鉛筆↓青インク↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。

紀念寫眞

①學生壇を並び立ち  
 教授助教授みな座して  
 つめたき風の聖餐を  
 かしこみ呼ぶと見えにけり

②(あな虹立てり降るべしや)  
 (さなりかしこはしぐるらし)  
 …(あな虹立てり降るべしや)  
 …(さなりかしこはしぐるらし) …  
 寫眞師台を見まはして  
 ひとりに面をあげしめぬ

③時しもあれやさん「らんと↓として」  
 「身をうち顛かぶふ↓身を顛かぶひぞ出でずし↓はする」学の長  
 …それ「身を顛かぶふ↓をのかん」そのことの

かほそき肩ををののかす。

再編輯稿

一定稿

紀念寫眞

①學生壇を並び立ち、  
 教授助教授みな座して、  
 つめたき風の聖餐を、  
 かしこみ「待つ」呼ぶ」と見えにけり。

②(あな虹立てり降るべしや)  
 (さなりかしこはしぐるらし)  
 …あな虹立てり降るべしや  
 …(さなりかしこはしぐるらし) …  
 寫眞師臺を見まはして、  
 ひとりに面をあげしめぬ。

③時しもあれやさんとして、  
 身を顛かぶはする學まなの長  
 雪刷く山の日もあやに、

ゆゑにはかに推し得ね  
大礼服にかくばかり

美しき効果をなさんこと

いつちの邦の文献か

よく録しつるものあらん…

雪刷く山の目もあやに

たゞさんらんと「身を顛ふ↓わななけ(り↓る)」

しかも手練の写真師が

三秒ひらく大レンズ

千の瞳のおのおのに

朝の虹こそ宿りけれ

たゞさん「らんと↓として」「わななける。↓身を顛ふ。」

③ …それをののかんそのことの、  
ゆゑにはかに推し得ね、

大禮(示がネ)服にかくばかり、

美しき効果をなさんこと、

いつちの邦の文献か、

よく録しつるものあらん…

④ しかも手練の写真師が、

三秒ひらく大レンズ、

千の瞳のおのおのに、

朝の虹こそ宿りけれ。

△ルビ追加

17 塔中秘事

関連・素材

一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

・下書稿七。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。

雪ふかきまぐさのはたけ  
きみばたけ漂雪は奔りて

丘裾の脱穀塔を

ぼうぼうとひ「かりて↓らめき」被ふ

歡喜天そらや過ぎりし

なめらけき「その↓窓」「ガラスより」の玻璃より

塔中秘事

① 雪ふかきまぐさのはたけ、  
玉蜀黍烟漂雪は奔りて、

丘裾の脱穀塔を、

ぼうぼうとひらめき被ふ。

② 歡喜天そらやよぎりし、

「なめらけき窓」ガラスより、↓そが青き天の窓より、「

「なにごとか↓ひそかなる」女のわらひ  
「ひそやかに↓りりと(こ)そ↓して」「りりと↓ふるひ」もれ  
くる

「ひそかなる女のわらひ、↓なにごとか女のわらひ」  
「何(こ)とかりりと漏れくる。↓栗鼠の(こ)ふるひ漏れくる。  
↓ききとふるへる。↓り。↓。↓軋りふるへる。」

18 鶯宿はこの月の夜を雪ふる

関連・素材

一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

二 定稿

一・下 ↓二・↓三・↓四農場 ↓五・↓六・↓七・写 ↓塔中秘事

・「イキル」として復活した下書稿一。鉛筆手入れを経て、赤インクの(写)か。ただし、次の「↓鉛筆手入れ」は清書前の可能性もある。

橋場線七つ森下を過ぐ

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし。

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし、

黒雲ここにてたゞ「ものものし↓みだれたり」

黒雲ここにてたゞ乱れたり。

七つ森の雪にうづみしひとつなり

七つ森の雪にうづみしひとつなり、

けむりの下を近みくるもの

けむりの下を遍りくるもの。

月の下なる七つ森のそのひとつなり

月の下なる七つ森のそのひとつなり、

かすかに雪の皺たゝむもの

かすかに雪の皺たゝむもの。

月をうけし七つ森のはてのひとつなり

月をうけし七つ森のはてのひとつなり、

さびしき谷をうちいだくもの

さびしき谷をうちいだくもの。

月の下なる七つ森のその三つなり

月の下なる七つ森のその三つなり、

小松まばらに雪を着るもの

小松まばらに雪を着るもの。

月の下なる七つ森のその二つなり

月の下なる七つ森のその二つなり、

オリオンと白き雲とをいたゞけるもの

七つ森の二つがなかのひとつなり  
鉞石かへなど掘りしあとのあるもの

月の下なる七つ森のなかのひとつなり  
雪白々と裾を引くもの

月の下なる七つ森のその三つなり  
白々として起伏するもの

七つ森の三つがなかのひとつなり  
貝のぼたんをあまた噴くもの

月のあかりの七つ森のはてのひとつなり  
けはしく白く稜立てるもの

稜立てる七つ森のそのはてのもの  
めぐりおはりて汽笛かえを鳴らせり

【インク開始〈写稿〉】

19 車中〔一〕

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一車中

写

↓車中

・下書稿。ブルーブラックインク↓鉛筆手入れを経て、〈写〉か。ただし、次の「↓鉛筆手入れ」は清書前の可能性もある。

車中

夕陽の colloidal なる棒の中にて

オリオンと白き雲とをいたゞけるもの。

七つ森の二つがなかのひとつなり、  
鉞石かへなど掘りしあとのあるもの。

月の下なる七つ森のなかのひとつなり、  
雪白々と裾を引くもの。

月の下なる七つ森のその三つなり、  
白々として起伏するもの。

七つ森の三つがなかのひとつなり、  
貝のぼたんをあまた噴くもの。

月のあかりの七つ森のはてのひとつなり、  
けはしく白く稜立てるもの。

稜立てる七つ森のそのはて「↓」のもの、  
旋り了りてまこと明るし。

①夕陽の青き棒のなかにて、

車中



狸のごとき大坊主

「たばこ↓はまき」のけむり蒼茫と  
森槐南を論じたり

狸のごとき大坊主

いと清純とよみしける

寒天光のうら青に

おもてをかくしきみはねむれり

20 「天狗草、けとばし了へば」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一〇五三

・下書稿四。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある。なお、定稿本文は、表記にしたがって、句読点で改行をせず、1行を1詩句とみる。

天狗草けとばし了へば  
親方よ

「この萱の根に↓・」朝餉「↓・↓と」せずや「↓・↓こゝ  
な苔むしろ(独立行とする矢印)」

〔十二八〕

(りんと引け↓・↓りんと引け)

りんと引けかし

十二七 西

その標 そこにしはし植うて ↓・

「↓・↓」

りんと引け

開化郷土と見ゆる「ひと↓もの」

葉巻のけむり蒼茫と、

森槐南を論じたり。

②開化郷土と見ゆるもの、

いと清純とよみしける、

寒天光のうら青に、

おもてをかくし「ねむる人あり。」↓ひとはねむれり。」

天狗草、けとばし了へば、  
親方よ、

・朝餉とせずや、こゝな苔むしろ。

……

……

りんと引け、

りんと引けかし。

十二八!

(5・8行合体)

その標うちてテープをさめ来！……

りんと引けかし  
十二八！

その標うちて  
テープをさめ来……」

山の雲に、ラムネ湧くらし、  
親方よ、

雨の中にていっばいやらずや。

「雨の↓山の」雲「の鎖↓に」ラムネ湧くらし  
「山にて白し（・↓その底に）↓親方よ」  
「山の上の（・↓その雲の）↓雨の中にていっばいやらずや」  
「（雲↓底）に↓そこに」ラムネの（・↓たぐひ↓・↓たぐ  
ひ）湧きいづらしを ↓・」

21 萎花

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

註一〇八ダリア品評会席上

一ダリア展

↓

二

ある夏↓三ダリア

「展覧↓品評」

会↓ダリア↓萎花写

↓

萎花

↓

萎花

・下書稿三。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。ただし、次の「↓ブルーブラックインク手入れ」は清書前の可能性がある(□は(写)印にかかる文字)。

萎花

酒精のかほり硝銀の

肌膚灼くにほひしかもあれ

リネンを埋め影織りて

花は夏夜をいきづきし

そは牛飼ひつ商ひつ

はた鉄うてる人々の

さこそつちかひそだてたる

四百の花のラムプなり

萎花

①酒精のかほり硝銀の、

肌膚灼くにほひしかもあれ、

大展覽の花むらは、

夏夜「さやか↓あざら」に息づきぬ。

②そは牛飼ひ「つ↓の」商ひ「つ↓の」、

はた鉄うてるもろ人の、

さこそつちかひはぐくみし、

四百の花のラムプなり。

声さやかなるをとめらは  
おのおの花に票を投げ  
団辨護士もホップ嘯む  
にがきわらひを頬になしき

メダルをとりて会長が  
賞をかゞけしそのころは  
すでに花は藍の夜に  
なかば溶けしさまなりき

←(右下余白にさらに手入れた後、右上余白に)  
[・↓卓をめぐりて会長が

メダルをかけし午前二時  
カクタスシヨウをおしなべて  
花にけはひはあらざりき]

22 「残丘の雪の上に」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

・下書稿。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある。

モナドノツクの雪の上に  
二すじ「うるむうかぶ」雲ありて  
誰かは知らねサラアなる  
ひとのおもひをうつした「り↓る」

「信↓信仰崇神」を「だになほ↓だに」装へる  
よりよき生のこのねがひを

③ 声さやかなるをとめらは、  
おのおのよきに票を投げ、  
[団(・↓辨)護士↓高木検事]もホップ嘯む、  
にがきわらひを頬になしき。

④ 卓をめぐりて会長が、  
メダルを懸くる午前二時、  
カクタスシヨウをおしなべて、  
花はうつゝもあらざりき。

① 残丘の雪の上に、  
二すじうかぶ雲ありて、  
誰かは知らねサラアなる、  
女のおもひをうつしたる。

② 信をだになほ装へる、  
よりよき生のこのねがひを、

△ルビ新設

「なにとて↓なほしも↓なにとて」きみはさとり得ぬ」と↓  
 や→と」  
 「や」にうらみて消えにけり↓しばしう(る↓ら)みて消  
 えにけり」

なにとてきみはさとり得ぬと、  
 しばしうらみて消えにけり。

23 病技師 (二)

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

病技師 写 ↓病技師

病技師

・下書稿。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある。

病技師

あえぎて「丘をおり↓たどる↓くれば」丘並の  
 ↓のひら」  
 地平をのぞむ「五輪塔↓天氣輪」  
 白き手巾を草にして  
 をとめらみたりまどぬしき

①あえぎ「たど」て「く」れば丘のひら、  
 地平をのぞむ天氣輪、  
 白き手巾を草にして、  
 をとめらみたりまどぬしき。

「よき児らかなと↓(み↓大)寺のみちを」こととへ「ば↓ど」  
 「(ひとしく)とも↓(畏れ泣きい)でしは↓(えらひ)↓い  
 ら(はず)肩をすくむるは」  
 はやくも死相われにありやと  
 「さびしく↓肅涼」遠の雲を見ぬ

②大寺のみちをこととへど、  
 いら(はず)肩をすくむるは、  
 はやくも死相われにありやと、  
 肅涼をちの雲を見ぬ。

24 「古き勾当貞齊が」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

一名医小野寺青扇写 ↓・? ↓・

・下書稿。ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。次の「↓ブルーブラックインク手入れ」には清書前を含む可能性がある。

「名翳小野寺青扇↓・」

「名翳小野寺青扇が↓古き勾當貞齊が」

いしぶみ低く垂れ覆ひ

雪の楓は暮れぞらに

黄なるその芽を「覗かする↓うかべけり」

黄は旧字・

「並みて↓列↓連れて」翔けこしむらすぐめ

たまゆらりうと羽はりて

「宙に↓・「停る」↓とすれ↓・「や」↓宙を」たちまちに

りうと羽はり去りにけり

■〈写稿〉Ⅲ類と定稿

【鉛筆開始〈写稿〉】

1 「川しろじろとまじはりて」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一・赤開始

↓鉛筆手入れ↓二・藍手入れ

↓

・下書稿一が赤インクで開始し、赤インク手入れの後に「了」を付与したとみる（初期稿）。再編段階で鉛筆手入れがあり、連ごととみられる枠囲みが施され、それに〈写〉を付与か。同一用紙上でのブルーブラックインク手入れを下書稿二と校異は扱っている。このインク手入れは写の符号に重なっているが、全体「紙を斜めにして書き込まれたもの」で、態度を改めた感じを受け、本文も表現や構成を改めている。仮に清書前手入れと位置づけ、「↓ブルーブラックインク手入れ」として後掲する。丸番号が与えられているが、錯綜しているので略す。

風うち吹きて、  
ちらばる蘆や、  
波わが影をうち濯ぶ

川しろじろと、

①古き勾當貞齊が、

いしぶみ低く垂れ覆ひ、

雪の楓は暮れぞらに、

ひかり妖しく狎れにけり。

②連れて翔けこしむらすぐめ、

たまゆらりうと羽はりて、

沈むや宙をたちまちに、

りうと羽はり去りにけり。

①川しろじろとまじはりて、

うたかたしげきこのほとり、

病きつかれわが行けば、

そらのひかりぞ身を責むる。

峽より入りて、  
うたかたしげきこのほとり  
二水はならびながれたり

風蒼茫と、  
草緑を吹き、

あてなく投ぐるわが眼路や、  
きみ来ることの  
よもなきを知り  
なほうち惑ふこゝろかな

尖れるくるみ、  
巨獣のあの痕、  
磐うちわたるわが影を

濁りの水の  
かすかに濯ふ  
たしかにこゝは修羅の渚

「↓ブルーブラックインク手入れ・下書稿二」

川しろじろとまじはりて  
うたかたしげきこのほとり  
病きつかれわが行けば  
そらのひかりのたゞけはし

宿世のくるみはんの毬  
干割れて青き泥岩に  
はかなきかなやわが影の

「 ↓ 」  
鉛筆の枠囲みなく、  
消し忘れとみる

② 宿世のくるみはんの毬、  
干割れて青き泥岩「を↓に」、  
はかなきかなやわが影の、  
卑しき鬼をうつすなり。

③ 蒼茫として夏の風、  
草のみどりをひるがへし、  
ちらばる蘆のひら吹きて、  
あやしき文字を織りなしぬ。

④ 生きんに生きず死になんに、  
得こそ死なれぬわが影を、  
うら濁る水はてしなく、  
さゝやきしげく洗ふなり。

卑しき鬼をうつすなり

蒼茫として夏の風

草のみどりをひるがへし

ちらばる蘆のひら吹きて

あやしき文字を織りなしぬ

生きんに生きず死になんに

得こそ死なれぬわが影を

うら濁る水はてしなく

さゝやきながら洗ふなり

2 電気工夫

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

詩一〇五一・

一・赤開始

↓鉛手入れ写

↓藍手入れ退耕

↓電気工夫

↓電気工夫

・下書稿。赤インクで開始し書きながらの赤インク手入れの後に(下)を付与したとみる(初期稿)。再編段階前後で、赤インクによる稿の第一連相当の4行分の下部余白に鉛筆の4行分の書き込みがあり、それに横線もかかるかたちで(写)があるので、(写)の付与段階と仮定する。ブルーブラックインク手入れも(写)の符号にかかっているが、赤インク稿の全面的な改編に向かっており、延長的な態度でない。仮に清書前手入れと位置づけ、「ブルーブラックインク手入れ」として後掲する。

電気工夫

四方は辛夷の花盛りあがり  
赤楊の毬果の日に黒ければ  
艸を燃すとて蹄もけぶし

名与村長うなづき行けり

(右下余白に鉛筆で)

「・↓艸を燃すと蹄も焼けば

そのけぶりおぼろに青く

村長はひとりうなづき

①(直き時計はさま頑く、  
憎に鍛えし瞳は強し)

さはあれ攀ぢる電塔の、  
四方に辛夷の花深き。

②南風光の網織れば、  
ごろろと鳴らす碍子群、

△ルビ新設  
△ルビ新設

四方に盛る辛夷の花樹

正しき時計はそのさま頑く  
憎悪にきたえし腫は強し

楊の花芽らひそかに熟し

蛙のたまごもほごれて啼けば

北風氷とひかりを吹きて

老いたる耕者もしづかに笑ふ

艸火のなかにまじらひて、  
蹄のたぐひけぶるらし。

「↓ブルーブラックインク手入れ形」

「・↓退耕↓電氣工夫」

① (直き時計はさま頑く  
憎に鍛えし腫は強し)

さはあれ攀ぢる電「柱の」塔の」

四方に辛夷の花深き

② 南風光の網織れば

ごろろと鳴らす碍子群

艸火のなかにまじらひて

蹄のたぐひけぶるらし

3 市日

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

一市日

写 ↓ 市日

・下書稿。開始形に(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する(ただし、2行めに対するものはメモとみる)。

市日

市日

丹藤<sup>クランド</sup>に越ゆるみかげ尾根  
うつろひかればいと近し

① 丹藤<sup>クランド</sup>に越ゆるみかげ尾根、  
うつろひかればいと近し。



地藏菩薩のすがたして  
栗を食うぶる童と  
縞の粗毛布の胸しぼり  
鏡欲りするその姉と

丹藤に越ゆる尾根の上に  
なまこの雲ぞうかぶなる

〔↓ブルーブラックインク手入れ〕

1 「いと見え／さま」

2 粗「毛↓麻」布

4 来々軒

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編輯

一定稿

・下書稿。鉛筆の開始形に、題名を与えて〈写〉か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

林氏叱弟子（題材メモかもしれない）

来々軒

① 浙江の林光文は、

かゞやかにまなこ瞋き、  
そが弟子の足をゆびさし  
凜としてうちもゆるがね

① 浙江の林光文は、

かゞやかにまなこ瞋き、  
そが弟子の足をゆびさし、  
凜としてみ「ゆる↓じろ」  
きもせず。

② ちぢれ雲西に傷みて

いささかの粉雪ふりしき  
警察のスレートも暮れ  
賣り出しの旗もわびしき

② ちぢれ雲西に傷みて、

いささかの粉雪ふりしき、  
警察のスレートも暮れ、  
賣り出しの旗もわびしき。

③ むくつけき犬の入り来て  
ふつふつと釜はたぎれど  
セーターの林光文は  
額青くみじろぎもせず

④ もろともに凍れるごとく  
もろともに刻めるごとく  
雪しろきまちにしたがひ  
たそがれの雲にさからふ

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 林氏叱弟子／「・↓來々軒」

2 凜として「うち↓そと」もゆるが「ね↓ず」||「・↓  
みゆるぎもせず」

5 林館開業

一 関連・素材

一 初期稿・前

一 初期稿・後

一 再編稿

一 定稿

一 開業日

写 ↓ 林館開業

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

開業日

凝灰岩もて疊み杉植えて  
をみな六七なまめかし  
南銀河と野の黒に  
その窓々をひらけたり

数寄の光壁更たけて

③ むくつけき犬の入り来て、  
ふつふつと釜はたぎれど、  
額青き林光文は、  
そばだちて、みじろぎもせず。

④ もろともに凍れるごとく、  
もろともに刻めるごとく、  
雪しろきまちにしたがひ、  
たそがれの雲にさからふ。

林館開業

① 凝灰岩もて疊み杉植えて、  
「青娥↓麗姝」六七なまめかし、  
南銀河と野の黒に、  
その窓々をひらけたり。

② 数寄の光壁更たけて、

△ルビ新設

千の鱗翅と鞘翅目  
直翅の輩はきたれども  
をとなふ客はなかりけり

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「をみな↓綏女」

2 「をとなふ客はなかりけり↓公子訪へるはあらざりき」

6 曉眠

関連・素材

一 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

冬一九朝

一 冬朝 鉛

二・↓三 贗物師↓

曉眠写

↓ 曉眠

下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

曉眠

かそけき霜のかけらもて  
西風ひばに鳴りくれば  
街の燈の・のひとつ  
ふるえて弱く落ちんとす

黄は旧字・

そは腫ゆらぐ翁面

おもてとなして世をわたる  
かのうらぶれの贗物師  
木藤がかりの門なれや

寫樂の雲母をもみ削げ  
芭蕉の像にけぶりしつ  
春はちかしとしかすがに  
雪の雲こそかぐるなれ

千の鱗翅と鞘翅目、  
直翅の輩はきたれども、  
公子訪へるはあらざりき。

曉眠

① 微けき霜のかけらもて、  
西風ひばに鳴りくれば、  
街の燈の・のひとつ、  
ふるえて弱く落ちんとす。

黄は旧字・△ルビ除去

② そは腫ゆらぐ翁面、

おもてとなして世をわたる、  
かのうらぶれの贗物師、  
木藤がかりの門なれや。

△ルビ変更  
△ルビ新設

③ 寫樂が雲母を揉み削げ、  
芭蕉の像にけぶりしつ、  
春はちかしとしかすがに、  
雪の雲こそかぐるなれ。

ちいさきびやうやうしなひし  
あかりさゆらぐこの門に  
あしたの風はとどろきて  
ひとははかなくなほねむるらし

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「かそ↓はる」けき

7 「沃土ノニホヒフルヒ来ス」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌 A313、466

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、〈写〉か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

一・↓地点↓ニ・断↓三・写

↓

① 沃土ノニホヒフルヒ来ス  
青貝山ノフモト谷  
荒レシ河原ニヒトモトノ  
辛夷花サキ立チニケリ

② モロビト山ニ入ラントテ  
朝明ヲココニ待チツドヒ  
或ヒハ鋸ノ目ヲツクリ  
アルハタバコヲノミニケリ

③ 青キ朝日ハコノトキニ  
ケブリヲノボリユラメケバ  
樹ハサウサウト燃エイデテ

④ ちいさきびやうや失ひし、  
あかりまたたくこの門に、  
あしたの風はとどろきて、  
ひとははかなくなほ眠るらし。

① 沃土ノニホヒフルヒ来ス、  
青貝山ノフモト谷、  
荒レシ河原ニヒトモトノ、  
辛夷花サキ立チニケリ。

② モロビト山ニ入ラントテ、  
朝明ヲココニ待チツドヒ、  
或ヒハ鋸ノ目ヲツクリ、  
アルハタバコヲノミニケリ。

③ 青キ朝日ハコノトキニ、  
ケブリヲノボリユラメケバ、  
樹ハサウサウト燃エイデテ、

△ルビ除去

カナシキマデニヒカリタツ

④カクテアシタハヒルトナリ

水音イヨシゲクシテ

鳥トキドキニ群レタレド

ヒトノケハヒハナカリケリ

雲ハ經紙ノ紺ニ暮レ

樹ハカグロナル山ニ

梢螺鈿ノサマナシテ

コトトフコロトナリニケリ

ツカレノ藍ヲクユラシテ

モロ人谷ヲイデ來リ

ココニニタビロソソギ

セナナル荷ヲバトトノヘヌ

ソハヒマビマニトリテ來シ

木ノ芽ノ数ヲトリカハシ

アルヒハ百合ノ五塊ヲ

ナガ大母ニ持テトイフ

ヤガテ高木モ夜トナレバ

サラニアシタヲ云ヒカハシ

オノモニ黒キ松ノ野ヲ

ワギ家ノカタヘイソギケリ

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「鋸↓鋸」

カナシキマデニヒカリタツ。

④カクテアシタハヒルトナリ、

水音イヨシゲクシテ、

鳥トキドキニ群レタレド、

ヒトノケハヒハナカリケリ。

⑤雲ハ經紙ノ紺ニ暮レ、

樹ハカグロナル山ニ、

梢螺鈿ノサマナシテ、

コトトフコロトナリニケリ。

⑥ツカレノ銀ヲクユラシテ、

モロ人谷ヲイデ來リ、

ココニニタビロソソギ、

セナナル荷ヲバトトノヘヌ。

⑦ソハヒマビマニトリテ來シ、

木ノ芽ノ数ヲトリカハシ、

アルヒハ百合ノ五塊ヲ、

ナガ大母ニ持テトイフ。

⑧ヤガテ高木モ夜トナレバ、

サラニアシタヲ云ヒカハシ、

ヒトビドオノモ松ノ野ヲ、

ワギ家ノカタヘイソギケリ。

△ルビ一部除去

- 2 「・↓ヒトビト」オノモ「ニ黒キ↓・」松ノ野ヲ
- 3 ・↓⑤⑥⑦⑧

8 (盆地に白く霧よどみ)

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

文1929赤 一・「了」↓元・↓二・↓凶作地↓三二期写 ↓

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

一学期

盆地に白く霧よどみ  
めぐる山のうちを  
稲田の水は冽くして  
花はいまだにをさまらぬ

窓五つなる学校に、  
さびしく学童らをわが待てば  
藻を装へる馬ひきて  
ひとびと木炭を積み出づる

「↓ブルーブラックインク手入れ」  
1 をさまら「ね↓ぬ」

①盆地に白く霧よどみ、  
めぐる山のうちを、  
稲田の水は冽くして、  
花はいまだにをさまらぬ。

窓五つなる学校に、  
さびしく学童らをわが待てば、  
藻を装へる馬ひきて、  
ひとびと木炭を積み出づる。

△ルビ新設  
△ルビ除去

9 早春

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

冬一二・ 一冬・赤↓二・「了」↓三・写↓四・↓早春

・下書稿三を手入れたのち、下書稿二に対しても、(写)か。その結果、稿二の要素が復活した下書稿四が成る、と想定。下書稿三と二を踏まえた、後掲する「↓ブルーブラックインク」による余白の下書稿四は、清書前と仮定する。(写稿)としては稿三最終形を掲げる。『叙説』3章4節参照。  
・定稿現存せず、十字屋版全集所収形を掲げる新校本全集から引く。

早春

黒雲峽を乱れ飛び  
技師ら亜炭の火に寄りぬ  
げにもひとびと崇むるは  
青き Gossan 銅の脈  
わが索むるはまことのことば  
雨の中なる真言なり

雲うちとぎず巖にもあらず  
撃つにもあらず

わがもとむるはまことのことば  
雨の中なる真言なれ

「↓ブルーブラックインク余白稿」

①黒雲峽を乱れとび

技師ら亜炭の火に寄りぬ

②わがもとむるはまことのことば

雨の中なる真言なり

「導線で、  
げにもひとびとあがむるは

①②の間に」 青き Gossan 銅の脈

10 臘月

関連・素材

一 初期稿・前

二期稿・後

再編稿

一定稿

一・↓二臘月写↓三臘月↓臘月

・下書稿二。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。また右余白にある、未完のブルーブラックインク稿は、稿二を承けた清書直前のものであろう。

臘月

すばるぼしたかく仰ぎつ  
しはぶきてあるじ眠れば

臘月

「すばるぼし高く仰ぎて、  
↓みふゆの火すばるを高め、」  
のど嗽ぎあるじ眠れば、

千キロの水をになひ  
かうかうと水車はめぐる  
歌々

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 仰ぎ「つ↓て」

2 しはぶき「て↓つ」

「↓ブルーブラックインク余白稿」

臘月

すばるぼしたかく仰ぎて  
しはぶきつあるじ眠れば  
千キロの水をになひ

11 「毘沙門の堂は古びて」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一三九夏

一・丁

↓二・写↓三・↓

・下書稿二。鉛筆手入れを経て、(写)か。(写)が与えられたのち、上部余白にブルーブラックインクの下書稿三が展開するものとみて、それは清書前と仮定、「↓ブルーブラックインク」として後掲する。

中ぞらにうかべる雲の

蓋やまたまり／椀のさまなる

毘沙門の堂は古びて

梨白く花咲きちれば

あまの邪鬼払ふと母は  
みどりごを負ひて礼せる

千キロの水をになひ、  
かうかうと水車はめぐる。

① 毘沙門の堂は古びて、

梨白く花咲きちれば、

胸疾みてつかさをやめし、

堂守の眼やさしき。

② 中ぞらにうかべる雲の、

蓋やまた椀のさまなる、

川水はすべりてくらく、

△ルビ除去



川水はすべりてくらく  
草火のみほのに燃えたれ

〔↓ブルーブラックインク余白稿〕

毘沙門の堂は古びて  
梨白く花咲きちれば  
胸疾みてつかさをやめし  
堂守の眼やさしき

中ぞらにうかべる雲の  
蓋やまたまりのさまなる  
川水はすべりてくらく  
草火のみほのに燃えたれ

1 2 式場

関連・素材 一 初期稿・前 二期 初期稿・後 三期 再編稿 四 定稿

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を消書前と仮定する。

式場

氷の雫つらねたる  
赤きみふゆののいばらを  
液量計の雪に盛る  
一行アケ  
鐘を鳴らせばたちまちに  
かしらを下しました反りて

草火のみほのに燃えたれ。

写 ↓ 式場

式場

氷の雫のいばらを、  
液量計の雪に盛り、  
鐘を鳴らせばたちまちに、  
部長訓辞をなせるなり。

〔1・2行合体、異同1〕

部長訓辞をなせるなり

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 氷の雫「つらねたる↓・」

2 「赤きみふゆの↓・」のいばらを

3 雪に盛「る↓り」

4 「一行アケ↓・」

5 「かしらを下しました反りて↓・」

13 雪の宿

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿四。鉛筆手入れを経て、〈写〉か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

雪の宿

ぬさをかざして山つ祇  
舞ふはぶらいの町の書記  
ひとりはかなく瓶びんとするは  
峽には一のうためなり

をさけびたけりあしぶみて  
めぐりをどれるすがたゆゑ  
老いし博士はくしや郡長ぐんちやう  
やゝ凄凉のおもひあり

月や出でにし雪青み  
をちこち犬の吠ゆるころ  
舞ひを納めてひれふしつ

雪の宿

①ぬさをかざして山つ祇、  
舞ふはぶらいの町の書記、  
うなじはかなく瓶とするは、  
峽には一のうためなり。

②をさけびたけり足ぶみて、  
をどりめぐれるすがたゆゑ、  
老いし博士はくしや郡長ぐんちやう、  
やゝ凄凉のおもひ「あ↓な」り。

③月や出でにし雪青み、  
をちこち犬の吠ゆるころ、  
舞ひを納めてひれふしつ、

△ルビ新設

罪乞ふさまにみじろがず

あなや否とよ起てきみと  
博士が云へばたちまちに  
けりはねあがり山つ祇  
をみなをとりて消え去せぬ

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「ひとり↓うなじ」

14 崖下の床屋

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

東床屋の弟子とイデア界 一・  
了 ↓二床屋の弟子 ↓三崖下の床屋写 ↓崖下の床屋  
下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

崖下の床屋

①あかりを外れしふるかどみ  
客あるさまにみまもりて  
唾の子鳴らす空鉢

②かがみは映す崖のはな  
くらき祠に蔓垂れて  
三日月凍る銀なご

③凍そめし泥をほとほと  
かまちにけりて支店長  
ガラスをひらけ入り来る

罪乞ふさまにみじろがず

④あなや否とよ立てきみと、  
博士が云へばたちまちに、  
けりはねあがり山つ祇、  
をみなをとりて消えうせぬ。

崖下の床屋

①あかりを外れし古かどみ、  
客あるさまにみまもりて、  
唾の子鳴らす空鉢。

②かがみは映す崖のはな、  
ちさき祠に蔓垂れて、  
三日月凍る銀斜子。

③返た「る↓つ」泥をほとほと、△ルビ除去  
かまちにけりて「町助役、↓支店長、」  
玻璃戸の冬を入り来る。

④のれんをあけてアーティスト  
白きガウンをつくるひつ  
弟子の缺をとりあぐる

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「ガラス↓玻璃戸」「をひら(け↓き) ↓の冬を」

2 「アーティスト↓理髮(士は↓技士)」

3 「ガウン↓着衣」

15 (翁面おもてとなして世経る)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

自嘲↓・↓二・↓三・写↓

翁面

おもてとなして世経るなど  
ひとをあざみしそのひまに  
やみほゝけつれつかれたれ  
われは三十ちをなかばにて  
白日まみをうちゆらぐ

(われはまなこもさだまらぬ

緊那羅面とはなりにけらしな

消し忘れ)

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 ほゝけ「つ↓た」れ

2 「われはまなこもさだまらぬ↓・」消し忘れ削除

④のれんをあけて理髮技士、  
白き衣をつくるひつ、  
弟子の缺をとりあぐる。

翁面

おもてとなして世経るなど、  
ひとをあざみしそのひまに、  
やみほゝけたれつかれたれ、  
われは三十ちをなかばにて、

緊那羅面とはなりにけらしな。

16 「水榭松にまじらふは」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿一。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

銀行家とその子

① 「柏松にまじはれば  
クロスワードのすがたかな  
誰かやさしくもの云ひつ  
えらひはなくて風吹けり

② 「かしこに立てる榿の木は  
片枝青くしげりして  
パンの神にもふさはしき」  
聲いらだちてやんに云ふ

③ 「かのパスを見よ葉櫻の  
列は氷雲に浮きいでて  
なが師も説かん順列を  
緑の毬に示したり」

④ しばしむなしく風ふきて  
聲はさびしく吐息しぬ  
「こたび縣あがたの負債おひめせる  
われがとがにはあらざるを」

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「柏↓水榭は」松にまじは「れば↓りて」

① 「水榭松にまじらふは、  
クロスワードのすがたかな。  
誰かやさしくもの云ひて、  
えらひはなくて風吹けり。

② 「かしこに立てる榿の木は、  
片枝青くしげりして、  
パンの神にもふさはしき。」  
聲いらだちてさらに云ふ

③ 「かのパスを見よ葉櫻の、  
列は氷雲に浮きいでて、  
なが師も説かん順列を、  
緑の毬に示したり。」

④ しばしむなしく風ふきて、  
聲はさびしく吐息しぬ。  
「こたび縣の負債せる、  
われがとがにはあらざるを。」

△ルビ除去

△ルビ除去

「り」？二重の棒消し線にも見える」

17 村道

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

一〇四三市場帰り

・下書稿一。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

村道

村道

朝日かゞやく水仙を  
になひてくるは詮之助

①朝日かゞやく水仙を、  
になひてくるは詮之助、

あたまひかりて過ぎ行くは  
枝を杖つく村老ヤコブ

あたまひかりて過ぎ行くは、  
枝を杖つく村老ヤコブ。

影と並木のだんだらを  
犬レオナルドひたはしる

②影と並木のだんだらを、  
犬レオナルド足織れば、

賣り酒のみて眼を赤く  
熊は店をばあくるなり

賣り酒のみて熊之進、  
赤眼に店をばあくるなり。

「↓ブルーブラックインク手入れ」

- 1 ①「↓」
- 2 レオ「ナ」・「ルド」・「↓」の「ひたはしる」↓足織れば
- 3 「眼を赤く」↓熊之進
- 4 「熊は↓赤眼に」店を「ば↓」

18 「老いては冬の孔雀守る」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 一定稿

一・↓幻想→断片 ↓鉛手入れ老蘇→園丁写 ↓  
・下書稿。余白に新第一連を立てる鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓青インク手入れ」は清書前と仮定する。

園丁

①老いては冬の孔雀守り  
がまのはばきとかはごろも  
園の広場の午后二時は  
訪ひ来る客もなし

②あるひはくらみまた燃えて

ふりくる雪の縞なすは  
さは遠からぬ雲影の  
日を越し行くに外ならぬ

「↓青インク手入れ」

- 1 守「り↓る」
- 2 広場の「午后二時↓ひるすぎ」
- 3 「訪ひ来る客もなし↓湯管のむせ(ふ↓び)たゞほのか」
- 4 行く「に外なら(ね↓ず) ↓と仰ぎ見る」

19 著者

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌 B238 見本園

未樹園了

一著「書↓者」写

↓著者

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓朱墨の筆による手入れ」は清書前と仮定する(赤インクの(写)印付与後に墨の筆による清書前手入れがあった「林の中の柴小屋」も参照)。

著者

著者

おのれが像を百あまり  
著者の原図と銘うちて  
その造園のテキストに  
かゝげし若き紳士なり  
青き夕陽の寒天や  
U字の梨のかなたより  
革(廿の下に「」)の手袋はづしつゝ  
しづにをくびしとめくるは

〔↓朱墨手入れ〕

- 1 ・ ↓造園学のテキストに／∴／「その造園のテキスト  
に↓・」
- 2 「若き紳士なり↓ことも夢なれや」
- 3 「とめくるは↓あゆみくる」

20 卒業式

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

卒業式

写

↓卒業式

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

卒業式

たとへいくたび紅白の  
甘き澱みのそがなかに  
水差しなどをはこぶとも  
鐘の鳴りなんそれまでは  
つめたくカラのありなんと  
うなじに副へし半巾は  
慈鎮和尚のごとくなり

尚は旧字・

・造園学のテキストに  
おのれが像を百あまり、  
著者の原図と銘うち「し↓て」  
かゝげしことも夢なれやと、  
青き夕陽の寒天や、  
U字の梨のかなたより、  
革(同上)の手袋はづしつゝ、  
しづにをくびし歩みくる。

卒業式

三寶または水差しなど、  
たとへいくたび紅白の、  
甘き澱みに運ぶとも、  
鐘なるまではカラぬるませじと、  
うなじに副へし半巾は、  
慈鎮和尚のごとくなり。

〔2・3行合体、異同1〕  
〔4・5行合体、異同1〕



- 「↓ブルーブラックインク手入れ」
- 1 ・↓三寶または水着しなど
  - 2 甘き澱み「のそがなかに↓に運ぶとも」
  - 3 「水差しなどをはこぶとも↓・」
  - 4 鐘「の鳴りなんそれまでは↓なるまでは」
  - 5 「つめたく↓・」カラ「のありなんと↓ぬるませじと、」

21 岩頸列

関連・素材 — 初期稿・前 — 初期稿・後 — 再編稿 — 一定稿

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

岩頸列

西は箱ヶと森ヶ森  
 椀コ、南昌、東根の  
 古き岩頸の一系列に  
 水霧あえかのまひるかな

からくみやこにたどりける  
 芝雀は旅をものがたり  
 その小屋掛けのうしろには  
 寒げなる山によきによきと  
 立ちし」とばかり口つぐみ  
 とみにわらひにまぎらして  
 澁茶をしげにのみしてふ  
 そのことまことうべなれや

岩頸列

①西は箱ヶと毒ヶ森、  
 椀コ、南昌、東根の、  
 古き岩頸の一系列に、  
 水霧あえかのまひるかな。

②からくみやこにたどりける、  
 芝雀は旅をものがたり、  
 「その小屋掛けのうしろには、  
 寒げなる山によきによきと、  
 立ちし」とばかり口「く↓つ」ぐみ、  
 とみにわらひにまぎらして、  
 澁茶をしげにのみしてふ、  
 そのことまことうべなれや。

△ルビ除去

山よほのぼのひらめきて  
わびしき雲をふりはらへ  
その雪尾根をかゞやかし  
野面のうれひを燃し了せ

「↓ブルーブラックインク手入れ」  
1 「森↓毒」ヶ森

## 22 岩手公園

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

歌B652

一・ア

↓二・

↓三岩手公園写

↓岩手公園

・下書稿三。鉛筆による二段階の手入れを経て、(写)か。三段階めの鉛筆手入れ形は、「写を避けてあり」、清書直前のもとして後掲する。

### 岩手公園

① なみなす丘はぼうぼうと  
青きりんごのいろに暮れ  
ひとりそばだつ高洞山は  
山火の痕をすぐろへり

② 弧光燈にめくるめき  
羽虫の群のあつまりつ  
川と銀行木のみどり  
まちはしづかにたそがるゝ

「鉛筆全面手入れ↓ブルーブラックインク丸番号つけ」  
① ・↓「あなた」と老いしタ「・↓ツ↓」ピングは  
・↓杖「もて(遠く↓そらを) ↓をはるかにゆびさせ(ば  
↓(ど)」

③ 山よほのぼのひらめきて  
わびしき雲をふりはらへ  
その雪尾根をかゞやかし  
野面のうれひを燃し了せ。

### 岩手公園

① 「あなた」と老いしタピングは、  
杖をはるかにゆびさせど、  
東はるかに散乱の、  
さびしき銀は声もなし。

② なみなす丘はぼうぼうと、  
青きりんごの色に暮れ、  
大学生のタピングは、  
口笛軽く吹きにけり。

③ 老いたるミセスタツピング、  
「去年なが姉はこゝにして、  
中学生の一組に、  
花のことはを教へしか。」

東はるかに散乱の

▲ (開始形復活)

さびしき銀は声もな「し↓き↓し」

▲ (開始形復活)

② なみなす丘はぼうぼうと

▲ (写稿①の復活)

青きりんごの色に暮れ

▲ (写稿①の復活)

「ひとりそばだつ高洞山は↓大学生のダビングは」

「山火の痕をすぐるへり↓(軽く口笛↓口笛軽く)吹きにけり」

③ ↓老いたるミセスタ「ン↓ツ」ピング

・ ↓「をととしなれがいもうとは↓去年なが姉はこゝにし  
て」

・ ↓中学生の一组に、  
・ ↓「ここの↓・」花「を↓の名をこそ」をしへしか

④ 孤光燈にめくるめき、

▲ (以下写稿②継承)

羽虫の群のあつまりつ、

川と銀行木のみどり、

まちはしづかにたそがるゝ

23 悍馬 (二)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

一〇四六悍馬

一・↓悍馬写

↓悍馬

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

悍馬

厩肥をはらひてその馬の  
まなこはかはる紅の龍  
けいけい青きびいどろの

悍馬

① 厩肥をはらひてその馬の、  
まなこは変る紅の龍、  
けいけい碧きびいどろの、

④ 孤光燈にめくるめき、  
羽虫の群のあつまりつ、  
川と銀行木のみどり、  
まちはしづかにたそがるゝ。

天をあがきてとらんとす

黝き菅藻の袍はねて  
そだたき叩く封介に  
のろしの雲はうちあがり  
こぶしの花はけむりけり

「↓ブルーブラックインク手入れ」

- 1 「青↓碧」きびいどろの
- 2 雲「は↓の」「うちあがり↓とどろきて」
- 3 花「は↓も」「けむりけり↓けむるなり」

24 悍馬(一)

関連・素材	初期稿・前	初期稿・後	再編稿	一定稿
-------	-------	-------	-----	-----

・下書稿五。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

一・了 ↓三牧人 ↓二雨・断 ↓四牧人 ↓五牧人 ↓「血↓悍」馬写 ↓悍馬

悍馬図

毛布の赤に頭を縛<sup>づ</sup>び  
陀羅尼をまがふことばもて  
罵りかひつ牧人ら  
貴きアラヴの種馬の  
息あつくしていばゆるを  
まもりかこみてもるともに  
雪の火山の裾野原  
赭き柏を過ぎくれば  
や・はいくたび雲滄の  
青なめくじを角のべて

・ま、欠字

天をあがきてとらんとす。

② 黝き菅藻の袍はねて、  
叩きそだたく封介に、  
雲ののろしはとどろきて、  
こぶしの花もけむるなり。

悍馬

毛布の赤に頭を縛<sup>づ</sup>び、  
陀羅尼をまがふことばもて、  
罵りかはし牧人ら、  
貴きアラヴの種馬の、  
息あつくしていばゆるを、  
まもりかこみてもるともに、  
雪の火山の裾野原、  
赭き柏を過ぎくれば、  
山はいくたび雲滄の、  
藍のなめくじ角のべて、

△ルビ除去

(ブ↓ヴは異同に含まず)

おとしけおとしいよいよに  
馬を血馬となしにけり

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 「や・↓山」

2 「青↓藍の」なめくじ「を↓」

25 羅沙売

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

冬一三・一四一冬一↓二・↓行商了

↓羅沙売り↓三・

写↓羅沙売

・下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

羅沙賣

バビロニ柳掃ひしと  
あゆみをとめし羅沙賣りは  
つるべをとりてやゝしばし  
みなみの風に息づけり

しらしら醸す天の川  
はてなく翔くる夜の鳥  
かすかに錢を鳴らしつゝ  
ひとは水繩を操りあぐる

「↓ブルーブラックインク手入れ」  
1 みなみの風に息づ「けり↓きぬ」

おとしけおとしいよいよに、  
馬を血馬となしにけり。

①バビロニ柳掃ひしと、  
あゆみをとめし羅沙賣りは、  
つるべをとりてやゝしばし、  
みなみの風に息づきぬ。

②しらしら醸す天の川、  
はてなく翔ける夜の鳥、  
かすかに錢を鳴らしつゝ、  
ひとは水繩を操りあぐる。

△ルビ除去

26 保線工事

関連・素材

初期稿・前

—

初期稿・後

—

再編稿

— 定稿

四一〇車中

下書稿三。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

一 鉄道工夫 ↓ 二 鉄道工夫 ↓ 三 鉄道工夫 ↓ 保線工事(写) ↓ 保線工事

保線工事

狸の毛皮を耳にはめ  
シャブロの束を身に投げつ  
うつろふ窓の雪のさま  
黄なるまなこに泛べたり

黄は旧字・

保線工事

① 狸の毛皮を耳にはめ、  
シャブロの束に指組みで、  
うつろふ窓の雪のさま、  
黄なるまなこに泛べたり。

黄は旧字・

雪をおとして立つ鳥に  
妻がけはひのしるければ  
ほのかに笑まふその頬を  
松は疊めり風のそら

「↓ブルーブラックインク手入れ」

- 1 束「を身に投げつ」に指組みて
- 2 「ほのかに笑まふ」笑まひほのけき ↓ たまゆら ↓ 笑まひかそけき 「その頬を ↓ たまゆらを」

② 雪をおとして立つ鳥に、  
妻がけはひのしるければ、  
「ほの ↓ 仄」かに笑まふたまゆらを、  
松は疊めり風のそら。

27 「白金環の天末を」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

—

再編稿

— 定稿

三七四 煙／桶西も東も

下書稿二。鉛筆手入れによって、(1)白金環の — (2)西と東のと、(1)けむり停まる — (2)みなかみ との2案がまずなるが、結局余白稿の(2)みなかみと(2)西と東のとを棄てて、(2)みなかみの初句だけを(1)白金環の連に組み込むこととし、残りは消したが、(2)西と東の連は削除し忘れたとみる。そこ、

(1)白金環の — (1)けむり停まる、

に対して、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

白金環の天末を

みなかみ遠くめぐらしつ

大煙突はひさびさに

くらきけむりを騰げにけり

けむり停まるみぞれ雲

峽を覆ひてひくければ

大工業の光景なりと

技師は写真にとりてけり

「↓ブルーブラックインク余白稿」

1 技師「は写真にとりてけり↓も出で(て↓たち)仰ぎ  
けり」

28 「雪げの水に涵されし」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿。鉛筆↓鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

写

↓

・

雪げの水にかこまれし

御料草地のどての上を

犬の皮着てたゞひとり

董外線にたゞよへり

① 白金環の天末を、

みなかみ遠くめぐらしつ、

大煙突はひさびさに、

くらきけむりをあげにけり。

② けむり停まるみぞれ雲、

峽を覆ひてひくければ、

大工業の光景なりと、

技師も出でたち仰ぎけり。

△ルビ除去

① 雪げの水に涵されし、

御料草地のどての上「を、↓・、」

犬の皮着てたゞひとり、

董外線「にたゞよへ(り)。↓る。( ) ↓をい行くもの。」

ひかりとゞろく雪代の  
水かゞやきて流れたる (消し忘れとはみない)  
土手の切れ目をたゞひとりせな田み  
兎のごとくはねたるは  
かの耳しひの牧夫ならしを

「↓ブルーブラックインク手入れ」

- 1 水に「かこまれし↓涵されし」
- 2 水「かゞやきて↓さゞめきて」

関連・素材
初期稿・前
初期稿・後
再編稿
一定稿

・下書稿。鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

医院

陶標春をつめたくて  
いちるも青く冴えそめぬ

②水うら濁る島の苔  
萱屋に玻璃のあえかなる

③瓶をたちちてうなるの  
つつしみふたり入りくるや

神農像に饌ささぐと  
學士はつみぬ露の臺

②ひかりとゞろく雪代の、  
土手のきれ目を「たゞひとり、↓せな田み」  
兎のごとく**眺**ねたるは、  
かの耳しひの牧夫なるらん。

写
↓医院

医院

①陶標春をつめたくて、  
水松も青く冴えそめぬ。

②水うら濁る島の苔、  
萱屋に玻璃のあえかなる。

③瓶をたちちてうなるの、  
みたり**ためらひ**入りくるや。

④神農像に饌ささぐと、  
學士はつみぬ露の臺。



「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 うなる「のこ↓らの」

2 「つつしみ↓」「ふ↓み」たり「↓ためらひ」入りくる  
や

30 老農

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

●冬四九 一●冬●↓二歌 Bヨ・鉛↓三↓施肥↓肖像↓四肖像↓五肖像↓老農↓六簡・↓七老農写↓老農  
・下書稿七。鉛筆↓青インク手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

老農

火雲むらがり翔べば  
そのまなこははみてうつろ

火雲あつまり去れば  
麥束を遠くあぎたふ

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 麥「束を↓の(風↓束)」

31 病技師 (一)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

●冬一三・、三八 一●冬●鉛↓二●了↓三●春↓了↓四夜↓亡友↓五病技師↓六病技師写↓病技師  
・下書稿六。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

病技師

病技師

老農

①火雲むらがり翔べば、  
そのまなこははみてうつろ。

②火雲あつまり去れば、  
麥の束遠く「た↓ずむ」。↓散り映ふ。」

こよひの闇はあたたかし  
風のなかにて泣かんとぞ  
ステッキひけり銀かしら  
黒のステッキまたひけり

蝕む胸をまぎらひて

こぼと鳴り行く水のはた  
くらき炭素の燈に照りて  
飢饉供養の巨石並めり

「↓ブルーブラックインク手入れ」

- 1 「くらき炭素の燈に照りて↓・」
- 2 「飢饉供養の巨石並めり↓・」
- 3 「↓飢饉供養」「↓の」巨「↓き↓・」石は
- 4 「↓くらき炭素の燈に並」「めり↓むる↓めり」
- 5 「↓生キル（1・2に対して）」

3 2 心相

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

一定稿

↓心相

↓三心相

写 ↓心相

・下書稿三。鉛筆手入れ↓ブルーブラックインクのメモを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

心相

心の師とはならんとも  
心を師とはなざざれ  
古きおしへをさながらに

①こよひの闇はあたたかし、

風のなかにて泣かん「とぞ、↓など、」

「二重のマント(厳めしく、↓面づつみ) ↓ステッキひけり  
にせもの、」

「にせのステッキ(つきいでぬ。↓ひきごづる。( ↓黒のステ  
ッキまたひけり。」

②蝕む胸をまぎらひて、

こぼと鳴り行く水のはた、

「飢饉供養↓くらき炭素」の燈に照りて、△ルビ新設  
飢饉供養の巨石並めり。 △ルビ新設

心相

①こよひの師とはならんとも、  
心を師とはなざざれと、  
いましめ古りしさをながらに、

たよりなきこそころなれ

さあれや町を出でしとき

ひそまりわたす蒼ぞらに

あはれ鷲王のすがたぞと

面さへ映えて仰ぎしを

いまは酸えしておぞましき

澱粉堆とうちわらひ

いたらきすべる雪雲を

腐れし馬鈴薯とあざけりぬ

〔↓ブルーブラックインク手入れ〕

1 「心↓こころ」

2 「心↓こころ」を師とはなざされ「の↓と↓の」

3 「古きおしへをさながらに↓」いましめ古りし↓古きい

ましめ(さながらに)「

4 「さあれや↓ひとたび(町↓街)を出でしとき↓」

5 「ひそまりわたす↓はじめは潜む」蒼」ぞらに↓穹に」

6 「あはれ↓まこと↓あはれ」鷲王の「すがたぞと↓影供

ぞと」

7 面さへ映えて「仰ぎしを↓(うち↓・仰ぎ)↓しを(」

8 「うち↓あざ」わらひ

9 腐れし↓せし「馬鈴薯と」あざけりぬ↓さげすみぬ」

33 巡業隊

関連・素材

二期稿・前

二期稿・後

再編稿

一定稿

歌B14・赤

一・了↓二↓三↓

巡業隊↓鉛手入れ↓四

巡業隊写

↓巡業隊

・下書稿四。鉛筆↓ブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」を清書前と仮定する。

たよりなきこそころなれ。

②はじめは潜む蒼穹に、

あはれ鷲王の影供ぞと、

面さへ映えて仰ぎしを、

いまは酸えしておぞましき

澱粉堆とあざわらひ、

いたらきすべる雪雲を、

腐れし馬鈴薯とさげすみぬ。

△ルビ除外

△ルビ除外

△ルビ新設・除外

霜のまひるのはたごやに  
かそけく澱む一びんの  
酒の黄なるをわかちつゝ  
そぞろに錫の笛吹ける

黄は旧字・

すがれし大豆をつみ累げ  
よぼよぼ馬の過ぎ行くや  
風はのぼりをはためかし  
障子の紙に影刷きぬ

ひとりかすかに舌打てば  
ひとり古きらしや鞆(へんは甘の下に)  
黒きカードの面反りの  
わびしきものをとりいづる

さらにはげしく舌打ちて  
長ぞまなこをそらしぬと  
樂手はさびしだんまりの  
投げの型してまぎらかす

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 か「そけく澱む↓すかにうるむ」一びんの↓・  
・↓がらすの徳利うるみたる↓うるめるがらす一びん  
の↓がらす「の徳利うるみたる↓ぞうるむ↓め」  
一びんの

①霜のまひるのはたごやに、  
がらすぞうるむ一瓶の、  
酒の黄なるをわかちつゝ、  
そぞろに錫の笛吹ける。

黄は旧字・

②すがれし大豆をつみ累げ、  
よぼよぼ馬の過ぎ行くや、  
風はのぼりをはためかし、  
障子の紙に影刷きぬ。

△ルビ除去

③ひとりかすかに舌打てば、  
ひとり古きらしや鞆(へんは甘の下に)、  
黒きカードの面反りの、  
わびしきものをとりいづる。

④さらにはげしく舌打ちて、  
長ぞまなこをそらしぬと、  
樂手はさびしだんまりの、  
投げの型してまぎらかす。

34 [小きメリヤス塩の魚]

関連・素材

二期稿・前

二期稿・後

再編輯稿

一定稿

・下書稿三で赤インク↓ブルーブラックインク手入れをおこなったのち、主として下部余白に鉛筆で手を入れたのが下書稿四とみる。赤インクの〈写〉と横線は、削除されぬままの稿三の上部にあるため、稿四とともに、稿三も生かすという〈こと〉で、〈写〉を与えたか。〈写稿〉としては、下書稿三最終形、稿四最終形をともに掲げておく。〈写〉付与ののち、清書前手入れとして下書稿二がある可能性を、『叙説』附章五節で提案した。

ちぢれたる雲のま下に

塩鮭や歪める陶器

烏賊の脳ゴム沓とシャツ

はるばると露店はならぶ

こもつむ魚をになひ

一盞の酒に熱りて

たゞ氣負ひ人分けくるは

みなかみの田を植えしひと

活動の楽隊の音

がたびしに雲にひゞけど

この峽の野に生きぬべき

そのみちをいまは知らずも

雪しろき街をうづめて

ひでりゆゑ捨らぬ村の

家長たちさびしく惑ひ

たそがれはせまりきたりぬ

①小きメリヤス塩の魚、

藻草花菓子烏賊の脳、

雲のちぢれの重りきて、

風すさまじく歳暮るゝ。

②はかなきかなや「暮れそめて、↓夕さり(て↓を)」、

なほふかぶかと物おもひ、

街をうづめて行きまどふ、

みのらぬ村の家長たち。

〔↓下部余白、鉛筆手入れ稿〕

◎戸主／家長

歪める陶器烏賊の脳

小きシャツや赤き足袋

露店はならぶ雪の雲

楽隊の音がたびしに

はるか町の角行きて

おもむろに来る青のバス

みのれる村のをのこらは

魚こもつみ一つきの

酒にほこりてみな去りにけり

ひでりつづける村人は

いくたび町を行きかへて

罪あるものすがたなり

さびしきかなやたそがれて

こらのすがたを胸にして

なほ行きまどふ戸主の群

35 〔林の中の柴小屋に〕

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

(一) 密蔵、(二) 法印の孫娘

・下書稿一(「法印の孫娘」オモテ余白稿)。鉛筆手入れを経て、赤インクの(写)か。墨による手入れは、清書前とみる。

面青膨れて眼ひかり  
どてら着て立つ風の中  
西日ひた降る苗代は  
刈敷朽ちぬと水黒き

林の中の柴小屋に、  
醸し成りたる濁り酒、  
一筒汲みて帰り來し、  
むかし譽れの神童は、  
面青膨れて眼ひかり、  
秋はかたむく山里を、  
どてら着て立つ風の中。  
西は縮れて雲傷み、  
青き大野のあちこちに、  
雨かとそゞぐ日のしめり、  
こなたは古りし苗代の、  
刈敷（田の下が惠の場合同様）朽ちぬと水黴き、  
なべて丘にも林にも、  
たゞ鳴る松の聲なれば、  
あはれさびしと我家の、  
門立ち入りて白壁も、  
落ちし土藏の奥二階、  
梨の葉かざす窓へにて、  
筒のなかばを傾けて、  
「↓その齒(を↓)に風を吸ひつゝも、  
しばしをしんとものおもひ、  
夜に日をかけて工み來し、  
いかさまさいをぞ手にとりける。」

【インク開始（写稿）】

36 早儉

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

三二一 昏い秋

一・↓二 早儉写

↓ 早儉

・下書稿二。書きながらのブルーブラックインク手入れを経て、(写)か。後掲する1か所の「↓ブルーブラックインク手入れ」は清書前と仮定するが、誤りの訂正でもあり、開始形を書き終えた直後に近い、手入れの可能性もある。

早検

雲の鎖やむら立ちや  
森はた森のしろけむり  
鳥はさながら隅津津日を  
はなるとばかり群れ去りぬ

野を野のかぎり早割れ田の  
白き空穂のなかにして  
術マヒをもしらに家長たち  
むなして風をみまもりぬ

「↓ブルーブラックインク手入れ」  
1 「むなして↓く」

早検

①雲の鎖やむら立ちや、  
森はた森のしろけむり、  
鳥はさながら隅津津日を、  
はなるとばかり群れ去りぬ。

②野を野のかぎり早割れ田の、  
白き空穂のなかにして、  
術マヒをもしらに家長たち、  
むなしく風をみまもりぬ。

△ルビ除去

37 「氷雨虹すれば」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

・下書稿三。ブルーブラックインク↓鉛筆手入れを経て、(写)か。後掲する「↓ブルーブラックインク手入れ」は清書前と仮定する。

僚友 (前稿題が生きている)

①氷雨虹すれば  
時針盤たゞに明るし  
病の今朝やまされる  
僚友の影門を入るなし

①氷雨虹すれば、  
時針盤たゞに明るし、  
病の今朝やまされる、  
「絹の洋傘↓青き葎」門を入るなし。

△ルビ新設



②二限わがなさん

公きみ五時を補ひてんや

火をあらぬひのきづくりは  
ことばもてひゞかすべけれ

「↓ブルーブラックインク手入れ」

1 火をあらぬひのきづくり「は↓を」↓火をあらぬひの  
きづくりは

2 ひゞかすべけれ↓神代なることにひゞかす↓ことばも  
てどよもすべけれ

②二限わがなさん、

公きみ五時を補ひてんや、

火をあらぬひのきづくりは、

「ことば↓・」神祝(祝はへんのみ示)にどよもすべけれ。

はじめに

鉛筆・赤インクによる(写稿)から展開した定稿・百編の開始形本文とその詩の場の状況について一覽する。  
詩稿は、やがてくる分集段階を見おとして、『文語詩稿五十篇』に入集するものから『文語詩稿一百篇』に入集するものへ、それぞれの集内の排列順にしたがって掲げた。なお、便宜上通し番号を振っている。そして表示内容は、

定稿開始形本文

書きながら

\*場所と△人物

部立て(詩篇分野)

とした。

「定稿開始形本文」は、1編をのぞいて(腐植土のぬかるみよりの照り返し)が青インク起稿と手入れ、ブルーブラックインク起稿で開始形を「書きながら」、同じインクによる手入れがある。ここでは、「冬」「き↓は」「きたりぬ」などと手入れを指示している箇所である。表では「書きながら」とした位置に手入れ内容の状況を示したが、状況を指示する符号として、推敲規模を、

句 本文を構成する詩句単位のレベルで推敲されている場合。

語 一句を構成する語句レベルの推敲、3文節程度まで。

ルビ ルビに対する推敲。

表 漢字かな・句読点・括弧など、表記レベルの推敲。

と表わし、推敲内容を、

変更 詩想にかかわっておこなわれた選択とみるもの。

調整 表現をさらにととのえるためのものとみるもの。

訂正 誤記などの是正行為とみられるもの。

と分別して表わした。なお、判読できないものは、「？」とした。

詩の場の状況については、まず「\*場所と△人物」を掲げた。詩の舞台となった場所については、すでに合理的な指摘があるものはそれを示し、不明なものはその本文内容からおおよその地域を試みに提案し(近隣農村としたものは花巻郊外を含む)、次に舞台上上がっている人物を指示した。なお、会話以外の地の文で経験過去の助動詞(現在推量らしの場合も含め)が用いられている場合、舞台に顔を出してしまった語り手があるとみて、「語り手」と示した。会話のなかに現われた経験過去の助動詞については、会話の話を詩の場の

人物に特定できる場合は、その人物を指示する。

「部立て（詩篇分野）」では、その詩の場の性格を分別するひとつのものさしとして、おおづかみに、

自然 山河にかかわる空間。

田園 ムラにかかわる空間。

生活 マチにかかわる空間。

という3項を基本的な部立てとして立てた。詩の場には複数の要素が混在している場合も多いが、要素として強いと判断したところを示した。たとえば、自然詩篇は主題を山河に求めた、田園詩篇における一分野の特化であるということもできる。さらに、その場の情況のなかに見いだせるものとして、

社会 社会的課題を見据えまたはひそめており、あるいは批判的・告発的な態度さえもがうかがえるものとみられるもの。

信仰 信仰的な態度がうかがえ、あるいはその希求・煩悶・懺悔などを露わにまた密かに示しているとみられるもの。

という、ふたつの要素を設定し、その可能性がある場合も含めて指摘を試みた。前者は、基本的な部立てに重複するかたちで指摘し、その要素について簡略なコメントをつける。後者は、その多くが自伝性を色濃くした詩の場を現出させているものがあり、その場合、信仰詩篇として独立させる試みをおこなっている。

1 『文語詩稿五十篇』に分集されてゆく詩稿群

以下、定稿開始形本文を書きながら手入れを含めたかたちで掲げ（便宜上行形式で示す）、書きながら手入れの内容（▲）、舞台となった場所の推定（\*）と登場人物の指示（なお（△）で示したのは舞台上に活動していない人物）、私に分別した詩篇分野の指定（・）を記してゆく。

1 いたつきて

① いたつきてゆめみなやみし、

（冬なりき） 誰ともしらず、

そのかみの高麗の軍樂、

うち鼓して過ぎれるありき。

② その線の工事了りて、

あるものはみちにさらばひ、

あるものは火をはなつてふ、

かくてまた冬「き↓は」きたりぬ。

▲語調整

\*花巻・生家？

△病者、△語り手

△朝鮮鮎売り？

（△朝鮮人工夫？）

生活詩篇 1

・ 社会詩篇要素

↓ 外国人労働者の問題

2 水と濃き

- ① 水と濃きなだれの風や、  
むら鳥のあやなすすだき、  
アステイルベきらめく露と、  
ひるがへる温石の門。
- ② 海浸す日より棲みあて、  
たゝかひにやぶれし神の、  
二面の猛きすがたを、  
青々と行衛しらずも。

なし 1

\*早池峯山

自然詩篇 1

3 氷雨虹すれば

- ① 氷雨虹すれば、  
時針盤たゞに明るし、  
病の今朝やまされる、  
絹の洋傘門を入るなし。
- ② 二限わがなさん、  
公 五時を補ひてんや、  
火をあらぬひのきづくりは、  
[ことば↓] 神祝にどよもすべけれ。

▲語変更<sup>2</sup>

\*花巻農学校職員室

生活詩篇 2

・信仰詩篇要素の可能性

4 「砲兵観測隊」

- ① (ばかばかしきよかの邑は、  
よべ屯せしクンなるを)  
白き鳥毛はうちふるひ、  
銀のモノドはひしめきぬ。

1

なし 2

\*宮野目・葛?

生活詩篇 3

△ひとびと?、語り手?

② (いな見よ東かれらこそ、  
古き火薬を燃したへぬ)  
うかべる雲をあざけりて、  
ひとびと丘を奔せくだりけり。

5 盆地に白く

① 盆地に白く霧よどみ、  
めぐれる山のうら青を、  
稲田の水は冽くして、  
花はいまだにをさまらぬ。  
② 窓五つなる學校に、  
さびしく學童らをわが待てば、  
藻を装へる馬ひきて、  
ひとびと木炭を積み出づる。

6 たそがれ思量

① たそがれ思量感くして、  
銀屏流沙とも見ゆるころ、  
堂は別時の供養とて、  
盤証木鼓しめやかなり。  
② 頬青き僧ら清らなるテノールなし、  
寄寓の老僧時々に、  
バスなすことはさながらに、  
風葱嶺に鳴るがごとし。  
③ 時しもあれや松の雪、  
をちこちどどと落ちたれば、  
室ぬちとみに明るくて、

なし3

△砲兵

△観測者たち(市民)

\*遠野・上郷?細越?

田園詩篇1

・社会詩篇要素  
↓軍国主義化の問題

(△学童) △われ

△ひとびと(農夫)

・社会詩篇要素  
↓凶作の予兆

\*盛岡・報恩寺?

信仰詩篇1

△思量するひと

△青年僧

△老僧

品は四請を了へ「しな↓」にけり。

▲語変更

(△語り手)

7 「悍馬 (一)」

悍馬

2

なし 4

\*滝沢・種馬育成所?

田園詩篇 2

毛布の赤に頭を縛び、  
陀羅尼をまがふことばもて、  
罵りかはし牧人ら、  
貴きアラヴの種馬の、  
息あつくしていばゆるを、  
まもりかこみてもろともに、  
雪の火山の裾野原、  
赭き柏を過ぎくれば、  
山はいくたび雲滄の、  
藍のなめくじ角のべて、  
おとしけおとしいよいよに、  
馬を血馬となしにけり。

8 「退職技手」

退職技手

3

なし 5

\*花巻・郡農会?

田園詩篇 3

こぞりてひとを貶しつゝ、  
わかれうたげもすさまじき、  
おのれこよひは暴れんぞと、  
青き瓶袴も惜しげなく、  
糸緑金に生えそめし、  
代にひたりて田螺ひろへり。

△参会者たち

△退職の技手

△語り手

・社会詩篇要素の可能性  
↓舞台「種馬育成所」軍馬としてのアラブ種?

・社会詩篇要素の可能性  
↓農業技手の削減問題

9 「來賓」

來賓

4

なし 6

\*花巻?・小学校校長室 生活詩篇 4

△別当(神官?)

・社会詩篇要素の可能性

①狩衣黄なる別當は、

旧字

- 眉をけはしく茶をのみつ。  
 ②袴羽織のお百姓、  
 ふたり齊しく茶をのみつ。  
 ③窓をみつめて校長も、  
 たゞひたすらに茶をのみつ。  
 ④しやうふを塗れるガラス戸を、  
 学童らこもこもにのぞきたり。

10 「流水」  
 流水

- ①はんのきの高き梢より、  
 きららかに氷華をおとし、  
 汽車はいまやゝにたゆたひ、  
 北上のあしたをわたる。  
 ②見はるかす段丘の雪、  
 なめらかに川はうねりて、  
 天青石まぎ「ふ↓・」らふ水は、  
 百千の流水を載せたり。  
 ③ああきみがまなざしのはて、  
 うら青く天盤は澄み、  
 もろともにあらんと云ひし、  
 そのまちのけぶりは遠き。  
 ④南はも大野のはてに、  
 ひとひらの吹雪わたりつ、  
 日は白くみなそこに燃え、  
 うららかに氷はすべる。

11 夜をま青き

5

▲語訂正<sup>4</sup>

△農夫たち

△小学校長

△児童たち

\*花巻・北上河畔

(△きみ) △(われ)

△語り手

\*大迫・石川旅館?

↓背景に国家神道・教育勅語などの影?

自然詩篇<sup>2</sup>

・社会詩篇要素の可能性  
 ↓きみ⇕関豊太郎?土壌改良の理想

生活詩篇<sup>5</sup>

①夜をま青き藺むしろに、  
ひとびとの影さ「わ↓ゆ」らげば、  
遠き山ばた谷のはた、  
たばこのうねの想ひあり。  
②夏のうたげにはべる身の、  
聲を「ぢ↓ち」ゞれの髪を恥ぢ、  
南かたぶく天の川、  
ひとりたよりとすかし見る。

1 2 あかつき眠る

①あかつき眠るみどりごを、  
ひそかに去りて小店さき、  
しとみ上「げ↓・」ぐれば川音や、  
霧はほのかに流れたり。  
②よべの電燈をそのまゝに、  
ひさげのこりし桃の顆の、  
アムスデンジュンいろ紅き、  
ほのかに映えて熟るるらし。

1 3 きみにならびて

①きみにならびて野にたてば、  
風きららかに吹ききたり、  
柏ばやしをとどろかし、  
枯葉を雪にまろばしぬ。  
②げにもひかりの群青や、  
山のけむりのこなたにも、  
鳥はその巢やつくるはん、

旧字

▲語訂正<sup>5</sup>

△参会者たち

▲語訂正<sup>6</sup>

△歌妓

\*花巻市街？花巻温泉？生活詩篇<sup>6</sup>

△乳幼児  
△母親

▲語調整<sup>7</sup>

▲ルビ訂正<sup>1</sup>

△語り手

自然詩篇<sup>3</sup>

\*岩手山麓

なし<sup>7</sup>

△きみ△(われ)

・信仰詩篇要素の可能性  
↓天上世界へのまなざし

・社会詩篇要素  
↓農村問題(娘の身売り)



ちぎれの艸をついばみぬ。

14「初七日」

初七日

①落雁と黒き反り橋、

かの児こそ希ひしものを。

②あゝくらき黄泉路の巖に、

その小き掌もて得なんや。

③木綿つけし白き骨箱、

哭き喚ぶもけはひあらしを。

④日のひかり煙を青み、

秋風に児らは呼び交ふ。

旧字

6

なし8

\*近隣農村?・農家?

田園詩篇 4

△亡児、△語り手

・社会詩篇要素の可能性  
↓乳幼児死亡率の高さ、欠食児童の問題

△母親?

△児童たち

\*近隣農村?・地主?

田園詩篇 5

△語り手  
△老いた地主農夫

・社会詩篇要素  
↓密造酒・賭博・棄農

15 林の中の

林の中の柴小屋に、

醸し成りたる濁り酒、

一筒汲みて帰り來し、

むかし譽れの神童は、

面青膨れて眼ひかり、

秋はかたむく山里を、

どてら着て立つ風の中。

西は縮れて雲傷み、

青き大野のあちこちに、

雨かとそゞぐ日のしめり、

こなたは古りし苗代の、

刈敷朽ちぬと水黾ぎ、

なべて丘にも林にも、

たゞ鳴る松の聲なれば、

あはれさびしと我家の、  
門「?↓立」ち入りて白壁も、  
落ちし土蔵の奥二階、  
梨の葉かざす窓へにて、  
筒のなかばを傾けて、  
しばしをしんとものおもひ、  
夜に日をかけて工み來し、  
いかさまさいを「し↓」ぞ手にとりに  
ける。

▲ ?  
▲ 語調整

16 あな雪か屠者の

「あな雪か。」屠者のひとりは、  
みなかみの闇をすかしぬ。

車押すみたりはうみ、  
えらひなく橋板ふみぬ。

「山↓雉」なりき青く流れし。」  
屠「?↓」者の聲わぶるがとき。

落合に鳴の聲して、  
老いの屠者たゞ舌打ちぬ。

▲ 語変更  
▲ ?

\*花巻・豊沢橋

△屠者

△3人の屠者

△老いた屠者

△3人のうち老屠者

生活詩篇7

・社会詩篇要素の可能性  
↓身分構造の問題(被差別部落)

17 「著者」

著者

造園學のテキストに、  
おのれが像を「百あまり、  
著者の原図と銘うちし、

7

なし9

\*高農・果樹園?見本園?生活詩篇8

かゝげしことも夢なれやと、  
青き夕陽の寒天や、  
U字の梨のかなたより、  
革の手袋はづしつゝ、  
しづにをくびし歩みくる。

18 ほのあかり秋の

① ほのあかり秋のあぎとは、  
ももどりのねぐらをめぐり、  
官つかさどの手からくのがれし、  
社司の子のありかを知らず。  
② 社殿にはゆふへののりと、  
ほのかなる泉の聲や、  
そのはははことなきさまに、  
しらたまのもちひをなせる。

19 毘沙門の堂は

① 毘沙門の堂は古びて、  
梨白く花咲きちれば、  
胸疾みてつかさをやめし、  
堂守の眼やさしき。  
② 中ぞらにうかべる雲の、  
蓋やまた椀わんのさまなる、  
川水はすべりてくらく、  
草火のみほのに燃えたれ。

20 「雪の宿」

△語り手

△著者

\*花巻・鮎幣稻荷神社？  
生活詩篇 9

なし 10

△語り手

(△社司の子)  
△社司(父)

△母

・社会詩篇要素の可能性  
↓背景に思想統制・弾圧の時代性

なし 11

\*北成島・毘沙門堂？

田園詩篇 8

△語り手

△堂守

・信仰詩篇要素の可能性

\*大迫・石川旅館？

生活詩篇 10

雪の宿

8

なし12

- ①ぬさをかざして山つ祇、  
舞ふはぶらいの町の書記、  
うなじはかなく瓶いとるは、  
峽には一のうためなり。
- ②をさげびたけり足ぶみて、  
をどりめぐれるすがたゆゑ、  
老いし博士はくしや郡長ぐんちやう、  
やゝ凄涼のおもひあり。
- ③月や出でにし雪青み、  
をちこち犬の吠ゆるころ、  
舞ひを納めてひれふしつ、  
罪乞ふさまにみじろがず。
- ④あなや否とよ立てきみと、  
博士が云へばたちまちに、  
けりはねあがり山つ祇、  
をみなをとりて消えうせぬ。

21川しろじると

- ①川しろじるとまじはりて、  
うたかたしげきこのほとり、  
病きつかれわが行けば、  
そらのひかり「の↓」ぞ身を責むる。
- ②宿世のくるみはんの毯、  
干割れて青き泥岩を、  
はかなきかなやわが影の、  
卑しき鬼をうつすなり。
- ③蒼茫として夏の風、

▲語調整

△町書記

△歌妓

△語り手△博士△郡長

・社会詩篇要素の可能性  
↓農村問題(娘の身売り)

\*花巻・イギリス海岸

信仰詩篇2

△われ

草のみどりをひるがへし、  
 ちらばる蘆のひら吹きて、  
 あやしき文字を織りなしぬ。  
 ④ 生きんに生きず死にんに、  
 得こそ死なれぬわが影を、  
 うら濁る水はてしなく、  
 さゝやきしげく洗ふなり。

22 「葵花」

葵花

- ① 酒精のかほり硝銀の、  
 肌膚灼くにほひしかもあれ、  
 大展覽の花むらは、  
 夏夜さやかに息づきぬ。  
 ② そは牛飼ひ「て↓つ」商ひつ、  
 はた鉄うてるもろ人の、  
 さこそつちかひはぐくみし、  
 四百の花のラムプなり。  
 ③ 聲さやかなるをとめらは、  
 おのおの「ほ↓・」よきに票を投げ、  
 団「・↓辨」護士もホップ噛む、  
 ながきわらひを頬になしき。  
 ④ 卓をめぐりて會長が、  
 メダルを懸くる午前二時、  
 カクタスシヨウをおしなべて、  
 花はうつゝもあらざりき。

9

▲語調整

▲語調整  
 ▲語訂正

\*花巻・精養軒?花巻温泉? 生活詩篇 11

- △牛飼ひ、△商人
- △鍛冶職人など
- △語り手

- △若い女性
- △団弁護士

△ダリアの会会長

・社会詩篇要素の可能性  
 ↓背景に農村問題(異常気象、娘の身売り)

23 「茶雨」

茶雨

10

なし 13

\*羅須地人協会自耕地? 田園詩篇 7

- ① 寒雨そゞげば新墾の、  
いっさんあぐるつちけむり。  
② 湯氣のぬるきに人たちて、  
故なく憤る身は暗し。  
③ ちぎれし草と野ばらの根、  
その巢をめぐる蟻の群。  
④ 杉には水の幡かゝり、  
しぶきほのかに擴ごりぬ。

24 血のいろにゆがめる月は

- ① 血のいろにゆがめる月は、  
今宵また櫻をのぼり、  
患者たち廊のはづれに、  
凶事「を↓」兆を云へり。  
② 木がくれのあやなき闇を、  
いくそたびいゆきかへりて、  
熱植えし黒き綿羊、  
その姿いともあやしき。  
③ 月しろは鉛糖のごと、  
柱列の廊をわたれば、  
コカインの白きかほりを、  
いそがしくよぎる醫師あり。  
④ しかもあれ春のを「?↓」とめら、  
なべて且つ耐えほゞえみて、  
水銀の目盛を数へ、  
玲瓏の氷を割きぬ。

▲  
語調整

▲  
?

△人

△語り手

\*岩手病院

△入院患者

△話者

△医師

△看護婦

生活詩篇  
12

25 「車中」(一)

車中

1

- ①夕陽の青き棒のなかにて、開化郷土と見ゆる「ひと↓もの」、葉巻のけむり蒼茫と、森槐南を論じたり。
- ②開化郷土と見ゆるもの、いと清純とよみしける、寒天光のうら青に、おもてをかくしねむる人あり。

▲語変更ひとには読点がまだ与えられていず、書きながらとる

\*車中

△開化郷土

(△同席者)

△ひと

生活詩篇 13

ひとからものへの変換は批判性が露わである。

・社会詩篇要素の可能性

↓「寒天光のうら青」凶作を予兆する気象？

田園詩篇 8

26 「村道」

村道

1

2

- ①朝日かゞやく水仙を、になひてくるは詮之助、あたまひかりて過ぎ行くは、枝を杖つく村老ヤコブ。
- ②影と並木のだんだらを、犬レオナルド足織れば、賣り酒のみて熊之進、赤眼に店をばあくるなり。

\*根子？

△詮之助

△村老ヤコブ

△熊之進

田園詩篇 8

・社会詩篇要素  
↓飲酒問題

27 さき立つ名譽村長は

なし 15

- ①さき立つ名譽村長は、寒煙毒をふくめるを、豪氣によりて受けつけず。
- ②次なる沙弥は願を円き、猫毛の帽に護りつゝ、

\*湯本・小学校？

△名譽村長

△沙弥

生活詩篇 14

・信仰詩篇要素の可能性

その身は信にゆだねたり。  
 ③ 三なる技師は徳薄く、  
 すでに過冷のシロツコに、  
 なかば氣管をやぶりたれ。  
 ④ 最後に女訓導は、  
 ショールを面に被ふれば、  
 アラーの守りあるごとし。

28 僧の妻面膨れたる

① 僧の妻面膨れたる、  
 飯盛りし佛器さゝげくる。  
 ② 「・↓」〔 〕 雪やみて朝日は青く、  
 かうかうと僧は看経。「・↓」〔 〕  
 ③ 寄進札そゞろに誦みて、  
 僧 「?↓・」の妻庫裡にしりぞく。  
 ④ 「・↓」〔 〕 いまはとて異の銅鼓うち、  
 晨光はみどりとかはる。「・↓」〔 〕

29 玉蜀黍を播きやめ

① 「玉蜀黍を播きやめ環にならふ、  
 開所の祭近ければ、  
 さんさ踊りをさらひせん。」  
 技手農婦らに令しけり。  
 ② 野は野のかぎりめくるめく、  
 青きかすみのなかにして、  
 まひるをひとらうちをど  
 る「。↓」〔 〕

△技師

△女訓導

\*盛岡・教浄寺?

△僧の妻

△語り手

△僧

生活詩篇 15

・信仰詩篇要素

・社会詩篇要素の可能性  
 ↓「寄進札」寺院の世俗化?

▲表変更括  
 弧一対

▲表変更括  
 弧一対

▲表訂正

\*軍馬補充部六原支部

田園詩篇 9

△技手、△農婦



袖をかぎしてうちをどる。  
 ③ さあれひんがし「つらの、  
 うこんぎくらをせなにして、  
 所長中佐は胸たかく、  
 野面はるかにのぞみある。  
 ④ 「いそぎひれふせひざまづけ」↓、  
 みじろがされ。」と枝手エダテは、  
 種子やまくらにいこふらん、  
 ひとらかすみにうごくともなし。

30 うからもて

① うからもて臺地の雪に、  
 部落シユカなせるその杜ツルギ馳し。  
 ② 曙ユキ人、満りくる児らを、  
 穹窿クワウリウぞ光りて覆ふ。

31 残モナドノツク 丘の雪の上に

① 残モナドノツク 丘の雪の上に、  
 二すじうかぶ雲ありて、  
 誰かは知らねサラアなる、  
 女のおもひをうつしたる。  
 ② 信をだになほ装へる、  
 よりよき生のこのねがひを、  
 なにとてきみはさとり得ぬと、  
 しばしうらみて消えにけり。

32 「民間薬」

▲表調整<sup>4</sup>

なし16

なし17

△所長（陸軍中佐）

\*近隣農村

△児ら

\*花巻、早池峯山を望む生活詩篇16

△サラアなる女

(△われ)

\*近隣農村

・社会詩篇要素の可能性  
 ↓舞台「軍馬補充部」

田園詩篇10

・社会詩篇要素の可能性  
 ↓農村問題（非近代的空間）

田園詩篇16

・信仰詩篇要素の可能性

田園詩篇11

民間薬

たけしき耕の具を帯びて、  
熊熊の皮は着たれども、  
夜に日をつける一月の、  
水田のわざに身をわびて、  
しばしましろの露置ける、  
すぎなの畔にまどろめば、  
はじめは額の雲ぬるみ、  
鳴きかひめぐるむらひばり、  
やがては古き巨人の、  
石の匙もて出できたり、  
ネプウメリてふ草の葉を、  
薬に食めとをしへけり。

13 なし 18

△農夫

△古き巨人

・社会詩篇要素の可能性  
↓農村問題(過労と医療)

33 吹雪かゞやくなかにして

- ①吹雪かゞやくなかにして、  
まことに犬の吠え集りし。
- ②燃ゆる吹雪のさなかとて、  
「?」↓「妖しき目」↓「し」↓「」をなせるもの  
かな。

▲? ▲語調<sup>1</sup>  
整

\*北上山地の峠?

△語り手

自然詩篇 4

・信仰詩篇要素の可能性

2 『文語詩稿一百篇』に分集されてゆく詩稿群

34 「母」

母

14 なし 19

\*花巻・日居城野

田園詩篇 12

雪袴黒くうがらし  
うなるのこ瓜食みくれば

△うなるのこ

風澄めるよもの山はに  
うづまくや秋のしらくも

その身こそ瓜も欲りせん  
齢弱き母にしあれば  
手すさびに紅き萱穂を  
つみつどへ野をよぎるなれ

35 「岩手公園」

岩手公園

① 「かなた」と老いしタピングは、  
杖をはるかにゆびさせど、  
東はるかに散乱の、  
さびしき銀は声もなし。

② なみなす丘はぼうぼうと、  
青きりんごの色に暮れ、  
大学生のタピングは、  
口笛軽く吹きにけり。

③ 老いたるミセスタッピング、  
「去年なが姉はこゝにして、  
中学生の一組に、  
花のことばを教へしか。」

④ 孤光燈にめくるめき、  
羽虫の群のあつまりつ、  
川と銀行木のみどり、  
まちはしづかにたそがる。

36 「崖下の床屋」

崖下の床屋

15

なし20

△母

\*岩手公園

△タピング牧師△話  
り手

△タピング息子

△タピング夫人

\*花巻市街？

16

・社会詩篇要素  
↓農村問題（飢饉、若い母）

生活詩篇 17

・社会詩篇要素の可能性  
↓農村問題（非近代的空間と近代的空間）

生活詩篇 18

- ① あかりを外れし古かぐみ、客あるさまにみまもりて、唾の子鳴らす空缺。
- ② かぐみは映す崖のはな、ちさき祠に蔓垂れて、三日月凍る銀斜子。
- ③ 「凍↓洵↓」洵たる泥をほとほと、かまちにけりて町助役、玻璃戸の冬を入り来る。
- ④ のれんをあげて理髪技士、白き衣をつくるひつ、弟子の缺をとりあぐる。

▲語調整

△語り手

△唾の子(弟子)

△町助役

△理髪技士

・社会詩篇要素の可能性  
↓身分構造の問題(徒弟制度)

37 「祭日」

祭日

- ① 谷権現の祭りとて、麓に白き幟たち、むらがり續く丘丘に、鼓の音の数のしどろなる。
- ② 穎花青じろき稲むしろ、水路のへりにたぐずみて、朝の曇りのこんにやくを、さくさくさくと切りにけり。

17

なし21

\*谷内・丹内山神社

田園詩篇 13

△ひと(煮売の農婦)

・社会詩篇要素  
↓凶作の予兆

38 「保線工事」

保線工事

- ① 狸の毛皮を耳にはめ、シャブロの束に指組みて、うつろふ窓の雪のさま、

18

なし22

\*車中

生活詩篇 19

黄なるまなこに泛べたり。 旧字  
②雪をおとして立つ鳥に、

妻がけはひのしるければ、  
ほのかに笑まふたまゆらを、  
松は疊めり風のそら。

39 「ポランの広場」

ポランの広場

つめくさ灯ともす宵の広場  
むかしのラルゴを唄ひかはし  
雲をもどよもし 夜風ノチカゼにわすれて  
とりいれまじかに歳トシよ熟れぬ

19

なし23

△保線工事

・社会詩篇要素の可能性  
↓農村からの出稼ぎ工夫？

\*理想農村・広場

田園詩篇14

△農民

組合理事らは 藁のマント

山猫博士は かはのころも

醸せぬさかづき その数かずしらねば  
はるかにめぐりぬ射手イハや蠅

△組合理事  
△山猫博士

・社会詩篇要素  
↓山猫博士・醸せぬさかづき||理想農村の建設を  
阻むもの

40 「巡業隊」

巡業隊

①霜のまひるのはたごやに、  
がらすぞうるむ一瓶の、  
酒の黄なるをわかちつゝ、  
そとろに錫スズの笛吹ける。 旧字

20

なし24

△楽手

△語り手  
△農民

・社会詩篇要素の可能性  
↓背景に農村の貧しさ

②すがれし大豆をつみ累げ、  
よぼよぼ馬の過ぎ行くや、  
風はのぼりをはためかし、  
障子の紙に影刷カゲシきぬ。

③ひとりかすかに舌打てば、

生活詩篇20

ひとり古きらしや靴、  
黒きカードの面反りの、  
わびしきものをとりいづる。  
④さらにはげしく舌打ちて、  
長ぞまなごをそらしぬと、  
樂手はさびしだんまりの、  
投げの型してまぎらかす。

4 1 「夜」  
夜

はたらきまたはいたつきて、  
もろ手ほてりに耐えざるは、  
おほかた黒の硅板岩礫を、  
にぎりてこそはまどろみき。

2  
1  
-----  
なし 2 5

\*近隣農村

田園詩篇 1 5

4 2 「医院」

醫院

- ①陶標春をつめたくて、  
水松も青く牙えそめぬ。
- ②水うら濁る島の苔、  
萱屋に玻璃のあえかなる。
- ③瓶をたもちてうなぬらの、  
みたりためらひ入りくるや。
- ④神農像に饌ささぐと、  
學士はつみぬ露の臺。

2  
2  
-----  
なし 2 6

\*花巻市街？・医院

生活詩篇 2 1

△語り手

△農民

・社会詩篇要素の可能性  
↓農村問題（過労と医療）

4 3 沃土ノニホヒ

①沃土ノニホヒフルヒ來ス、

△医学士

△うなぬ

\*近隣農村・里山

田園詩篇 1 6

- 青貝山ノフモト谷、  
荒レシ河原ニヒトモトノ、  
辛夷花サキ立チニケリ。
- ②モロビト山ニ入ラントテ、  
朝明ヲココニ待チツドヒ、  
或ヒハ鋸ノ目ヲツクリ、  
アルハタバコヲノミニケリ。
- ③青キ朝日ハコノトキニ、  
ケブリヲノボリユラメケバ、  
樹ハサウサウト燃エイデテ、  
カナシキマデニヒカリタツ。
- ④カクテアシタハヒルトナリ、  
水音イヨシグクシテ、  
鳥トキドキニ群レタレド、  
ヒトノケハヒハナカリケリ。
- ⑤雲ハ經紙ノ紺ニ暮レ、  
樹ハカグロナル山ニ、  
梢螺鈿ノサマナシテ、  
コトトフコトトナリニケリ。
- ⑥ツ「レ↓・」カレノ銀ヲクユラシテ、  
モロ人谷ヲイデ來リ、  
ココニニ「ダ↓タ」ビロソソギ、  
セナナル荷ヲバトトノヘヌ。
- ⑦ソハヒマビマニトリテ來シ、  
木ノ芽ノ数ヲトリカハシ、  
アルヒハ百合ノ五塊ヲ、  
ナガ大母ニ持テトイフ。
- ⑧ヤガテ高木モ夜トナレバ、  
サラニアシタヲ云ヒカハシ、

▲ 語訂正

▲ 語訂正

△ 語り手

△ モロビト (村人)

△ なれ (われ)

ヒトビトオノモ松ノ野ヲ、  
ワギ家ノカタヘインギケリ。

44 みちべの苔に

①みちべの苔「の↓・」にまどろめば、

日輪そらにさむくして、

わづかによどむ風くまの、

きみが頬ちかくあるごとし。旧字

②まがつびここに塚ありと、

呼ばはる声「に↓・」のおどろしき、

風はみそらに遠くして、

山なみ雪にたゞあえかなる。

45 けむりは時に

①けむりは時に丘丘の、

栗の赤葉に立ちまどひ、

あるとき黄金のやどり木は、旧字

ひかりて窓をよぎりけり。

②(あはれ土耳古玉キヌメのそらのいろ、

かしこいづれの天なるや)

(かしこにあらずことならず、

われらはしかく習ふのみ。)

③(浮屠ウツも天を云ひ傳へ、

三十三を数ふなり、

上の無色にいたりては、

光、思想を食めるのみ。)

④そらのひかりのきはみなく、

▲語調整

▲語調整

\*近隣農村

△きみ(われ)

\*車中

△話者(男)

なし27

信仰詩篇 3

信仰詩篇 4



ひるのたびちの遠ければ、  
をとめは餓えてすべもなく、  
胸なる瑠たまをゆさぶりぬ。

46 「心相」

心相

①ころの師とはならんとも、  
ころを師とはなさざれと、  
いましめ古りしなながらに、  
たよりなきこそころなれ。

②はじめは潜む 蒼穹に、

あはれ鷲王の影供ぞと、

面さへ映えて仰ぎしを、

いまは酸えしておぞましき

澱粉堆とあざわらひ、

いたゞきすべる雪雲を、

腐せし馬鈴薯と「す↓さ」げすみぬ。

23

▲語訂正

△をとめ

\*岩手山麓・小岩井？

信仰詩篇 5

△語り手

47 「曉眠」

曉眠

①微けき霜のかけらもて、

西風ひばに鳴りくれば、

街の燈あかりの黄のひとつ、

ふるえて弱く落ちんとす。

②そは瞳まなこゆらぐ翁おきな一面

おもてとなして世をわたる、

かのうらぶれの贖物師、

木藤がかりの門かどなれや。

③寫「真↓樂」が雲母を揉み削こげ、

24

▲語変更

\*花巻・斎藤宗次郎宅？ 生活詩篇 22

△贖物師木藤

・信仰詩篇要素の可能性  
↓贖物師木藤⇨キリスト者斎藤宗次郎？

芭蕉の像にけぶりしつ、  
 春はちかしとしかすがに、  
 雪の雲こそかくろなれ。  
 ④ ちいさきびやうや失ひし、  
 あかりまたたくこの門に、  
 あしたの風はとどろきて、  
 ひとははかなくなほ眠るらし。

48 「早検」

早検

① 雲の鎖やむら立ちや、  
 森はた森のしろけむり、  
 鳥はさながら禍津日を、  
 はなるとばかり群れ去りぬ。  
 ② 野を野のかぎり早割れ田の、  
 白き空穂のなかにして、  
 術をもしらに家長たち、  
 むなしく風をみまもりぬ。

25  
 なし28

49 老いては冬の

① 老いては冬の孔雀守る、  
 がまの脛巾（ひざぬま）とかはごろも、  
 園（うゑ）の廣場の午后二時は、  
 湯管（ゆぐん）のむせびたゝほのか。  
 ② あるひはくらみまた燃えて、  
 降り「来↓・」くる雪の縞（しま）なすは、  
 さは遠からぬ雲影の、  
 日や越え行くと仰ぎ見る。

▲表調整<sup>5</sup>

△語り手  
 △ひと〓木藤

\*近隣農村

\*花巻温泉遊園地

△番人（園丁の題も一時あつた）

田園詩篇 17

・社会詩篇要素  
 ↓凶作

生活詩篇 23

・社会詩篇要素の可能性  
 ↓舞台「花巻温泉遊園地」

50 「老農」

老農

- ① 火雲むらがり翔べば、  
そのまなこはばみてうつろ。
- ② 火雲あつまり去れば、  
麥の束遠くたどずむ。

26

なし29

\*近隣農村

△老農

田園詩篇 18

- ・ 社会詩篇要素の可能性  
↓ 「火雲」 || 夏の異常気象？

51 「歯科医院」

歯科醫院

- ① ま夏は梅の枝青く、  
風なき窓を往く蟻や、  
碧空の反射のなかにして、  
うつつにめぐる鑿ぐるま。
- ② 淨き衣せした「わ↓は」れめの、  
ソーファによりて「微↓」まどろめる、  
はてもしらねば磁氣風、  
かぼそき肩ををのかす。

27

▲表訂正  
▲語調整

\*花巻市街

(△歯科医)

△語り手△たはれめ

生活詩篇 24

- ・ 社会詩篇要素  
↓ 農村問題 (娘の身売り)

52 白金環の天末を

- ① 白金環の天末を、  
みなかみ遠くめぐらしつ、  
大煙突はひさびさに、  
くらきけむりをあげにけり。
- ② けむり停まるみぞれ雲、  
峽を覆ひてひくければ、  
大工業の光景なりと、  
技師も出でたち仰ぎけり。

なし30

\*花巻市街

△技師

生活詩篇 25

- ・ 社会詩篇要素の可能性  
↓ インチキ工業 (草稿段階の命名)

53 「早春」

早春

黒雲峽を乱れ飛び  
技師ら亜炭の火に寄りぬ  
げにもひとびと崇むるは  
青き Gosan 銅の脈  
わが索むるはまことのことば  
雨の中なる真言なり

28  
なし 31

\*和賀・仙人鉦山?

生活詩篇 26

△鉦山技師

△われ

・信仰詩篇要素

54 「来々軒」

来々軒

- ① 浙江の林光文は、  
かゞやかにまなご睦き、  
そが弟子の足をゆびさし、  
凜としてみゆるぎもせず。
- ② ちゞれ雲西に傷みて、  
いささかの粉雪ふりしき、  
警察のスレートも暮れ、  
賣り出しの旗もわびしき。
- ③ むくつけき犬の入り来て、  
ふつふつと釜はたぎれど、
- ④ もろともに凍れるごとく、  
もろともに刻めるごとく、  
雪しろきまちにしたがひ、  
たそがれの雲にさからふ。

29

▲<sup>25</sup>語変更

\*花巻・林ラーメン店

生活詩篇 27

△林光文(店主)

△弟子

・社会詩篇要素の可能性  
↓身分構造の問題(徒弟制度)、町の不況

55 「林館開業」

林館開業

30  
なし32

\*花巻温泉

生活詩篇 28

①凝灰岩もて疊み杉植多て、  
青娥六七なまめかし、  
南銀河と野の黒に、

△青娥（美女）

・社会詩篇要素  
↓農村問題（娘の身売り）

その牖々をひらきたり。

②数寄の光壁更たけて、

千の鱗翅と鞘翅目、

直翅の輩はきたれども、

公子訪へるはあらざりき。

△語り手

56 「コバルト山地」

コバルト山地。

31  
なし33

\*北上山地？

自然詩篇 5

なべて吹雪のたえまより、  
はたしらくものきれまより、  
コバルト山地山肌の、  
ひらめき酸えてまた青き。

57 「市日」

市日

32  
なし34

\*米内村？、玉山村？

田園詩篇 19

①丹藤に越ゆるみかけ尾根、  
うつろひかればいと近し。

②地藏菩薩のすがたして、

栗を食うぶる童と、

縞の粗麻布の胸しぼり、

鏡欲りするその姉と。

③丹藤に越ゆる尾根の上に、

なまこの雲ぞうかぶなり。

△童

△姉

・信仰詩篇要素の可能性  
↓童子嬉戯  
・社会詩篇要素の可能性  
↓農村の貧しさ

58 「廃坑」

廢坑

- ① 春ちかけれど坑々の、  
祠は荒れて天霧し、  
事務所飯場もおしなべて、  
鳥の宿りとかはりけり。
- ② みちをながるゝ雪代に、  
錆びしナイフをとりいでつ、  
しばし閑してまもりびと、  
さびしく水をはねこゆる。

3 3  
なし 3 5

\*和賀・仙人鉦山？

生活詩篇 2 9  
 ・ 社会詩篇要素  
 ↓ 鉦山閉鎖という社会状況

59 「副業」

副業

- ① 雨降りしづくひるすぎを、  
青きさゝげの籠とりて、  
巨利を獲るてふ副業の、  
銀毛兎に餌すなり。
- ② 兎はついにつくのはね、  
ひとは頬あかく美しければ、  
べつ甲ゴムの長靴や、  
緑のシャツも着くるなり。

3 4  
なし 3 6

\*近隣農村

田園詩篇 2 0

△ひと（若い農夫）

・ 社会詩篇要素  
 ↓ 農村問題（副業）

60 「記念写真」

記念写真

- ① 學生壇を並び立ち、  
教授助教授みな座して、  
つめたき風の聖餐を、  
かしこみ待つと見えにけり。
- ② （あな虹立てり降るべしや）

3 5

△学生  
△教授△助教授

生活詩篇 3 0

\*盛岡高等農林学校

(さなりかしこはしぐるらし)

…[ ] ↓ [ ] あな虹立てり降るべし

や…

…さなりかしこはしぐるらし…

寫眞師臺を見まはして、

ひとり面にあげしめぬ。

③ 時しもあれやさんとして、

身を頼はする學の長、

雪刷く山の目もあやに、

たゞさんらんとわななける。

③ …それをののかんそのことの、

ゆゑにはかに推し得ね、

大禮服にかくばかり、

美しき効果をなさんこと、

いづちの邦の文献か、

④ しかも手練の寫眞師が、

よく録しつるものあらん…

三秒ひらく大レンズ、

千の瞳のおおのにおの、

朝の虹こそ宿りけれ。

61 「塔中秘事」

塔中秘事

36

なし37

▲表訂正

△語り手？

△寫眞師

△学長

・社会詩篇要素の可能性  
↓皇室紀念、崇敬

\*小岩井農場・三階倉庫田園詩篇21

△語り手

・社会詩篇要素の可能性  
↓舞台「小岩井農場」  
・信仰詩篇要素  
↓歎喜天

ひそかなる女のわらひ、  
何ごとかりりと漏れくる。

62 われのみみちにたゞしきと

われのみみちにたゞしきと、  
ちちのいかりをあざわらひ、  
ははのなげきをさげすみて、  
さこそは得つるやまひゆゑ、  
こゑはむなしく思あえぎ、  
春は來れども日に三たび、  
あせうちながしのたうては、  
すがたばかりは録されし、  
下品ざんげのさまなせり。

63 「岩頸列」

岩頸列

① 西は箱ヶと毒ヶ森、  
椀コ、南昌、東根の、  
古き岩頸の一行に、

37

氷霧あえかのまひるかな。  
② からくみやこ「と↓・」にたどりける、

芝雀は旅をものがたり、  
「その小屋掛けのうしろには、  
寒げなる山によきによきと、  
立ちし」とばかり口「く↓つ」ぐみ、  
とみにわらひにまぎらして、  
濫茶をしげにのみしてふ、  
そのことまごとうべなれや。

なし 38

△女、(△男)

\*花巻・生家？

△「われ」(かれ)

△話者

\*箱ヶ森毒ヶ森大石山南昌山東根山自然詩篇 6

△芝雀

▲語訂正

▲語調整

信仰詩篇 6



③ 山よほのぼのひらめきて、  
わびしき雲をふりはらへ、  
その雪尾根をかざやかし、  
野面のうれひを燃し了せ。

64 「病技師」

病技師

38

なし39

\*花巻・松庵寺  
△病技師

生活詩篇 31

・社会詩篇要素の可能性  
↓凶作・飢饉の風土

① こよひの闇はあたたかし、  
風のなかにて泣かんとぞ、  
二重のマント蔽めしく、  
にせのステッキつきいでぬ。  
② 蝕む胸をまぎらひて、  
こぼと鳴り行く水のはた、  
飢饉供養の燈に照りて、  
飢饉供養の巨石並めり。

65 「酸虹」

酸虹

39

◎ 鶯黄の柳いくそたび、  
窓を掃ふと出「だ↓・」でたちて、  
片頬むなしき「群↓・」郡長、  
酸えたる虹をわらふなり。

▲語訂正  
▲表訂正

\*花巻・郡役所

生活詩篇 32

・社会詩篇要素の可能性  
↓凶作・飢饉の風土

66 「柳沢野」

柳沢野

40

なし40

\*岩手山麓・柳沢

自然詩篇 7

① 焼けのなだらを雲はせて、  
海鼠のほひいちじるき。  
② うれひて蒼き柏ゆゑ、  
馬は黒藻に飾らるゝ。

・社会詩篇要素の可能性  
↓ヤマセの来襲

67 「軍事連鎖劇」

連鎖劇

①キネオラマ、

寒天光のそがゆゑに、

ぴたと煙草をなげうちし、

上等兵の袖の上、

また背景の紺の上を、

雲どしどしとびにけり。

②そのとき角のせんたくや、

まったくもって涙をながし、

やがてほそほそなみだかわき、

すがめひからせ、

トンビのえりを直したりけり。

4 1  
なし 4 1

\*花巻・花陽館？朝日座？**生活詩篇**33

△語り手

△上等兵（役者）

△洗濯屋主人

・社会詩篇要素の可能性  
↓戦争問題

68 「峡野早春」

峡野早春

①夜見來の川のくらくして、

斑雪しづかにけむりだつ。

②二すじ白き日のひかり、

ややになまめく笹のいろ。

③稔らぬなげきいまさらに、

春をのぞみて深めるを。

④雲はまばゆき墨と銀、

波羅密山の松を越す。

4 2  
なし 4 2

\*北上川流域

**自然詩篇**8

△（農民？、人々？）

・社会詩篇要素の可能性  
↓凶作・飢饉の風土  
・信仰詩篇要素の可能性

69 「短夜」

短夜

①屋臺を引きて帰ってくる、

4 3  
なし 4 3

△屋臺の主

\*根子・同心町

**生活詩篇**34

・社会詩篇要素の可能性

目あかし町の夜なかすぎ、  
うつは数ふるそのひまに、  
もやは淺葱とかはりけり。  
② みづから塗れる伯林青の、  
むらをさびしく苦笑ひ、  
胡桃覆へる石屋根に、  
いまぞねむれと入り行きぬ。

70 水楢松にまじらふは

- ① 「水楢松にまじらふは、  
クロスワードのすがたかな。  
誰かやさしくもの云ひて、  
えらひはなくて風吹けり。  
② 「かしこに立てる楢の木は、  
片枝青くしげりして、  
パンの神にもふさはしき。」  
③ 「かのパスを見よ葉櫻の、  
列は氷雲に浮きいでて、  
なが師も説かん順列を、  
緑の毬に示したり。」  
④ しばしむなしく風ふきて、  
聲はさびしく吐息しぬ。  
「こたび縣の負債せる、  
われがとがにはあらざるを。」

71 「開墾地落上」  
開墾地落上

4  
4  
なし  
4  
5

なし  
4  
4

\*花巻・生家？

△誰か（父親？）

（△なれ（子？））

\*近隣農村

↓棄農者？

生活詩篇 35

・ 社会詩篇要素の可能性  
↓ 銀行の再編整理問題

田園詩篇 22

- ① 白髪かざして高清は、  
ブロージットと云へるなり。
- ② 松の岩頸春の雲、  
コップに小さく映るなり。
- ③ ゲメンゲラーゲさながらを、  
焦げ木はかつとにほふなり。
- ④ 額を拍ちて高清は、  
また鶯を聴けるなり。

72 鶯宿はこの月の夜を

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし。  
鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし、  
黒雲ここにてたゞ乱れたり。  
七つ森の雪にうづみしひとつなり、  
けむりの下を逼りくるもの。  
月の下なる七つ森のそのひとつなり、  
かすかに雪の皺たゞむもの。  
月をうけし七つ森のはてのひとつなり、  
さびしき谷をうちいだくもの。  
月の下なる七つ森のその三つなり、  
小松まばらに雪を着るもの。  
月の下なる七つ森のその二つなり、  
オリオンと白き雲とをいたゞけるもの。  
七つ森の二つがなかのひとつなり、  
鉾石など掘りしあとのあるもの。  
月の下なる七つ森のなかの二つなり、  
雪白々と裾を引くもの。  
月の下なる七つ森のその三つなり、

なし46

△高清(村会議員)

\*雫石・七つ森

△語り手

・社会詩篇要素の可能性  
↓耕地整理問題

自然詩篇 9

・社会詩篇要素の可能性  
↓「鉾石など掘りしあと」?

白々として起伏するもの。  
七つ森の三つがなかの一つなり、  
貝のぼたんをあまた噴くもの。  
月のあかりの七つ森のはての一つなり、  
けはしく白く稜立てるもの。  
稜立てる七つ森のそのはてしもの、  
旋り了りてまこと明るし。

73 古き勾当貞齊が

なし 47

\*花巻市街

生活詩篇 36

① 古き勾当貞齊が、  
いしづみ低く垂れ覆ひ、  
雪の楓は暮れぞらに、  
ひかり妖しく狎れにけり。  
② 連れて翔けこしむらすづめ、  
たまゆらりうと羽はりて、  
沈むや宙をたちまちに、  
りうと羽はり去りにけり。

74 「涅槃堂」

涅槃堂

45

▲ 語調整

\*花巻・生家？

信仰詩篇 7

① 黒鳥か羽音重げに、  
雪はなほ降りやまぬらし。  
② わが命なほ今朝燃えて、  
「堂↓・」しんしんと堂はうもるゝ。  
③ 風鳴りて松のさざめき、  
またしばし飛びかふ鳥や。  
④ 雪の山また雪の丘、  
五輪塔数をしらすも。

△語り手  
△われ

75 「悍馬」(二)

悍馬

① 厩肥をばらひてその馬の、  
まなこは変る紅の龍、  
けいけい碧きびいどろの、  
天をあがきてとらんとす。  
② 黝き菅藻の袍はねて、  
叩きそだたく封介に、  
雲ののろしはとどろきて、  
こぶしの花もけむるなり。

4  
6  
なし  
4  
8

\*近隣農村

田園詩篇 23

76 「國土」

國土

① 青き草山雑木山、  
はた松森と岩の鐘、  
ありともわかぬ皺ごとに、  
白雲よどみかどやきぬ。  
② 一石一字をろがみて、  
そのかみひそにうづめけん、  
壽量の品は神さびて、  
みねにそのをに鎮まりぬ。

4  
7  
なし  
4  
9

\*奥羽山脈？

自然詩篇 10

77 塀のかなたに

① 塀のかなたに嘉菟治かも、  
ピアノぼろろと弾きたれば、  
一、あかきひのきのさなかより、  
春のはむしらをどりいづ。

なし  
5  
0

△嘉菟治

\*花巻・女学校附近

生活詩篇 37

信仰詩篇要素

二、あかつちいけにかざまりて、  
鳥にごりの水のめり。

②あはれつたなきソプラノは、  
ゆふべの雲にうちふるひ、  
灰まきびとはひらめきて、  
桐のはたけを出できたる。

78 「四時」

四時

①時しも岩手軽鉄の、  
待合室の古時計、

つまづきながら四時うてば、  
助役たばこを吸ひやめぬ。

②時しも赭きひのきより、  
農學生ら奔せいでて、

雪の紳士のはなづらに、  
雪のつぶてをなげにけり。

③時しも土手のかなたなる、  
郡役所には議員たち、

視察の件を可決して、  
はたはたと手をうちにけり。

④時しも老いし小使は、  
豚にえさかふバケツして、

農學校の窓下を、  
足なづみつゝ過ぎしなれ。

79 「羅沙売」

羅沙賣

①バビロニ柳掃ひしと、

48

なし51

\*稗貴農学校

△女生徒

△灰まきびと

△鳥谷ヶ崎駅助役

△農学生

△郡会議員

△語り手△小使

\*花巻市街？

49

なし52

生活詩篇 38

・ 社会詩篇要素の可能性  
↓ 郡議会「視察の件」？

生活詩篇 39

あゆみをとめし羅沙賣りは、  
つるべをとりてやゝしばし、  
みなみの風に息づきぬ。  
②しらしら醸す天の川、  
はてなく翔ける夜の鳥、  
かすかに錢を鳴らしつゝ、  
ひとは水繩を操りあぐる。

80 「臘月」

臘月

すばるぼし高く仰ぎて、  
のど嗽ぎあるじ眠れば、  
千キロの氷をになひ、  
かうかうと水車はめぐる。

50

なし53

△語り手△羅沙売り  
△ひと〓羅沙売り？

\*花巻・高常水車？

△あるじ

田園詩篇 24

・社会詩篇要素の可能性  
↓羅沙売り〓亡命ロシア人？

81 天狗草

天狗草、けとばし了へば、  
親方よ、  
朝餉とせずや、こゝな苔むしろ。  
……りんと引け、  
りんと引けかし。  
十二八！  
その標うちてテープをさめ  
來！……

なし54

\*花巻温泉地造成？

△親方  
△工事監督？

生活詩篇 40

・社会詩篇要素の可能性  
↓舞台「花巻温泉遊園地」？

山の雲に、ラムネ湧くらし、  
親方よ、  
雨の中にていつはいやらすや。

△語り手



82 「牛」

牛

①そは一びきのエーシャ牛、  
夜の地靄とかれ草に、  
角をこすりてたわむる。

②窒素工場の火の映えは、  
層雲列を赤く焦き、  
鈍き砂丘のかなたには、  
海わりわりとうち顛ふ、  
さもあらばあれ嚙りなば、  
なほ嚙り得ん黄銅の、  
月のあかりのそのゆゑに、  
こたびは牛は角をもて、  
柵を叩きてたはむる。

旧字

5  
1  
なし  
5  
5

\* 苦小牧・パルプ工場？  
田園詩篇 25

・ 社会詩篇要素の可能性  
↓ 舞台「放牧地と窒素工場」

83 秘事念佛の大師匠 (二)

①秘事念佛の大師匠、  
元信齊は妻子もて、  
北上ぎしの南風、  
けふぞ陸稻を播きつくる。  
②雲紫に日は熟れて、  
青らみそめし野いばらや、  
川は川とてひたすらに、  
八功德水ながしけり。  
③たまたまその子口あきて、  
楊の梢に見とるれば、  
元「言」信齊は齒軋りて、

\* 花巻・北上河岸

田園詩篇 26

・ 社会詩篇要素  
↓ 秘事念佛問題

子  
△元信齊、△妻、△

▲ 語訂正

石を發止と投げつくる。  
④青蠅ひかりめぐらしつ、  
練肥を捧げてその妻は、  
たゞ恩人ぞ導師ぞと、  
おのが夫をば拜むなり。

8 4 厩肥をになひて

①厩肥をになひていくそたび、  
まなつをけぶる沖積層、  
水の岸なる新墾畑に、  
往來もひるとなりにけり。  
②エナメルエナメルの雲鳥の聲、  
唐黍トウモロコシ焼きはみてやすらへば、  
熱く苦しきその業に、  
遠き情事のおもひあり。

8 5 「式場」

式場  
氷の雫のいばらを、  
液量計の雪に盛り、  
鐘を鳴らせばたちまちに、  
部長訓辞をなせるなり。

8 6 翁面おもてとなして

翁面、  
おもてとなして世経るなど、  
ひとをあざみしそのひまに、

なし 5 6

\*羅須地人協会自耕地？ 田園詩篇 2 7

△農夫

・信仰詩篇要素

5 2  
なし 5 7

\*岩手国民高等学校

生活詩篇 4 1

△部長

・社会詩篇要素  
↓部長 坂本内務部長、舞台「岩手国民高等学校」

なし 5 8

\*花巻・生家？

信仰詩篇 8

△語り手

やみほゝけたれつかれたれ、  
われは三十ぢをなかばにて、  
緊那羅面とはなりにけらしな。

87 「氷上」

氷上

53

なし59

△われ

\*岩手公園？

生活詩篇 42

①月のたわむれ馥るころ、  
氷は冴えてをちこちに、  
さゝめきしげくなりけり。

②をさげび走る町のこら、  
高張白くつらねたる、  
明治女塾の舎生たち。

③さてはにはかに現はれて、  
ひたすらうしろすべりする、  
黒き毛削の庶務課長。

④死火山の列雪青く、  
よき貴人の死蠟とも、  
星の蜘蛛来て網はけり。

88 うたがふをやめよ

①うたがふをやめよ、

林はさむくして、  
いさゝかの雪凍りしき、  
根まがり杉ものびてゆるゝを。

②胸張りて立てよ、  
林の雪のうゝ

青き杉葉の落ちちりて  
空にはあまたからすなけるを。

なし60

\*花巻・城跡の林？

信仰詩篇 9

△町の子どもたち  
△女学校の舎生たち  
△県庁の庶務課長  
(男)

③ そらふかく息せよ、  
杉のうれたかみ、  
烏いくむれあらそへば、  
氷霧ぞさつとひかり落つるを。

89 「電気工夫」

電気工夫

54

なし61

① (直き時計はさま頑く、  
憎に鍛えし瞳は強し)  
さはあれ攀ぢる電塔の、  
四方に辛夷の花深き。  
② 南風光の網織れば、  
ごろろと鳴らす碍子群、  
艸火のなかにまじらひて、  
蹄のたぐひけぶるらし。

90 腐植土の

① 駅前のぬかるみよりの照り返し、  
材木の上のちいさき露店。  
② 腐植土のぬかるみよりの照り返しに、  
二銭の鏡あまたならべぬ。  
③ ぬかるみの光を負ひてすがめの子、  
すがめの子一人りと立ちたり。  
④ 掃除せし「↓」ラムプをも「て↓」  
ちてコークスの、廣場を駅「前↓」  
夫大股に行く。  
⑤ 風ふきて廣場廣場のたまり水、  
いちめんゆれてさゞめきにけり。

青インク起  
稿↓手入れ

▲表調整▲  
語調整▲語  
変更

\*湯本村？

△話者は語り手？  
△電気工夫

△語り手

\*雫石・春木場？

△すがめの少女

△語り手  
△駅夫

田園詩篇 28

・ 社会詩篇要素の可能性  
↓ 舞台「花巻温泉電気軌道」の敷設現場？

生活詩篇 43

- ⑥こはいかに赤きずばんに毛皮など、春木ながしの人のいちれつ。
- ⑦なめげに見高らかに云ひ木流しら、鳶をかつぎて過ぎ行きにけり。
- ⑧列すぎてまた風ふきてぬかり水、白き西日にさざめきたり下り。
- ⑨西根よりみめよき女きたりしと、角の宿屋に眼がひかるなり。
- ⑩かつきりと額を削りしすがめの子、しきりに立ちて栗をたべたり。
- ⑪腐植土のぬかるみよりの照り返しに二銭の鏡賣るゝともなし。

▲語調整

△春木ながしの男たち

△女  
△宿屋(主?番頭?)

・社会詩篇要素の可能性  
↓「西根よりみめよき女きたりし」

91 「中尊寺」  
中尊寺

- ①七重の舍利の小塔に、蓋なすや緑の燐光。
- ②大盗は銀のかたびら、おろがむとまづ膝だてば、赭のまなごたつづらにて、もろの肱映えかゞやけり。
- ③手觸れ得ず、十字燐光、大盗は豊して没ゆる。

▲表調整

△大盗

・生活詩篇 44  
・信仰詩篇要素

92 「嘆願隊」  
嘆願隊

- ①やがて四時ともなりなんを、當主いまだに放たれず、

56

△(当主を待つ人た

・社会詩篇要素の可能性

・生活詩篇 45

外の面は冬のむらがらす、  
山の片面のかゞやける。

②二羽の鳥の争ひて、

さつと落ち入る林はやしばやし、

こ「そと」↓のとき大氣飽和して、  
霧は氷と結びけり。

93 小きメリヤス

①小きメリヤス塩の魚、

藻草花菓子烏賊の腦、

雲のちゞれの重りきて、

風すさまじく歳暮るゝ。

②はかなきかなや暮れそめて、

なほふかぶかと物おもひ、

街をうづめて行きまどふ、

みのらぬ村の家長たち。

94 日本球根商會が

①日本球根商會が、

よきものなりと販りこせば、

いたつきびとは窓ごと、

春きたらばとねがひけり。

②よすがら温き春雨に、

風信子華の十六は、

黒き葡萄を噴きいでて、

争かゞやきむらがりぬ。

③さもまがつびのすがたして、

▲語調整<sup>3</sup><sub>4</sub>

ち)

↓嘆願隊？

\*花巻・歳末市

生活詩篇 46

なし 62

△家長たち

↓凶作  
・社会詩篇要素

\*花巻共立病院？

生活詩篇 47

なし 63

△入院患者

あまりにくらきいろなれば、  
朝焼けうつすいちいちの、  
窓はむなしくとざされつ。

④七面鳥はさまよひて、  
ゴブルゴブルとあげつらひ、  
小き看護は窓に来て、  
あなやなにぞといぶかりぬ。

95 「賦役」

賦役

①あをあを燃ゆるみねの雪、  
風はいくたび崩れ来て、  
萌えし柏をとどろかし、  
きみかげさうを軋らしむ。  
②おのれと影とたゞふたり、  
あれと云はれし業なれば、  
ひねもす白き眼して、  
放牧の柵をつくろひぬ。

57  
なし64

△看護婦

\*岩手山麓？北上山地？  
田園詩篇29

・社会詩篇要素  
↓小作農民の賦役

96 商人ら

①商人ら、やみていぶせきわれをあざけ  
り、  
川ははるかか峽に鳴る。  
②ましろきそらの蔓むらに、  
雨をいとなむみそさとい、  
黒き砂糖の樽かげを、  
ひそかにわたる晝の猫。  
③病みに恥つむこの郷を、

なし65

△われ

\*花巻・生家？

生活詩篇48

△小作農夫  
△話者

つめたくすぐる春の風かな。

97 雪げの水に

① 雪げの水に溜されし、

御料草地のどての上を、

犬の皮着てたゞひとり、

葦外縁にたゞよへり。

② ひかりとどろく雪代の、

土手のきれ目をたゞひとり、

兎のごとく跳ねたるは、

かの耳しひの牧夫なるらん。

なし 6 6

\* 外山御料牧場

△ 語り手

△ 牧夫

田園詩篇 30

・ 社会詩篇要素の可能性

↓ 舞台「御料草地」、人物「耳しひの牧夫」

98 「病技師」(二) 病技師

① あえぎたどれば丘のひら、

地平をのぞむ天氣輪、

白き手巾を草にして、

をとめらみたりまごめしき。

② 大寺のみちをこととへど、

いらへず肩をすくむるは、

はやくも死相われにありやと、

肅「涼」をちの雲を見ぬ。

5 8

\* 花巻市街

△ をとめ △ 語り手

△ 病者(われ)

信仰詩篇 10

▲ 表訂正

99 「卒業式」 卒業式

卒業式

三寶または水差しなど、

たとへいくたび紅白の、

甘き澱みに運ぶとも、

5 9

なし 6 7

\* 稗貫? 花巻? 農学校

△ 教職員

生活詩篇 49



鐘なるまではカラぬるませじと、  
うなじに副へし半巾は、  
慈鎮和尚のごとくなり。

100 燈を紅き町

① 燈を紅き町の家より、  
いつはりの電話來れば、

(うみべより賣られしその子)  
あはたゞし白木のひのき。

② 雪の面に低く霧して、  
桑の群影ひくなかを、  
あゝ鈍びし二重のマント、  
銅版の紙片をおもふ。

なし68

△語り手

\*花巻市街

△女

△(話者は語り手?)

△語り手、△マント  
の男

生活詩篇 50

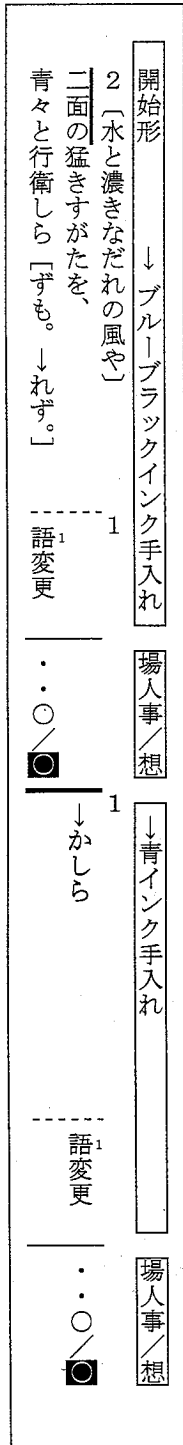
・ 社会詩篇要素  
↓ 「うみべより売られしその子」

資料篇Ⅳ 〈定稿・百編〉における起稿後の手入れ一覧

はじめに

ブルーブラックインクで起稿しつつ、書きながらの手入れを含めて清書し終えた定稿・百編に対して、詩人はさらに推敲を加えている。その作業には、ブルーブラックインクによるものと青インクによるものがある（いずれも推敲を示唆したメモのみを含む。以下同）。その手入れが競合している場合がないため、その先後を確定できないが、1章2節においても言及したとおり、ブルーブラックインク ↓ 青インク という過程を経たと想定して、分析をすすめたい。

その実状については、次のように掲出することとする（定稿本文の該当箇所のみ掲示、全体は2章2節の本文異同一覧を参照されたい）。



初行に定稿・百編の詩稿整理番号と題、その下にブルーブラックインク手入れ稿としての、また青インク手入れ稿としての、それぞれの整理番号を示している。本文では、ブルーブラックインクによる手入れ実態を「ずも。↓れず。」などと示し、青インクによる手入れは、その箇所を「二面の猛きすがたを」と傍線により示して下段に手入れ実態を掲げている。手入れ実態については、推敲規模を基準とした次のような略号で指示をしている。

連 詩稿本文を構成する連のレベルで推敲されている場合。

句 連を構成する句読点で仕切られた一文レベルで推敲されている場合。詩句とも呼称する。

語 一詩句を構成する語や句レベルの推敲で、3文節程度までのもの。語句とも呼称する。

表記 漢字かな・句読点・括弧など、表記レベルの推敲。

そしてその推敲内容を、

変更 詩想にかかわっておこなわれた選択とみるもの。

追加 連・詩句・語句を増設するもの。

並存 開始形段階に並記した推敲形。  
 調整 表現をさらにととのえるためのものとみるもの。  
 訂正 誤記などの単純な是正行為とみられるもの。  
 と分別して表わしている。なお、  
 メモ 本文余白にあるメモ類。  
 については、その内容を指示している。

開始形 ↓ブルーブラックインク手入れ	メモの内容	↓青インク手入れ	メモの内容
2 「水と濃きなだれの風や」 ②海浸す日より棲みゐて、 たゞかひにやぶれし神の、 二面の猛きすがたを、 青々と行衛しら「ずも。↓れず。」		1 ↓かしら 語 <sup>1</sup> 変更	
3 「氷雨虹すれば」 ①氷雨虹すれば、 時針盤たゞに明るし、 病の今朝やまさされる、 「絹の洋傘↓青き套」門を入るなし。		2 手入れなし	
4 砲兵観測隊 ①（はかばかしきよかの邑は、 よべ屯せしクゾなるを） 「白き鳥毛↓ましろき指」はうちふるひ、 銀のモナドはひしめきぬ。	3 語 <sup>3</sup> 変更	手入れなし	
6 「たそがれ思量惑くして」 ②頬青き僧ら清らなるテノールなし、 「寄寓の老僧↓老いし請僧」時々、	4 語 <sup>4</sup> 調整	手入れなし	

バスなすことはさながらに、  
風葱嶺に鳴るがごとし。  
〔・↓③〕(本文なし)  
③↓④「時しもあれや松の雪、  
をちこちどどと落ちたれば、  
室ぬちとみに明るくて、  
品は四請を了へにけり。」

1 2 「あかつき眠るみどりごを」

①あかつき眠るみどりごを、

ひそかに去りて小店さき、

しとみ上ぐれば川音や、

霧は「ほのかに↓さやかに」流れたり。

②よべの電燈をそのまゝに、

ひさげのこりし桃の顆みの、

アムステンジュンいろ紅き、

ほのかに映えて熟るるらし。

1 5 「林の中の柴小屋に」

西は縮れて雲傷み、

青き大野のあちこちに、

雨かとそゞぐ日のしめり、

こなたは古りし苗代の、

刈敷朽ちぬと水黴き、

なべて丘にも林にも、

たゞ鳴る松の聲なれば、

あはれさびしと我家の、

門立ち入りて白壁も、

落ちし土蔵の奥二階、

連<sup>1</sup>追加  
連<sup>2</sup>変更

5

語<sup>5</sup>  
変更

メモ  
1

6

熟<sup>う</sup>  
る？

手  
入れなし

手  
入れなし

梨の葉かざす窓べにて、  
筒のなかばを傾けて、

「・↓その齒(を↓に)風を吸ひつゝも、

しばしをしんとものおもひ、

夜に目をかけて工み來し、

いかさまさいをぞ手にとりにける。

16 「あな雪か屠者のひとりは」

「雉なりき青く流れし。」

「屠者の聲↓聲またも」わぶるがごとき。

落合に「鴨↓水」の聲して、

老いの屠者たゞ舌打ちぬ。

17 著者

造園學のテキストに、

おのれが像を百あまり、

著者の原図と銘うち「し↓て」、

かゝげしことも夢なれやと、

20 雪の宿

②をさけびたけり足ぶみて、

をどりめぐれるすがたゆゑ、

老いし博士や郡長、

やゝ凄凉のおもひ「あ↓な」り。

21 「川しろじろとまじはりて」

②宿世のくるみはんの毬、

干割れて青き泥岩「を↓に」、

句追加語<sup>1</sup>  
調整<sup>6</sup>

7

語変更<sup>7</sup>

語変更<sup>8</sup>

8

語調整<sup>9</sup>

9

語調整<sup>10</sup>

10

語調整<sup>11</sup>

手入れなし

手入れなし

手入れなし

手入れなし

はかなきかなやわが影の、  
卑しき鬼をうつすなり。

2 2 菱花

① 酒精のかほり硝銀の、

肌膚灼くにほひしかもあれ、  
大展覽の花むらは、

夏夜「さやか↓あざら」に息つきぬ。  
② その牛飼ひ「つ↓の」商ひ「つ↓の」、

はた鉄うてるもろ人の、  
さこそつちかひはぐくみし、  
四百の花のラムプなり。

③ 聲さやかなるをとめらは、  
おのおのよきに票を投げ、

「団辨護士↓高木検事」もホップ噛む、  
にがきわらひを頬になしき。

2 3 粟雨

① 粟雨そゞげば新墾の、

「いっさんあぐる↓まつ立ちこむる」つち  
けむり。

② 湯氣のぬるきに人たちて、  
故なく憤る身「は↓も↓は」暗「し↓き  
↓し」。

③ 「ちぎれし草と野ばらの根、↓すでに野ば  
らの根を淨み、」

「その巢をめぐる蟻の群。↓蟻はその巢を  
めぐるころ。」

1 1

語<sup>1</sup>変更<sup>2</sup>  
語<sup>1</sup>調整<sup>3</sup>語<sup>1</sup>  
調整

語<sup>1</sup>変更

1 2

語<sup>1</sup>変更

語<sup>1</sup>調整<sup>2</sup>語<sup>1</sup>

句<sup>2</sup>調整

句<sup>3</sup>調整  
メモ 2

手入れなし

手入れなし

③ 欄外↓?

2 4 「血のいろにゆがめる月は」

②木がくれのあやなき闇を、

「いくそたび↓聲細く」いゆきかへりて、

熱植えし黒き綿羊、

その姿いともあやしき。

2 5 車中

②開化郷士と見ゆるもの、

いと清純とよみしける、

寒天光のうら青に、

おもてをかくし「ねむる人あり。↓ひと

はねむれり。」

2 6 村道

②影と並木のだんだらを、

犬レオナルド足織れば、

賣り酒のみて熊之進、

赤眼に店をばあくるなり。

3 2 民間薬

たけしき耕の具を帯びて、

熊熊の皮は着たれども、

夜に日をつける一月の、

「水田||干泥」のわぎに身をわびて、

しばしましろの露置ける、

すぎなの畔にまどろめば、

3 6 崖下の床屋

③「<sup>い</sup>た<sup>て</sup>る<sup>つ</sup>」泥をほとほと、

1 3

語変更

1 4

語調整

2

手入れなし

1 5

語並存

1 6

語調整

手入れなし

手入れなし

2

手入れなし

手入れなし

メモ  
1

に？

かまちにけりて「町助役、↓支店長、」  
玻璃戸の冬を入り来る。

語変更<sup>3</sup>

38 保線工手

②雪をおとして立つ鳥に、  
妻がけはひのしるければ、  
「ほの↓仄」かに笑まふたまゆらを、  
松は疊めり風のそら。

表記調整<sup>1</sup>

17

手入れなし

39 ボランの廣場

つめくさ灯ともす宵の廣場  
むかしのラルゴを「唄↓うた」ひかはし  
雲をもどよもし 夜風にわすれて  
とりいれまじかに歳よ熟れぬ

表記調整<sup>2</sup>

18

手入れなし

40 巡業隊

①霜のまひるのはたごやに、  
がらすぞうるむ一瓶の、  
酒の黄なるをわかちつゝ、 旧字  
そとろに錫の笛吹ける。

メモ<sup>3</sup>

19

…ぞ…<sup>漢</sup>…体

手入れなし

44 「みちべの苔にまどろめば」

②まがつびここに塚ありと、  
「呼ばはる声のおどろしき、↓誰ぞおどろ  
しく喚びたるを、↓おどろき離るゝこ  
の森や、」  
風はみそらに遠くして、  
山なみ雪にたゞあえかなる。

句変更<sup>4</sup>

20

手入れなし



45 「けむりは時に丘丘の」  
① けむりは時に丘丘の、

栗の赤葉に立ちまどひ、  
あるとき黄「金の↓なる」やどり木は、旧字  
ひかりて窓をよぎりけり。

2 1

語変更<sup>2 4</sup>

手入れなし

47 曉眠

③ 寫樂が雲母を揉み削げ、  
芭蕉の像にけぶりしつ、  
春はちかしとしかすがに、  
雪の雲こそかぐるなれ。

3

手入れなし

メモ 2

っ？

49 「老いては冬の孔雀守る」

② あるひはくらみまた燃えて、  
降りくる雪の綿なすは、  
さは遠からぬ雲影の、  
「日や越え行くと仰ぎ見る↓日を越(え)↓  
し)行くに外ならず」

2 2

句調整<sup>5</sup>  
語調整<sup>2 5</sup>  
調整

手入れなし

50 老農

② 火雲あつまり去れば、  
麥の束遠く「たゞすむ。↓散り映ふ。」

2 3

語変更<sup>2 6</sup>

手入れなし

51 齒科醫院

① ま夏は梅の枝青く、  
風なき窓を往く蟻や、  
碧空の反射のなかにして、  
うつつにめぐる鑿ぐるま。

4

手入れなし

メモ 3

うつつに？

54 來々軒  
① 浙江の林光文は、

かゞやかにまなこ睦き、  
そが弟子の足をゆびさし、  
凜としてみ「ゆるじろ」ぎもせず。

55 林館開業

① 凝灰岩もて疊み杉植ゑて、  
「青娥↓麗姝」六七なまめかし、  
南銀河と野の黒に、  
その牖々をひらきたり。

58 癡坑

② みちをながるゝ雪代に、  
錆びしナイフをとりいでつ、  
しばし閲してまもりびと、  
さびしく水をはねこゆる。

60 紀念寫眞

① 學生壇を並び立ち、  
教授助教授みな座して、  
つめたき風の聖餐を、

かしこみ「待つ呼ぶ」と見えにけり。  
② (あな虹立てり降るべしや)  
(さなりかしこはしぐるらし)

…あな虹立てり降るべしや…  
…さなりかしこはしぐるらし…  
寫眞師臺を見まはして、

24

語並存

25

語変更

手入れなし

5

手入れなし

手入れなし

26

語並存

メモ4

終止連体らし

手入れなし

メモ4

つ?

ひとり面にあげしめぬ。  
 ③時しもあれやさんとして、  
 身を顫はする學の長、  
 雪刷く山の目もあやに、  
 たゞさん「らんとわななける。↓として  
 身を顫ふ。」

語調整

61塔中秘事

②歡喜天そらやよぎりし、  
 「なめらけき窓ガラスより、↓そが青き天  
 の窓より、」

句変更

「ひそかなる↓なにごとか」女のわらひ、  
 「何ごとかりりと濡れくる。↓栗鼠のごと  
 (ふるひ漏れくる。↓ききとふるへる。  
 ↓軋りふるへる。)」

語変更

句変更

64病技師「一」

①こよひの間はあたたかし、

28

手入れなし

風のなかにて泣かん「とぞ、↓など、」  
 「二重のマント(蔽めしく、↓面うつみ)  
 ↓ステッキひけりにせものの、」  
 「にせのステッキ(つきいでぬ。↓ひきい  
 づる。↓黒のステッキまたひけり。)」  
 ②蝕む胸をまぎらひて、  
 こぼと鳴り行く水のはた、  
 「飢饉供養↓くらき成素」の燈に照りて、  
 飢饉供養の巨石並めり。

語変更

29

句変更

語変更

句変更

67軍事連鎖劇

29

6

「・↓軍事」連鎖劇

①キネオラマ、

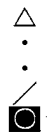
寒天光のそがゆゑに、  
 びたと煙草をなげうちし、  
 上等兵の袖の上、  
 また背景の「紺の上↓曉ぞら」を、  
 雲どしどしととびにけり。

語追加<sup>36</sup>

語変更<sup>37</sup>

↓たゞなか

語変更<sup>2</sup>



72「鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし」

月のあかりの七つ森のはての一つなり、  
 けはしく白く稜立てるもの。  
 稜立てる七つ森のそのはて「し↓の」もの、  
 旋り了りてまこと明るし。

30

語調整<sup>38</sup>

手入れなし

74涅槃堂

①「黒鳥か↓烏らの」羽音重げに、  
 雪はなほ降りやまぬらし。  
 ②「わが命なほ今朝↓みぬち火はなほ」燃え  
 て、  
 しんしんと堂はうもるゝ。

31

語変更<sup>39</sup>

語変更<sup>40</sup>

欄外↓?

手入れなし

76國土

①青き草山雜木山、  
 はた松森と岩の鐘、  
 ありともわかぬ「皺↓婆」ごとくに、  
 白雲よどみかゞやきぬ。  
 ②一石一字をろがみて、  
 そのかみひそにうづめけん、  
 壽量の品は神さびて、

32

メモ6

語変更<sup>41</sup>メモ

メモ7

メモ8

メモ9

青き屢出

積?

ひそに重出  
 て―て

手入れなし

みねにそのをに鎮まりぬ。

80 臘月

「すばるぼし高く仰ぎて、↓みふゆの火す  
ばるを高み、」

のど嗽ぎあるじ眠れば、  
千キロの氷をになひ、  
かうかうと水車はめぐる。

3  
3  
句変更

手入れなし

82 牛

② 窒素工場の火の映えは、  
層雲列を赤く焦き、

鈍き砂丘のかなたには、  
海わりわりとうち顛ふ、

さもあらばあれ啜り「なば↓でも」、  
なほ啜り得ん黄銅の、 旧字

月のあかりのそのゆゑに、  
こたびは牛は角をもて、「↓音高く」  
柵を叩きてたはむる。

3  
4

手入れなし

83 「秘事念佛の大師匠」

④ 「青↓蒼」蠅ひかりめぐら「しつ↓かし」、  
練肥を捧げてその妻は、

たゞ恩人ぞ導師ぞと、  
おのが夫をば拜むなり。

3  
5

4  
4  
語調整  
語調整  
調整

手入れなし

87 氷上

① 月のたわむれ「靨↓薫ゆ」るころ、  
氷は冴えてをちこちに、

3  
6

4  
4  
語調整

手入れなし

ならめきしげくなりにつけり。

89 電氣工夫

② 南風光の網織れば、

ごろろと鳴らす碍子群、

艸火のなかにまじらひて、

蹄のたぐひけぶるらし。

37

メモ10

けぶる？

手入れなし

90 「腐植土のぬかるみよりの照り返し」

① 「駅前↓腐植土」のぬかるみよりの照り返し、  
材木の上のちいさき露店。

② 「ぬかるみの光を負ひて（すがめの子、  
↓額削りし、↓・）↓腐植土のぬかる  
みよりの照り返しに」

③ 「すがめの子一人りと立ちたり。  
すがめの子一人りと立ちたり。」

④ 「↓よく」掃除せしラムプをもちて「コ  
ークスの、↓腐植土の、」

「廣場を↓ぬかるみを」駅夫大股に行く。

語<sup>3</sup>変更

語<sup>4</sup>変更

句<sup>1</sup>変更

語<sup>5</sup>追加

語<sup>6</sup>変更

語<sup>7</sup>変更

92 嘆願隊

② 二羽の鳥の争ひて、

さつと落ち入る「林↓杉」ばやし、

このとき大氣飽和して、

霧は氷と結びけり。

38

語<sup>4</sup>訂正

手入れなし

93 「小きメリヤス塩の魚」

② はかなきかなや暮れそめて、

なほふかぶかと物おもひ、

38

手入れなし

↓夕さり「て↓を」、

語<sup>5</sup>変更

街をうづめて行きまどふ、  
みのらぬ村の家長たち。

95 賦役

①「あをあを燃ゆるみねの雪、↓みねの雪  
よりいくそたび、」

風は「いくたび↓あをあを」崩れ来て、  
萌えし柏をとどろかし、  
きみかげさうを軋らしむ。

39

句変更

語変更

手入れなし

96「商人らやみていぶせきわれをあざみ」  
①商人ら、

やみていぶせきわれをあざ「けり、↓み、」  
川ははるかか峽に鳴る。

40

語調整

手入れなし

97「雪げの水に涵されし」  
①雪げの水に涵されし、

御料草地のどての上を、  
犬の皮着てたゞひとり、  
葦外線「にたゞよへ（り。↓る。）  
↓をい行くもの。」

41

語調整

語変更

語変更

↓、

語調整

②ひかりとどろく雪代の、  
土手のきれ目を「たゞひとり、↓せな円み、」  
兎のごとく跳ねたるは、  
かの耳しひの牧夫なるらん。

98 病技師「二」

①あえぎ「たど↓てく」れば丘のひら、  
地平をのぞむ天氣輪、

42

語変更

手入れなし

白き手巾を草にして、  
をとめらみたりまどるしき。

-----

———

—————



定稿の集成過程にしたがい、それぞれの段階ごとに順次示す。その境界を截然とは区別できない場合もあるが、その居場所（詩の舞台）からおおまかにムラとマチに分けて揭示するとともに、いずれにも含みたい山河や、鉱山・牧場などの施設を舞台としたもの、また信仰者に特化したものなどをその他として揭示した。

群像①—鉛筆・赤インク（写稿）による定稿・百編（最初に定稿化されたとみる詩群）から

【ムラのひとびと】

- ・ 黝き普藻の袍はねて、  
叩きそだたく封介に、  
（「悍馬」(二)）  
青年農夫。
- ・ 朝日かざやく水仙を、  
になひてくるは詮之助、  
（「村道」）  
青年農夫。
- ・ あたまひかりて過ぎ行くは、  
枝を杖つく村老ヤコブ。  
（「秘事念仏の大師匠」(二)）  
老農。
- ・ 売り酒のみて熊之進、  
赤眼に店をばあくるなり。  
（「開墾地落上」）  
商人。
- ・ 秘事念仏の大師匠、  
元信齊は妻子もて、  
（「秘事念仏の大師匠」(二)）  
秘事念仏導師の一家。
- ・ 白髪かざして高清は、  
ブロージツトと云へるなり。  
（「開墾地落上」）  
村会議員。
- ・ さき立つ名譽村長は、  
寒煙毒をふくめるを、  
（「さき立つ名譽村長は」）  
名譽村長。
- ・ 湯気のぬるきに人立ちて、  
故なく憤る身は暗し。  
（「霖雨」）  
新墾<sup>にんげん</sup>の作業中の農夫。
- ・ たけしき耕の具を帯びて、  
熊熊の皮は着たれども、  
（「民間薬」）  
農夫。
- ・ はたらきまたはいたつきて、  
もろ手はてりに耐えざるは、  
（「一夜」）  
農夫。
- ・ 火雲むらがり翔べば、  
そのまなこはばみてうつろ。  
（「老農」）  
老農。
- ・ 野を野のかぎり早割れ田の、  
白き空穂のなかにして、  
（「早儉」）  
農夫。
- ・ 術をもしらに家長たち、  
むなしく風をみまもりぬ。  
（「盆地に白く霧よどみ」）  
農夫。
- ・ 藻を装へる馬ひきて、  
ひとびと木炭を積み出づる。  
（「盆地に白く霧よどみ」）  
農夫。
- ・ 穎花<sup>な</sup>青じろき稲むしろ、  
水路のへりにたゞずみて、  
（「祭日」）  
農婦。
- ・ 朝の曇りのこんにやくを、  
さくさくさくと切りにけり。  
（「祭日」）  
農婦。
- ・ 兎はつひにつぐのはね、  
ひとは頬あかく美しければ、  
（「副業」）  
青年農夫。

・おのれと影とたゞふたり、  
ひねもす白き眼して、  
・むかし誉れの神童は、面青膨れて眼ひかり、秋はかたむく山里を、  
…いかさまさいをぞ手にとりにける。

〔賦役〕

農夫。

・袴羽織のお百姓、

〔林の中の柴小屋に〕

地主農夫か。

・モロビト山ニ入ラントテ、

〔来賓〕

小学校新年式に招かれた農夫。

・曙人、馮りくる児らを、

〔沃土ノニホヒフルヒ来ス〕

入会の里山に向かう村人たち。

・地藏菩薩のすがたして、

〔市日〕

村の子たち。

・縞の粗麻布の胸しぼり、

〔母〕

幼児の弟。

・雪袴黒くうがらし、

〔初七日〕

姉の少女。

・その身こそ瓜も欲りせん

〔小きメリヤス塩の魚〕

若き農婦。

・木綿つけし白き骨箱、

〔臘月〕

亡児、母か。

・日のひかり煙を青み、

〔小きメリヤス塩の魚〕

村の子たち。

・街をうづめて行きまどふ、

〔毘沙門の堂は古びて〕

歳末市に出かけた農夫。

・胸疾みてつかさをやめし、

〔ポランの広場〕

毘沙門の堂守

・みふゆの火すばるを高み、

〔民間薬〕

水車小屋の主人。

・組合理事らは

〔来々軒〕

産業組合理事。

・山猫博士は

〔岩手公園〕

広場支配をねらう人物。

・やがては古き巨人の、

〔来々軒〕

夢中に現われた縄文人か。

【マチのひとつとびと】

〔来々軒〕

盛岡バプテスト教会

・「かなた」と老いしタピングは、

〔来々軒〕

宣教師一家。

・大学生のタピングは、

〔来々軒〕

女学校の音楽教師。

・老いたるミセスタツピング、

〔来々軒〕

弁護士。

・塀のかなたに嘉菟治かも、

〔来々軒〕

キリスト者齋藤宗次郎か。

・団辨護士もホツプ噛む、

〔来々軒〕

ラーメン店主。

・かのうらぶれの贖物師、

〔来々軒〕

料理人見習い。

・浙江の林光文は、

〔来々軒〕

料理人見習い。

・そが弟子の足をゆびさし、

〔来々軒〕

料理人見習い。

- ・老いては冬の孔雀守る、
- ・楽手はさびしだんまりの、
- ・さらにはげしく舌打ちて、
- ・「あな雪か。」屠者のひとりには、
- ・つまづきながら四時うてば、
- ・よく掃除せしラムプをもちて腐植土の、
- ・腐植土のぬかるみよりの照り返しに、
- ・こはいかに赤きずぼんに毛皮など、
- ・西根よりみめよき女きたりしと、
- ・あるものはみちにさらばひ、
- ・(直き時計はさま頑く、
- ・さはあれ攀ぢる電塔の、
- ・狸の毛皮を耳にはめ、
- ・商人ら、
- ・そは牛飼ひつ商ひつ、
- ・屋台を引きて帰りくる、
- ・そのかみの高麗の軍樂、
- ・バビロニ柳掃ひしと、
- ・そのとき角のせんたくや、
- ・写真師台を見まはして、
- ・客あるさまにみまもりて、
- ・のれんをあげて理髪技士、
- ・「こたび県の負債せる、
- ・いたつきびとは窓ごとに、
- ・小き看護は窓に来て、
- ・患者たち廊のはづれに、
- ・コカインの白きかほりを、
- ・しかもあれ春のをとめら、

がまの脛巾とかはごろも、  
 投げの型してまぎらかす。  
 長ぞまなこをそらしぬと、  
 みなかみの鬮をすかしぬ。  
 助役たばこを吸ひやめぬ。  
 すがめの子一人りと立ちたり。  
 春木ながしの人のいちれつ。  
 角の宿屋に眼がひかるなり。  
 あるものは火をはなつてふ、  
 憎に鍛へし腫は強し)  
 四方に辛夷の花深き。  
 シヤプロの束に指組みて、  
 やみていぶせきわれをあざみ、  
 はた鉄うてるもろ人の、  
 目あかし町の夜なかずき、  
 うち鼓して過ぎれるありき。  
 あゆみをとめし羅沙売りは、  
 まったくもつて涙をながし、  
 ひとり面に面をあげしめぬ。  
 唾の子鳴らす空鉄。  
 白き衣をつくるひつ、  
 われがとがにはあらざるを。  
 春きたらばとねがひけり。  
 あなやなにぞといぶかりぬ。  
 凶事の兆を云へり。  
 いそがしくよぎる医師あり。  
 なべて且つ耐えほへえみて、

- (老いては冬の孔雀守る)
- (巡業隊)
- (あな雪か屠者のひとり)
- (四時)
- (腐植土のぬかるみよりの)
- (いたつきてゆめみなやみ)
- (電気工夫)
- (保線工夫)
- (商人らやみていぶせきわ)
- (萎花)
- (短夜)
- (いたつきてゆめみなやみ)
- (羅沙売)
- (記念写真)
- (崖下の床屋)
- (水植松にまじらふは)
- (日本球根商會が)
- (血のいろにゆがめる月は)

園丁。  
 楽手。  
 巡業団長。  
 屠者。  
 駅助役。  
 駅夫。  
 少女。  
 春木流し。  
 女、宿屋主人。  
 工夫。  
 花巻温泉鉄道架線工事か。  
 保線工夫。  
 商人、病者。  
 牛飼ひ、商人、職人。  
 屋台主人。  
 飴売り。  
 羅沙売り。  
 洗濯屋。  
 写真師。  
 理髪見習ひの徒弟。  
 理髪師。  
 実業家か。  
 入院患者。  
 看護婦。  
 入院患者。  
 医師。  
 看護婦。

- ・神農像に饌ささぐと、
- ・碧空の反射のなかにして、
- ・おのれこよひは暴れんぞと、
- ・初緑金に生えそめし、
- ・三なる技師は徳薄く、
- ・大工業の光景なりと、
- ・（いな見よ東かれらこそ、
- ・びたと煙草をなげうちし、
- ・官の手からくのがれし、
- ・社殿にはゆふべののりと、
- ・そのはははことなきさまに、
- ・狩衣黄なる別当は、
- ・僧の妻面膨れたる、
- ・（雪やみて朝日は青く、
- ・次なる沙弥は顛を円き、
- ・卓をめぐりて会長が、
- ・やがて四時ともなりなんを、
- ・しやうふを塗れるガラス戸を、
- ・をさげび走る町のこら、
- ・あはれつたなきソプラノは、
- ・時しも緒きひのきより、
- ・最後に女訓導は、
- ・窓をみつめて校長も、
- ・時しも老いし小使は、
- ・学生壇を並び立ち、
- ・時しもあれやさんととして、
- ・革の手袋はづしつゝ、
- ・二限わがなさん、

学生はつみぬ蔭の臺。  
 うつつにめぐる鑿ぐるま。  
 青き瓶袴も惜しげなく、  
 代にひたりて田螺ひろへり。  
 すでに過冷のシロッコに、  
 技師も出でたち仰ぎけり。  
 古き火薬を燃し了へぬ。  
 上等兵の袖の上、  
 社司の子のありかを知らず。  
 ほのかなる泉の聲や、  
 しらたまのもちひをなせる。  
 眉をけはしく茶をのみつ。  
 飯盛りし仏器さげぐる。  
 かうかうと僧は看経。  
 猫毛の帽に護りつゝ、  
 メダルを懸くる午前二時、  
 当主いまだに放たれず、  
 学童らこもごもにのぞきたり。  
 明治女塾の舎生たち。  
 ゆふべの雲にうちふるひ、  
 農学生ら奔せいでて、  
 ショールを面に被ふれば、  
 たゞひたすらに茶をのみつ。  
 豚にえさかふバケツして、  
 教授助教授みな座して、  
 身を顛はする学の長、  
 しづにをくびし歩みくる。  
 公 五時を補ひてんや、

- 〔「医院」〕
- 〔「歯科医院」〕
- 〔「退職技手」〕
- 〔「さき立つ名誉村長は」〕
- 〔「白金環の天末を」〕
- 〔「砲兵観測隊」〕
- 〔「軍事連鎖劇」〕
- 〔「ほのあかり秋のあぎとは」〕
- 〔「来賓」〕
- 〔「僧の妻面膨れたる」〕
- 〔「さき立つ名誉村長は」〕
- 〔「萎花」〕
- 〔「嘆願隊」〕
- 〔「来賓」〕
- 〔「水上」〕
- 〔「塀のあなたに嘉菟治かも」〕
- 〔「四時」〕
- 〔「さき立つ名誉村長は」〕
- 〔「来賓」〕
- 〔「四時」〕
- 〔「記念写真」〕
- 〔「著者」〕
- 〔「氷雨虹すれば」〕

医師。  
 歯科医。  
 農業技手  
 技師。  
 技師。  
 陸軍兵士。  
 陸軍兵士。  
 社司の一家。  
 神官。  
 僧の妻。  
 僧。  
 僧。  
 ダリア同好会会長。  
 嘆願する人たち。  
 児童。  
 町の小・中学生、女学生  
 女学生。  
 農学生。  
 女教師。  
 校長。  
 校務技術員。  
 学生、教授、助教授。  
 盛岡高等農林学校校長。  
 造園学者。  
 教員。

・うなじに副へし半巾は、  
・灰まきびとはひらめきて、  
・老いし博士や郡長、  
・夕陽の青き棒のなかにて、  
・鐘を鳴らせばたちまちに、  
・片頬むなしき郡長、  
・時しも土手のかなたなる、  
・ひたすらうしろすべりする、  
・沍たる泥をほとほと、  
・ぬさをかざして山つ祇、  
・あゝ鈍びし二重のマント、

慈鎮和尚のごとくなり。  
桐のはたけを出できたる。  
やゝ凄凉のおもひあり。  
開化郷士と見ゆるもの、  
部長訓辞をなせるなり。  
酸えたる虹をわらふなり。  
郡役所には議員たち、  
黒き毛削の庶務課長。  
かまちにけりて町助役、  
舞ふはぶらいの町の書記、  
銅版の紙片をおもふ。

(卒業式)  
(塀のあなたに嘉菟治かも)  
(雪の宿)  
(車中「一」)  
(式場)  
(酸虹)  
(四時)  
(水上)  
(崖下の床屋)  
(雪の宿)  
(燈を紅き町の家より)

教員。  
桐畑手入れの農学校教師か。  
博士、郡長。  
開化郷士。  
内務部長。  
郡長。  
郡会議員。  
県庶務課長。  
町助役。  
町書記。  
書記か。

・声さやかなるをとめらは、  
・夏のうたげにはべる身の、  
・うなじはかなく瓶とするは、  
・浄き衣せしたはれめの、  
・凝灰岩もて壘み杉植ゑて、  
・いつはりの電話来れば、

おのおのよきに票を投げ、  
声をちぎれの髪を恥ぢ、  
峽には一のうためなり。  
ソーフアによりてまどろめる、  
青娥六七なまめかし、  
(うみべより賣られしその子)

(萎花)  
(夜をま青き藺むしろに)  
(雪の宿)  
(歯科医院)  
(林館開業)  
(燈を紅き町の家より)

歌妓か。  
娼妓か。  
//  
//  
//

・誰かは知らねサラアなる、  
・あかつき眠るみどりごを、  
・瓶をたもちてうなるらの、  
・寒天光のうら青に、  
・うかべる雲をあざけりて、  
・夜をま青き藺むしろに、  
・いたつきてゆめみなやみし、  
・蝕む胸をまぎらひて、

女のおもひをうつしたる。  
ひそかに去りて小店さき、  
みたりためらひ入りくるや。  
おもてをかくしねむる人あり。  
ひとびと丘を奔せくだりけり。  
ひとびとの影さゆらげば、  
(冬なりき) 誰ともしらず。  
こぼと鳴り行く水のはた、

(残 丘の雪の上に)  
(あかつき眠るみどりごを)  
(医院)  
(車中「一」)  
(砲兵観測隊)  
(夜をま青き藺むしろに)  
(病技師「一」)

棒給を得る女性。  
乳児、その母。  
少女。  
ひと。  
ひとびと。  
ひとびと。  
病者。  
病者。

【その他・施設、山河、信仰のひとつと】

- ・大盗は銀のかたびら、
- ・御料草地のどての上を、
- ・兎のごとく跳ねたるは、
- ・さんさ踊りをさらひせん。」
- ・所長中佐は胸たかく、
- ・罵りかはし牧人ら、
- ・…玉蜀黍畑漂雪は奔りて、
- ・なにごとか女のわらひ、
- ・黒雲峽を乱れ飛び
- ・しばし閑してまもりびと、
- ・親方よ、
- ・そののひかりのきはみなく、
- ・をとめは餓えてすべもなく、
- ・からくみやこにたどりける、

- ・海浸す日より棲みぬて、
- ・二面の猛きすがたを、
- ・稜立てる七つ森のそのはてのもの、
- ・きみにならびて野にたては、
- ・一石一字をろがみて、
- ・寿量の品は神さびて、
- ・ああきみがまなざしのはて、
- ・もろともにあらんと云ひし、
- ・山よほのぼのひらめきて、
- ・その雪尾根をかざやかし、
- ・稔らぬなげきいまさら、

おろがむとまづ膝だてば、

犬の皮着てたゞひとり、

かの耳しひの牧夫なるらん。

技手農婦らに令しけり。

野面はるかにのぞみある。

貴きアラブの種馬の、

丘裾の脱穀塔を、

栗鼠のごと軋りふるへる。

技師ら亜炭の火に寄りぬ

さびしく水をはねこゆる。

朝餉とせずや、こゝな苔むしろ

ひるのたびぢの遠ければ、

胸なる珞をゆさぶりぬ。

芝雀は旅をものがたり、

たゝかひにやぶれし神の、

青々と行衛しらずも。

旋り了りてまこと明るし。

風きららかに吹ききたり、

そのかみひそにうづめけん、

みねにそのをに鎮まりぬ。

うら青く天盤は澄み、

そのまちのけふりは遠き。

わびしき雲をふりはらへ、

野面のうれひを燃し了せ。

春をのぞみて深めるを。

(「中尊寺」)

(「雪げの水に涵されし」)

(「玉蜀黍を播きやめ環にな」)

(「悍馬」(「」)

(「塔中秘事」)

(「早春」)

(「廃坑」)

(「天狗草けとばし了へば」)

(「けむりは時に丘丘の」)

(「岩頸列」)

盗人。中尊寺。

外山御料牧場か。

軍馬補充部六原支部。

種馬育成所、滝沢。

小岩井農場三階倉庫。

鉱山、技師。

鉱山、番人。

測量現場の責任者。

旅中の乙女。

歌舞伎俳優三世中村雀右衛門

の襲名前の名、或はその名を

かたる旅回りか。

早池峯山頂。

岩手山麓、車中の人。

// きみに対する人。

岩手山頂か。

北上川、きみを回想する人。

北上低地帯農に関わるか農民。

(「峡野早春」)

(「流水」)

(「国土」)

(「きみにならびて野にた」)

(「鶯宿はこの月の夜を雪」)

(「水と濃きなだれの風や」)

(「驚宿はこの月の夜を雪」)

(「きみにならびて野にた」)

- ・たそがれ思量惑くして、堂は別時の供養とて、
- ・こころの師とはならんども、いましめ古りしきながらに、
- ・うたがふをやめよ、いさゝかの雪凍りしき、
- ・わが索むるはまことのことば
- ・(浮屠も天を云ひ伝へ、上の無色にいたりては、
- ・みちへの苔にまどろめば、
- ・まがつびここに塚ありと、
- ・宿世のくるみはんの毬、
- ・はかなきかなやわが影の、
- ・大寺のみちをこととへど、
- ・はやくも死相われにありやと、
- ・黒鳥か羽音重げに、
- ・わが命なほ今朝燃えて、
- ・われのみみちにたゞしきと、
- ・ははのなげきをさげすみて、
- ・やみほゝけたれつかれたれ、
- ・緊那羅面とはなりにけらしな。

銀屏流沙とも見うるころ、  
盤鉦木鼓しめやかなり。  
こころを師とはなさざれと、  
たよりなきこそころなれ。  
林はさむくして、  
根まがり杉ものびてゆるゝを。  
雨の中なる真言なり  
三十三を数ふなり、  
光、思想を食めるのみ。  
日輪そらにさむくして、  
呼ばはる声のおどろしき、  
干割れて青き泥岩を、  
卑しき鬼をうつすなり。  
いらへず肩をすくむるは、  
肅涼をちの雲を見ぬ。  
雪はなほ降りやまぬらし。  
しんしんと堂はうもるゝ。  
ちちのいかりをあざわらひ、  
さこそは得つるやまひゆゑ、  
われは三十ぢをなかばにて、

- (「たそがれ思量惑くして」)
- (「心相」)
- (「うたがふをやめよ」)
- (「早春」)
- (「けむりは時に丘丘の」)
- (「みちへの苔にまどろめば」)
- (「川しろじるとまじはりて」)
- (「病技師」(二))
- (「涅槃堂」)
- (「われのみみちにたゞしき」)
- (「翁面おもてとなして」)

信仰者たち。  
ある信仰者半生記にも読める。

群像②—ブルーブラックインク(写稿)による定稿(定稿・百編に追加とみる詩群)から

- ・馬を相する漢子らは、
- ・秘事念佛の大師匠、
- ・北岸にいそしみつ、
- ・むしろ帆張りて酒船の、
- ・をのこは三たり舷に、

こなたにまみを凝らすなり。  
元真齊は妻子して、  
いまぞ晝餉をしたゝむる。  
ふとあらはるゝまみまじか、  
こちを見おろし見すくむる。

- (「社会主事佐伯正氏」)
- (「秘事念佛の大師匠」(二))

博労か。  
秘事念佛導師一家。

濁酒の密売団。

ムラ

・醒めたるまゝを封介の、  
けじろき水のちりあくた、

憤りほのかに立ちいでゝ、  
もだして馬の指竿とりぬ。

(「暁」)

青年農夫。

・いくさの噂しげければ、  
暗き岩頸風の雲、

蘆刈りびともいまさらには、  
天のけはひをうかゞひぬ。

(「上流」)

農夫。

・ものなべてうち訝しみ、  
黄の上着ちぎるゝまゝに、

こゑ粗き朋らとありて、  
栗の花降りそめにけり。

(「退耕」)

青年農夫たち。

・よるべなき水素の川に、

ほとほとと麻苧うつ妻。

(「麻打」)

農婦。

・そのときに酒代つくと、  
そのときに重瞳の妻は、

夫はまた裾野に出でし。  
はやくまた闇を奔りし。

(「そのときに酒代つくと」)

馬盗人の農夫。  
不倫に奔る農婦。

・風は明るしこの郷の、

士はそゞろに吝げき。

(「社会主事佐伯正氏」)

社会主事佐伯正氏。

・熱はてし身をあざらけく、

軟風のきみにかぐへる。

(「公子」)

少(青)年。  
師は父か。

しかもあれ師はいましめて、

點竄の術得よといふ。

群像③―五十篇補充定稿と、青インク(写稿)による定稿(二百編の補入とみる詩群)から

【五十篇補充定稿】

・からす麦かもわが播けば、

ひばりはそらにくるほしく、

(「温く妊みて黒雲の」)

青年農夫。

・(荷縄を投げよはや荷縄)

五厘報謝の夕まぐれ、

(「水霜繁く霧たちて」)

農民。  
巡礼は農民か。

・鱈売町のかなたにて、

人らほのかに祝ふらし。

(「萌黄いろなるその頸を」)

農民たちか。

・こらはみな手を引き交へて、

巨けく蒼きみなかみの、

(「打身の床をいできたり」)

村の子たち。

・まどろむ馬の胸にして、

水なしの谷に出で行きぬ。

(「こらはみな手を引き交へ」)

農民一家。

・山の焼畑、石の畑、

おぼろに鈴は音をふるひ、

夜さりはせ来し西蔵は、

下書稿の題には兇賊。

・人なき山藁の二日路を、

ふたゝび遠く遁れけり。

(「月のほのほをかたむけ」)

ムラ

マチ



- ・ 緋合羽の巡礼に、
- ・ わかめと鱧に雪つみで、
- ・ 打身の床をいできたり、
- ・ 県議院殿大居士の、
- ・ 紫綾の大法衣、
- ・ 六道いまは分るらん、
- ・ 月の鉛の雲さびに、
- ・ 魚や積みけんトラックを、
- ・ 氷柱かゞやく窓のべに、
- ・ 留学の序を憤り、

【青インク（写稿）による定稿】

- ・ 南風の頬に酸くして、
- ・ 鬼げし風の襖子着て、
- ・ 棒をかざして髪ひかり、
- ・ 日本里長森を出で、
- ・ …日本の國のみつぎとり、
- ・ ひかりものすとうなるこが、
- ・ そは高甲の水車場の、
- ・ 花さけるねむの林を、
- ・ 聲ほそく唱歌うたひて、
- ・ みちかきマント肩はねて
- ・ 濁酒をさぐる税務吏や
- ・ はた兄弟の馬喰の
- ・ 驚いろによそほへる
- ・ さては「陰氣の狼」と
- ・ あだなをもてる三百も
- ・ みな恍惚とのぞみある

五厘報謝の夕まぐれ、  
 鮫の黒身も凍りけり。  
 箱の火鉢にうちあれば、  
 柩はしづとおろされぬ。  
 逆光線に流れしめ、  
 あるじの徳を讃へけり。  
 みたりあやつり行き過ぎし、  
 青かりしやとうたがへば、  
 「獺」とよばるゝ主幹あて、  
 中庭にテニス拍つ人。

シエバリエー青し光芒。  
 児ら高らかに歌すれば、  
 追ふや里長のまなむすめ。  
 小手をかざして刻を見る、  
 里長を追ひて出で來り、  
 ひそにすがりてゆびさせる、  
 こなままぶれしそのあるじ、  
 さうさうと身もかはたれつ、  
 屠殺士の加吉さまよふ。

(「萌黄いろなるその頸を」)  
 (「打身の床をいできたり」)

(「雪うづまきて日は温き」)

(「月の鉛の雲さびに」)

(「氷柱かゞやく窓のべに」)

(「翔けりゆく冬のフエノ」)

(「南風の頬に酸くして」)

(「朝」)

(「巨豚」)

(「ひかりものすとうなる」)

(「黄昏」)

魚屋。

商家の青年。  
 県會議員。

僧。  
 運送屋の店員。

岩手国民高校主事か。  
 盛岡高農助教授。

ムラ

マチ

・得も入らざりし村の児ら、  
乞ふわが栗喰ふべよと、

叔父また父の肩にして、  
泳ぐがごとく競ひ来る。

(「銅鑼と看板トロンボン」)

村の子、農民。

・ましろなる塔の地階に、  
やるせなみづじエー神父は、

さくらばなけむりかざせば、  
とりいでぬにせの赤富士。

(「浮世絵」)

盛岡天主公教会。

・(もつて二十を贏ち得んや)

はじめの驚馬をやらふもの

△雲は雪のミスプリントの可能性あり

(更に五票もかたからず)

その馬弱くまだらなる

(「選挙」)

選挙対策の人たち。

(いかにやさらば太兵衛一族)

懼るゝ声はそらにあり

(「車中」(二))

馬医。

・まなじりふかき伯樂は、

けいとのまりをとりいでぬ。

少女。

・みちかきマント肩はねて

しんぶんをこそひろげたれ。

税吏。

濁酒をさぐる税務吏や

(「かれ草の雪とけたれば」)

無資格の代言人。

・猛しき現場監督の、

こたびも姿あらずてふ、

(「硫黄」)

鉱山の現場監督。

・すなどりびとのかたちして、

つるはしふるふ山かげの、

(「化物工場」)

鉄道工夫たち。

・おそらくそれぞ日ならんと、

親方もさびしく仰ぎけり。

(「銅鑼と看板トロンボン」)

工事現場の親方。

・藝を了りてチャリネの子、

その影小さくやすらひぬ。

(「岩手山巔」)

サーカスの子。

・雲のわだつみ洞なして、

青野うるうる川湧けば、

(「岩手山巔」)

農民たち。

・ゲートルきりと頬かむりの、

闘士嘉吉もしばらくは、

(「すゝきすがるゝ丘なみ」)

青年農夫。

・萱のつぼけを負ひやめて、

面あやしく立ちにけり。

(「二山の瓜を運びて」)

老いた農夫。

・二山の瓜を運びて、

舟いだす酒のみの祖父。

(「二山の瓜を運びて」)

孫の幼児。

群像④— 百篇補充定稿から

マチ

施設  
山野

ムラ

・歳に七度はた五つ、  
稔らぬ秋を恐みて、  
・春はまだきの朱雲を  
風と菩提樹皮にうちよそひ  
・わさび田ここになさんとて、  
たばこを吸へばこの泉、  
・花と侏儒とを語れども  
稔らぬ土の児らなりき

庚の申を重ぬれば、  
家長ら塚を理めにき。  
アルペン農の汗に燃し  
風とひかりにちかひせり。  
枯草原にこしおろし、  
たゞごろごろと鳴り申す。  
刻めるごとく眉くらき

(「庚申」)  
(「種山ヶ原」)  
(「西のあをじろがらん洞」)  
(「旱害地帯」)

農民。  
農夫。  
農夫。  
村の子たち。

・乾かぬ赤きチヨークもて、  
…さびしきさびするゆるに、  
そらの輻射の六月を、  
・凍えしやみどりの縮葉甘藍、  
・猥れて嘲笑めるはた寒き、  
かへさまた経るしろあとの、  
・入りて原簿を閲すれば、  
・雪けむり閃き過ぎて、  
布づつみになふ時計の、

文を抹して郷党は、  
ぬかほの青き善吉ら、  
声なく惨と仰ぎたれ。  
県視学はかなきものを。  
凶つのみみをはらはんと、  
天は遷ろふ火の鱗。  
その手砒硫の香にけぶる。  
ひとしばし汗をぬぐへば、  
リリリりとひゞきふるへる。

(「乾かぬ赤きチヨークも」)  
(「鐘うてば白木のひのき」)  
(「猥れて嘲笑めるはた寒」)  
(「肖像」)  
(「風底」)

中学の英語科教員。  
中学生たち。  
県視学官。  
下書稿で判事、検事。  
下書稿で病院主。  
商人或は行商か。

・(山はみな湯噴きいでしぞ)  
(われらみな主とならんぞ)

髪齧きわらべのひとり、  
みなかみはたがねうつ音。

(「二才のアルプ花崗岩を」)

少年工(鋳)夫。  
工(鋳)夫か。  
東北砕石工場か。

マチ

施設

その定稿化の過程について、次に掲げておこう。

掲出順は、分集後の定稿集『五十篇』・『一百篇』の収容順にならった。表示の仕方は、資料篇iiの「はじめに」で示したことにおおむねしたがっているが、異なっているのは、

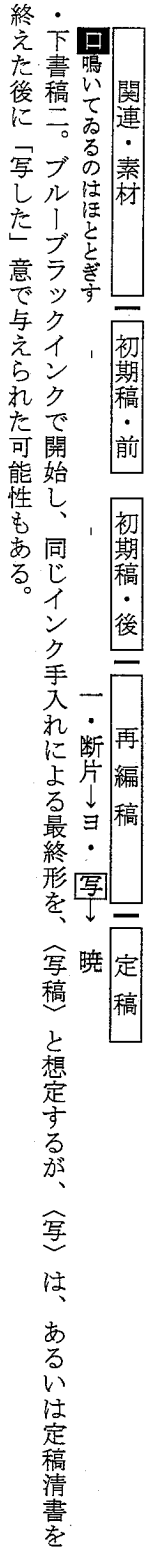
- ・ (写稿) 想定本文における傍線は定稿本文との異同箇所を示している。
- ・ 定稿本文における手入れ表示では、傍点を付したものが起稿時の書きながら手入れ、取り消し線・傍線を付したのが起稿後の手入れである。

・ 青インク手入れは、太字で表示した。

という点である。また、異同の実態を末尾に示しているが、その観点は2章5節に示したものにしている。

なお、島田『叙説』3章の注104で新校本全集校異の記述にもとづいた異同の整理を試みているが、本稿は本文対照による精査であり、異同実態としては本稿の結果のほうを優先したい。

1 暁



暁

- ① さきは夜を截るほととぎす  
 やがてそらの朧いろ  
 小鳥の群をさきだて、  
 かくこうどよみわたすなり

- ① さきは夜を截るほととぎす、  
 やがてはそらの朧いろ、  
 「② ↓ ↓ ↓」小鳥の群をさきだて、  
 かくこう「どよみわたすなり」 ↓ 樹々(に)どよむなり。 ↓ きどよもしぬ。 「」

② 醒めたるまゝを封介の

② 醒めたるまゝを封介の、

憤りほのかに立ちいで、  
けじろき水にのちりあくた  
もだして馬の指竿とりぬ

▼題新設・異同詩句0詩語0表記0↓藍手入れ書きながら表記1・詩句0詩語2表記0↓青インク手入れなし

2 上流

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

・下書稿二。ブルーブラックインクで開始し、同じインク手入れによる最終形を、(写稿)と想定するが、(写)は、定稿清書を終えた後に「写した」意で与えられた可能性もある。

上流

秋立つひるをくちなはの  
沼面はるかに泳ぎ居て  
水ぎぼうしはむらさきの  
花穂ひとしくつらねけり

①秋立つけふをくちなはの、  
沼面はるかに泳ぎ居て、  
水ぎぼうしはむらさきの、  
花穂ひとしくつらねけり。

蘆刈りびとはいまさら  
赤くたゞれし眼あげて  
暗き岩頸風の雲  
天のけはひをうかどひぬ

②「蘆刈りびとはいまさらは、  
いくさの噂しげければ」  
「赤くたゞれし眼あげて、  
蘆刈りびとははも(いまさらは)」  
暗き岩頸風の雲、  
天のけはひをうかどひぬ。

▼題新設・異同詩句0詩語1表記0↓藍手入れ書きながら0・詩句2詩語0表記0↓青インク手入れなし

3 「そのときに酒代つくると」

関連・素材 初期稿・前 初期稿・後 再編稿 定稿

一柳沢 了二・ヨ(柳)写

・下書稿二。鉛筆で開始し、鉛筆①②手入れの後、ブルーブラックインク手入れがあり、その最終形に写を与えたと想定する。(写)は、定稿清書を終えた後に、「写した」意で与えられた可能性もある。なお、「柳」と濃い鉛筆の一字があり、題名にかかわる柳沢の意のメモか。

①そのときに酒代つくと  
夫はまた裾野に出でし

①そのときに酒代つくと、  
夫はまた裾野に出でし。

△ルビ新設

②そのときに重瞳の妻は  
はやくまた闇を奔りし

②そのときに重瞳の妻は、  
はやくまた闇を奔りし。

③柏原風とどろきて

③柏原風とどろきて、

さはしぎは遠くよはひき

さはしぎ「ぞ」ら「遠く」鳴めしま。「よはひき」。

|| 喚

④馬はみな泉を去りて  
山ちかくつどひてありき

④馬はみな泉を去りて、  
山ちかくつどひてあり「ぬ」き。

▼無題稿・異同詩句 0 詩語 3 表記 0 ↓ 藍手入れ書きながら 0・詩句 0 詩語 3 表記 1 ↓ 青インク手入れなし

4 〔秘事念仏の大師匠〕(一)

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

憎むべき「限」弁当を食ふ

一・二・三・写 ↓

・下書稿二。鉛筆で開始し、同じ鉛筆の手入れの後、「↓ブルーブラックインク手入れ」が1か所あり、それに対して(写)を与えたと想定する。写はあるいは定稿清書を終えて後に「写した」意で与えられた可能性もある。

①秘事念仏の大師匠

①秘事念仏の大師匠、

元真齊は妻子して  
北上岸にいそしみつ  
いまぞひるげをしたたたむる

②卓のさまして緑なる  
小松と赤き萱の芽と  
雪げの水にさからひて  
まことねむたき南風

③むしろ帆張りて酒船の  
岸べづたひにめぐり来る  
ふとあらはるゝまみのまへ  
こちを見おろし見すくむる

④源真齊は川下に  
まなこをそらしやるせなく  
塩の高菜をうちかめば  
妻子もこれになら「ひけり↓ふなり」

元真齊は妻子して、  
「北↓・」北上岸にいそしみつ、  
いまぞ晝餉をしたゝむる。

②卓のさまして緑なる、  
小松と「?↓・」紅き萱の芽と、  
雪げの水にさからひて、  
まこと睡たき南かせ。

③むしろ帆張りて酒船の、  
ふとあらはるゝまみ「の↓・」まじか、  
をのこは三たり舷に、  
こちを見おろし見すくむる

④「源↓・」元真齊はやるせな「く↓み」、  
眼を「川のはてに投げ↓そらす川のはて」、  
塩の高菜をひた噛めば、  
妻子もこれにならふなり。

▼無題稿・異同詩句 1 詩語 1 表記 4 ↓ 藍手入れ書きながら詩語 4・詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 青インク手入れ詩句 0 詩語 2 表記 0

5 麻打

関連・素材	初期稿・前	初期稿・後	再編稿	定稿
-------	-------	-------	-----	----

歌 153、154・赤、254  
・下書稿二の上余白稿。鉛筆手入れの後、「↓ブルーブラックインク手入れ」が1か所あり、それをもって〈写稿〉と想定する。〈写〉は「写した」意で与えられた可能性もある。なお、余白稿形成については、『叙説』附章4節。

護岸工事

麻打

①楊葉の銀とみどりと  
はるけきは青らむけぶり

②よるべなき水素の川に  
「はた↓ほと」／＼と麻芋うつ妻

①楊葉の銀とみどりと、  
はるけきは青らむけぶり。

②よるべなき水素の川に、  
ほとほとと麻芋うつ妻。

▼題変更・異同詩句0詩語0表記0↓藍手入れ書きながら0・詩句0詩語0表記0↓青インク手入れなし

6 退耕

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

一退耕

写↓退耕

二再編輯

三定稿

・下書稿。鉛筆による手入れで2連構成になった後、後連のみにおこなわれたブルーブラックインク手入れをもって、〈写稿〉と想定する。〈写〉は、あるいは定稿清書を終えて後に「写した」意で与えられた可能性もある。

退耕

ものなべてうち訝しみ  
こゑ粗きひとらとありて  
黄の上着ちぎるゝまゝに  
栗の花降りそめにけり

演奏會<sup>リサイタル</sup>せんとのしらせ  
いでなんにはや身ふさはず  
豚<sup>いのこ</sup>はも金毛となりて  
はてしらず西日にかくる

退耕

①ものなべてうち訝しみ、  
こゑ粗き朋らとありて、  
黄の上着ちぎるゝまゝに、  
栗の花降りそめにけり。

②演奏會<sup>リサイタル</sup>せんと「し↓・」のしらせ、  
いでなんにはや身ふさはず、  
豚<sup>いのこ</sup>はも金毛となりて、  
はてしらず西日に「かゝ↓駈け」る。

▼題継承・異同詩句0詩語1表記0↓藍手入れ書きながら詩語1・詩句0詩語1表記0↓青インク手入れなし



7 早池峯山巔

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

再編稿 定稿

文1918 一・↓改客「↓とその弟子↓」↓二・了 ↓三・↓早池峯山山巔写 ↓早池峯山巔  
・下書稿三。鉛筆による手入れの後、「↓ブルーブラックインク手入れ」が1か所あり、それをもって〈写稿〉と想定する。〈写〉は「写した」意で与えられた可能性もある。

早池峯山巔

早池峯山巔

①アスベスト脈なまぬるみ

苦しろきさが巖にして

いはかゞみ「は↓」ひそかに熟し

ブリューベル露はひかりぬ

①石<sup>アスベスト</sup>絨脈なまぬるみ、

苦しろきさが巖にして、

いはかゞみ「そ↓」ひそかに熟し、

「こ↓」ブリューベル露「は↓」をほらひぬ。はひかりぬ。」

②八重の雲ひかりたゝへて

西東はてをしらねば

白聖紀の古きわだつみ

なほこゝにありわぶごとし

②八重の雲「ひかり↓遠く」たゝへて、

西東はてをしらねば、

白聖紀の古きわだつみ、

なほこゝにありわぶごとし。

▼題変更・異同詩句0詩語1表記1↓藍手入れ書きながら詩語3・詩句0詩語2表記0↓青インク手入れなし

8 社会主事佐伯正氏

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

再編稿 定稿

書簡315

一社会主事↓二「↓昇」社会主事↓三佐伯正氏↓四社会主事佐伯正氏写 ↓社会主事佐伯正氏  
・下書稿四。鉛筆による手入れの後、ブルーブラックインク手入れがある。そのインク手入れは、大きく太い〈写〉(鉛筆の場合に似る)の下方に引いた斜線を避けてある感じである。つまり、

鉛筆手入れ↓写と斜線の付与↓ブルーブラックインク手入れ

という過程も考えられる。すると、写は、鉛筆手入れ形に与えられた可能性もあるが、ひとまずブルーブラックインク手入れ↓〈写稿〉と想定する。なお「↓ブルーブラックインク手入れ」を示しておく。

社会主事佐伯正氏

群むれてかゞやく辛夷マツノシヤ花樹

雪代マたたくねこやなき

〔歳時は傲れ↓そらは明るし〕この「里

↓郷むらの

〔紳は↓士しは〕そゞろに吝ちかけき

まんさんとして漂へば

水みづいろあはき日曜どんぐの↓「水いろあはき

日曜どんぐ日

馬を相するをのころらは↓(の↓は)「

こなたにまみをこらすなり

▼題継承・異同詩句 0 詩語 1 表記 2 ↓藍手入れ書きながら 0・詩句 0 詩語 1 表記 0 ↓青インク手入れなし

9 公子

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌 116・117

一・↓藍黒鉛赤藍手入れ了なし↓二・↓病后ニエルテル↓手簡

写↓公子

・下書稿二。鉛・茶・青・鉛・墨による手入れの後、「↓ブルーブラックインク手入れ」が1か所あり、それをもって〈写稿〉と想定する。〈写〉は「写した」意で与えられた可能性もある。

病后／手簡

桐「群↓群」に臘の花冷ち

雲ははや夏を鑄そめぬ

熱はてし頬をはかなめばニ身をあざらけく

軟風のきみにかぐへる

社会主事佐伯正氏

①群むれてかゞやく辛夷マツノシヤ花樹、

雪ゆきしろたゞくねこやなき、

〔そゆ↓風〕は明るしこの郷むらの、

士しはそゞろに吝ちかけき。

②まんさんとして漂へば、

水みづいろあはき日曜どんぐの、

馬を相する漢ま子こらは、

こなたにまみを凝こらすなり。

公子

①桐群に臘の花冷ち、

雲ははや夏を鑄そめぬ。

②熱はてし身をあざらけく、

軟風のきみにかぐへる。

しかもあれ師はいましめて  
點竄の術得よといふ

桐の花むらさきに燃え  
夏の雲遠くながるゝ

---

③ しかもあれ師はいましめて、  
點竄の術得よ「り↓・」といふ。

④ 桐の花むらさきに燃え、  
夏の雲遠くながるゝ。

▼題変更・異同詩句〇詩語〇表記〇↓藍手入れ書きながら1・詩句〇詩語〇表記〇↓青インク手入れなし

はじめに

青インク〈写稿〉の定稿化と定稿手入れについて、その過程に現われた異同実態を一覧する。その表示は、ブルーブラックインクによる場合と同様である。

〈写稿〉想定本文と定稿開始形の本文間における異同の状況と、定稿開始形に対する手入れ状況を参考までに示した。その際、〈写稿〉本文の想定については、青インク〈写稿〉の定稿化が『一百篇』の再構築段階におこなわれたという立場からは『一百篇』を論ずる機会にあらためて検討しなおすものであり、ここでは現在の試案を掲げることになる。したがって、異同実態の分析とその意味づけも、およびその傾向としてとらえておく。ただし、島田『叙説』3章の注110で新校本全集校異の記述にもとづいた異同の整理をすでに試みたが、本稿における提示は、本文対照による精査であり、異同実態としては本稿の結果を優先したい。

## 1 選挙

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

文1929

一選挙 写 ↓ 選挙

・下書稿。鉛筆による手入れの後、写。さらに定稿に直結する「↓ブルーブラックインク手入れ」があったとみる。第三連に集中するその手入れは、定稿清書段階に近接するものと推定し、〈写稿〉としては鉛筆手入れ形を想定し、提案する。なお、定稿は所在不明で十字屋版全集所載のもの。

選挙

(もつて二十をかち得んや)  
はじめの駕馬をやらふもの

(更に五票もかたからず)  
雪うち嘯める次の騎者

選挙

(もつて二十を贏ち得んや)  
はじめの駕馬をやらふもの

(更に五票もかたからず)  
雪うち嘯める次の騎者

△雲は雪の誤植の可能性がある。

〔・↓・さらば↓・〕〔・↓・いかにやさら

ば〕太衛〔の↓・〕一族〔はいかならん↓・?〕

その馬弱くまだらなる

(いなうべがはじうべがはじ)

懼るゝ声はそらにあり

(いかにやさらば太兵衛一族)

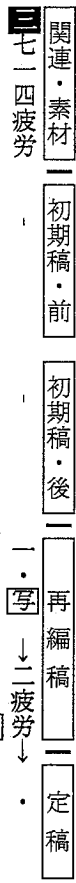
その馬弱くまだらなる

(いなうべがはじうべがはじ)

懼るゝ声はそらにあり

▼題継承・異同詩句 1 詩語 1 表記 0 ↓定稿紛失

2 〔南風の頬に酸くして〕



・下書稿一・二は、同一紙上に展開している。稿一が鉛筆の開始と手入れ。稿二が青インクによる開始と手入れの後、枠で囲みである。

青インク段階に写が付与されたとみるのが相応だろうが、その横線は、稿一本文下部の一部にかかって引かれているから、

稿一 ↓ 写 ↓ 稿二 ↓ 定稿

という過程も考えられる。旧校本全集校異でブルーブラックインクと青インクとを識別し、新校本全集校異もしたがったことを重視して、

青インクの写は、『五十篇』編集段階におこなわれた『一百篇』のための事前選択であった、という立場をとって、〈写稿〉としては下書

稿一最終形を想定することができないか、試みに提案する。

稿一 ↓ 稿二 ↓ 写 ↓ 定稿

という過程をとるとすれば、〈写稿〉の想定として、下書稿二最終形を提案することになる。その本文は、

南風の頬に酸くして／シエバリエー青し光世

天翔る雲のエレキを／とりも来て蘇しなんやいざ

というもので、定稿とほぼ同じ。

南風温く酸醸し

①南風の頬に酸くして、

青き六角シエバリエー、  
 光芒燦と痛きころ  
 三の立像崖に来て  
 眉間紅寶石をちりばむる  
 手舉げて吾子を招くなり  
 南風倦みていと酸く  
 穂麦の青く痛ければ  
 まことに吾子も手を伸べて、  
 かの大虚なるひかりぐも  
 になへる磁をもとりてんや

シエバリエー青し光芒。  
 ②天翔る雲のエレキを、  
 とりも来て蘇しなんや、いざ。  
 そ…メモカ

▼無題稿(稿二)写↓定稿をとれば題消失・改編↓藍手入れ〇箇所・詩句〇詩語〇表記〇メモ1↓青インク手入れなし

3 浮世絵

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌 280、280、281abcd

・下書稿三。鉛筆の開始と手入れの後、ブルーブラックインク手入れがあり、後に別の鉛筆手入れがある。最後の鉛筆手入れは、定稿に直結する大きな手入れで、清書段階に近接するものと推定され、

鉛↓藍↓写↓鉛↓定稿

という過程が考えられてよいか。(写稿)にはブルーブラックインク手入れ形を想定し、提案する。

浮世繪

浮世繪

ましろなる塔の地階に、  
 さくらばなけむりかざせば  
 やるせなきブジェー神父は  
 とりいでぬにせの赤富士

①ましろなる塔の地階に、  
 さくらばなけむりかざせば、  
 やるせなきブジェー神父は、  
 とりいでぬにせの赤富士。

藍微塵かざやく天に

②青瓊玉かざやく天に、

れいろうのひとみをこらし  
髪赤き騎士の裔は  
かぎすます北齊の雪

れいろうの瞳をこらし、  
これはこれ悪業乎榮光乎、  
かぎすます北齊の雪。

▼題継承・異同詩句 1 詩語 2 表記 1 ↓ 藍手入れ 0 箇所・詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 青インク手入れなし

4 「かれ草の雪とけたれば」

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

冬 二八・二九・一 ↓  
・下書稿二。鉛筆の開始と手入れ、枠で囲んだ後、写。その写と横線の感じは「社会主事佐伯正氏」のブルーブラックインクによるものによく似ている。このうち、「ポランの広場」の定稿ウラにこの断片稿が「ポランの広場」の鉛断片とともに（「かれ草」の鉛断片稿を避けている）、鉛↓ポラン鉛断片↓藍の順で記されている。

「人民の敵」

かれ草の雪とけたれば  
裾野はゆめのごとくなり  
みぢかきマント肩はねて  
濁酒をさぐる税務吏や  
はた兄弟の馬喰の  
驚いろによそほへる  
さては「陰氣の狼」と  
あだなをもてる三百も  
みな恍惚とのぞみある

かれ草の雪とけたれば  
裾野はゆめのごとくなり  
みぢかきマント肩はねて  
濁酒をさぐる税務吏や  
はた兄弟の馬喰の  
驚いろによそほへる  
さては「陰氣の狼」と  
あだなをもてる三百も  
みな恍惚とのぞみある

▼題消失・異同詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 藍手入れ 0 箇所・詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 青インク手入れなし

5 朝

関連・素材

初期稿・前

再編稿

定稿

三七七

一 朝 ↓ 左ヨ (朝) 写 ↓ 二 ◎ 朝 ↓ 朝

・下書稿二。形成を前後に分節する。前半は、用紙左余白にブルーブラックインクで開始された4行形とみて、その手入れの後、写を付与。後半は、同一紙上の上部余白にブルーブラックインクで起稿されたもので、丸番号で2連に展開する。その際、前半稿の一部を②連に取り込んでゆくが、そこに追加した本文が、位置的に写の横線を避けているとみえる。(写稿)本文の想定として、稿一の左余白に開始した4行形の手入れ形を提案する。『叙説』3章附節を参照されたい。

(朝 下書稿一の題が生きている)

朝

待宵草に置く露も  
睡たき風に萎まれば  
遠き譚誣の傷あとも  
緑青いろにひかるなり

①早割れそめにし稻沼に、  
いまころころと水鳴りて、  
待宵草に置く露も、  
睡たき風に萎むなり。

②鬼げし風の襖めとし子着て、  
児ら高らかに歌すれば、  
遠き譚誣の傷あとも、  
緑青いろにひかるなり。

▼題継承・改編 ↓ 藍手入れ 0 箇所・詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 青インク手入れなし

6 硫黄

関連・素材

初期稿・前

再編稿

定稿

歌 642・643

一 了 ↓ 二

写 ↓ 三 硫黄 写 ↓ 硫黄

・下書稿二・三は同一紙上にあつて、用紙中央の稿二は鉛筆開始に鉛筆手入れがあり、稿三はその上部余白にブルーブラックインクで開始しブルーブラックインク ↓ 鉛筆の手入れがある。写は「左下余白」(新校本全集校異)にあり、横線は稿三にかかることなく、稿二本を斜めに貫く格好である。つまり、稿二に与えられたとみることでもできる。すると、

稿二 ↓ 写 ↓ 稿三 ↓ 定稿



という過程が考えられるので、〈写稿〉に下書稿二最終形を想定し、提案する。しかし、横線を稿三に下接するとみれば、稿二↓稿三↓写↓定稿

という過程であり、定稿に直結する鉛筆手入れは、清書直前のものと推定して、ブルーブラックインク手入れ形を〈写稿 本文に想定すること〉になる。そのブルーブラックインク開始形は、

硫黄

こゝろ猛しき 監督の／ふたゝび行衛あらずてふ／元山あたり白雲の／澱みて朝となりにけり

青き朝日にふかぶかと／小馬うなだれ汗すれば／硫黄は歪み鳴りながら／か黒き貨車に移さるゝ  
という本文で、題を継承する定稿との異同（傍線部文）はわずかである。

硫黄

岩頸列白雲にうかび

電柱しづかに鳴れば

夜をこめて来しこの馬の

青き朝日にふかぶかと

かしらを垂れて汗すなり

眠みてひと夜さ月のしたを来し

硫黄はひじみ鳴りながら

かぐるき貨車に移さるゝ

①猛しき現場監督の、

こたびも姿あらずてふ、

元山あたり白雲の、

澱みて朝となりにけり。

②青き朝日にふかぶかと、

小馬うなだれ汗すれば、

硫黄は歪み鳴りながら、

か黒き貨車に移さるゝ。

▼題新設・改編↓藍手入れの箇所・詩句〇詩語〇表記〇↓青インク手入れなし

7 日の出前

関連・素材

初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

歌 202、202・203 a

一 佐藤謙吉とその学校↓二日の出前写

↓ 日の出前

・下書稿二。鉛筆手入れの後の、「↓ブルーブラックインク手入れ」は、定稿に直結するもので、清書段階に近接するものと推定し、〈写稿〉には鉛筆手入れ形を想定し、提案する。

日の出前

〔堅吉が↓・〕

〔校長となりし↓・〕 學校は

稗と粟との野末にて

朝の黄雲に濯は「れて居り↓るる↓れて

あり」

〔堅吉が↓・〕

〔校長となりし↓・〕 學校「は↓の」

ガラス片ひびごとかゞやきて

あるはうつろのごとくなり」 「↓けり」

日の出前

①學校は、

稗と粟との野末にて、

朝の黄雲に濯はれてあり。

②學校の、

ガラス片ひびごとかゞやきて、

あるはうつろのごとくなりけり。

▼題継承・異同詩句 2 詩語 5 表記 0 ↓ 藍手入れ 0 箇所・詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 青インク手入れなし

8 岩手山巔

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

文 1910

一・↓火口丘 頂上 ↓ 二・↓頂上 写? ↓ 藍手入れ ↓ 岩手山巔

・下書稿二。新校本全集校異は、墨で開始した下書稿二に、①鉛筆②ブルーブラックインク③太い鉛筆の3段階の手入れを設定、墨の「外輪山の夜明けがた」を③が削除しているとする。ただ、その棒線を削除とみるには、「外」から引かれ始めた線が、「輪山」とすすむにしたがつて文字の左傍らに離れてゆき、「の夜明け」を迂回するようにして、「がた」の左部分にかかる、というもので、ためらいの線ともみえ、削除の意味であったか、判断が難しい。もしためらいとみるならば、③太い鉛筆は①鉛筆と連続するもので、とみるのが可能であり、①鉛筆↓太い鉛筆②ブルーブラックインク、という2段階を設定できる。すると、鉛筆手入れ形に対して、定稿にほぼ直結する「↓ブルーブラックインク手入れ」がおこなわれるという過程が考えられ、それは定稿清書段階に近接するとみられるので、〈写稿〉に、①鉛筆↓太い鉛筆手入れ形を想定することを試みに提案したい（『叙説』2章2節参照、なお『叙説』での引用本文の誤りをここで訂正している）。

頂上風の中の石に米と錢あげて呼む農民たち

岩手山巔

①外輪山の夜明けがた

「合羽をよるふ」群の↓息吹きも白み競ひ立ち」

三十三の石神に

米を注ぎ「て」て「奔り行く」奔(せ)り行く」

②「ときしも↓・雲のわだつみ」に↓洞

なして」

「うるうる青き穴あきて↓青野うるうる川湧けば」

「川しらしらとかざやけば↓あなや春日のおん帯と」

もろびと「はたと↓立ちて」おろがみぬ

①外輪山の夜明け方、

息吹きも白み競ひ立ち、

「三十三」の石神に、  
米を注ぎて奔り行く。

②雲のわだつみ洞なして、

青野うるうる川湧けば、

あなや春日のおん帯と、  
もろびと立ちておろがみぬ。

▼題変更・異同詩句3詩語3表記1↓藍手入れ0箇所・詩句0詩語1(ルビ)表記0↓青インク手入れなし

9 車中

関連・素材 初期稿・前

初期稿・後

再編稿

定稿

↓三・(↓はらのむすめの青マント↓・題名メモ?) [写]? ↓四・未完 ↓二・↓五・↓車中

・生成の過程を新校本全集校異と異にする。下書稿一を受けて展開したのは用紙ウラの稿三で、その上部に稿四が試みられるも未完、そこで稿一余白にもどり、丸番号を用いた稿二が新たに構想される。これを踏まえて、稿三の下部余白に稿五が定稿清書前稿として成立した、とみる(『叙説』附章3節)。写は、稿三本文の下半部を貫くかたちで横線を引いてある。その写線からみると、「硫黄」の場合と逆な位置関係で、最終の稿五が下部にあるが、稿五は枠組みされており、これは「硫黄」に異なる状況ではあるが、(写稿)本文に下書稿三を想定し、提案する。もしも稿五に写が与えられたとするならば、定稿に直結するブルーブラックインク手入れは清書段階に近接するものとみられ、(写稿)には、次の鉛筆手入れ形を想定するべきだろう。

①地平は雪と藍の松  
氷を着るは七時雨

ばらのむすめはマントより  
 けいとのまりをとりいだす  
 ②稜堀山の巖の稜  
 一木を宙にかざれば  
 まなじりふかきはくらくは  
 しんぶんをこそひろぐなれ

車中

ぶくぶくすわるばらむすめ  
 冴え冴えひかる青マント

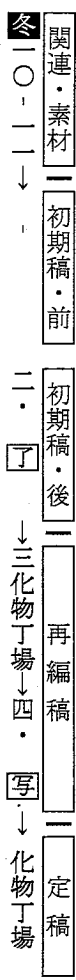
高洞山に雪うづみ  
 谷には影のたむむころ

狐の皮をくつろげて  
 しんぶんを見る村の医師  
 (余白に、ばらのむすめの青マント  
 題名メモ?)

①稜堀山の巖の稜、  
 一木を宙に旋るころ、  
 まなじ「き↓・」りふかき伯樂は、  
 しんぶんをこそひろげたれ。  
 ②地平は雪と藍の松、  
 氷を着るは七時雨、  
 ばらのむすめはくつろぎて、  
 けいとのまりをとりいでぬ。

▼題新設・改編↓藍手入れ1箇所・詩句0詩語0表記0↓青インク手入れなし

10 化物丁場



・下書稿四。鉛筆による開始、その手入れ形に、写。同じ鉛筆のその手入れは定稿に直結するものではある。写の横線は本文下部を刺して、第二連2行めまで及ぶ。

化物丁場

すなどりびとのかたちして  
つるはしふるふ山かげの  
化物丁場しみじみと  
水湧き出でて春寒き

① 峽のけむりのくらければ、  
山はに円く白きもの、  
おそらくそれぞ日ならんと、  
親方もさびしく仰ぎけり

▼題新設・異同詩句〇詩語〇表記1↓藍手入れ〇箇所・詩句〇詩語〇表記〇青インク手入れなし。  
なお、題は〈写稿〉直前稿を復活

11〔銅鑼と看板トロンボン〕

一 関連・素材

二 初期稿・前

三 初期稿・後

四 再編稿

五 定稿

一〇八三・余白メモ  
・下書稿一・二は同一紙上にブルーブラックインクで展開、稿一の中央に写、その横線はその本文中中央を貫いている。〈写稿〉に稿一最終形を想定し、提案する。稿一への枠囲みと大きな×印は、写の付与後、稿二の形成に入る前後のものと推定する。稿二は定稿清書段階に近接するものとみる。

### 秋祭

銅鑼と看板サクソホン  
上げては落す縫の幕  
業了へいこぶチャリネの子  
アーク燈液浴ぶるなり

得こそは入らぬ村人の、

① すなどりびとのかたちして、  
つるはしふるふ山かげの、  
化物丁場しみじみと、  
水湧き出でて春寒き。

② 峽のけむりのくらければ、  
山はに円く白きもの、  
おそらくそれぞ日ならんと、  
親方もさびしく仰ぎけり。

① 銅鑼と看板トロンボン、  
弧光燈の秋風に、  
藝を了りてチャリネの子、  
その影「黒く↓小く」やすらひぬ。

② 得も入らざりし村の児ら、

叔父らその子を肩にして  
乞ふわが糧を食うべよと  
競ひて栗を投げしむる

叔父また父の肩にして、  
乞ふわが栗喰ふべよと、  
泳ぐがごとく競ひ来る。

△ルビ新設

- ・追記 下書稿二は開始稿における書きながらの手入れを除けば、次のとおり、2段階のブルーブラックインク手入れを受けていると推定。

前段階(二重棒線・潰し)

銅鑼と看「板↓版」「サクソホン↓トロンボン」  
アークライトの風のなか  
藝を了りてチャリネの子  
「膝をいだきて↓その影(小↓黒く)やすら「へり↓ひぬ」

後段階(棒線・潰し・◎・矢印導線)

銅鑼と看版トロンボン  
藝を了りてチャリネの子  
アークライトの「風のなか↓秋風に」  
その影黒くやすら「ひぬ↓の↓ひぬ」

得こそは入らぬ村人の「児↓児」ら  
叔父また父の肩にして  
泳ぐがごとく近づきて  
競ひて栗を「捧ぐ↓贈るなり」

得「こそは↓も」入「らぬ↓らざりし」村人の児ら  
叔父また父の肩にして  
「泳ぐがごとく近づきて↓・」  
「競ひて栗を贈るなり↓・」  
・↓乞ふわが糧を食うべよと  
↓競ひて栗を投げしむる」

12 巨豚

関連・素材 二期稿・前期稿・前期稿・後期稿  
三〇三二・再編稿  
一・↓余白・写↓青インク手入れ↓巨豚  
二期稿

・下書稿。ブルーブラックインクで口語稿への重ね書きで開始、その後余白にブルーブラックインクであらためて起稿し、ブルーブラックインク↓青インクの手入れがある。その口語稿詩番号の傍らに写、その横線は紙面右肩より口語稿の右下本文を切り、左下余白の文語稿本文を突き刺して止まる。つまり下書稿全体に与えられている感じである。ただ、「↓青インク手入れ」は定稿にほぼ直結するもので、清書段階に近接しているとみて、(写稿)には、ブルーブラックインク手入れ形を想定し、提案する。

巨豚

巨豚ヨークシャ銅の日に  
金毛となりてかけ去れば  
棒をかざして髪ひかり  
追ふや里長のまなむすめ

日本里長森を出で

小手をかざして刻を見る  
鬚むしやむしやと物喰むや  
麻布も青くけぶるなり

日本の國のみつぎとり

里長を追ひて「森を出づ↓出でくれば

↓出できたり」

里長すなはち森に入り

つかさしたがひ森に入る

「↓(白き扇を↓こえりをひらきてはた  
はたと」

「↓(白き↓紙の)扇をひらめかす」

巨豚ヨークシャ「↓銅の日(に↓を)」

こまのごとくにかたむきて

めぐれば「めぐる↓降(るや↓しつ)」栗

「↓の」花「咲ける黒森を↓」

消ゆる里長のまなむすめ

①巨豚ヨークシャ銅の日に、

金毛となりてかけ去れば、  
棒をかざして髪ひかり、  
追ふや里長のまなむすめ。

②日本里長森を出で、

小手をかざして刻を見る、  
鬚むしやむしやと物喰むや、  
麻布も青くけぶるなり。

③日本の國のみつぎとり、

里長を追ひて出で來り、  
えりをひらきてはたはたと、  
紙の扇をひらめかす。

④巨豚ヨークシャ銅の日を、

こまのごとくにかたむきて、  
旋れば降つ栗の花、  
消ゆる里長のまなむすめ。

▼題新設・異同詩句3詩語2表記2↓藍手入れ0箇所・詩句0詩語0表記0↓青インク手入れなし。

13 「ひかりものすと」

関連・素材 → 初期稿・前 → 初期稿・後 → 再編稿 → 定稿

冬 一三・↓一 二・ [了] ↓三・ ↓四・ [写] ↓  
・下書稿四。鉛筆で開始し手入れの後、写。同じ鉛筆のその手入れは定稿に直結するものではある。写の横線は、手入れを含めた本文全体を斜めに切っている。〔写稿〕に最終形を想定し、提案する。

ひかりものすとうなぬごが  
ひそにすがりてゆびさせる  
そは高常の水車場の  
こなにまぶれしそのあるじ  
にはかにせきし身を折りて  
水こぼこぼとながれたる  
よるのくるみの木をはなれ  
肩つゝましくすぼめつゝ  
古りたる沼のごとくなる  
西の微光にあゆみ去るなり

ひかりものすとうなぬごが、  
ひそにすがりてゆびさせる、  
そは高甲の水車場の、  
こなにまぶれしそのあるじ、  
にはかに咳し身を折りて、  
水こぼこぼとながれたる、  
よるの胡桃の樹をはなれ、  
肩つゝましくすぼめ「た↓・」つゝ  
古りたる沼「のごとくなる、↓をさながらの、」  
西の微光にあゆみ去るなり。

▼無題稿・異同詩句0 詩語1 表記3 ↓ 藍手入れ1 箇所・詩句0 詩語1 表記0 ↓ 青インク手入れなし。

14 黄昏

関連・素材 → 初期稿・前 → 初期稿・後 → 再編稿 → 定稿

歌 197、197・198a  
・下書稿三。鉛筆で開始し手入れの後、写。ブルーブラックインク手入れは定稿に直結するもので、清書段階に近接するものとみて、〔写稿〕には鉛筆手入れ形を想定し、提案する。なお、「吉ぞ」はそのまま。

黄昏

黄昏



花さけるねむの林を

さうさうと身もかはたれつ

こゑほそく唱歌うたひて

屠殺場の 吉ぞさまよふ

いづくよりか鳥の尾はね

ひるがへりさと落ち来れば

雲の黄にいまは得たえず

オクターヴオしりぞきうたふ

①花さけるねむの林を、

さうさうと身もかはたれつ、

聲ほそく唱歌うたひて、

屠殺場の加吉さまよふ。

②いづくよりか鳥の尾はね、

ひるがへりさと落ちくれば、

黄なる雲いまはたえずと、

オクターヴオしりぞきうたふ。

▼題継承・異同詩句 0 詩語 4 表記 2 ↓ 藍手入れ 0 箇所・詩句 0 詩語 0 表記 0 ↓ 青インク手入れなし。